大和高田市埋蔵文化財調査報告 第９集

大和高田市埋蔵文化財発掘調査報告

土庫遺跡群

中和幹線道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１０

大和高田市教育委員会

大和高田市埋蔵文化財調査報告 第９集

大和高田市埋蔵文化財発掘調査報告

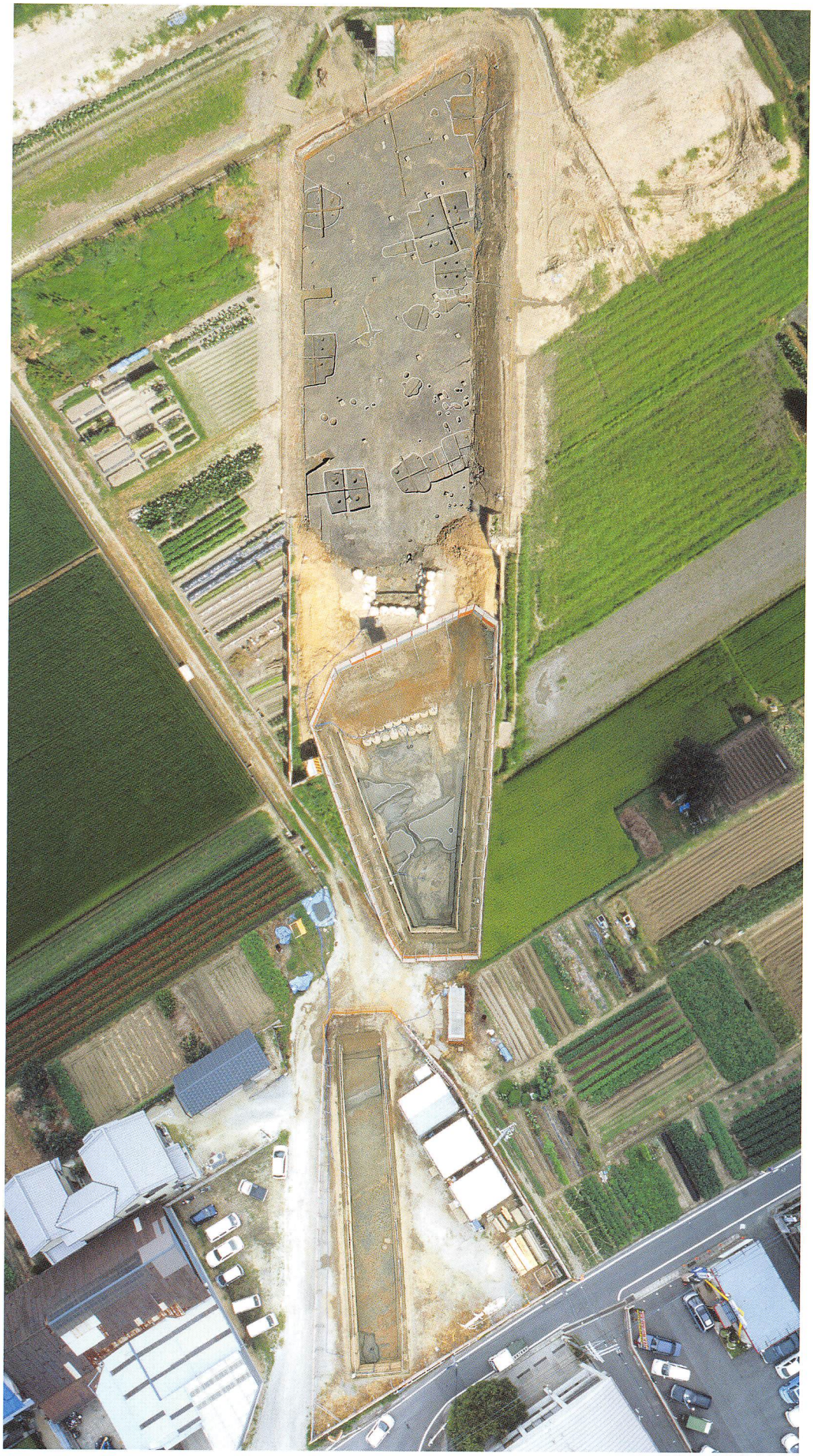
土庫遺跡群

中和幹線道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１０

大和高田市教育委員会

巻頭図版1

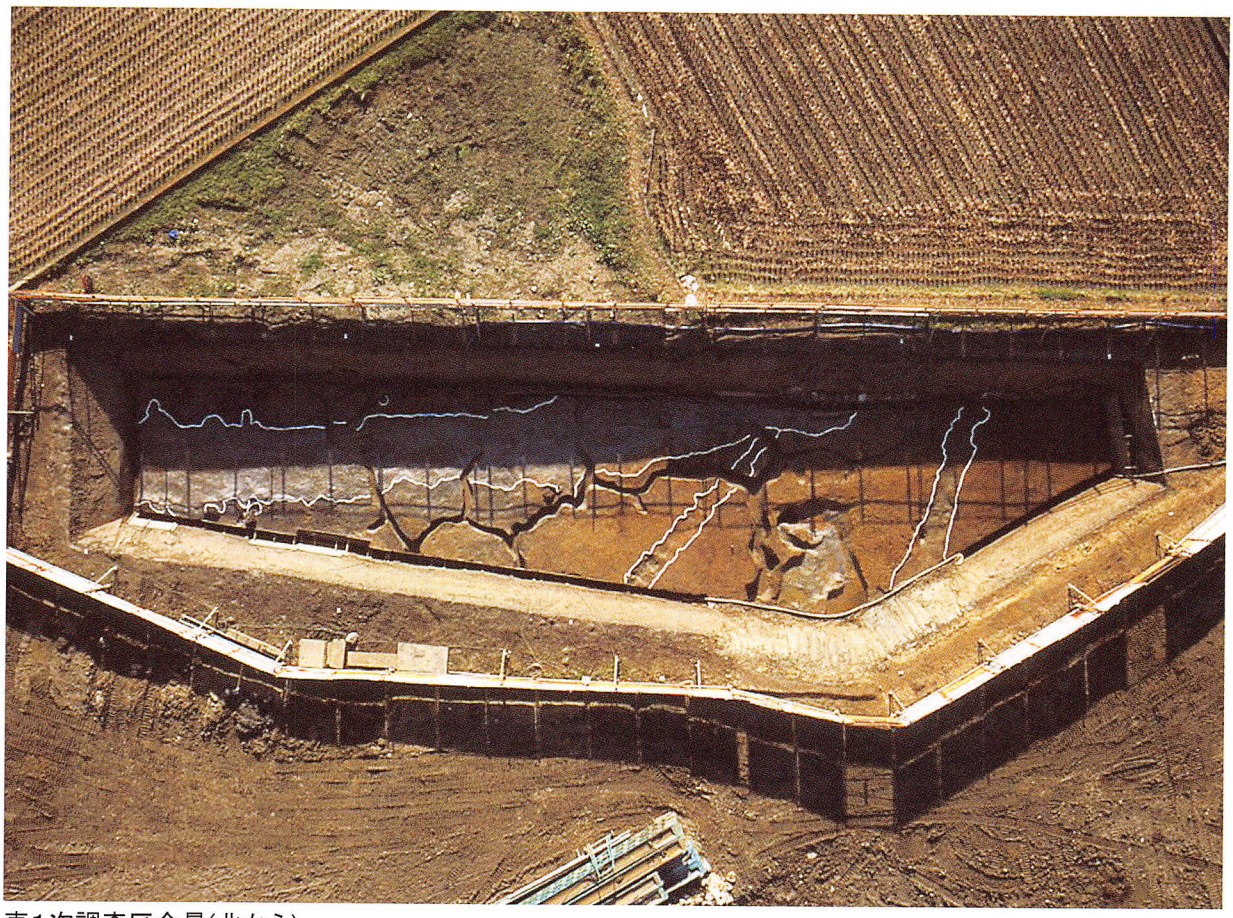


長田1・2・3次調査区全景（上から1次、3次、2次調査区合成）

長田1次調査区全景(西から)

長田1次調査区上層遺構完掘状況(西から)

丑寅1次調査区全景(北から)



東1次調査区全景(北から)

長田1次調査出土韓式土器

長田1次調査出土鳥形土器

序　文

大和高田市は、中南和地域の商工の街、交通の要と繁栄してまいりました。

最近は、遺跡や古墳の発掘調査の成果が目覚ましく、池田遺跡からは１万年前にも遡る石器が多数発見され、奈良県内でも早くから人々が生活を営んできた地域であることが判明してきました。

今回の中和幹線道路の建設に伴って発掘調査された土庫遺跡群からも、多くの貴重な成果が上がりました。土庫長田遺跡では、古墳時代の集落跡が発見され、出土した土器などから朝鮮半島からの強い影響を受けた集落であったことが判明しました。大和高田周辺には百済からの渡来人に関する伝説が残されていることはよく知られておりましたが、調査成果は１５００年前の大和高田が、国際的な交流の舞台であったことを本格的に裏付けるもので、誇らしく思う限りです。

本報告書が、大和高田市の考古学や古代史の研究に活用されることを願ってやみません。

平成２２年３月 29 日

大和高田市教育長
楠　征洋

例　　言

1．本書は、奈良県大和高田市大字土庫に所在する土庫遺跡群（土庫長田遺跡、土庫丑寅遺跡、土庫東遺跡）の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、中和幹線道路新設改良工事に伴うものである。
3．調査は大和高田市教育委員会が実施した。
4．各遺跡の調査日程は、下記のとおりである。

土庫丑寅遺跡	平成 18 年 6 月 21 日～平成 18 年 10 月 31 日
土庫東遺跡	平成 18 年 12 月 27 日～平成 19 年 3 月 31 日
	平成 21 年 7 月 1 日～平成 21 年 9 月 30 日
土庫長田遺跡	平成 18 年 12 月 27 日～平成 19 年 12 月 28 日

5．現地調査の体制は下記のとおりである。

（平成 18 年度）	大和高田市教育委員会	教育長	楠　征洋
		事務局長	赤井　勉
		次長	江南博仁
		生涯学習課長	松浦一弘
		文化財係長	清水新一郎
	（現地調査担当）	学芸員	前澤郁浩
		嘱託	松原智子
		臨時職員	吉田貴子
	大和高田市環境建設部	都市計画課長	堂前圭司
		課長補佐	筒井謙之
		工務係長	芹澤光章
		主任	吉井　護
（平成 19 年度）	大和高田市教育委員会	教育長	楠　征洋
		事務局長	江南博仁
		次長	吉村和則
		生涯学習課長	中殿　寛
		文化財係長	清水新一郎
	（現地調査担当）	学芸員	前澤郁浩
		嘱託	松原智子
		臨時職員	吉田貴子
	大和高田市環境建設部	都市計画課長	堂前圭司
		課長補佐	筒井謙之
		工務係長	芹澤光章
		主任	小川浩司
（平成 21 年度）	大和高田市教育委員会	教育長	楠　征洋
		事務局長	江南博仁
		次長	吉村和則
		生涯学習課長	中殿　寛
		課長補佐	清水新一郎

	文化財係長	倉本康人
（現地調査担当）	学芸員	前澤郁浩
	嘱託	米井友美
	臨時職員	吉田貴子
大和高田市環境建設部	都市計画課長	堂前圭司
	課長補佐	筒井謙之
	工務係長	芹澤光章
	主任	石本義人

調査協力者　吉村芳俱（奈良県文化財保護指導員、大和高田市文化財を考える会々長）

6．現地調査・遺物整理・報告書作成にあたっては、下記の方々の参加、ご指導・ご助言があった。記して感謝したい。

組織機関　安西工業㈱　香芝市二上山博物館　㈱アイシー　㈱アクセス　㈱アート
㈱地域文化財研究所　川村印刷所　韓式系土器研究会　天理大学考古学研究室
奈良県立橿原考古学研究所　大和高田市土庫　大和高田市土庫水利組合
大和高田市文化財を考える会　大和高田市文化財保護審議会
大和弥生文化の会　㈲ウィング　㈲ワーク　結コーポレーション（50音順）

個　人　青柳泰介、網干善教、石野博信、石松　直、池田保信、市来真澄、井原 稔、岩崎栄作、植野浩三、大坪州一朗、大西貴夫、小栗明彦、河内一浩、木下　亘、北井利幸、北中恭裕、木場幸弘、酒井清治、高野 学、田中清美、田中元浩、千賀　久、坪ノ内徹、中居和志、中野　咲、中村利光、西井久晃、萩原儀征、橋本輝彦、坂　靖、廣林達也、冨加見泰彦、福岡澄男、福永信雄、細山いづみ、前坂尚志、松田直子、山田隆文、渡辺和仁（50音順）

海外研究者　白　承玉（大韓民国　慶尚南道　咸安博物館）
金　鐘萬（大韓民国　国立扶餘博物館）
朴　天秀（大韓民国　慶北大学校）
鄭　修鈺（橿原考古学研究所）
呉　昇桓（奈良大学）
崔　栄柱（立命館大学）

7．出土遺物をはじめ調査記録一切は、大和高田市郷土資料室で保管している。
8．本書で用いた座標値は、原則として世界測地系である。
9．発掘調査に関わる基準点測量、航空写真測量は、㈲ワーク、安西工業㈱に委託した。
10．土庫長田１・２・３次調査、東２次調査で行った土壌化学分析は㈱古環境研究所に委託した。
11．本書に関わる整理作業は、遺物実測図・遺物図面トレース・遺物観察表の作成については安西工業㈱に委託し、㈱地域文化財研究所松田直子氏と松原、吉田、米井が補助した。遺構図面トレース・遺物図面レイアウト、図版レイアウトは米井が行った。
遺物写真撮影は㈱地域文化財研究所福永信雄氏による。
12．本書の執筆に関しては、第３章３節２と第３章第４節を松原、第３章第４節以外の出土遺物を米井、それ以外を前澤が執筆した。編集は前澤があたり、米井が補助した。

本文目次

序文
例言

第１章　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　位置と環境
第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第３章　土庫長田遺跡の調査
第１節　調査区の設定と記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第２節　調査日記抄
１．土庫長田遺跡１次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
２．土庫長田遺跡２次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
３．土庫長田遺跡３次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第３節　土庫長田遺跡１、３次調査成果
１．層序と調査方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
２．上層遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
３．下層遺構
（１）　竪穴式住居群と掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
（２）　大河道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
（３）　その他の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
１）１次調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
２）３次調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
４．出土遺物
（１）　長田遺跡１次調査出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
（２）　長田遺跡３次調査出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
５．小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

第４章　土庫長田遺跡２次調査成果
１．層序と調査方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
２．検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
３．出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
４．小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91

第５章　土庫丑寅遺跡の調査
第１節　調査区の設定と記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第２節　調査日記抄 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第３節　調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
１．層序と調査方法

２．検出遺構 ・・ 95
（１）　１期の遺構 ・・・ 95
（２）　２期の遺構 ・・・ 103
３．出土遺物 ・・・ 103
４．小結 ・・・ 106

第６章　土庫東遺跡の調査
第１節　調査区の設定と記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第２節　調査日記抄
１．土庫東遺跡１次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
２．土庫東遺跡２次調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
第３節　調査成果
１．調査方法 ・・ 109
２．層序と検出した遺構
（１）　土庫東遺跡１次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109
（２）　土庫東遺跡２次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109
３．出土遺物
（１）　土庫東遺跡１次調査出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
（２）　土庫東遺跡２次調査出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
４．小結 ・・ 121

第７章　まとめと考察
第１節　調査総まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第２節　渡来人定着の特色について二、三の問題
―土庫長田遺跡をめぐって『播磨国風土記』説話からの考察― ・・・・・・・・ 122

遺物観察表 ・・・ 125

付編　自然化学分析
土庫長田遺跡における自然化学分析（株式会社古環境研究所）・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
土庫東遺跡２次調査における自然化学分析（株式会社古環境研究所）・・・・・・・・・・・・ 197

表目次

第１表　小区画水田計量表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第２表　長田遺跡１次調査竪穴式住居・掘立柱建物法量表・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第３表　長田遺跡１次調査溝法量表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第４表　長田遺跡１次調査土坑法量表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第５表　長田遺跡１次調査小穴法量表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第６表　土庫東２次小穴法量表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117

挿図目次

土庫長田遺跡１・３次調査
第１図　調査地周辺地形図 ・・・・・・・・ 2
第２図　調査地周辺地図 ・・・・・・・・・ 4
第３図　三倉堂遺跡出土遺物実測図 ・・・ 5
第４図　調査区位置図 ・・・・・・・・・・ 6
第５図　長田１・３次調査区地区割図 ・・ 12
第６図　長田１次調査区断面・模式図 ・・ 13
第７図　長田３次北壁断面図１ ・・・・・ 12
第８図　長田３次北壁断面図２ ・・・・・ 14
第９図　長田１次上層遺構平面図 ・・・・ 16
第10図　小区画水田平面図 ・・・・・・・・ 17
第11図　SD－01平・断面図・・・・・・・・ 19
第12図　SD－02・03平・断面図 ・・・・ 20
第13図　SE－01・02平・断面・・・・・・・ 21
第14図　SK－01平・断面図・・・・・・・・ 21
第15図　SP－02・03平・断面図 ・・・・ 21
第16図　長田１次下層遺構平面図 ・・・ 23-24
第17図　SH－01平・断面図・・・・・・・・ 26
第18図　SH－02平・断面図・・・・・・・・ 27
第19図　SH－03平・断面図・・・・・・・・ 28
第20図　SH－04平・断面図・・・・・・・・ 29
第21図　SH－05・06・13平・断面図 ・・ 30
第22図　SH－07平・断面図・・・・・・・・ 31
第23図　SH－08平・断面図・・・・・・・・ 32
第24図　SH－09・10平・断面図 ・・・・ 33
第25図　SH－11平・断面図・・・・・・・・ 34
第26図　SB－01平・断面図・・・・・・・・ 35
第27図　長田１次下層遺構変遷図 ・・・・ 36
第28図　SH－05・06・13復元図・・・・・ 36
第29図　大河道平・断面図 ・・・・・・・・ 38
第30図　大河道斜面下層部平面図 ・・・・ 39
第31図　SD－02平・断面図・・・・・・・・ 40
第32図　SD－03平・断面図・・・・・・・・ 41
第33図　SD－05・06平・断面図 ・・・・ 41
第34図　SP－01平・断面図・・・・・・・・ 43
第35図　長田３次遺構平面図 ・・・・・・ 44
第36図　長田３次遺構平・断面図 ・・・・ 45
第37図　河道出土遺物実測図 ・・・・・・ 47
第38図　河道出土遺物実測図 ・・・・・・ 48
第39図　河道（下層）出土遺物実測図 ・・ 49
第40図　上層遺構出土遺物実測図 ・・・・ 49
第41図　SH－01・02出土遺物実測図 ・・ 50
第42図　SH－03出土遺物実測図 ・・・・ 51
第43図　SH－04～07出土遺物実測図 ・・ 52
第44図　SH－08出土遺物実測図 ・・・・ 53
第45図　SH－09～12出土遺物実測図 ・・ 54
第46図　大河道斜面１層出土遺物実測図 ・ 56
第47図　大河道斜面１層出土遺物実測図 ・ 57
第48図　大河道斜面２層出土遺物実測図 ・ 58
第49図　大河道斜面２層出土遺物実測図 ・ 59
第50図　大河道斜面２層出土遺物実測図 ・ 61
第51図　大河道斜面２層出土遺物実測図 ・ 62
第52図　大河道斜面３層出土遺物実測図 ・ 63
第53図　大河道斜面３層出土遺物実測図 ・ 64
第54図　大河道斜面４層出土遺物実測図 ・ 65
第55図　大河道斜面４層出土遺物実測図 ・ 66
第56図　大河道斜面４層出土遺物実測図 ・ 67
第57図　下層遺構出土遺物実測図 ・・・・ 67
第58図　包含層１・２層出土遺物実測図 ・ 69
第59図　包含層３層出土遺物実測図 ・・・ 70
第60図　包含層３層出土遺物実測図 ・・・ 71
第61図　包含層３層出土遺物実測図 ・・・ 72
第62図　包含層３層出土遺物実測図 ・・・ 73
第63図　包含層３層出土遺物実測図 ・・・ 74
第64図　包含層３層出土遺物実測図 ・・・ 75
第65図　SD－01出土遺物実測図 ・・・・ 77
第66図　SD－01出土遺物実測図 ・・・・ 78
第67図　その他遺構出土遺物実測図 ・・・ 79
第68図　包含層１・２層出土遺物実測図 ・ 80
第69図　包含層３・４層出土遺物実測図 ・ 81
土庫長田遺跡２次調査
第70図　長田２次調査区地区割図 ・・・・ 83
第71図　長田２次調査区断面図 ・・・・・ 84
第72図　長田２次遺構平面図 ・・・・・・ 85
第73図　畦畔１出土遺物実測図 ・・・・・ 89
第74図　包含層出土遺物実測図 ・・・・・ 90
土庫丑寅遺跡１次調査
第75図　丑寅１次調査区地区割図 ・・・・ 93
第76図　丑寅１次調査区断面図 ・・・・ 96、97
第77図　丑寅１次調査区平面図 ・・・・・ 98

第78図　溝等平・断面図　・・・・・・・・・99
第79図　土坑等平・断面図　・・・・・・・100
第80図　土坑等平・断面図　・・・・・・・101
第81図　SP－10平・断面図・・・・・・・102
第82図　遺構出土遺物実測図　・・・・・104
第83図　包含層出土遺物実測図　・・・・105
土庫東遺跡１・２次調査
第84図　調査区地区割図　・・・・・・・107
第85図　東１次調査区断面図　・・・・110、111
第86図　東２次調査区断面図　・・・・112、113
第87図　東１次調査区平面図　・・・・・114
第88図　東２次調査区平面図　・・・・・115
第89図　ピット（柱列）平・断面図　・・116
第90図　東１次調査出土遺物実測図　・・118
第91図　東２次以降出土遺物実測図　・・118
第92図　包含層出土遺物実測図　・・・・119
第93図　包含層出土遺物実測図　・・・・120

図版目次

巻頭カラー図版
巻頭図版１　長田遺跡調査区全景
巻頭図版２　長田遺跡１次調査区全景
巻頭図版３　長田遺跡・丑寅遺跡調全景
巻頭図版４　東遺跡調査全景・韓式系土器
巻頭図版５　長田遺跡１次調査出土鳥形土器図版
モノクロ図版
図版１　土庫遺跡調査地遠景
図版２　長田遺跡１次調査上層遺構
図版３　長田遺跡１次調査上層遺構
図版４　長田遺跡１次調査下層遺構全景
図版５　長田遺跡１次調査住居
図版６　長田遺跡１次調査住居
図版７　長田遺跡１次調査住居
図版８　長田遺跡１次調査住居
図版９　長田遺跡１次調査住居
図版10　長田遺跡１次調査住居
図版11　長田遺跡１次調査住居
図版12　長田遺跡１次調査住居・掘立柱建物
図版13　長田遺跡１次調査掘立柱建物
図版14　長田遺跡１次調査大河道
図版15　長田遺跡１次調査大河道
図版16　長田遺跡１次調査大河道
図版17　長田遺跡１次調査大河道
図版18　長田遺跡１次調査大河道
図版19　長田遺跡１次調査大河道
図版20　長田遺跡１次調査大河道
図版21　長田遺跡１次調査包含層３層
図版22　長田遺跡１次調査包含層３層
図版23　長田遺跡３次調査全景
図版24　長田遺跡３次調査遺構
図版25　長田遺跡２次調査全景
図版26　長田遺跡２次調査遺構
図版27　丑寅遺跡１次調査遺構
図版28　丑寅遺跡１次調査遺構
図版29　丑寅遺跡１次調査遺構
図版30　丑寅遺跡１次調査遺構
図版31　東遺跡１次調査全景・遺構
図版32　東遺跡１次調査遺構
図版33　東遺跡２次調査全景・遺構
図版34　東遺跡２次調査遺構
図版35　長田遺跡１次調査上層遺構出土遺物
図版36　長田遺跡１次調査上層遺構出土遺物
図版37　長田遺跡１次調査上層遺構・住居出土遺物
図版38　長田遺跡１次調査住居出土遺物
図版39　長田遺跡１次調査住居・大河道出土遺物
図版40　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版41　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版42　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版43　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版44　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版45　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版46　長田遺跡１次調査大河道出土遺物
図版47　長田遺跡１次調査大河道・その他遺構出土遺物
図版48　長田遺跡１次調査包含層出土遺物
図版49　長田遺跡１次調査包含層出土遺物
図版50　長田遺跡１次調査包含層出土遺物
図版51　長田遺跡３次調査出土遺物
図版52　長田遺跡２次調査出土遺物
図版53　長田遺跡・丑寅遺跡１次調査出土遺物
図版54　丑寅・東遺跡１・２次調査出土遺物

第1章　調査に到る経緯

中和幹線は、奈良県の中和地域を東西に連なる香芝市、広陵町、大和高田市、橿原市、桜井市を結ぶ、延長約20㎞の片側2車線の主要幹線道路として位置付けられている。沿道周辺の開発促進、国道24号・165号の渋滞緩和、交通事故減少等をめざすものとして1980年に計画決定され、以後完成区間ごとに供用が開始されてきた。

大和高田市における中和幹線は、市域の北端に近い大字池尻と大字土庫の北部域を、北西から南東に向けて横断する形で計画された。このうち大字池尻は発掘調査も終え1993年度までに竣工し供用されている。

本書で報告する大字土庫についての調査は、2005年度内に数回に分けて本線部分とアクセス道路部分双方の工事対象地域の試掘調査を実施した。

結果小字長田付近、同丑寅付近、同観音講付近の計3か所で主に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の存在を確認し、本調査を実施する方向で調整がとられていった。調査にあたって遺跡名は、大字名を小字名に冠する形で、土庫長田遺跡、土庫丑寅遺跡と命名したほか、複数の小字にまたがる観音講付近の遺跡については、土庫地区の東端に位置することから土庫東遺跡とした。そして本報告では、これら3遺跡の総称として土庫遺跡群として扱うことにした。

第2章　位置と環境

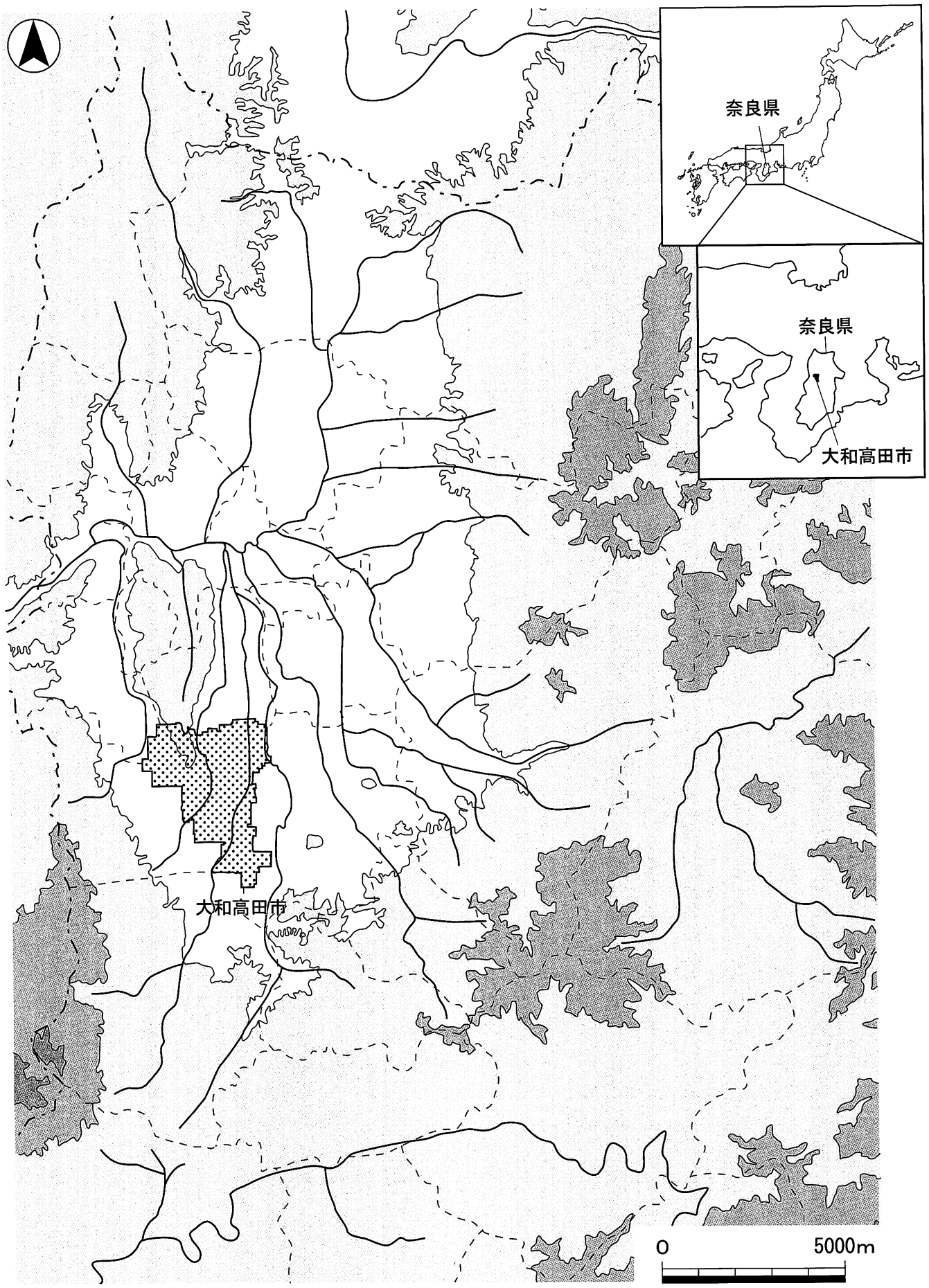
第1節　地理的環境

大和高田市の市域は、奈良盆地の南西に位置し、北部築山周辺の標高70ｍほどの洪積台地・馬見丘陵の南端部がかかっている部分を除いては、すべて起伏の少ない沖積地で占められる。これは市域を南西から北東方向に向かって流れる、大和川支流の高田川、葛城川などの河川の作用によって形成されてきたもので、自然堤防や微高地を氾濫原の随所に見ることができる。これまで市内各地で行ってきた発掘調査によって、とりわけ中世から近世にかけて、沖積作用は相当進んだと見られ、市域西部には葛城山系に端を発する緩傾斜の扇状地が発達している。

市域は、約16.73平方キロメートルの面積で、北を北葛城郡広陵町、西を香芝市、南を葛城市、御所市、東を橿原市に隣接する。市は人口約7万人を擁し、中心部である旧市街地は、中世末期に創建された真宗寺院・専立寺周辺や、大阪と伊勢地方を結んだ横大路沿いに近世・近代にかけて発達してきたものである。旧市街地の周囲に市役所はじめ、奈良地方裁判所葛城支部、葛城税務所、奈良県総合庁舎などの行政機関が肩を並べて設置されており、中和地域のなかでも中核的な機能を備えている。近年市は昼間人口と夜間人口の差が大きく、大阪方面へのベッドタウンとしての性格がより強くなってきている。市街地人口が密度の高い中心部とは違って周囲には開発調整区域になっていることからも条里制の方格地割をよく残した田畑が広がっており、その周辺には土庫、藤森、松塚、有井、礒野といった古代末期から中世にその起源を持つ環濠集落が点在している。

第2節　歴史的環境

大和高田市内の遺跡で確認された最も古い時代のものは、市北西部、馬見丘陵南端部の西側斜面に存在する池田遺跡や岡崎遺跡である。これらの遺跡は、旧石器時代後半にまで遡るもので、古墳時代や弥生時代の下層から、国府型ナイフ形石器とその製作関係の遺物が数多く出土したことで注目を浴びた。



第１図　調査地周辺地形図

縄紋時代の遺跡は、同じく池田遺跡で草創期から晩期に到る各時期の土器や石器が二次的な堆積ながら数多く発見されたほか、市中心部の礒野北遺跡で草創期の有舌尖頭器が発見され、また市の南部の根成柿遺跡では後期の河道や遺物包含層が確認され、晩期の土器棺墓群が西坊城遺跡で検出されている。

弥生時代に入ると、弥生時代の遺構や遺物は、市内の多くの遺跡で発見されている。前期の遺構や遺物は、北部の藤森、池尻、池尻南、中心部の三倉堂といった遺跡で確認され、中期では池尻で中期後半の遺構が見つかっているほか、後期になると、岡崎遺跡で土庫丑寅遺跡と同じく後期後半の粘土採掘坑群が見つかっている。いわゆる拠点集落遺跡の存在までは示唆できないが、各時期の集落跡が随所に存在したことは確かで、今後の調査に期待が寄せられる。

大和高田市の古墳は、馬見丘陵南端部の築山周辺に集中して築造されている。市内最大の前方後円墳・築山古墳は前期末～中期初頭の築造とみられ、墳丘だけで全長 210 mを測り、周濠まで含めると 240 mにも及ぶ。周囲には直径 96 mを誇るコンピラ山古墳、直径 50 mのかん山古墳、同じく 50 m程の茶臼山古墳など、中期前半の大型円墳が集中する特質を見せている。

これら大型古墳群を仰ぎ見る丘陵の裾では、中小の古墳が連綿と築造されたことが池田遺跡の調査で判明している。この遺跡では前期～後期に到る十数基にのぼる埋没古墳が発見された。小規模ながら中期の古墳周濠から見つかった大型の鶏形埴輪頭部、最古クラスの盾持人埴輪、冠を被りみずらを結った盛装した男子埴輪など、特徴ある形象埴輪が出土し、成果発表の都度注目を浴びた。遺跡の周辺には全長 80m 程の前方後円墳・狐井塚古墳や比較的小規模な古墳が点在するが、これらはすべて池田遺跡の調査で検出された古墳群の延長にあり、ある一定の範囲に企画性を持って中小の古墳が築造されたことを指摘できよう。

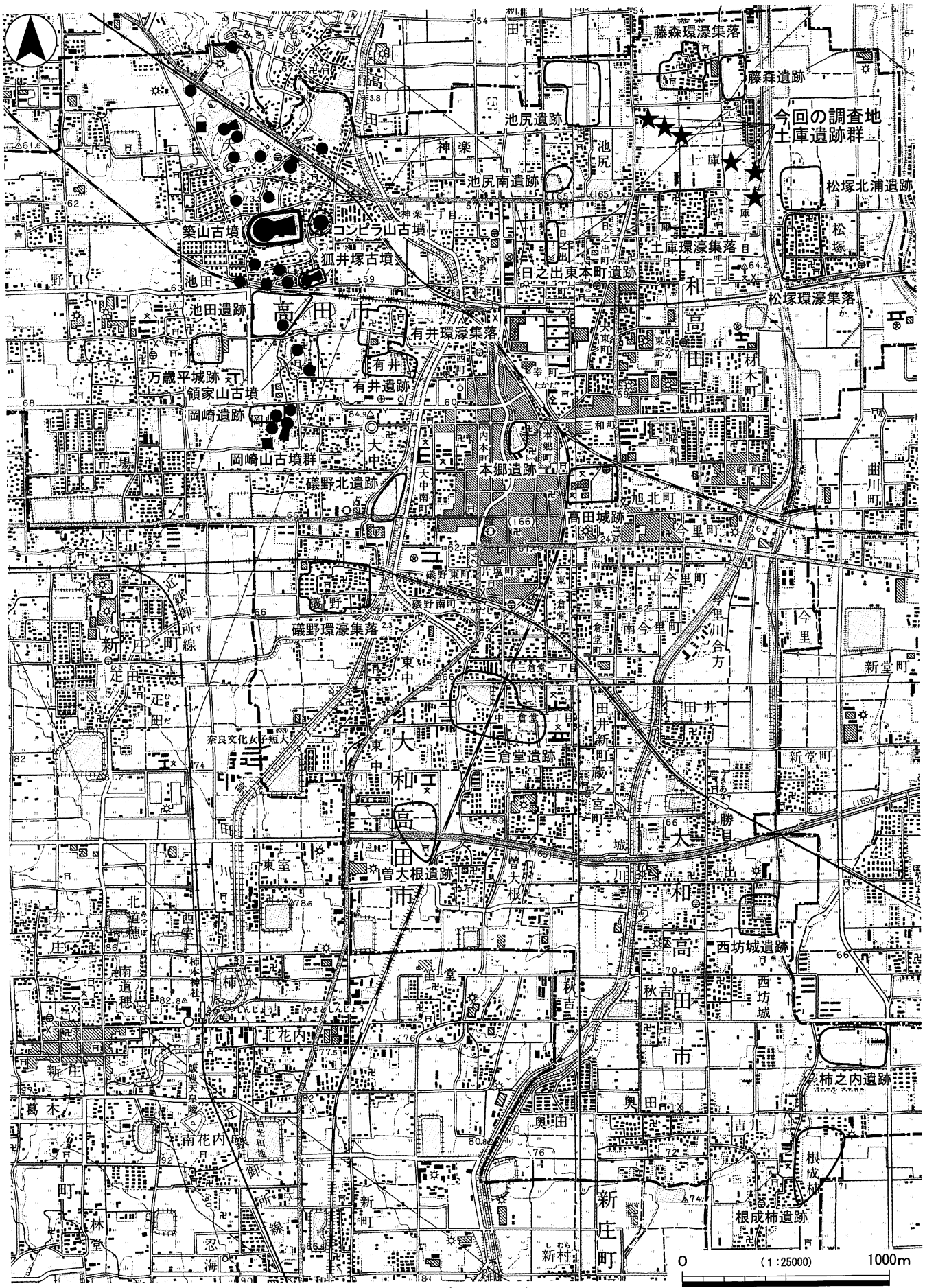
沖積地内の微高地に存在する三倉堂遺跡は、昭和初期、遺跡内にある２つのため池の底から、６世紀の合計６基にのぼる木棺が、多くの副葬品や円筒埴輪などと発見されたことでよく知られている。木棺はすべてコウヤマキ製で、６基のうち５基は組合せ式木棺、１基は割竹式木棺である。組合せ式木棺には、蟻桟と呼ばれる特殊な工法で底板を固定するもの、頭側と脚側の両木口に副葬品を納めるための小部屋を設けるものなど、古墳時代の木棺の形態を理解するうえで貴重なものも見受けられる。

これら池田や三倉堂で見出された埋没古墳群は、一定地域を治めた豪族の墓域である可能性が強いと思われる。

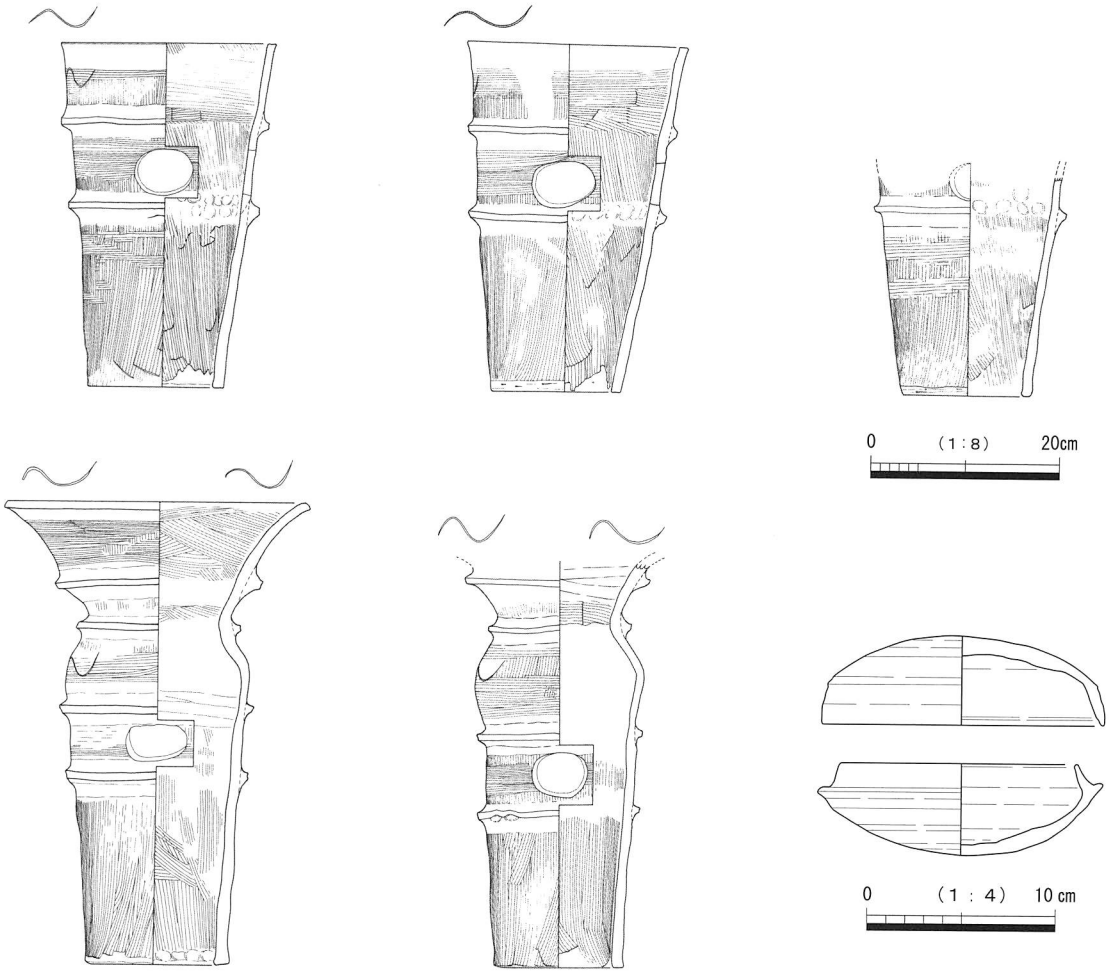
古墳時代の集落は、これまでに礒野北遺跡で前期のものが見つかっている。数棟の掘立柱建物のほか、建替えられていきながら最終的に滑石製臼玉の工房になった一棟の竪穴式住居を取り囲むように大溝が掘られた特殊な空間、導水施設の一部が検出され、話題を呼んだ。同じ中和幹線工事の事前に調査され、土庫長田遺跡に近接する池尻遺跡では、弥生終末～古墳時代前期にかけての方形周溝墓や河道などが検出され、夥しい土器が周溝や河道から出土し、方形周溝墓をめぐる祭祀跡の可能性が指摘されている。

市内に点在する環濠集落のうち、有井や藤森は調査の経験を有している。有井環濠集落は土庫と並ぶ二重環濠の集落として著名である。過去５次にわたる外濠部分の擁壁化工事に伴う調査や濠近接地の調査で、12 世紀後半までには環濠が造成されていたことがわかった。また藤森も、濠の擁壁化工事に伴う事前調査で、13 世紀には濠が完成していたことが判明している。

土庫遺跡群として扱う３遺跡は、土庫環濠集落の北の沖積地に点在している。この付近においては、1996 年の遺跡分布地図作成までにいくつかの遺物散布地の線引きはなされていたが、いずれの散布地も調査の経験はなく実態は不明のままであった。第１章でも述べたとおり、いずれの遺跡も中和幹線の事前の試掘で実態が判明したものばかりであって、土庫丑寅遺跡や土庫東遺跡のように遺物散布


藤森環濠集落
藤森遺跡
今回の調査地
土庫遺跡群
池尻遺跡
池尻南遺跡
松塚北浦遺跡
築山古墳
コンピラ山古墳
狐井塚古墳
土庫環濠集落
日之出東本町遺跡
松塚環濠集落
池田遺跡
有井環濠集落
有井遺跡
万歳平城跡
領家山古墳
岡崎遺跡
岡崎山古墳群
磯野北遺跡
本郷遺跡
高田城跡
磯野環濠集落
三倉堂遺跡
曽大根遺跡
西坊城遺跡
柿之内遺跡
根成柿遺跡
高田市
大和高田市
新庄町
0
(1:25000)
1000m

第2図　調査地周辺地図



第３図　三倉堂遺跡出土埴輪及び
伝三倉堂遺跡出土須恵器

すら確認できていなかったものと、土庫長田遺跡のように表面上わずかな土器片など遺物の散布は確認できてはいたものの、今回の調査成果からその範囲について再検討を求められるものに大別されることになった。これは沖積作用による土砂がいかに厚く大量に堆積し、微地形を大きく改変させてしまっているかを物語るものであると言えよう。遺跡群の南側には土庫環濠集落が存在し、土庫長田遺跡の北側には藤森環濠集落が存在しているが、これらの集落は沖積地の中でも自然堤防や比較的標高が高く中世には沖積作用も落ち着き、洪水の影響を受けにくくなっていた微高地上に造成されている可能性が考えられる。遺跡群の東を流れる葛城川の東には、調査の経験はないがすでに中世には存在していたとみられる松塚環濠集落が存在する。この地域の中和幹線は環濠集落の北辺を東西に横断する計画がたてられ、こちらは橿原考古学研究所による調査がなされたが、古墳（松塚１号墳）や弥生後期の井戸などが検出され、弥生の集落遺跡や古墳群が松塚環濠集落を造成させた微高地上に複合して存在していることを示唆するものであろう。古絵図によれば松塚という地名起源を彷彿とさせるような、環濠集落の中に松の木を生やす王塚と呼称する古墳があったことが描かれており、調査での古墳の検出はさらに複数の古墳が群をなして存在していたという解釈もできよう。今この古墳群と土庫長田遺跡で検出された集落跡とを直ちに結びつけるものはないが、今後の調査の進展で古墳群の実態が明らかになっていくことを期待したい。

第３章　土庫長田遺跡の調査

第１節　調査区の設定と記録

土庫長田遺跡の調査は、排土置場の容量、里道・農道の回避等、様々な条件を考慮して都合３区画に設定し、調査に取り掛かったものの順に第１次～３次調査区に呼称することにした。

最も面積の広い第１次調査区からは、上層で古代の小区画水田、下層で古墳時代の集落跡、第２次調査区では、条里の方向にのせた畦畔を伴う９世紀～11世紀の水田、第３次調査区では１次調査区下層で集落跡に伴って検出された大きな河道の延長部分がそれぞれ検出された。

第２節　調査日記抄

１．土庫長田遺跡１次調査

1月22日（月）晴

本日より発掘調査の準備工程に入る。道路予定地を明示した杭を基準にフェンスを張り巡らす作業を進め、30日までに完了。25日にプレハブを搬入、電気工事は2月1日に行うことになる。

1月31日（水）晴

本日より0.25重機掘削に取り掛かる。午前中はベルトコンベアの搬入、組み立て、発電機の接続作業となったため、本格的な作業は午後からとなった。現代耕土や床土を取り除き、黄褐色の中世の包含層を検出していく。

2月2日（金）晴

引き続き0.25重機掘削で現代耕土や床土を取り除く作業を継続していく。試掘で掘削したグリッドの再掘削も同時に行い、壁面精査し土層の確認も進めていく。

2月7日（水）晴

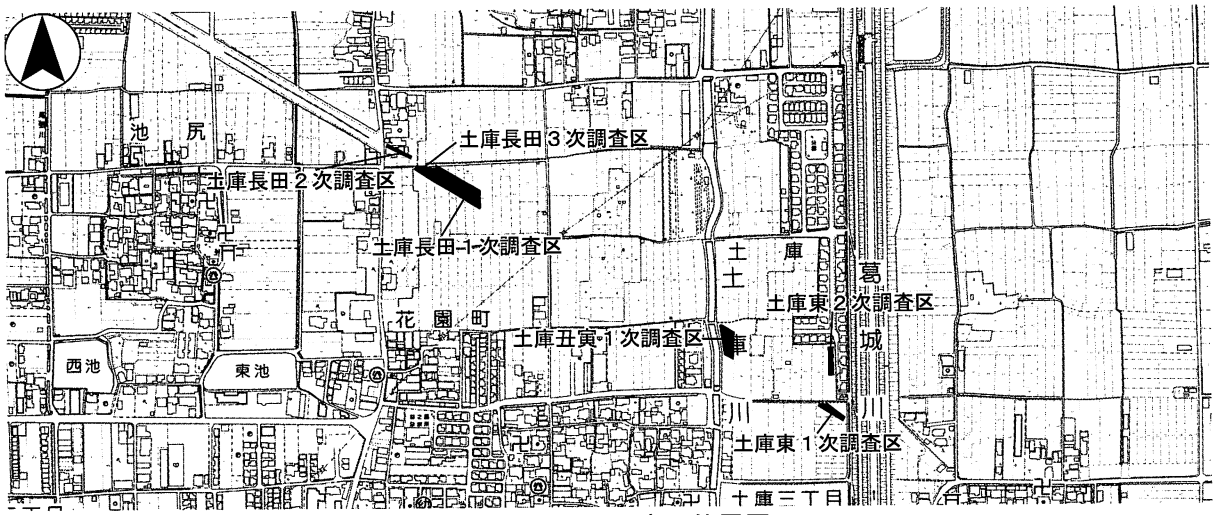
本日も現代耕土や床土を掘削する作業、試掘で掘削したグリッドの再掘削作業を0.25重機掘削で継続していく。これまで検出してきた中世の遺物包含層の掘削していく目安として10ｍピッチの地区割りを行った。

2月8日（木）晴

調査区中央部を除いて現代耕土や床土の取り除き作業を終える。引き続き検出してきた中世の遺物包含層は包含層1層として掘削していくことにする。包含する遺物は、副次的に堆積した様子で、層内や下層に遺構が伴う様子もないようなので、現代耕土や床土同じく堆積した様子で、層内や下層に遺構が伴う様子もないようなので、0.25重機による慎重な掘削を進めていくことにした。なお作業は昨日設した地区を基準にして掘削することにした。

2月13日（月）晴

包含層1層の0.25重機掘削を継続していく。遺物は概ね古代から中世の土師器である。掘削完了した個所から矢板を打ち込む作業を進めて行く。



第４図　調査区位置図

2月15日（木）晴

0.25重機掘削による包含層1層の掘削を進める。この作業は、本日までに15%が終了する。

2月22日（木）晴

引き続き0.25重機掘削で包含層1層の掘削を進める。中世の甕や瓦質土器に加え、須恵器がよく出土する。

3月1日（木）晴

0.25重機掘削で包含層1層の掘削を進める。

3月6日（火）晴

前日まで0.25重機掘削で包含層1層の掘削を進めてきたが、作業の効率化をはかるため、重機を0.45に交換。0.25の2倍のペースで進めていくことに。

3月7日（水）晴

本日をもって包含層1層の掘削は終了した。引き続き下層の包含層2層の掘削に重機掘削に取り掛かり、並行して矢板の打ち込み作業も進めていく。

3月12日（月）晴

調査区北西端周辺での包含層2層を進めてきたが、その下層に堆積する砂層の掘削を0.45重機掘削で進めていく。堰に使われていたような部材が数点出土したことなどから、人為的な手の加わった埋没河川である可能性が強まった。南西から北東方向に流れているようである。以降、大河道と呼ぶようにする。

3月20日（火）晴

0.45重機掘削を利用した大河道を覆う砂層の掘削を進めていく。大河道の右岸の包含層2層を取り除き、大河道からあふれて堆積した砂の取り除きを行ったところ、不規則な方向を持つ蒲鉾状の畦のようなものが確認され、大河道の右岸一帯に小区画の水田が埋没していることを確認した。

3月26日（月）晴

週末に重機を0.7に変更して掘削を進行させていく。調査区が南東へと進むにつれ包含層2層の堆積が希薄になっていき、中世の羽釜を含むなど大河道とは違う作用によって堆積したとみられる砂層が認められるようになってきた。この砂層の下層に水田は存在せず、その数層のシルトの下層に、黒青灰色を呈した土師器を包含する層の堆積が認められており、包含層3層として扱うことにした。包含層3層は、小区画水田の下へ潜り込んでいくようである。

3月30日（金）晴

大河道の埋砂層の掘削を0.7重機で行う。比較的上層からは古墳時代後期以降の須恵器などが出土するが、下層からは庄内新～布留古段階ごろ思われる土器が出土する。上層の砂層が大河道の肩から飛び出して小区画水田を覆う様子である。遺物量は多く、本日だけでコンテナパッド2箱に及んだ。

4月5日（木）晴

朝からベルトコンベアの組み立て作業に取り掛かり、夕刻までに完成する。午前中から測量会社が入り、5mメッシュ杭を打ち終える。

4月6日（金）晴

本日より本格的に小区画水田の存在する上層遺構面の検出を目指した人力掘削、精査作業を始める。下層遺構と区別するため、遺構名にはすべて上層を冠して呼称することにする。

4月10日（火）晴

小区画水田と灌漑用の水路として供伴していた段階の大河道の検出を進めた。比較的水田の残りのよい畔の区画内に入っていくと、水田土壌の上にマンガン、鉄分を非常に多く含んだ土壌が覆っていることを確認でき、これを取り除くと畔がよりはっきりと検出できた。

4月17日（火）曇のち晴

終日航空測量のための清掃作業を実施する。

4月18日（水）曇のち雨

天気の崩れが早くなってきたため、9:30AMには航空測量を開始し、11:00AMには無事測量を終えた。後、写真撮影台からの撮影を実施する。

4月19日（木）晴

本日より調査区の南東部分から、包含層3層の上層部分の人力掘削を始めていく。場所によっては、包含層3層が単純1層にしか堆積していない箇所もあった。遺物は破片が多く当所まで流れ込んで埋没した印象を受ける。有孔円盤や比較的古い須恵器の出土が認められた。3層の上下層で遺物に時期差はあまりなさそうである。

4月26日（木）晴

調査区南東部分の一定範囲の包含層3層の掘削が完了したところで、遺構面の精査を進めていった。その結果数多くの竪穴式住居跡が存在することがわかった。建て替えによって切りあった状態ではあるが、本日の段階で少なくとも5棟はあるものと思われる。また調査区南東寄りの包含層3層の上下層の間から薄い炭の広がりが数か所で認められ、そのうちの1か所から滑石製の勾玉1点が出土した。

5月2日（水）晴

包含層3層の掘削を継続させる一方、竪穴式住居跡群精査を行うが、還元化した覆土であるため切りあいの壁ラインを確認するまでには及ばず、一斉に掘削するしかないと判断した。午後、吉村芳倶氏来訪。住居跡群の視察を行う。

5月8日（火）晴

本日より数日間にわたって大河道の肩から中心部に向かって傾斜する様に堆積する無遺物に近いシルト層を人件費の節約のため、ミニユンボで掘削、キャリーで排土することになる。

5月15日（火）晴

ミニユンボで掘削してきた大河道の上層の堆積する無遺物に近いシルト層の掘削を終了する。

5月18日（金）晴

キャリー排土の通路のため掘り残していた、調査区中央部の包含層3層の掘削を進めていく。この範囲のおいても3層の上層と下層の間に炭層が薄く堆積する部分が数か所認められた。掘削後精査をするが、この範囲から竪穴式住居の新規検出はなかった。桜井市教育委員会橋本輝彦氏、桜井市文化財協会中村利光氏来訪。

5月24日（木）晴

精査を継続させてきた結果、竪穴式住居は総数12棟に及んだ。本日をもって調査区内、微高地部分の精査はすべて完了したことになる。

5月28日（月）晴

本日より大河道の調査に集中して取り掛かることになる。特に本日は、残されていたSD-01の下層部分からの掘削調査に取り掛かっていく。夕刻までに同層の掘削はほぼ完了し、昨日までに検出した微高地上遺構の略図作成も進めていった。

5月29日（火）晴

本日より大河道の斜面を覆っているシルト層の掘削を始める。この層は、すでに掘削したトレンチから、平面的に見て新旧2段階にわたって堆積していることが確認されており、それぞれの段階に堆積した覆土は大きく上下2層に分けて解釈することにした。これらを都合斜面1層～4層と呼ぶことにし層ごとに調査をすることを今後の方針とした。本日は新しい段階に堆積した覆土の上層、斜面1層の掘削し、その下層の斜面2層の掘削へと作業を進行させた。

5月31日（木）晴

斜面2層の掘削を継続させていく一方で、斜面3層の掘削にも取り掛かっていく。この斜面3層は明確にここまでと言う線引きは難しく、堆積上面から最深25㎝ほどまでを掘削作業上その層の堆積下限とした。2層からの遺物は少ないが、杵や砧らしい木製品2点が出土した。

6月4日（月）晴

本日は午前中にも斜面3層扱いの土層の掘削を終え、大河道の裾や底部の検出を目指して斜面4層の掘削に取り組んでいった。この層も3層同様遺物量は少ないが、時折小型丸底壺などが完形で転がり込むように出土した。

6月8日（木）曇一時雷雨

斜面4層の掘削を進めた結果、昨日までに大河道斜面に多くの土器を乗せる平坦地が現れた。本日はさらに4層の取り除き作業を進め、平坦地と土器群の検出を進めていった。また、微高地上の遺構掘削も進行させていった。

6月13日（水）晴

本日をもって大河道平坦地の土器の検出作業を終了し、検出状況の写真撮影も終了させた。この平坦地からさらに大河道は下がっていくが、これ以上の掘削は矢板の耐荷容量を超え困難と判断。平坦地検出を持って大河道の調査は終えることになった。微高地上の遺構では、竪穴式住居SH-01～03の掘削やピットなどの遺構の半裁作業も進めていく。

6月20日（水）晴

大河道道平坦地の土器群の業者による記録作成作業に取り組む。午前中、鳥瞰、垂直写真の撮影の後、作図用の写真撮影に取り掛かり、午後には土器群取上げの基本となる写真のプリントアウトに及んだ。後、レベル落としを行い、夕刻までには平坦地土器群の取上げ作業を終了させた。

6月25日（月）晴

昨日の雨で調査区大壁が3か所で崩落。大河道も滞水した状態になっていた。本日の予定を変更し、作業員総出で崩落した土砂の取り除き作業、排水作業に取り組むこととなった。特に大河道部分は、矢板で囲っているものの、崩落の危険があると判断。航空測量を待たずに、明日から真土で埋め戻すことにした。

6月28日（木）晴

大河道の真土による埋め戻し完了する。なお調査区中央部付近の平坦地の一部は埋め戻さないようにし、航空測量をできるようにした。また矢板の範囲外の大壁は、ミニユンボで傾斜角度を緩くして、斜面の再構築を行った。一方でSH－08など竪穴式住居跡の覆土の掘削作業も進めていった。

7月3日（火）曇時々雨

梅雨空が続く中、調査を強行する。週末までに完成したとみた調査区南側の大壁が再度崩壊したため、ミニユンボでの養生工事を進めていく。また大壁崩壊により水没した竪穴式住居群SH－07、12、SH－04～06の再検出、遺構面の排水溝の設置などに追われた。

7月6日（金）曇のち雨

本日をもってミニユンボを使っての調査区南側大壁の法面の造成が完成、養生作業は無事に終了した。遺構掘削については、前日までに立ち割りを入れた竪穴式住居SH－07～10す

べての覆土掘削に取り掛かった。他、ピットの半裁作業も進めていった。

7月9日（月）曇

9:30より市監査委員、幹部職員による業務監査。資料を配布し、調査中の現場と調査の合間や就業後に復元、整理を進めてきた遺物の一部を倉庫に並べ見学してもらう。本日も住居跡SH－07～10の掘削作業を進めていく。各住居とも床面まで辿りついたところで精査し遺構を探すが、思うように検出できず手を焼く。

7月12日（木）曇一時雨

あいにくの天気であるが本日も竪穴式住居跡をはじめとする遺構掘削作業を進行させていった。午後、市文化財保護審議会開催。成果の概略を説明する。

7月14日（土）雨

台風接近し、午後から風雨ともに強まる。調査区南壁上に設けられていた側溝がたちまち溢れ出し、調査区南側大壁は次々と崩壊、調査区は水没をはじめた。9:00PM頃停電したため、発電機を稼働させ、排水を再開させて10:00PM過ぎ引き揚げる。

7月15日（日）曇

調査区微高地はGLから半分位の深度まで滞水した状況。作業員急遽召集し、電気復旧工事をしたうえで終日排水作業実施。

7月17日（火）曇

台風に刺激された梅雨前線の活動活発化し、17日に日付が変わるころに雨脚強まる。ほどなく県内に大雨洪水警報発令。3:00AMに市に災害対策本部設置。6:00AM頃雨は収まるが、市内で床上浸水60戸、床下浸水300戸余りの被害が出る。調査区は集水枡のようになり、2500トンもの水で完全に水没。調査区の肩はほとんど水中に向かって崩落し、安全フェンスもすべて倒れこむ。動力ポンプ2台、100Vポンプ5台を導入し、終日排水作業。

7月20日（金）曇

遺構面や遺構、側溝などに堆積していたヘドロの除去作業をほぼ昨日までに終え、SH－01～03、09、10など竪穴式住居跡の掘削調査を再開する。ミニユンボを利用した崩壊した調査区大壁の養生作業も並行して行う。崩壊を免れた住居跡のベルトの断面図の作成を午後7:00頃まで実施する。

7月22日（日）曇時々晴

午前、現場事務所で韓式系土器を中心にした遺物検討会開催。冨加見泰彦、田中元浩（和歌山県埋蔵文化財センター）、中居和志（立命館大学）、市来真澄（大阪府文化財調査研究センター）、崔　栄柱（韓国）の各氏来訪。午後大阪・四天王寺現場見学。

7月23日（月）晴

本日より掘削できていなかった遺構の掘削作業を進め作図も進め、航空測量に向けての本格的な清掃作業に取り組む。

7月27日（金）晴

予定通り航空測量を実施する。作業は3:30PMまでに終了し、後高所撮影台から大型カメラを利用した撮影、各竪穴式住居跡の撮影も無事に終了した。

7月28日（土）晴

終日、補足調査、測量、および撤収作業を進めていく。唯一崩壊を免れた調査区東南、北側の大壁の撮影、土層断面図の作成を実施する。また残されていたSH－05、06のベルトの取り外しやベルト下から現れたピットの記録なども行う。本日をもって土庫長田遺跡1次調査、すべての作業を終了することができた。石野博信（香芝市二上山博物館）、萩原儀征（元桜井市教委）両氏来訪。

7月30日（月）晴

本日より10tダンプによる真土搬入、ユンボによる土砂ならし稼働で、埋め戻し作業に取り掛かっていく。作業は8月8日（水）までの期間を要した。

2．土庫長田遺跡2次調査

8月20日（月）晴

本日から土庫長田遺跡2、3次調査区の準備工程に入る。本日は調査区の設定をし、安全柵の設置作業を行う。矢板をはめるための鋼鉄を打つ予定位置には、ミニユンボで幅深さ共50㎝溝状の竪穴を掘削し明日からの打ち込みに備えた。

8月28日（火）晴

2次調査区設定地内の矢板をはめる鋼鉄上端までの盛り土を重機で除去し、調査前の写真撮影を行う。後北西側から重機掘削を開始するが、旧耕土を取り除いたところで砂と水が吹き出し、矢板をはめていきながら砂の掘削を進めていくかたちとなる。また重機掘削で遺物を取り上げる単位を、調査区西北端から10ｍ単位で区切って設定していくことにした。

8月30日（木）晴

前日の調査で砂層をGL－2ｍほどまで取り除いたところ暗青灰色のシルト層が見えたため、この層の上面を検出しながら重機掘削を進めてきたが、本日になって層上面に南北条里方向に向けた幅30㎝ほどの低平な畦畔が存在することを確認。さらに層上面に植物の根跡や人や牛の足跡も残されていることも確認できたためこの層が水田であることを断定した。

9月3日（月）晴

重機による砂層掘削、遺物取り上げ作業を継続する。午後、

高田中学校生徒による遺跡発掘体験を実施。砂層から遺物を取り上げる作業を体験する。引率は、玉井章進教頭、市人権啓発課　磯川係長、父兄2名、教育実習生1名。

9月4日（火）晴

本日も重機による砂層掘削、遺物取り上げ、水田の検出作業を継続させる。砂層遺物は5世紀代の須恵器から中世15世紀代の瓦質土器まで幅広い時期に及んでいる。数点の桃核も出土した。砂層は1次調査の大河道を埋め、SD－01として扱っていた砂層とは別のものであろう。河内一浩氏（羽曳野市教委）来訪。また12月1日に、韓式系土器研究会を橿原考古学研究所で開催し、土庫長田遺跡の遺物を検討することになる。

9月7日（金）晴

前日検出した調査区西南端付近で検出した大きな規模の畦畔で、畦畔は合計3本になった。この大きな畦畔から東側では、砂層の下に1次調査で掘削したいわゆる包含層2層の堆積が認められ、本日はこの層の掘削を進めていった。層を完掘すると大きな畦畔から東には水田の土壌は認められず緩やかに傾斜していくことを確認した。

9月10日（月）晴

本日午前中調査区全体を清掃し、午後航空測量を実施する。

9月11日（火）晴

湧水の著しい調査区北西端部から重機で埋め戻しを開始する。一方で矢板を打ち込んでいなかった、調査区南東端付近での土層断面の図化作業を行う。

9月12日（水）晴

大きな畦の盛り土内と周辺の水田土壌にクラッシャー状にされた土師器、須恵器をはじめとする多量の遺物が包含されていることを確認。急遽掘削取り上げ作業を進めていく。埋め戻しも同時並行で進めていく。

9月13日（木）晴

調査区の埋め戻し作業完了し、土庫長田遺跡2次調査をすべて終了する。

3．土庫長田遺跡3次調査

9月18日（火）晴

本日より本格的に土庫長田3次調査に作業を移行、開始する。本調査区においても、1次調査区の延長で包含層1、2層が堆積していることを確認し、今後重機掘削作業が人力掘削対象層に到達するまでは、これまでやってきたように10ｍピッチの地区割でこれら2層の包含層を掘削し、遺物を取り出していくことにした。一部に開けたグリッドでこの包含層2層の下層に布留式土器を含むシルト系の遺物包含層を確認し、さらに下層に黒色系の安定したシルト層が広がることを認識し、この層の上面で遺構が検出できるものと解釈した。

9月25日（火）晴

重機での包含層掘削が最後の1区にまで及んだが、ほとんど包含層1、2層の堆積は認められなくなる。

しかし、1次調査区のように一面に砂層が現れるような様子はないため、河道が複数存在することを示唆しているものと考えられる。ほどなく大河道SD－01の対岸を検出し、覆砂については、1次調査と同様、上下2層に分け、重機で掘削を進め遺物を取り上げていった。

10月1日（月）晴

大河道SD-01の掘削は本日をもって終了する。調査区の南東壁は1次調査区を埋める真土であるため、下半は大型土嚢を活用して土止めし、上半は法面を造成して養生をした。大河道の西岸から広がる微高地上では包含層3層を掘削して遺構の検出を進めるが、複雑な遺構は無く、数条の溝やピットが検出される程度である。

10月4日（水）晴

前日までに調査区北西側で、包含層3層の下層に遺構面を構成する安定したシルトは現れず、大きく西に向かって落ち込んでいくことが判明し、層ごとに覆土の掘削を進めていった。特に包含層3層の直下の層は土師器を含んでいるため、都合包含層4層として掘削していくことにした。

10月12日（金）

落ち込みの掘削を進めてきたが、本日までにSD－04の掘削に専ら取り組む。南から北西に大きく湾曲する2条の溝が検出

され、検出状況の撮影をする。落ち込みは一つの大きな河道であると解釈し、SD-03として扱う。2条の溝は、さらに下がっていくため、SD-03の埋没過程で存在した溝と解釈した。溝からの遺物の出土はなかった。

10月18日（木）

SD－01と03に挟まれた微高地で最初数条確認されていた溝は、北へ流れる1本の溝として最終的に検出され、SD－04として扱う。

10月25日（木）

本日調査区の航空測量を行った。同時に高所作業車からの調査区鳥瞰撮影も実施する。

10月31日（水）

午後から調査区北側大壁の土層断面図化用の写真撮影をデジカメで撮影。本日をもって土庫長田遺跡3次調査をすべて終了する。明日からは埋め戻しの工程に入る。

第３節　土庫長田遺跡１、３次調査成果

１．層序と調査方法

最も調査面積が広い１次調査区は、上層で小区画水田、下層で北西側に大河道を伴ったかたちで古墳時代集落跡を検出し、これらを上、下層の遺構面として調査した。３次調査区では１次調査区との境界で分断された大河道の延長やそれに伴う遺構を検出し、２次調査区では９世紀～11世紀の条里水田一面を検出した。

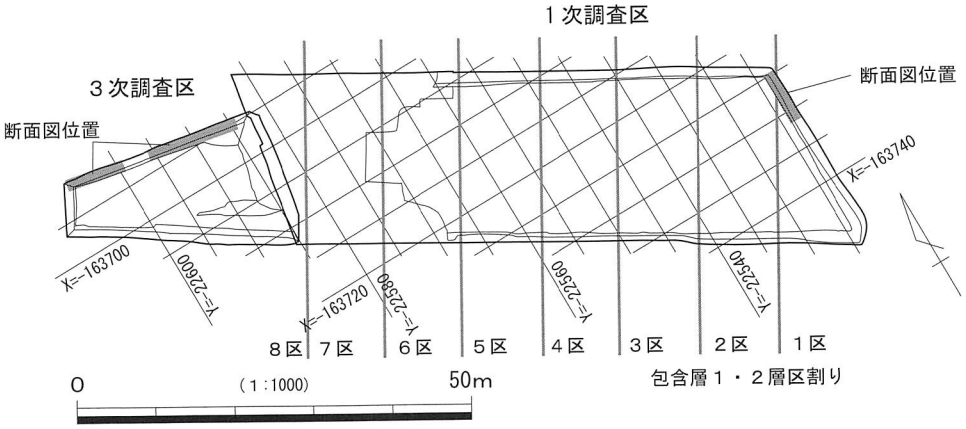
２次調査区においては、包含層２層こそ延長して堆積していることは確認できたが、１、３次調査区で検出した遺構面の延長や連続性は認められなかった。

１次調査区の大壁土層断面は、測量し本書で図面を掲載するはずであったが、南東側一部を除いて台風等による水害ですべて崩落してしまった。このため部分的な記録を基に作成した土層の模式図を、３次調査区にまで拡大させるかたちで下記のとおり掲載した。

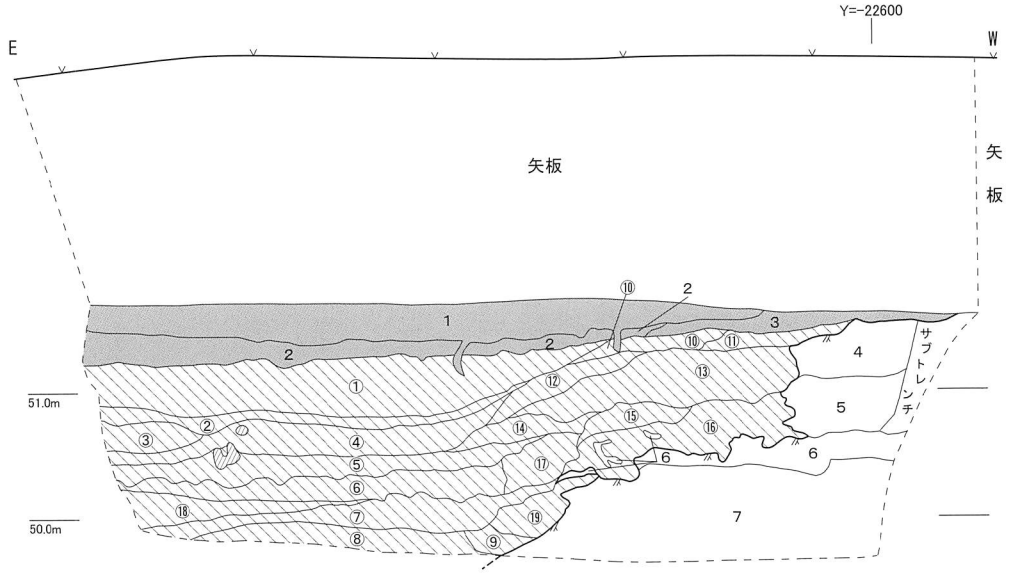
１次調査区の調査では、大河道の埋没深度が予想以上に深かったため多くの日数と人件費を要し、また台風等の水害によって調査区の復旧工事を繰り返すといった想定外の作業で、かなりの費用を要した。

このため２次調査区については、試掘の段階で土師器、須恵器片など若干の遺物が出土する箇所であったが、調査区北西に隣接する既に道路として供用している部分の調査（池尻遺跡）で、９世紀～11世紀の条里水田のみが遺構として検出された状況であったため、それ以外の時代の遺構が検出されることは低いと判断、当初から調査区の面積をトレンチ並みに縮小して設定し、その水田の延長を検出することに徹し、調査の費用と期間の圧縮を図った。

調査前風景（長田遺跡１次調査区・南西から）



第5図　長田遺跡1・3次調査地区割図



1 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト。5Y7/3 浅黄色砂質シルトがブロックで 20%入る。粘性ややなし。
2 5BG6/1 青灰色シルト。しまりあり。
3 10Y5/1 灰色シルト。粘性ややなし。
} 包含層 4層
4 N4/ 灰色シルト雲母片、1～2mm の白色砂3%入る。
5 N5/ 灰色シルトシルトに 2.5Y6/1 オリーブ灰色シルトがブロックで 20%入る。粘性なし。
6 5Y6/1 灰色砂質シルトに 2.5Y6/2 灰黄色と 2.5Y5/4 黄褐色の細砂が 30%ずつ帯状に入る。雲母片含む。
7 2.5Y5/3 黄褐色砂（1～3mm）に腐植土が帯状に 30%入る。雲母片少量と木片を多量に含む。

SD-03

① 10BG5/1 青灰色シルトと 2.5Y7/3 浅黄色細砂の互層。
② N5/ 灰色シルトに 2.5Y7/3 浅黄色細砂が帯状に 20%入る。木片を少量含む。
③ 10YR7/4 にぶい黄褐色細砂と 5Y5/1 灰色シルトの互層。
} SD-03 1層

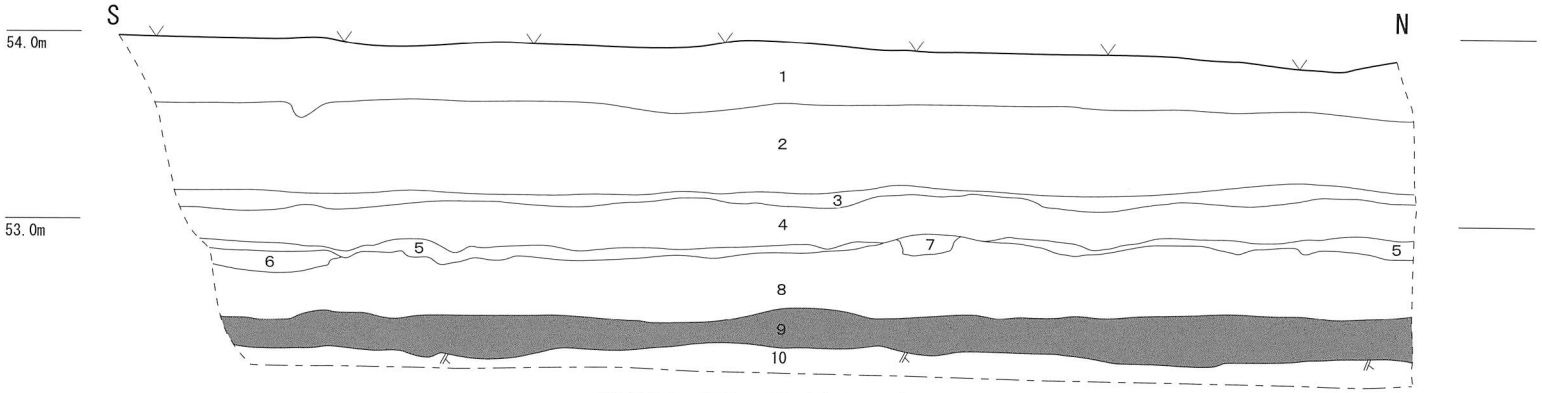
④ 2.5Y5/1 黄灰色シルトに腐植土が薄く帯状に5%入る。木片を少量含む。
⑤ 10YR5/1 褐灰色シルト。7層より多量の木片を含む。
} SD-03 2層

⑥ 2.5Y4/1 黄灰色シルトに1～5mm の砂礫が 15%入る。雲母片少量と多量の木片を含む。
} SD-03 3層

⑦ 5Y5/1 灰色シルト混細砂に 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂がブロックで 20%入る。木片を少量含む。
⑧ 腐植土に 2.5Y6/2 黄灰色細砂がブロックで 15%入る。
⑨ 2.5Y6/2 灰黄色砂（1～5mm）に N4/ 灰色シルトがブロックで5%入る。
} SD-03 4層

⑩ 10Y6/1 灰色シルト。しまりあり。
⑪ 5B5/1 青灰色シルト。5層より粘性が弱い。
⑫ 10BG5/1 青灰色シルト。しまりあり。
⑬ N4/ 灰色シルトに1～2mm の白色砂3%、白～青色粒子が 10%入る。（5層に白～青色粒子が入る。）
⑭ N5/ 灰色シルト。木片・炭化物を1%含む。
⑮ N6/ 灰色シルト。雲母片、白～青色粒子が5%入る。
⑯ N4/ 灰色シルト雲母片、1～2mm の白色砂3%、白～青色粒子が5%ずつ入る。（5層に白～青色粒子が入る。）
⑰ 7.5Y5/1 灰色シルトに木片が少量入る。雲母片を全体に多く含む。
⑱ 2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂に腐植土が帯状に 20%入る。
⑲ N4 / 灰色シルトに 10GY7/1 明緑灰色シルトがブロックで 30%入る。

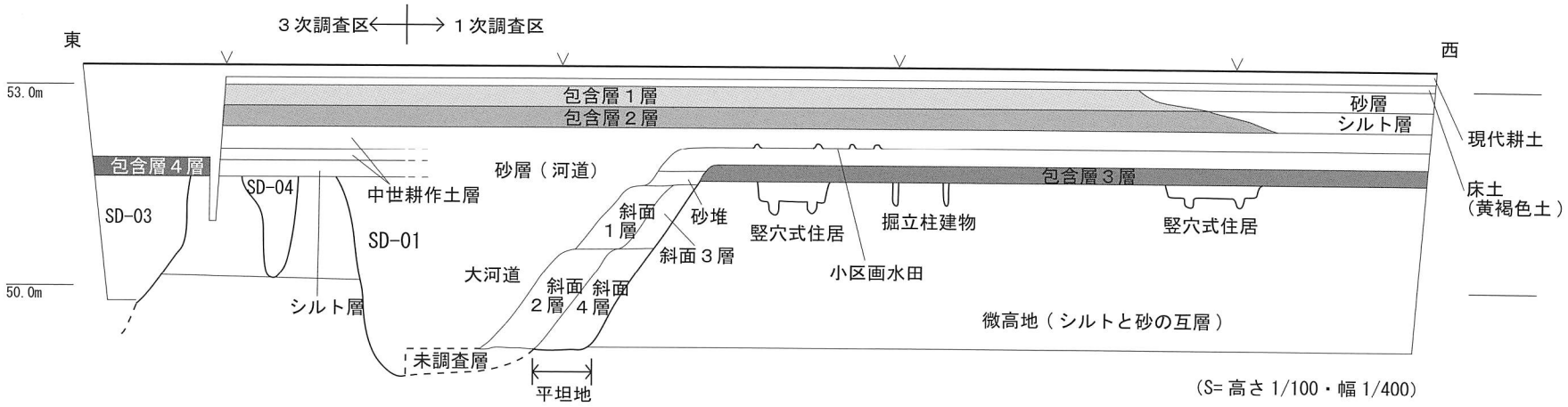
第7図　長田3次北壁断面図1



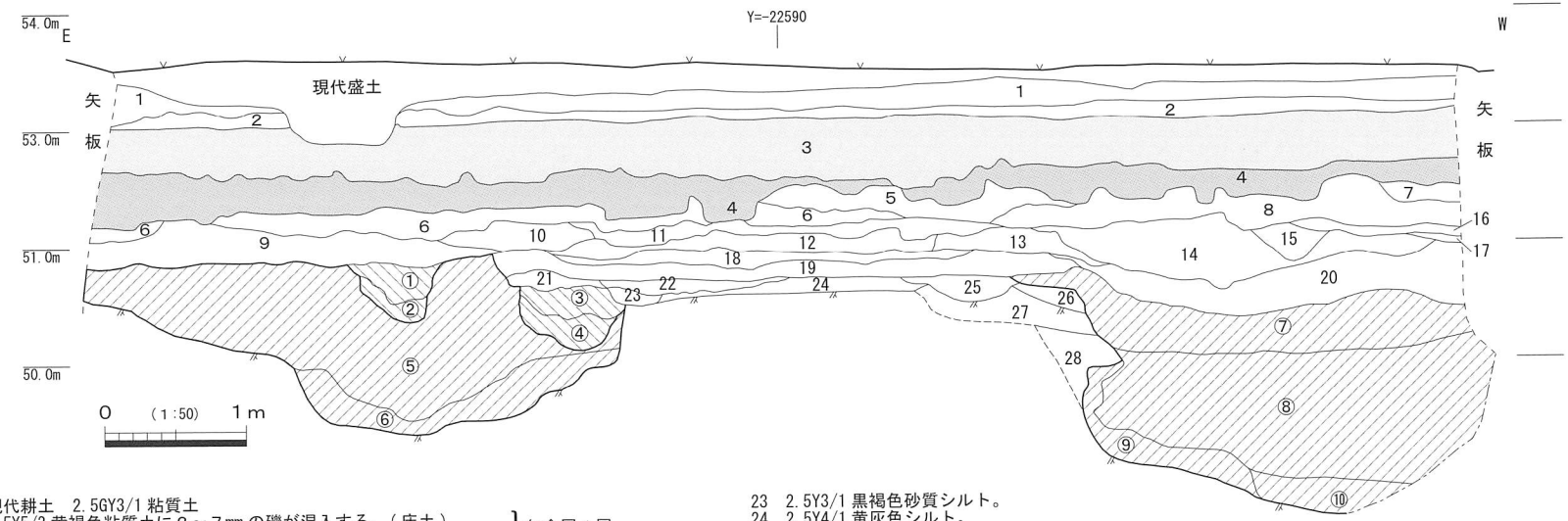
0　（1：40）　1m

1　5Y3/2 オリーブ黒色に 10YR4/4 褐色の小ブロックが霧降状に 15%入るシルト。植物の根が多い。（現代耕土）
2　7.5YR5/3 黄褐色に 7.5YR4/3 褐色の小ブロックが霧降状に 25%入るシルト。7mm 以下の砂を多く含む。（床土）
3　7.5YR6/1 褐灰色の砂礫（10mm 以下）。
4　7.5YR1.7/1 黒色の砂礫（10mm 以下）に 7.5YR4/4 褐色の砂礫（2mm 以下）が層状のブロックで 25%混入。
5　5YR4/8 赤褐色の砂礫（7mm 以下）に 2.5Y5/4 黄褐色の砂礫（3mm 以下）が層状のブロックで 35%混入。
（4・5：砂層）
6　10GY3/1 暗緑灰色の砂混シルト（2mm 以下）に 10YR4/4 褐色の砂（1mm 以下）が霧降状のブロックで 20%混入。
7　2.5Y4/2 暗灰黄色のシルト。4・5層の砂礫を多く含む。
8　10Y4/1 灰色の粘質土混シルト。下層はほとんど砂が含まれず、雲母がやや多い。上層は5層のブロックが多く含む。
9　7.5Y4/1 灰色の粘質土混シルト。炭化物を少量含むが砂は少ない。（包含層3層）
10　10YR3/1 オリーブ黒色のシルト混粘質土。砂をやや多く含む。（地山）

東壁断面図



第6図　長田1次調査区断面・模式図



1　現代耕土　2.5GY3/1 粘質土
2　2.5Y5/3 黄褐色粘質土に２～７mm の礫が混入する。（床土）　} 包含層１層
3　2.5Y6/1 黄褐色粘質土に 2.5Y5/1 黄灰色シルトが３%、２～15mm の礫が７%混入する。　} 包含層２層
4　2.5Y5/2 暗灰黄色シルトベースに 10YR3/4 暗褐色シルトがドット状に 40%、２～10mm の礫 10%が混入。土器片が多量に混じる。
5　10YR４/４灰黄褐色砂混シルト。２～５mm の礫が 10%混入。10YR5/4 にぶい黄褐色砂がブロックで３%入る。
6　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土に２～10mm の礫が 15%混入。
7　10YR4/4 褐色シルト。５～10mm の礫が 15%入る。
8　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土。斑鉄を 15%入る。
9　2.5Y3/1 黒褐色粘質土 2.5Y4/1 黄灰色粘質土が大ブロックで 30%
　2.5Y4/1 黄灰色シルトが５%混入。
10　10YR5/2 灰黄褐色砂と 10YR4/4 褐色粘質土が 50%ずつ混じる。
11　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土に 10YR７/３にぶい黄橙色砂質土がブロックで７%入る。
12　10YR4/4 褐色砂質土と 10YR4/2 褐灰色粘質土が 50%ずつ混じる。斑鉄が 10%混入。
13　10YR4/2 灰黄褐色シルト。斑鉄を 10%含む。
14　2.5YR5/2 暗灰黄色砂に 5YR5/2 灰オリーブ色シルトがブロックで２%混入。
15　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。しまりなし。
16　2.5Y4/1 黄灰色シルト。２～10mm の礫を３%含む。
17　10Y4/1 灰色砂質シルト。
18　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト。２～10mm の礫が 10%、斑鉄が 10%混入。
19　2.5Y4/1 黄灰色シルト。３～５mm の礫 15%、斑鉄 15%が混入。
20　2.5Y4/1 黄灰色シルトに 5Y5/2 灰オリーブ色細砂がブロックで５%混入。
21　2.5Y4/2 暗灰黄色砂混シルト。
22　2.5Y5/2 暗灰黄色砂混シルト。
23　2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト。
24　2.5Y4/1 黄灰色シルト。
25　5Y3/1 オリーブ黒色シルト。
26　2.5Y4/1 黄灰色シルト。
27　7.5YR3/1 黒褐色シルト。
28　7.5YR1.7/1 黒色シルト。

素堀溝２
①　10BG4/1 暗青灰色粘質土に N4/ 灰色シルトがブロックで５%、２～５mm の礫が 15%混入。
②　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土に２～10mm の礫が 15%混入する。
SD-02
③　10Y2/1 黒色砂礫（７mm 以下）多量混シルト。細砂と 5Y5/1 灰色シルトの互層。
④　10Y4/1 灰色シルト混砂礫。③層の大ブロックが 15%入る。
SD-04
⑤　10YR5/4 にぶい黄褐色砂に 10YR5/6 黄褐色シルトが帯状に 10%混入。
（上位で黄味が強く、上位を SH-04 上層、下位を SH-04 下層とした。）
⑥　2.5Y5/1 黄灰色砂に 5Y3/1 オリーブ褐色シルトがこぶし大のブロックで 10%混入。
SD-01
⑦　10YR5/1 褐灰色砂に 7.5YR4/4 褐色砂、7.5YR4/1 褐灰シルトが帯状に各 10%、10GY5/1 褐灰色シルトと 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂の互層がブロックで 20%入る。(SH-01 上層）
⑧　10YR6/2 灰黄褐色砂に 10YR4/1 灰色シルトが２%、5YR4/4 にぶい赤褐色砂が５%入る。(SH-01 上層）
⑨　7.5YR3/1 黒褐色シルト。雲母片が全体に少量入る。
⑩　7.5YR2/1 黒色シルトと 7.5YR4/1 褐灰色砂の互層。

第８図　長田３次北壁断面２

2．上層遺構

上層遺構は、1次調査区西側の4～8区において、後述する調査区西端の河道が埋没する際に引き起こしたと考えられる洪水砂層を除去した段階で検出した。調査面は1面であり、遺構検出は、洪水砂層直下の青灰色シルト層上面で行った。この洪水砂層及び青灰色シルト層は、調査区東側の1～3区においては、洪水砂層上面より切り込む自然流路によって大きく削平されていたため、上層遺構の検出作業は、主に調査区西側部分が対象となった。

調査の結果、小区画水田11枚、河道1条、溝3条（SD－01、02、03）、井戸2基（SE－01、02）、土坑3基（SK-01、他2基）、ピット4基（SP-01、02、03、他1基）、足跡と思われる小穴群が検出された。上層遺構の主な時期は、後述の通り遺構及び上下層からの出土遺物より、6世紀頃と考えられる。

以下に、主な遺構について順次述べていくこととする。

小区画水田　4～6区の南側で微高地状に周囲より僅かに高まった位置において、一枚あたりの面積が10～20㎡程度の小区画水田（以下、便宜上「水田」と称する。）がまとまって検出された。水田は合計11枚を数え、東西約15ｍ、南北約20ｍの範囲で検出された。水田の床面及び畦畔は、黄褐色洪水砂層で一気に埋没しており、残存状況は全体的に良好であった。後述される通り、水田土壌サンプルの自然科学分析からは、これらの水田で実際に稲作が行われていた可能性が高いことが結論付けられている。

水田が検出された高まりについては、南から北に向かって緩やかに傾斜している。その標高差は約20cmであるが、小区画に造成された各水田の床面内における標高差は9cm以下となる。

水田の耕土については、次項で述べられる古墳時代住居跡群を検出した下層遺構面に、数層のシルトが自然堆積し、そのうちの最上層となる青灰色シルト層が耕土として利用されている。

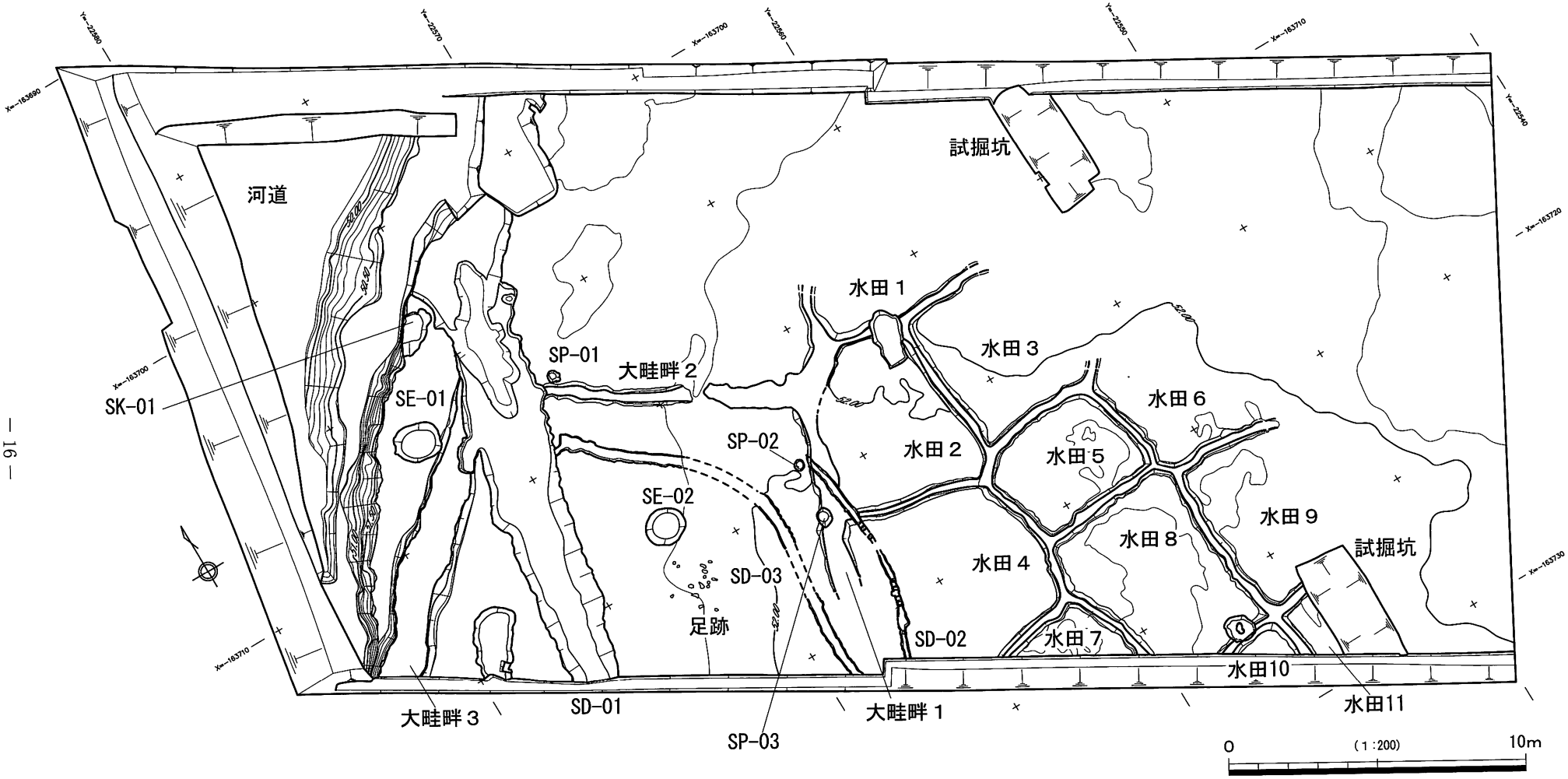
各水田における床面の規模、面積、平均標高については、第1表にまとめたので参照されたい。このうち全体が検出されたのは、水田5のみである。規模については、最小であると考えられる水田5が、東西約4ｍ、南北約3ｍ、面積約13㎡を測り、最大であると考えられる水田4が、東西約5ｍ、南北約6ｍ、面積約24㎡以上を測る。平均標高については、南端に位置する水田7が最も高く、北端に位置する水田1が最も低い。その差は16cmを測る。一方、東西方向両端の水田における平均標高差は、南北方向に比べてほとんど無く、最大で2cmを測る。

また各水田床面においては、無数の不定形な小穴が不規則に確認できた（図版3）。明確に判断できたものは無かったが、おそらく足跡もしくは耕作跡と思われる。

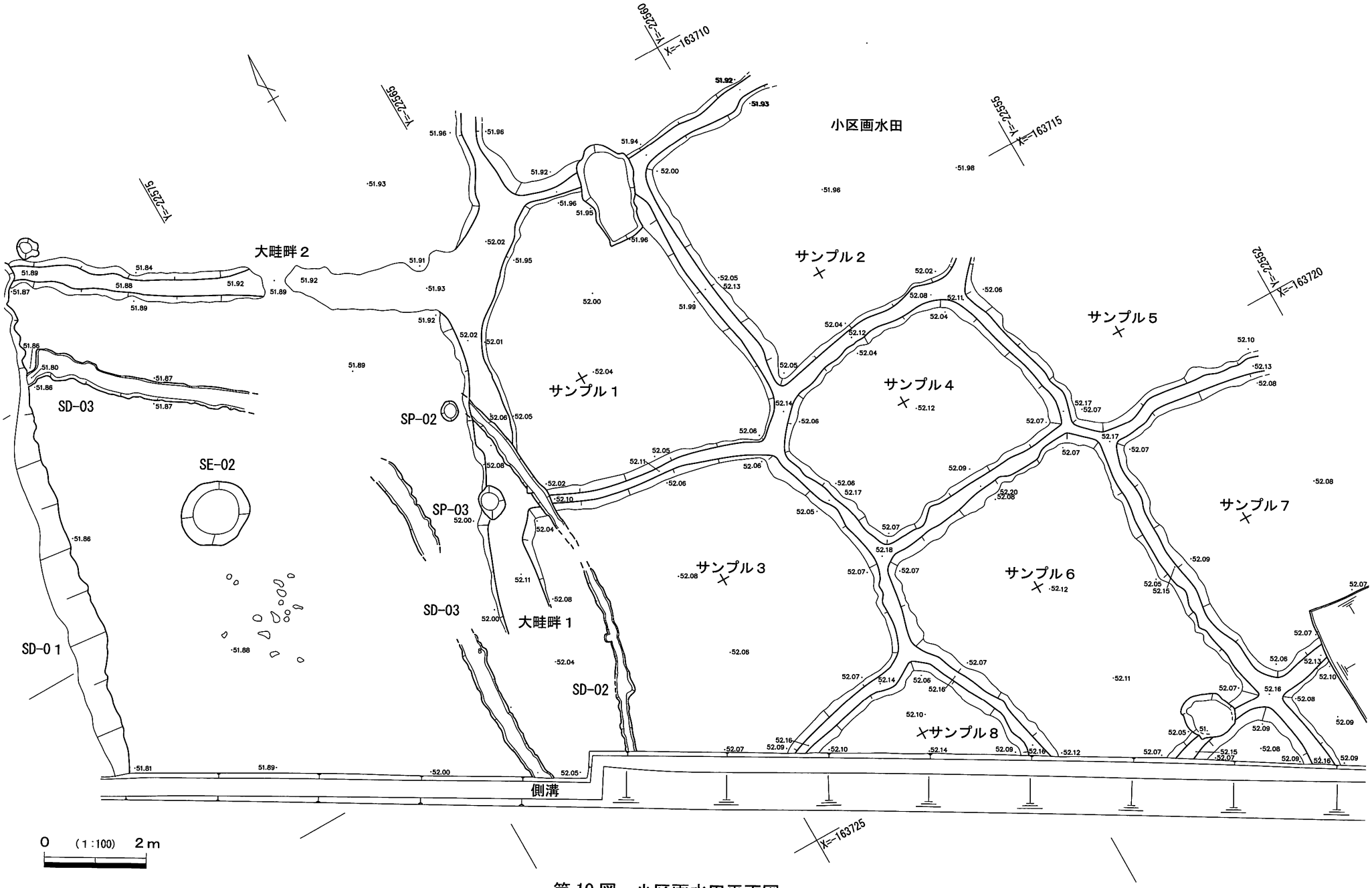
畦畔については、基底部幅の違いにより、小畦畔と大畦畔（大畦畔1）の二種類に大別できる。どちらも水田耕土を盛るだけの簡単な造りであり、断面形状は半円形もしくは逆U字形を呈する。特に水田8の床面においては、中央に比べて縁辺の標高が僅かに低い状況が確認できたことから、縁辺の耕土を盛って畦畔を造成した様子が伺える。以下に、小畦畔及び大畦畔1の規模や特長について述べることとする。

小畦畔については、基底部幅35～69cm、高さ3～13cmを測る。部分的な規模の差はあるものの、全体的に平均した造りであり、基底部幅の平均は51cm、高さの平均は7cmを測る。これら小畦畔は、南北・東西方向に伸び、水田を一枚ずつ区画する。このうち南北方向の小畦畔は、南から北へ下がる傾斜面に沿って伸び、東西方向の小畦畔は、これにほぼ直行するように造成されているが、いずれの小畦畔も地形に左右されながら造成されているため、水田の平面形は不定形を呈し、面積は一定でない。

大畦畔1は、水田1、2、4の西側の畦畔に該当し、地形に左右されながら南北方向に伸びる。規模は、基底部幅45～113cm、高さ1～11cmを測る。大畦畔1は、各水田との位置関係から、ある程度まとまった水田域を区画するものと考えられ、また同時に今回検出された小区画水田域の西限を示



第９図　長田１次上層遺構平面図



第 10 図　小区画水田平面図

すものと考えられる。

水口については、小畦畔・大畦畔１からは検出されなかった。おそらく傾斜を生かして上位の水田から順次低位の水田へと用水を掛け流す「田越し」[1]によって、灌漑が行われたものと考えられる。

水田の造成域については、南方向は、小畦畔が調査区南壁にかかって検出されていることから、さらに南方へ広がることが予想される。北および東方向については、畦畔はおよそ標高52.00ｍより低位置からは検出されず、それぞれ切断された状態で検出した。高まりに位置する畦畔の残存状況が良かったことから、低位置における畦畔は、後の流水等で削平されたものと考えられる。西方向については前述の通り、大畦畔１がその西限に当たるものと考えられる。

その他、小区画水田と関連する遺構として、大畦畔１の北側で接続し東西方向に伸びる大畦畔２、河道東岸に沿って造成された大畦畔３が検出されている。

大畦畔２については、基底部幅40～97cm、高さ１～４cmを測る。高さが極端に低く、検出は比較的困難であった。後述する大畦畔１を切る溝（SD－02）が近くに検出されていることから、後に人為的な削平をうけた可能性も考えられる。大畦畔２の中央部分には、幅約50cmで水口状に途切れる部分がある。前述のとおり削平痕の可能性も考えられるが、仮に水口であるとすれば、周辺地形から推測して、南から北方向へ水が流れるものと考えられる。

大畦畔３については、河道東岸に沿って南西から北東方向に伸び、東岸の肩より145～205cmの幅で、ベースの青灰色シルト層を切り込んで造成されている。高さは16～27cmを測り、断面形状は台形を呈する。

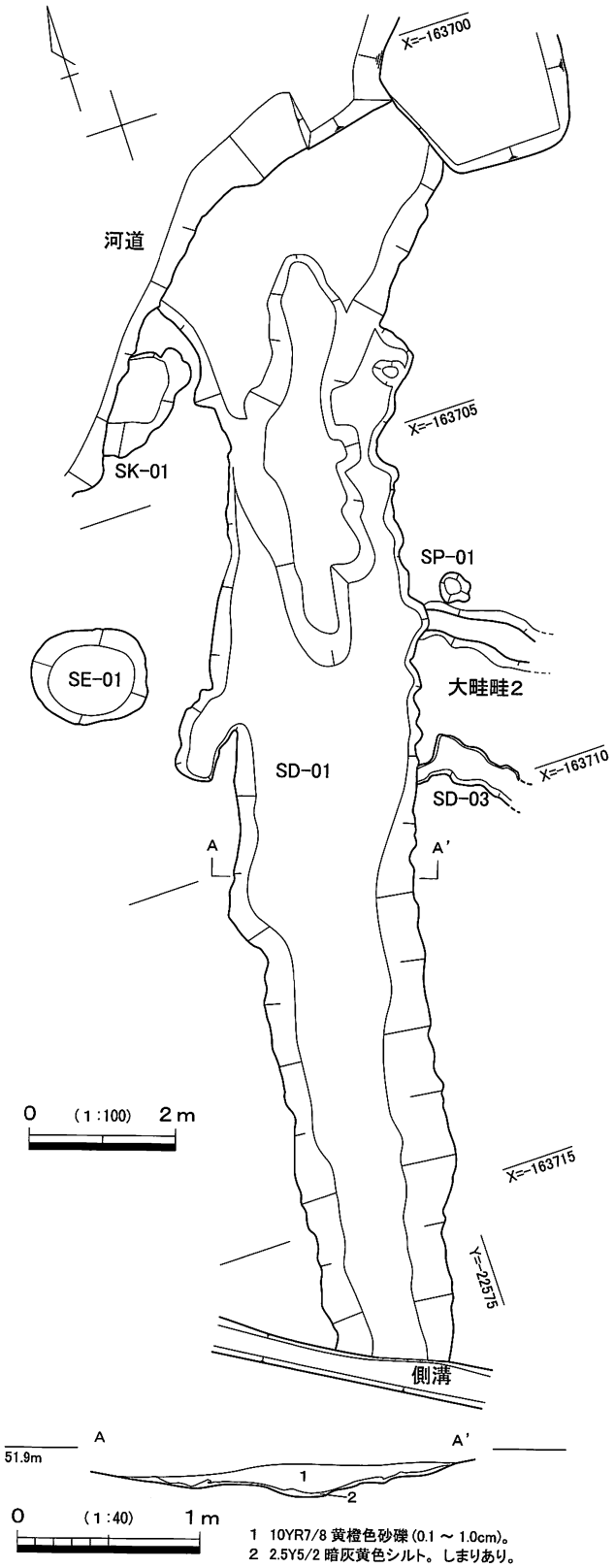
大畦畔１・２・３の位置関係より、大畦畔２の南側においても水田が存在した可能性が考えられる。推定される水田の東西方向の長さは約13ｍ、南北方向の長さは約６ｍ以上、面積は約90㎡以上を測る。この水田内においては、南側一部の範囲において、ヒト・ウシと思われる足跡が幾つか検出されている（図版２）。ヒトの足跡と思われるものは、長さ約25cmを測り、五本指が僅かに確認できる。ウシの足跡と思われるものは、縦の長さ約10cmを測り、二本の蹄跡が確認できる。どちらも散在的に位置しており、灰白色砂で埋まる。同様の足跡は、前述の小区画水田の床面においては全く見られなかった。小範囲の残存であるため、足跡の帰属する時期や遺構については不明である。

以上の水田の経営時期についてであるが、水田耕土及び水田直上の洪水砂層からの出土遺物はごく少量である。水田耕土からは５世紀頃の土師器が出土しているが、摩滅が著しく細片が多いことから、５世紀の遺物を多く含む下層の包含遺物が、耕作等によって起こされたものである可能性が高い。そのため水田耕土の出土遺物からは、直接水田の経営時期を決定するには至らなかった。水田面直上の洪水砂層からは、最も新しい時期の遺物として６世紀頃の土師器、須恵器が出土している。また飛鳥時代以降の遺物が見られないことからも、水田は６世紀頃に埋没したものと考えられ、水田の経営時期についてもこれに近い時期として考えておきたい。

今回検出された小区画水田については、工楽善通氏の地形による水田立地の分類では、Ｂ類に相当するものと考えられる[2]。Ｂ類は、「微高地の縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を使用したもので、水田区画は概して小さく、傾斜の度合いに応じて大小に区画され、その形は等高線に左右されて不定形となることが多い」とされるものである。また、全国的に弥生時代から古墳時代にかけての多くの水田がこのＢ類に属するとされており、今回検出された水田についても、その範疇に入るものと考えられる。

小区画水田の検出は、大和高田市内においては西坊城遺跡に続く２例目となる[3]。西坊城遺跡は、当該遺跡より南へ18kmの所に位置しており、古墳時代中期から後期前半の小区画水田が検出されている。

河道　調査区西端部分の７～８区に位置する。周辺地形から推測して南西から北東方向に流れを向け



第11図 SD-01平・断面図

るものと考えられる。今回の調査区においては東岸のみを検出した。幅は約10ｍ以上、深さは東岸の肩より約２ｍを測る。東岸の断面形状については２つの段を持ち、上位の段上にはテラス状の広がりを有する。この河道は、次項で後述される下層遺構で検出した「大河道」が、その後の自然堆積によって規模を縮小しながら埋没していく最終段階のものである。河道東岸の検出位置については、下層遺構の「大河道」東岸検出地点より、西へ約16ｍ移動している。河道の最終埋没時期としては、出土遺物から６世紀頃と考えられる。前述のとおり、この河道が引き起こした洪水砂によって、上層遺構が埋没するものと考えられる。

溝（SD-01、02、03） SD-01は、７区に位置し、南北方向に伸びて河道東岸に接続する。長さ約16ｍ、最大幅約4.4ｍ、最深部約50cmを測る。断面は浅い船底形を呈し、最深部は二段に落ちる。河道東岸に接続する部分が最も深いことや周辺地形から推測して、おそらく南から北方向への排水に利用されたものと考えられる。埋土は、僅かに暗灰黄色シルトが堆積した後、黄橙色砂層で一気に埋没している。出土遺物は、土師器、須恵器、種子があるが、少量で細片が多い。時期の判別できるものとして、６世紀頃の須恵器杯蓋・杯身が認められる。

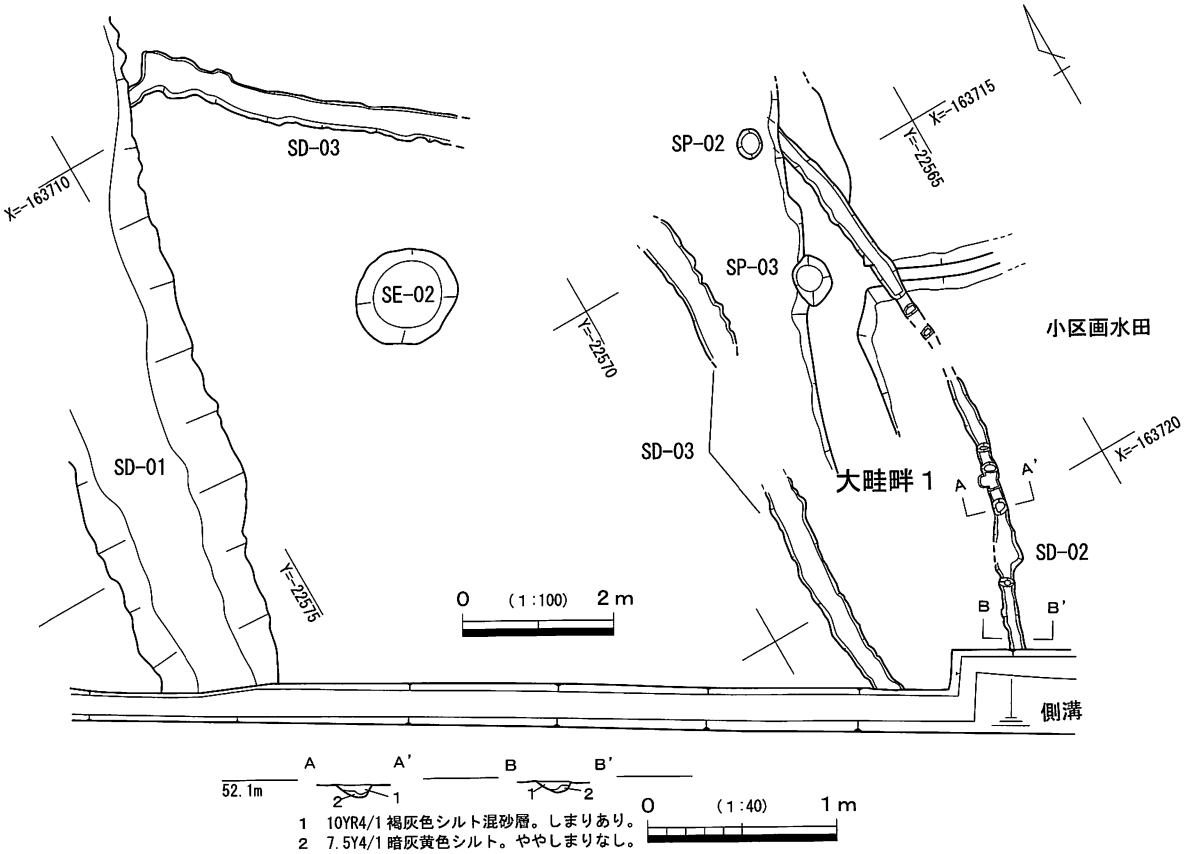
SD-02、03は、６区に位置し、SD-01の東側で検出した。それぞれ約２ｍ間隔の平行した位置関係にあり、調査区南端から北方向へ伸びた後、さらに西方向へ方向転換して伸びている。規模については、SD-02が検出長約７ｍ、幅約15～40cm、深さ約５cmを測り、SD-03が検出長約９ｍ、幅約30～50cm、深さ約５cmを測る。共に断面形状は半円形を呈し、底面には連続する明瞭な鋤痕が残る。埋土については、どちらも暗灰黄色シルトが堆積後、褐灰色シルト混砂で埋没している。そのため、２つの溝は同時期のものと考えられる。またSD-02が大畦畔１及び小区画水田を無秩序に切っていることから、これらの溝は水田経営時期より後に掘り込まれたものと考えられる。遺物の出土は無い。

井戸（SE-01、02） SE-01は、７区に位置し、河道東岸のテラス状に広がる部分において検出した。直径約1.6ｍ、深さ約1.2ｍを測る。断面形状は円筒状を呈し、素掘り井戸と考えられる。遺物はご

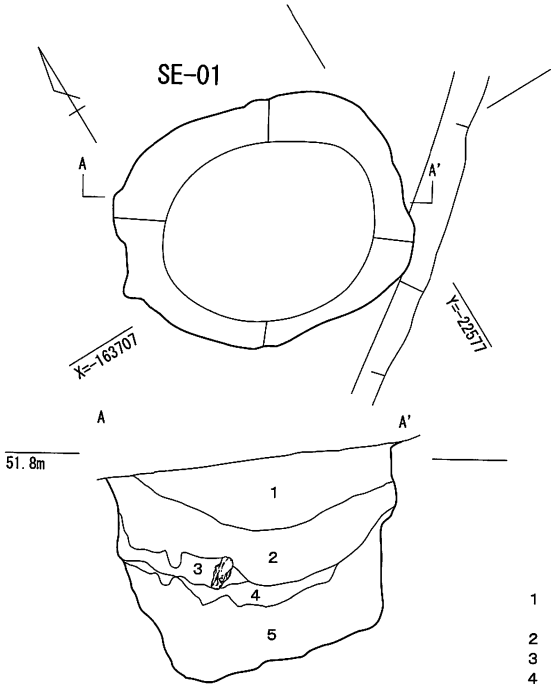
第１表　小区画水田計測表

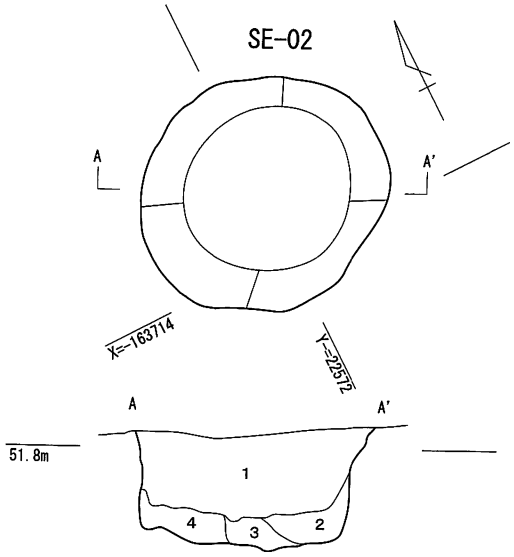
遺構名	規模			平均標高（m）
	長さ（m）		面積（㎡）	
	東西	南北		
水田１	5.1 以上	2.0 以上	4.2 以上	51.94
水田２	4.9	5.5	20.7	52.00
水田３	4.1 以上	4.8	15.7 以上	52.01
水田４	5.4	5.7	24.2 以上	52.07
水田５	4.2	3.3	12.5	52.07
水田６	3.5 以上	4.1	6.6 以上	52.08
水田７	2.7 以上	2.6 以上	3.5 以上	52.10
水田８	4.7	6.1	23.2 以上	52.08
水田９	3.3 以上	5.3	11.7 以上	52.07
水田 10	1.4 以上	1.2 以上	0.9 以上	52.08
水田 11	1.0 以上	1.7 以上	1.8 以上	52.09

※計測は全て水田床面を対象とし、畦畔は含んでいない。
※「平均標高」は、水田床面の縁辺及び中央の標高値を平均して求めた。
※「長さ」・「面積」は小数点第二位を、「平均標高」は小数点第三位を四捨五入して求めた。
※「長さ」は最大値を表記している。



第 12 図　SD-02・03 平・断面図



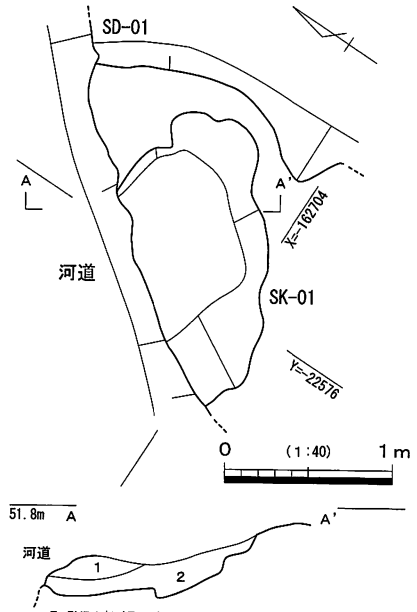


1　10YR7/2 にぶい黄褐色砂（5mm 以下）に 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトが大きいブロックで 35%層状に混じる。端部に 5Y4/8 赤褐色の鉄分の多い砂の層（10 ～ 30mm 幅）が入る。
2　5Y5/2 灰オリーブ色砂に 5Y4/2 灰オリーブ色のシルトブロックが 40%層状に混じる。
3　10Y4/1 灰色の砂混シルトに 5Y5/2 灰オリーブ色の砂（2mm 以下）ブロックが 30%混じる。
4　10Y4/1 灰色の砂混シルトに 5Y5/2 灰オリーブ色の砂（1mm 以下）が層状に 30%混じる。

1　7.5Y4/1 灰色砂混シルトに 5Y4/1 灰色砂（1mm 以下）5%、10Y3/1 オリーブ黒色砂混シルトがブロックで 20%混入。
2　10YR5/8 黄褐色に 10YR7/2 にぶい黄橙色がブロックで 40%混じる砂層。10Y3/1 オリーブ黒色のシルト混砂が大きいブロックで 10%混入。
3　10Y3/1 オリーブ黒色のシルト層。雲母を多く含む。
4　10Y5/1 灰色と 5Y6/2 灰オリーブ色の大きいブロックで混じる砂層（1mm 以下）。
5　3 層のシルトと 4 層の砂が大きいブロックで層状に混じる層。

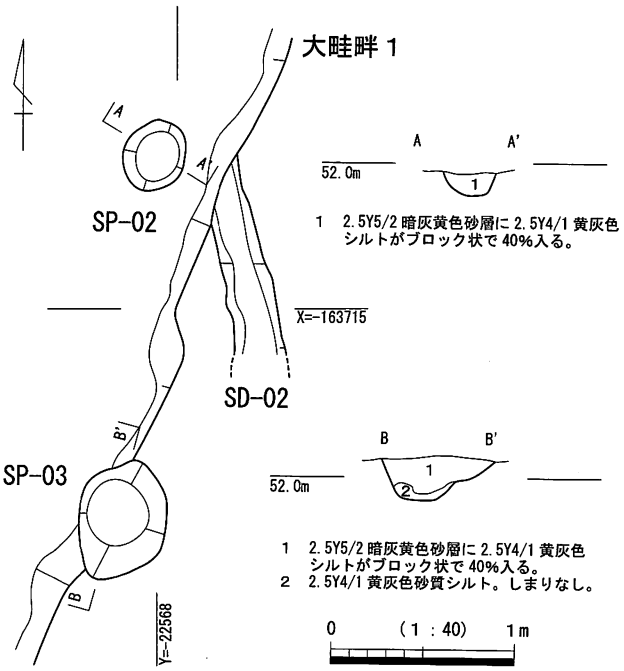
0　（1：40）　1m

第 13 図　SE-01・02 平・断面図



1　7.5YR4/1 褐灰色シルト。しまりなし。
2　10Y6/8 明黄褐色砂層。0.5 ～ 1.0cm 大の礫を 50%含む。

第 14 図　SK-01 平・断面図



1　2.5Y5/2 暗灰黄色砂層に 2.5Y4/1 黄灰色シルトがブロック状で 40%入る。

1　2.5Y5/2 暗灰黄色砂層に 2.5Y4/1 黄灰色シルトがブロック状で 40%入る。
2　2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト。しまりなし。

第 15 図　SP-02・03 平・断面図

く少量で細片のみである。染付磁器片、土師器片が出土しており、近世以降に上層より掘り込まれたものと考えられる。

SE－02は、６区に位置し、SD－03の南側で検出した。直径約1.3ｍ、深さ約0.6ｍを測る。断面形状は円筒状を呈し、素掘り井戸と考えられる。河道に近い位置関係にあるため、おそらく河道埋没後に上層より掘り込まれたものと考えられる。遺物の出土はない。

土坑（SK－01）　７区に位置し、河道東岸のテラス状に広がる部分において検出した。長径約1.7ｍ、短径約0.8ｍ、深さ約24cmを測る。埋土は上層が褐灰色シルト、下層が明黄褐色砂である。出土遺物については、下層からほぼ完形の６世紀頃の須恵器杯身が出土している。

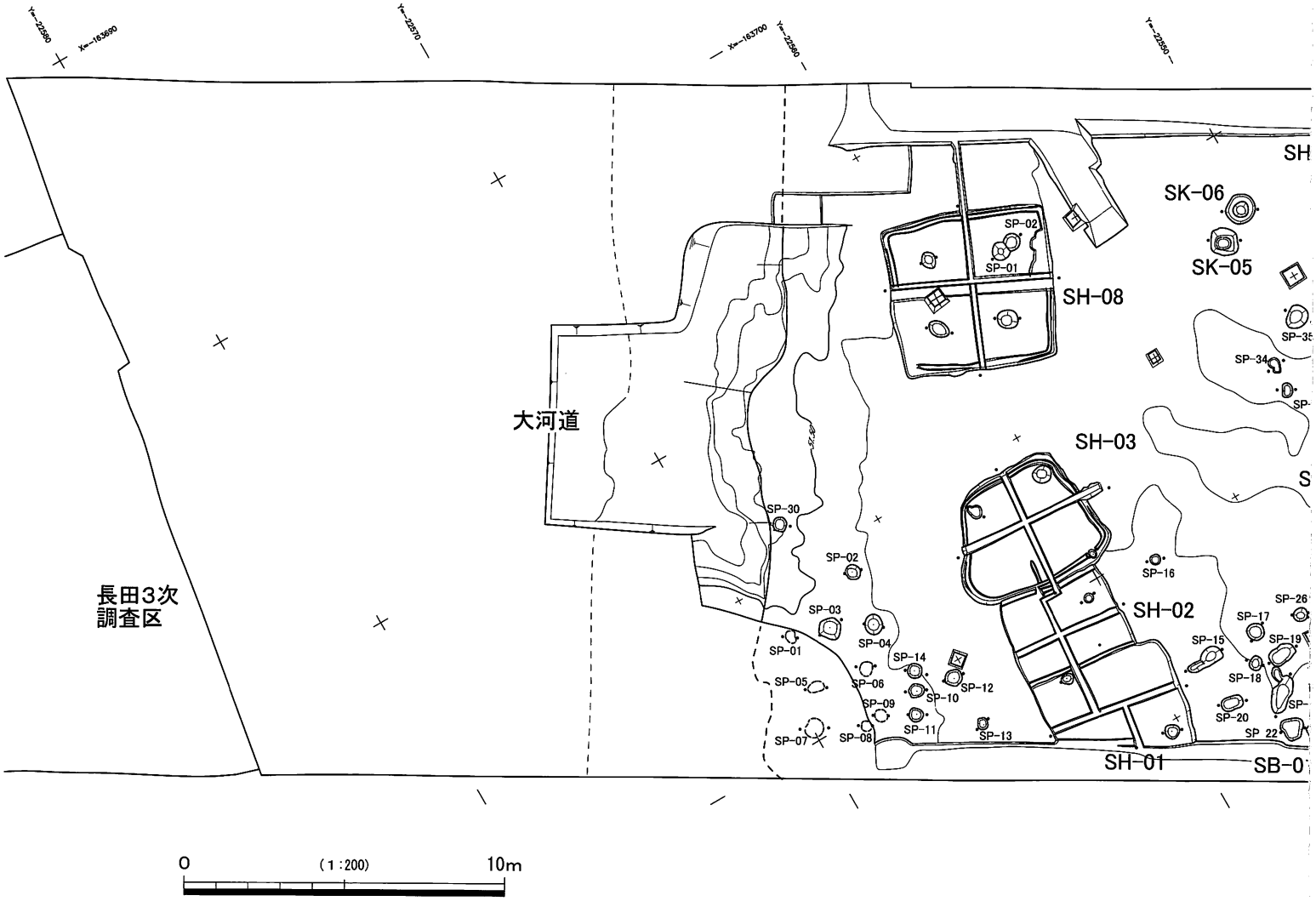
ピット（SP－01、02、03）　SP－01は、７区に位置し、大畦畔２の北側で検出した。平面形は歪な円形を呈し、直径約40cm、深さ約15cmを測る。遺物の出土はない。SP－02は、６区に位置し、大畦畔１の西側で検出した。平面形は円形を呈し、直径約30cm、深さ約12cmを測る。遺物の出土はない。SP－03は、６区に位置し、大畦畔１を切る。平面形は歪な楕円形を呈し、直径約60cm、深さ約23cmを測る。遺物の出土はない。

注

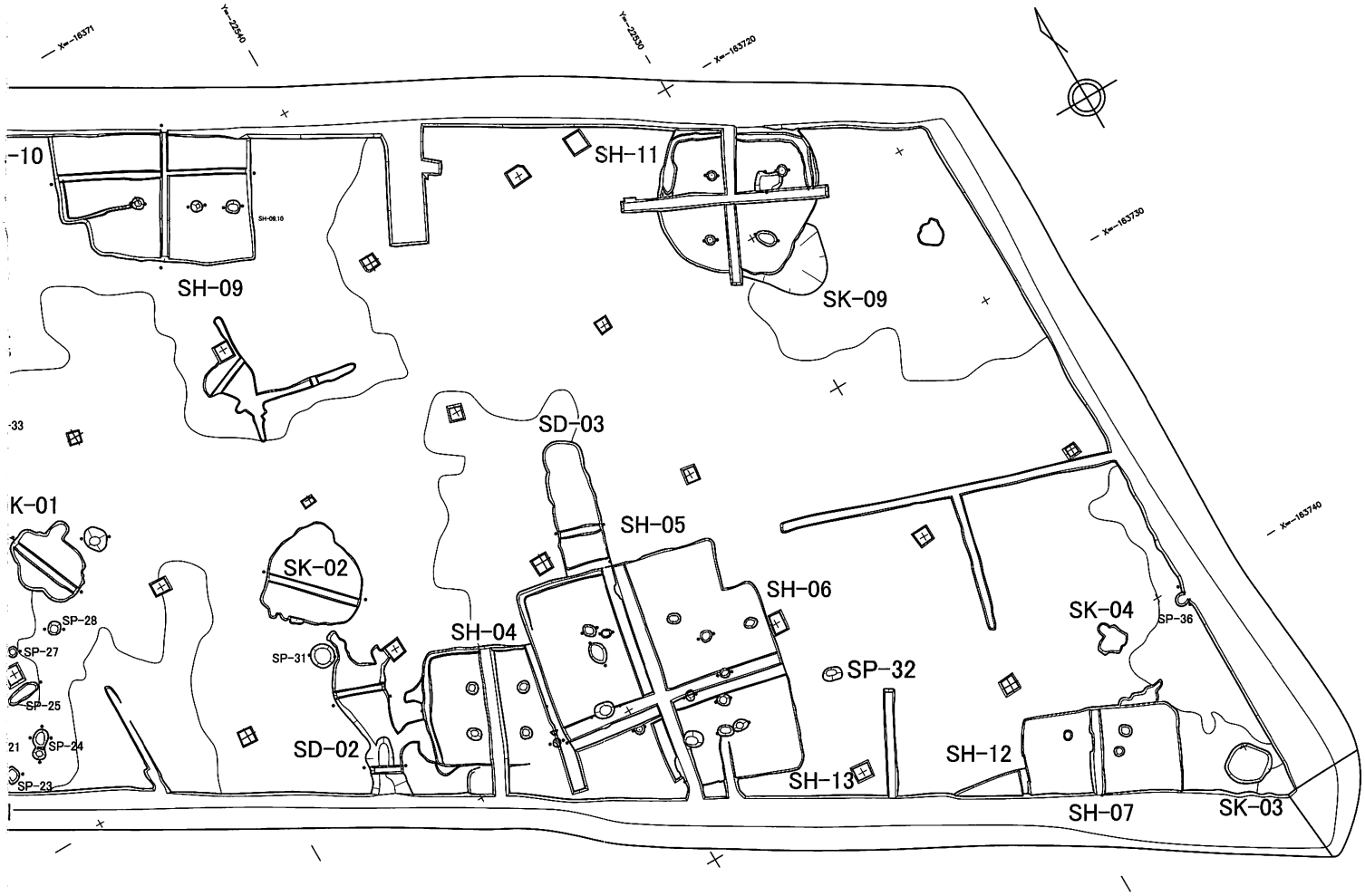
1）工楽善通　1991年　『水田の考古学』　東京大学出版会

2）1）に同じ。

3）大西貴夫　1999年　『西坊城遺跡』　奈良県文化財調査報告書　第83集　奈良県立橿原考古学研究所



第16図　長田1次調査下層遺構全体平


SH-11
SH-09
SK-09
SD-03
SH-05
SH-06
SK-02
SH-04
SP-31
SD-02
SP-32
SK-04
SP-36
SH-12
SH-13
SH-07
SK-03
SP-28
SP-27
SP-25
SP-24
SP-23

面図

３．下層遺構

下層遺構として扱うものは、１次調査区の古墳時代集落跡と関連遺構と、および３次調査区全ての遺構が対象となる。基本的に調査区ごとに成果を述べることにするが、遺構が調査区によって分断された大河道については１次調査区の成果と同時に述べることにする。

（１） 竪穴式住居群と掘立柱建物

南北方向に広がる微高地上で、建替えられたものを含めて竪穴式住居12棟、掘立柱建物１棟を検出した。竪穴式住居は基本的に平面方形プランであるが、一部には歪な形をしたものがある。床面で検出した柱穴も、規則的に整然と穿たれている住居とそうでないものとに大別された。

竪穴内に建材を残す住居や火災で焼失した住居はなかった。竈や火の使用によって床が焼けたような痕跡は、どの住居にも認められなかった。

また土器や木器など、生活雑器を床面や竪穴周辺に残した住居はほとんどなく、検出された範囲においての住居は人為的に廃絶され、雑器は持ち運ばれた可能性も考えられる

各竪穴式住居および掘立柱建物について述べていくことにする。住居・建物や関連する遺構の詳しい規模などは、一覧表を参照されたい。なお、住居検出・掘削の際、概ね北東・南東・南西・北西で区割りをし、北東から時計回りに１～４区と呼称した。

① SH－01～03

大河道の河岸付近に造成された３棟が切り合う竪穴式住居群である。はじめに中央のSH－02が造成され、それを一部切り込むかたちで一回り規模の大きなSH－01、03が南北に造成され、３棟とも主軸をほぼ北に向けている。

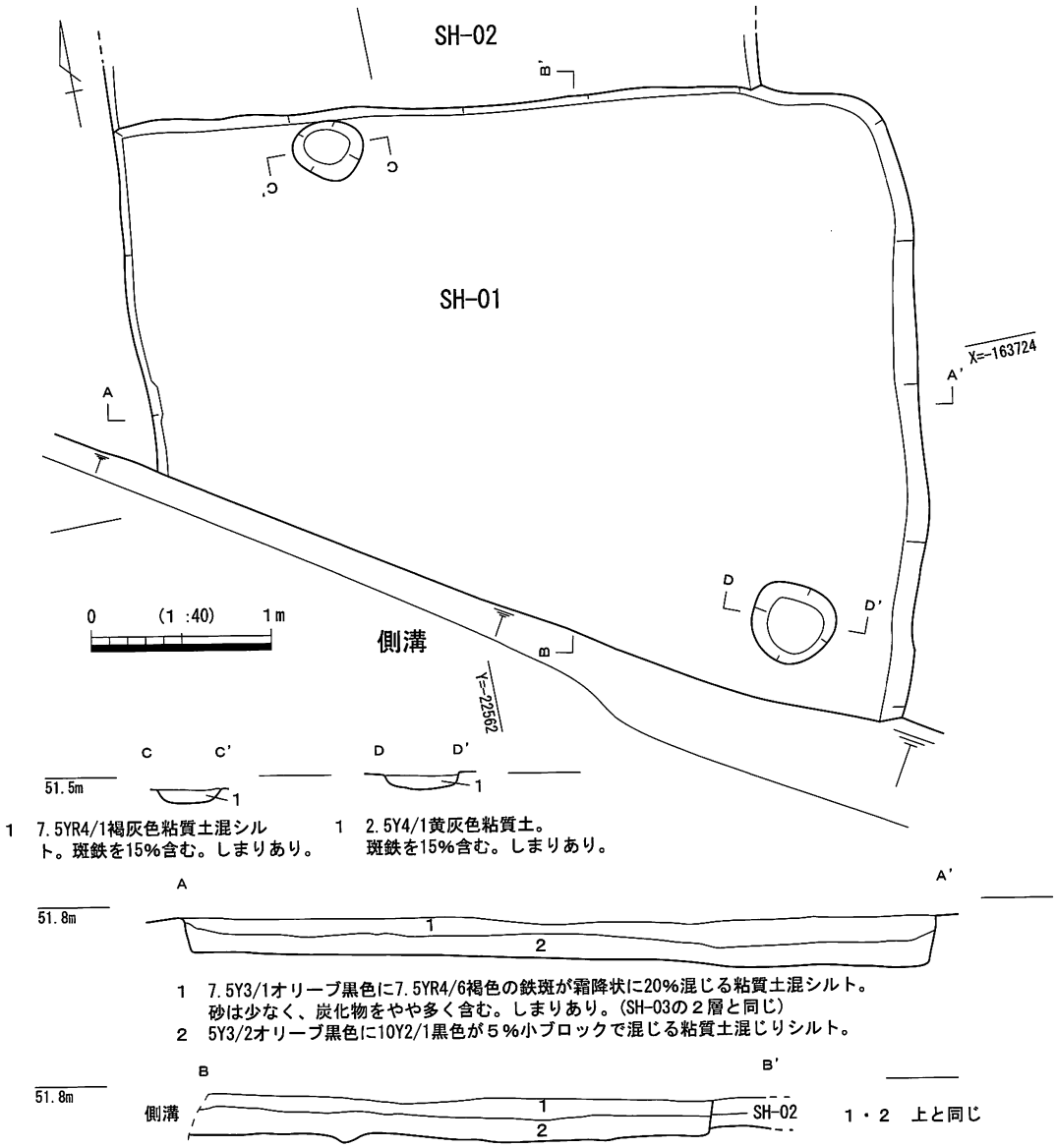
SH－03は平面歪な四角形を呈した住居である。最も長い南辺で約4.7ｍ、短い北辺で約3.2ｍを測る。床面の壁際３か所でピットが検出されたが、いずれも深さは浅く上屋を支えるためのものであっても、長期間支ええたものかどうかは不明である。周壁溝は、壁際を一巡している。この３棟の住居跡の中で、唯一張床が認められた。

SH－01は、平面方形を呈している。SH－02に切り込む約4.3ｍの北壁が唯一全て検出され、東壁は約3.5ｍまで残存している。北東角は隅丸方形をしているが、北西角はほぼ直角を呈している。これらから割り出すと、この建物は全体の3/2以上が調査区内で検出されているものと思われる。南東側と北西側の壁際でピットが検出されているが浅く上屋を長期間支えた柱のものとは直ちに断定はしにくい。南東壁際の一部分で周壁溝を検出した。

２棟に挟まれたSH－02は、東西最大幅約3.7ｍ、東壁の残存長は約2.75ｍを測る。検出された竪穴式住居のうち、最小規模である可能性がある。北東部に浅いピット一基を検出したが、SH－01の北西部で検出されたピット一基も位置的に見てこの住居に帰属する可能性もある。周壁溝は検出されなかった。

② SH－04

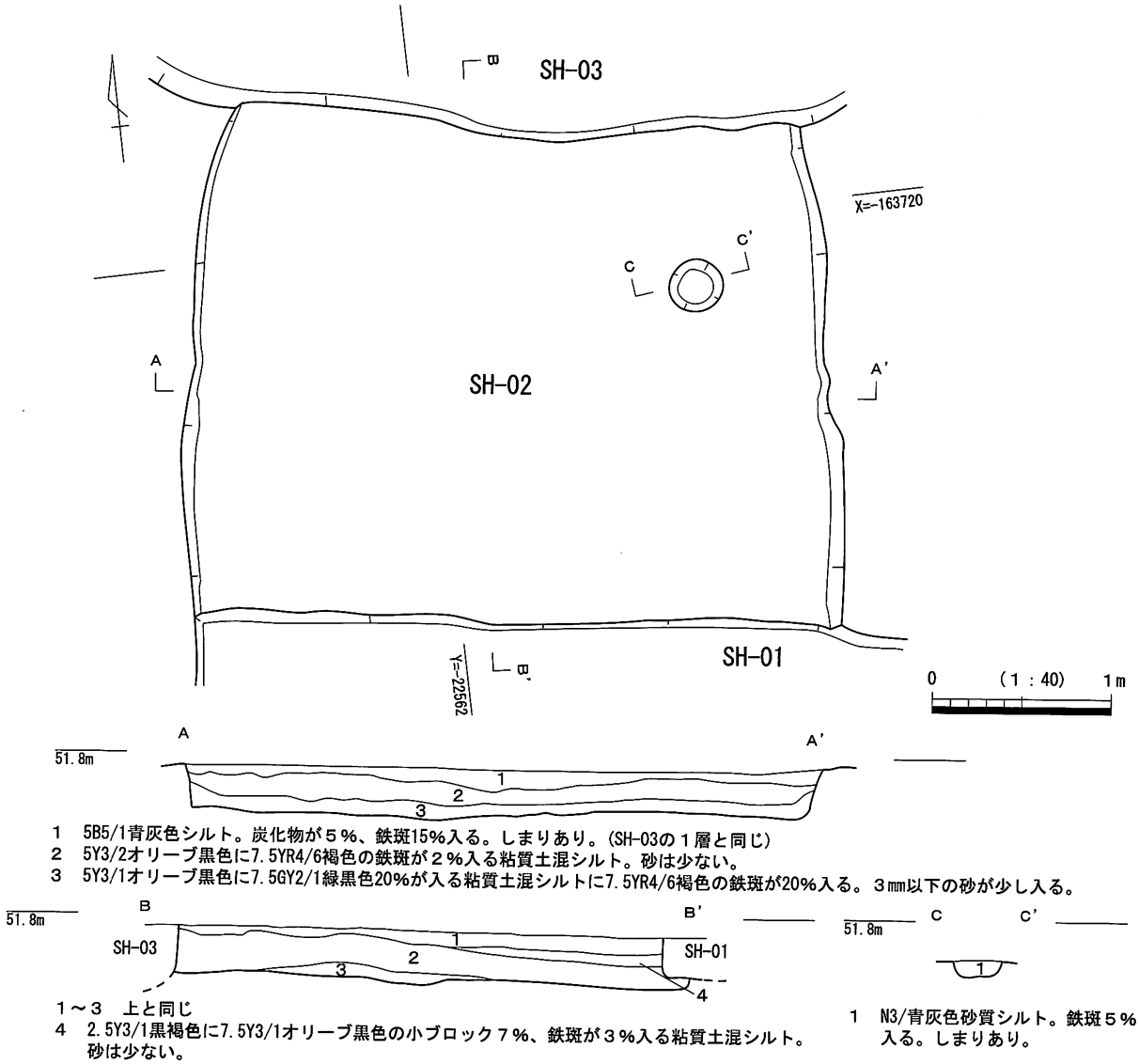
検出された竪穴式住居の中では比較的小型の住居である。東側付近はSH－05で切り込まれ、南側壁付近は大きく撹乱を受けている。完存している西側の壁は約3.35ｍを測り、北側の壁の延長も約3.0ｍまで測ることができる。中央部には整然と掘削された４基の柱穴が設けられており、柱間は南北方向で約1.3ｍの２列等間、東西方向で約1.5ｍの２列等間である。また西側壁を削りこむかたちで１本の溝状の遺構があり、住居西側に南北方向に掘削されたSD－02に繋がっている。２本の溝と住居との切り合い関係は不明で共存したものかどうかもはっきりしない。水害で南側壁部分や床、南北方向の土層観察用のベルトが崩れてしまったが、検出時にはSH－05、06で切り込まれた部分を除いて壁際床面に、断面Ｕ字形のごく浅い周壁溝が巡らされていた。張床は認められなかった。



第17図　SH-01平・断面図

③ SH － 05、06、13

調査区の南東寄りで検出された３棟切り合った住居跡群で、調査終了後、航空測量の図面と、水害前の遺構面の酸化が進行していない際に平板で略測した住居跡輪郭、竪穴内の柱穴の配列とを突き合わせて検討した結果、平面長方形２棟と方形１棟の、計３棟の住居跡が切り合って存在すると解釈した。最初に小規模な長方形の住居であるSH － 13が造成され、次いで規模を大きくした長方形のSH － 06がSH － 13をほぼ踏襲するかたちでこのやや北寄りに造成、最後にSH － 06や13、そして前述の04をで切り込むかたちで平面方形のSH － 05が造成されたという経緯を辿ることができる。平面長方形のSH － 13とSH － 06は、柱穴が竪穴長軸に２基１列のみ並ぶことが特徴的で、市内での調査事例としては95年に礒野北遺跡での布留１式期のも間は約1.6ｍを測り、SH － 06は長辺約4.9ｍ、短辺約3.9ｍ、柱間は約1.9ｃｍを測る。周壁溝は、２棟とも認められなかった。

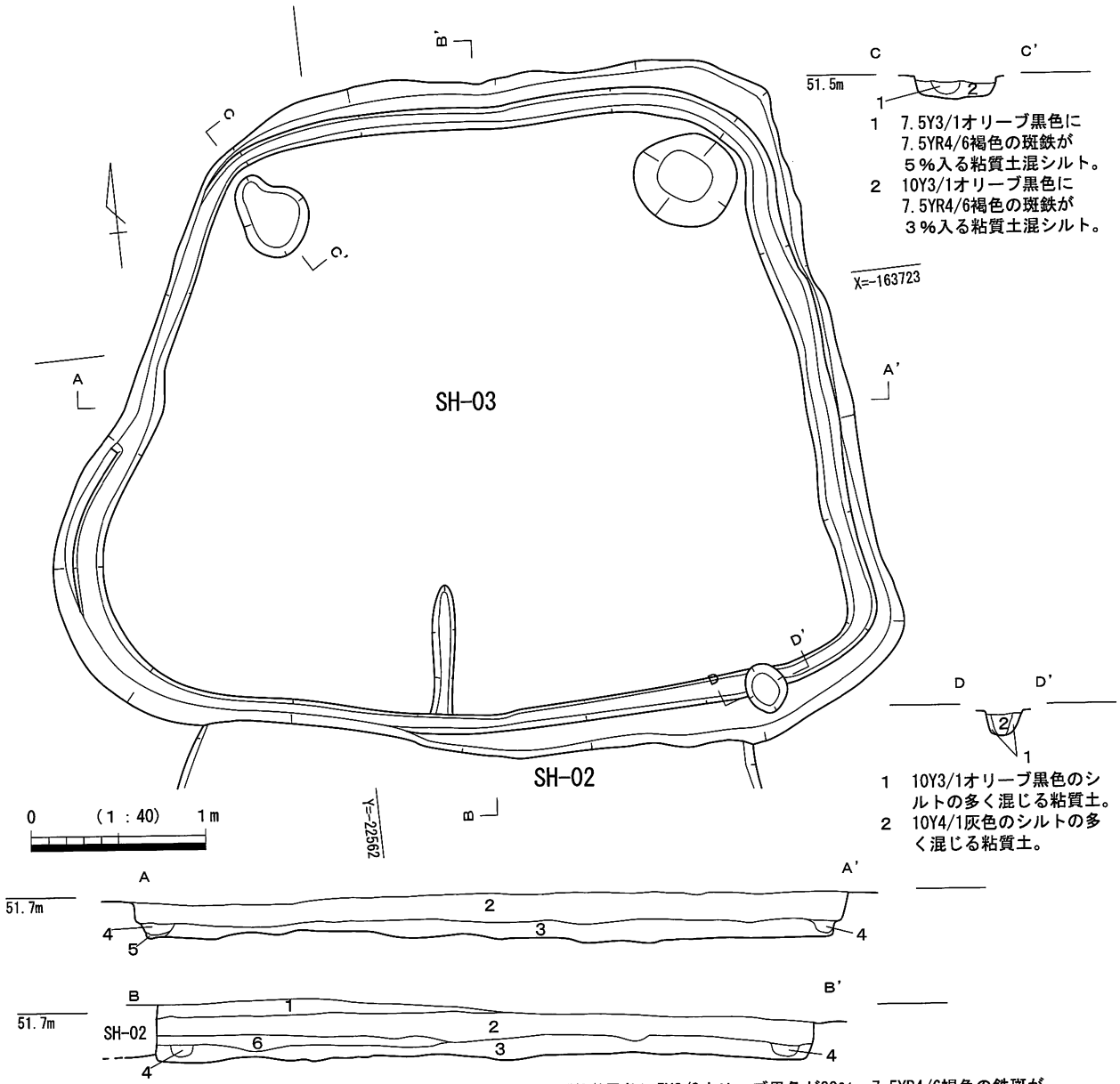


第18図 SH-02平・断面図

SH－05の柱間は、東西約2.5ｍの２列等間、南北は約2.3ｍの２列等間を測り、竪穴は東西方向には約６ｍを測り、南北方向は約6.1ｍまで測ることができ、当遺跡検出の竪穴式住居の中では最も平面規模の大きな住居になる可能性がある。周壁溝は、竪穴の北西や南西の一部分で検出された。またSH－05の北辺に、これに切られた舌を呈する深さ約0.14ｍの浅い溝SD－03が存在するが、用途や周辺の住居との関係は不明である。

④SH－07、12

調査区の最も南東部で検出された住居跡である。SH－07は全体の約半分を検出できた。北辺は約4.3ｍを測る。竪穴北東角は、隅丸方形をしているのに対し、北西角はほぼ直角を呈している。SH－07の北壁には不整形の東に延びる溝状の遺構が付くが、用途は不明である。07の床面から約1.7ｍを測る柱穴２基を検出しており、４基の柱穴を持つ平面方形を呈する住居と思われる。また後述するが周壁とみられる一部分が検出されているSH－12については、本章の最後に述べるように、集落跡全体の建物の新旧関係を建物の方向や切り合い関係から解釈しようとする場合、住居と決定するには慎重さを要する。周壁溝、張床は、いずれからも検出されなかった。



1 5B5/1青灰色シルト。炭化物５%、鉄斑15%入る。しまりあり。(SH-02の１層と同じ)
2 7.5Y3/1オリーブ黒色に7.5YR4/6褐色の鉄斑が霜降状に20%混じる粘質土混シルト。砂は少なく、炭化物をやや多く含む。しまりあり。(SH-01の１層と同じ)
3 5Y2/1黒色に5Y2/3オリーブ黒色が20%、7.5YR4/6褐色の鉄斑が７%入る粘質土混シルト。砂を少量含む。
4 7.5Y2/2オリーブ黒色シルト混粘質土。砂、鉄斑は少ない。
5 5Y2/2オリーブ黒色シルト混粘質土。砂を少量含み鉄斑は少ない。
6 7.5Y5/1灰色シルト。２mm以下の砂、鉄斑を３%ずつ含む。しまりあり。

第19図　SH-03平・断面図

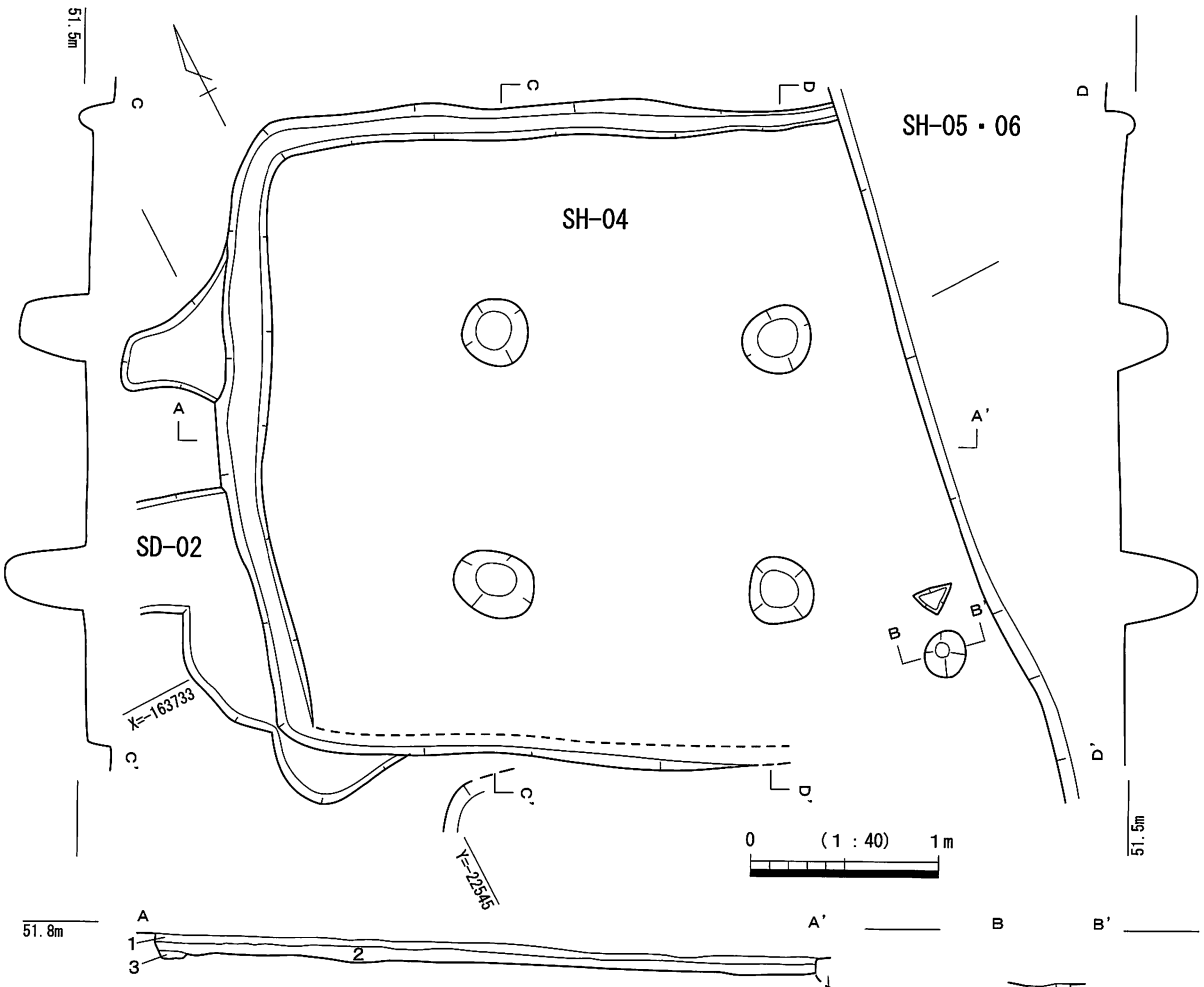
⑤ SH－08

大河道の河岸付近で、SH－01～03とともに検出された、平面方形の住居跡である。竪穴は、北辺が約5.05ｍを測り、西辺が約4.7ｍを測る。当調査区において、唯一他の住居とは切り合わず、完全な姿で検出された住居跡である。また遺構面からの竪穴の深度も、検出された住居跡の中では最も深いものである。

床面では整然と柱穴４基が穿たれ、うち北西側の１基には添柱の柱穴が付随する。柱間は南北方向は約2.15ｍの２列等間で、東西方向も北辺が約2.30ｍ、南辺が約2.25ｍとほぼ等間である。周壁溝は検出時、北東部分を除いて一巡していたが、南西側は水害で崩落した。北側床面の一部で、土層断面の観察の結果張床が認められた。東壁付近の周壁溝からは、小型の砥石が１点出土している。

⑥ SH-09、10

調査区の北辺で検出された、２棟が切り合う住居跡である。おそらく２棟とも、平面は方形を呈し



1　7.5Y3/1 オリーブ黒色に 2.5Y3/1 黒褐色が大きなブロックで 45%混じる粘質土混シルト。
　　3㎜以下の砂と炭化物を少量含む。
2　10Y3/1 オリーブ黒色に 2.5Y3/2 黒褐色が大小のブロックで 40%混じるシルト混粘質土。
　　2㎜以下の砂をやや多く含む。
3　5Y3/2 オリーブ黒色に 7.5Y2/1 黒色が大きなブロックで 40%混じる砂混粘質土混。

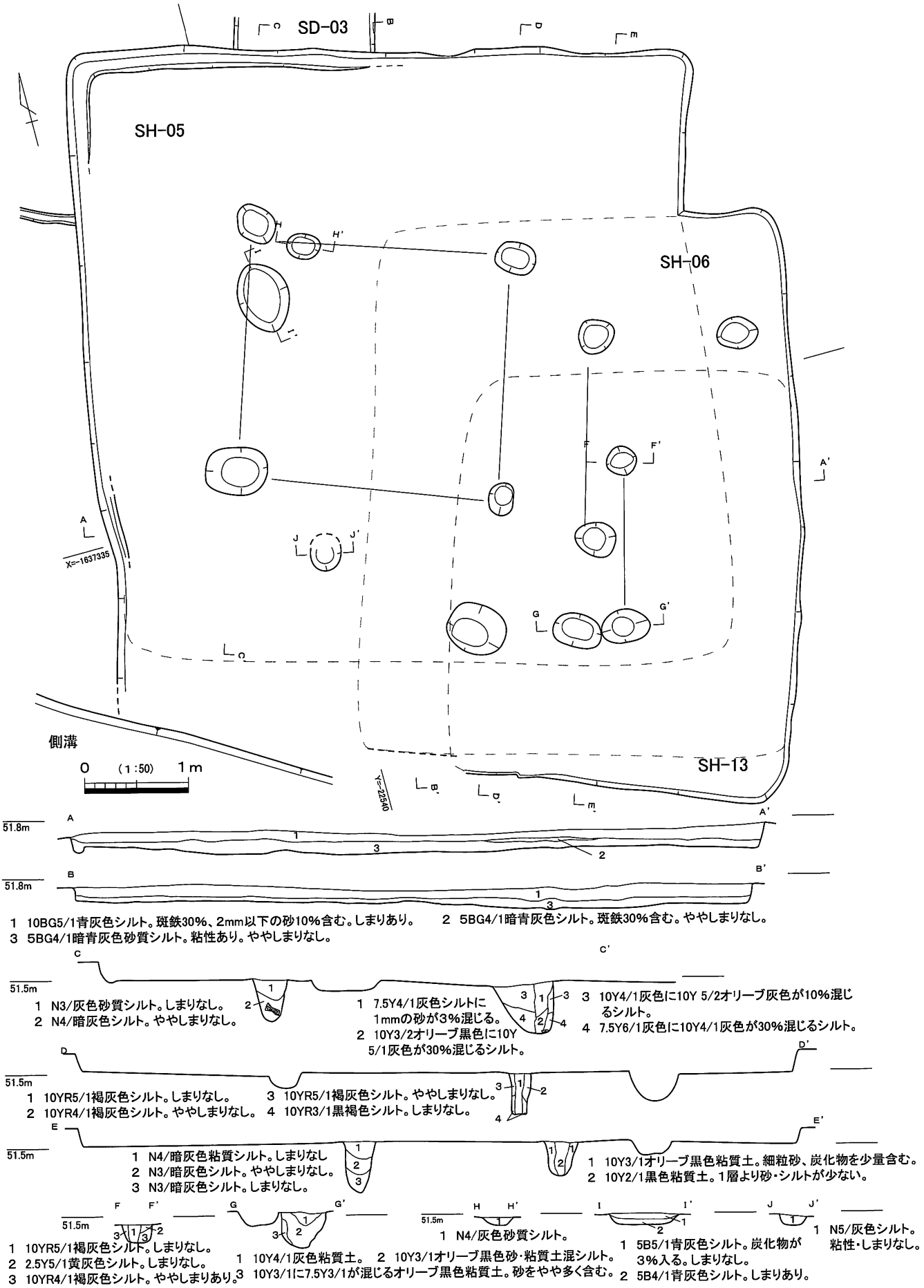
1　10YR5/1 褐灰色シルト。しまりなし。
2　10YR5/1 褐灰色シルト。しまりややあり。
3　10YR3/1 黒褐色シルト。しまりなし。

第 20 図　SH-04 平・断面図

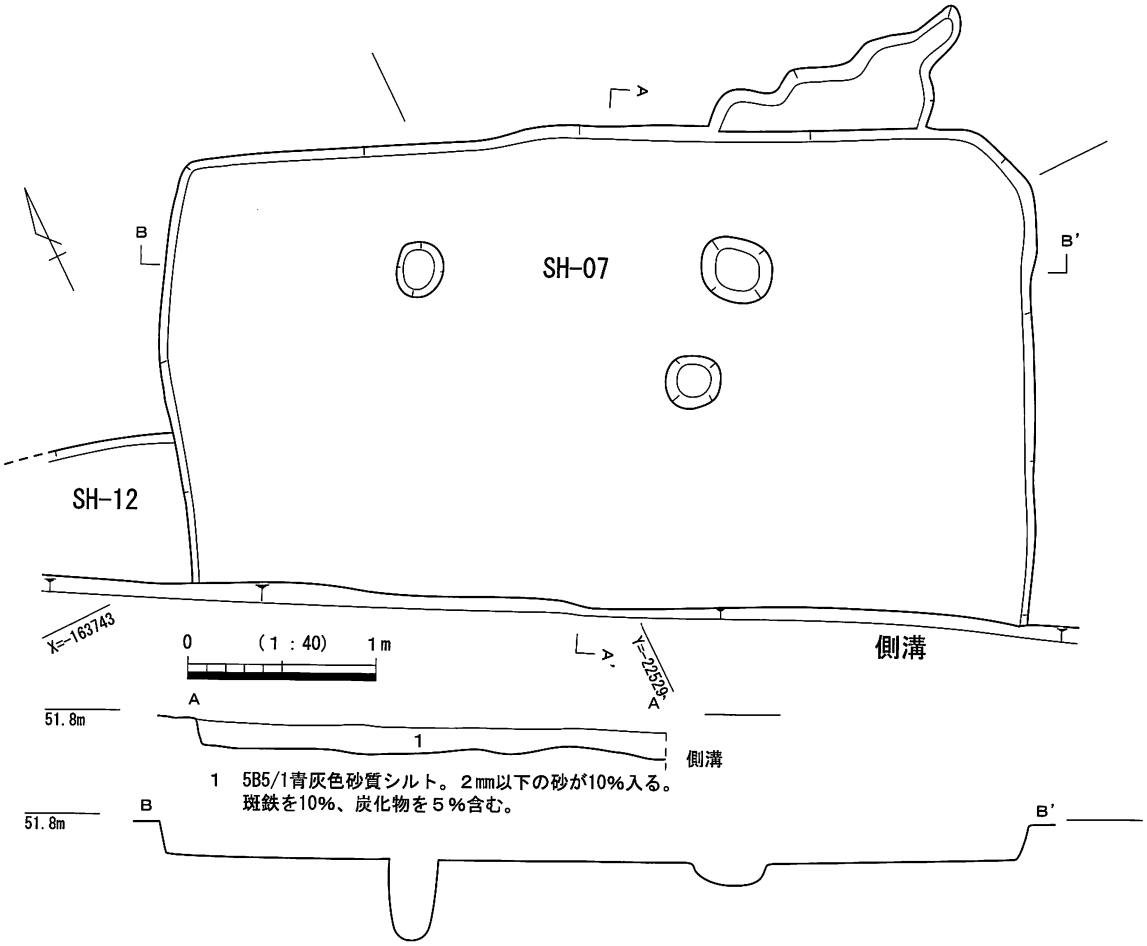
ていると考えられる。周壁溝は SH－10 の南西隅付近で検出された。土層断面の観察により、SH－10 には張床が造成されていたことが確認できたが、湧水が著しく平面的に張床の範を確することは困難であった。床面から２基の柱穴とピット１基が検出されており、柱間は約 1.75 ｍである。柱穴やピットは、SH－10 の周壁溝の位置から SH－09 に帰属するものである。SH－09 の南東側の床面から炭化物の薄い堆積が認められた。竪穴の規模は、SH－09 が南側の壁が約 4.9 ｍを測り、東側の壁は調査区側溝まで約 3.5 ｍまで計測できる。SH－10 の西壁は調査区側溝まで約 2.5 ｍを測り、南壁は竪穴南西隅から周壁溝端部まで約2.2ｍを測る。SH－09の竪穴南西角のみ隅丸方形を呈している。

⑦ SH－11

調査区の北東で検出された住居跡で、北側の周壁が調査区側溝にかかるほかは、ほぼ全体が検出された状況である。平面は歪な円形を呈している。床面では４基の柱穴が検出され、柱間は東西方向北辺が約 2.1 ｍ、南辺が約 1.7 ｍ、南北方向の西辺が約 1.85 ｍ、東辺が約 2.0 ｍと、竪穴が不整形な平面をしているだけに、柱間も不揃いになっているようである。竪穴の長径は約 4.85 ｍで、北半でのみ周壁溝が確認できた。当住居も床面で湧水が著しかったが、少なくとも周壁溝の確認できた範囲に張床が造成されていたことが、土葬断面観察により判明した。北西側の柱穴付近の床面に浅い土坑



第21図 SH-05・06・13平・断面図



第22図 SH-07平・断面図

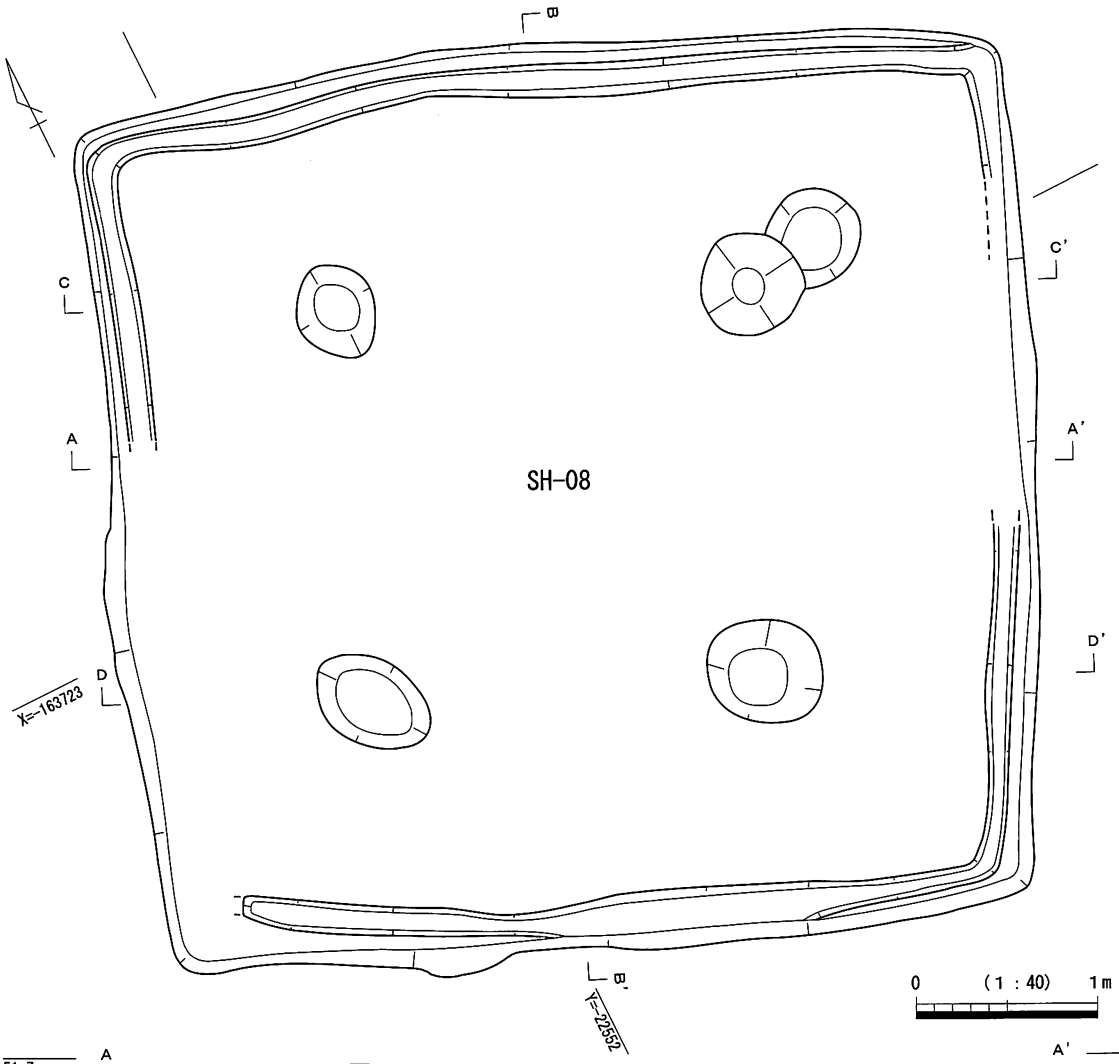
状の落ち込みが認められたが、用途は不明である。

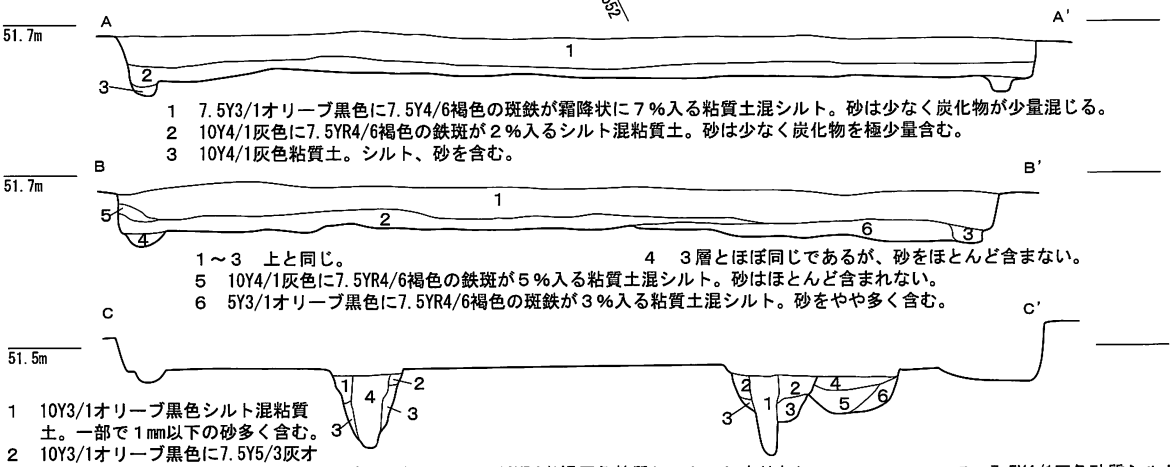
また住居跡南側で、当住居造成に当たって切り込まれた大型の土坑・SK－09が検出されている。破損した土器が数多く出土したため、ゴミ穴のようなものであったと推定される。各住居跡に直接帰属する遺物が少ない中で、SK－09の土器は住居造成の時期を考察する上で参考にできる資料となろう。

⑧SB－01

当調査区において唯一確認された掘立柱建物跡である。主軸はN4°Eの方位をとる。建物角にあたる北西の柱穴（SP－15）と北東の柱穴（SP－26・27）に、一回り規模を小さくした柱穴が建物の外側部分に付随していることから、建物隅柱に添柱を持った建物であったと考えられる。このため、同じように少し小さな柱穴を持った南東の柱穴（SP－24）も外側に添柱を付随させた隅柱とみられるため、この掘立柱建物は二間四方の総柱の高床式倉庫風の建物であったと推定できる。

柱間は東西で二間とも約1.5mの等間、南北も約1.4、1.45mでほぼ等間とみてよいであろう。建物は、東西約3m×南北約2.7mの規模で、柱の掘り方は平面円形や隅丸方形など不揃いである。柱穴の周辺からは、ここで復元した建物に関わらないピットも復元されており、複数回の建て替えがなされたことが推測できる。





1　7.5Y3/1オリーブ黒色に7.5Y4/6褐色の斑鉄が霜降状に７％入る粘質土混シルト。砂は少なく炭化物が少量混じる。
2　10Y4/1灰色に7.5YR4/6褐色の鉄斑が２％入るシルト混粘質土。砂は少なく炭化物を極少量含む。
3　10Y4/1灰色粘質土。シルト、砂を含む。

1～3　上と同じ。
4　３層とほぼ同じであるが、砂をほとんど含まない。
5　10Y4/1灰色に7.5YR4/6褐色の鉄斑が５％入る粘質土混シルト。砂はほとんど含まれない。
6　5Y3/1オリーブ黒色に7.5YR4/6褐色の斑鉄が３％入る粘質土混シルト。砂をやや多く含む。

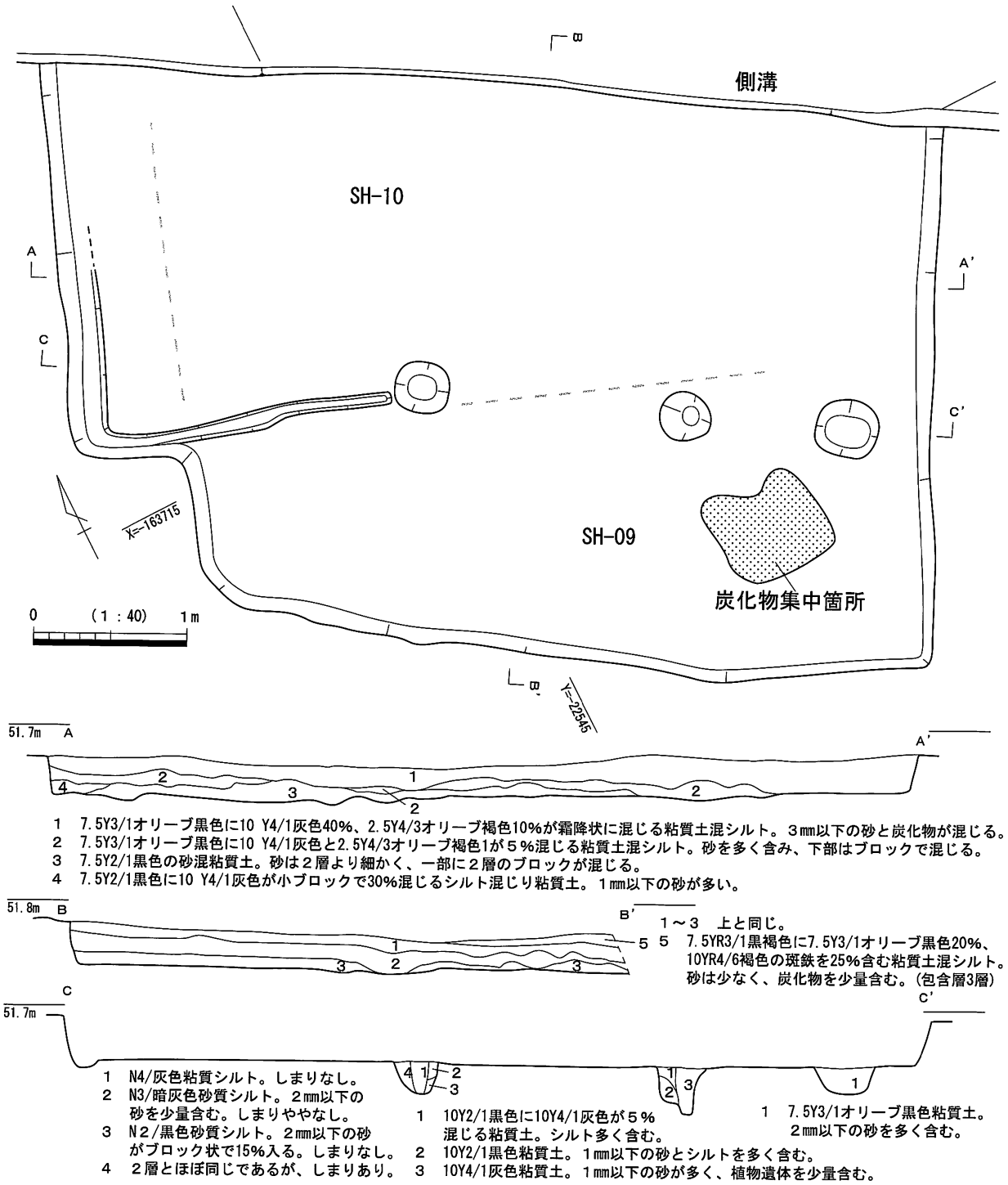
1　10Y3/1オリーブ黒色シルト混粘質土。一部で１mm以下の砂多く含む。
2　10Y3/1オリーブ黒色に7.5Y5/3灰オリーブ色が３％入るシルト混粘質土。砂は少ない。
3　10Y3/1オリーブ黒色シルト混粘質土。砂は少ない。
4　10Y4/1灰色粘質土。上部は砂がやや多く、植物遺体を含む。

1　10YR4/1褐灰色粘質シルト。しまりなし。
2　10YR4/1褐灰色砂質シルト。３mm以下の砂を少量含む。
3　7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト。２mm以下の砂を含む。
4　7.5Y4/1灰色砂質シルト。ややしまりなし。
5　7.5Y4/1灰色砂質シルト。ややしまりなし。
6　7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト。ややしまりなし。

1　N5/灰色シルト。しまりなし。粘性あり。

1　7.5Y4/1灰色粘質土。砂を少量含む。
2　10Y4/1灰色シルト混粘質土。少ない。
3　10Y4/1灰色粘質土。砂、シルトは少ない。

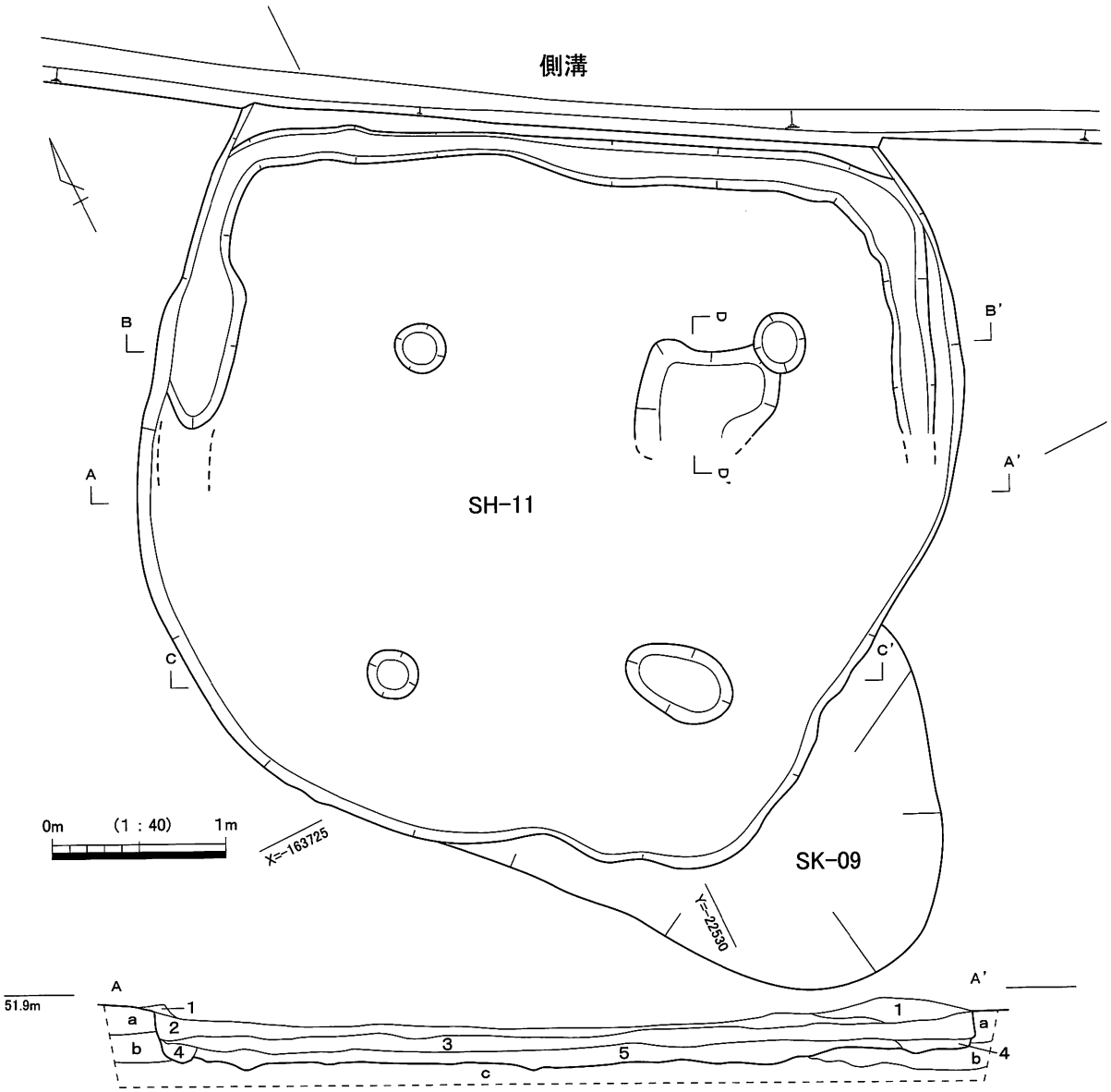
第23図　SH-08 平・断面図



第24図 SH-09・10平・断面図

以上、1次調査区微高地上の個々の建物跡についてみてきた。ここで建物の配置から読み取れることを述べておくことにする。

検出された建物は北辺を真北に向けるもの(SH－01、02、03、05、06、13、12、10、SB－01)、北辺を北東方向に向けるもの(SH－04、07、08、09、11)に分けることができる。これは建物群が前後2期に亘ってそれぞれ違った規格で、計画的に造成されたことを示していると言えよう。建物群の中で、方向の違う建物同士が、前後関係を明確にして切り合っているのがSH－04と05である。北辺を真北に向けるSH－05が北東に北辺を向ける04を切り込んでいるため、これから北辺を真北に向ける建物群が後から企画造成されていったと見てよいであろう。なお北東を向くSH－07が切り込む



1 5B5/1青灰色シルト。鉄斑15%、炭化物が3%入る。しまりややなし。
2 7.5Y5/1灰色シルト。斑鉄を5%、炭化物が5%含む。
3 5Y5/1灰色シルト。炭化物が層状のブロックで15%入る。しまりなし。
4 7.5Y4/1灰色粘質シルトに2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトがブロック状で3%入る。しまりなし。
5 7.5Y4/1灰色粘質シルトに2mm以下の砂が少し混じる。しまりなし。

a 10GY5/1青灰色シルト。鉄斑15%含む。しまりややなし。
b 5Y5/1灰色粘質シルトに2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトがブロック状に10%入る。しまりあり。
c 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト。2mm以下の砂が15%入る。しまりあり。

1 7.5Y2/1黒色の粘土質混シルト

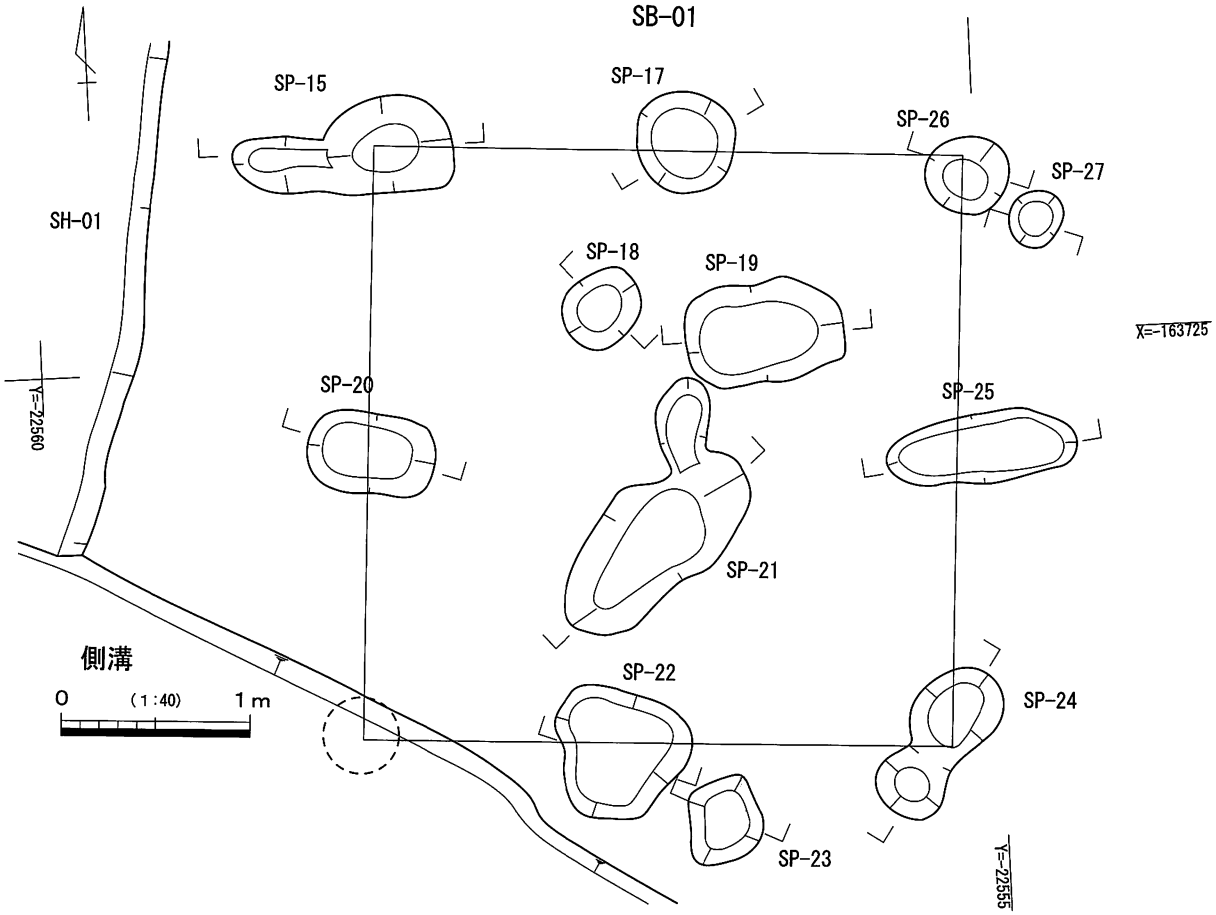
1 10Y4/1灰色に7.5Y2/1黒色が大きなブロックで40%混じる粘質土混シルト。
2 10Y4/1灰色粘質土。シルトが多く、砂は極少量混じる。
3 10Y3/1オリーブ黒色粘質土。炭化物が極少量混じる。
4 7.5Y3/1色オリーブ黒色粘質土。シルトが多く、砂は極少量混じる。

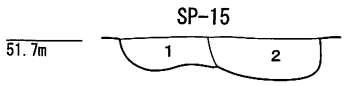
1 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト混粘質土。炭化物を少し含む。
2 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土。

1 10Y4/1灰色シルト多量混粘質土にN3/暗灰色炭化物。
2 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土。ごく細かい砂、雲母、炭化物を少し含む。

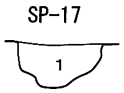
1 7.5Y2/1黒色に5Y3/1黒色の炭化物を含むブロックが5%入る粘質土混シルト。

第25図 SH-11 平・断面図

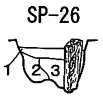




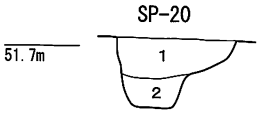
1 5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 10YR3/4 暗褐色斑鉄がスジ状に 15%砂と２～３㎜の砂礫が１%混入。
2 7.5Y2/1 黒色シルトに 7.5YR5/6 明褐色斑鉄が粒状に５%と２㎜の砂礫が１%混入。



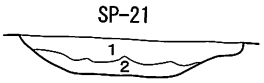
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 7.5YR3/4 暗褐色斑鉄と１㎜の砂礫が１%ずつ混入。



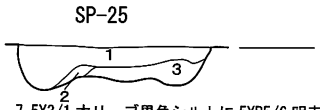
1 10Y3/1 オリーブ黒色シルトに２㎜の砂礫が１%混入。
2 7.5Y2/1 黒色シルト（粘質）に 10YR4/6 褐色の斑鉄が 10%混入。
3 10Y2/1 黒色シルト（粘質）に 10YR4/6 褐色の斑鉄が３%と２㎜の砂礫が１%混入。



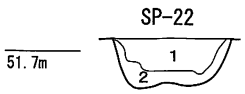
1 N3/ 黒灰色シルトに 7.5YR4/6 褐色斑鉄が１%混入。
2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト（粘質）に 7.5YR4/4 褐色斑鉄が３%混入。



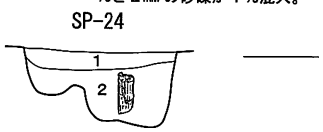
1 10Y3/1 オリーブ黒色シルトに 7.5YR4/2 灰褐色斑鉄がスジ状に５%混入。
2 5Y2/1 黒色シルトに 7.5YR4/4 褐色斑鉄がスジ状に３%混入。



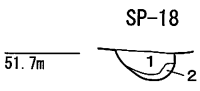
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 5YR5/6 明赤褐色斑鉄が１%と２㎜の砂礫が混入。
2 5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 5YR5/6 明赤褐色斑鉄が５%と２㎜の砂礫が３%混入。
3 10Y3/1 シルトに 7.5YR5/6 明赤褐色斑鉄が５%と２㎜の砂礫が１%混入。



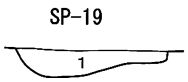
1 5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 7.5YR4/4 褐色斑鉄がスジ状に 15%混入。
2 7.5Y4/1 灰色シルトに 7.5YR4/2 灰褐色斑鉄がスジ状に７%混入。



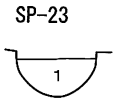
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 7.5YR4/3 褐色斑鉄が５%と２㎜の砂礫が１%混入。
2 N3/ 暗灰色シルト（粘質）に 7.5YR3/4 暗褐色斑鉄が３%混入。しまりなし。



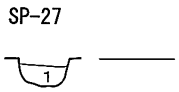
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 5YR3/4 暗褐色斑鉄が３%混入。
2 2.5Y3/1 黒褐色シルトに 5YR3/4 暗褐色斑鉄が３%混入。



1 10Y3/1 オリーブ黒色シルトに 7.5YR4/3 褐色斑鉄がスジ状に３%混入。

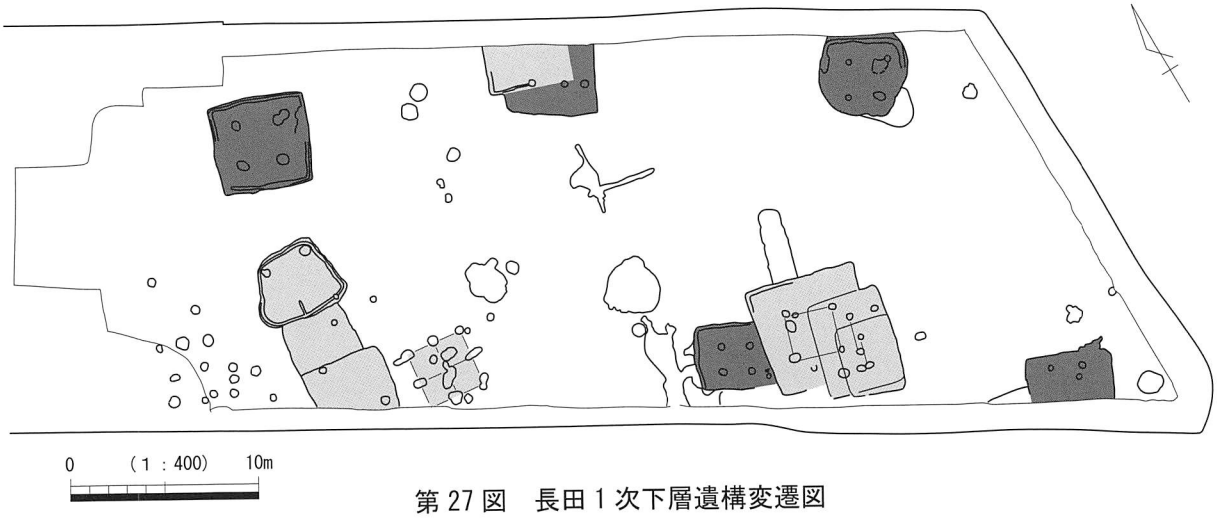


1 7.5Y4/1 灰色シルトに 10YR4/4 褐色斑鉄がスジ状に５%混入。

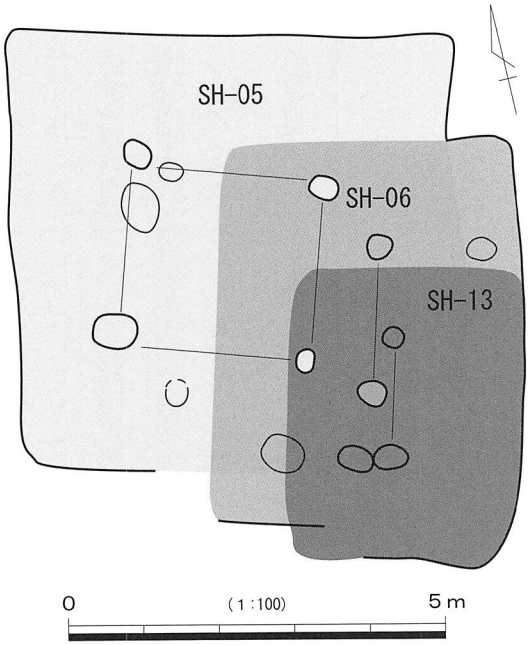


1 10Y3/1 オリーブ黒色シルトに２㎜の砂礫が１%混入。

第 26 図　SB-01 平・断面図



第 27 図　長田 1 次下層遺構変遷図



第 28 図　SH-05・06・13 復元図

SH－12 としている遺構は、住居として扱うには上記と矛盾するため慎重さを要する。このため一部分しか見えない SH－12 は、例えば SH－05 が切り込む SD－03 のような浅い溝である可能性を含んでおきたい。真北に向ける群は、北東に向ける群が完全に廃棄された後に造成されていったかどうかまでは同一遺構面の検出となった今回の調査結果だけでは把握しがたい。SH－01、02、03 であるが、いずれも規模が小さいこと、しっかりとした柱穴が認められないこと、不定形な SH－01 が建てられた経緯があることなどから、最初から居住以外の短期間に使用する目的で建築された一群の可能性が高いとみられる。

特に SH－01 の北西～北側の大河道河岸では、桃と思われる核が遺構面上から多量に検出されており、付近で水辺に関わる祭祀が盛んに行われたことが想像できる。このことから、３棟は特に祭祀との関わりを持つ指摘もできよう。近接する総柱の掘立柱建物 SB－01 も、これら３棟と関連した機能を果していたのかもしれない。

また、SH－01、02、03 の西側には 15 基のピット (SP－01 ～ 14、30) が点在しているが、建物として並ぶものは確認できない。しかし特異な SH－01、02、03 が建て替わっていった場所に隣接すること、大河道の河岸から斜面上部という不安定な場所であること、柱痕を残しているものも存在することから、祭祀と何らかの関わりを持つ施設、構造物のものと思われる。

そして具体的な集落が機能した時期についてであるが、住居跡床面に土器など生活雑器の遺物が人為的に据えられた様な跡がほとんど認められなかったため、集落の遺構を覆っていたいわゆる遺物包含層や次に述べる集落と共存していた大河道からの出土遺物から分析を行う方法を採らざるを得なかった。結果、おおよそ５世紀の第２四半期にはすでに集落は廃絶したものと捉えている。出土した遺物の項で改めて述べて行くことにしたい。

第２表　長田遺跡１次調査竪穴式住居・掘立柱建物法量表

遺構名	平面形	規模（m）		柱穴数	柱間（m）	周壁溝	張床	備考
SH-01	方形	北辺 4.3	東辺 3.5 以上	2	—	南東壁一部	×	全体の 2/3 以上を検出。柱穴は２点とも浅い。
SH-02	方形	東西 3.7	南北 2.8 以上	1	—	×	×	南北が SH-01 と SH-03 に切られる。
SH-03	歪な四角	南辺 4.7 北辺 3.2	南北 4.0 東西 4.9	3	—	壁際一巡	○	柱穴はいずれも浅い。
SH-04	方形	西辺 3.4 北辺 3.0 以上	南北 3.5 以上 東西 3.0 以上	4	南北 1.3 東西 1.5	壁際一巡か	×	東側を SH-05 に切られ西側は大きく撹乱を受ける。柱穴は等間隔。
SH-05	方形		南北 6.1 東西 6.0	4	—	北西・南西の一部	×	SH-06 を切る。住居内で柱穴以外に６基ピットを検出。
SH-06	長方形	長辺 4.9 短辺 3.9		2	—	×	×	柱穴が１列に２基並ぶ住居。SH-13 を切る。
SH-07	方形	北辺 4.3	南北 2.9 以上 東西 4.7	2	—	×	×	全体の約 1/2 を検出。SH-12 を切る。
SH-08	方形	北辺 5.1 西辺 4.7	南北 5.1 東西 5.6	5	南北 2.6 東西 2.3	北～南辺まで一巡	×	柱穴のうち１基は北東側柱穴の添柱。柱間は等間隔。
SH-09	方形	南辺 4.9 東辺 3.5 以上	南北 3.6 以上 東西 5.5	2	東西 1.8	×	×	SH-10 を切る。柱穴のほか１基の小穴、南東側床面で炭化物の薄い堆積を検出。
SH-10	方形か	西辺 2.5 以上 南辺 2.2 以上	南北 2.5 以上 東西 2.2 以上	2	—	西～南辺の一部	○	SH-09 に切られる。
SH-11	歪な円形	長径 4.9	南北 4.1 東西 4.9	4	南北 1.9 ～ 2.0 東西 1.7 ～ 2.1	北半で方形に巡る	○	柱間やや不揃い。張床についても周壁溝が確認できた範囲でのみ確認。
SH-12	方形か		南北 0.8 以上 東西 2.2 以上	—	—	×	×	SH-07 に切られる。溝の可能性あり。
SH-13	長方形	長辺 4.3 短辺 3.3		2	—	×	×	柱穴が１列に２基並ぶ住居。
SB-1	二間四方		南北 2.7 東西 3.0	6	南北 1.4 ～ 1.5 東西 1.5	×	×	

（２）　大河道

微高地の西側を南西から北東方向に向かって流れる河道である。１次調査区と３次調査区の境界で、東西に分断されるように検出された。

大河道は既に述べた上層の小区画水田の存在した期間まで洪水を繰り返し、深度が浅く、河幅が縮小されながらも灌漑用水路として機能していき、大河道が最後に起こした洪水で、小区画水田と関連施設もろとも埋もれる経緯をたどる。

調査では、古墳時代の集落跡が完全に埋もれた後に埋もれていった、規模も縮小した比較的新しい大河道の覆土を１次では河道とし、遺物は河道の上、下層に分けた。３次調査区では比較的新しい時期の覆土を検出したが、便宜上 SD － 01 とした。

また１次調査区側の集落が廃れた後、大河道を埋めていった土層の調査については、河道斜面に堆積した覆土を大きく上下２層に分けて掘削することとし、河道中央寄りに堆積した上層を斜面１層、河岸側の斜面に堆積した上層を斜面３層、河道中央寄り下層に堆積した層を斜面２層、河岸側斜面３層の下層に堆積した層を斜面４層と呼ぶことにした。各層から多量の遺物が出土したが、層毎に出土した多量の遺物のうち図化できたものを第 46 ～ 56 図で示した。３次調査区の範囲の大河道は、河道として扱う比較的新しい覆土での埋没していた状況で、西側の河岸からの斜面にはわずかに古墳時代、集落廃絶後の覆土が被っている状況であった。

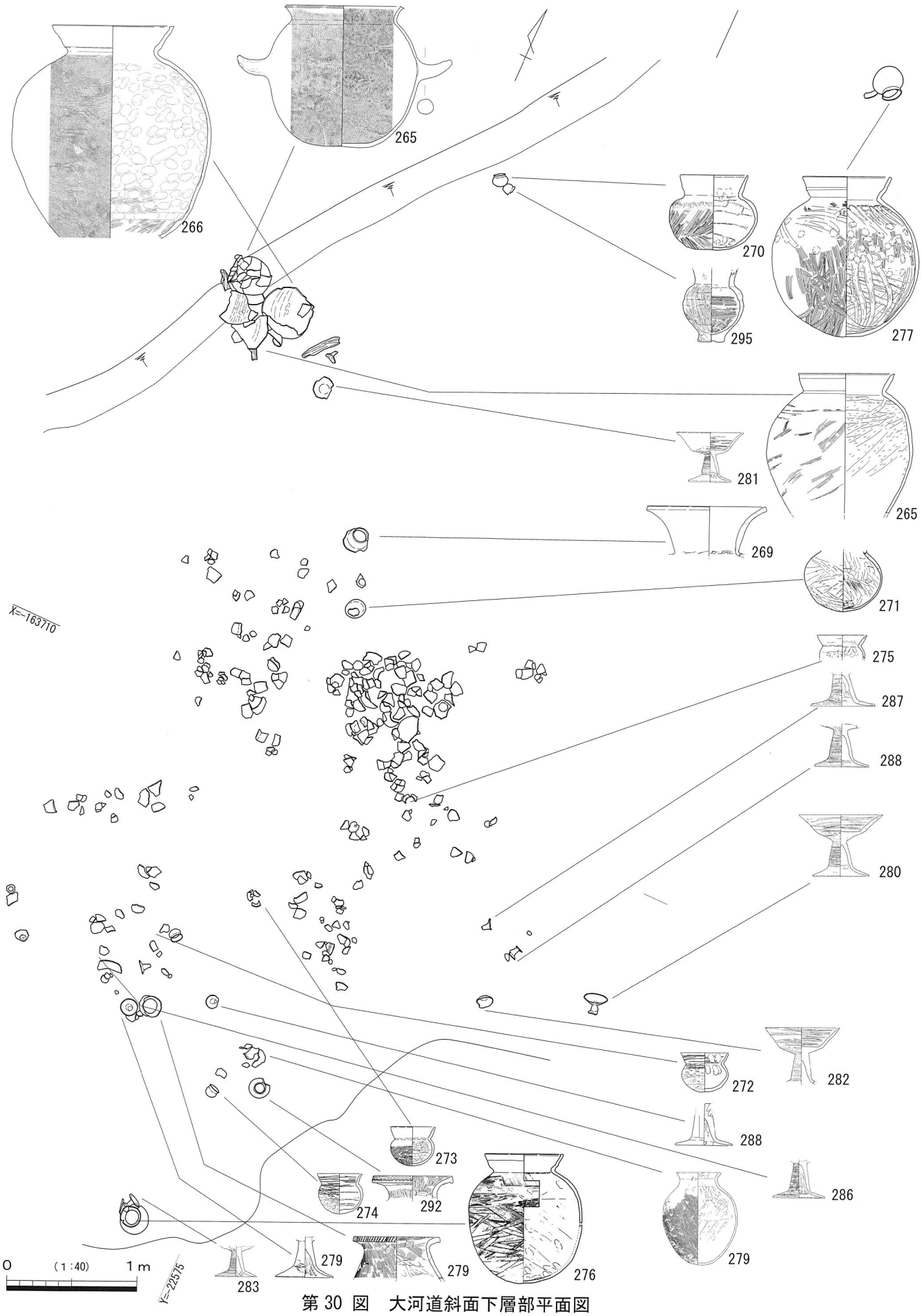
集落側の河岸は河底に向かってなだらかに下っていく状態であったが、これとは対照的に、３次調査区内の対岸においては、微高地上面から河岸を垂直に切り込むような造成がなされていた。この造成はおそらく運河などとして活用するために、大河道の西側を深くした浚渫工事の痕跡とみられる。

古墳時代、集落が機能していた時期の河幅は最大約 28 ｍにも及び、微高地の集落検出面からの深さは、2.5 ｍ以上にもなる。

１次調査区河岸側下層の斜面４層を取り除いたところ、河岸からの斜面の傾斜が緩く平坦になった地形が現れた。平坦地は分析の結果植物遺体からなる層で、茶褐色をして固くよくしまり安定した様相を呈しており、集落を載せたシルトから成る微高地の下にもぐりこんでいる。この時点で、掘削し

1　2.5Y3/1 に 10YR3/2 が霜降状に入る黒褐色のシルト。2㎜ 以下の砂が多く、部分的に層状に混じる。
2　2.5Y4/2 暗灰黄色のシルト混砂層に 2.5Y3/1 黒褐色シルトが 20%層状のブロックで混じる。
3　2.5Y3/1 黒褐色の粘質土混シルトに 2.5Y4/2 暗灰黄色砂が 20%マーブル状に混じる。リンが少量含まれる。土器の混入あり。
} 大河道斜面３層
4　2.5Y3/1 黒褐色の粘質土混シルトに 2.5Y4/2 暗灰黄色のシルト混砂が 40%層状のブロックで混じる。
5　2.5Y5/2 暗灰黄色の砂（1㎜ 以下）と 5Y3/1 オリーブ黒色シルトがマーブル状に混じる。中央で金雲母を多く含む。
} 大河道斜面４層
6　2.5Y5/2 暗灰黄色の砂（1㎜ 以下）と 5Y3/1 オリーブ黒色シルトが薄い層状に 15%混じる。
7　5Y5/2 灰オリーブ色と 5Y5/1 灰色の砂に 5Y3/1 オリーブ黒色シルトが 30%マーブル状に混じる。
} 大河道斜面４層下層
8　10Y2/1 黒色粘質土ブロックと 5Y4/1 灰色の砂（1～5㎜ 以下）が混じる。
9　10Y3/1 オリーブ黒色と 7.5Y4/1 灰色がブロック状に混じるシルト質粘質土。一部に砂礫（5㎜ 以下）がブロックで少量入る。
10　10Y2/1 黒色のシルト混粘質土。砂（3㎜ 以下）と炭化物、植物遺体を多く含む。
11　7.5Y3/1 オリーブ黒色の粘質土。シルトが多く、砂（2㎜ 以下）のブロックが多く混じる。
12　2.5Y5/2 暗灰黄色の砂（2㎜ 以下）に 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土が薄い層状で３%混じる。
13　2.5Y5/2 暗灰黄色の砂。2㎜ 以下の細龍砂に３～５㎜ 程度の粗い砂が層状で混じる。

第 29 図　大河道平・断面図



第 30 図　大河道斜面下層部平面図

た大河道の深度は、集落の遺構検出面から2.5ｍの深さにおよび危険なため、平坦地の肩からさらに河道の中央部への調査掘削は断念した。

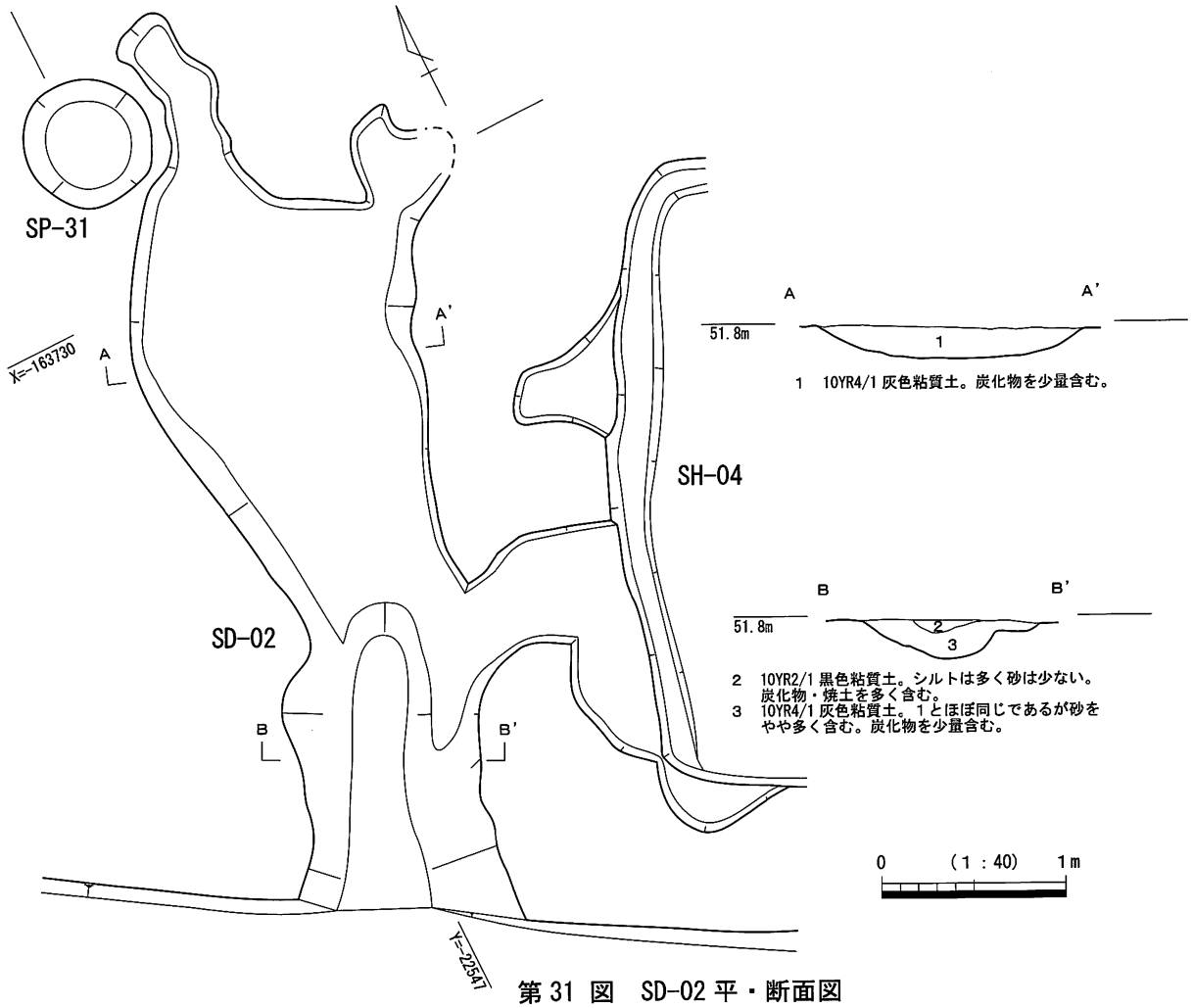
この平坦地上面で、ローリングを受けていないものを多く含む数多くの土器片の散布が認められた(第30図)。土器群は、完形のものがまったく認められないこと、対岸の3次調査区ではこのような状況が認められなかったことなどから、今回の調査で検出された集落が機能していた際、集落側東岸から投棄されたものがかなり占められていると考えられる。住居跡床面からは、人為的に据え置かれたような土器などがほとんど無かったため、集落の時期を特定するための手掛りになると思われる。

覆土からの湧水は、調査の全期間を通じて枯れることなく滾々と湧き出し、さらに河道の規模から察するに、集落が存在した当時は相当豊富な水量が流れていたことが推定できる。遺構には竪穴式住居が数多く見つかったのにも拘わらず井戸らしいものが検出されておらず、大河道の水は、飲料水や灌漑など幅広く活用されたことも想像に難くない。集落の造成に際しては、大河道が脇を流れる微高地であったからこそ当地が選定されたことが、自然に解釈できよう。桃と考えられるバラ科植物の種子、滑石製勾玉や有孔円盤の遺物などから、水辺での祭祀が盛んに行われていたことを推察しうるが、ここからも大河道と集落に結びつきが相当強かったことを理解できる。

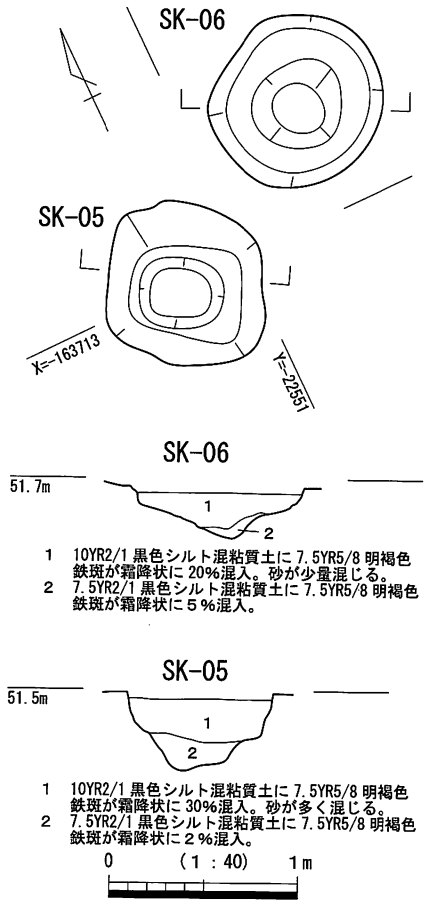
（３） その他の遺構

１）１次調査区

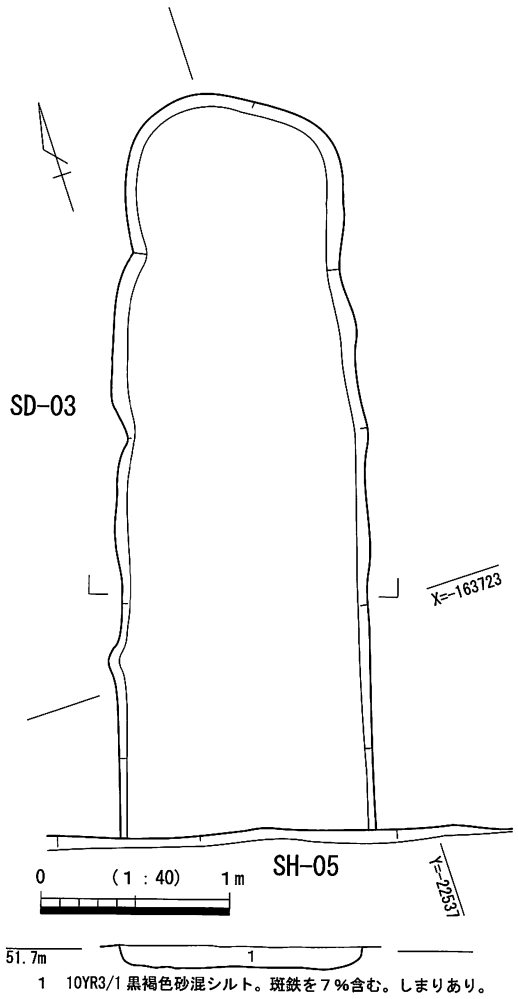
SH－07、12の周辺では、土坑２基(SK－03、04)、ピット１基が検出され、SH－08とSH－09、10の間には、比較的小規模な土坑２基(SK－05、06)と、ピット３基(SP－33～35)が検出された。ま



第31図 SD-02平・断面図



第 33 図　SK-05・06 平・断面図



第 32 図　SD-03 平・断面図

た SH － 11 の南東隅では、これに切られた SK － 09 が検出された。

SK － 05　平面は隅丸方形を呈し、底はさらに深く、2段に掘削されている。東西約 0.86 m、南北約 0.96 m を計測する。検出面からの深さは約 0.41 m を測る。

SK － 06　平面はほぼ円形を呈し、こちらも SK － 05 同様、底は 2 段に掘削されている。直径は 0.96 m、検出面からは約 0.27 m の深さを測る。SK － 05、06 は、２段掘削され、近接していることから、建物等の柱穴であった可能性があるが、今回の調査区内で実証することはできなかった。

この他の土坑 ピット・溝については以下の表を参照されたい。

第３表　長田遺跡１次調査溝法量表（単 m）

遺構名	地区	平面形	全長	幅	深さ	埋土	出土遺物
SD-02	I・J-6	楕円形	5.0 以上	1.6	0.2	1:10YR4 ～ 2/1 灰～黒色粘質土。炭化物・焼土を多く含む。 2:10YR4/1 灰色砂混粘質土。炭化物を少量含む。	土師器片（壷・甕・高杯）

第４表　土庫長田１次土坑法量表（単位 m）

遺構名	地区	平面形	東西幅	南北幅	深さ	埋土	出土遺物
SK-01	H-5	不定形	2.4	2.2	0.2	1：N3/ 暗灰色シルトに斑鉄７%と２㎜砂礫が１%混入。 2：10YR3/1 黒褐色シルトに斑鉄７%と２㎜砂礫が１%混入。	土師器片（甕・高杯）
SK-02	I-7	不定形	3	2.8	0.1	5Y3/2 オリーブ黒色に 2.5Y3/2 黒褐色がブロックで 30%混じるシルト混粘質土。	土師器片　（壷・高杯）
SK-03	L-3	円形	1.3	1.3	0.3	10Y4/1 灰色粘質土混シルト。	風倒木痕
SK-04	M-2	不定形	0.1	1.0	0.1	10Y4/1 灰色粘質土混シルト。	風倒木痕

第５表　土庫長田１次小穴法量表（単位ｍ）

遺構名	地区	平面形	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	埋土	出土遺物
SP-01	G-10	楕円形	0.4	0.3	0.1	1：N6/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが７％入る。 2：N5/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが 20%入る。	
SP-02	G-10	円形	0.5	0.5	0.2	1：N4/ 灰色砂混シルト。 2：N4/ 灰色砂混シルト。粘性あり。	
SP-03	G-10	円形	0.7	0.7	0.3	1：N4/ 灰色砂混シルト。黒色シルトブロック７％入る。 2：N3/ 暗灰色砂混シルト。（柱痕） 3：N3 ～ 2/ 灰～黒色砂混シルト。	
SP-04	G-10	楕円形	0.6	0.5	0.3	1：N4/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが１％入る。 2：N5/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが５％入る。	
SP-05	G-10	楕円形	0.5	0.3	0.4	N5/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが 20%入る。	
SP-06	G-10	楕円形	0.5	0.4	0.4	1：N5/ 灰色砂混シルト。炭化物含む。 2：N5/ 灰色シルト。しまり・粘性あり。 3：N5/ 灰色シルト。黒色シルトブロックが７％入る。	
SP-07	G-10・11	円形	0.7	0.7	0.4	N5/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが 20%入る。	
SP-08	H-10	楕円形	0.4	0.3	0.2	1：N4/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが１％入る。 2：7.5Y4/1 灰色シルト。しまりあり。	
SP-09	H-10	円形	0.4	0.4	0.4	1：N5/ 灰色砂混シルトに黒色シルトブロックが３％入る。炭化物具組む。（柱痕） 2：N5/ 灰色砂多量混シルト 3：7.5Y4/1 灰色シルト。黒色シルトブロック７％入る。	
SP-10	H-10	楕円形	0.5	0.4	0.2	1：5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。 2：10Y4/1 灰色粘質土。シルトやや多く含む。 3：7.5Y2/1 黒色粘質土。シルトやや多く含む。（柱痕？）	
SP-11	H-10	楕円形	0.5	0.4	0.3	1：N4/ 灰色砂混シルト。炭化物含む。（柱痕？） 2：１層より砂を多く含む。 3：N5/ 灰色シルト。黒色シルトブロックが７％入る。	
SP-12	H-10	円形	0.6	0.5	0.3	N5/ 灰色シルト。黒色シルトブロックが７％入る。	
SP-13	H-10	楕円形	0.3	0.2	0.5	1：10YR5/2 灰黄褐色シルト。 2：N5/ 灰色シルト。黒色シルトブロックが７％入る。	
SP-14	G-10	円形	0.4	0.4	0.3	1：5Y4/1 灰色シルト混粘質土。 2：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土。 3：2GY3/1 暗オリーブ灰色シルト質粘質土。	柱
SP-16	H-8	円形	0.3	0.3	0.3	1：N3/ 暗灰色シルトに斑鉄が 10%混入。 2：5Y4/1 灰色シルトに斑鉄５％と３mm 以下砂礫が１％混入。	
SP-28	H-7	円形	0.4	0.4	0.3	1：7.5Y2/1 黒色シルト混粘質土に斑鉄７％と２mm 以下砂礫２％混入。 2：10Y2/1 黒色シルト混粘質土に斑鉄５％と３mm 以下砂礫が１％混入。	
SP-29	H-7	楕円形	0.7	0.6	0.4	1：7.5Y2/1 黒色シルト混粘質土に斑鉄が７％と２mm 以下砂礫が２％混入。 2：7.5Y2/1 黒色シルトに斑鉄７％と４～５mm 砂礫 10%混入。	土師器細片（甕）
SP-30	F-10	円形	0.4	0.4	0.2	7.5GY2/1 砂混シルト	
SP-31	I-6	楕円形	0.7	0.7	0.3	1：5Y3/1 オリーブ黒色に斑鉄が 20%混じるシルト混粘質土。 2：5Y2/ １黒色粘質土。砂が多く混じる。 3：7.5Y2/1 黒色砂混粘質土	
SP-33	G-7	楕円形	0.6	0.4	0.3	1：N4/ 灰色砂混シルトに斑鉄が７％入る。粘性あり。 2：N3/ 暗灰色砂質シルト。粘性あり。	土師器片（壷）
SP-34	G-7	楕円形	0.4	0.3	0.3	1：N4/ 灰色砂混シルトに斑鉄が７％入る。 2：N3/ 暗灰色砂質シルト。	土師器細片
SP-35	G-7	楕円形	0.7	0.6	0.2	1：N4/ 灰色砂混シルト斑鉄が７％入る。粘性あり。 2：N3/ 暗灰色砂質シルト。	土師器細片、焼土塊

2）3次調査区

続いて3次調査区で検出された大河道以外の遺構について述べることにする。

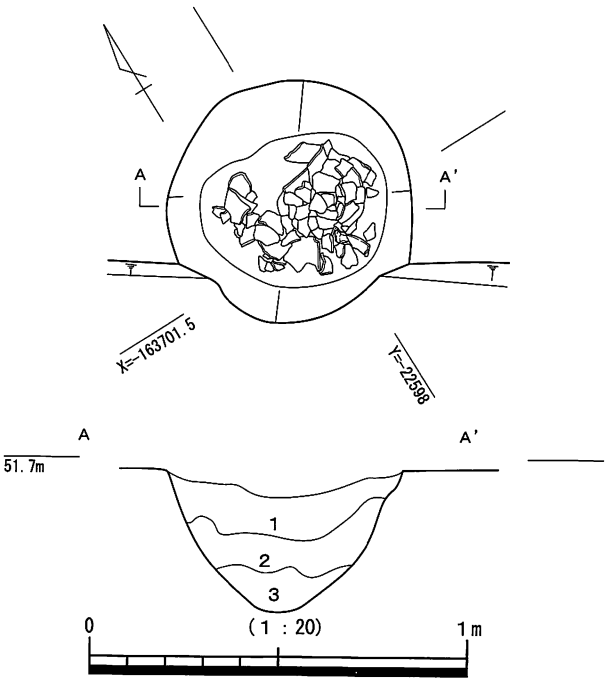
大河道西岸に広がる微高地を刻んで造成された河道群が中心であり、造成当初は大河道と同時に存在したものと考えられる。

SD－03　大河道の流れていく方向とは逆に、南西から北西方向に向かって蛇行するかたちで検出された河道である。微高地上の検出面から河底最深部まで深さは1.9m余りに及ぶ。壁面については、底付近は緩やかに傾斜し、肩付近に至ってはほぼ垂直に立ちあがっていることから、人為的に造成された河道であることが窺える。この河道は流水によって運ばれてきた土砂により徐々に埋没していった様子が窺えたが、その埋没過程において壁面には手を加えず覆土だけを掘削して造成した並行する2条の溝が存在したことが認められた。

SD－04　大河道（SD－01）の流水を真北方向に分水するために掘削されたと思われる溝である。大河道から分岐する部分より長さ約12.5mにわたって検出された。幅は最大約4.8mを測る。この溝の底と大河道の底部分のとの深度の差は、分岐部分において約1.1mを測る。西側を蛇行するSD－03とは、最も近接する部分において長さ約3.6m、最大幅約1.4mほどの小溝を掘削することで結ばれている。この溝も流水によって運ばれてきた土砂で埋もれたが、その後覆土だけを掘削した溝が存在したことが確かめられている。

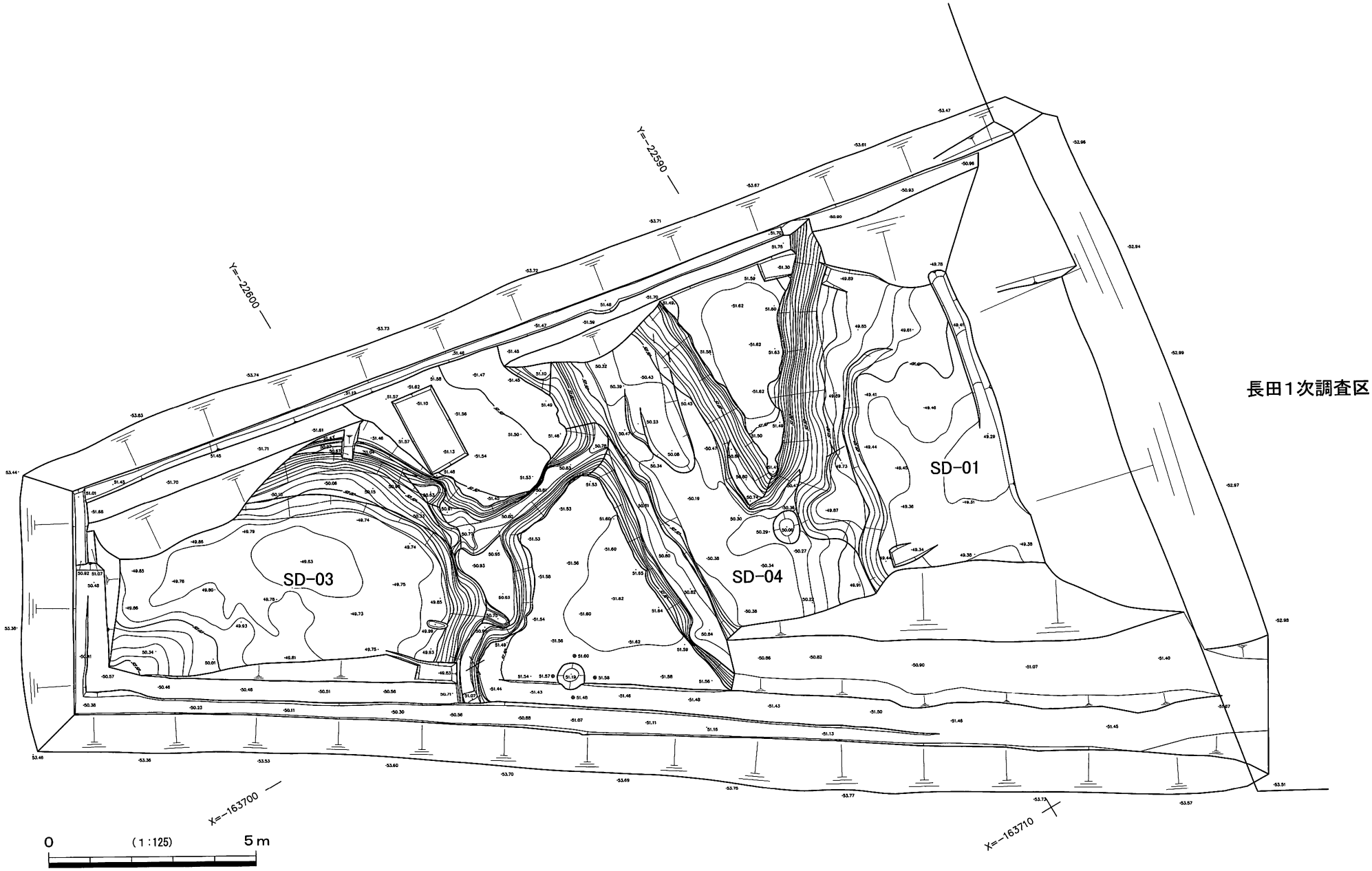
また第36図で図示するように埋没過程において、覆土がSD－02と2股に分かれた素掘溝に掘削されたことが確かめられた。

SP－01　調査区の南端付近、SD－03、04に中州状に挟まれた微高地上に存在する。平面はほぼ円形を呈し、東西約0.65m、南北約0.62mを計測する。覆土内から甕3点、壷1点、計4点分の土器が出土した。

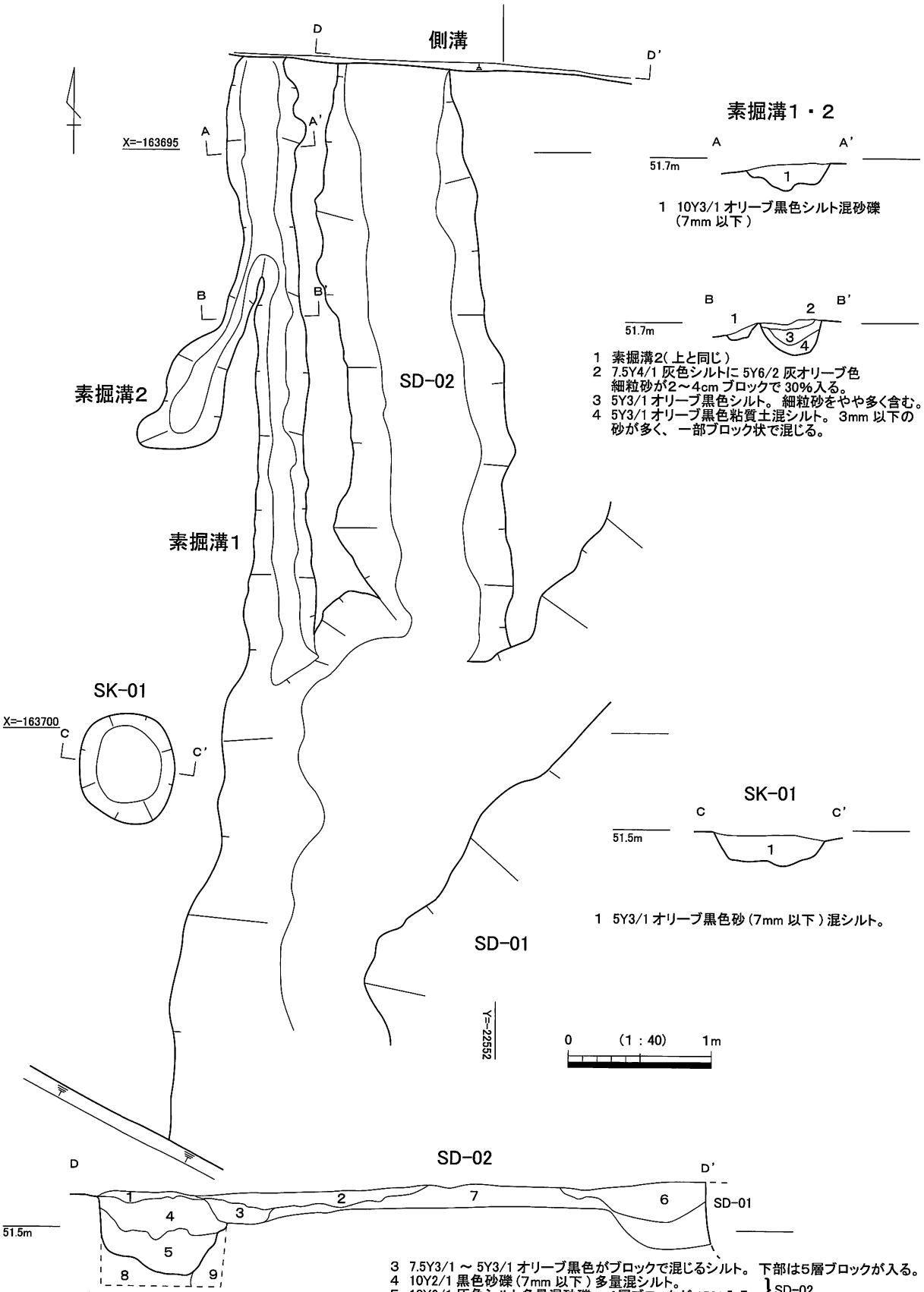


1　5Y3/1オリーブ黒色の砂礫（7mm以下）混シルト。
2　5Y2/1黒色砂（2mm以下）混シルト。粘質土混シルトブロックが20%混じる。
3　5Y3/1オリーブ黒色の砂（1mm以下）混シルト。

第34図　SP-01平・断面図



第35 図　長田3次遺跡調査区平面図



第 36 図 SD-02、SK-01、素掘溝1・2平・断面図

4、出土遺物

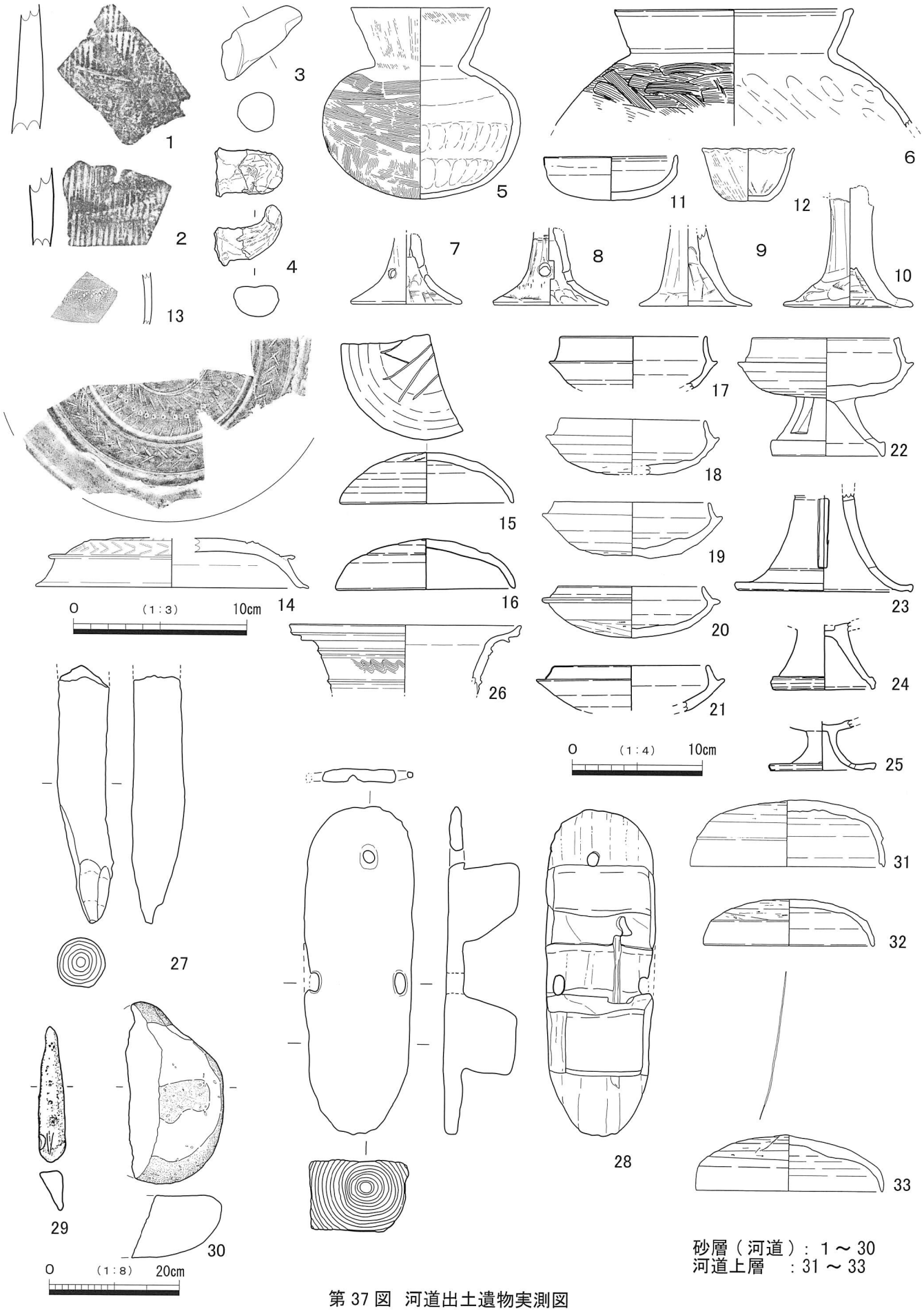
(1) 長田1次調査出土遺物

1) 上層遺構出土遺物

河道　河道は下層の大河道と同一遺構であるが、各層位から出土した遺物の新旧から河道と大河道で区別した。また、河道の上層にあたる砂層については、河道の上層の洪水砂層であることから河道出土遺物とした。

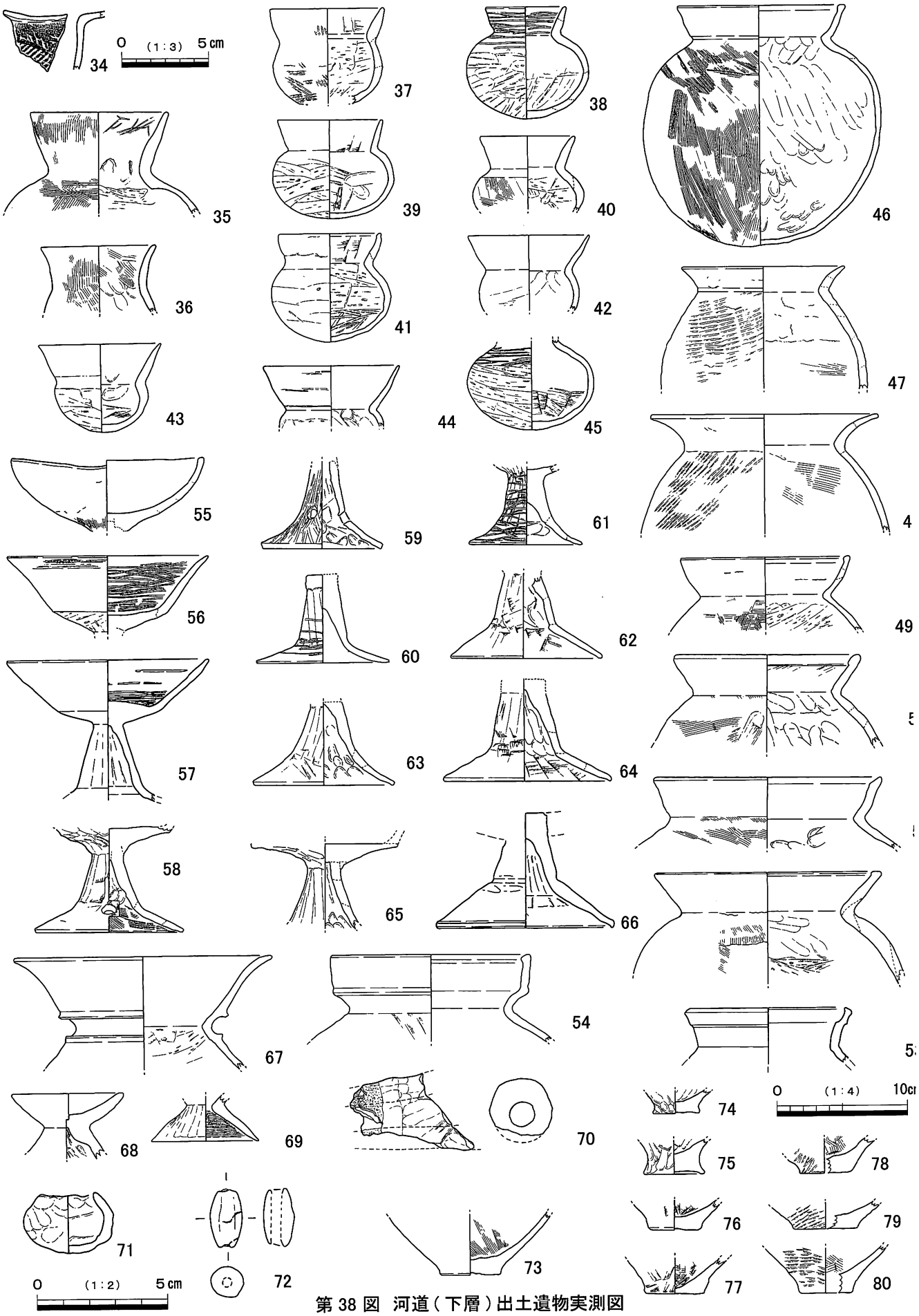
砂層　韓式系土器片、土師器壺・甕・高杯・杯、須恵器杯蓋・杯身・高杯、木製品、石製品が出土した。1・2は韓式系土器片で、甕・鍋・甑の体部片と考えられる。3・4は甑または鍋の把手で、韓式土器の影響を受けた可能性が高い。5はほぼ完形の土師器直口壺。6は土師器で甕口縁～体部が残存する。7～10は土師器高杯脚部で、7・8は脚部中位に透孔をもち、10は脚柱部が中実である。11は土師器杯、12は小形の土師器鉢。5～9は古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。13～26は須恵器で、13～16は杯蓋、17～21は杯身、22～25は高杯、26は壺口縁部と考えられる。13は外面に、口縁部と天井部の屈曲部に突帯状の段が設けられ、天井部で、帯状に列点文と指突文が凹線に区切られ施される。天井部の中心部分は欠損しているが、ツマミが付いていた可能性もある[1)]。14･26は古墳時代中期（TK47型式）、17･18･22は古墳時代後期（MT-10型式）、15･16･19～21･23～25は古墳時代後期（TK-10型式）に比定できる。27･28は木製品で､27は丸太の先端を削って成形した杭、28は下駄で、平面が楕円形を呈する左足用一木造り三孔二歯の連歯下駄である。残存長より男性用と推定される。29・30は石製品。29は安山岩製と考えられる石棒、30は安山岩製石皿である。

河道　多数の遺物が出土したが、そのうち、上層から須恵器、下層から土師器・土製品・木製品・石製品を図化した。上層からは須恵器（31～33）が出土したが、3点とも杯蓋で、31は天井部に1本の直線状のヘラ記号が施される。古墳時代後期（MT-10～TK-10型式）に比定できる。下層からは、韓式系土器（34）、土師器（35～69）、土製品（70～72）、弥生土器（73～84）、木製品（85・86）、ガラス石製品（88～91）が出土した。34は韓式系土器の甕頸部片で、外面に矢羽タタキが施される。35・36は土師器壺で、35は直口壺、36は長頸壺で、2点とも古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。37～45は小型丸底壺で、38・39・41・43は口縁から底部まで、37・40・42・44は口縁から体部、45は体部から底部が残存する。37・39・40・41は球状の体部に斜上方へのびる口縁がつくもの、38は球体の体部にやや短く上方へ伸びる口縁がつくもの、42・43は半球～球状の体部に斜上方へ大きく開く口縁部がつくものである。46～54は甕で、46は口縁～底部、47～54は口縁～体部が残存する。46・49～52は球状の体部にやや内湾する口縁部がつき、端部は内面へ肥厚する布留式甕。47・48は口縁が外反し、体部はやや寸胴でタタキが施されることから弥生土器Ⅴ様式の影響を残すものと思われる。53はやや直立気味の口縁部に段を設けて広い端面状をなす。54は有段口縁壺で、口縁部が直立することから、吉備系のものである可能性がある。51・52は古墳時代中期（布留式新相）、46・49は古墳時代前期（布留式古相）、47・48は古墳時代初頭（庄内式新相）に比定できる。55～66は土師器高杯で、55・56は杯部のみ、57は杯～柱状部、58・65は杯～脚部、59～64・66は脚部が残存する。55は椀形、56・57は有稜高杯である。58・65は杯底部～脚柱部が残存するもので、2点とも杯下部に段が見られることから有稜高杯である。59は中位に透孔をもつ。61は脚柱部は中実で脚裾部までなだらかに開く。56・58～66は古墳時代前期（布留式古相）、55・57古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。67～69は土師器器台。67は屈曲部に段を持つ鼓形器台で、山陰系のものと考えられる。68は受部が皿状のもの、69は脚部が直線的に開く鼓形器台である。70は鞴羽口片。71は鉢形の手づくね土器。72は端部がやや丸まった円柱状の土錘。73～84弥生土器片で､73～77は壺底部、78～80は甕底部。81は複合口縁壺、82は無頸壷の口縁部片で、2点とも端面に円形浮文・竹管文が施される。83は甕口縁部で、端面は外反して刻目と外面に3条の凹線が施される。84は有孔鉢底部。

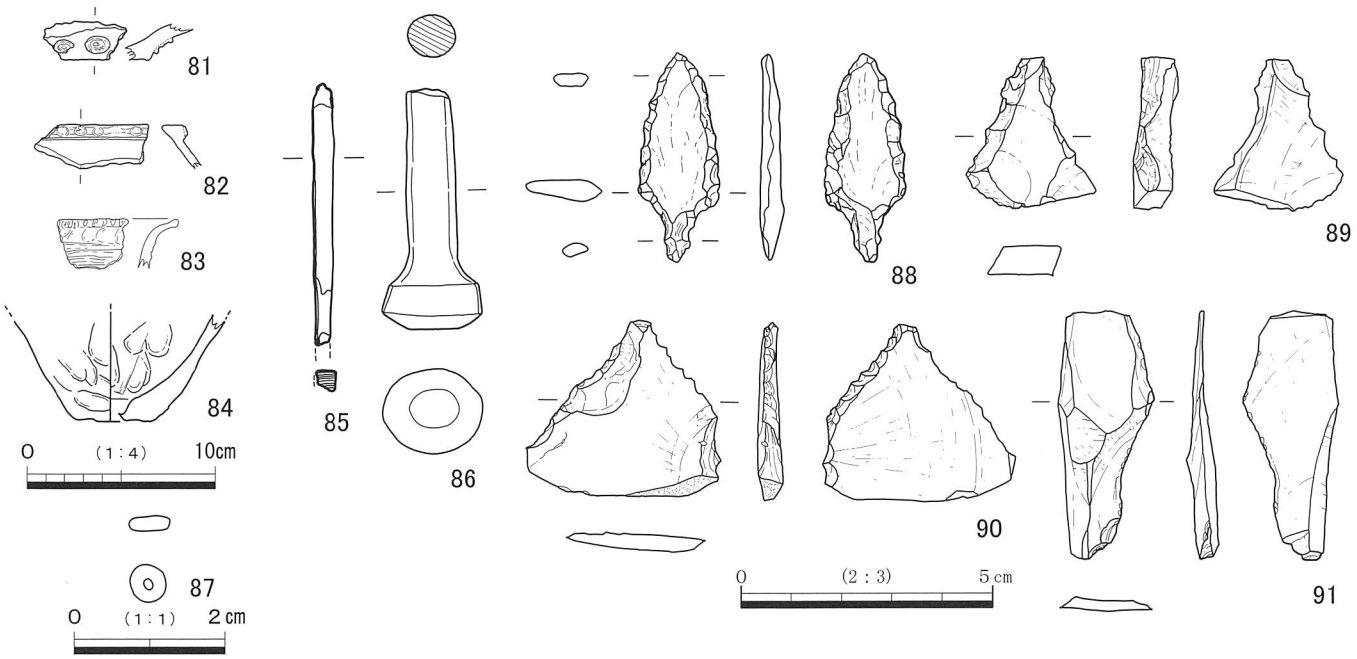


砂層（河道）：1～30
河道上層　：31～33

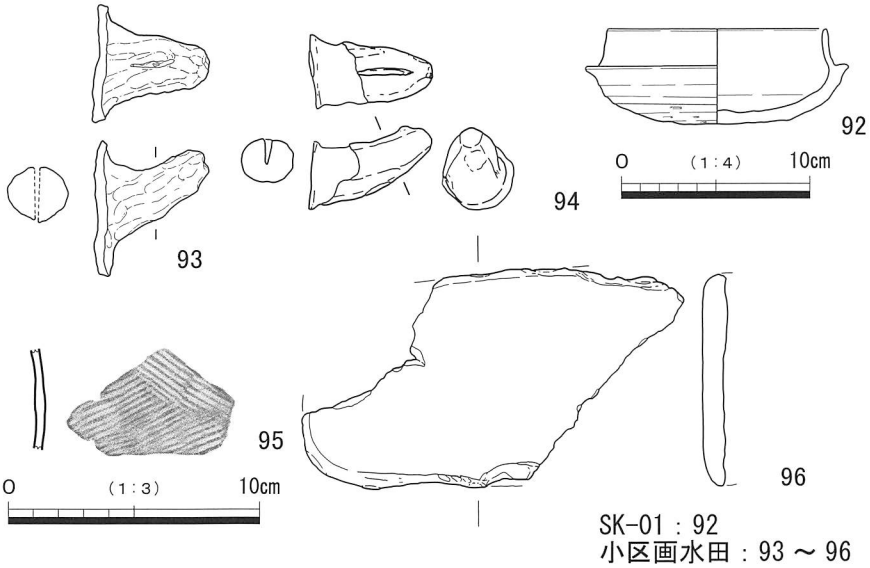
第37図　河道出土遺物実測図



第 38 図　河道（下層）出土遺物実測図



第 39 図　河道（下層）出土遺物実測図



第 40 図　上層遺構出土遺物実測図

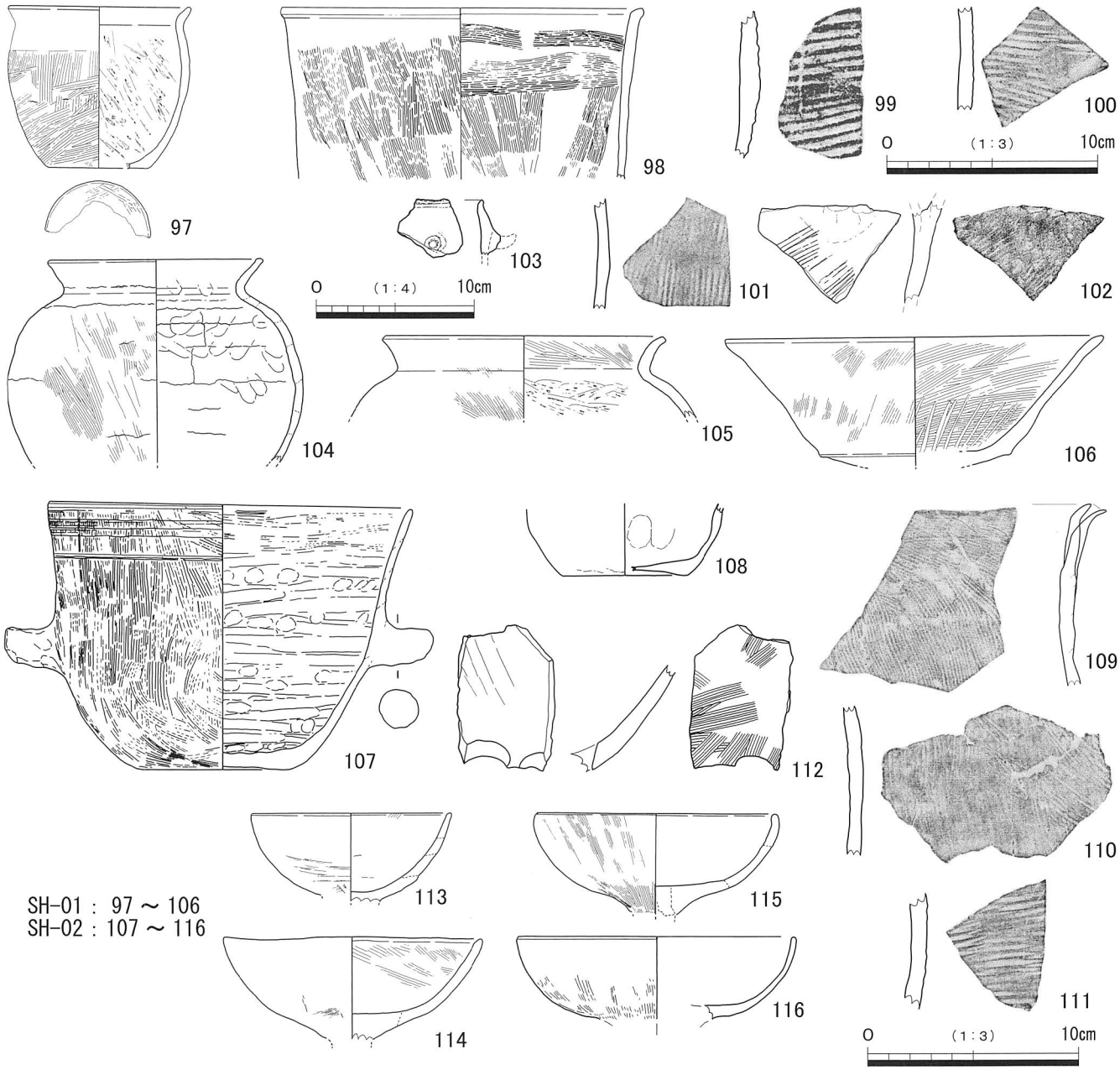
73 ～ 82・84 は弥生時代後期後半（Ⅴ様式）、83 は弥生時代前期（Ⅰ様式）に比定できる。85 は細長い棒状の木製品で、両端にコゲがみられることから発火具と考えられる。86 は基部が加工された木製品で、儀仗状の木製品のグリップ部と考えられる。87 はガラス製の玉で、径 7 ㎜、厚さ 2 ㎜を測る。88 ～ 91 はサヌカイト製の石器で、88 は完形の凸基有茎式の石鏃。89 は石鏃未製品。90 は小型の削器と考えられるが、未成品と考えられる。

SK ― 01　須恵器杯身が 1 点 (92) 出土した。古墳時代後期 (TK-10 型式) に比定できる。

水田　韓式系土器 3 点 (93 ～ 95) と石製品 1 点 (96) が出土した。93・94 は韓式系土器の鍋もしくは甑の把手で、2 点とも上面に切り込みが入り、93 では貫通する。95 は韓式系土器の体部片。96 は緑泥片岩製の石包丁の未製品で、片面が剥離し、孔をもたない。

2）下層遺構出土遺物

SH ― 01　1 区から 100、2 区から 97・101・104・105・106、3 区から 98、4 区から 99・103 が出土している。97 ～ 103 は韓式系土器である。97 は平底鉢で、口縁部から底部にかけて残存する。平底から体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外方へ屈曲する。底面はほとんどが欠損しているためゲタ印等の圧痕の有無は不明であるが、体部では外面にハケ、内面にケズリが施される。98 は甑口縁部。99 ～

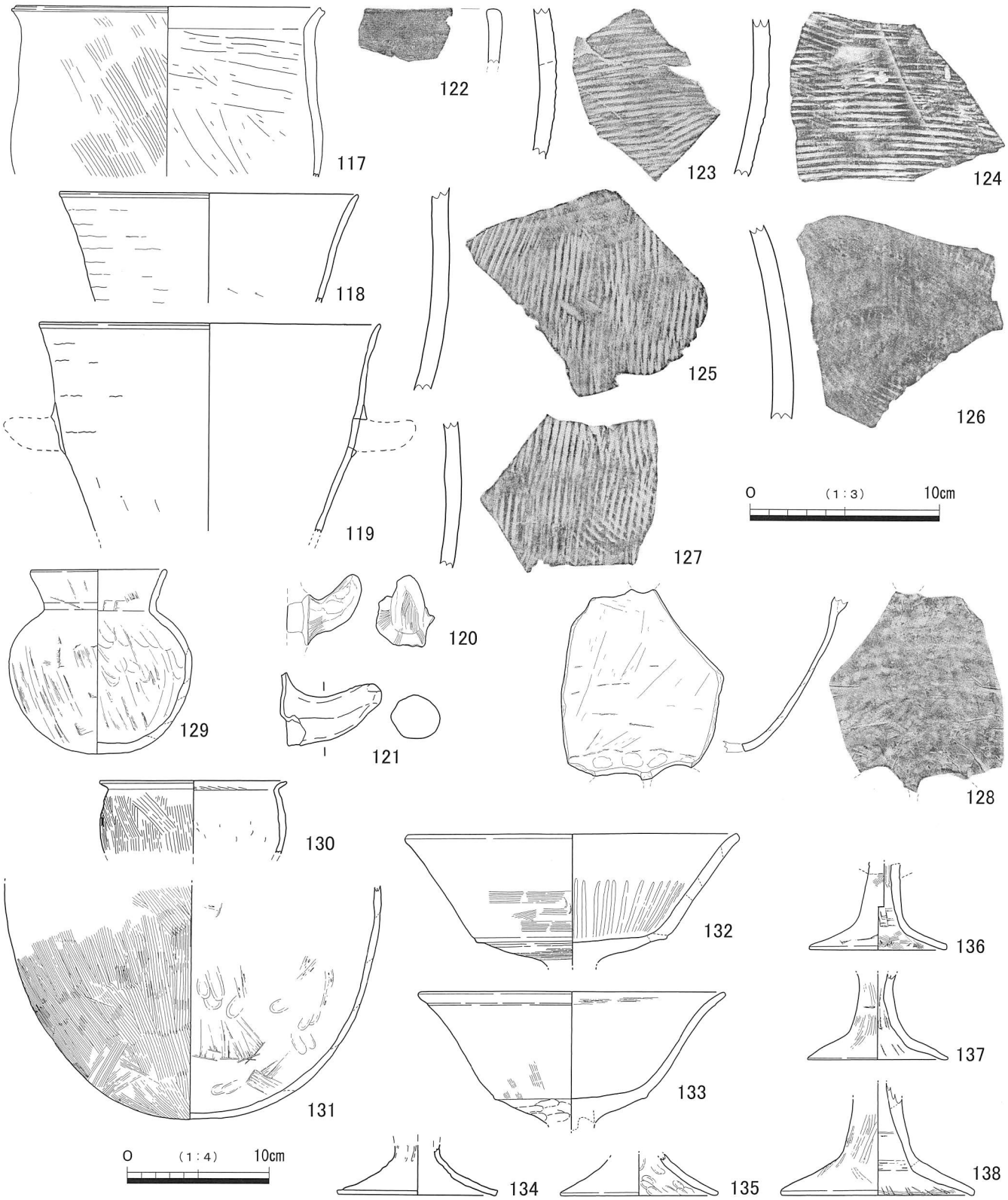


第 41 図　SH-01・SH-02 埋土出土遺物実測図

102 は甕もしくは甑・鍋の体部片で、102 は上部が把手の接続部になっている。103 はミニチュア土器の甑口縁～把手部。104･105 は布留式甕で、２点とも口縁～体部まで残存する。106 は土師器有稜高杯の杯部で、口径は復元で約 24 cmを測る大型品である。104 ～ 106 は古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。

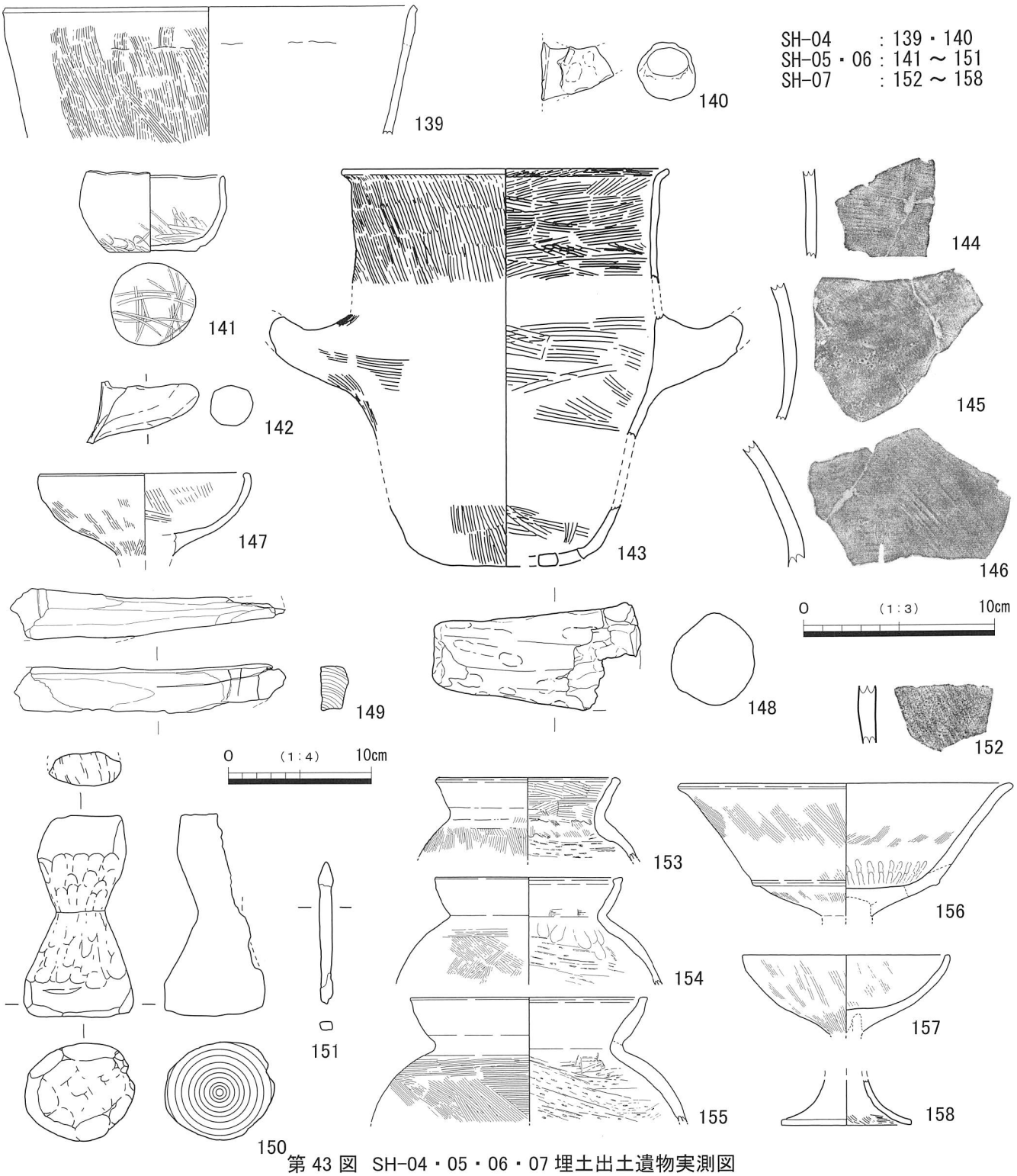
SH ― 02　１区から 111・113 ～ 116、３区から 107 が出土した。107 ～ 112 は韓式系土器。107 は把手付鍋で口縁～底部まで残存し、口縁の一部が外方へ広がることから片口と思われる。108 は平底の鉢底部。109 は片口をもつ鍋口縁部。110・111 は甕もしくは甑・鍋の体部片。112 は甑底部。113 ～ 116 は土師器高杯の杯部で、113 は椀形であるが体部下位に緩い段を持ち、114 は屈曲部が丸みを帯びたもの、115・116 は椀形を呈するものである。113 ～ 116 は古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。

SH ― 03　１区から 121･127･131、２区から 117･118･120128・130・132・135・137・138、３区から 122・125、４区から 129、周壁溝から 133・134 が出土した。117 ～ 128 は韓式系土器で、117 ～ 119・122 は



第 42 図　SH-03 出土遺物実測図

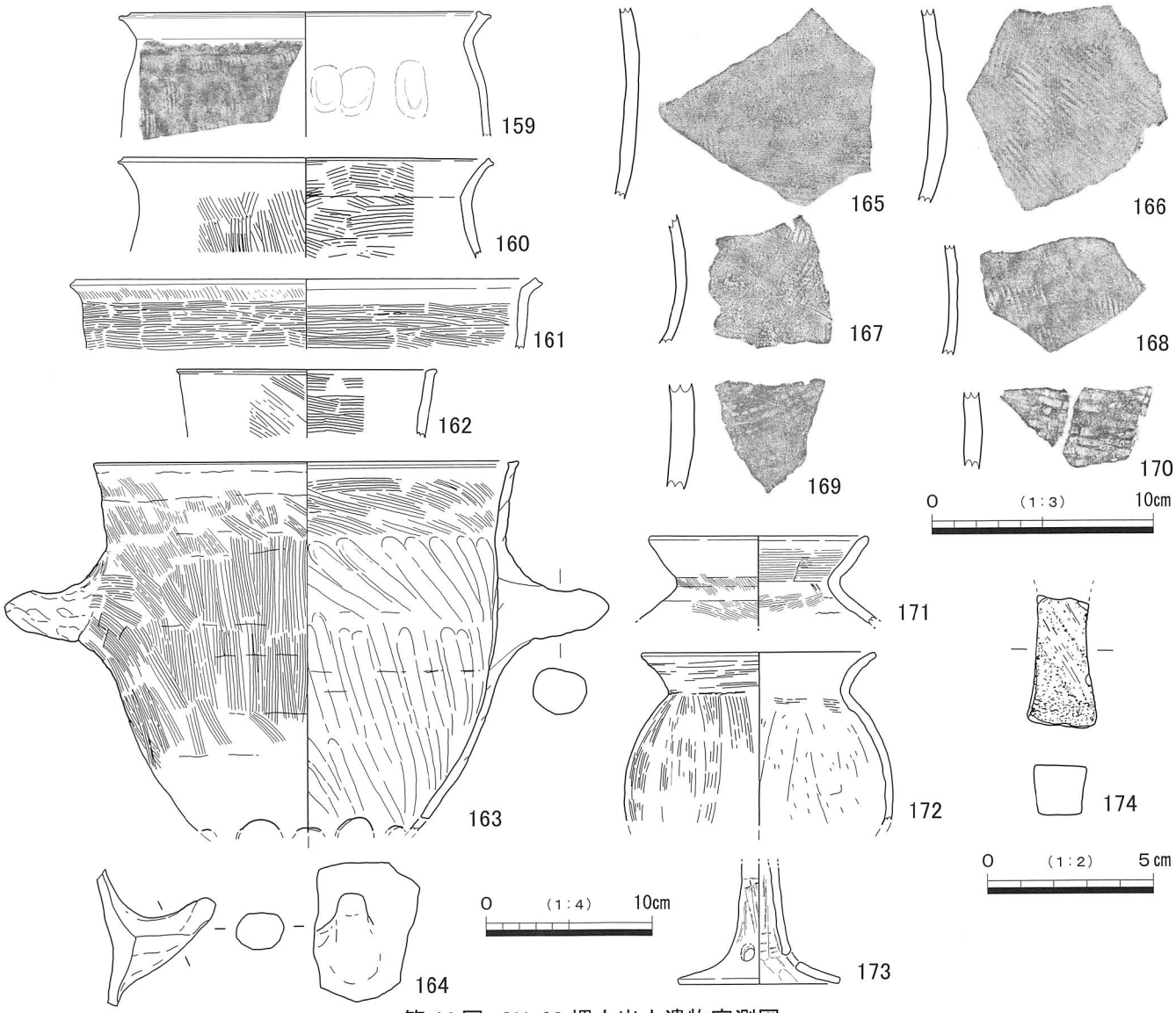
鍋もしくは甑の口縁部で、119 は把手が器壁の孔に挿入して接続された剥離痕が認められる。120・121 は鍋もしくは甑の把手。123 ～ 127 は甕もしくは鍋・甑の体部。128 は甑底部で、底面の孔と把手接続痕が認められる。129 ～ 131 は土師器甕で、129 はやや小形で口縁部が直線的に上方へのびるもの、



第 43 図 SH-04・05・06・07 埋土出土遺物実測図

130 は口縁部が大きく外方へ開くもの、131 は底部～体部が残存する丸底のものである。132 ～ 138 は土師器高杯。132・133 は杯部のみが残存する有稜高杯で、口径が復元で 20 cmを超えるやや大型品である。134 ～ 138 は脚部のみで、いずれも透孔は持たない。129 ～ 138 は概ね古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。

SH ― 04　1 区ピットから 139、3 区から 140 が出土した。2 点とも韓式系土器で、139 は鍋もしくは甑の口縁部。140 は鍋もしくは甑の把手である。

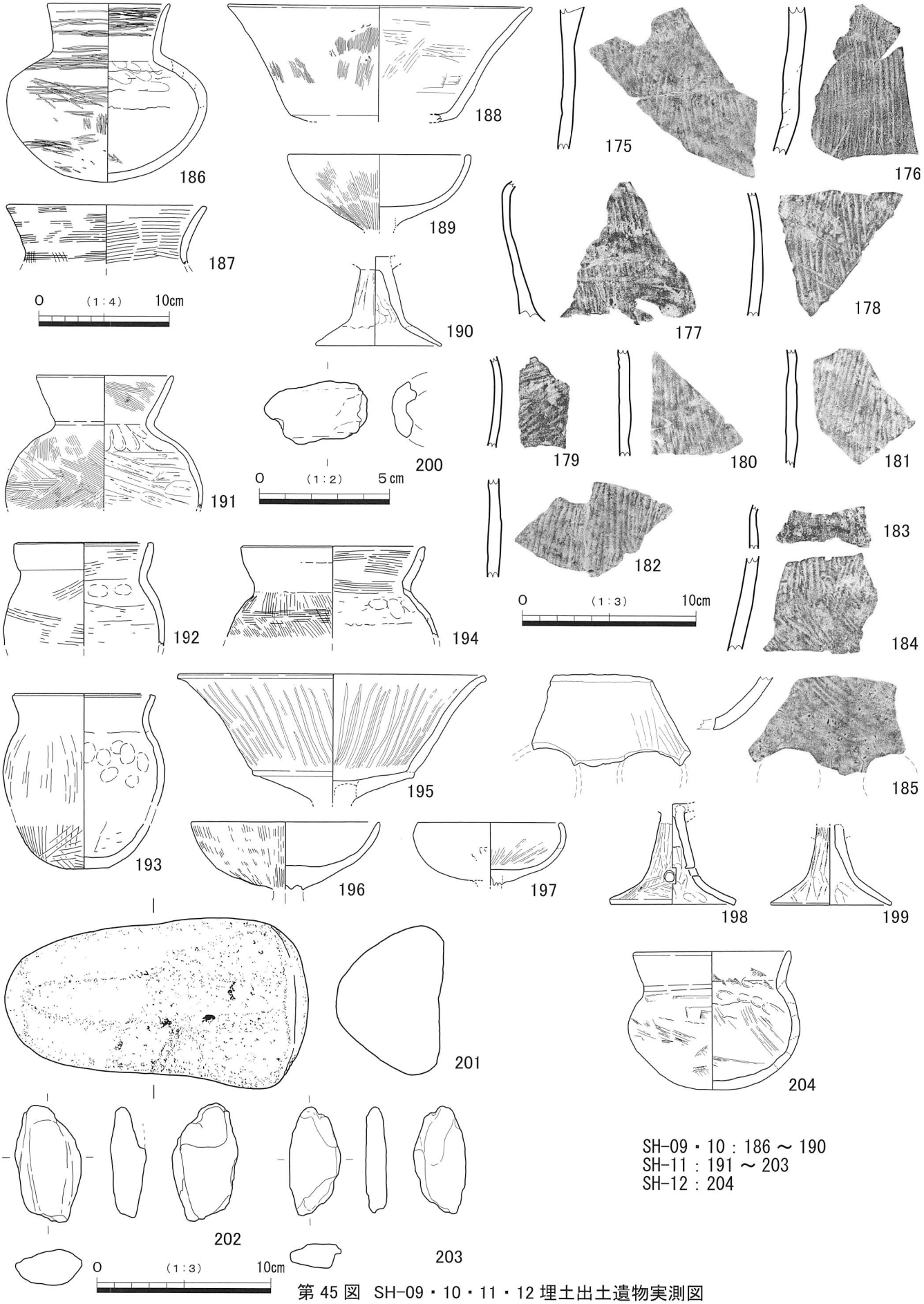


第 44 図　SH-08 埋土出土遺物実測図

SH ― 05、06　1 区から 144・146・148、2 区から 142・143・147、4 区から 145・151、4 区西のピットから 149･150、その他検出面より 141 が出土した。141 ～ 146 は韓式系土器である。141 は平底鉢。やや丸みを持つ体部で、底部から底面にかけてミガキが施される。142 は鍋もしくは甑の把手部。143 は甑の口縁部・把手部・底部片。144 ～ 146 は甕もしくは鍋・甑の体部片。147 は土師器高杯で、椀形の杯部のみ残存する。148 は土製支脚で、一方が細くなる円柱状を呈する。古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。149 ～ 151 は木製品で、149 は角材状を呈する。150 は木錘。151 は断面が方形の細長い棒状で、端部にコゲがつくことから発火具と思われる。

SH ― 07　1 区からは 152 ～ 156･158、2 区からは 157、が出土している。152 は韓式系土器の甕もしくは鍋・甑の体部片。153 ～ 155 は土師器甕で、3 点とも口縁～肩部まで残存する。153 は口縁がやや直線的にのびる。154･155 は球状の体部にやや内湾する口縁がつき、端部は内面に肥厚する布留式甕である。156 ～ 158 は土師器高杯で、156・157 は杯部のみ、158 は脚部のみ残存する。156 は杯部下位に段をもつ有稜高杯、157 は椀形高杯である。いずれも古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。

SH ― 08　1 区から 174、2 区から 159 ～ 163・165 ～ 169・172・173、3 区から 164、4 区から 171 が出土している。159 ～ 170 は韓式系土器で、159 ～ 162 は甕もしくは鍋・甑の口縁部。163 は甑で、口



SH-09・10：186～190
SH-11：191～203
SH-12：204

第45図 SH-09・10・11・12埋土出土遺物実測図

縁～底部まで残存し、体部上位に把手がつき、底部は円形の孔をもつ。164 は鍋もしくは甑の把手。165 ～ 170 は甕もしくは鍋・甑の体部片。171・172 は土師器甕で、171 は口縁～肩部、172 は口縁～体部まで残存する。173 は土師器高杯脚部で、脚部に三方向に配置された円形の透孔をもつ。いずれも古墳時代中期布留式新相）に比定できる。174 は凝灰岩製の砥石で、一方の先端を欠く。

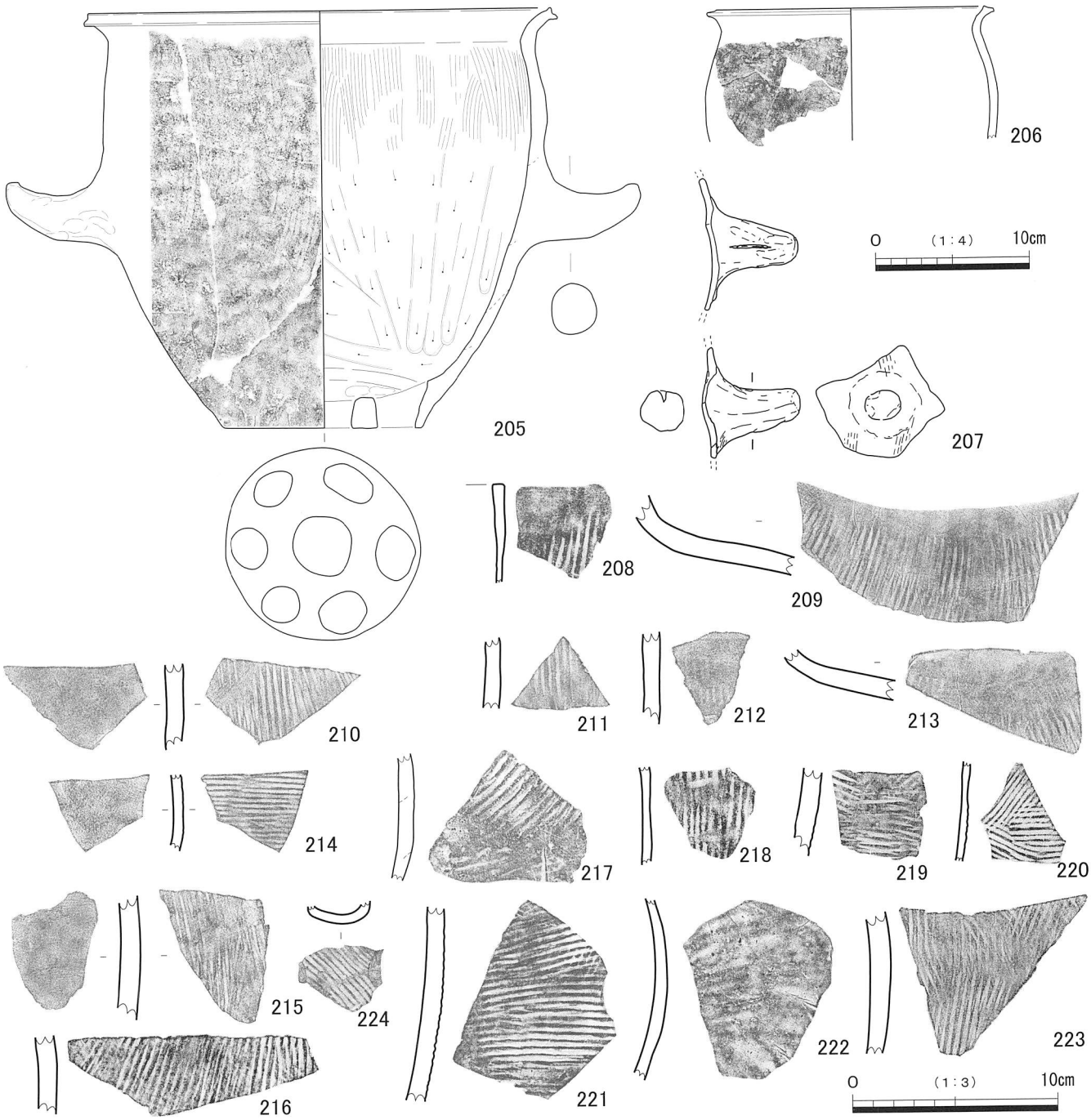
SH ― 09、10　1 区から 187・190、2 区から 176・178・184・186・188・189、3 区から 175・177・179 ～ 183 が出土した。175 ～ 185 は韓式系土器である。175 ～ 184 は甕もしくは鍋・甑の体部片、185 は甑底部片である。186 は土師器直口壺。体部最大径が上位にあり、口縁はほぼ直立する。187 は土師器甕口縁部。188 ～ 190 は土師器高杯で、188 は有稜高杯の杯部、189 は椀形の杯部、190 は脚部のみが残存する。186 ～ 190 は古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。

SH ― 11　1 区から 191・193・196、3 区から 194、4 区から 195・199・200 が出土した。191 は土師器直口壺で、口縁～体部まで残存する。192 ～ 194 は土師器甕で、192･193 は小型の甕で、2 点ともやや寸胴な体部に頸部は緩やかに屈曲して口縁はやや直線的に斜め上方へのびる。193 の底面はやや丸みを持つ平底で、韓式土器の影響を受けた可能性もある。194 は口縁～肩部まで残存するもので、丸みをもつ体部に器壁がやや厚い口縁部がつく。195 ～ 199 は土師器高杯で、195 ～ 197 は杯部のみ、198・199 は脚部のみが残存する。195 は有稜高杯、196・197 は椀形の杯部で、195 では外面、内面に放射状にミガキが施される。脚部のみ残存するものについては、198 は脚部に円形の透孔をもつ。200 は鞴羽口片である。いずれも古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。201 ～ 203 は石製品で、201 は砂岩製の磨石で、一部敲痕が認められる。202･203 は泥岩製の石製品で、石棒未成品の可能性がある。

SH ― 12　204 は小型丸底壺で、やや扁平な球状の体部に直線的な口縁部がつく。古墳時代前期（庄内式新相）に比定される。

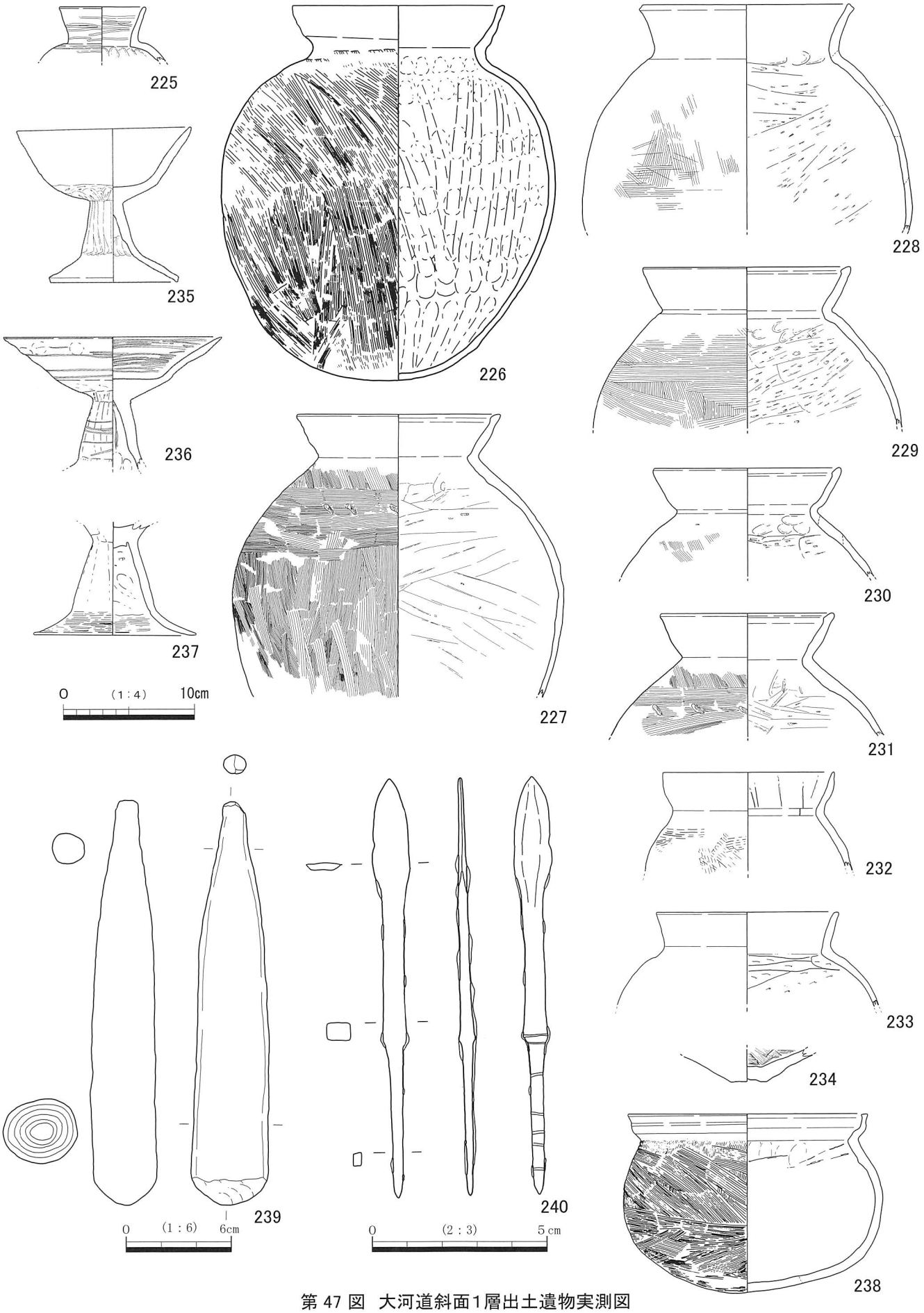
大河道　斜面 1 層からは韓式系土器 (205 ～ 224)、土師器壺 (225)、土師器甕 (226 ～ 234)、土師器高杯 (235 ～ 237)、土師器鉢 (238)、木製品 (239)、鉄族 (240) が出土した。205 は韓式系土器甑で、口縁は外反して端面は外面側に面を持つ。底面には中央に 1 点とそれを囲む 6 点の円形の穿孔が施される。206 は韓式系土器甕もしくは鍋・甑の口縁部で口縁部が緩やかに外反する。207 は韓式系土器鍋もしくは甑の把手で上面に切り込みをもつ。208 ～ 224 は韓式系土器甕もしくは鍋・甑の破片で、208 は口縁部、224 は底部片である。概ね外面に平行タタキが施される。225 は土師器直口壺口縁部で、外面にミガキが施される。226 ～ 233 は土師器甕である。226 は口縁～底部、227 ～ 233 は口縁～体部が残存する。226 ～ 231 は球状の体部にやや内湾する口縁部がつき、端部は内面へ肥厚する布留式甕。232 は口縁がやや直立気味で、体部はやや寸胴で、長胴甕の可能性がある。234 は土師器壺もしくは鉢の底部と考えられる。235 ～ 237 は土師器高杯で、235 はほぼ完形、236 は口縁～柱状部、237 は脚部が残存する。235・236 は 2 点とも有稜高杯である。235 は杯部が平底から外傾しながら開いてやや椀形に近くなっているが、236 は杯部が平底から大きく外方に広がる。238 は土師器鉢で、体部は楕円形で、頸部は「く」の字状に外折して口縁部は直立し、端部は上方に面をもつ。226 ～ 233・235 ～ 237 は古墳時代中期（布留式新相）、225 は古墳時代中期（布留式新相）、234 は古墳時代初頭（庄内式新相）に比定できる。239 は木製品で竪杵と考えられる。240 は鉄製の長茎鏃である。完形で、基部から茎部境付近で屈曲して広がり、茎部は直線的に伸びて先端は緩やかに広がって柳葉状を呈する。基部に紐が巻かれていた痕跡が認められる。

斜面 2 層からは韓式系土器 (241 ～ 244･264)、土師器 (245 ～ 260)、須恵器 (261･262)、木製品 (263) が出土し、241 ～ 243・264 は韓式系土器である。241 は移動式竈口縁部片で、直立気味の体部に外方に面を持つ口縁部がつく。242 は外面に矢羽根タタキが施される甕体部、243 は甕もしくは鍋・甑の体部片と考えられる。264 は鳥形土器である。半楕円形の体部～尾部が残存し、底面には円形の剥離痕が認められることから、高杯のような脚部がついていたと考えられる。内面には炭化物が付着し、

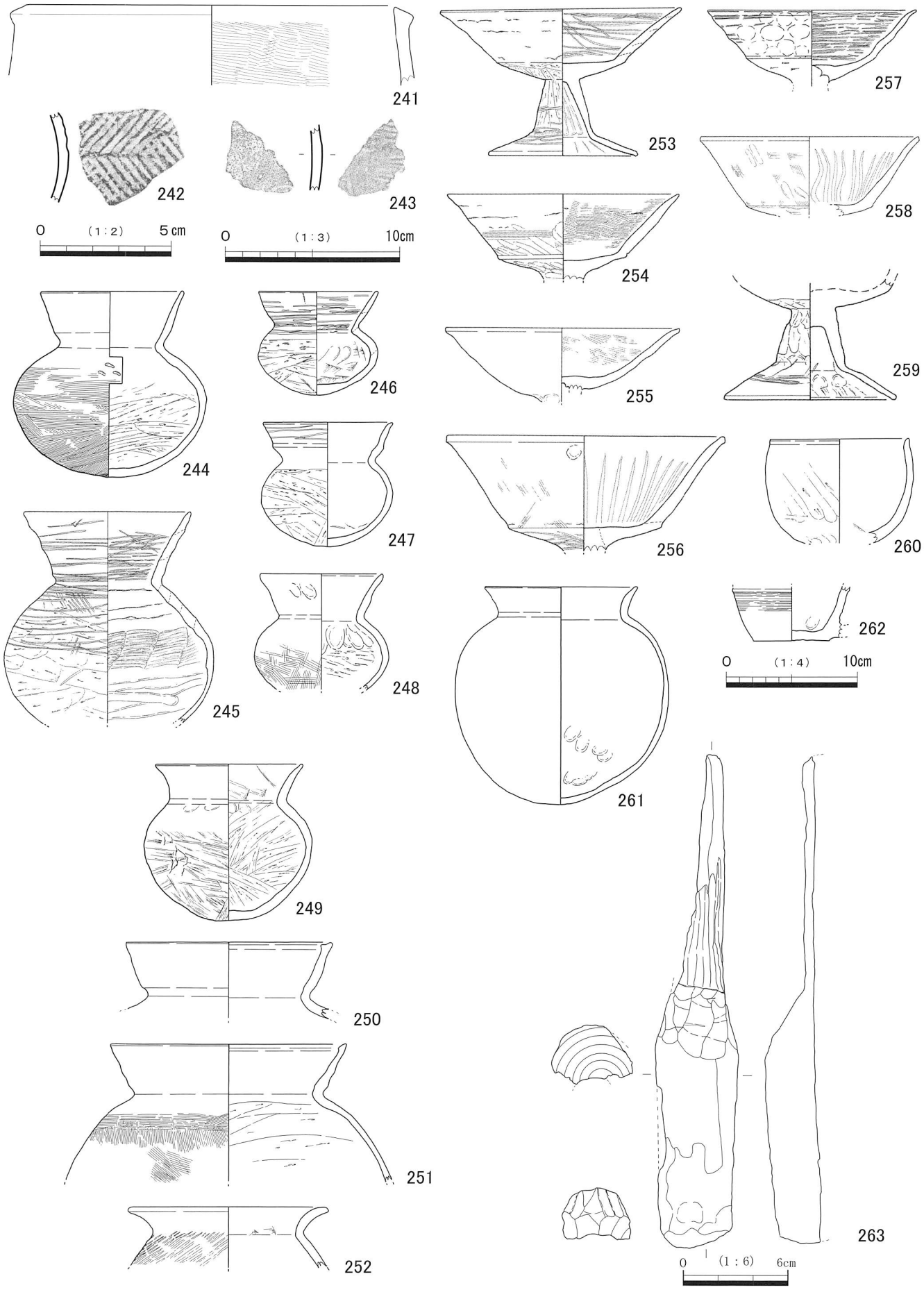


第 46 図　大河道斜面1層出土遺物（韓式土器類）実測図

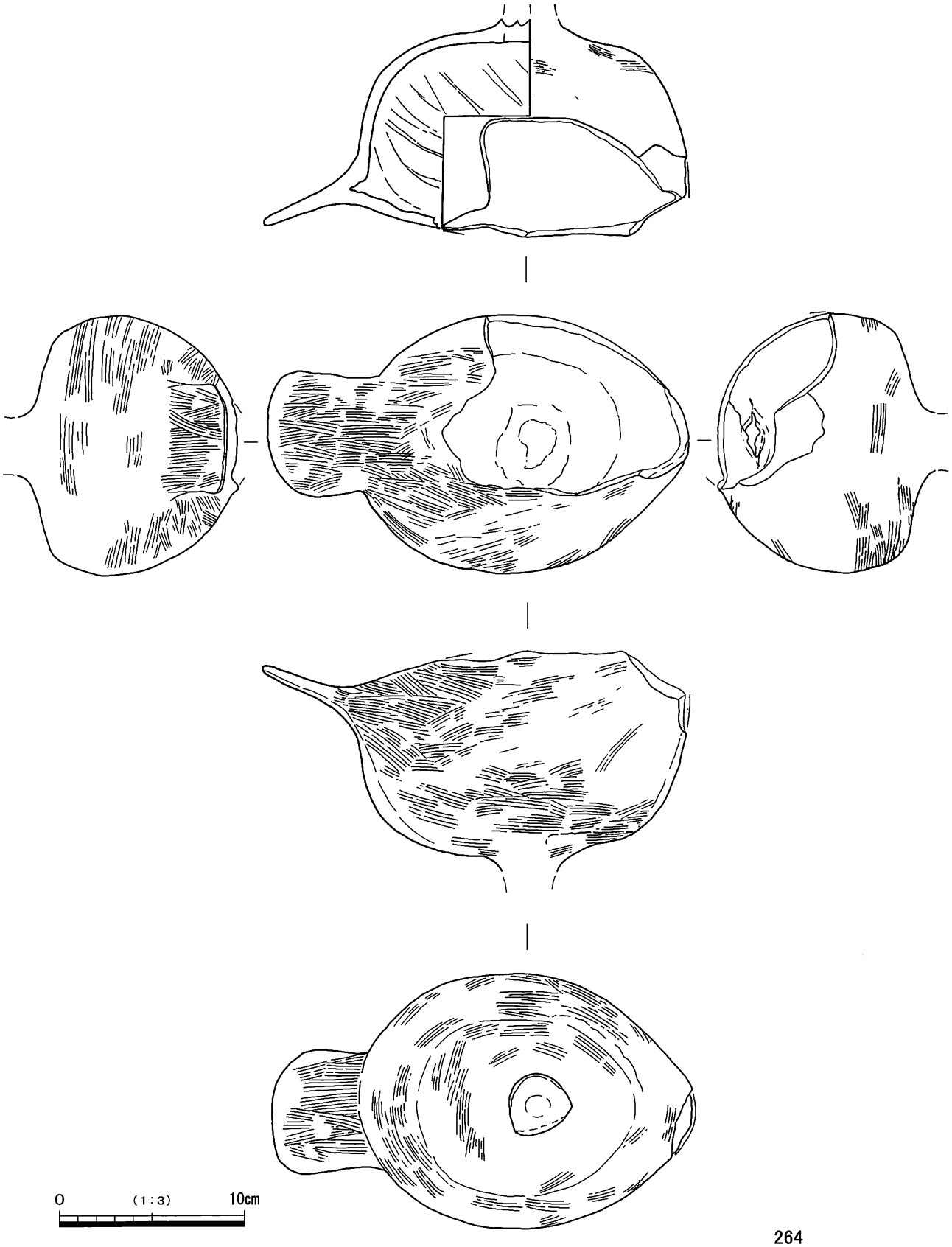
外面には被熱痕が認められる。244 ～ 248 は土師器壺である。244・245 は直口壺で、244 はほぼ完形、245 は底部を欠く。246 ～ 248 は小型丸底壺で、３点ともやや扁平な球状の体部に直線的に伸びる口縁がつくが、247 は口縁部中位で段を持つ。249 ～ 252 は土師器甕で、249 は口縁が外反するやや小形の甕、250 ～ 252 は口縁～体部が残存し、250・251 では口縁部はやや内湾して端部は内面に肥厚する布留式甕、252 は口縁部が外反して体部にタタキが施される庄内式甕である。253 ～ 259 は土師器高杯で、253 はほぼ完形、254 ～ 258 は杯部のみ、259 は杯部～脚部が残存する。いずれも有稜高杯であるが、255・257・259 では杯部の屈曲部は丸みを持ち緩やかになっているが、254・256 では屈曲部に段が設けられる。260 は土師器鉢で、底部を欠くが、体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾して端部はわずかに外反する。261 は須恵器甕で、球状なユビオサエが施されるほか、体部中位に接合痕がみ



第 47 図　大河道斜面1層出土遺物実測図



第 48 図　大河道斜面2層出土遺物実測図



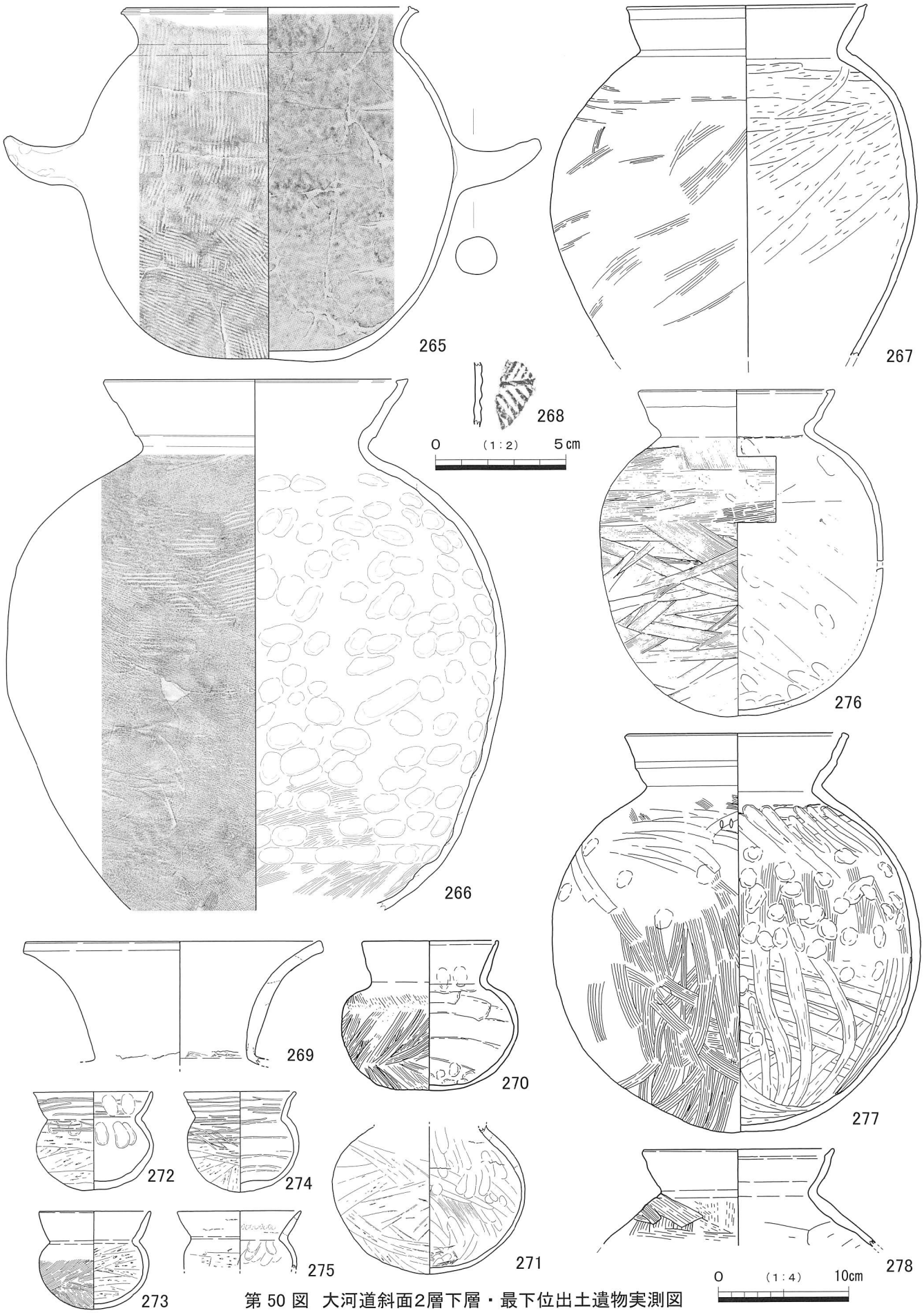
264

第 49 図　大河道斜面2層出土遺物（韓式土器）実測図

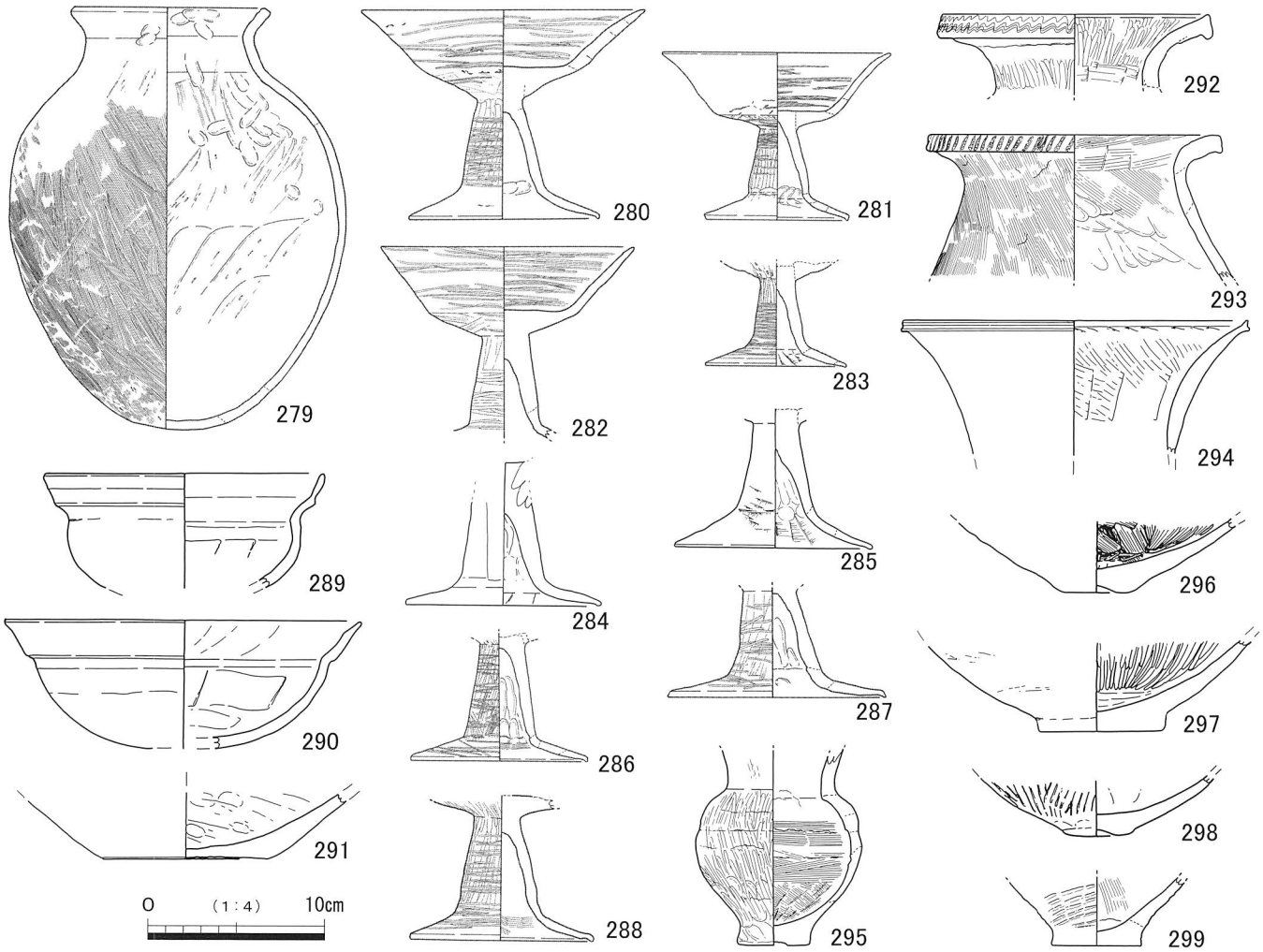
の体部に外湾する口縁部をもつ、布留式甕形を呈する。調整は外面・内面にナデ、内面には断続的られる。262は須恵器把手付鉢で、平底から直線的に立ち上がる体部をもち、下方で把手剥離痕が認められる。外面上部ではカキメが施される。261・262は2点とも古墳時代中期（TK216～208型式）に比定できる。263は木製品竪杵で、全体に加工痕があり、一端に使用痕が認められる。

斜面2層下層・最下層の平坦面からは、韓式系土器（265～268）、土師器（269～291）、弥生土器（292～299）がまとまって出土した。265はほぼ完形の韓式系土器把手付鍋で、底部は丸底で、球状の体部に頸部が屈曲して広がる口縁部がつく。口縁端部は外方に面を持ち、端面に2条の沈線が施される。調整は外面にタタキ、内面に細い同心円状の当て具痕が認められる。266・267は韓式系土器の甕で、2点とも底部を欠き、やや胴長である。2点とも口縁端部は面を持つが、266は内面に肥厚し、267はつまみあげられて成形され、端部は尖っている。268は韓式系土器の甕または鍋・甑の体部片で、外面に矢羽根タタキが施される。269は広口壺口縁部。270は完形の直口壺で、楕円形の体部から、屈曲して外傾しながら外方にのびる口縁部をもち、端部は沈線が施される。271は球体の体部が残存する壺。272～275は小型丸底壺で、いずれも球状の体部に直線的にのびる口縁部がつき、外面にミガキもしくはハケメ・ケズリが施される。276～279は土師器甕である。276・277・279はほぼ完形、278は口縁～体部が残存する。276は卵形の体部に「く」の字状に外傾する口縁部がつく。端部は内にわずか肥厚し、上方に面をもつ。277は、球形の体部から、「く」の字状に外傾する口縁部がつき、端部は外方に面をもつ。278は口縁部がやや内湾し、端部は内面に面を持ち、内面にやや肥厚する。279は卵形の体部から内傾する頸部がつき、口縁部は外反して端部に面をもつ。280～288は土師器高杯で、280・281はほぼ完形、282は杯～柱状部、283～288は脚部が残存する。280～282は有稜高杯で、杯部は平底から直線的に外方にのびる口縁部がつく。脚部はいずれも透孔はもたない。289～291は土師器鉢で、289・290は丸底で口縁が屈曲して複合口縁状を呈する。291は平底の大型の鉢と考えられる。269～288は概ね古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。292～299は弥生土器で、292・293は広口壺口縁部で、292は端部は垂下して面を持ち、波状文が施される。293は体部が直線的に内傾し、頸部で屈曲してわずかに外湾する口縁部。端部は外方に面をもつ。294は広口長頸壺口縁部。295は小形の壺体部～底部。296・297は壺底部、298・299は甕底部。292～299は弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。

斜面3層からは韓式系土器（300～321）、土師器（322～338）、木製品（339）、石製品（340～342）が出土した。300は韓式系土器甑体部～底部で、上面に切り込みが入る把手がつき、底面には中央に1点とその周辺に配置された7つの円形の孔が穿たれる。301は韓式系土器鉢で、半球状の体部からわずかに外湾する口縁部がつくもので、底面に葉脈圧痕が認められる。全面に二次被熱による変色・剥離がみられる。302～304は韓式系土器鍋または甑の把手で、303は把手上面に切り込みをもち、304は把手端部下面に切り込みをもつ。305～320は韓式系土器甕もしくは鍋・甑片で、305～308は口縁部、309～319は体部片、320は甑底部片である。321は韓式系土器の陶質の甕で、丸底で球状の体部が残存する。外面には縄蓆文タタキが施される。322～329は土師器壺である。322はほぼ完形の二重口縁壺。323･324は直口壺で、323はほぼ完形で肩部に工具押圧痕が2点認められる。325は大型の複合口縁壺口縁部で、頸部から外反した後屈曲して斜め上方へのびる。326～328は土師器小型丸底壺で、326・327は楕円形の体部に直線的にのびる口縁がつくもの、328は算盤状の体部に「く」の字状に屈曲して上方へのびる口縁部が付く。329は土師器甕で、体部上位に1点円形の孔が穿たれる。330～335は土師器甕である。330は口縁～底部が残存し、球状の体部に外傾する口縁部がつく。332・333は口縁部に緩やかな段を持つ。335はほぼ完形で、卵形の体部に底部に低い「ハ」の字状の台がつき、短く外折する口縁部をもつ。東海地方からの搬入品である可能性がある。336・337は土器高杯で、336は口縁～脚部まで残存する有稜高杯。337は脚部のみ残存するもので、中位に透孔を持つ。



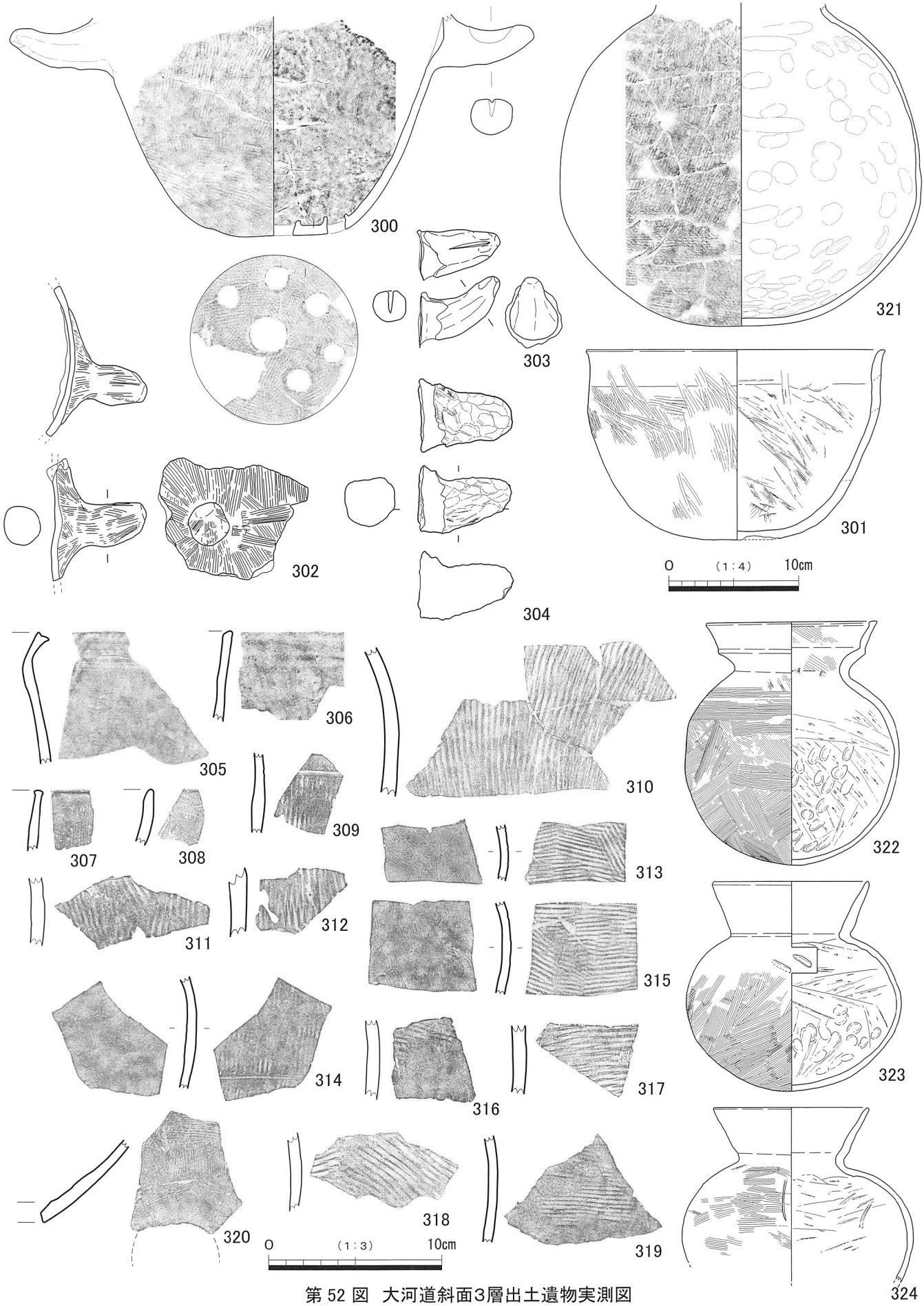
第 50 図　大河道斜面2層下層・最下位出土遺物実測図



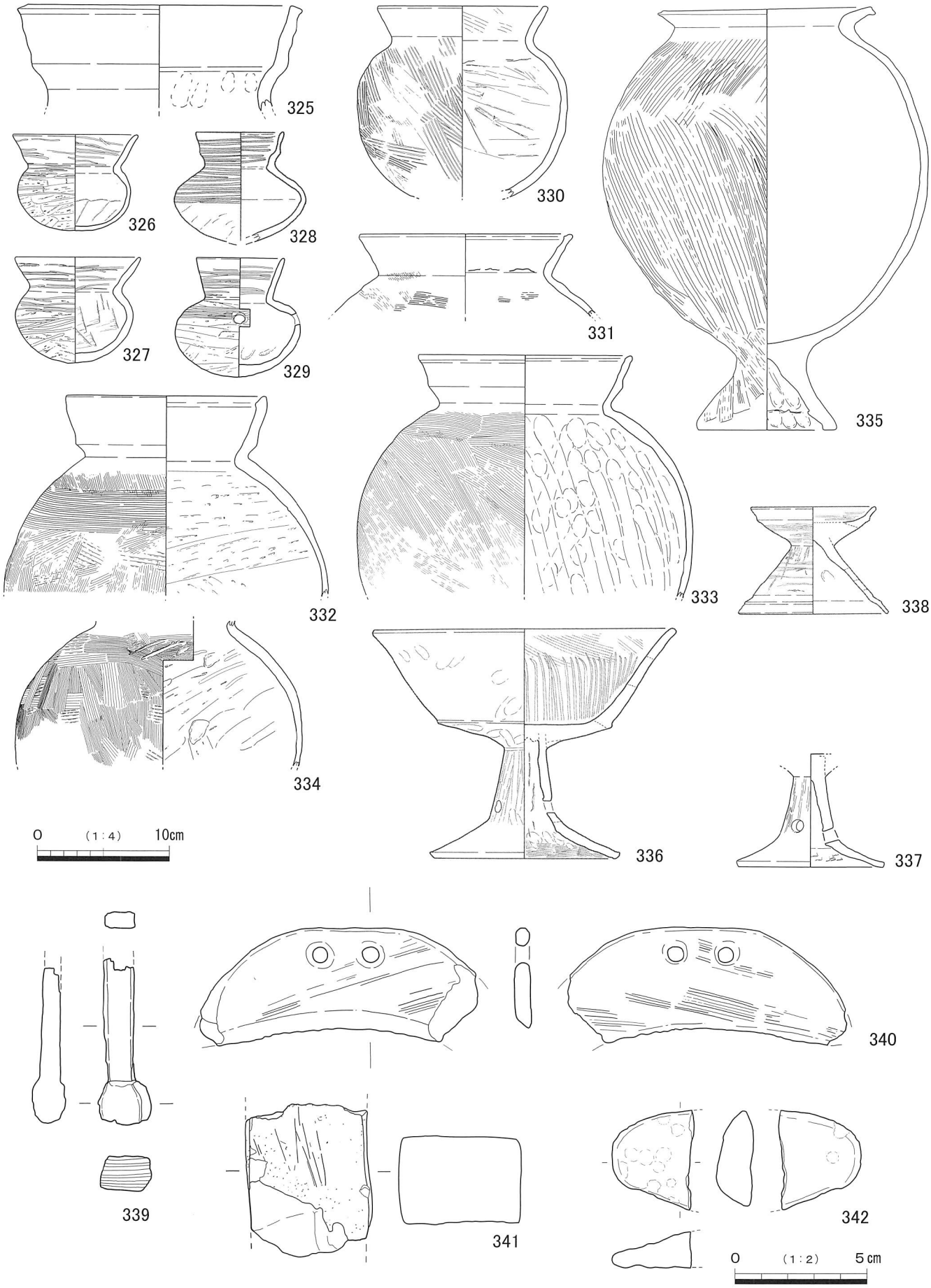
第 51 図　大河道斜面2層下層・最下位出土遺物実測図

338 は皿状の受け部をもつ器台で、台部は大きく「ハ」の字状に広がり、裾部は「く」の字に屈曲する。杯部は丸みをもつ体底部から、短く外反する口縁部をもつ。322 ～ 338 は概ね古墳時代中期（布留式新相・335：宇田Ⅰ式）に比定できる。339 は棒状の木製品で、基部が球状に加工される。340 は緑泥片岩製の石包丁。片刃の内湾刃半月形で、2 箇所に紐孔をもち、使用による摩擦痕が認められる。341 は泥岩製の砥石で各面で使用痕が認められる。342 は半円形の砂岩製の石製品である。

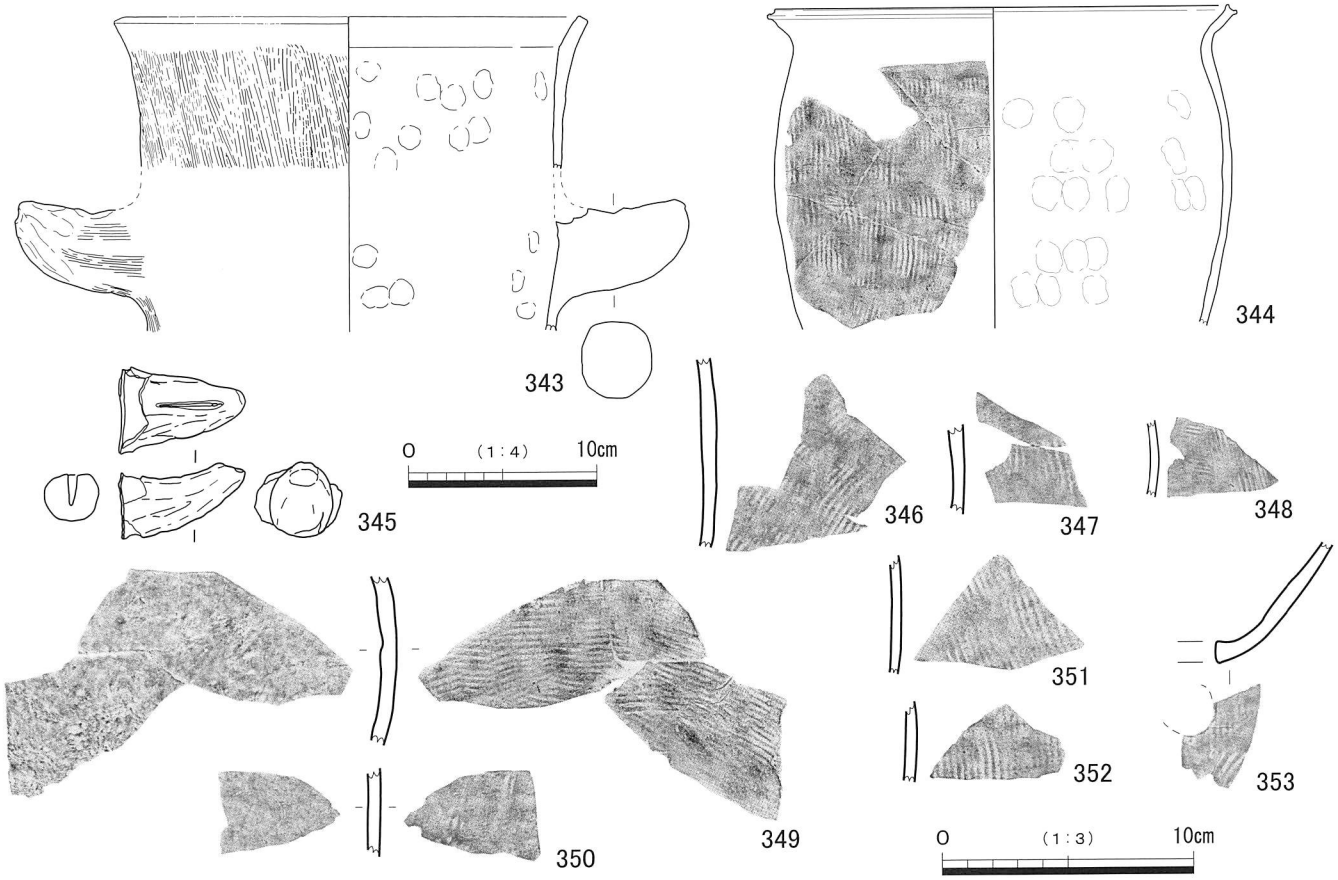
斜面 4 層からは韓式系土器 (343 ～ 353)、土師器 (354 ～ 386)、石製品 (387･388) が出土した。343 は韓式系土器甑で口縁～把手部が残存する。344 は韓式系土器甕の口縁～体部で、体部はやや直立気味にのびる。口縁部は外反して外面側に端面をもち、端面中央が凹む。345 は韓式系土器鍋もしくは甑の把手で、上面に切り込みが入る。346 ～ 353 は韓式系土器甕もしくは鍋・甑の体部片で、346 ～ 352 は体部片、353 は甑底部片である。354 ～ 368 は土師器壺である。354 は広口長頸壺口縁部。355 ～ 357 は直口壺で、355・356 は口縁～底部、357 は口縁～体部が残存する。3 点とも球状の体部に直線的に伸びる口縁部がつく。355 では肩部に 2 点の工具押圧痕が認められる。358 は体～底部が残存し、楕円形の体部をもつ。359 は小形壺で体～底部が残存し、平底を持つ。360 ～ 368 は小型丸底壺で、361・363・364・367 はほぼ完形、それ以外でも口縁～底部が残存する。いずれもやや扁平な球状の体部に直線的に伸びる口縁部がつく。369 ～ 377 は土師器甕で、369 は口縁～底部、370 ～ 377 は口縁～体部が残存する。369・370 は球状の体部に直線的に伸びる口縁がつく。371・372・376・377 は口縁部がやや内湾し、端部は内面に面をもち肥厚する。373 ～ 375 は口縁部に緩やかな段を持つ。378 ～ 382



第 52 図　大河道斜面3層出土遺物実測図



第 53 図　大河道斜面3層出土遺物実測図



第 54 図　大河道斜面4層出土遺物（韓式土器）実測図

平底からは土師器高杯で、378 ～ 380 はほぼ完形、381・382 は脚部が残存する。378 ～ 380 はいずれも杯部が丸みをもちながら外湾して口縁部につづくもので、脚部は透孔をもたない。383･384 は土師器器台で、２点とも杯部と脚部が貫通する。383 はやや内湾する杯部がつき、384 は脚部が直線的にのび、円形の透孔をもつ。385 は土師器台付鉢で体部のみ残存する。体部は丸みを持ち、頸部は屈曲して広がる。386 は土師器鉢と考えられる底部片で、底面中央がややくぼむ。359 は古墳時代初頭（庄内式新相）、354 ～ 358・360 ～ 368 は古墳時代前期（布留式古相）、369 ～ 386 は古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。387･388 は石製品で、387 は砂岩製の石皿、388 は砂岩製の砥石である。

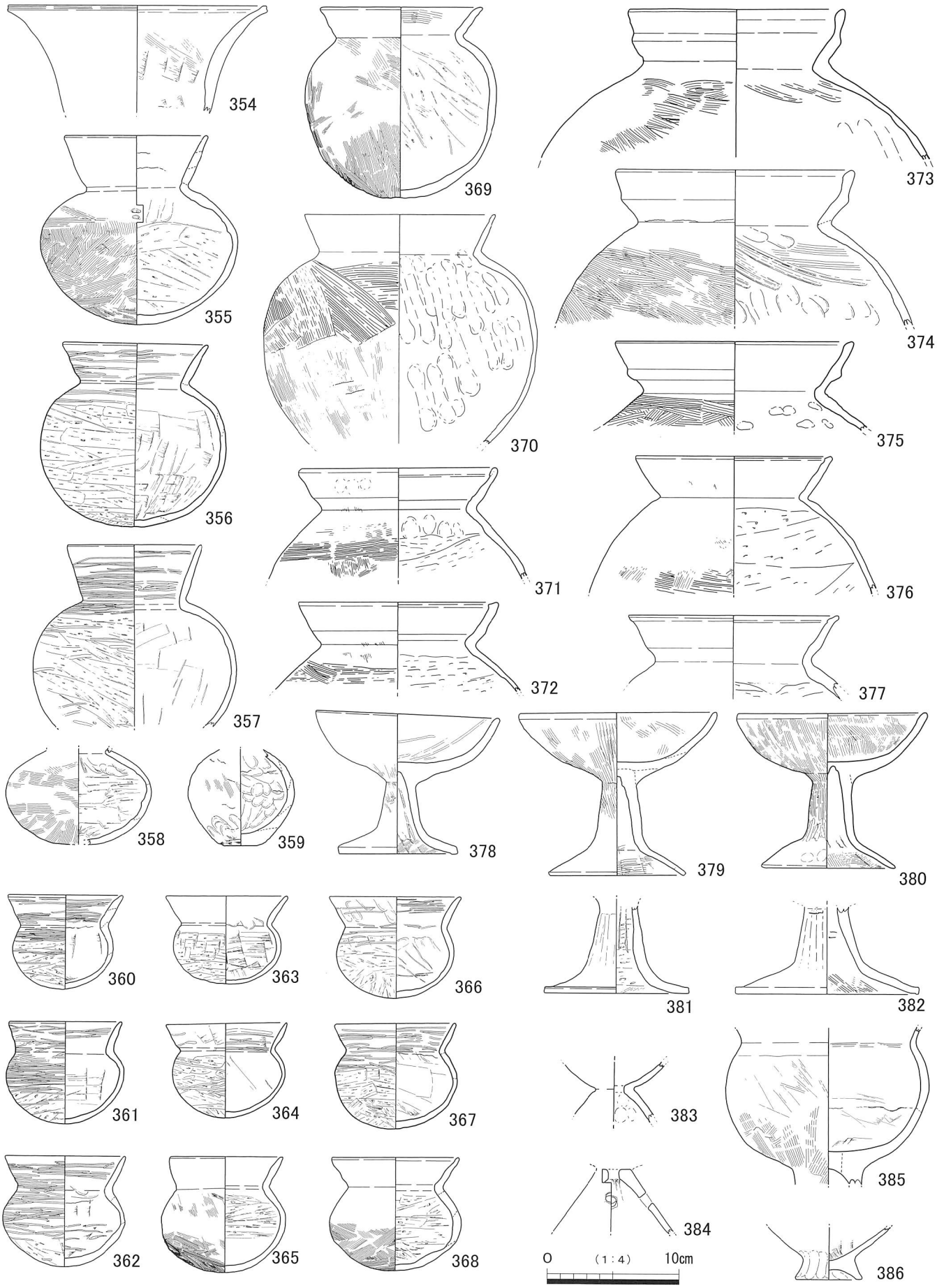
その他の遺構出土遺物

SD ― 02　389 はサヌカイト製の石錐で基部を欠損する。

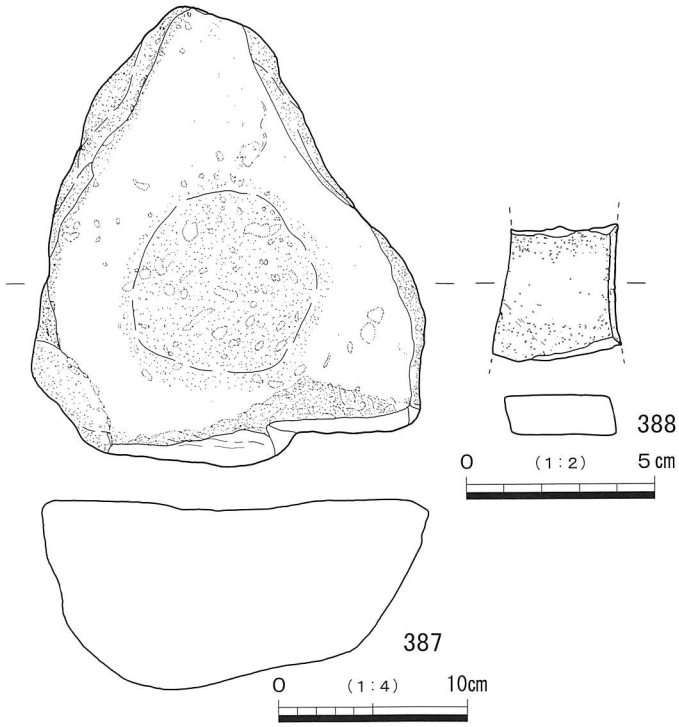
SK ― 05　390 は韓式系土器の甕または鍋・甑の体部片で、外面に平行タタキ、内面に細い同心円状のタタキが施される。

SK ― 09　391 は韓式系土器の甕で、口縁部はやや内湾して端部は内面に面を持ち、端面は中央が凹む。体部はやや長く、肩部は体部中位から上位にわたり歪んでいる。392･393 は土師器高杯の杯部で、２点とも有稜高杯であるが、393 では屈曲部に段をもつ。392・393 は古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。

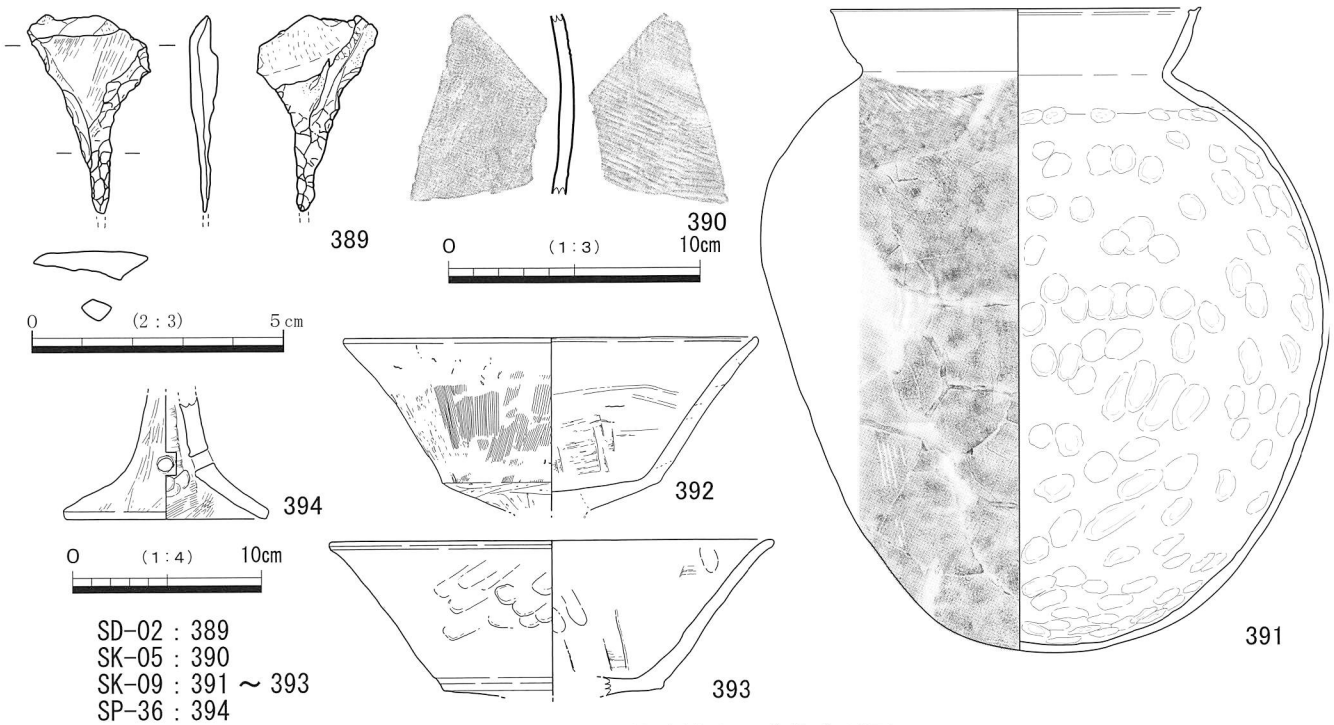
SP ― 36　394 は土師器高杯脚部で、中位に円形の透孔をもつ。古墳時代前～中期に比定される。



第 55 図　大河道斜面4層出土遺物実測図



第 56 図　大河道斜面4層出土遺物（石製品）実測図



第 57 図　その他遺構出土遺物実測図

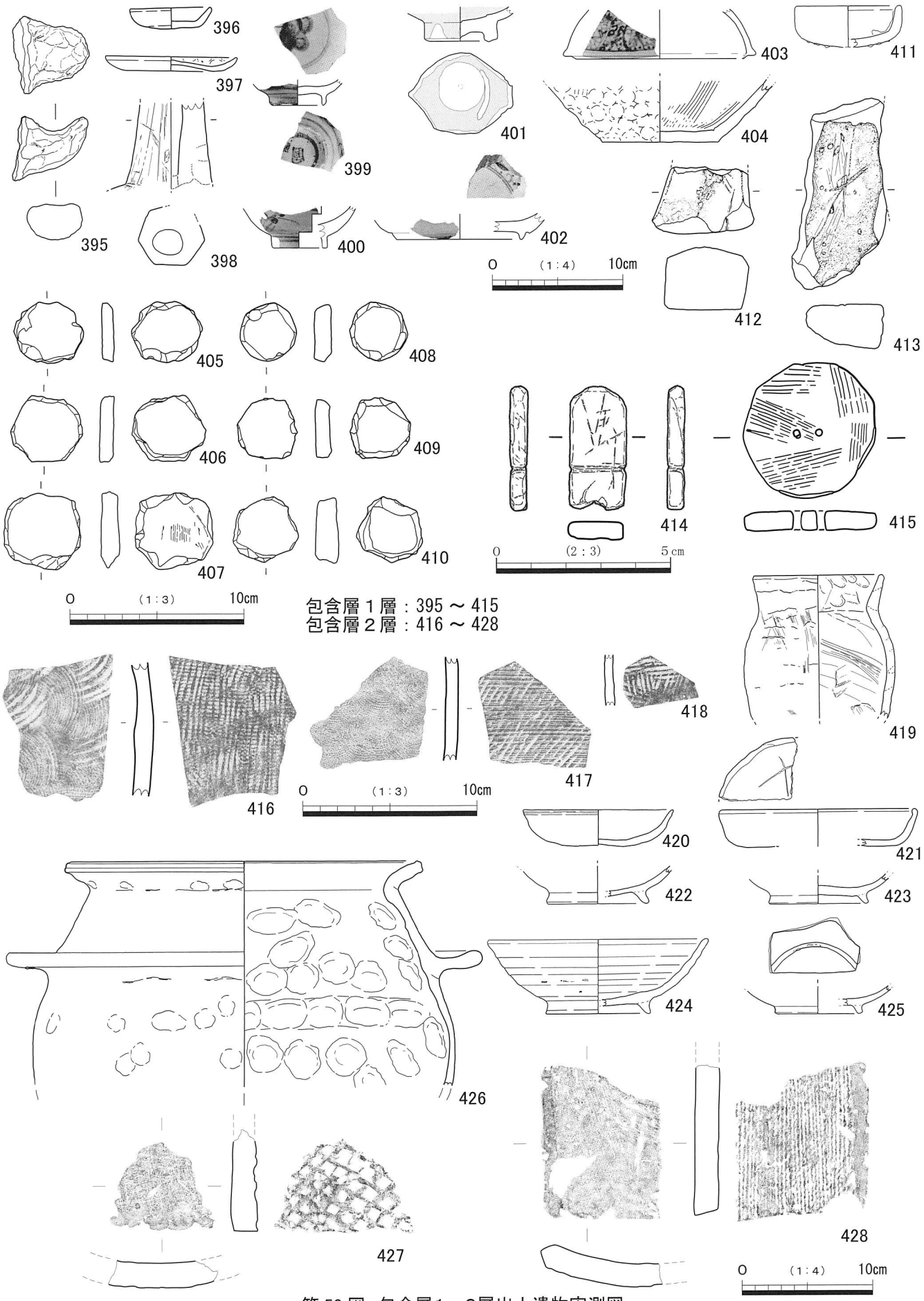
遺構に伴わない遺物

包含層１層　韓式系土器（395）、土師器（396 ～ 398）、陶磁器（399 ～ 403）、陶器（404）、土製品（405 ～ 410）、鉄製椀（411）、石製品（412 ～ 415）が出土した。395 は韓式系土器の鍋もしくは甑の把手。396･397 は土師器皿で、12 ～ 13 世紀に比定できる。398 は土師器高杯脚柱部で、外面は面取りされ六角柱状を呈する。8 ～ 9 世紀に比定できる。399 ～ 403 は陶磁器で、399･400 は染付椀。401 は青磁器碗。402 は染付皿。403 は染付蓋。404 は瓦質土器摺鉢底部。405 ～ 410 は土師器・須恵器を転用した土製

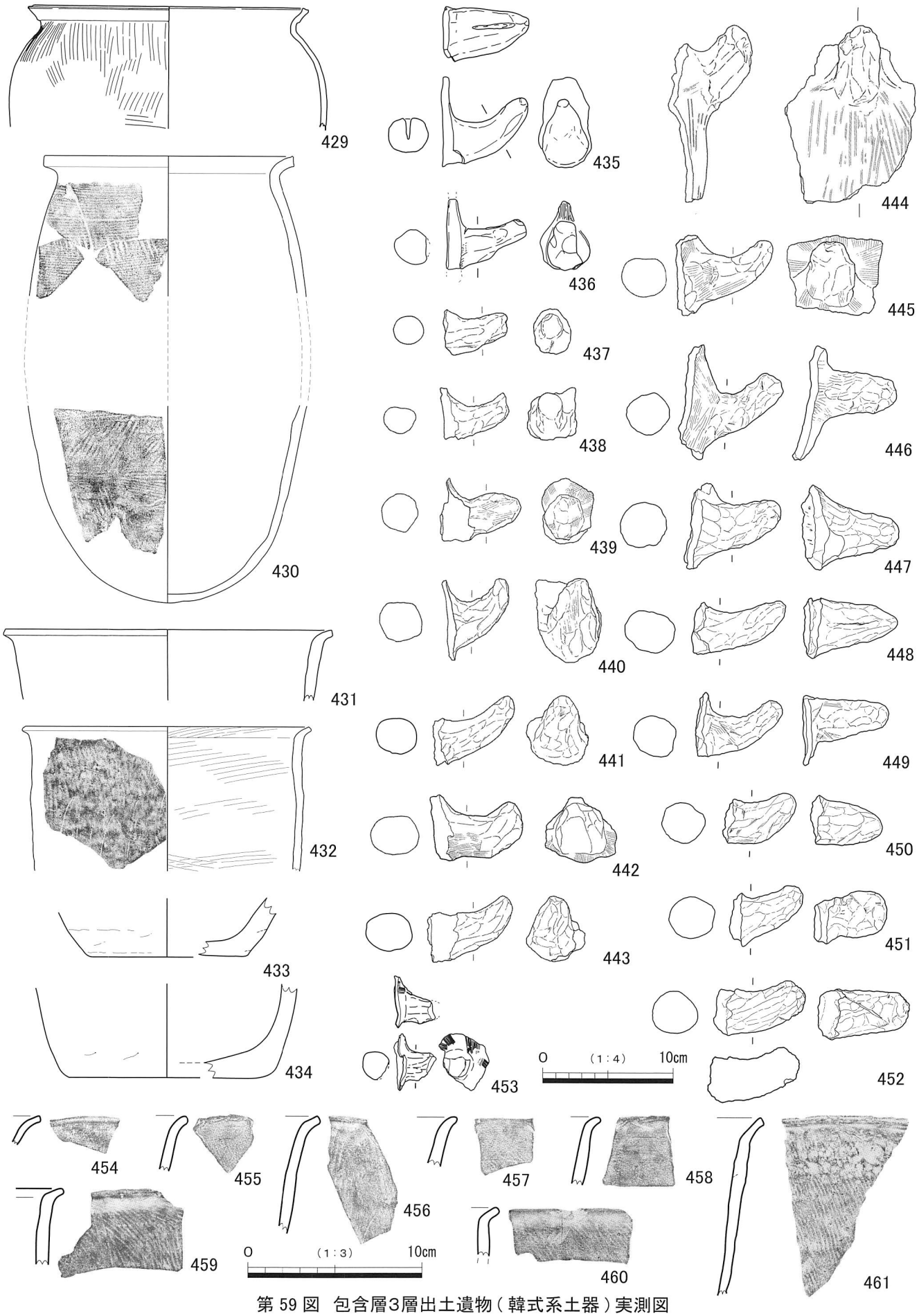
円盤。411 は鉄製鉢。412 ～ 415 は石製品で、412・413 は砥石、412 は砂岩、413 は緑泥片岩製である。413 では敲打痕が一部でみられ、石皿として転用された可能性がある。414 は滑石製の石符。盾形で、下方に凹線と下端に抉りが施される。415 は滑石製有孔円盤で中央に２点の円孔をもつ。

包含層２層　韓式系土器（416 ～ 418）、土師器（419 ～ 421･426）、黒色土器（422･423）、灰釉陶器（424･425）、瓦（427･428）が出土した。416 ～ 418 は韓式系土器片で、いずれも陶質である。416･417 では内面に細い同心円状のタタキが施される。419 は土師器甕で、寸胴な体部に緩やかに屈曲して直線的に伸びる口縁つく。420 は土師器杯。421 は土師器皿で、内面に「メ」字状のヘラ記号が施される。422･423 は黒色土器底部片で底部のみ残存する。424・425 は灰釉陶器で、425 では見込みに重ね焼の痕跡が残る。426 は羽釜で口縁～体部が残存する。427･428 は平瓦片で、２点とも一端が面取され、427 では凸面に格子目タタキ痕、428 は凸面に縄目タタキ痕がみとめられる。

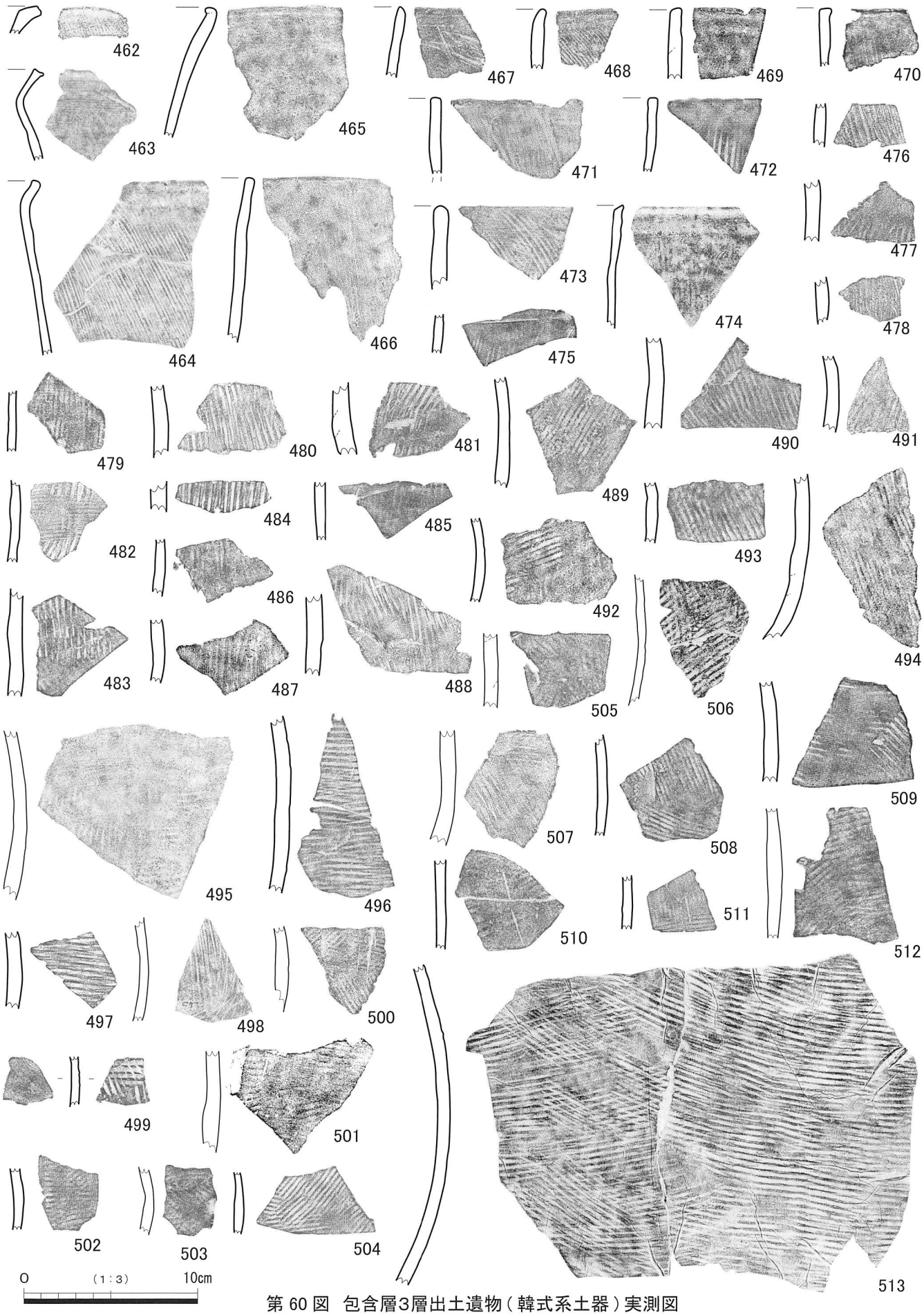
包含層３層　韓式系土器（429 ～ 567）、土師器（568 ～ 619）、須恵器（620 ～ 623）、弥生土器（624 ～ 626）、土製品（627）、木製品（628）、石製品（629 ～ 646）が出土した。492・430 は韓式系土器甕で、429 は体部が丸みをもち口縁部は短く外湾する。430 は韓式系土器長胴甕で、丸底の底部から体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は強く外湾して外方に面をもつ。431･432 は韓式系土器甑もしくは鍋の口縁部。433・434 は韓式系土器平底鉢底部。435 ～ 453 は韓式系土器鍋もしくは甑の把手で、いずれも断面は円形であるが、435・440・441・443 ～ 445・447・448・450 は上方に湾曲し、先端が細くなるが、436 ～ 439・442・446・449・451・452 は円柱状を呈する。435 では上面に切り込みが入り、452 では下面に工具刺突による切り込みが認められる。453 は他に比べ小形であることから、ミニチュア土器である可能性がある。454 ～ 474 は韓式系土器鍋甕もしくは鍋・甑の口縁部片で、454 ～ 461 は上方に開く体部から口縁部が屈曲して広がって端部は外方に面をもつもの、462 は上方に開く体部に短く屈曲する口縁部がつくもの、463・464 は体部から「く」字状に屈曲して口縁部は外方に端面を持つもの、465 は端部が内面に肥厚するもの、466 ～ 474 は直線的にのびるものである。475 ～ 515 は韓式系土器甕もしくは鍋・甑の体部片である。概ね縦・横・ナナメの並行タタキが施されるが、475 はタタキ後に横方向の凹線がほどこされる。514・515 はタタキが認められず、ナデもしくは無文タタキが施された可能性がある。516 は平底の鉢もしくは鍋の底部片で、底面には木の葉と思われる圧痕が施される。517 ～ 551 は韓式系土器鍋甑の底部片で、いずれも底面に蒸気孔をもつ。517 ～ 541 では円形の蒸気孔、542 ～ 547 は中央に円形とその周囲に楕円形の蒸気孔、548 はやや小さい円形の蒸気孔、550 では２点の楕円形の間に小さい円形の蒸気孔が認められる。552 ～ 561 は陶質の韓式系土器で、552 は体部が球状の甕で、外面に格子目タタキが施される。553 は口縁部に段を持つ壺口縁部、554 は外面に波状文が施される壺口縁部である。555 は瓶で平底の底部から筒状の体部が丸みを帯びて立ち上がり、肩部は内湾し、頸部は断面が楕円形を呈する[2)]。556 は把手付鉢の底部、556 は把手部である。558 は瓿もしくは壺口縁部で、外面に凹線と波状文が施される。559 ～ 567 は外面に格子目タタキが施されるもので、566 では内面に細い同心円状のタタキが施される。568 は土師器直口壺。569 ～ 581 は土師器甕で、569 は口縁～肩部と体部～底部が残存し、570 ～ 581 は口縁部のみ残存する。582 ～ 613 は土師器高杯で、582・583 は口縁～脚部、584・585 は口縁～柱状部、586 ～ 594 は杯部、595 ～ 613 は脚部のみ残存する。582・594 は有稜高杯であるが、杯部の屈曲部が丸みを持つ。583 ～ 593 は椀形高杯。595 ～ 607 は脚部中位～下位にかけて円形の透孔をもつ。614 は土師器器台の脚部と考えられる。615 ～ 618 は３土師器と考えられるが、いずれも底部を書くため、高杯の杯部の可能性もある。619 は土師器杯で、見込みに「メ」字形のヘラ記号が施される。568 ～ 619 のうち、574･579 は古墳時代初頭（庄内式古相）、それ以外は概ねは古墳時代中期（布留式新相以降）に比定できる。620 ～ 623 は須恵器である。620・621 は壺で、620 は口縁・体部に突帯と波状文、622 は肩部から体部にかけて列点文・沈線・波状文が施される。621 は須恵器甕口縁～体部で、口縁部に段をもち、肩部



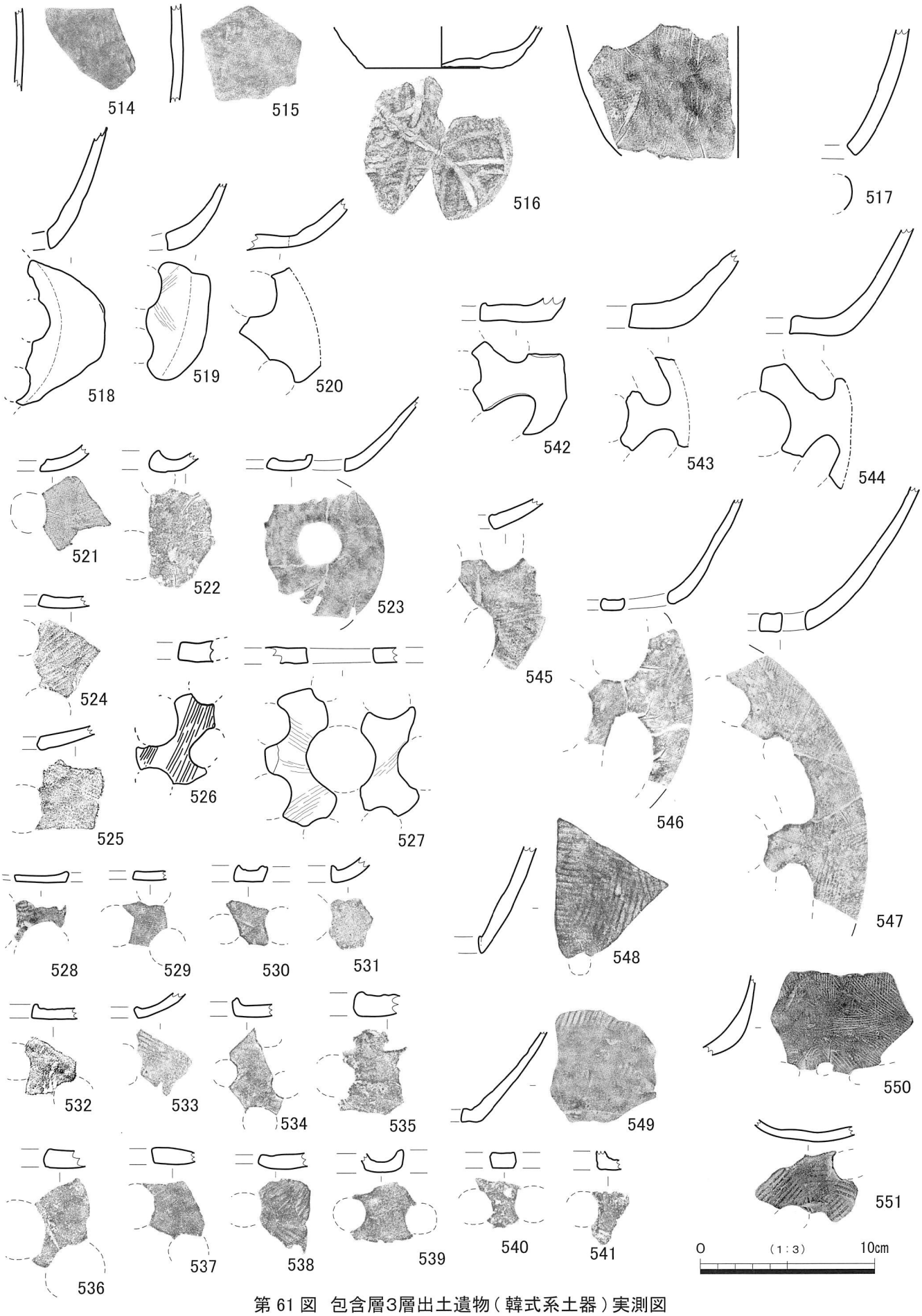
第 58 図　包含層1・2層出土遺物実測図



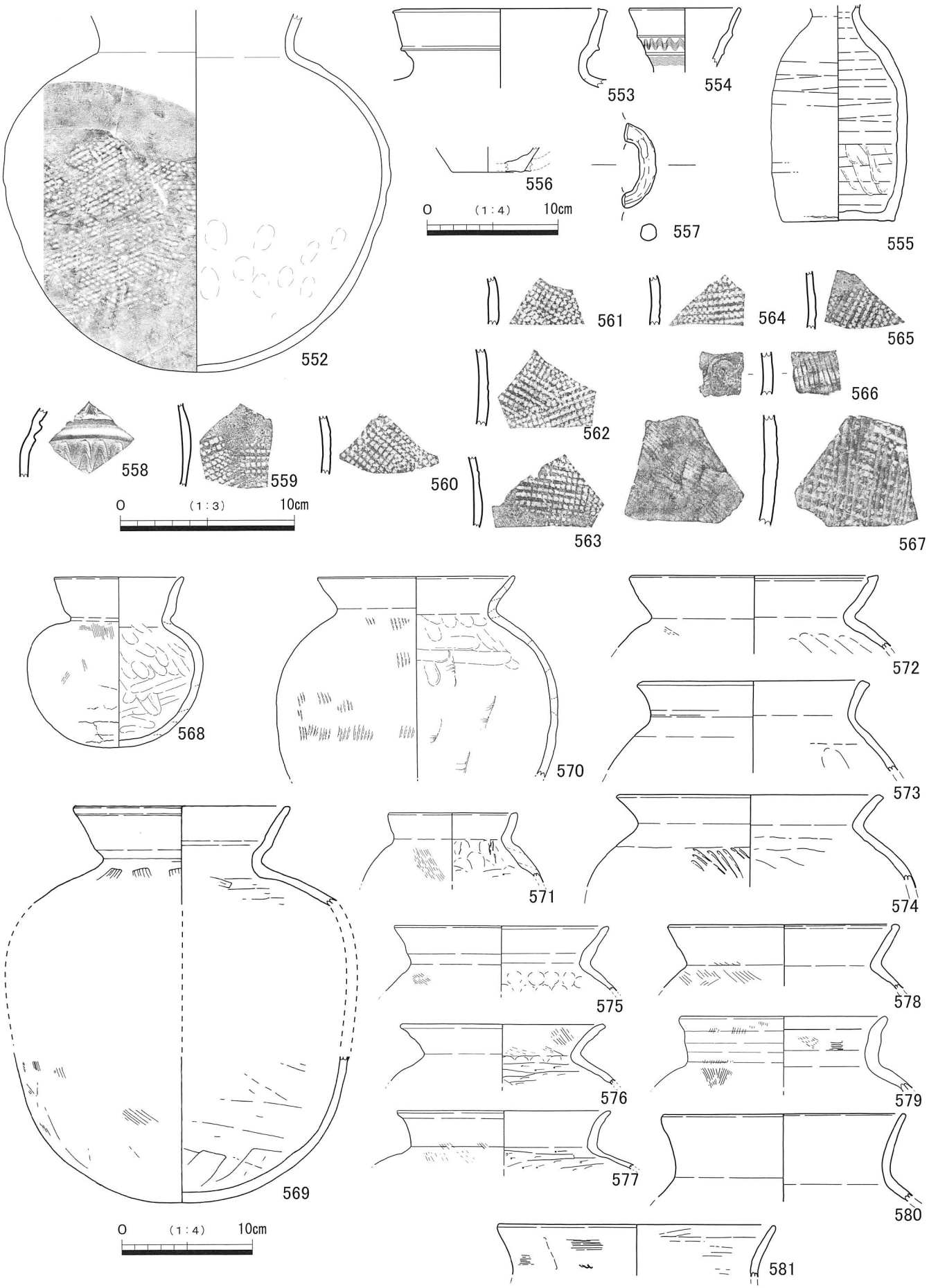
第 59 図　包含層3層出土遺物（韓式系土器）実測図



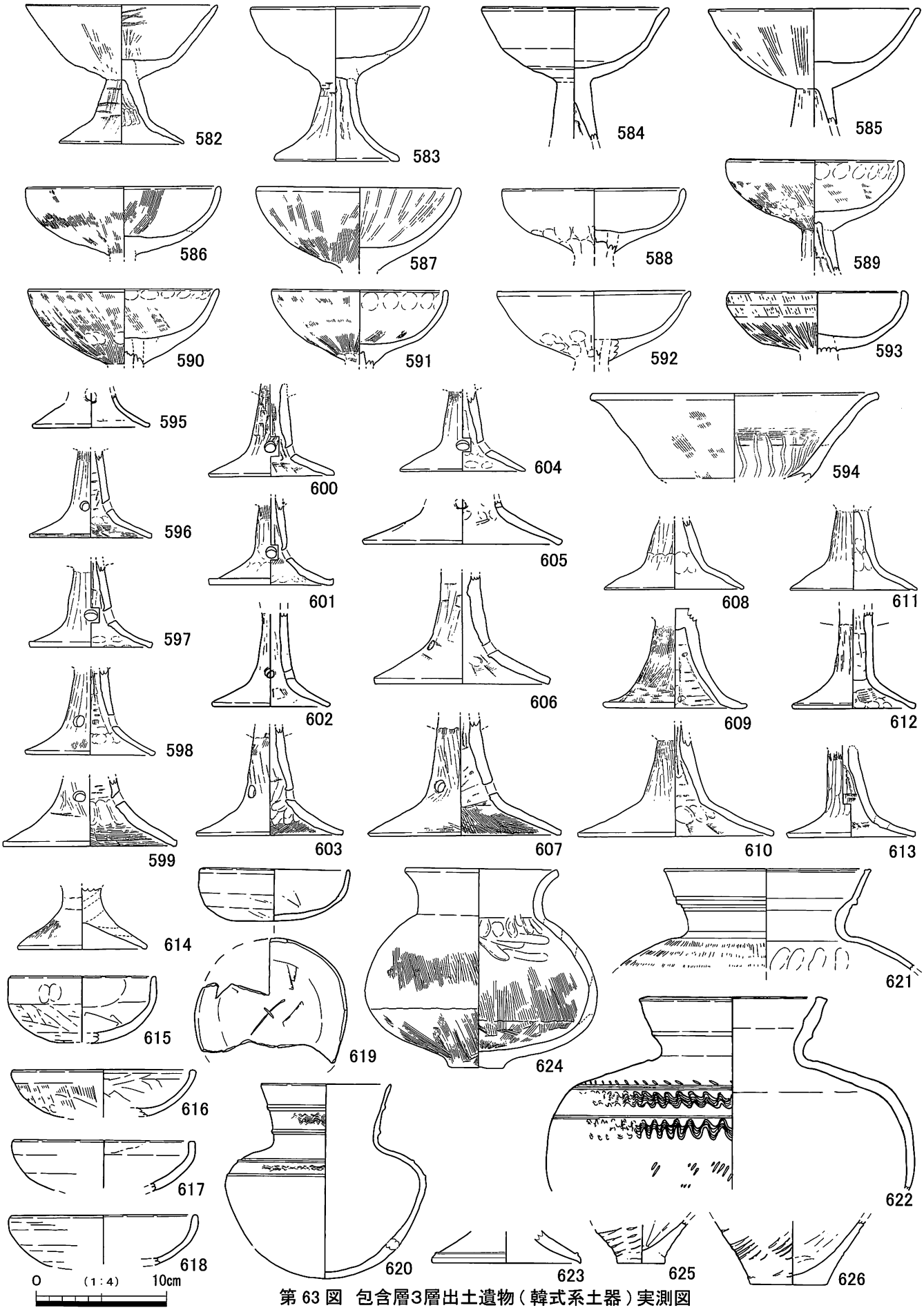
第 60 図　包含層3層出土遺物（韓式系土器）実測図



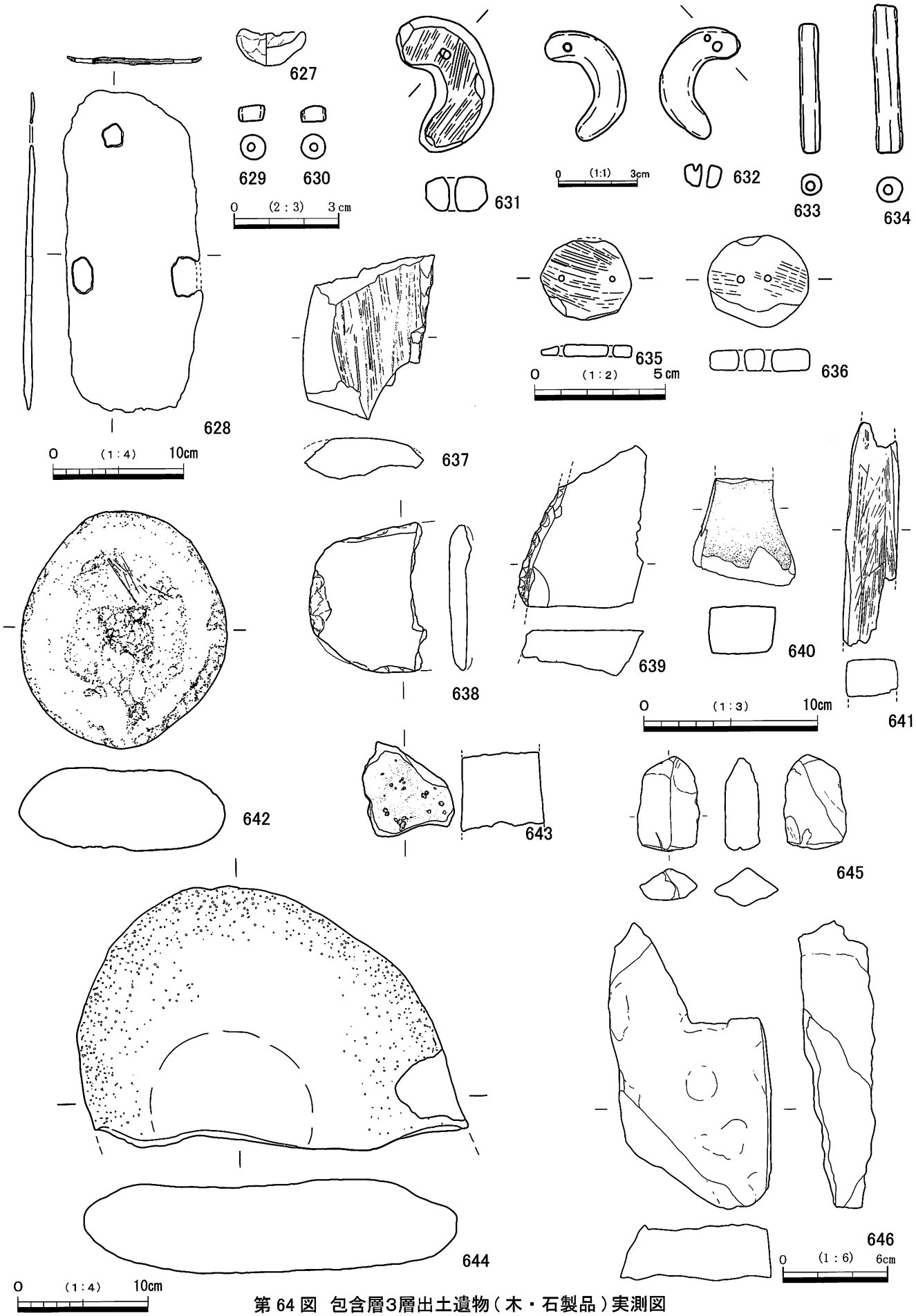
第 61 図　包含層3層出土遺物（韓式系土器）実測図



第 62 図　包含層3層出土遺物（韓式系土器）実測図



第 63 図　包含層3層出土遺物（韓式系土器）実測図



第 64 図　包含層3層出土遺物（木・石製品）実測図

はタタキ後に回転ナデが施される。623は高杯脚部。いずれも古墳時代中期（TK208～TK23型式）に比定できる。624～626は弥生土器で。624広口壺、625・626は甕または鉢底部片である。3点とも弥生時代後期後半（Ⅴ様式）に比定できる。627は土製品の手づくね土器で、鉢形を呈する。628は木製の下駄で3点の緒孔をもつ。629～646は石製品で、629・630は滑石製の玉。631・634は滑石製の勾玉で、632では片面に貫通する孔のやや上方で孔状のくぼみがある。633・634は滑石製管玉。635・636は滑石製有孔円板で、中央に2点の円孔を持つ。637は粘板岩系の磨製石斧。638は緑泥片岩製の石包丁で、未製品と考えられる。639・640・641は砥石で、639は畝傍山産と思われる流紋岩製、640は砂岩、641は粘板岩である。642は砂岩製の磨石。643・644は石皿で、643は安山岩系、644は砂岩製である。645・646は用途不明の石製品で、645は断面が菱形を呈するもので、砂岩製である。646は現状で「L」字状の石板で、安山岩系とおもわれる。

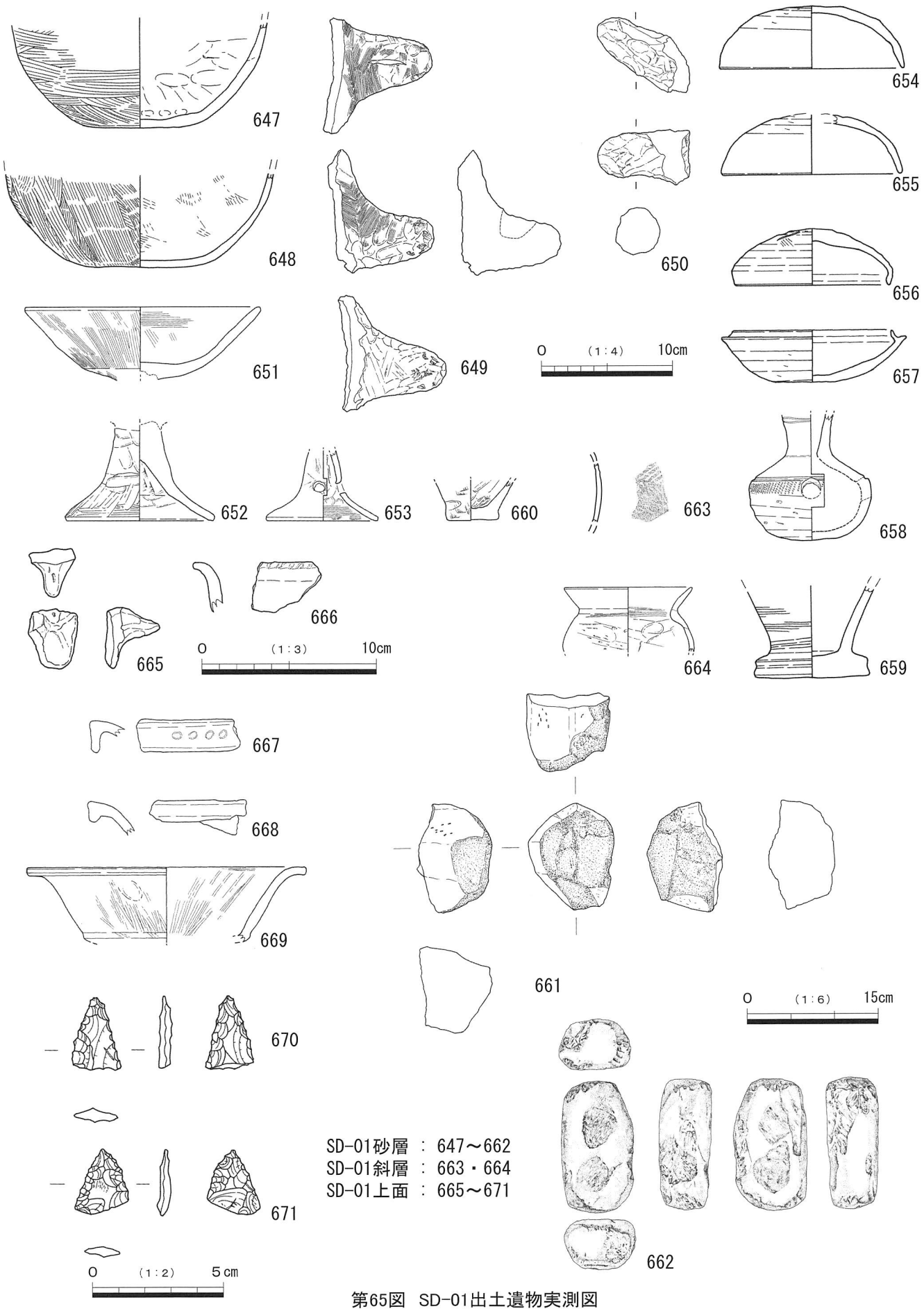
註

1) 朴天秀氏より、文様・形態などから朝鮮半島の固城地域からの舶載品である可能性が高いとご教示いただいた。

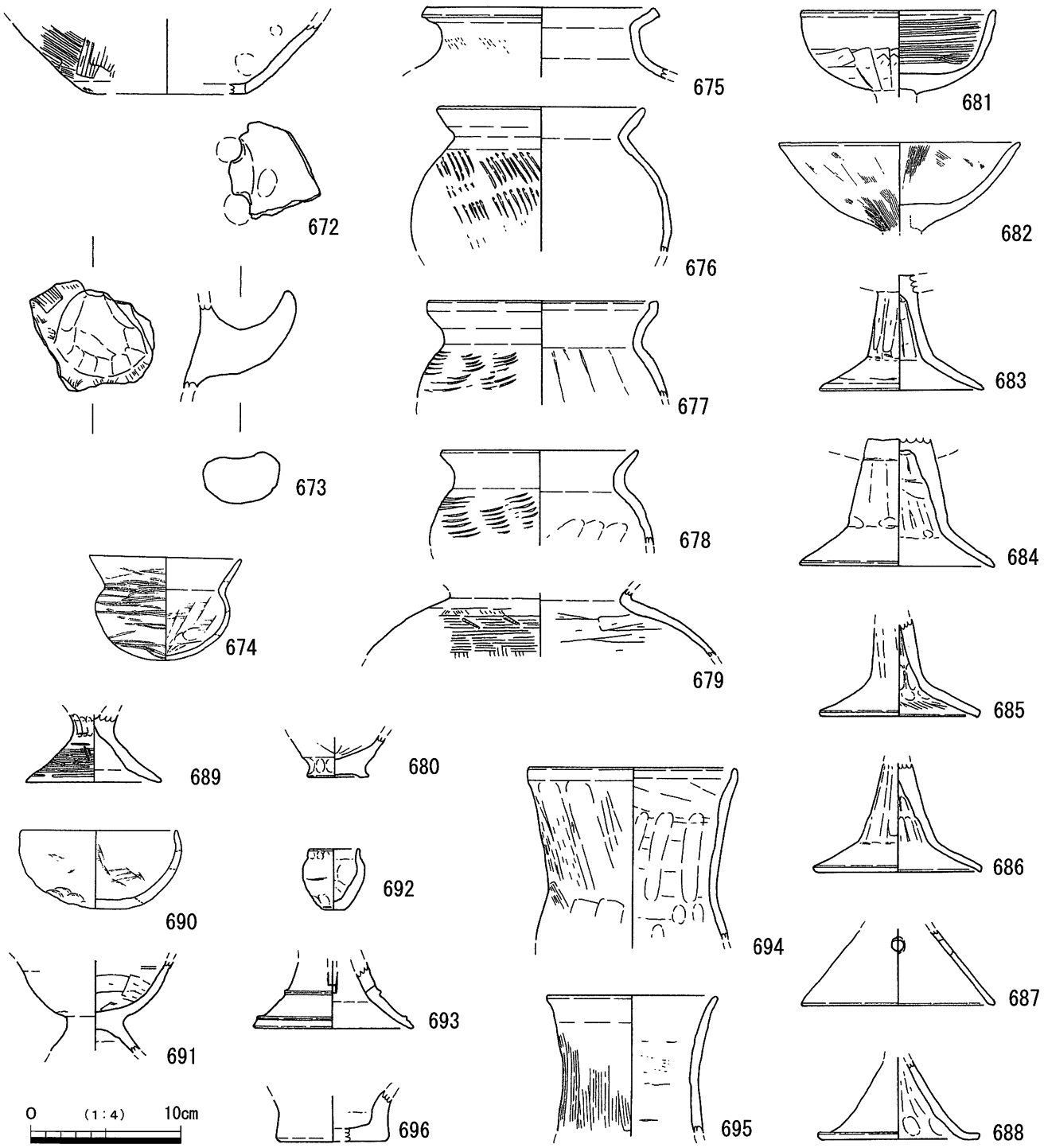
2) 韓式土器研究会より、類似品に百済系の陶質土器で平底瓶があるが、それらよりも体部が細いことなどから、舶載品を模倣した可能性が高いとご教示いただいた。

（2）長田3次調査出土遺物

SD－01 砂層からは韓式系土器（647～650）、土師器（651～653）、須恵器（654～659）、弥生土器（660）、石製品（661・662）が出土した。647・648は韓式系土器底部に平坦面をもつ甕または鍋と考えられる。649・650は韓式系土器の鍋もしくは甑の把手部で、649では把手上面に切り込みが入る。651～653は土師器高杯で、651は稜が退化した高杯の杯部、652は脚柱部が中実の脚部である。653は土師器高杯脚部で、円形の透孔を1点もつ。651～653は古墳時代前期（布留式古相～新相）654～659は須恵器で、654～656は杯蓋、657は杯身、658は瑤、659は鉢で、いずれも古墳時代後期（TK10～TK209型式）に比定できる。660は弥生土器甕底部片で、弥生時代後期後半（Ⅴ様式）に比定できる。661・662は石製品で、661は安山岩製敲石、662は砂岩製敲石と考えられる。斜層からは韓式系土器（663）、土師器小型丸底壺（664）が出土した。663は外面に矢羽根タタキが施される韓式系土器片。664は土師器小型丸底壺で、球状の体部に短く直線的にのびる口縁部がつく。古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。上面からは、土製品（665）、弥生土器（666～668）、土師器（669）、石製品（670・671）が出土した。665は土師器ミニチュア土器の甑もしくは鍋の把手部で、把手上面には小さく切り込みが入る。666は弥生土器甕の口縁部で、口縁部は外反して端部は刻み目が施される。弥生時代前期（Ⅰ様式）に比定される。667・668は広口壺口縁部で、端面は垂下して667では竹管文が施される。667・668は弥生時代後期後半（Ⅴ様式）に比定できる。669は土師器有稜高杯杯部で、古墳時代初頭（庄内式新相）に比定できる。670・671はサヌカイト製石鏃の未製品である。下層からは韓式系土器（672･673）、土師器（674～691）、ミニチュア土器甕（692）、須恵器（693）、弥生土器（694～696）、が出土した。672・673は韓式系土器。672は甑底部で、底面に円形の蒸気孔をもつ。673は甑もしくは鍋の把手。674は土師器小型丸底壺で、球状の体部に直線的にのびる口縁部がつく。古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。675～680は土師器甕で、675～678は口縁～体部、679は頸部～体部、680は底部のみ残存する。675は内傾する頸部から屈曲して口縁部が外反し、端部は外方に面を持つ。675～677は古墳時代初頭（庄内式古相～中相）、680は古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。680は土師器甕底部と考えられるが、鉢の可能性もある。681～686は土師器高杯で、681は椀形、682は屈曲部が退化した有稜高杯の杯部のみ残存する。683～686は脚部のみ残存する。

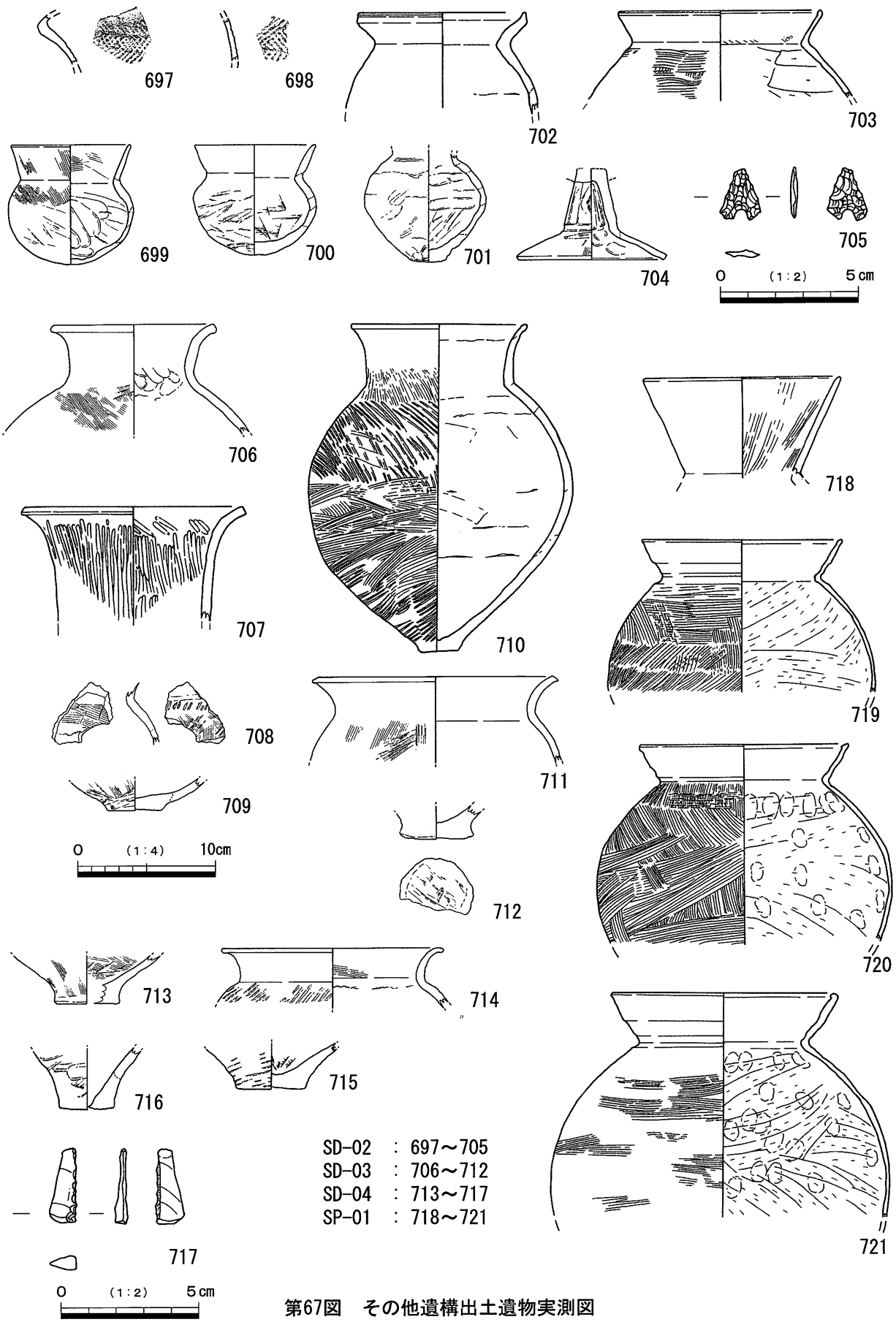


第65図 SD-01出土遺物実測図

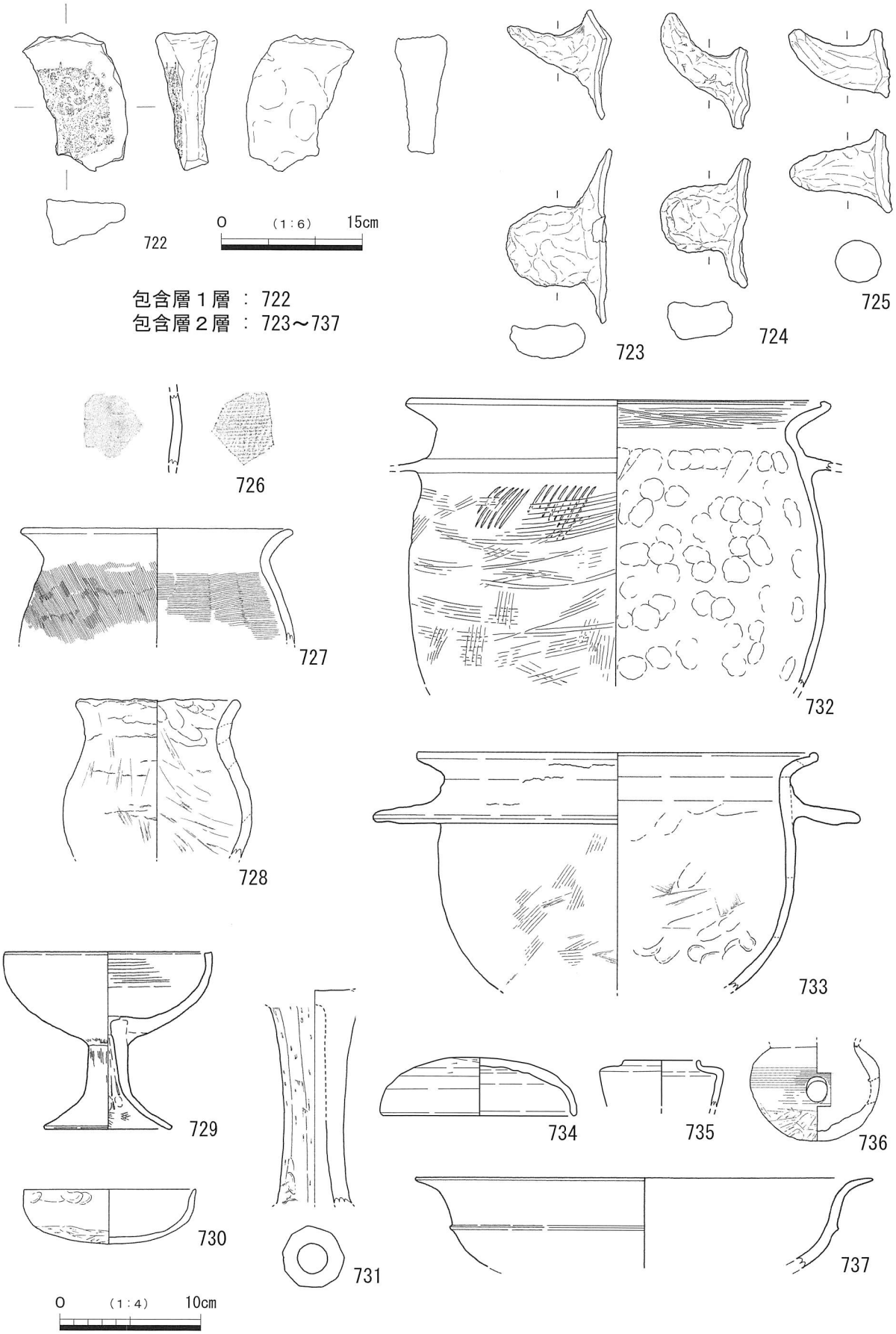


第66図　SD-01出土遺物実測図

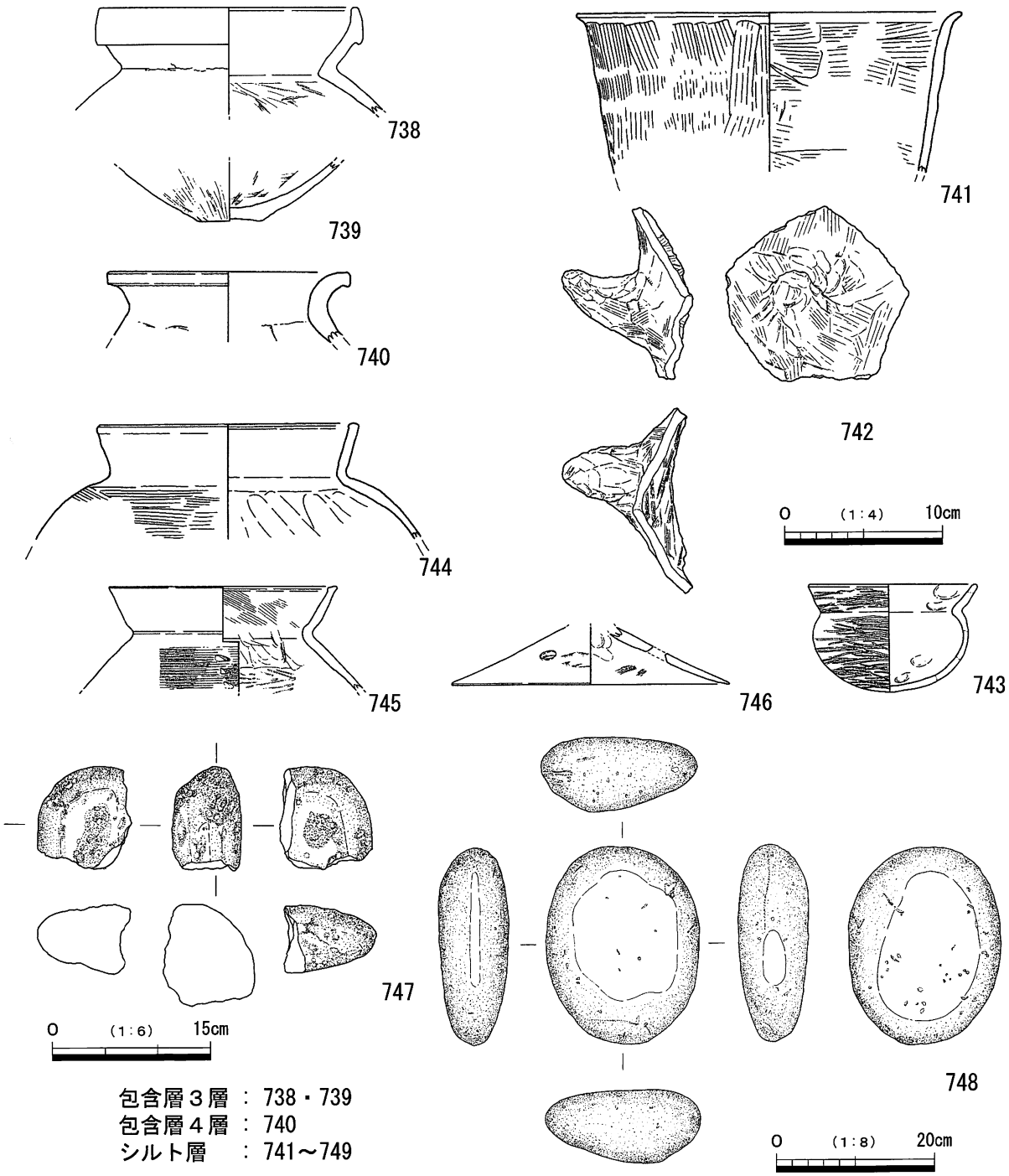
いずれも古墳時代中期（布留式新相）に比定できる。687・688は「ハ」の字状に開く土師器で、器台脚部と考えられ、古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。689は土師器器台。690は椀形の杯。691は台付鉢の鉢底部～台部が残存する。689・691は古墳時代初頭（庄内式新相）、690は5世紀後半に比定できる。692はミニチュア土器甕。693は須恵器高杯脚部で、方形の透孔をもつ。古墳時代後期（TK-10～TK-43形式）に比定できる。694～696は弥生土器で、694・695は長頸壺の口縁部、696は甕底部片で、3点とも概ね弥生時代後期後半（Ⅴ様式）に比定できる。



第67図　その他遺構出土遺物実測図



第68図　包含層１・２層出土遺物実測図



第69図　包含層３・４層、シルト層出土遺物実測図

SD－02　韓式系土器（697・698）、土師器（699～704）、石製品（705）が出土した。697・698は韓式系土器甕体部片で、外面に矢羽根タタキが施される。699・700は小型丸底壺で、２点とも球体の体部に直線的にのびる口縁が付く。701は小型壺の体～底部で、底面は平底を持つ。702・703は土師器甕で、２点とも口縁～体部が残存する。702は口縁端部が摘み上げられ、703は端部が内面に肥厚する。704は土師器高杯脚部。701・702は古墳時代初頭（庄内式古相）、699・700・703・704は古墳時代前期（布留式古相）に比定できる。705はサヌカイト製凹基無茎式の石鏃である。

SD－03　弥生土器７点を図化した。706・707は弥生土器壺で口縁部のみ残存し、706は広口壺、707は長頸壺である。708は壺体～頸部で、外面に列点文が施される。710はレモン形の体部に直立して

端部が外反する口縁がつく甕で、搬入品の可能性がある。711 は甕口縁部。712 は甕底部。いずれも弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定される。

SD ― 04　弥生土器 (713 ～ 716)、石製品 (717) が出土した。713 は弥生土器壺の底部。714・715 は弥生土器甕で、714 は口縁部、715 は底部片である。716 は有孔鉢底部で、底面中央に１点円形の焼成前穿孔が施される。４点はいずれも弥生土器後期後半（Ｖ様式）に比定される。717 は石製品で、サヌカイト製の細片である。

SP ― 01　土師器４点を図化した。718 は土師器直口壺の口縁部。719 ～ 721 は土師器甕口縁～体部片。４点とも古墳時代前期（布留式古相）に比定される。

遺構に伴わない遺物

包含層１層　石製品１点を図化した。726 は花崗岩製の石皿で、平坦面の一部のみ残存する。中央の広い範囲で敲打痕が認められる。

包含層２層　韓式系土器 (723 ～ 726)、土師器 (727 ～ 733)、須恵器 (734 ～ 737) を図化した。723 ～ 725 は韓式系土器鍋または甑の把手。736 は陶質の韓式系土器片で、甕体部と考えられる。外面に平行タタキ、内面に細い青海文状の同心円タタキが施される。727・728 は土師器甕、729 は土師器高杯、730 は土師器杯で、727 ～ 730 は古墳時代中期に比定される。731 は大形の土師器高杯脚柱部で、外面は面取りされて９面もつ。８世紀～９世紀に比定できる。732･733 は土師器羽釜で、２点とも口縁～体部下位まで残存する。734 は須恵器杯蓋。735 はやや小形の須恵器短径壺口縁部。736 は䰟体部。737 は須恵器器台の口縁部。734・736・737 は古墳時代後期 (TK-10 型式)、735 は８世紀に比定できる。

包含層３層　738・739 は弥生土器壺で、738 は垂下して外面側に広い端面をもつ口縁部、739 は底面中央がわずかにくぼむ底部片である。738 は搬入品の可能性がある。２点とも弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。

包含層４層　740 は弥生土器広口壺口縁部片で、弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。

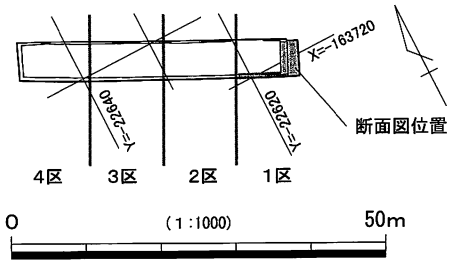
シルト層　韓式系土器 (741 ～ 742)、土師器 (743 ～ 746)、石製品 (747・748) を図化した。741・742 は韓式系土器で、741 は甑口縁部、742 は甑もしくは鍋の把手部である。743 は土師器小型丸底壺で、楕円形の体部に直線的に伸びる口縁部がつく。744・745 は土師器甕で２点とも口縁～体部が残存し、口縁端部に面をもち内面に肥厚する布留式土器である。744 は口縁部が直立気味、745 は体部に工具押圧痕がみられる。746 は「ハ」の字状に開く土師器器台の脚部。746 は古墳時代初頭（庄内式古相）、743・745 は古墳時代中期（布留式新相）、744 は古墳時代中期に比定される。747・748 は花崗岩製の石製品で、747 は約 1/4 ほどが残存する磨石、749 はほぼ完形の石皿である。

５、小結

以上、調査の成果について述べてきた。限られた調査範囲ではあったが、その規模と流れる方向から旧葛城川ともいうべき大河道と共存した古墳時代の集落存在が明らかになったことは、大きな成果であった。さらには、数多くの韓式系土器が出土し、韓半島からの渡来人と密接な関わりを持つ集落であることも裏付けられたが、これまで大和高田市北部域とその周辺は韓式系土器分布の空白地帯であったところだけに、にわかに注目を浴びることとなった。この成果が古墳時代の集落の構造論、渡来人の足跡を辿っていくための糸口として活用されていくことを期待したいところである。

第４章　土庫長田遺跡２次調査成果

当調査区は、対象地において最も西側に設定した、北西－南東方向に細長い長方形の調査区である。調査区の規模は、長さ約 38 m、幅約５m、面積約 190 ㎡を測る。調査区の地区割りについては、合計４区画を設定し、東方より順に１区（８×５m）、２区（10×５m）、３区（10×５m）、４区（10×５m）を設定した。



第 70 図　長田遺跡2次調査地区割図

１．層序と調査方法

（１）層序について

２次調査区の基本層序については、以下の通りとなる。

第１層　表土・現代耕作土層。

第２層　黄褐色砂混粘質土。中世遺物包含層。ローリングを受けた土師器、瓦器細片を僅かに包含する。土層観察により数層の土層に細分できる。上面に素掘り溝が掘り込まれる土層も認められ、中世以降の耕作土堆積土層と考える。土層の堆積は、調査区全域において認められ、1区において最も厚く堆積する。１次調査区の「包含層１層」に相当する土層と思われる。

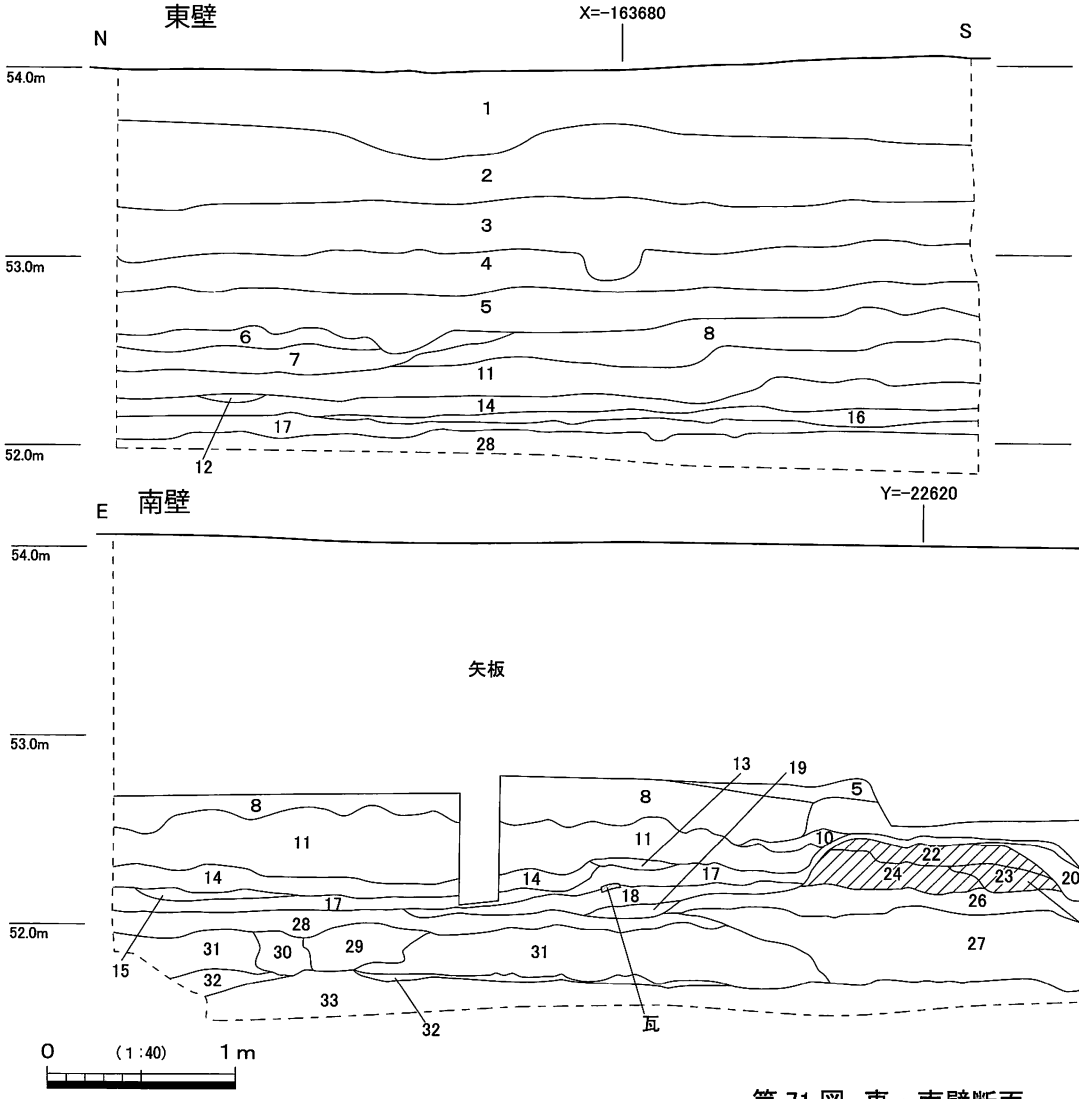
第３層　黄灰色砂。洪水砂層。ローリングを受けた古墳時代後期～鎌倉時代に至る各種遺物細片を包含する。下限を示す遺物として瓦器椀が出土しており、最終埋没時期は 14 世紀前半頃と考えられる。後述の畦畔１を埋没させる土層であり、畦畔１を境として２～４区に認められる土層である。なお１区においては、洪水砂の上面から切り込んで人為的に撹拌されたと見られる土層が認められ、おそらく洪水砂の堆積後間もなく耕作土として利用されたものと考える（第２層内砂層）。

第４層　暗灰黄色砂混粘質土。古代遺物包含層。土層観察により数層の土層に細分できる。上面に素掘り溝が掘り込まれる土層も認められ、耕作土の堆積土層と考える。ローリングを受けた古墳時代後期～平安時代前期に至る各種遺物細片を包含する。最も新しい時期の出土遺物として、８世紀末～９世紀前半頃の須恵器があるが、下層の出土遺物より、古い時期の遺物のみが出土している。後述の畦畔１を境として、1区のみに認められる土層である。1次調査区の「包含層２層」に相当する土層と思われる。

第５層　黄橙色砂層。洪水砂層。第６層上面で検出した水田を埋没させた砂層であり、層厚は約 10 cmを測る。遺物の出土は無い。後述の畦畔１を境として２～４区のみに認められる土層である。

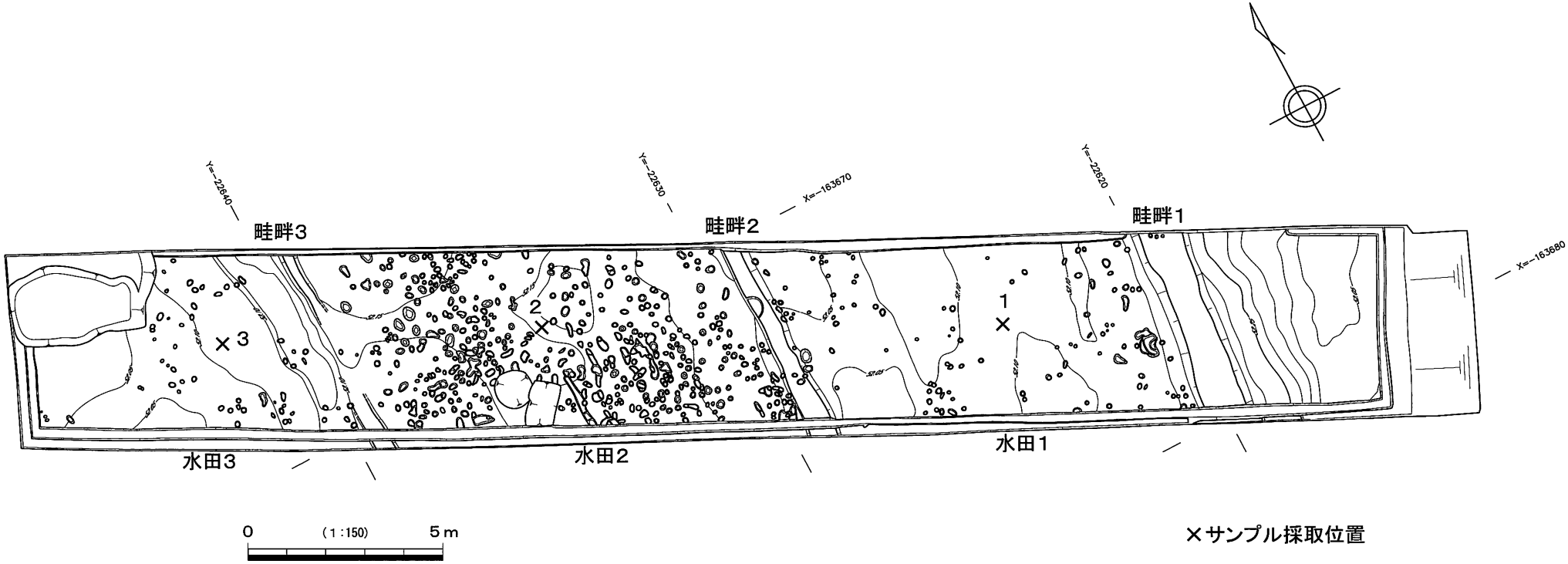
第６層　灰色オリーブ色シルト、または青灰色シルト。水田耕作土層。上面において畦畔、ヒト・ウシと思われる足跡、稲株痕と思われる小穴群を検出している。後述の畦畔１を境として２～４区のみに認められる土層であり、2区においては灰色オリーブ色シルト、３・４区においては青灰色シルトが認められる。遺物の出土は無い。水田の時期については、下層に当たる第７層出土遺物より９世紀～ 11 世紀前半頃と考えられる。

第７層　灰色シルト混砂。整地層。第６層（水田耕作土層）の直下層である。遺物の包含状況により上下層に分層が可能である。第７層上層については層厚約 10cm を測り、古墳時代後期～平安時代中期に至る各種遺物細片を多量に包含する。第７層下層については層厚約 40cm を測り、上面付近のみ第７層上層と同様の遺物を包含する。また砂を多く含み、ややしまりが無い土層となる。第７層上・下層共に、後述の畦畔１の下部から２区にかけて認められる土層であ



1 2.5Y3/2 黒褐色砂混シルト。2層のブロックと砂礫、炭化物を多く含む。 一第1層
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混シルト。10mm 以下の粗い砂を含む。
3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂混シルト。砂は 10mm 以下で2層よりも多く含む。
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混粘質土。10mm 以下の粗い砂を含む。
5 10YR5/2 灰黄褐色砂混シルト。2.5Y5/4 黄褐色シルトのブロックを多く含む。10mm 以下の粗い砂を含む。
6 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘質土。5層ブロックを少量含む。5mm 以下の砂を含む。
7 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘質土。6層より砂は少ない。
8 10YR4/2 灰黄褐色砂混粘質土。7層より砂は少ない。10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土ブロック(素掘溝)と粘質土混砂ブロックを含む。 第2層
9 5Y5/1 灰色砂に 2.5Y5/3 黄灰色砂がブロックで混じる。一部シルトを含む。 一第3層
10 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。砂をやや多く含む。
11 2.5Y4/2 暗灰黄色に 10YR4/2 灰黄褐色のブロックを 35%含む砂混粘質土。
12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂混シルト。5mm 以下の砂を多く含む。(素掘溝)
13 7.5YR4/1 褐色シルト。砂を多く含む。
14 2.5Y4/2 暗灰黄色砂混粘質土。11 層より砂を多く含み炭化物を少量含む。
15 14 層と同じであるが、砂を多く含む。
16 2.5Y4/2 暗灰黄色に 10YR3/4 暗褐色のブロックが霜降状に 30%入る砂混粘質土。炭化物を少量含む。
17 2.5Y4/2 暗灰黄色に 10YR4/4 褐色のブロックが霜降状に 45%入る砂混粘質土。4mm 以下の砂を含む。
18 5Y4/1 灰色シルト。粗い砂をやや多く含む。
19 5Y4/1 灰色砂混シルト。
20 5Y4/2 灰オリーブ色シルト。一部で 21 層の砂が混じる。 第4層
21 10YR7/3 にぶい黄橙色砂(5mm 以下)。 一第5層
22 7.5Y4/1 灰色シルト。
23 10Y4/1 灰色シルト。砂と植物遺体を含む。
24 5Y3/1 オリーブ黒色シルト。砂を多く含み植物・動物遺体(歯)が多く混じる。 畦畔 1
25 5Y4/2 灰オリーブ色シルト(水田耕作土) 一第6層
26 7.5Y4/1 灰色シルト。粗砂を多く含み、植物遺体が少量混じる。
27 10Y4/1 灰色シルト混砂(5mm 以下)。 第7層
28 5Y4/2 灰オリーブ色に 2.5Y4/2 暗灰黄色が 30%混じる粘質土混砂(4mm 以下)。
29 10Y4/1 灰色粘質土混砂。
30 2.5Y5/3 黄褐色シルト混砂(2mm 以下)。
31 10YR4/6 褐色に 2.5Y4/3 オリーブ褐色が混じる粘質土混砂(10 mm以下)。
32 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト。 第8層
33 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト。 一第9層

第 71 図 東・南壁断面



第72図　長田遺跡２次調査区平面図

る。最も新しい時期の出土遺物として、黒色土器Ａ類が僅かに認められることから、９世紀～11世紀前半頃と考えられる。

第８層　暗灰黄色粘質土混砂。上面近くより溝が掘り込まれる。溝の埋土・土層中からの遺物の出土は無い。１区のみに認められる土層である。

第９層　暗オリーブ灰色シルト。無遺物層。

以上が２次調査区の基本層序となる。大きな特徴としては、第３層以下において、後述の畦畔１を境に基本層序の様相が大きく異なることである。以下にまとめると、畦畔１の東側（1区）においては、上から第１層、第２層、第４層、第８層、第９層の順に堆積が認められ、畦畔１の西側（２～４区）においては、上から第１層、第２層、第３層、第５層、第６層、第７層、第９層の順に堆積が認められる。

（２）調査方法

調査は、試掘調査において含有量の多さから遺物包含層として扱えた、第２層より下層を対象とし、遺構面の検出については、当調査区において最も古い水田の耕作土層として判断できた第６層の上面１面で行なった。調査方法としては、第２層より第６層上面直上までを機械力により慎重に掘削し、第６層上面直上より人力掘削を行い、遺構検出を行った。結果、条里方向に乗る水田３枚、南北方向の畦畔３条、ヒト・ウシと思われる足跡や稲株痕と思われる小穴群が、１区を除く調査区において全面的に検出することができた。

２．検出遺構

（１）水田

水田は、２～４区において合計３枚を検出し、東側の水田より順に、水田１、水田２、水田３と称した。全て条里方向に整然と区画されており、南北方向に細長い条里型水田となる。このうち水田１・水田２においては水田の東西幅が明らかとなっており、それぞれ10ｍ近くを測る。そのため当調査区で検出された水田の区画は、１坪を長さ１町、幅６歩に細長く10等分する「長地型」であると考えられる。また、『大和国条里復原図』[1]によると、当調査区は広瀬郡22条３里10坪内の南西隅付近に位置する。以下に、各水田の詳細について述べることとする。

水田１　２区に位置する水田である。東側を畦畔１、西側を畦畔２によって区画されている。水田の規模は、東西幅8.8ｍ、長さ4.8ｍ以上、面積41.5㎡以上、床面の平均標高52.06ｍを測る。水田の耕作土は、層厚約４㎝の灰オリーブ色シルトとなる。当水田で注目されることは、水田耕作土層の直下（第７層上層）より土器などの遺物細片が、多量にに出土したことである。この遺物細片については、１片あたりの大きさが約２～10㎝大に揃っていること、割れ口が鋭く残るものが幾つか認められることから、意図的に大きさが整えられた後すぐに混入されたものと考えられる。基本層序のところで述べたとおり、この第７層上層の下は、ややしまりの無いシルト混砂層（第７層下層）となっていることから、おそらく水田の造成前に、地盤強化のため遺物細片を多量に混入させながら整地を行ったものと考えられる。また、第７層より下層において目立った遺物包含層は見られないことから、遺物は他より持ち込まれたものと考えられる。最も新しい遺物として、僅かに黒色土器Ａ類（高台部分）が出土していること、瓦器の出土が無いことから、水田の時期については９世紀～11世紀前半頃と考えられる。

水田２　３区から４区東端部分に位置する水田である。東側を畦畔２、西側を畦畔３によって区画されている。水田の規模については、東西幅9.6ｍ、長さ5.0ｍ以上、面積48.3㎡以上、床面の平均標高52.11ｍを測る。水田の耕作土は、青灰色シルトとなる。今回検出された水田の中では最も多くの足跡および稲株痕と思われる小穴群を検出した。

水田３　４区に位置する水田である。東側を畦畔３によって区画されている。水田の規模については、東西幅 7.5 m以上、長さ 5.0 m以上、面積 26.5 ㎡以上、床面の平均標高 52.08 mを測る。水田の耕作土は、青灰色シルトとなる。当該水田の位置については、調査区西端から西へ約３mの位置が広瀬郡 22 条３里 15 坪との坪境に当たると考えられることから、当該水田は広瀬郡 22 条３里 10 坪内における最西端に位置する水田であると考えられる。

（２）畦畔

畦畔は、１～４区において合計３条を検出し、東側の畦畔より順に、畦畔１、畦畔２、畦畔３と称した。全て条里方向に乗り、南北方向に伸びる。以下に、各畦畔の詳細について述べることとする。

畦畔１　１区と２区の境に位置する畦畔である。規模については、基底部幅 121cm ～ 139cm、上面幅 77 ～ 107cm、高さ 20 ～ 35cm、検出長 4.8 mを測り、調査区内で最大のものとなる。断面形状は台形を呈し、上面はほぼ平坦となる。畦畔は耕作土を盛り上げて造成されており、遺物細片を多く含む。この遺物細片については、水田１耕作土層直下の整地層（第７層上層）で見られた遺物と同様、１片あたりの大きさが約２～ 10cm 大に揃っていること、割れ口が鋭く残るものが幾つか認められることから、意図的に大きさが整えられた後すぐに混入されたものと考えられる。おそらく畦畔をより頑丈に造成するために混入されたものと考えられる。遺物は、古墳時代後期～平安時代中期までの幅広い時期の遺物が出土している。最も新しい時期の出土遺物として、僅かに黒色土器Ａ類が出土していること、瓦器の出土が無いことから、畦畔１の時期については、水田１と同じく９世紀～ 11 世紀前半頃と考えられる。

畦畔２　２区と３区の境に位置する畦畔である。規模については、基底部幅 63cm ～ 75cm、上面幅 38 ～ 62cm、高さ 15 ～ 20cm、検出長 5.3 mを測る。断面形状は半円形を呈する。畦畔は耕作土を盛り上げるだけの簡単な造りである。

畦畔３　４区に位置する畦畔である。規模については、基底部幅 31cm ～ 53cm、上面幅 19 ～ 42cm、高さ 10cm、検出長 3.0 mを測る。断面形状は半円形を呈する。畦畔は耕作土を盛り上げるだけの簡単な造りである。当該畦畔のみ、途切れた状態で検出している。おそらく洪水等により削平を受けているものと考えられる。

ここで畦畔の規模について触れておきたい。先述の通り高さ・幅ともに畦畔１が最大規模を測ることが注目される。基底部幅については、畦畔２および畦畔３が、それぞれ最大約 80cm、約 50cm を測るのに対して、畦畔１は約 140cm を測り、およそ２～３倍近くの規模となっている。高さについては、畦畔２および畦畔３が、それぞれ最大 20cm、10cm を測るのに対して、畦畔１は約 40cm を測り、２～４倍近い規模となっている。

このように畦畔１のみが大規模に造成される理由として、坪境畦畔としての役割がまず考えられるが、先の『大和国条里復原図』によると、当該畦畔の位置は坪境に該当しない。そこで、平面および土層観察によって、畦畔１を境とした土地利用の違いが２例確認できたことについて述べておきたい。まず１つ目としては、畦畔１の西側において検出された水田耕作土（第６層）・足跡等の小穴群が、畦畔１の東側同一面において検出されていないことであり、畦畔１が水田耕作地と非水田耕作地との境となっていることである。２つ目としては、畦畔１の西側の水田面が洪水砂（第５層）で埋没後、畦畔１の東側のみで耕作土と思われる土層（第４層）の堆積が認められることである。

以上に見られる畦畔１を境とする土地利用の差から、畦畔１については少なくとも、西側の水田１・水田２・水田３の範囲と、東側とを大きく区画する状況が認められる。これは単に用地の使い分けに応じた区画だけでなく、所有地の区画となる可能性も考えられる。また先述の通り、比較的規模が大きいこと、頑丈な造りであること、上面がほぼ平坦になっていることから、畦畔１が農道として使われた可能性も考えられよう。

なお、畦畔１は、この後西側において厚く堆積する洪水砂（第３層）によって埋没するが、畦畔１の東側のみ及んだ洪水砂は人為的に撹拌されて耕作土として利用されたと考えられる土層（第２層内砂層）が認められる。このことは、畦畔１の埋没後も同位置において、以前と同様の区画が継承されているものとして注目される。

（３）足跡、稲株等の小穴群

水田１、水田２、水田３の床面において、ヒト・ウシと思われる足跡、稲株痕と思われる小穴を多数検出している。先述の通り、これらは水田２において最も多く検出しているが、いずれにも規則的な配列は見られない。これらは全て第５層の洪水砂によって充填されている。

３．出土遺物

遺物は、畦畔１、第２層、第３層、第４層、第７層より出土した。古墳時代後期から鎌倉時代までの各時期の遺物が見られる。遺物の総量は、コンテナ箱で約６箱分となる。ほとんどの遺物は細片であり、図化できたものは畦畔１、第３層、第４層、第７層からの出土遺物のみである。

遺物内容は、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、瓦、土製品、石器となり、図化できなかったものの中には黒色土器Ａ類、獣骨（歯）が認められる。

以下、各遺構・遺物包含層ごとの出土遺物について述べることとするが、遺物個々の特徴については、基本的には遺物観察表に委ねた。

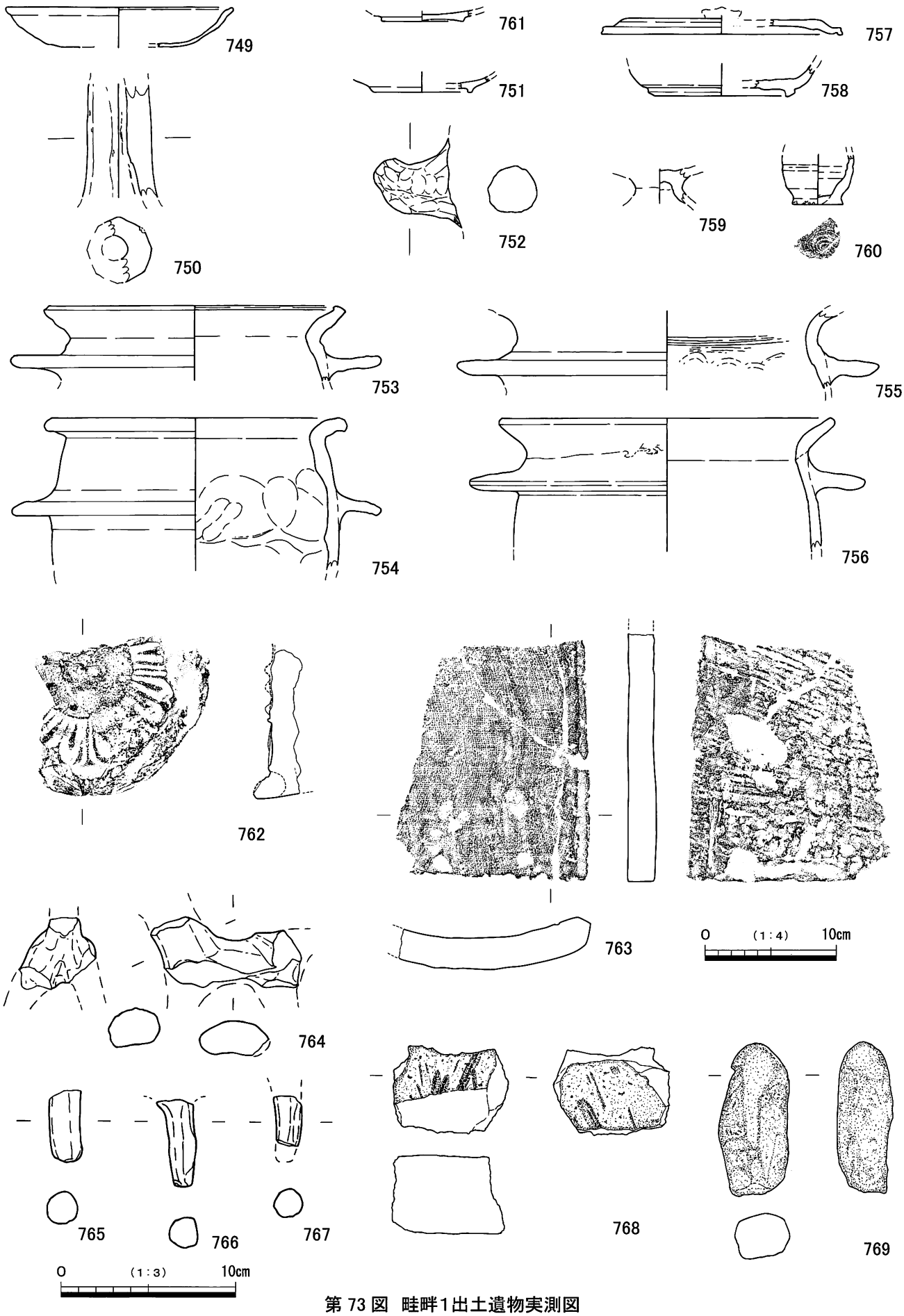
畦畔１（第73図）　古墳時代後期～平安時代中期までの遺物が出土しており、奈良・平安時代の遺物が多くを占める。遺物の総量はコンテナ箱で約２箱分である。出土遺物は、土師器（749 ～ 756）、須恵器（757 ～ 760）、緑釉陶器（761）、瓦（762・763）、土馬（764 ～ 767）、石器（768 ～ 769）がある。また、図化できなかったものの中に、最も新しい遺物と思われる黒色土器Ａ類が僅かに見られ、他に獣骨（歯）も見られる。遺物全体としては土師器・須恵器が大半を占める。

749は土師器皿で、９世紀後半頃のものと考える。750は土師器高杯脚柱部で、外面は面取りされ八角柱状を呈するものと思われる。751は土師器杯の高台部分である。752は土師器鍋または甑の把手部分であり、古墳時代後期のものと思われる。753 ～ 756は土師器羽釜で、口縁端部を内側に折り返すもの（753）と丸く収めるもの（754・756）とがある。757は須恵器杯蓋で８世紀後半頃、758は須恵器杯身で８世紀前半頃のものと思われる。759は須恵器高杯の杯～脚部の接続部と思われる。760は須恵器小型長頸壷で、底部外面に回転糸切痕が見られる。９世紀前半頃のものと考える。761は緑釉陶器椀または皿の高台部分であり、円盤状に削り出され、外面が僅かに窪んでいる。内外面全体に釉が認められ、９世紀頃のものと思われる。762は素文縁複弁蓮華文軒丸瓦で、『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』[2)]の6201 Ａａ型式に近いものと思われる。763は平瓦で、凸面に平行タタキ痕、凹面に布目痕が認められる。764は土馬の胴部であり、背の後方には強いナデによる鞍の表現をもつ。765 ～ 767は土馬の脚部である。土馬は、畦畔１全体では胴部片より１個体を数える。平城京出土のものと同様であり、奈良時代ものと考える。768は砥石で、両面に使用痕が認められる。石材は砂岩である。769は磨石で、正面の上半部分・両側面の先端部分に磨痕が認められる。石材は砂岩である。

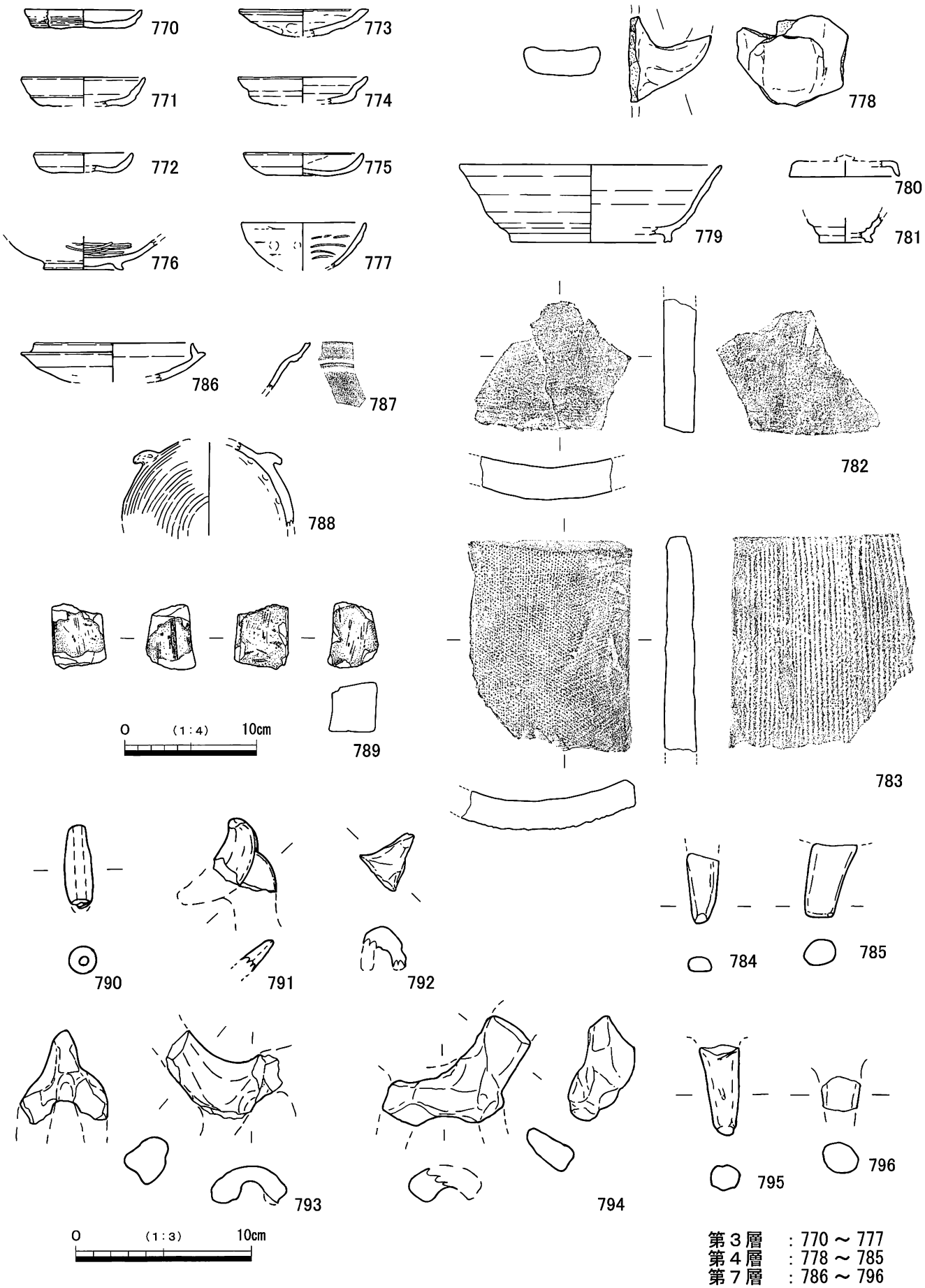
第３層（第74図770 ～ 777）　古墳時代後期～鎌倉時代までの遺物が出土しており、鎌倉時代の遺物が多く認められる。遺物の総量はコンテナ箱で約１箱分である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦があり、土師器・須恵器が大半を占める。このうち図化できたのは以下のものとなる。

770 ～ 775は土師器皿で、いずれも鎌倉時代のものと考えられる。776・777は瓦器椀で、776は12世紀前半～中頃のものと考える。777は第３層で最も新しい遺物と思われ、14世紀前半頃のものと考えられる。

第４層（第74図778 ～ 785）　古墳時代後期～平安時代前期までの遺物が出土しているが、層位的に



第 73 図　畦畔1出土遺物実測図



第 74 図 第3・4・7層出土遺物実測図

古い時期の遺物のみが出土している。遺物の総量はコンテナ箱で約１箱分である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦、土製品があり、土師器・須恵器が大半を占める。このうち図化できたのは以下のものとなる。778 は土師器鍋または甑の把手部分である。779 は須恵器杯身で、８世紀後半頃のものと考えられる。780 は須恵器蓋で、短頸壷の蓋と思われる。781 は須恵器小型長頸壷で、８世紀末～９世紀前半頃のものと考えられる。782・783 は平瓦である。782 は凹面に布目圧痕、凸面にタタキなで消し痕が、783 は凹面に布目圧痕、凸面に縦方向タタキ痕が認められる。784・785 は土馬の脚部である。

第７層（第 74 図 786 ～ 796）　古墳時代後期～平安時代中期までの遺物が出土している。遺物の総量はコンテナ箱で約２箱分である。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、瓦、土製品、石器があり、土師器、須恵器が大半を占める。最も新しい遺物として黒色土器Ａ類が僅かに見られるが、図化できたものは古い時期の遺物のみである。786 は須恵器杯身であり、6 世紀後半頃のものと考えられる。787 は須恵器ハソウの口縁部分と思われる。788 は須恵器提瓶であり、体部に短い鈎状の把手が付く。古墳時代後期のものと考えられる。790 は土師質土錘である。791 ～ 796 は土馬であり、791 は頭部、792 ～ 794 は胴部、795・796 は脚部である。土馬は、第７層全体では胴部片より少なくとも３個体分が確認できる。いずれも平城京出土のものと同様であり、奈良時代のものと考えられる。789 は砥石であり、４面とも使用痕が認められる。石材は砂岩である。

４．小結

今回の２次調査では、調査区における最も古い水田として、９世紀～ 11 世紀前半頃の条里型水田が検出でき、それに伴う畦畔、足跡・稲株痕と思われる小穴群を検出することができた。また、水田１の下層で見られた様な水田造成前の整地状況や、畦畔１を境としたある程度まとまった土地の区画状況が明らかとなった。

現在、当調査区の位置する坪内をはじめ、その周辺地においては、検出された水田と同様の細長く区画された田畑や土地が多く見られ、長地型区画の景観を色濃く残している。特に今回検出された畦畔１の北方向の延長線上では、現在の土地区画のラインとも一致することから、少なくとも当調査区を含む近辺において現在見られる条里区画の景観は、９世紀～ 11 世紀前半頃まで遡る可能性が高い。また、当調査区における条里型水田の造成開始時期については、従来より一般的に条里制の施行された時期として考えられてきた奈良時代まで遡らないことが明らかとなった。

当調査区の周辺地における条里遺構の検出例としては、当調査区の北西約 100 m に位置する池尻遺跡において、３時期３面の水田・畦畔が検出されている[3]。池尻遺跡の調査地は、広瀬郡 22 条３里 23 坪内に位置すると考えられ、８世紀、９世紀、10 世紀の条里型水田が検出されている。これまで奈良盆地全体における条里型水田の調査例では、10 世紀以前に遡らない例が増加している[4]なかで、特に池尻遺跡の８世紀の水田については、奈良県内において最も古い条里型水田の一つとして注目されている。

今回検出された条里型水田は、出土遺物から、池尻遺跡の９世紀または 10 世紀の水田と同時期となる可能性はあり、各時期における水田の広がりについては今後の周辺地域における調査において期待したい。

注

1)　奈良県立橿原考古学研究所編　1980 『大和国条里復原図』 奈良県教育委員会

2)　奈良市教育委員会　1996 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』

3)　前澤郁浩　1992 『池尻遺跡（１次）現地説明会資料』 大和高田市教育委員会

4)　吉村和昭編　2006 『箸尾遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 97 冊　奈良県立橿原考古学研究所

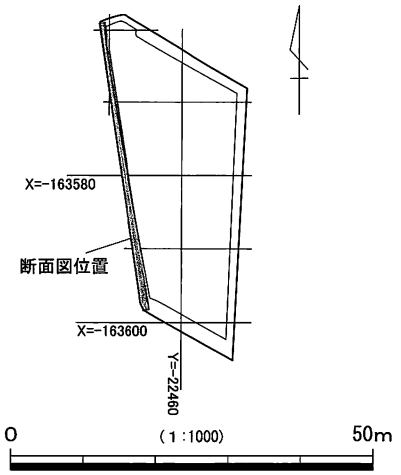
長田遺跡２次調査　高田中学校体験学習１

長田遺跡２次調査　高田中学校体験学習２

第５章　土庫丑寅遺跡の調査

第１節　調査区の設定と記録

土庫丑寅遺跡の調査区は、葛城川の一支流であり南北方向に流れる土庫川の右岸に該当する。試掘調査にあたっては、近接する地域がかつては水捌けの悪い低地であった様相を示していたのに対して、当調査区周辺の限られた範囲だけが微高地として検出でき、遺構の存在も窺えた。微高地は、調査区のすぐ西側を流れる土庫川の形成した自然堤防である可能性が高いとみられ、その形状は試掘の成果から川に沿って南北に細長く延びる形を呈すると思われた。そこで地籍図なども参考にして、調査の対象地内で推定できる微高地の範囲すべてを調査区として設定することにした。遺跡名は、小字名である丑寅から命名したが、これは土庫環濠集落の北東角に近接する位置であることからおこった名称と考えられる。



第 75 図　丑寅遺跡1次調査地区割図

第２節　調査日記抄

2006 年 7 月 3 日（月）曇一時雨

本日より重機で調査区予定地上の盛り土の除去や瓦礫等の除去を進める。フェンス設営、電気工事準備工を実施する。

7 月 11 日（火）晴

午前中までに調査区予定地上の盛り土除去をし終える。試掘トレンチを再掘削して、表土掘削の深度、土層を再度確認し、重機掘削を開始していく。

7 月 26 日（水）晴のち曇

引き続き重機による表土除去作業を進めていく。微高地の検出を進行させていく。夕刻までに 50% の調査区設定が終了する。

7 月 14 日（金）晴

重機による表土の掘削、除去を進め、微高地を検出していく。調査区の南東付近で洪水による堆積したとみられる砂礫層が確認された。

7 月 28 日（金）晴

本日をもって重機による表土除去、調査区の設定は完了した。重機はあと 1 日、排土置場の整地に従事する。微高地上に堆積する遺物包含層上面で土師器片散布が認められた。

7 月 24 日（月）晴

先週来、天候すぐれなかったため、本日 10 日ぶりに重機の表土掘削を再開する。微高地は北、北西にかけて少し 4、50 cmほどのレベルで低くなっていることが判明。この「低地」は灰白色の粘質土上面で遺構が検出される可能性が高いことが確認された。

7 月 31 日（月）晴

調査区内外のベルトコンベアの組み立てを午前中までに完了し、午後から調査区の土層観察用のトレンチを兼ねた側溝の掘削作業にとりかかる。測量杭の設置も行う。

8 月 2 日（水）晴

本日より、微高地上に堆積した遺物包含層（１層）の掘削、および遺構検出にとりかかっていく。本日は特に調査区西側域の掘削、遺構検出を行う。遺構の検出数は多くないが、試掘トレンチで検出した溝の延長などを検出した。

8 月 3 日（木）晴時々曇

微高地上から大溝 1 条とそれに合流する大小の溝 3 条を検出する。大溝の覆土に古式土師器の破片が若干包含されていることを確認する。

8 月 7 日（月）曇時々晴

調査区南端域の微高地上で、包含層 1 層下に堆積が確認された包含層（2 層）の掘削、遺構検出を進めていく。調査区南東端域で、包含層 1 層より上層から切り込む河道の掘削をし終える。

8月10日（木）晴

微高地上の包含層掘削、遺構検出は終了し、これまで遺構検出を進めてきた部分よりも低くなった微高地北部域の覆土掘削、遺構検出を開始し、平板による略測も進めていく。

8月17日（木）晴

昨日より進めていた微高地低部で検出された遺構の半裁等、掘削を進め、写真撮影、土層断面図の作成を行っていく。微高地低部で検出されてきた歪な平面形をしたピット、土坑等は、オーバーハングした壁面や、床などに多く鋤痕を残すことから、粘土採掘坑の可能性が強まった。洪水が運んできた砂で、微高地低部すべての遺構が一気に埋もれたと判断できる。

8月21日（月）晴時々曇

引き続き調査区北部、微高地低部の粘土採掘坑と思われる遺構群の半裁、写真撮影、土層断面作図の作業を進めていく。明日22日から24日まで、民間の試掘調査のため調査を中断する。

8月30日（水）晴

調査区北部、微高地低部の粘土採掘坑群の半裁作業を進めていく。本日の段階で調査区全体の約5割の遺構掘削が終了したかたちとなった。完形の甕1点を納める土壙を1基検出。半裁し写真撮影する。

9月4日（月）晴

粘土採掘坑群の一部、SK－16とその周辺の遺構が完掘し終え、写真撮影をする。また一方で、微高地南半で検出していたSD－01と、これに注ぎ込むSD－02の覆土

掘削を進めていく。

9月12日（火）曇時々雨

SD－01の覆土掘削進める。またSD－01に注ぐSD－02のうち、微高地低部埋没後にその埋土上から掘削された部分の掘削を進め、粘土採掘坑の延長部分の検出につとめていった。

9月20日（水）晴

調査区南東部付近において、包含層の下層にさらに除去の対象としてよいシルト層が堆積していることを確認、掘削にかかる。この層を取り除いた後に遺構は検出されなかったが、層中より弥生前期の壺の破片が出土した。SD－01の掘削も進めていく。

9月25日（月）晴時々曇

SD－01の掘削を継続させる一方、これに注ぎ込むSD－07、08の覆土掘削も進めていく。市立土庫小学校　服部校長、来訪。

9月29日（金）晴

SD－01を完掘し、全体写真撮影を実施する。2本の大畦を残した状態での撮影となる。撮影後、大畦を取り外し、SD－01の掘削作業は終了する。

10月2日（月）曇のち雨

本日より航空測量に向けた、調査区全体の清掃作業に取り掛かっていく。午後、降雨のため床面の清掃は断念し、壁面を中心に清掃を進めていく。

10月4日（水）曇時々晴

午後、航空測量を実施する。

10月12日（木）晴

午後1時半より地元市民と市文化財を考える会対象にした調査成果説明会を実施する。約70名の参加。終了後、大土層断面図作成の準備を進めていく。

10月17日（火）晴時々曇

調査区西壁の大土層断面図の作成に取り掛かる。

10月26日（木）晴

午前中、市立土庫幼稚園園児、PTA約40名対象に調査成果説明会。午後、大土層断面図の訂正を行って土庫丑寅遺跡1次調査の工程をすべて終える。

第３節　調査成果

１．層序と調査方法

調査の対象としたのは、微高地上で検出した２時期の遺構面である。そのほか断面観察で、溝などが上層に存在することを確認したが、調査区の南端部において微高地の遺構面にまで及んだSD－01を除いては、調査の対象とはしなかった。

２．検出した遺構

本調査区は微高地上の範囲に設定されたかたちとなった。

南北方向に延びる微高地は側面から見ると概ね扁平な形状をしてはいるが、調査区内では南側に比べて北側が１段低く平らになっている。遺構は、すべて微高地上で検出されたものであるが、微高地北側の低い部分にのみ集中して造成された時期（１期）のものと、この低い部分の遺構が洪水で運ばれてきた砂で埋没し、南側の高い部分微高地とレベルを揃えてから造成された時期（２期）のものとに大別された。ここでは時期別に遺構について述べることにする。

（１）　１期の遺構

１期の遺構の主体となるものは、土坑群である。いずれの土坑も、

①平面形が一定せず不規則であること。

②床や壁面に鋤や鍬など掘削した道具の刃先を多く残し、何かに活用するために揃えた様子が窺われないこと。

③壁面がオーバーハングしたものが目立つこと。

④微高地の上面に見える褐色粘質土の下層に堆積する黒褐色粘質土に及んだところで掘削が止まっていること。

以上のことから、土坑群は粘土採掘坑群と解釈することが穏当であろう。遺構の性格上、構の数や検出された面積にして遺物の量は少量であるが、土坑群中に弥生後期後半の完形の甕を埋納した土坑が一基検出されており、採掘坑群は当該期のものであることが裏付けできよう。

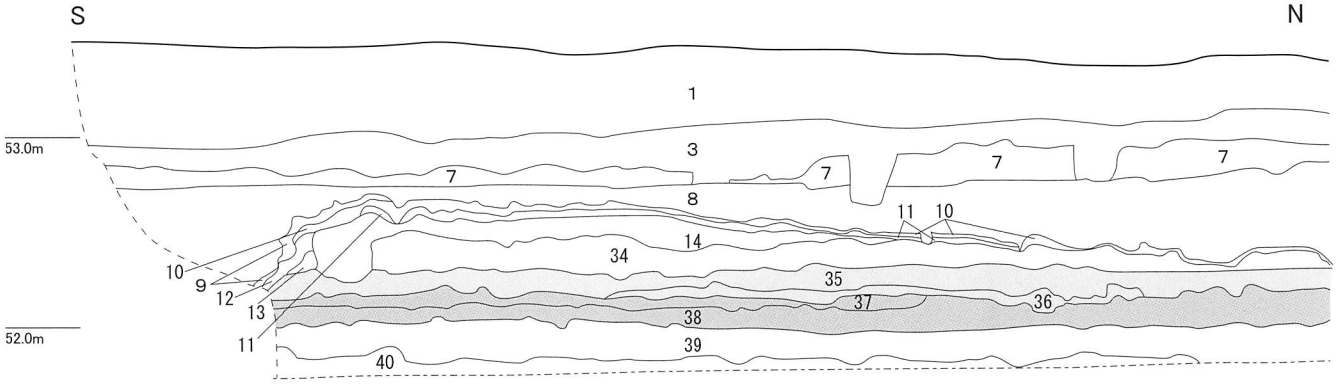
以下、検出された遺構について詳述することにする。

SK－01　調査区の北端付近で検出された比較的浅く、広い面積の粘土採掘坑である。平面の形態は不定形で、北西から南東に約4.76ｍを測り、南西から北東にかけては約2.76ｍまで計測できた。壁面はオーバーハングし、壁面や底面には凹凸著しく、U字形の無数の鋤痕を残している。遺構の北西、調査区の北端部では、やはり壁面や底面にU字形鋤痕を残す小型の採掘坑、SP－01～04を検出している。

SK－02　調査区の北部域で検出された小型の粘土採掘坑である。平面の形態は歪な楕円形を呈し、長径はほぼ東西方向を向けている。東西約1.78ｍ、南北は約1.32ｍを測る。壁面はオーバーハングし、壁面や底面には凹凸著しく、U字形鋤痕を多く残している。

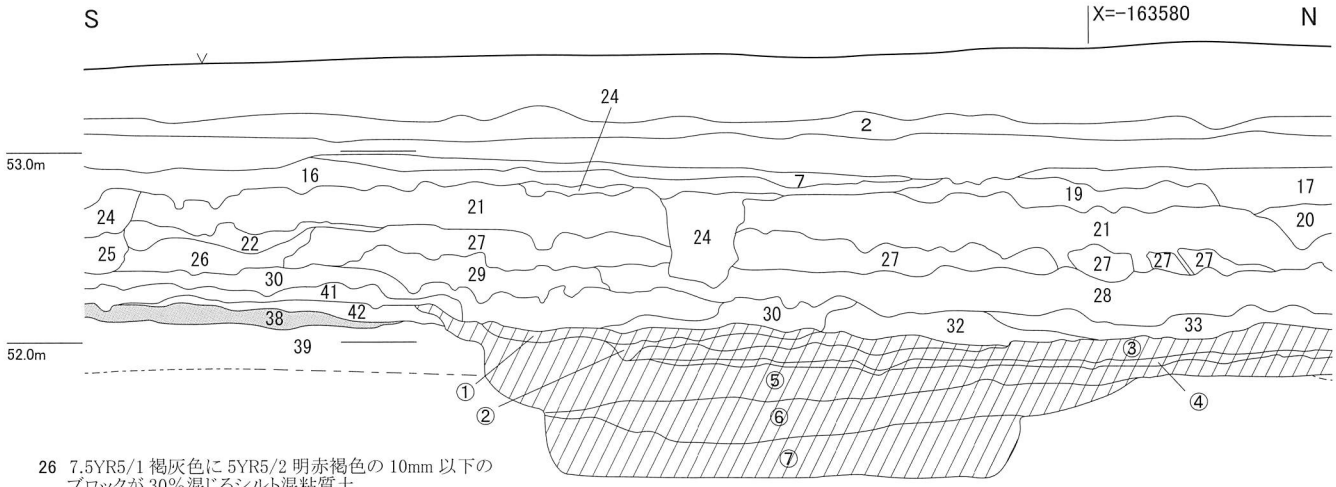
SK－03　SK－01とSK－02に近接して検出された小さな粘土採掘坑である。平面の形態は歪な楕円形を呈し、長径はほぼ南北方向を向け，南北に約0.82ｍ、東西にかけては約0.66ｍを測る。壁面はオーバーハングし、壁面や底面には凹凸著しく、U字形の多くの鋤痕を残している。

SK－04～07　調査区の中北部域で検出された粘土採掘坑群である。南北約3.76ｍ、東西約3.58ｍの範囲に集中する。検出された状況によって４つの遺構に分ける扱いをしたが、切合うなどして検出されており、もともとは一つの採掘坑であったと解釈するのが適当と思われる。壁面や底面には、U字形の多くの鋤痕を残している。

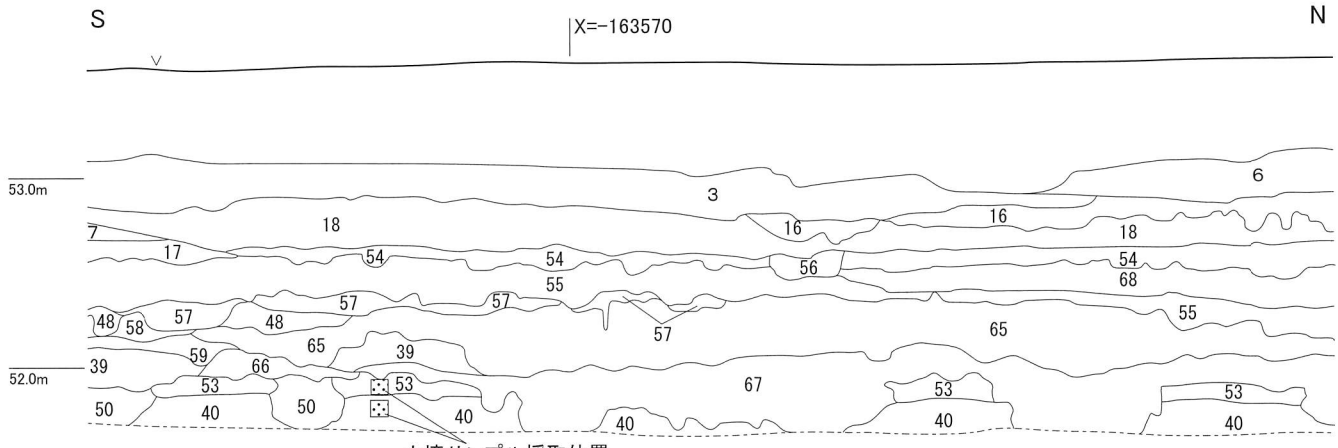


1 表土・盛土
2 } 整地土
3
4
5 } 近世耕作土
6
7

8 10YR5/2 灰黄褐色と 7.5YR5/8 明褐色の砂（20mm 以下）が帯状に堆積。
9 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト。 鉄分を多く含む。
10 7.5YR6/3 褐色シルト。
11 10YR6/2 灰黄褐色粘質土。
12 7.5YR5/2 灰褐色シルト混粘質土。
13 7.5YR4/1 褐灰色シルト混粘質土。
14 5B5/1 青灰色シルト。 粘質土を多く含む。
15 5B6/1 青灰色に 7.5YR6/8 橙色が 50%混じるシルト混粘土。
} 旧河道



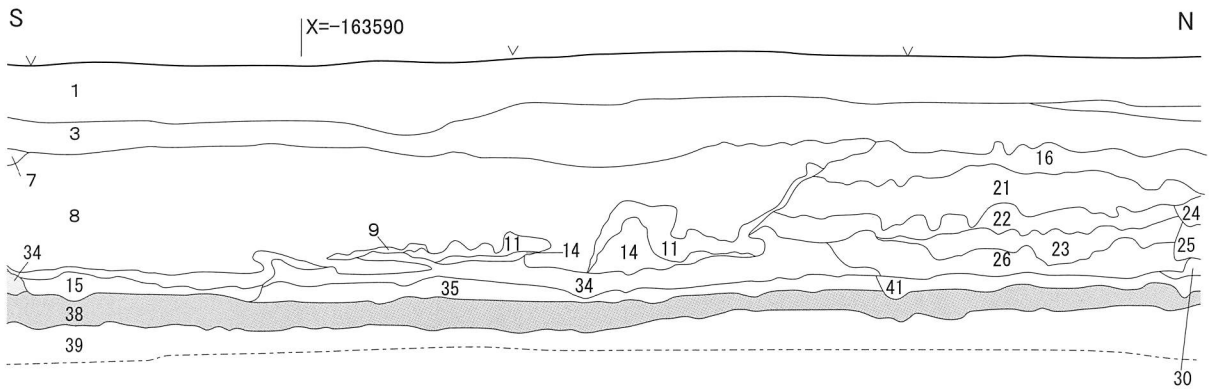
26 7.5YR5/1 褐灰色に 5YR5/2 明赤褐色の 10mm 以下のブロックが 30%混じるシルト混粘質土。
27 2.5Y5/2 暗灰黄色に 5YR5/8 明赤褐色が霜降状に入るシルト。 砂のブロックが 20%入る。
28 10YR5/1 褐灰色に 5YR5/8 明赤褐色の 10mm 以下のブロックが 10%入るシルト混粘質土。
29 10YR5/1 褐灰色に 5YR5/8 明赤褐色の 10mm 以下のブロックが 20%入るシルト混粘質土。 下部に砂混シルトのブロックが入る。
30 10YR5/1 褐灰色に 5YR5/8 明赤褐色の 10mm以下のブロックが 25%入るシルト混粘質土。



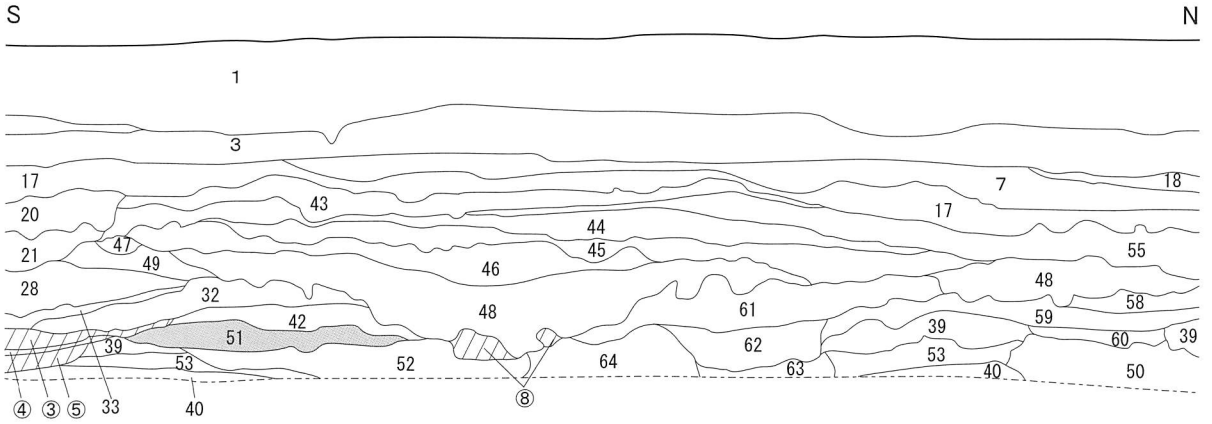
土壌サンプル採取位置

46 7.5YR5/1 褐灰色シルト混粘質土。 全体に砂が多い。
47 7.5YR6/1 褐灰色シルト。 鉄分が 50%入り、 砂が多い。
48 7.5YR6/8 橙色と 7.5Y8/2 灰白色の砂に 32 のブロックが入る。
49 27 とほぼ同じであるが、 全体に砂がやや多い。
50 5GY5/1 オリーブ灰色に 10G6/1 緑灰色と 40 ブロックが 15%ずつ入る。
51 38 と同じだが全体に鉄分多く含む。
52 10BG4/1 暗青灰色の粘質土。 砂が少量混じる。
53 10G6/1 緑灰色粘質土。 鉄分を少量含む。
54 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト。 鉄分が 20%入る。
55 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト。 鉄分が 25%入る。 54 より粘性が強い。
56 2.5YR7/2 灰黄色砂質シルト。 鉄分が 10%入る。（素掘溝埋土）
57 10YR6/2 灰黄褐色砂混シルト。
58 10YR5/1 褐灰色シルト混粘質土。 鉄分7%入る。
59 10YR5/1 褐灰色シルト混粘質土。 鉄分 10%と少量の砂と炭化物が入る。
60 10YR5/1 褐灰色に 7.5Y7/1 灰白色のブロックが3%入るシルト混粘質土。
61 5Y5/1 灰色シルト混粘質土。 鉄分が 15%含む。
62 10YR4/1 褐灰色粘質土。
63 10Y4/1 灰色粘質土。
64 10Y5/1 灰色に 7.5Y6/3 オリーブ黄色のブロックが5%が入る粘質土。

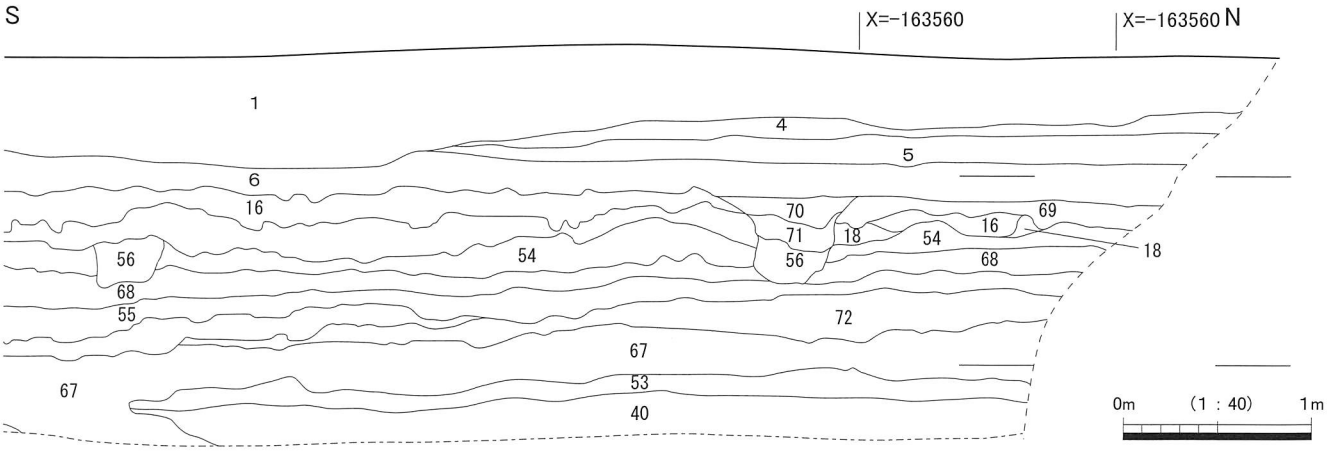
第 76 図　西壁断面図



16 7.5YR6/4 にぶい橙色シルト。 細かい砂と金雲母が多く混じる。
17 10YR6/3 黄橙色砂質土(10mm 以下)。
18 10YR6/2 灰黄褐色砂混シルト。 斑鉄が 30%混入。
19 10YR7/3 にぶい黄褐色砂質シルト。
20 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト。
21 10YR6/2 灰黄褐色に 5YR5/8 明赤褐色の 10mm 以下のブロックが 30%混じる粘質土混シルト。 下部で砂ブロックが入る。
22 10YR6/2 灰黄褐色に 5YR5/8 明赤褐色の 15mm 以下のブロックが 25%混じる粘質土混シルト。 21 より砂を含まない。
23 2.5Y6/1 黄灰色に 5YR5/8 明赤褐色の5mm 以下のブロックが 25%混じる粘質土混シルト。
24 10YR6/3 にぶい黄橙色に 5YR5/8 明赤褐色の 10mm 以下のブロックが 20%混じる粘質土混シルト。
25 10YR6/3 にぶい黄橙色に 5YR5/8 明赤褐色の5mm 以下のブロックが 20%混じる砂が多量混シルト。
} 素掘溝



31 7.5YR5/1 褐灰色シルト混粘質土。 鉄分が少し混じる。
32 10YR5/1 褐灰色に 5YR5/8 明赤褐色のブロックが 30%入るシルト混粘質土。
33 28 と同じだが全体に砂が多い。
34 5B5/1 青灰色粘質土混粘土。 鉄分が少し混じる。
35 2.5Y5/1 黄灰色シルト混粘質土。 少量の鉄分が混じる。
36 28 と同じだが全体に砂が多い。
37 2.5Y7/4 浅黄色粘質土混シルト。
38 2.5Y5/1 黄灰色シルト混粘質土。
} 包含層1層
} 包含層2層
39 7.5YR5/8 明褐色に 5B4/1 青灰色が 40%大ブロックで入る粘質土混シルト。 キメが粗く硬くしまる。
40 7.5Y2/1 黒色粘質土。 砂が少量混じる。(地山下層)
41 2.5YR5/1 褐灰色粘質土に鉄分 45%混じる。
42 7.5Y6/6 橙色に 7.5YR4/1 褐灰色のブロックが5%混じるシルト混粘質土。
43 10YR6/2 灰黄褐色の砂質シルト。 鉄分(5YR5/8)が 10%混じる。
44 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト。 鉄分(5YR5/8)が 20%混じる。
45 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト。 鉄分(5YR5/8)が 20%混じる。

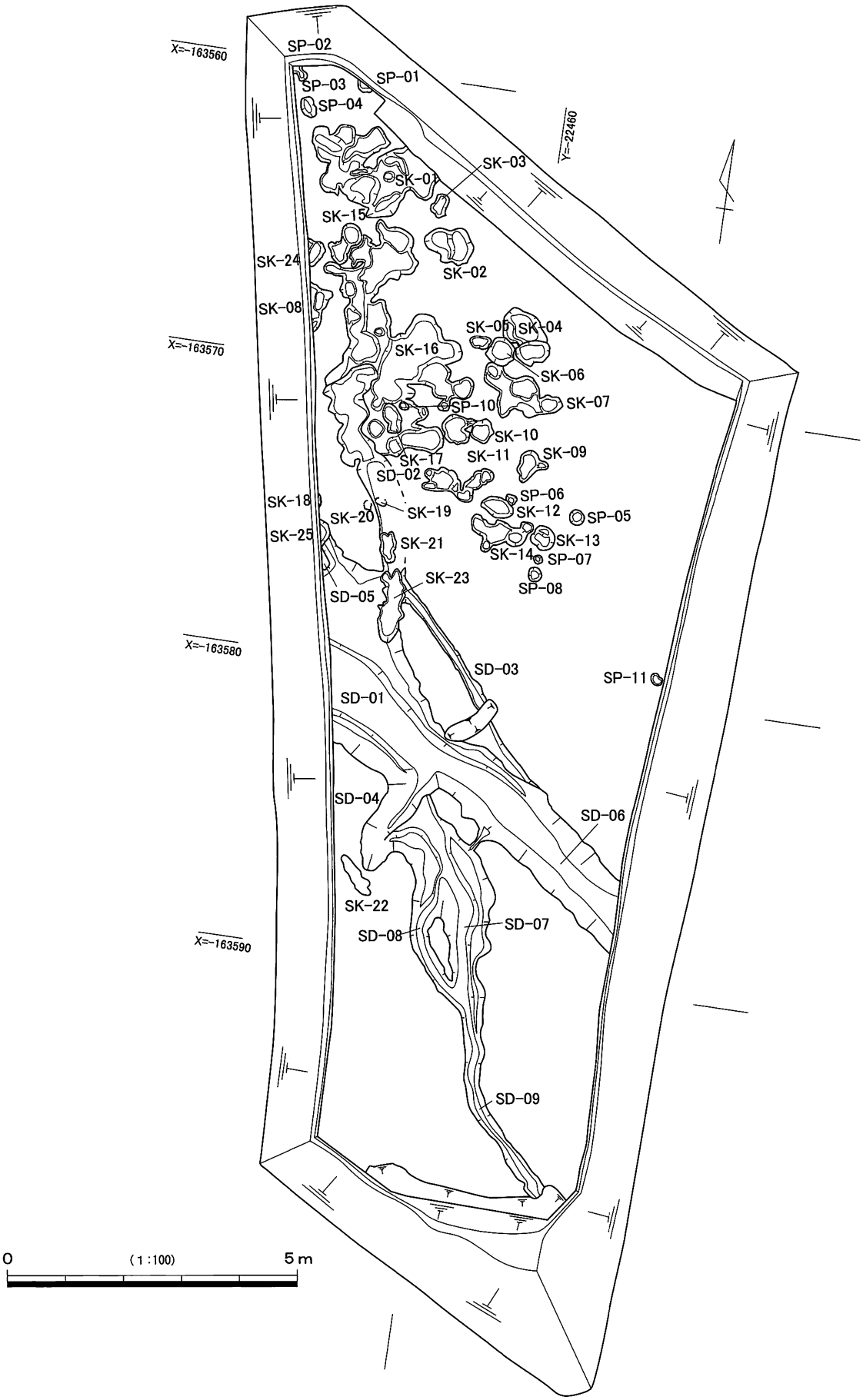


65 10YR5/1 褐灰色シルト混粘質土。 砂が全体的に多く、鉄が7%、 少量の炭化物を含む。
66 2.5Y6/2 灰黄色シルト混粘質土。 40 のブロックが5%入る。(**素堀溝埋土**)
67 2.5Y5/1 黄灰色シルト混砂。(**粘土採掘坑埋土**)
68 2.5Y6/1 黄灰色シルト混粘質土。 鉄分が 15%入る。
69 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト。
70 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト。 粗い砂を多く含む。(**素堀溝埋土**)
71 16 と同じであるが、 鉄分と砂を多く含む。(**素堀溝埋土**)
72 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト。 56 より粗い砂を多く含む。

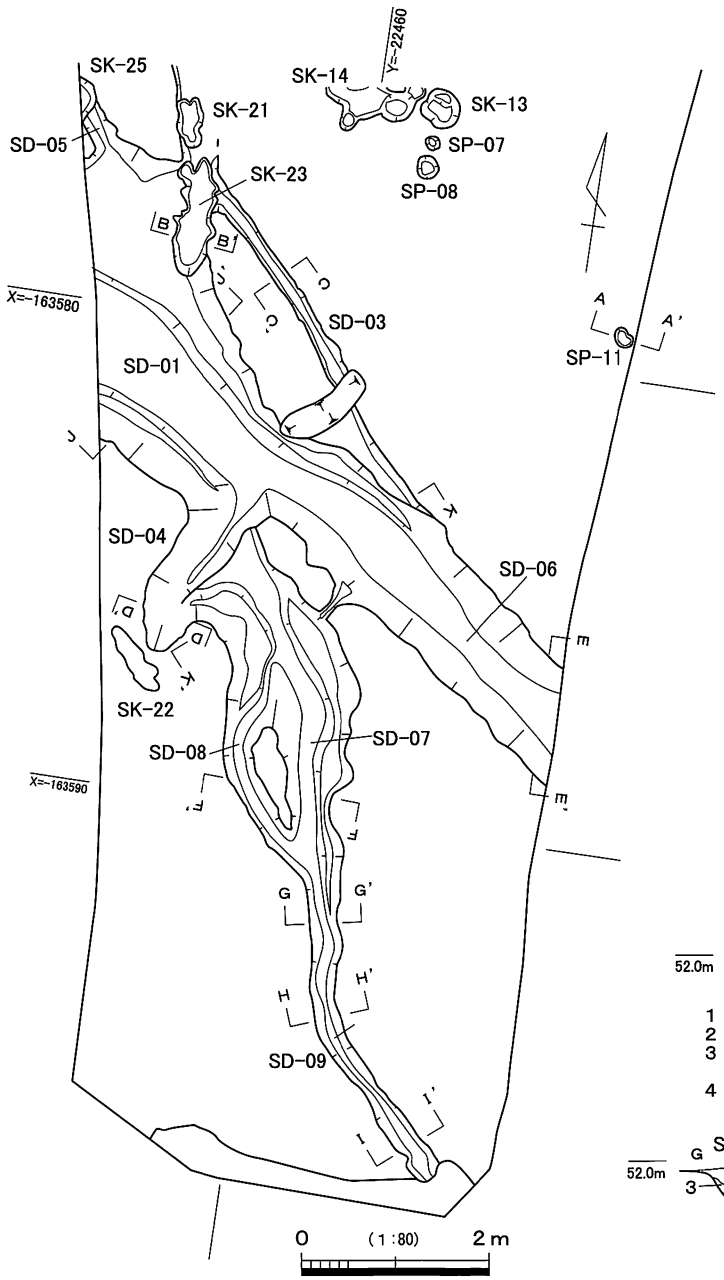
SD-01
① 7.5YR4/1 褐灰色シルト混粘質土。
② 7.5YR4/1 褐灰色シルト混粘質土。①より全体に暗く礫・火山灰が少し混じる。
③ 10YR3/1 黒褐色シルト混粘質土。 炭化物・火山灰が少量混じる。
④ 7.5YR3/1 黒褐色シルト混粘質土。 炭化物が少量混じる。
⑤ 10YR3/1 黒褐色シルト混粘質土。 鉄分・植物遺体が少量混じる。
⑥ 10BG4/1 暗青灰色シルトに 5Y7/3 浅黄色シルトに 2.5Y5/6 明黄褐色シルトが斑状に 50%入る。 砂・植物遺体を少量混じる。 炭化物・火山灰が少量混じる。
⑦ 2.5YR5/1 オリーブ灰色シルトに 2.5Y2/1 黒色シルト、⑥ブロック、 砂が少量混じる。

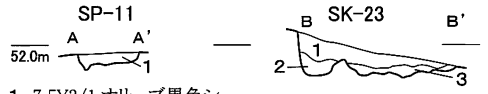
SK-25
⑧ 10BG4/1 暗青灰色粘質土。 砂を少量含む。

第 76' 図 西壁断面図



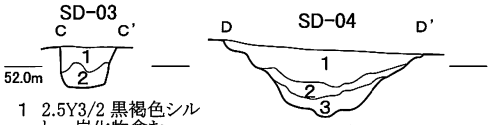
第 77 図　丑寅1次調査区平面図





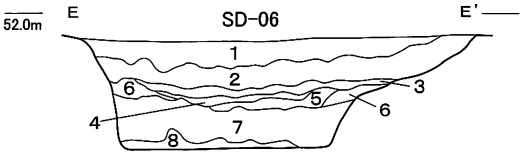
1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルトに 10GY4/1 暗緑灰色シルトが 25%ブロックで入る。

1 5Y3/1 オリーブ黒色に鉄分が 25%入るシルト混粘質土。
2 7.5Y3/1 オリーブ黒色に 2.5Y2/1 黒色がブロックで入るシルト混粘質土。 鉄分含む。
3 7.5Y4/1 灰色シルト混粘質土。 鉄分含む。

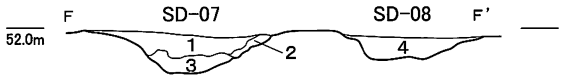


1 2.5Y3/2 黒褐色シルト。 炭化物含む。（SD-01 の3層と同じ）
2 10GY6/1 緑灰色に 7.5Y3/1 オリーブ黒色が 40%ブロックで混じるシルト。

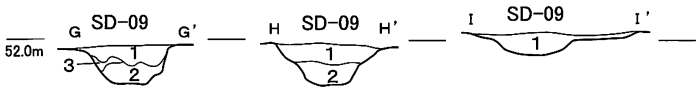
1 5Y3/1 オリーブ黒色に鉄分が 15%入るシルト混粘質土。
2 5Y2/1 黒色に鉄分が3%入るシルト混粘質土。 炭化物含む。
3 10Y3/1 オリーブ黒色に 10Y4/1 灰色が 25%入るシルト混粘質土。



1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。 炭化物を少量含む。
2 5Y3/1 オリーブ黒色に 2.5Y5/4 黄褐色が 10%入るシルト混粘質土。 3mm 以下の砂を少量含む。
3 5Y3/1 オリーブ黒色に 2.5Y5/4 黄褐色が 20%入るシルト混粘質土。
4 7.5Y3/1 オリーブ黒色に 2.5Y5/4 黄褐色が 30%入るシルト混粘質土。 2mm 以下の砂を少量含む。
5 5Y3/1 オリーブ黒色砂・シルト混粘質土。
6 2.5Y3/1 黒褐色砂・シルト混粘質土。 炭化物を少量む。
7 10Y4/1 灰色に 2.5Y3/1 黒褐色の1～5mm 程度のブロックを 10%含む粘質土混シルト。 シルト混粘質土。 炭化物含む。
8 7.5Y4/1 灰色の砂・シルト混粘質土。

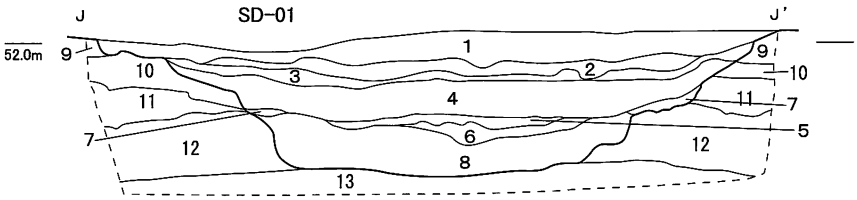


1 5Y2/2 オリーブ黒色に鉄分が 10%入るシルト混粘質土。
2 7.5Y3/2 オリーブ黒色にに鉄分が7%入るシルト混粘質土。
3 7.5Y3/2 に 5Y2/2 が 20%入るオリーブ黒色シルト混粘質土。 上部に鉄分と炭化物が含まれ、 砂がやや多く混じる。
4 7.5Y3/1 ～ 10Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質。

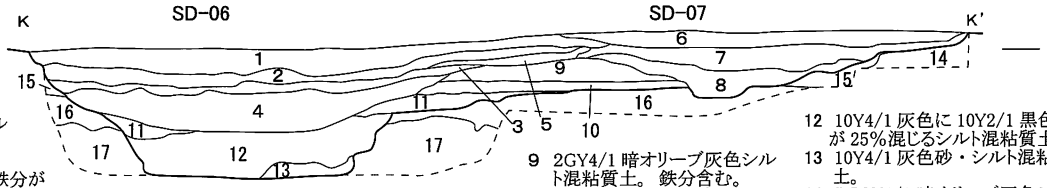


1 5Y2/2 オリーブ黒色に鉄分が 10%入るシルト混粘質土。
2 7.5Y3/2 ～ 5Y2/2 オリーブ黒色シルト混粘質土。 上部に鉄分と炭化物が含まれ、 砂がやや多く混じる。
3 7.5Y4/1 ～ 10Y5/1 灰色シルト混粘質土。

1 5Y2/1 黒色シルト混粘質土。 鉄分が 20%入る。
2 5Y2/2 オリーブ黒色シルト混粘質土。 炭化物を少量含む。
3 2.5Y3/1 黒褐色シルト。 炭化物を含む。
4 2.5Y3/1 黒褐色と 5Y3/1 オリーブ黒色がブロック状に混じるシルト混粘質土。
5 2.5Y7/4 浅黄色シルト。
6 5Y2/1 黒色砂混シルト。
7 10Y2/1 黒色シルト混粘質土。 砂を含む。
8 10Y4/1 灰色に 10Y2/1 黒色がブロックで 25%混じるシルト混粘質土。
9 10YR6/8 明黄褐色シルト混粘質土。



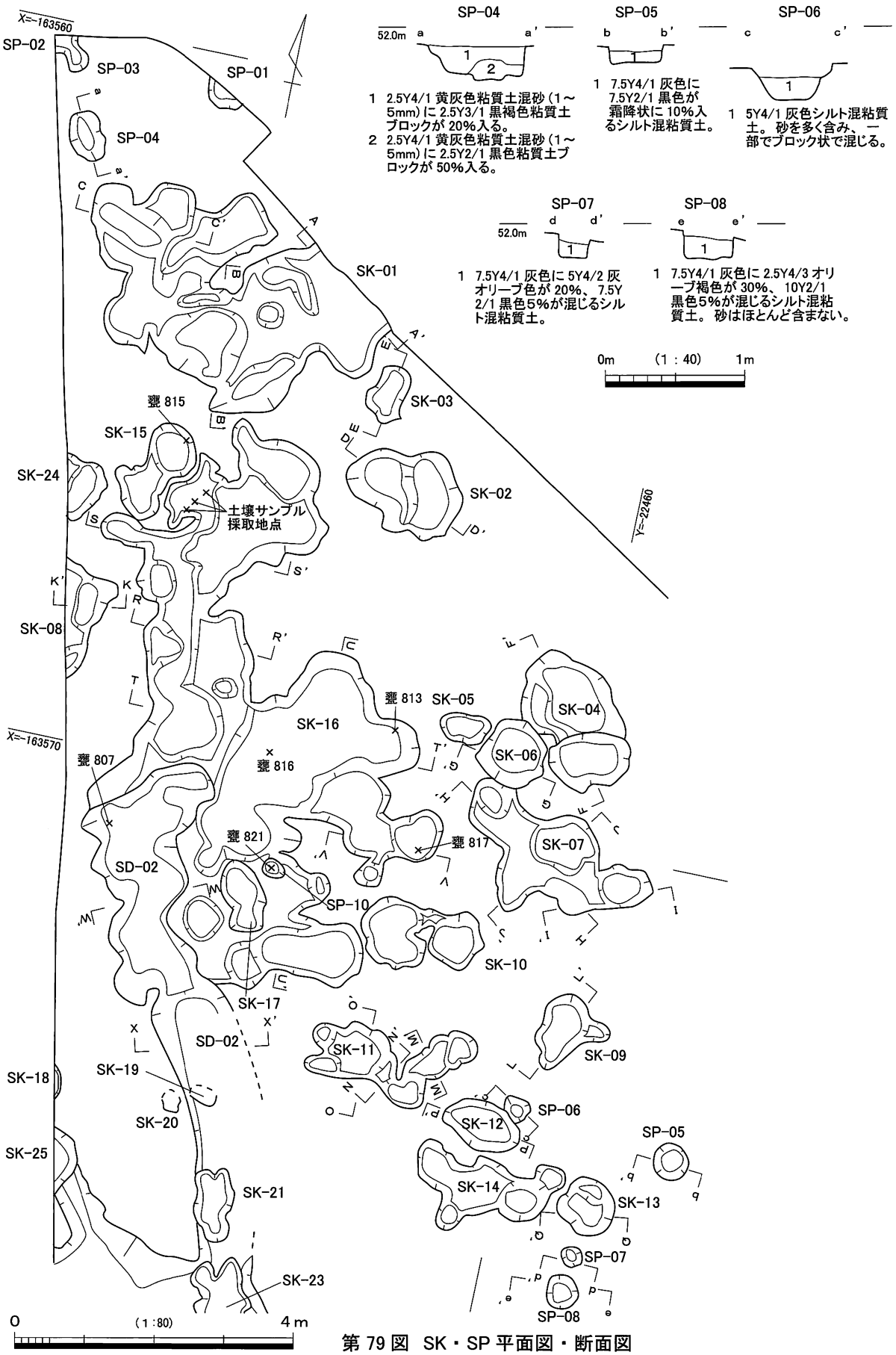
10 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト混粘質土。
11 7.5Y5/1 ～ 10Y5/1 灰色シルト混粘質土。
12 10Y2/1 黒色シルト混粘質土。 2mm 以下の砂を含む。
13 10Y4/1 灰色に 10Y2/1 黒色が混じるシルト混粘質土。



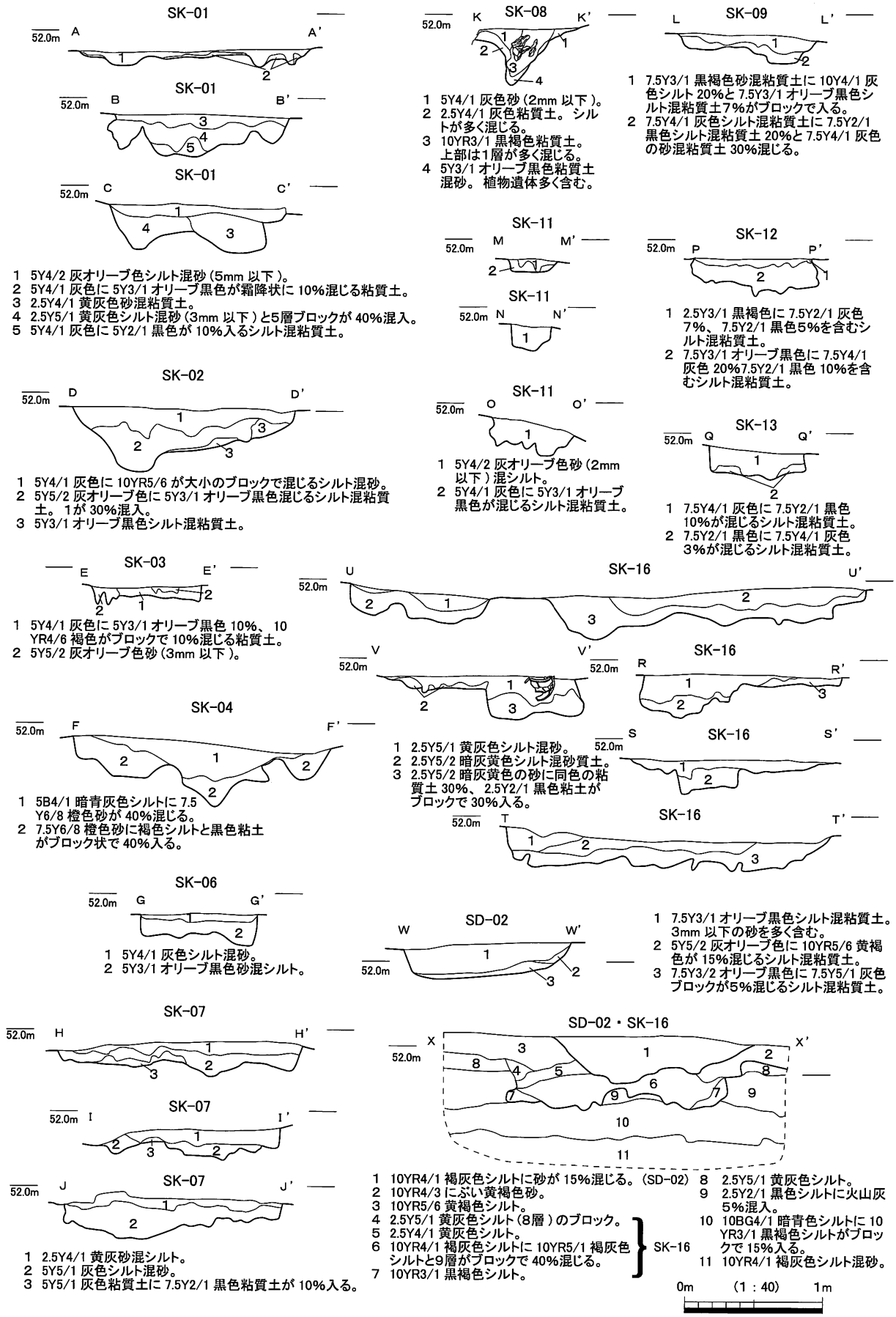
1 SD-01 の1と同じ。
2 SD-01 の2と同じ。
3 2.5Y3/2 黒褐色シルト混粘質土。
4 SD-01 の4と同じ。
5 2.5Y3/1 黒褐色に鉄分が 15%入るシルト混粘質土。
6 10Y2/1 黒色に鉄分が5%混じるシルト混粘質土。
7 10Y2/1 黒色に鉄分が 15%混じるシルト混粘質土。
8 5Y2/1 黒色シルト混粘質土炭化物が少量混じる。
9 2GY4/1 暗オリーブ灰色シルト混粘質土。 鉄分含む。
10 2GY4/1 暗オリーブ灰色シルト混粘質土。
11 10Y2/1 黒色シルト混粘質土。 砂を含む。
12 10Y4/1 灰色に 10Y2/1 黒色が 25%混じるシルト混粘質土。
13 10Y4/1 灰色砂・シルト混粘質土。
14 7.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト混粘質土に 7.5YR5/2 明褐色シルトが混じる。
15 ～ 17 SD-01 の 11 ～ 13 と同じ。

0m (1 : 40) 1m

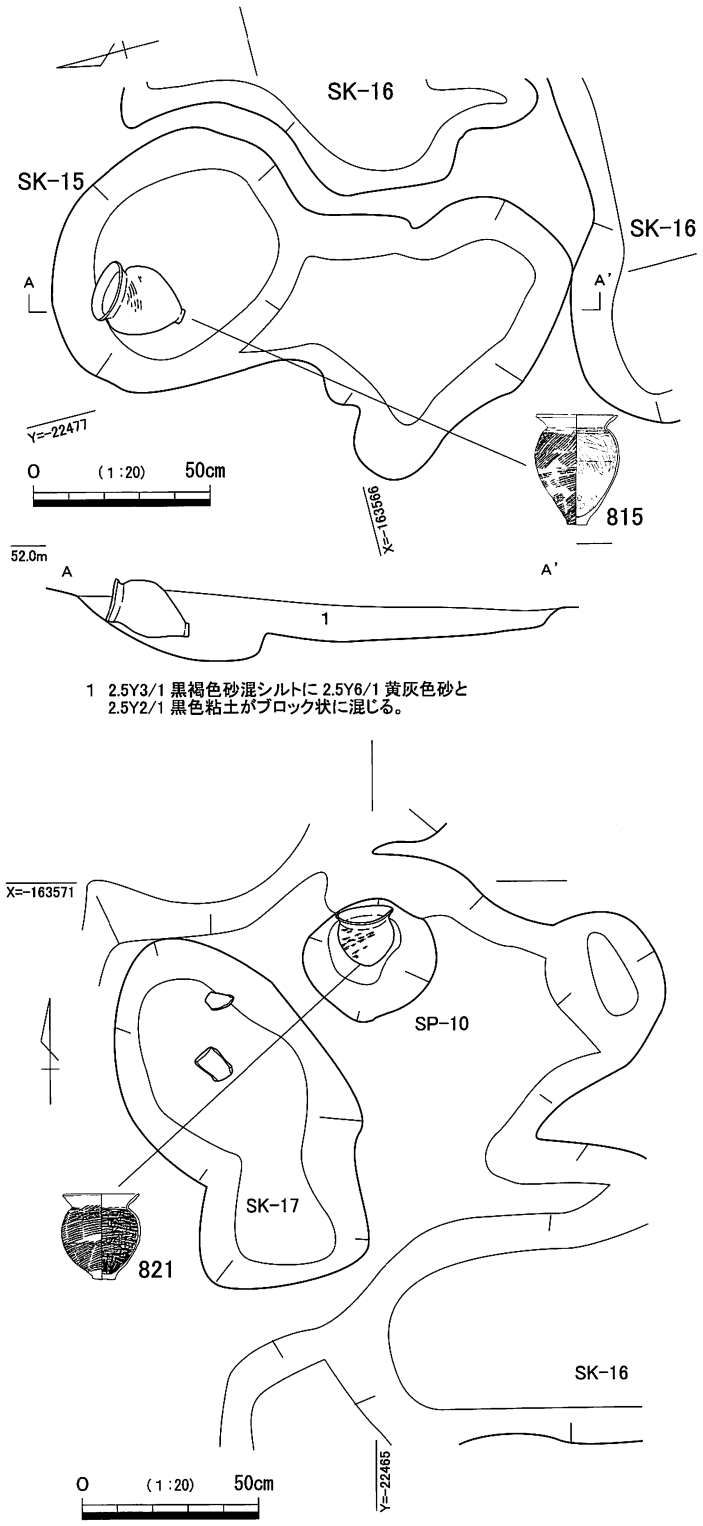
第 78 図 SD・SK・SP 平面図・断面図



第79図 SK・SP平面図・断面図



第 80 図 SK-01 ～ 10 断面図



第81図 SK-15平・断面図、SP-10土器出土状況図

SK－08 調査区の中北部域、西端部で一部分が検出された粘土採掘坑である。南北約1.80 m、東西方向には約0.72 mまで検出された。壁面や底面には、U字形の多くの鋤痕を残している。

SK－24 これも調査区の中北部域、西端部で一部分が検出された粘土採掘坑である。南北約0.96 m、東西方向には約0.58 mまで検出された。壁面や底面には、多くの鋤痕を残す。

SK－10・15～17 調査区の中北部域から北部域にかけて、南北約8.10 m、東西約6.28 mの広範囲に検出された粘土採掘坑群である。検出された状況により4つの遺構に分ける扱いをしたが、切合うなどして検出されていることから、一連の作業で掘削された採掘坑であったと解釈することができよう。壁面はオーバーハングしている箇所もあり、また壁面や底面には凹凸著しく、多くのU字形鋤痕を残している。

SK－16 南西部分は後世に掘削造成されたSD－02によって削られている。

なおSK－15の西側では、覆土中から1点の完形の甕が出土した。埋没の際に混入したものと思われる。

SP－10 SK－16の南部には、完形の甕を1点埋納したSP－10が存在する。このピットはSK－16と同時に埋没したことが確認できた。甕はピットのやや北側底に横たえられていた。甕は二次焼成を受けており、煮沸に使用したものを埋納用に転用したことが窺える。祭祀などの目的で、埋納されたと考えられよう。

SK－09 調査区の中北部域に点在する小型の粘土採掘坑群の一つで、平面は歪な楕円形を呈している。南北長径は約1.32 mを測る。壁面や

底面には、U字形の多くの鋤痕を残している。

SK－11　調査区の中北部域に存在し、東西方向に複数の小さな採掘坑が切り合い不規則に連なっている。東西約2.12ｍ、南北約1.38ｍを測る。この採掘坑も多くの鋤痕を壁面や底面に残している。

SK－12　この遺構も、調査区の中北部域に点在する小型の粘土採掘坑群の一つである。平面は東西方向に長い歪な楕円形を呈している。長径は約1.16ｍ、短径は約068ｍを計測する。多くのU字形鋤痕を壁面や底面に残している。

SK－13　調査区の中北部域に点在する小型の粘土採掘坑群の一つである。平面は歪な円形を呈し、東西約0.82ｍ、南北約0.84ｍを計測する。多くのU字形鋤痕を壁面や底面に残している。

SK－14　調査区の中北部域に存在する粘土採掘坑で、東西方向に複数の小さな採掘坑が切り合い不規則に連なったものとなっている。東西約2.10ｍ、南北約1.78ｍを測る。この採掘坑も多くの鋤痕を壁面や底面に残している。

SK－11～14は、切合うことなく単独で検出されてはいるが、東西方向に配列し接近していることから、一連の粘土採掘作業で掘削された採掘坑であったと解釈することができよう。また付近には小型のピットSP－05～08も検出されているが、その用途や性格は不明である。

（２）　２期の遺構

SD－01　南東から北西に向かって流れる幅の広い溝で、SD－06の延長部分にあたる。調査区外に向かってハの字形に開く平面形を呈し断面はすり鉢状をしているが、南側部分の断面は逆台形に深く掘削されていて、SD－06などからの流水を受けるように造成されている。

SD－02　先述のように、１期の遺構、SK－16の埋没後、覆土の上面から掘削された溝で、北から南に向かって流れ、SD－01に合流するように造成されている。SD－02溝底内にあるSK－21、23は、その平面形状や鋤痕が底部に見られることなどから、SK－16と同じくSD－02造成時に上半が壊された粘土採掘坑であったと思われる。

SD－03　SD－06が北東からやや東に向かって屈曲する部分から、SD－01と02の合流点まで付けられた細い溝である。断面は逆台形を呈する。

SD－04　SD－06と07などの合流点に南西から北西に向かって合流するごく短い溝である。SD－07と08の流れを収束させるために掘削されたと思われる。

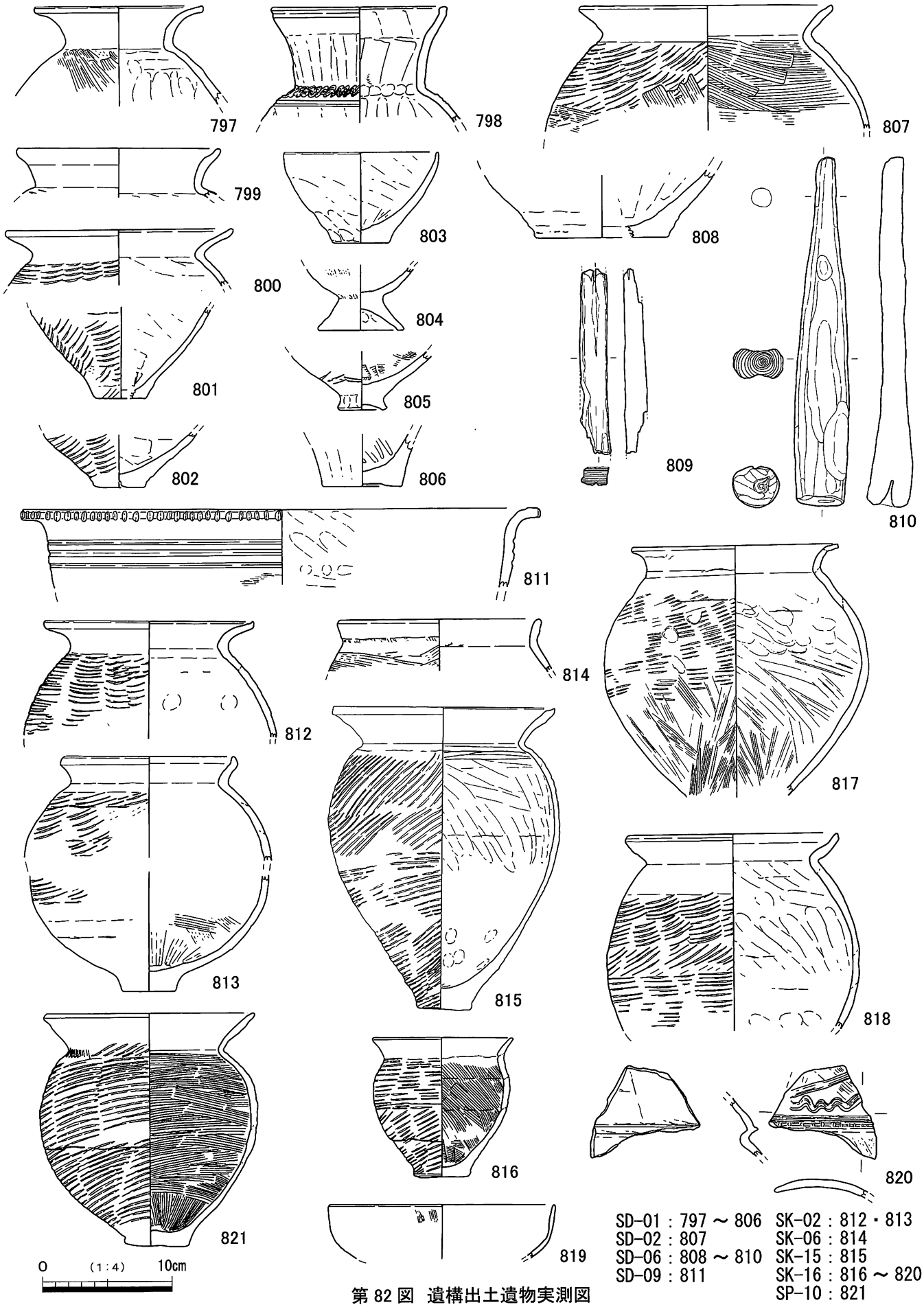
SD－05　SD－01の調査区端部分から北西方向に向かって分かれた細い溝である。断面は逆台形を呈している。

SD－06　SD－01の支流にあたる比較的幅の広い溝で、南東から北西方向に向かって掘削されている。断面はSD－01と同じ逆台形で、左岸にSD－07と結ばれた小溝が付けられている。

SD－07～09　SD－01に向けて南東から北西へ掘削された比較的小さな規模の溝で、支流となるSD－09が途中SD－07、08に分かれ、SD－04によって収束、SD－01に合流する。全体に逆S字形に蛇行している。

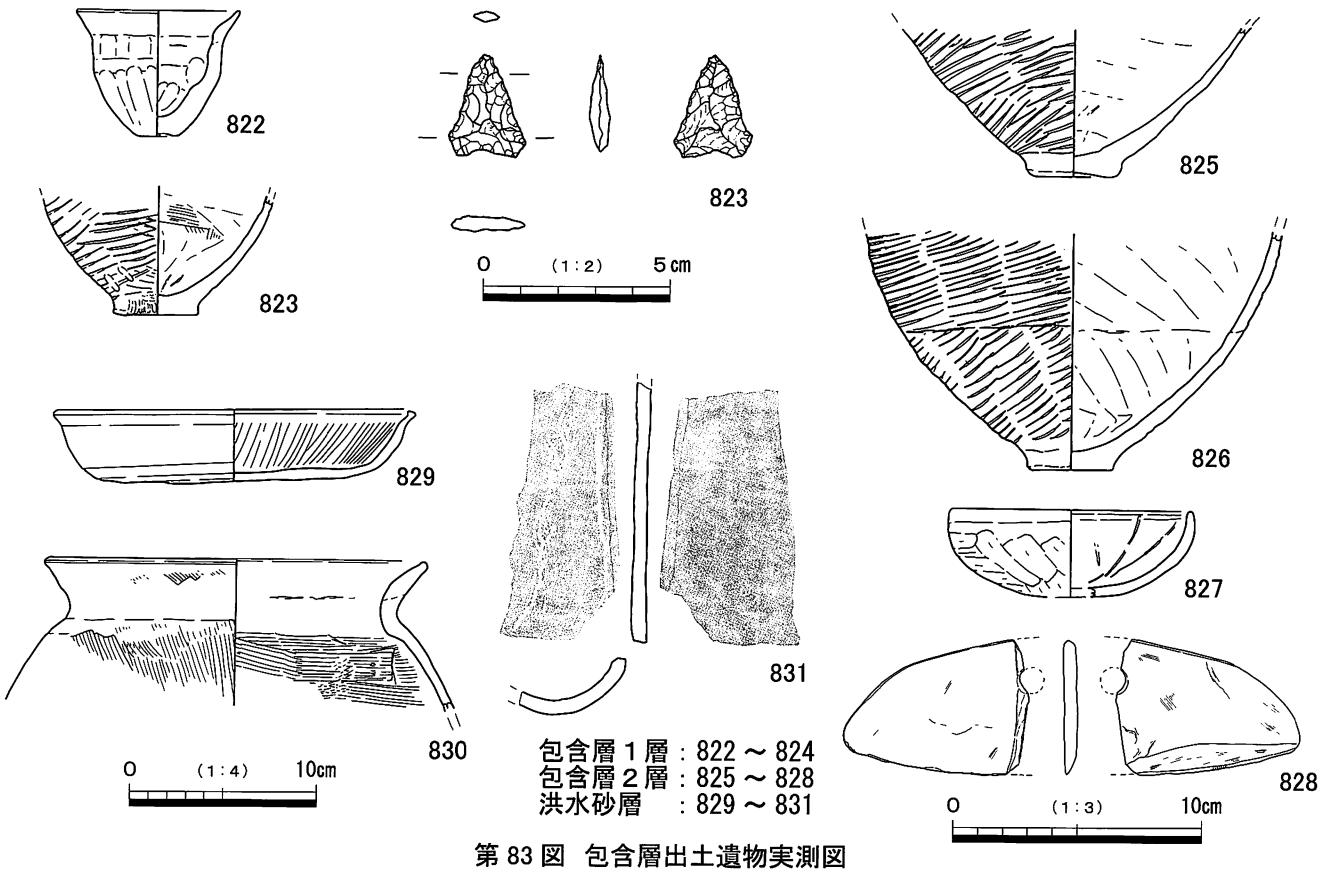
３．出土遺物

SD-01　土師器（797・798）、弥生土器（799～810）が出土した。797は土師器広口壺の口縁～体部。798は土師器長頸壺口縁～体部で頸部に波状文が描かれる。799～802は弥生土器甕で、799・800は口縁、801・802は底部片で、800・801は同一個体の可能性が高い。803～805は弥生土器鉢で、803は平底の底部から直線気味に広がるもの、804は「ハ」の字状に開く台をもつ椀状の鉢、805は中央がくぼむ鉢底部と考えられる。806は弥生土器甕の底部片と考えられる。797・798は古墳時代初頭（庄内式古相）、799～805は弥生時代後期後半（Ⅴ様式）、806は弥生時代後期（Ⅳ様式）に比定できる。



SD-01 : 797 ～ 806
SD-02 : 807
SD-06 : 808 ～ 810
SD-09 : 811
SK-02 : 812・813
SK-06 : 814
SK-15 : 815
SK-16 : 816 ～ 820
SP-10 : 821

第 82 図　遺構出土遺物実測図



第 83 図　包含層出土遺物実測図

SD－02　807 は弥生土器甕の口縁～体部で、外面調整にタタキ後一部ハケが施される。

SD－06　808 は弥生土器鉢もしくは壺の底部で、平底の底部からやや斜め上方に開く。809・810 は木製品で、809 は用途不明品であるが、810 は竪杵と考えられる。

SD－09　811 は弥生土器甕で、直線的にのびた体部に外反する口縁がつき、体部に３条の凹線と口縁端部に刻み目が施される。弥生時代前期に比定でき、下層から混入したものと考えられる。

SK－02　812･813 は弥生土器甕で、812 は口縁～体部、813 は体部中位を欠くが口縁～底部まで残存する。813 は頸部が「く」字状に屈曲して口縁部は外反し、端部は外方に面をもち上方に摘みあげられる。812 は口縁端部がつまみ上げられてやや内行し、外面側に端面を持つ。2 点とも弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。

SK-06　814 は口縁が短く直立する弥生土器甕。弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。

SK-15　弥生土器甕 (815) が出土した。815 は口縁～底部が残存し、体部上位に最大径をもち、口縁部は外反して端部はつみあげられる。弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定される。

SK-16　弥生土器甕 (816 ～ 818)、土師器杯 (819)、土師器手焙土器 (820) が出土した。816 はほぼ完形、817 は口縁～底部、817･818 は口縁～体部が残存する。816 は小型、817 ～ 818 は中型の甕で、いずれも体部最大径は上位にもつが、口縁部では、816 は直線的、817 は外反、818 は端部が摘みあげられる。弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定される。819 は土師器杯と考えられ、口縁部のみ残存する。820 は手焙形土器の天井部と受け部の接続部分で、天井部外面には櫛描文様が描かれ、屈曲部では刻み目が施される。古墳時代初頭（庄内式古相）に比定できる。

SP-10　821 は弥生土器甕で、体部は丸味をもち、口縁部は「く」の字状に外反して端部は面をもつ。弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。

遺構に伴わない遺物

包含層１層　弥生土器 (822･823)、石製品 (824) が出土した。822･823 は弥生土器甕で、822 はほぼ完形で、外面・内面はナデで調整される。小型のミニチュア土器と考えられる。823 は底部のみ残存し、平底の底部から体部は丸みを帯びて立ち上がる。２点とも弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定される。824 はサヌカイト製の凹基無茎式の石鏃である。

包含層２層　825 は土師器杯で、椀形を呈する。古墳時代初頭（庄内式古相）に比定できる。826・827 は弥生土器甕の体～底部片で、２点とも弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定される。828 は緑泥片岩製の直線刃半月形態、片刃の石包丁で、約１／２程度が残存する。紐穴は１箇所残存する。

洪水砂層　土師器 (829・830)、丸瓦 (831) が出土した。829 は内面に放射状暗文が施される杯で、８世紀に比定できる。830 は内面・外面にナデ・ハケが施される甕で、５世紀ごろに比定できる。831 は丸瓦で、約 1/4 が残存する。一端に面取りが施され、凹面に布目圧痕、凸面にナデが施される。

４．小結

以上、土庫丑寅遺跡の成果について述べた。大和高田市内の粘土採掘坑群の検出事例では、同じ弥生時代後期後半のものが馬見丘陵の南端に所在する岡崎遺跡において検出されている。岡崎の粘土採掘坑群は付近に存在する有井遺跡との密接な関わりを考えることができるが、当土庫丑寅遺跡の場合は、後述する土庫東遺跡や、その東に広がる松塚遺跡群との関わりを想定できる。

土庫丑寅遺跡で採掘の対象となった黒褐色粘質土は、一連の中和幹線の発掘調査や、この近辺の発掘調査で検出された事例はなく、土庫丑寅遺跡周辺に限定して堆積するものと思われる。土器の生産などに使用する粘土は、でたらめに採掘されたものではないことを、この調査の成果をもって立証することができるであろう。

丑寅遺跡１次調査現地説明会風景

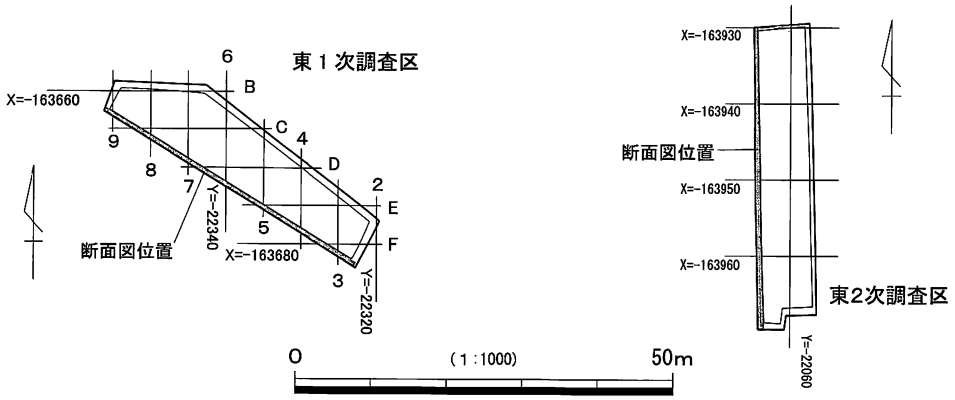
第６章　土庫東遺跡の調査

第１節　調査区の設定と記録

土庫東遺跡の調査区は、１、２次とも現在南北方向に流れている葛城川の左岸に位置する。試掘調査では、調査区から西側の地域がかつては滞水しやすい低地であった様相を示していたのに対して、当調査区周辺を南西端として北東方向に向かって弥生後期の遺構の存在する微高地が広がっていることを推定でき、特に２次調査区の周辺では微高地上に同期の遺物包含層の堆積が確認できた。

中和幹線道路の発掘調査は、近年橿原考古学研究所により葛城川を挟んで東側一帯でも実施され、そこでは微高地上で弥生後期の遺構や埋没古墳が検出されているが、今回の調査区付近はその延長にある可能性が高まったと言えよう。

調査にあたっては、遺物包含層の堆積の確認された箇所は工事対象範囲をすべて調査区（２次調査区）として設定したが、そうではない箇所については遺構の点在のみが認められた箇所を最大限に調査区として設定することとした（１次調査区）。遺跡名は、小字名にとどめるのではなく、将来的に遺跡の範囲が広がることを予測して土庫東遺跡として扱っていくことにした。



第 84 図　東遺跡地区割図

第２節　調査日記抄

１．土庫東遺跡１次調査

2006 年 10 月 17 日（火）晴時々曇

本日より重機を使った本格的な調査区の設定、掘削に取り組んでいく。

10 月 19 日（木）　晴

重機掘削を進めていく一方で、掘削の終了したところから土層観察用のトレンチを兼ねた側溝の掘削と壁面の清掃も実施していく。

10 月 20 日（金）　晴

重機による調査区の掘削、設定終了する。包含層には、土師器破片の包含が認められた。基準点測量を開始。夕刻までに、側溝のも完了した。

10 月 24 日（火）　晴

査区全体に湧水が著しいため、側溝の浚渫作業と排水を進める。5m 方眼の区割設定実施。

10 月 27 日（金）　晴

土層堆積を確認するため、側溝をさらに深く掘削し、壁面の精査も同時に進めていく。天理教調査団　池田保信氏来訪。

11 月 1 日（水）　晴

昨日より調査区東端から始めた、若干の土師器を包含する包含層 1 層の掘削、午後には終了する。掘削後現れた遺構面にて、南東より北西に向かって流れる河道を検出。調査区東端から４ｍ以上にわたって検出され、最大幅約 2.7 ｍに及ぶ。SD － 01 とする。

11 月 13 日（月）　曇時々晴

SD － 01 の西方で検出されていた南北方向に流れる SD － 02 調の掘削を実施し、夕刻までに完掘する。また SD － 02 の周辺で検出された沼状の落ち込みの掘削も同時に行った。

11月16日（木）晴

SD－01の覆土掘削に取り掛かっていく。覆土は2～3層に分層できると思われ、上層から1層、2層と呼称していくことにした。

11月30日（木）晴

SD－01の土層観察用の畦、すべての写真を撮り終え、図化作業を進めていく。また、遺物の出土状況の写真も撮影し終える。

12月1日（金）　晴時々曇

SD－01の畦の図化作業、すべて終了する。調査区南壁面を土層断面の写真撮影のため、清掃に取り掛かる。

12月5日（火）　晴

調査区南壁面の土層断面の写真撮影を行い、土層分層を行い、作図作業の準備に取り掛かっていく。

12月7日（木）　晴

南壁面の土層断面作図を終日実施する。途中、降雨により一旦中止する。

12月15日（金）　晴

午後には南壁面の土層断面作図作業、終了する。以後、航空測量の準備に取り掛かる。

12月19日（火）　晴

航空測量を実施。9:30から捕捉測量開始。早朝に霜が降りたため、遺構のライン引きは午前11:00ごろから始めた。午後1:30からヘリによる測量開始。午後2:30に無事終了。

2．土庫東遺跡2次調査

2009年7月16日（木）晴

本日より土庫東2次調査の調査区設定に取り掛かる。重機による掘削、排土作業、人力での側溝掘削等を終日実施。調査区304㎡のうち約45%の設定が完了する。包含層の上面で弥生後期の土器片の若干採取した。

7月22日（水）曇時々晴

終日、調査区設定作業。重機による掘削、排土作業を行う。調査区設定が南に進んでいくに連れ、遺物包含層の土器等の量は、減っていくようである。日食が起きるが作業に支障はなかった。

7月23日（木）晴

調査区設定作業完了。午後から測量会社による基準杭等の設置。土層断面観察用の東面西壁の精査、写真撮影完了する。岡山県教委　松尾佳子氏来訪。

7月24日（金）晴

包含層上面遺構の精査を調査区全体の2/3ほどまで実施。素掘溝等の遺構の無いことがわかった調査区北側から包含層を1層として掘削を始めていく。図面対象の東面西壁の分層も行い、作図作業も開始する。地域文化財研究所　福永信雄氏来訪。

7月30日（木）晴

包含層1層の掘削を、素掘溝等上面の遺構を掘削し終えた箇所から順次進めていく。包含層1層の下層からピット等遺構が検出され始める。旧職員　松原智子来訪。報告書刊行について打ち合わせ。

8月4日（火）晴

本日より本格的に遺構の掘削作業に取り掛かっていく。ピットは半裁後、土層断面の写真撮影も進めていった。一部ピットに6世紀の須恵器を据えたものもあり、すべての遺構が弥生後期のものか疑わしくなる。

8月7日（金）曇時々晴

遺構の土層断面の作図測量作業を進め、遺構の完掘作業も実施していく。降雨により崩落した壁面の修築作業も実施する。掃作業に取り掛かる。

8月17日（月）晴

本日をもって遺構の掘削作業、作図測量作業をすべて終了する。ベルトコンベアや機材の撤収作業を行う。

8月18日（火）晴

本日より航空測量に向けて、調査区全体の清掃作業にとりかかる。

8月20日（木）晴

航空測量実施。

8月24日（月）晴

重機による調査区の埋め戻し、撤収作業を終日行う。

第３節　調査成果

１．調査方法

試掘調査の結果、２次調査区を南西端部として現葛城川の河床を潜り、東から北東に方向に向かって微高地が広がっていたことが確かめられたが、微高地を取り囲む調査区周辺一帯は、湿潤な低湿地であったと推定できた。この発掘調査では、２次調査区一帯が微高地の一部分、１次調査区の一帯は微高地の末端部分に該当することを確認した。２次調査では調査対象地に可能な限り広く調査区を設定し、１次調査では遺構の検出できた範囲のみ調査区を設定した。

２．層序と検出した遺構

１、土庫東遺跡１次調査

遺構検出面は、水捌けが悪く絶えず湧水していたため、沖積地内にシルト層で構成された微高地でも末端であると解釈した。沖積作用が進行し、土砂が堆積していった中世以降も変わらず水捌けが悪かったようであり、遺構検出面を掘り起こすほど深く不規則に曲線を描いて掘られた排水溝が方々に広がっていた。また、風倒木痕と思われる大小の土坑も随所に見られた。

SD－01　北西から南東方向に向かって流水するよう掘削造成された溝である。幅は最大で約3.95ｍ、最小で約2.15ｍを測る。断面はおよそ船底状を呈する。上端は基本的には直線であるが、植物などの影響を受けたのか歪な曲線を描いているところも多々見受けられる。

SD－02　北東から南西に向かって流水するよう掘削された浅い溝である。幅は最大で約1.42ｍ、最小で約0.89ｍを測る。方向から**SD－01**に合流させるために掘削されたものと思われる。

SD－03　東から西に向かって流水させ、SD－01に合流させるために掘削されたごく浅い溝である。幅は最大で約0.75ｍ、最小で約0.35ｍを測る。

２、土庫東遺跡２次調査

調査区は、南北方向を長辺とするかたちで平面長方形に設定した。調査区とその周辺の地形は、沖積地内にシルト層で構成された微高地であるが、この微高地上に遺構が造成され、微高地はさらに東に向かって拡大していく様相が確かめられた。しかし調査区の北側と南側そして西側に向かって微高地はゆるやかに落ち込んでいき、西側一帯には、氾濫原が拡がっているものと思われる。調査区の東面西壁で確認した基本層序は、上層より現代の耕土・床土、５層から７層にわたって堆積する中世以降に開墾・耕作が繰り返された沖積土層、弥生後期後半の遺物包含層、及びこれを切り込み、同レベルで堆積して同時期に遺物を含む黒褐色のシルト層、上面に遺構が造成されたシルト層の順である。

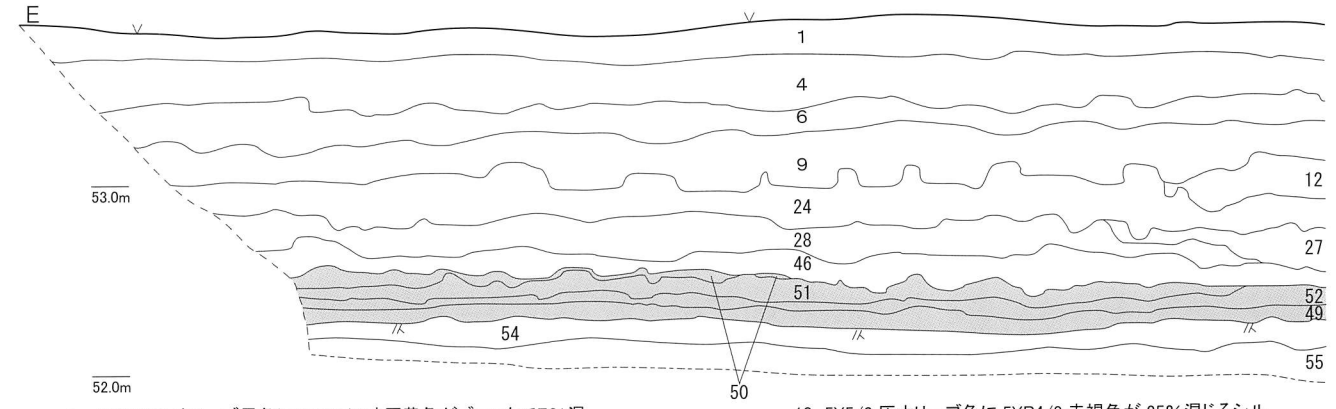
調査は、微高地上に造成された弥生時代以降の遺構の検出を対象とした。遺構の検出された微高地上の標高は、１次調査区より0.3～0.6ｍほど、高くなっている。

ピットは、49基検出した。土層断面で柱痕跡を観察できるものがあったが、今回の調査区は東西幅６ｍという程の規模であったこともあり、建物跡を把握するまでには至らなかった。

土坑は７基検出した。はっきりとした用途のわかるものはなかったが、うちSK－06は沼状の落ち込み、不整形な形状を呈したSK－07は、風倒木痕と捉えられよう。以下、溝など、主要な遺構について述べることにする。

SD－01　ほぼ東西方向に、規則的に掘削された溝である。幅は最大で約0.8ｍを測る。断面は、おおよそ逆台形を呈している。

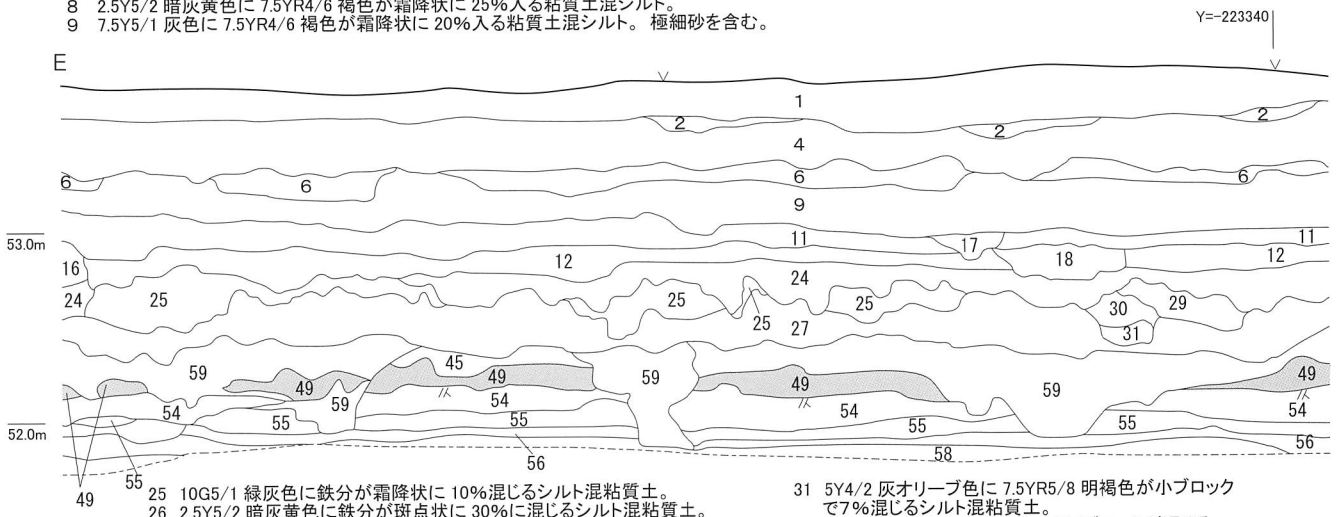
SD－02　南西～北西方向に、緩やかなＳ字形を呈して掘削された溝である。幅は最大で約0.5ｍ、最小約0.2ｍを測る。検出面からの深さは浅く、断面は船底状を呈する。この溝を境界として南側に



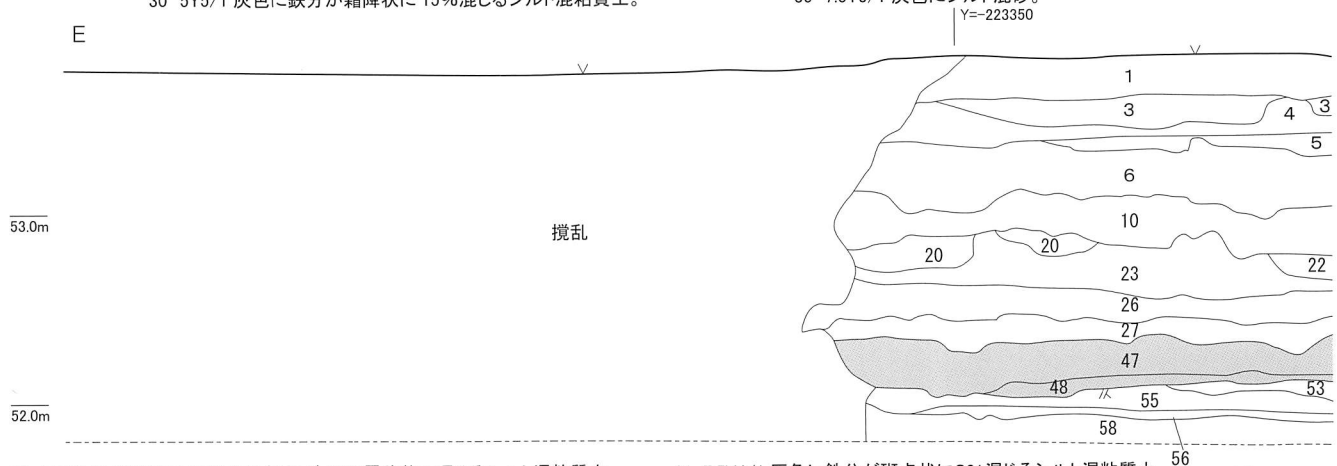
1　7.5YR3/2 オリーブ黒色に 2.5Y5/2 暗灰黄色がブロックで5%混じるシルト混粘質土。（表土）
2　7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト。 砂をやや多く含む。
3　5Y4/2 灰オリーブ色に 10YR4/6 褐色が5%混じる粘質土混シルト。
4　5Y5/2 灰オリーブ色に 10YR4/6 褐色が7%混じるシルト混粘質土。
5　5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が7%混じる粘質土混シルト。
6　5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が 15%混じるシルト混粘質土。一部に砂・シルトの多い素掘溝埋土が多く見られる。
7　2.5Y5/2 暗灰黄色に 7.5YR4/6 褐色 10%混じるシルト。
8　2.5Y5/2 暗灰黄色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状に 25%入る粘質土混シルト。
9　7.5Y5/1 灰色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状に 20%入る粘質土混シルト。 極細砂を含む。

耕作土層

10　5Y5/2 灰オリーブ色に 5YR4/8 赤褐色が 25%混じるシルト・砂混粘質土。 3mm 以下の砂を含み、一部に砂・シルトの多い素掘溝埋土が多く見られる。
11　5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状に 25%入る粘質土混シルト。 極細砂を全体にやや多く含む。
12　5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状に 30%入る粘質土混シルト。 全体に砂を多く含む。
13　5Y5/1 灰色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状で 20%混じるシルト。
14　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土。 鉄分が5%混じる。



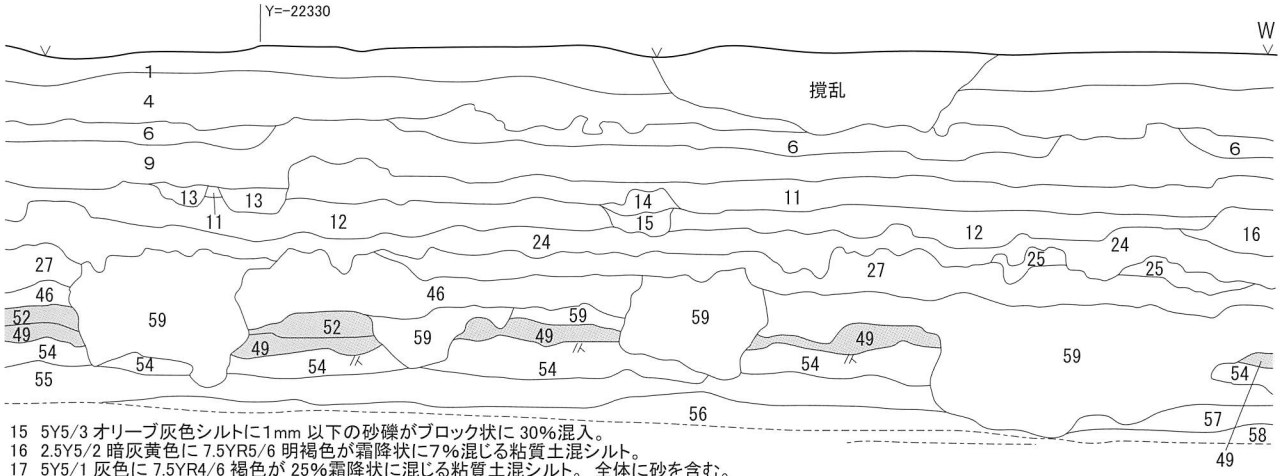
25　10G5/1 緑灰色に鉄分が霜降状に 10%混じるシルト混粘質土。
26　2.5Y5/2 暗灰黄色に鉄分が斑点状に 30%に混じるシルト混粘質土。
27　5Y4/1 灰色に鉄分が斑点状に 10%混じるシルト混粘質土。
28　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粘質土。 鉄分を多く含む。
29　2.5GY5/1 オリーブ灰色に鉄分が霜降状に 10%混じるシルト混粘質土。
30　5Y5/1 灰色に鉄分が霜降状に 15%混じるシルト混粘質土。
31　5Y4/2 灰オリーブ色に 7.5YR5/8 明褐色が小ブロックで7%混じるシルト混粘質土。
32　7.5Y5/1 灰色にシルト混砂。 6層ブロックが混じる。
33　2.5Y5/3 黄褐色に 7.5YR4/6 褐色が粘質土混シルト。
34　5Y4/1 灰色シルト。 砂がやや多く含む。
35　7.5Y5/1 灰色にシルト混砂。



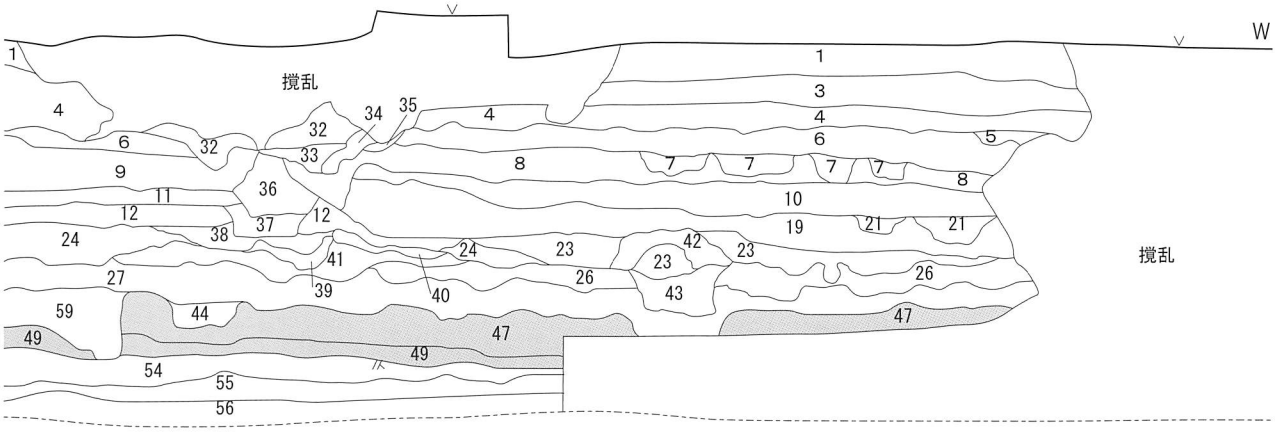
42　7.5Y5/3 黄褐色に 7.5YR4/6 褐色が 40%霜降状に混じるシルト混粘質土。
43　5Y5/2 灰オリーブ色の粘質土と 10YR5/2 灰黄褐色の砂礫（5mm 以下）のブロックが混じる。
44　5Y4/1 灰色に 5Y3/2 オリーブ黒色が大ブロックで 25%、7.5YR5/6 褐色が5%混じるシルト混粘質土。
45　2.5Y3/2 黒褐色に 7.5YR5/6 褐色が霜降状に 15%混じる砂混粘質土。 下部に 25 層ブロックが入る。
46　7.5Y4/1 灰色に 2.5GY5/1 オリーブ灰色がブロックで7%、7.5YR5/8 明褐色が霜降状に 15%混じるシルト混粘質土。
47　7.5Y4/1 灰色に鉄分が斑点状に3%混じるシルト混粘質土。
48　5Y4/1 灰色砂混粘質土。 砂は7mm 以下で粗く一部で鉄分含む。
49　5Y2/2 オリーブ黒色に 10YR5/6 黄褐色が霜降状に 10%混じる粘土質シルト。 下部に砂・シルトが多い。
50　2.5Y3/1 黒褐色に 5Y4/1 灰色がブロックで 45%、7.5YR4/6 褐色が3%混じるシルト混じり粘質土。
51　7.5Y3/1 オリーブ黒色に 7.5Y4/1 灰色がブロックで5%、7.5YR5/8 明褐色が5%混じるシルト混じり粘質土。
52　10YR4/6 褐色 2.5Y4/2 暗灰黄色がブロックで 15%混じる粘質土混シルト。 全体に砂を多く含む。

包含層
1層

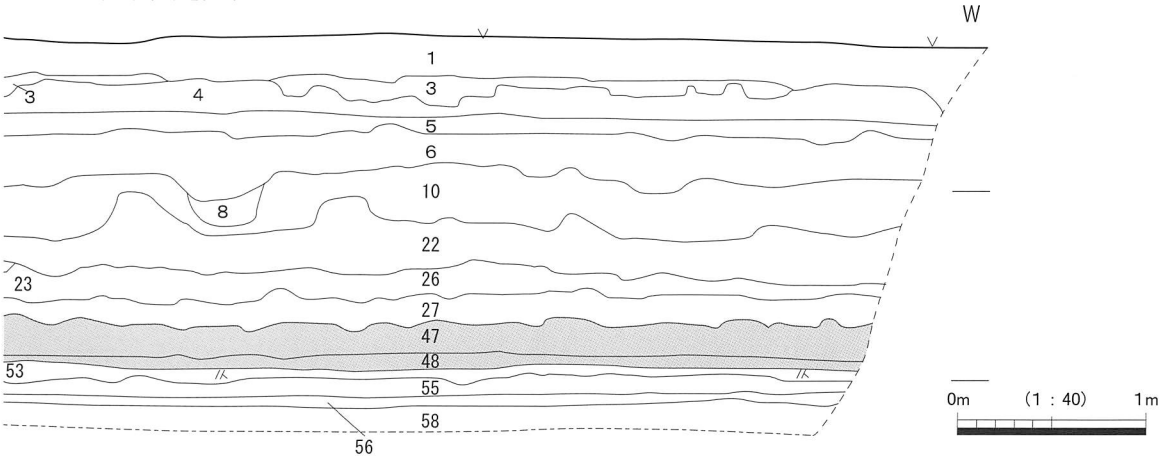
第 85 図　東遺跡1次調査南壁断面



15 5Y5/3 オリーブ灰色シルトに1mm 以下の砂礫がブロック状に 30%混入。
16 2.5Y5/2 暗灰黄色に 7.5YR5/6 明褐色が霜降状に7%混じる粘質土混シルト。
17 5Y5/1 灰色に 7.5YR4/6 褐色が 25%霜降状に混じる粘質土混シルト。 全体に砂を含む。
18 5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が 15%霜降状に混じる粘質土混シルト。
19 5Y5/2 灰オリーブ色に 5YR4/8 褐色が 35%混じる粘質土混シルト。 7mm 以下の砂がやや多い。
20 2.5Y5/3 黄褐色に 7.5YR4/6 褐色が7%混じる粘質土混シルト。
21 2.5Y5/2 暗灰黄色に 7.5YR4/5 褐色が 15%霜降状に混じるシルト混粘質土。 砂をやや多く含む。
22 2.5Y5/2 暗灰黄色に 10YR5/4 にぶい黄褐色 40%、 7.5YR3/4 暗褐色 20%混じるシルト混粘質土。
23 2.5Y5/2 暗灰黄色 7.5YR3/4 暗褐色が 40%混じるシルト混粘質土。
24 2.5Y5/2 暗灰黄色に 7.5YR5/8 明褐色が霜降状に 30%混じる粘質土混シルト。
部分的に細粒砂が少し混じる。

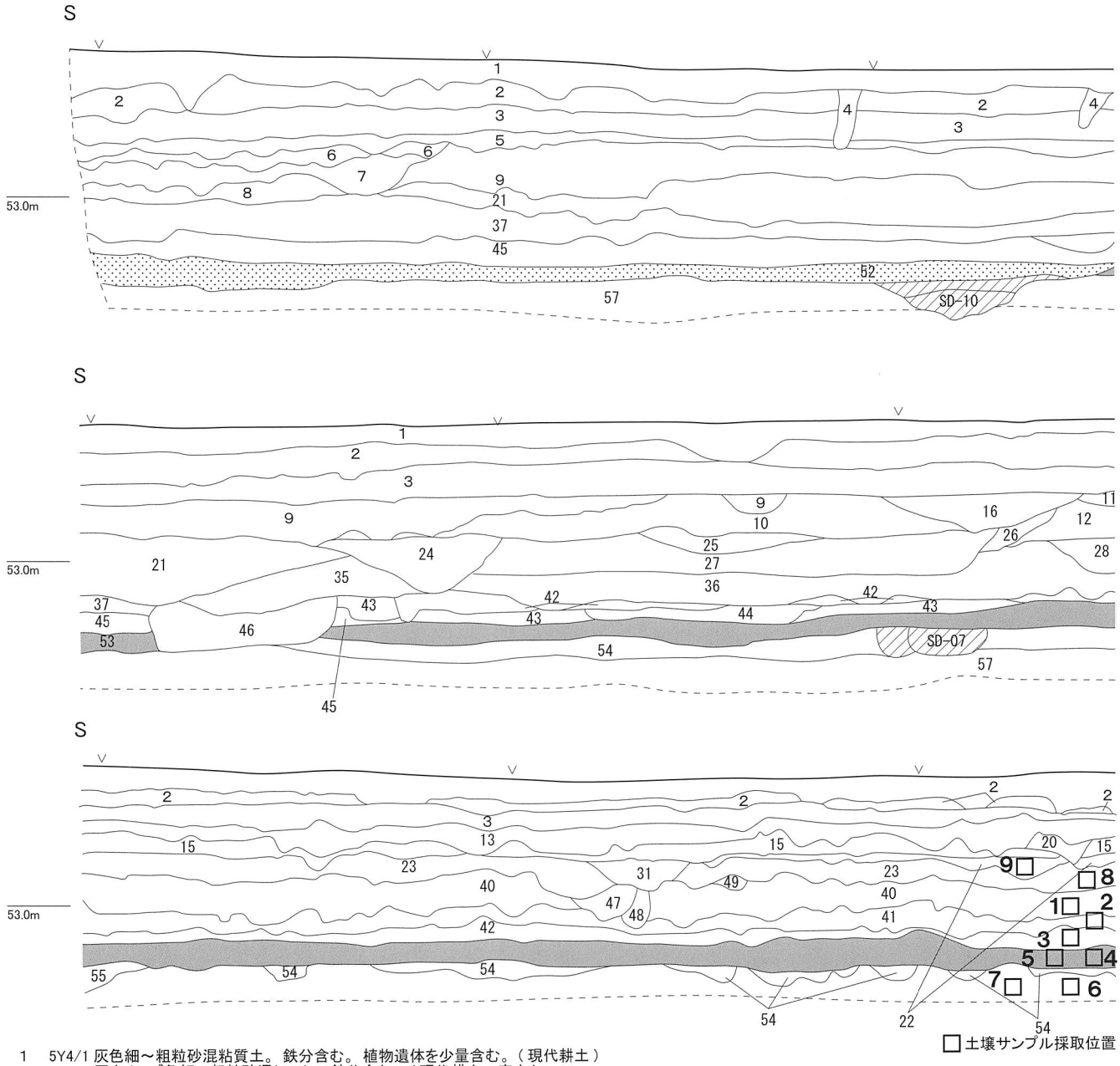


36 2.5Y5/3 黄褐色粘質土シルト。
37 5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5Y4/6 褐色が霜降状に 40%混じる粘土質シルト。
38 5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状に 10%混じる粘質土混シルト。
39 5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/5 褐色が霜降状に5%混じるシルト混粘質土。
40 5Y5/2 灰オリーブ色に 7.5YR4/6 褐色が霜降状に7%混じる砂混シルト。
41 5Y5/1 灰色に 7.5YR5/8 明褐色が霜降状に 15%混じるシルト混じり粘質土。
一部は細粒砂を多く含む



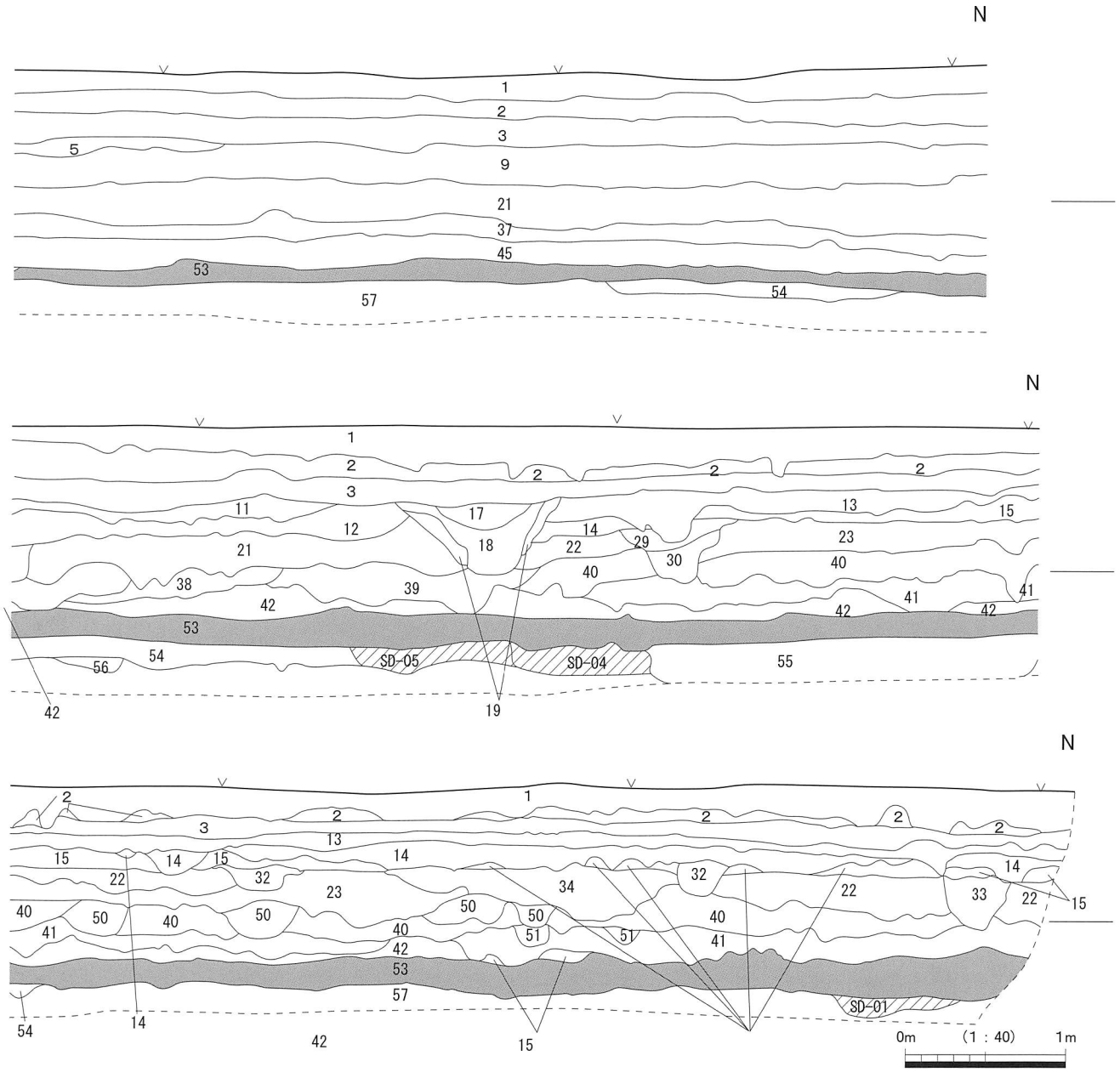
53 5Y5/1 灰色に 10YR5/6 黄褐色が 45%混じる粘質土。
54 10Y2/2 オリーブ黒色に 10YR5/6 褐色が大ブロックで 10%混じる粘質土。 上部に砂・シルトが多い。
55 10Y5/1 灰色粘質土。
56 7.5Y4/1 灰色粘質土。
57 7.5Y4/1 灰色シルト。 粘質土を含み、 砂はほとんど含まない。
58 10Y5/1 灰色シルト混粘質土。 一部に鉄分を含む。
59 7.5GY5/1 緑灰色シルト混粘質土。（風倒木痕）

第 85’図 東遺跡 1 次調査南壁断面



1　5Y4/1 灰色細～粗粒砂混粘質土。鉄分含む。植物遺体を少量含む。（現代耕土）
2　5Y4/2 灰オリーブ色細～粗粒砂混シルト。鉄分含む。（現代耕土・床土）
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色細～粗粒砂混粘質土。鉄分含む。
4　7.5GY4/1 暗緑灰色粘質土。（杭痕）
5　7.5Y4/1 灰色シルト～細粒砂混粘質土。鉄分を含む。
6　2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂混粘質土。雲母が少量混じる。鉄斑7%含む。
7　5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂混粘質土。雲母が少量混じる。鉄斑5%含む。。
8　5Y4/1 灰色細粒砂混粘質土。雲母が少量混じる。鉄斑7%含む。
9　5Y4/2 灰オリーブ色細～中粒砂混粘質土。鉄斑を 10%含む。
10　10YR4/2 灰黄褐色細～中粒砂混粘質土。
11　10YR4/2 灰黄褐色細～中粒砂混シルト。
12　10YR4/2 灰黄褐色細～粗粒砂混シルト。鉄分含む。
13　10YR4/2 灰黄褐色細～粗粒砂混シルトに3cm 以下の粘質土ブロックが40%入る。
　5～ 10mm の礫 10%と鉄斑 10%入る。
14　10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。鉄分含む。5～ 30mm 以下の礫を多く含む。
15　2.5Y5/3 黄褐色極細～細粒砂混シルト。雲母を多く含む。（水成堆積層）
16　10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。3～ 10mm 程の礫を5%含む。土器片含む。
17　10YR4/2 灰黄褐色細～粗粒砂混シルト。5～ 10mm 程の礫が 10%入る。
18　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～細粒砂混粘質土。
19　10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。鉄斑 30%入る。
20　2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂混粘質土・13・14 層ブロック（5～ 10cm 大）が混じる。
　} 素掘溝
21　10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。3～ 10mm 程の礫を5%含む。土器片含む。
22　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混粘質土。雲母を多く含む。鉄斑 40%含む。
23　2.5Y4/2 暗灰黄色極細～細粒砂混粘質土。雲母を多く含む。（水成堆積層）
24　10YR4/3 にぶい黄褐色細～中粒砂混粘質土。土器片含む。
25　10YR3/3 暗褐色細～粗粒砂混シルトに 5Y4/1 灰色粘質土ブロック（3cm 大）が5%入る。
26　10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。
27　10YR4/2 灰褐褐色細～粗粒砂混粘質土。21 層とよく似るが礫は含まない。
28　2.5Y5/1 黄灰色シルトに5cm 大の 27 層ブロック 20%入る。
29　2.5Y4/3 黄褐色細～粗粒砂混シルト。鉄斑 50%含む。
30　10YR4/2 灰黄褐色細～中粒砂混粘質土。
31　2.5GY3/1 暗オリーブ灰色粘質土。極少量の砂を含む。
32　2.5Y4/2 暗灰黄色極細～細粒砂混粘質土。雲母を多く含む。
　（水成堆積層）
　} 素掘溝

第 86 図　東遺跡2次調査西壁断面図



33 2.5Y5/2 暗灰黄色細～中粒砂混粘質土。鉄斑 10%入る。
34 2.5Y4/2 暗灰黄色細～中粒砂混シルト。鉄斑 60%入る。
35 10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。砂を多く含む。
36 10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混シルト。鉄斑と5～ 10mm 大の礫が 10%づつ入る。
37 10YR4/3 にぶい褐色細～中粒砂混粘質土。土器片を含む。
38 10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混粘質土。3～5mm 大の礫を極少量含む。鉄斑が5%入る。
39 2.5Y4/2 暗灰黄色細～粗粒砂混粘質シルト。鉄斑と5～ 10mm 大の礫が 10%づつ入る。
40 2.5Y4/2 暗灰黄色細～中粒砂混粘質土。鉄斑が 50%入る。
41 2.5Y4/1 黄灰色細～中粒砂混粘質土。鉄斑が 50%入る。
42 10YR3/2 黒褐色細～粗粒砂混粘質土。3～5mm 大の礫を5%含む。
43 2.5Y4/1 黄灰色細～中粒砂混粘質土。鉄斑が 10%入る。しまりあり。
44 10YR3/1 黒褐色細～中粒砂混シルト。鉄斑が5%入る。しまりあり。
45 10YR3/1 黒褐色細～中粒砂混シルト。鉄斑が 15%入る。土器片を少量含む。
46 5Y5/2 灰オリーブ色シルトに5～ 10cm 大の 45 層ブロックが 40%入る。
47 10YR4/2 灰黄褐色細～粗粒砂混粘質土。鉄斑が 30%入る。
48 10YR4/2 灰黄褐色細～粗粒砂混粘質土。鉄斑が 40%入る。
49 10YR4/2 灰黄褐色細～中粒砂混粘質土。鉄斑が 60%入る。
50 10YR4/3 にぶい黄褐色～ 2.5Y4/2 暗灰黄色細～粗粒砂混粘質土。鉄斑が 30%入る。
51 10YR3/2 灰黄褐色細～中粒砂混粘質土。鉄斑 40%入る。
52 N3/ 暗灰色粘質土。極少量粗粒砂が5%入る。
53 10YR3/1 黒褐色細～中粒砂混粘質シルト。鉄斑 15%が入る。土器片を多量に含む。
54 10YR2/1 黒褐色細～中粒砂混粘質土。鉄斑 10%含む。
55 10YR2/1 黒色細～粗粒砂混粘質土。鉄斑 30%入る。しまりあり。
56 10YR2/1 黒褐色細～粗粒砂混粘質土。鉄斑 30%入る。
57 2.5Y3/1 黒褐色細～粗粒砂混シルト～粘質土。鉄分が 105入る。

中世耕作土層

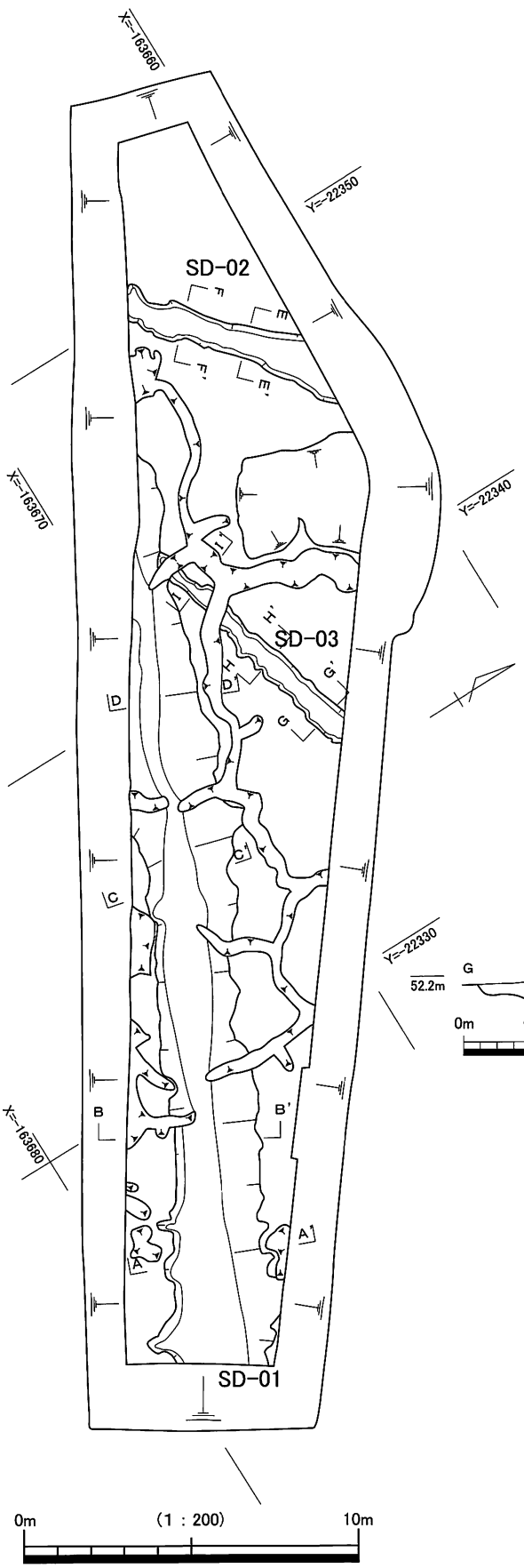
耕作関連遺構

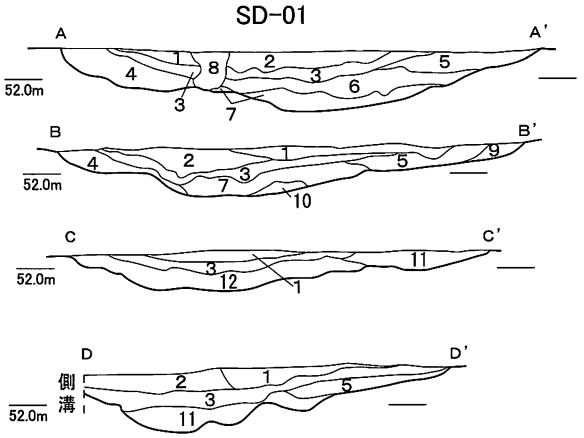
—耕作関連遺構

包含層1層

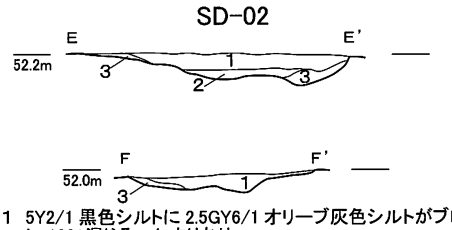
—灰色粘質土層

第 86’ 図 東遺跡2次調査西壁断面図

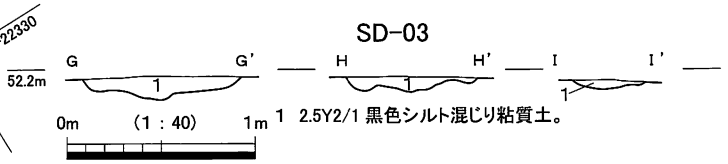




1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。
2 5Y4/1 灰色シルト混砂に 2.5Y5/6 黄褐色シルト混砂と1層ブロックが 50%混入。
3 5Y2/1 黒色シルト混粘質土。炭化物含む。
4 2.5Y4/1 黄灰色シルト混粘質土。3mm 以下の砂をやや多く含む。
5 2.5Y3/1 黒褐色シルト混粘質土。
6 5Y4/1 灰色シルト混砂(3mm 以下)。
7 5Y3/1 オリーブ黒色砂混粘質土。
8 10Y4/1 灰色のシルト混砂(1mm 以下)。
9 2.5Y3/1 黒褐色シルト混粘質土に 7.5Y4/1 灰色粘質土混シルト混入。
10 2.5Y3/1 黒褐色砂・シルト混粘質土。炭化物を少量む。
11 7.5Y4/1 灰色粘質土混シルトに 5Y2/1 黒色粘土質混シルトが ブロックで混じる。
12 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質混シルト。

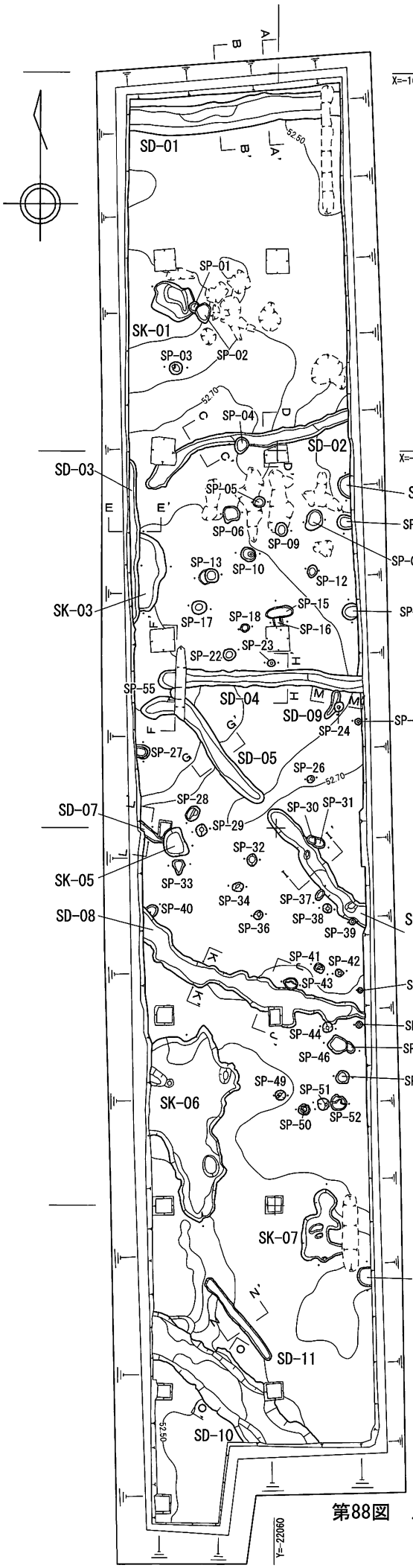


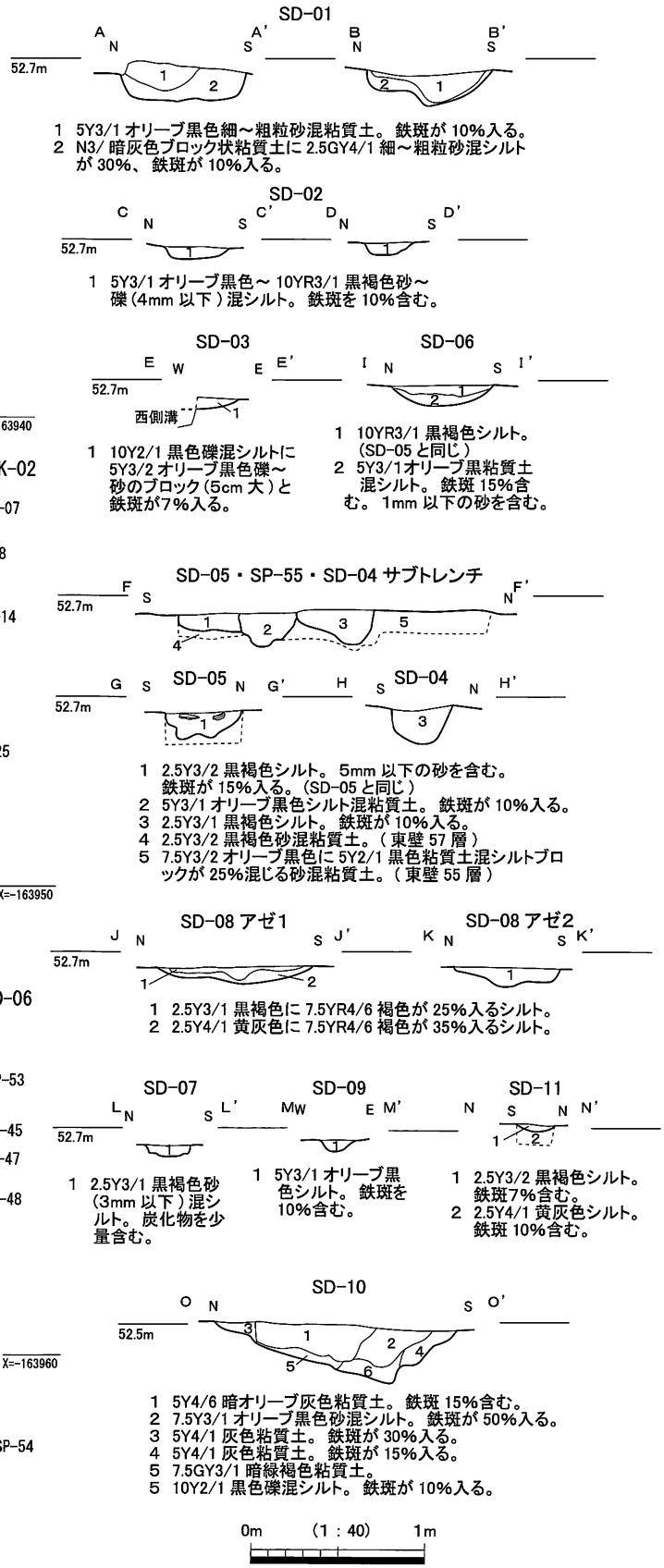
1 5Y2/1 黒色シルトに 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルトがブロック状に 10%混じる。しまりあり。
2 5Y2/1 黒色シルトに 5Y6/1 灰色シルトが 25%混入。しまりあり。
3 10YR5/6 黄褐色シルト。しまりやや強い。



1 2.5Y2/1 黒色シルト混じり粘質土。

第 87 図 東 1 次調査全体平面図・SD-01 ～ 03 断面図





第88図　土庫東２次調査区平面図・溝断面図

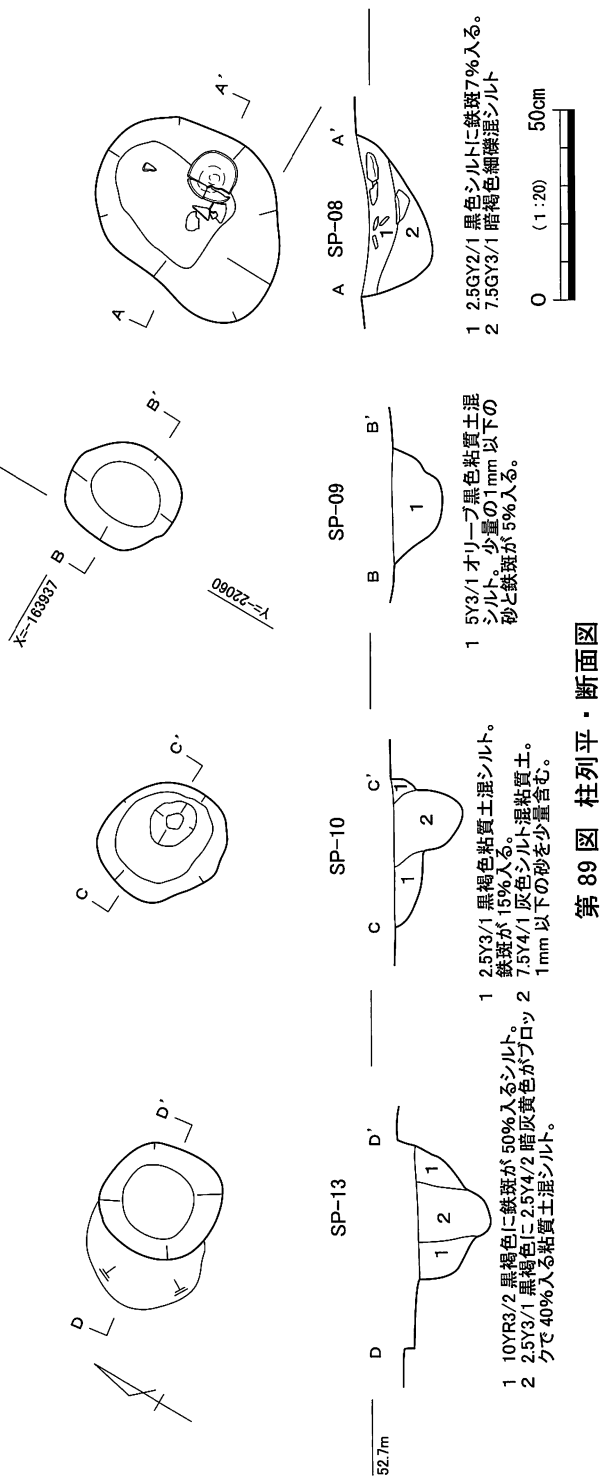
ピットなど遺構の数は急に増加する。また遺構の検出されている微高地も、徐々に北に向かって下がっていくため、建物などの構造物の区画溝の可能性が指摘できよう。

SD－04　東西方向に掘削された溝である。東は調査区外へ延びているが、西は調査区の西端付近で途切れている。幅は最大で約0.5ｍで、規則的に掘削されている。断面はおおよそ逆台形をしている。

SD－05・06　南東～北西方向に掘削された溝である。南東は調査区外へと延びているが、北西方向へはSD－04に接する付近で西に折れ、調査区の西端付近で切れている。また調査区の中央付近で渡橋を設けるようにして途切れている。この途切れた部分から北西部分をSD－05、南東部分をSD－06とし、SD－05は幅約0.5ｍと規則的に掘削されているが、SD－06は最大幅0.6～0.7ｍに舌状に拡張して掘削されている。

これらSD－04、05、06は、ほぼ45°の角度で近接するように存在していることから、両者が共存した遺構である可能性は高いとみられる。またSD－02と04の中間位に存在するピットSP－08～10、13は、一直線に並んでいることから、柱列と解釈することも可能である。これを柱列として捉えた場合、その延長線上でSD－05・06と同じく、SD－04と柱列が45°の角度で交錯するため、幅広く捉えれば、溝と柱列が何らかの関係をもった遺構であることも否めなくもないであろう。

SD－08　調査区の南側でほぼ東西方向に、南側に緩やかな弧を描いて掘削された溝である。幅は最大で1.0ｍ、最小0.5ｍを測り、検出面からの深さは浅く、断面は船底状を呈している。この溝を境にして、ピットや土壙など遺構の数は調査区南に向けて徐々に少なくなっていくため、これもSD－02と同じく、建物などの構造物の区画溝として造成されたものであることも考えられる。



第89図　柱列平・断面図

SD－10　調査区の南端部分で、南東～北西方向に向かって掘削造成された、調査区内では比較的規模の大きな溝である。幅は最大で1.5ｍ、最小1.0ｍを測り、断面は船底状をしている。検出された付近の微高地は、遺構が多く検出された調査区中央部分と比較して標高が低く、周辺に遺構もほとんど検出されていないため、排水等の目的で掘削造成された可能性もあろう。

第６表　土庫東２次小穴法量表 (単位 m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP-01	B-2	円形	0.3	0.3	0.2	1:5Y2/1 黒色粘質土混シルト。2:5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。	弥生土器片　(甕)
SP-02	B-2	楕円形	0.4	0.3	0.2	7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。	弥生土器片　(壷)
SP-03	B-2	円形	0.3	0.3	0.2	5Y3/1 オリーブ黒色砂・粘質土混シルト。	弥生土器片　(甕)
SP-04	B-3	楕円形	0.6	0.5	0.1	5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト。鉄斑７％と３mm 以下の砂を含む。	
SP-05	B-3	円形	0.3	0.3	0.1	10Y3/1 黒褐色シルト。(SD-02・SP-06 と同じ)	
SP-06	B-3	隅丸方形	0.5	0.4	0.1	10Y3/1 黒褐色シルト。(SD-02・SP-0 5 と同じ)	
SP-07	A-3	楕円径	0.4 以上	0.3	0.4	1：10YR4/3 にぶい黄褐色細～粗粒砂混粘質土。 2：N4/ 灰色細～粗粒砂混シルト。鉄斑５％入る。	弥生土器細片
SP-12	B-3	円形	0.4	0.4	0.1	５BG2/1 青黒色シルト。	弥生土器片（壷・甕）
SP-14	A-3	円形	0.4	0.4	0.3	1：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。　2：10BG3/1 暗灰色礫混シルト。	
SP-15	A・B-3	楕円形	0.6	0.4	0.2	1：5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。 2：5Y3/1 オリーブ黒色砂～シルト混粘質土。 3：7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。(柱痕)	
SP-16	A・B-3	楕円形	0.3	0.3	0.1	5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 25％入る。	
SP-17	B-3	楕円形	0.4	0.3	0.3	1：2.5Y3/1 黒褐色砂・粘質土混シルト。鉄斑 35％入る。 2：5Y3/1 オリーブ黒色砂・粘質土混シルト。鉄斑 20％入る。(柱痕)	
SP-18	B-3	円形	0.2	0.2	0.2	1：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。少量砂含む。 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。(柱痕)	
SP-22	B-4	円形	0.3	0.3	0.3	1：10YR3/2 黒褐色シルト。３mm 以下の砂と鉄斑 20％含む。 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。(柱痕)	
SP-23	B-4	円形	0.2	0.2	0.1	1：2.5Y3/1 黒褐色シルト。 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。(柱痕)	
SP-24	A- 4	円形	0.3	0.3	0.1	1：2.5Y3/1 黒褐色シルト。　2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト混粘質土。	
SP-25	A- 4	円形	0.2	0.2	0.2	2.5GY2/1 緑黒色シルト。鉄斑３％含む。	
SP-26	A- 4	円形	0.2	0.2	0.2	1：2.5Y3/1 黒褐色砂混シルト。鉄斑 10％含む。 2：5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト。(柱痕)	
SP-27	B-4	円形	0.3 以上	0.3	0.3	1：7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。 2：7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 15％入る。 3：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト。(柱痕)	
SP-28	B-4	円形	0.4	0.4	0.3	1：2.5Y4/1 灰色砂混シルト。鉄斑７％含む。 2：2.5Y4/1 黄灰色シルト混砂。鉄斑５％入る。	
SP-29	B-4	円形	0.3	0.3	0.2	5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト。鉄斑 25％含む。	弥生土器片　(高杯)
SP-30	A-5	円形	0.3	0.3	0.1	2.5Y3/2 黒褐色シルト。２mm 以下の砂と鉄斑 10％入る。	弥生土器細片
SP-31	A-5	楕円形	0.5 以上	0.3	0.1	2.5Y3/2 黒褐色シルト。鉄斑 25％入る。	
SP-32	B-5	円形	0.3	0.3	0.2	1：2.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 20％入る。 2：5Y3/2 オリーブ黒色シルト。	弥生土器片（甕・高杯）
SP-33	B-5	隅丸方形	0.4	0.3	0.2	5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑３％入る。	
SP-34	B-5	楕円形	0.3	0.2	0.2	1：2.5Y3/1 オリーブ 黒色シルト。鉄斑 10％入る。 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑３％入る。(柱痕)	
SP-36	B-5	円形	0.2	0.2	0.2	1：2.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 10％入る。 2：2.5Y3/1 に 5Y3/2 ブロックが混じるオリーブ黒色シルト。(柱痕)	
SP-37	A-5	楕円形	0.3	0.2	0.2	1：2.5Y3/1 黒褐シルト。 2：7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。 3：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト。鉄斑５％含む。(柱痕)	
SP-38	A-5	円形	0.3	0.3	0.2	1：2.5Y3/1 黒褐色シルト。鉄斑 10％含む。(柱痕) 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。	
SP-39	A-5	円形	0.2	0.2	0.2	5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑５％含む。	
SP-40	B-5	円形	0.4 以上	0.2 以上	0.2	1：10Y4/1 灰色シルト。 2：7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 20％含む。(柱痕？)	
SP-41	A-5	楕円形	0.3	0.2	0.2	1：2.5Y3/1 黒褐色シルト。鉄斑 15％入る。 2：5Y3/1 オリーブ黒色細粒砂混シルト。鉄斑７％含む。(柱痕)	
SP-42	A-5	円形	0.2	0.2	0.2	5G2/1 緑黒色礫混シルト。鉄斑 15％入る。	弥生土器細片
SP-43	A-5	楕円形	0.3	0.2	0.2	1：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 15％入る。 2：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト。(柱痕)	
SP-44	A-6	円形	0.3	0.3	0.1	1：2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト。鉄斑 15％入る。 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 10％入る。(柱痕)	
SP-45	A-6	円形	0.2	0.2	0.2	1：7.5GY3/1 暗緑灰色シルト。(柱痕) 2：5GY3/1 暗オリーブ灰色粘質土混シルト。	
SP-46	A-6	楕円形	0.4	0.3	0.2	7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 20％入る。	弥生土器細片
SP-47	A-6	円形	0.3	0.3	0.1	7.5Y4/1 灰色シルト。鉄斑 25％入る。	弥生土器細片
SP-48	A-6	楕円形	0.4	0.3	0.1	1：2.5Y3/1 黒褐色シルト。鉄斑 20％入る。 2：5Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 15％入る。	弥生土器細片
SP-49	A・B-6	円形	0.2	0.2	0.2	1：10Y4/1 灰色細粒砂シルト。鉄斑 10％入る。 2：5Y3/1 オリーブ黒色細粒砂混シルト。鉄斑７％入る。(柱痕)	
SP-50	A-6	楕円形	0.4	0.2	0.2	1：5Y3/2 オリーブ黒色シルト。鉄斑 15％含む。(柱痕) 2：10Y3/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑 20％含む。	
SP-51	A-6	円形	0.4	0.4	0.3	1：5GY2/1 オリーブ黒色シルト。鉄斑７％含む。(柱痕) 2：5Y4/2 暗灰黄色シルト。鉄斑 10％含む。	弥生土器片　(高杯)
SP-52	A-6	円形	0.3	0.3	0.2	1：2.5Y3/1 黒褐色シルト。鉄斑 25％入る。 2：10Y3/1 オリーブ黒色シルト。(柱痕)	
SP-53	A-5	円形	0.2	0.2	0.1	2.5Y3/2 黒褐色シルト。鉄斑 10％入る。	
SP-54	A-7	楕円形	0.5 以上	0.4 以上	0.1	2.5Y3/1 黒褐色シルト混粘質土。鉄斑 40％入る。	

3．出土遺物

（1） 土庫東1次出土遺物

SD-01 1層から弥生土器・石製品が出土した。832～835は弥生土器壺である。822はほぼ完形の長頸壺で、体部下位に焼成後穿孔をもつ。833・834は底部のみ、835は底部～体部が残存する。4点とも弥生時代後期後半（V様式）に比定される。836は緑泥片岩製の石包丁で、直線刃半月形の片刃で、紐孔は2箇所もつ。

（2） 土庫東2次出土遺物

SD－01 弥生土器片を1点図化した。837は壺口縁部で、端部は摘み上げられ外面側に面を持ち、刺突文が施される。弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

SD－05 838は弥生土器甕底部片で弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

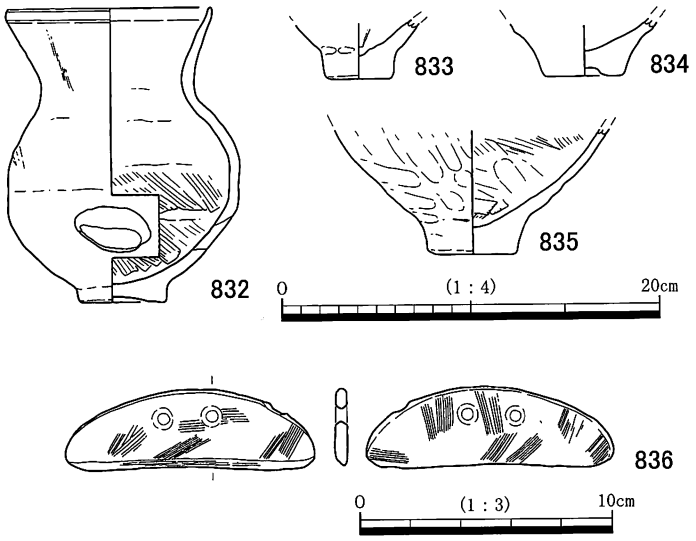
SD－07 839は弥生土器甕底部片で弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

SD－08 840は弥生土器甕口縁部片で弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

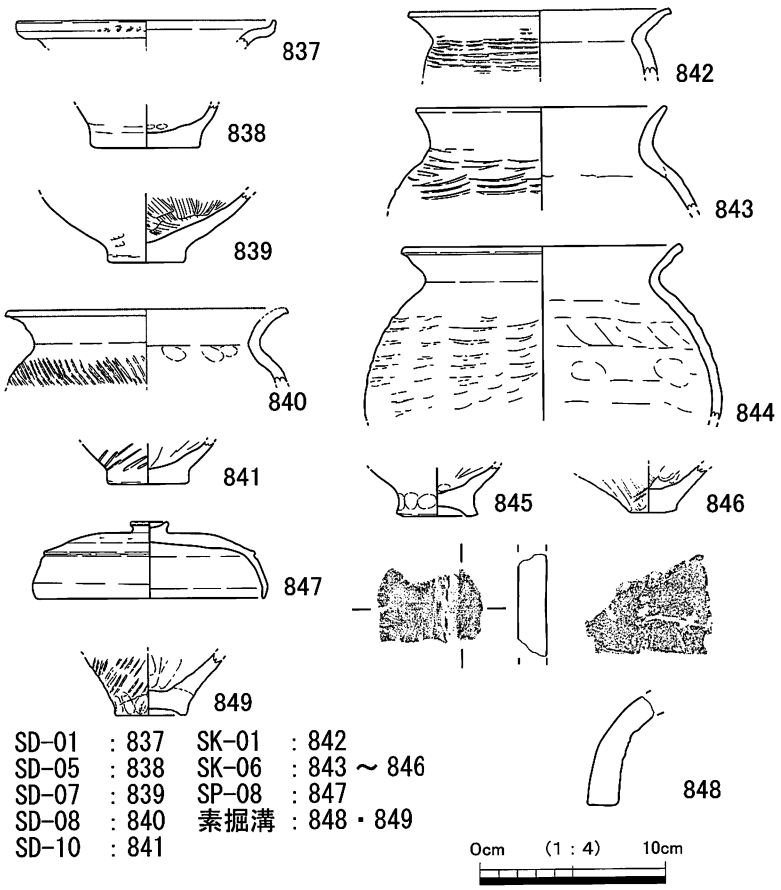
SD－10 841は弥生土器甕底部片で弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

SK－01 842は弥生土器甕口縁部片で弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

SK-06 842～846は弥生土器片である。843･844は甕口縁～体部片。845は壺もしくは鉢底部で、底面がややくぼむ。846は平底の甕底部片である。4点とも弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。



第90図 SD-01出土遺物実測図

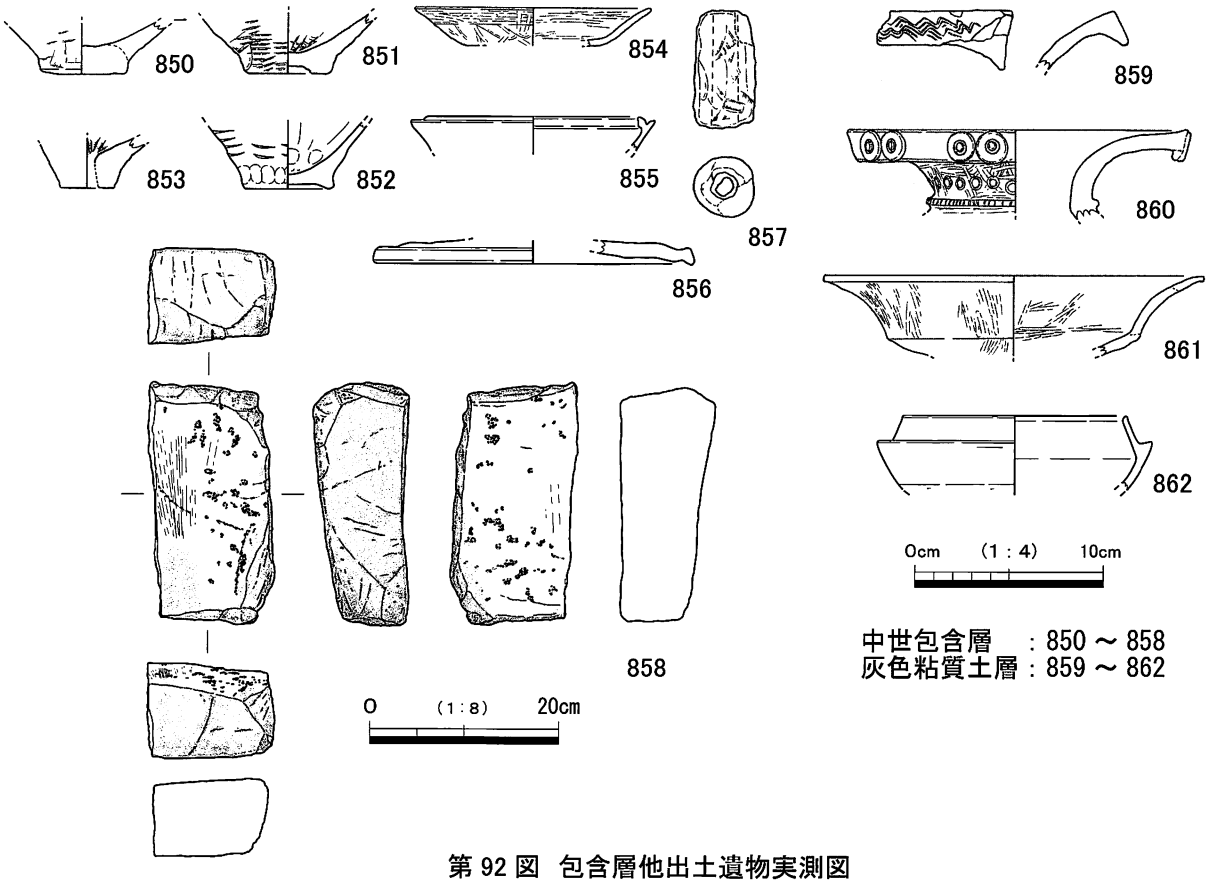


第91図 遺構出土遺物実測図

SP-08 須恵器1点を図化した。847は須恵器杯蓋で、ほぼ完形で出土した。天井部には円形の中央がくぼむツマミがつく。古墳時代後期（TK10型式）に比定できる。

素掘溝 848は丸瓦片で、凹面に布目圧痕、凸面にナデ・ケズリが施される。849は弥生土器甕底部片で、弥生時代後期後半（V様式）に比定できる。

中世包含層 850は弥生土器壺もしくは甕底部、851・852は弥生土器甕の底部、853は底面に穿孔を

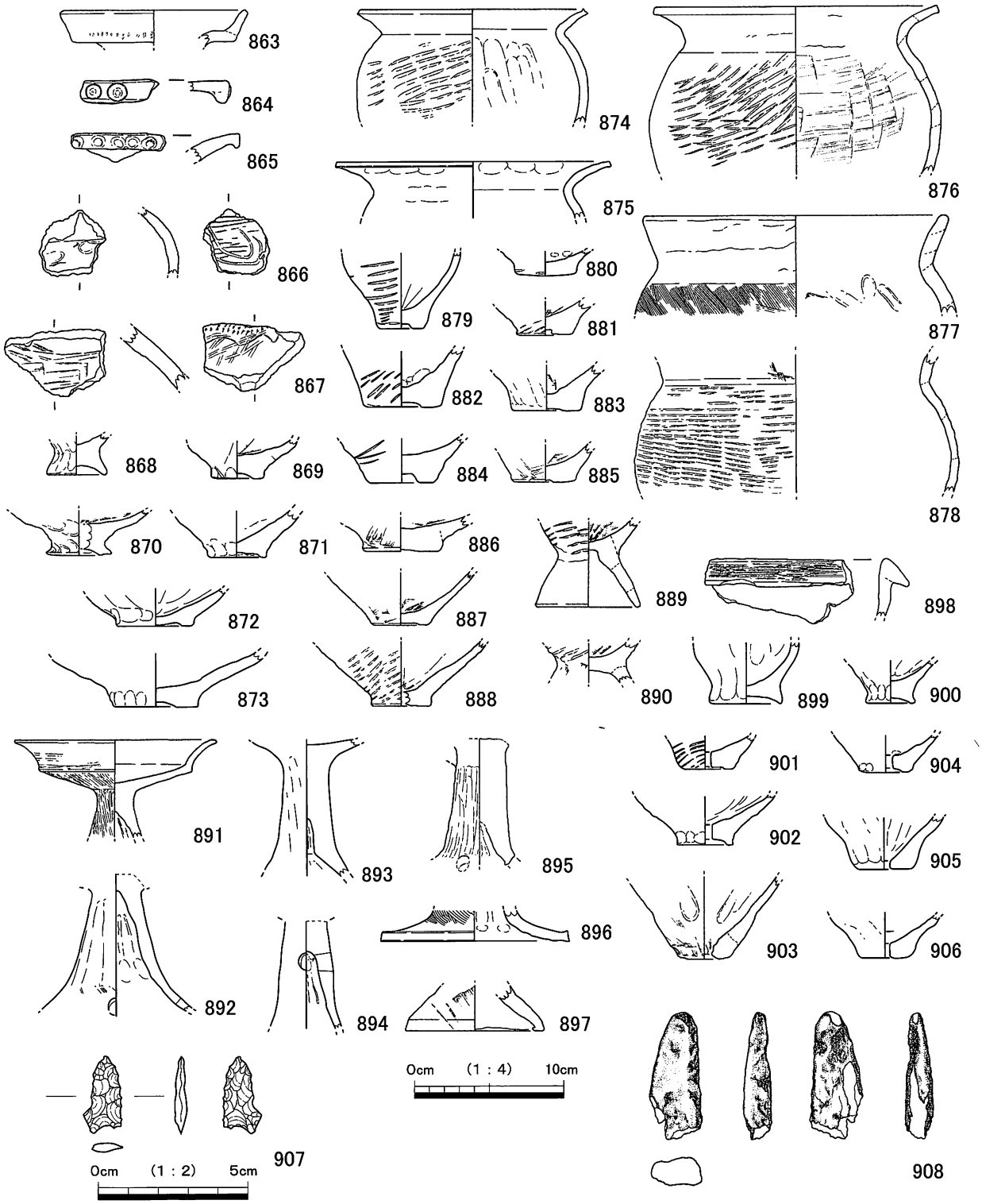


第 92 図 包含層他出土遺物実測図

くは鉢の底部片である。4 点は弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。854 は土師皿で、内外面にミガキが施される。855 は須恵器杯身で古墳時代後期（TK209 型式）に比定される。856 は須恵器杯蓋で、10 世紀中頃に比定される。857 は管状の土錘。858 は長方形の石製品で、平坦面の部に上下方向の摩擦痕が認められることから摺石と考えられるが、一部で敲打痕も認められる。

灰色粘質土層 859・860 は弥生土器広口壺の口縁部で、２点とも端部は垂下して装飾が施され、859 は波状文、860 は円形浮文と頸部に竹管文・刻み目が施される。861 は有稜高杯の杯部。弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。859 ～ 861 は弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。862 は須恵器杯身で、TK10 型式に比定できる。

包含層１層 863 ～ 873 は弥生土器壺片で、863 は外面に米粒大の輪状の文様が施される二重口縁壺口縁部。864・865 は広口壺口縁部で、864 は垂下した端面に円形浮文が施され、865 は垂下した端面に竹管文が施される。866・867 は線刻と刻み目の装飾が施される体部片。868 ～ 873 は壺底部で、868 は底面が中央がくぼむもの、それ以外は底面がドーナツ状を呈する。874 ～ 890 は弥生土器甕で、874 ～ 877 は口縁～体部、878 は頸～体部、879 ～ 890 は底部のみが残存する。口縁部では、877 が口縁がやや直線的に開いて体部にハケメが施されるが、それ以外は外反する口縁をもち、体部はタタキが施される。底部は、880 は平底、879・881 ～ 888 は底面がドーナツ状、889・890 は台付甕の台部である。891 ～ 896 は弥生土器高杯で、891 は有稜高杯の杯～脚柱部、893 ～ 895 は柱状部のみ、896 は脚裾部が残存する。897 は弥生土器器台脚部と考えられるが、端面が内面に肥厚しており、台付鉢や台付甕の脚部の可能性もある。898 は端部を垂下させ端面に櫛描文が施された、弥生土器の鉢口縁部と考えられる。899・900 は鉢底部で、2 点とも底面がややくぼむ。901 ～ 906 は有孔鉢底部で、いずれも焼成前に底面中央に 1 点円孔が穿たれる。863 ～ 906 は弥生時代後期後半（Ｖ様式）に比定できる。907・908 は石製品で、907 はサヌカイト製の石鏃、908 は泥岩製の石棒で、２点とも一部欠損する。



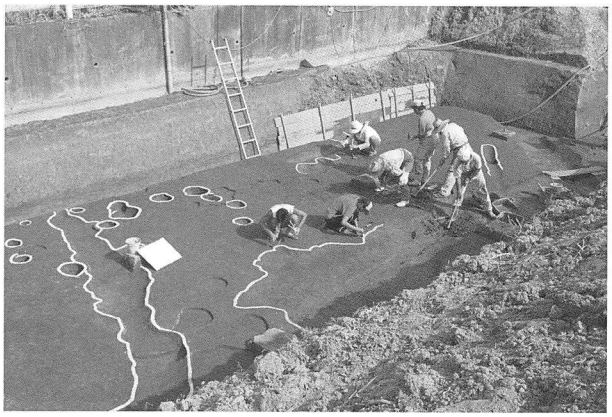
第 93 図　包含層1層出土遺物実測図

4．小結

微高地上から検出されたピット、土坑、溝などは、微高地でも比較的標高が高く水捌けもよかったと思われる、調査区の中央部分に集中する傾向が見られた。ピットには、柱痕跡を土層断面で観察できるものがあったが、今回の調査区は東西方向に幅６ｍ程と狭い規模であったことから、一つの柱列をつかむことはできたが、より具体的に溝の用途を解釈したり、また掘立柱建物を検出するなどといったところまでには至らなかった。

遺物包含層からの出土遺物は、ほとんどが弥生後期後半の土器片であった。このため、微高地上の遺構も、同時期のものが中心とみられるが、6 世紀の須恵器が出土したピット SP－08 が見つかったことから、すべての遺構を弥生後期以降のものと見るのには慎重さが求められよう。今後周辺の調査が進み、今回の調査で検出された遺構の性格が判明していくことを期待したい。

東遺跡２次調査　調査風景１



東遺跡２次調査　調査風景２

東遺跡２次調査　調査風景３

第７章　まとめと考察

第１節　調査の総まとめ

長田遺跡１次調査では、古墳時代後期と古墳時代前期～中期の大きく２期に分かれる遺構を検出した。下層にあたる古墳時代前期～中期では、13 棟の竪穴式住居、１棟の掘立柱建物、河道を検出した。竪穴式住居に関しては、平面プランが方形・円形・不定形のものがあり、この中には柱穴をもたない大壁住居の可能性があるものや、二本柱の建物が含まれる。上層にあたる古墳時代後期では、下層で検出された集落関連の遺構は検出されなかったが、小区画水田や畦畔など耕作関連の遺構と井戸、下層で検出した河道の上層部分を検出した。河道については、古墳時代前期で斜面平坦面に一括して廃棄された土器群、古墳時代後期でおこった洪水による砂の堆積層から多くの遺物が出土している。

長田遺跡３次調査は、長田遺跡１次調査と隣接する調査区で、古墳時代中～後期の遺構を検出し、長田遺跡１次調査で検出した河道の西肩と、その導水路と考えられる溝を検出した。

長田遺跡２次調査では、条里制に則った水田と畦畔を検出し、水田内では多数の足跡が確認された。土師器片、瓦器片などが出土しており、それらの遺物から水田の帰属時期は９～ 11 世紀に比定できる。

丑寅遺跡１次調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の粘土採掘坑を検出し、粘土採掘坑では鋤鍬などによる掘削跡が確認できた。

東遺跡では、１次で溝、２次で微高地上に形成された弥生時代後期の溝・ピットなど集落に関連する遺構群を検出した。今回の調査結果から遺跡北側で集落地が展開することが予想できる。

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代から近世にわたる土器、陶磁器、石製品、木製品などが出土し、古墳時代初頭から前期にかけての土師器と古墳時代中期の韓式系土器が中心を占める。韓式系土器については、軟質のものがほとんどで、土師器で用いられる製作技法が取り入れられているものも認められる。韓式系土器の器種はほとんど甕・鍋・甑であるが、生駒山西麓産の移動式竈が１点含まれる。須恵器や陶質土器に関しては、陶質土器は２点出土し、布留系の土師器甕を模した須恵器や陶質土器を模した須恵器も認められる。ただ、韓式系土器に伴うことが多いとされる初期須恵器、製塩土器が少ないことが特徴にあげられる。このほか、古墳時代前期～中期の遺物に、河道から、東海系の台付甕、鳥形土器、木製の下駄がある。鳥形土器については、化学分析から AD250 ～ 390 年との年代値が得られた。下駄については奈良県御所市南郷遺跡、宇陀市谷遺跡で類似例が出土している。また、少量であるが、古墳時代中期の鉄鏃、鞴羽口など金属関連の遺物も出土した。このほか、奈良時代の遺物に土馬がまとまって出土している。

第２節　渡来人定着の特色について二、三の問題

―土庫長田遺跡をめぐって『播磨国風土記』説話からの考察―

この一連の調査では、遺物の散布しか認められていなかった大和高田市北西域に大規模な調査区を設定し、様々な遺跡の実態が明らかになったことは大きな収穫となったと言えよう。

土庫長田遺跡の場合、古墳時代の集落検出という成果をあげることができた一方、集落を横断する形で調査区を設定したという環境から、集落の立地や構造、当時の周辺の土地利用状況など、単に住居跡等建物をまとめて検出したにとどまらず、集落を多角的に観察する資料が提示できたと思える。

竪穴式住居跡から人為的旧位置を留める遺物の出土に恵まれなかったことから、住居や掘立柱建物が機能した時期を細かく推し量ることまではできなかったが、竪穴を埋めていった覆土に含まれた土器を概観し、５世紀の半ばごろまでには、今回検出された住居群は廃絶していたのではないかという推定はできた。また大河道覆土からは４世紀代以前にまで時期が遡る遺物も出土していることから、

川上となる調査区から南側の微高地上には、当該期の遺構が存在することは間違いないと思われ、南北に長く伸びる微高地上を、５世紀前半までに、集落は南から調査区の範囲となる北へまとまって短距離移動したと推定できる。

また、韓式系土器が多数出土したことは特筆すべき成果で、とくに伽耶や百済との交流が盛んであったことをよく示している。土器には時期差を想定でき、朝鮮半島の土器の特徴を色濃く反映している比較的古い段階ものから、輪郭こそ半島の土器の個性を残しながらも、細かな調整などがかなり倭の土器に接近してしまった新しいものまでバラエティに富んでおり、半島の土器が倭の土器へ同化の過程を理解でき、強いては渡来人が帰化していった様子をも明らかにしていくことが可能であろう。

近年、発掘調査件数の増加に伴って、県内外で韓式系土器の出土例が右肩上がりの傾向にある。当市域においては、東南部の西坊城遺跡に続いて２例目であり、これまで空白域であった高田北部～広陵周辺にかけての北葛城郡南部域を埋めるまとまった好資料となった。後の７世紀には横大路として整備されていく官道によって市域の中央を東西に貫かれる大和高田市は、古くからの交通の一要衝であったことは確かであり、そのことを裏付けるように、道路から1.5k mほどの土庫長田遺跡で渡来人の足跡を色濃く残す古墳時代の集落遺跡を今回発見できたことは、意義あること評価できるう。

葛城地域に限って目を通すと、紀ノ川流域から、葛城山の東麓域、盆地南部域といった地域の遺跡で、これまで多くの韓式系土器が出土し、様々な研究がなされてきたことは著名である。今後こういった地域の資料と本遺跡の資料とを詳細に比較検討していくことにより、半島との交流を、政治的背景も捉えながらどのように考察するのか、また渡来人たちが実際に歩んだルートをどう復元するのかなど、資料の増加に相まって課題も増えていく状況にある。

渡来人の足跡についての問題は、遺物やその分布で実証する手法にとどまらす、『風土記』など文献からの考証する余地があることを喚起しておきたい。大和には古風土記の逸文しか残されていないが、５つの古風土記のうち比較的大和に近い渡来人説話を多く遺している『播磨国風土記』が参考になろう。渡来系の神である天日槍命を奉祭する集団は、『播磨国風土記』揖保郡揖保里粒丘の条に「粒丘　所以號粒丘者　天日槍命　從韓国度來　到於宇頭川底　而乞宿處於葦原志擧乎命日　汝爲國主　欲得吾所宿之處　志擧　卽許海中　爾時　客神　以劔攪海水而宿之　主神　卽畏客神之盛行　而先欲占國　巡上到於粒丘」とあるように、瀬戸内海・播磨灘から揖保川河口から川沿いに北に向かって点々と拠点を移していき、国つ神である伊和大神（葦原志擧乎命）を奉祭する集団と争いながら播磨国内陸部へと勢力を拡大していったことが解釈できる。『播磨国風土記』の説話を読む限り、未開拓の地を訪れた渡来人集団ににとって河やその流域を遡りながら集落を造成することが定着の一つのスタイルであったのかもしれない。

土庫長田遺跡は大きな川・大河道と共存した集落である。河川工事も行われ、大河道は単に飲料水の確保だけの機能にとどまらなかったことは明らかである。幅40 mにも及ぶ水量も豊富な大河道は、まさに遺跡東部を流れる「旧葛城川」としての解釈もふさわしく、大阪湾に注ぐ大和川の一支流であることは間違いないであろう。

ここで『播磨国風土記』の天日槍命の揖保川沿いの定着していく特質を参考にするならば、土庫長田の渡来集団は、紀ノ川流域～葛城山の東麓域へ定着した渡来人の辿ったルートではなく、横大路として整備される官道を通行したわけでもなく、渡来人たちが多く航行してきた瀬戸内海から大和川を遡上し、この土庫長田に辿り着いたという道筋もまた一つの渡来人の大和への定着ルートとして考えることもできないであろうか。

『播磨国風土記』には、飾磨郡漢部里の条に「漢部里　右　稱漢部者　讃藝國漢人等　到來居於此處　號漢部」とある。揖保郡大田里の条には「大田里　所以稱大田者　昔　呉勝　從漢國度來　始到於紀伊國名草郡大田村　其後分來　移到於攝津國三嶋賀美郡大田村　其又　遷來於揖保郡大田村　是

本紀伊國大田以爲名也」とあり、また同郡の枚方里の条には、「枚方里　所以名枚方者　河内國茨田郡枚方里漢人來到　始居此村　故日枚方里」などとあるように、渡来人集団は、最初に定着した場所から入植を繰り返すなど点々と移動しながら、播磨国に定着していった移動説話も見て取れる。

土庫長田の韓式系土器には、韓半島から直接持ち込まれたと思われる土器はごく少数で、倭の土器へと同化していったものが多数派を占めるわけなのだが、『播磨国風土記』に見える移動説話を参考にするならば、倭の土器へ同化も必ずしも土庫長田だけで起こった現象ではない可能性も出てくるであろう。そしてこの問題を考察をしていく場合、土庫長田一遺跡に限らず、倭国内の他地域産の、あるいは他地域の影響を受けた韓式系土器を見出されていくこともは予知できるものと言えよう。

これからも大和での調査が進展し、慎重に遺物が検討され、より新たな知見が蓄積されていくことを大いに期待したいところである。

参考文献

寺沢薫・森岡秀人編　1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

石野博信・河上邦彦・岩崎卓也・白石太一郎編　1991『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器　雄山閣

(財) 大阪府文化財センター　2006『古式土師器の年代学』

古代の土器研究会　1992『古代の土器 1　都城の土器集成 1』

中世土器研究会　2001『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

青柳泰介　2003「南郷遺跡群Ⅲ」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第 75 冊』奈良県立橿原考古学研究所

河上邦彦・宮原晋一・名倉聡・福田さよ子　2000「大和木器集成Ⅰ」『奈良県立橿原考古学研究所研究成果 第 3 冊』奈良県立橿原考古学研究所

遺物観察表

長田遺跡１次調査出土土器観察表

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
1	7区 砂層 （河道）	韓式系土器	不明	器高：(7.0)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石	内：10YR8/2 灰白色 外：10YR7/1 灰白色	体部片
2	7区 砂層 （河道）	韓式系土器	不明	器高：(4.6)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石	内：7.5YR7/2 灰白色 外：7.5YR7/3 にぶい橙色	体部片
3	K-2 砂層 （河道）	韓式土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.7) 幅：(6.1) 把手径：2.7～3.0	断面円形。	外：ユビオサエ後ナデ	1㎜前後の長石・雲母	外：5YR6/6 橙色	把手（内面離）
4	E-12 砂層 （河道）	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.7) 幅：(5.3) 把手径：2.2～3.4	断面いびつな楕円形	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：5YR5/6 明赤褐色	把手
5	7区北縁 砂層 （河道）	土師器	壺	口径：10.6 器高：14.6	丸底の底部、球形の体部、口縁部は「く」の字状の頸部から直線的に外上方へ伸びる。端部は丸みをもつ。	内：口縁部ハケメ後ナデ、体部ユビオサエ後ヨコナデ 外：口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：7.5YR7/6 橙色	ほぼ完形
6	8区 砂層 （河道）	土師器	甕	口径：(18.4) 器高：(9.0)	丸みをもつ体部から、「く」の字状に緩やかに屈曲する口縁部。端部は外側に肥厚し、面をもつ。	内:口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（4～7本／cm）	1㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 40%
7	8区 砂層 （河道）	土師器	高杯	底径：8.5 器高：(5.3)	「ハ」の字状にひろがる裾部からなだらかに脚柱部までのびる。裾端部は面をもつ。	内：脚柱部ナデ、裾部ハケメ 外：磨滅のため不明	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色、10YR8/2 灰白色	脚部完形 内外面に黒斑あり 円形透孔３方向
8	8区 砂層 （河道）	土師器	高杯	底径：8.9 器高：(5.8)	「ハ」の字状の裾部から、内湾しながら上方にのび、脚柱部中央に円孔。裾端部は面をもつ。	内：ナデ 外：ミガキ後ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：10YR8/2 灰白色	脚部完形 内外面に黒斑あり 円形透孔３方向
9	7区 砂層 (SD-01)	土師器	高杯	底径：8.7 器高：(5.9)	低い「ハ」の字状の裾部からなだらかに内傾しながらのびる脚柱部。裾端部はやや尖り気味。	内・外：板ナデ後ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：2.5YR5/6 明赤褐色、7.5YR7/6 橙色 外：5YR6/6～7.5YR7/6 橙色	脚部 35% 内外面に黒斑あり 焼成軟質 透孔なし
10	7区 砂層 （河道）	土師器	高杯	底径：(10.0) 器高：(9.2)	低い「ハ」の字状の裾部から直線的に立ち上がる脚柱部。裾端部はやや尖り気味。	内・外：板ナデ後ナデ	1㎜以下の長石・石英	内・外：10YR7/4～7/2 にぶい黄橙色	脚部 70% 透孔なし
11	8区 砂層 （河道）	土師器	杯	口径：11.2 器高：3.6	底～体部は丸みをもつ。口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石・雲母	内・外：5YR5/6 明赤褐色	ほぼ完形
12	8区 砂層 （河道）	土師器	小型平底鉢	口径：7.0 底径：3.0 器高：4.0	平底から外上方へ伸びる体部。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。	内：ユビオサエ、板ナデ後ナデ 外：ユビオサエ、ハケメ後ナデ	2㎜以下の石英・長石・雲母・褐色土粒	内：10YR5/4 にぶい黄褐色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	90%
13	7区 砂層 (SD-01)	須恵器	蓋？	器高：(3.0)	破片のため詳細不明	内：回転ナデ 外：回転ナデ後櫛描列点文	0.5㎜以下の白色砂粒	内・外：N5/ 灰色	体部片
14	8区 砂層 （河道）	陶質土器	蓋	口径：(15.8) 器高：(2.8)	天井部はやや扁平。天井部と口縁部の境目に稜が突出する。口縁端部は面をもち、やや尖る。	内：ナデ 外：回転ナデ、体部櫛描列点文・竹管文	2㎜以下の石英・白色砂粒	内：N7/ 灰色 外：N4/ 灰色	40% 有蓋高杯の蓋 内面に自然釉 固城地域産出との指摘あり
15	8区 砂層 （河道）	須恵器	杯蓋	口径：(13.2) 器高：3.9	天井部はやや扁平。口縁部はやや外傾する。口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	1㎜の石英・長石	内・外：7.5Y5/1 灰色	30% 天井部にヘラ記号あり
16	8区 砂層 （河道）	須恵器	杯蓋	口径：(13.8) 器高：3.9	天井部はやや扁平。口縁部はやや外傾する。口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	1～2㎜の石英・長石	内・外：N5/ 灰色	30%
17	5区 砂層 （河道）	須恵器	杯身	口径：(11.4) 器高：(3.9)	口縁部の立ち上がりはやや内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平に短く伸びる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	密	内・外：N6/ 灰色	20%
18	7区 砂層 しがらみ周辺 （河道）	須恵器	杯身	口径：(11.2) 器高：4.2	短く内傾する口縁部、端部は丸くおさめる。受部は短く水平。	内：回転ナデ、ナデ 外:口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	2㎜以下の長石	内：N7/ 灰色 外：10Y5/1 灰色、N8/ 灰白色	30%
19	7区 砂層 （河道）	須恵器	杯身	口径：12.0 器高：4.0	短く内傾する口縁部、端部は丸くおさめる。受部は短く水平。	内：回転ナデ、ナデ 外:口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	5㎜以下の長石・石英	内：N5/ 灰色 外：N4/ 灰色	ほぼ完形

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
20	8区 砂層 (河道)	須恵器	杯身	口径：(10.3) 器高：3.9	内傾する口縁部。水平の受部。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラケズリ	2㎜以下の長石・石英	内・外：5Y6/1～N5/灰色	45%
21	7区北縁 砂層 (SD-01)	須恵器	杯身	口径：(12.0) 器高：(3.4)	口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。受部は外上方へ短く伸びる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	1㎜の石英・長石	内・外：5Y5/1灰色	20%
22	8区 砂層 (河道)	須恵器	有蓋高杯	口径：(11.3) 底径：8.6 器高：9.0	裾端部はやや尖り気味で外側に面をもつ。脚は短く杯部は丸みをもち受部は水平に短く伸びる。口縁部は立ち上がりが内傾し端部は面をもつ。	内・外：回転ナデ	4㎜以下の長石・石英	内：N7/灰白色 外：N5/灰色	60% 方形透孔3方向
23	7区 砂層 しがらみ周辺 (河道)	須恵器	高杯	底径：(13.4) 器高：(7.3)	「ハ」の字状にひろがる脚部。裾端部は外側に面をもつ。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、沈線(2箇所)	1～2㎜の石英・長石	内・外：N4/灰色	底部20% 方形透孔1方残
24	7区 砂層 (河道)	須恵器	高杯	底径：7.8 器高：(5.2)	脚部は「ハ」の字状に広がる。裾端部は外側に面をもち、沈線を施す。脚は短い。	内・外：回転ナデ	1㎜の石英・長石	内・外：N6/灰色	脚部完形　透孔なし
25	7区 砂層 (河道)	須恵器	高杯	底径：7.8 器高：(3.7)	脚部は「ハ」の字状に大きくひろがる。脚部は短い。裾端部は外側に面をもつ。	内・外：回転ナデ	密	内・外：N4/灰色	脚部50% 円形透孔3方残 (径0.5cm)
26	8区 砂層 (河道)	須恵器	壷	底径：(17.8) 器高：(5.8)	体部は直線的に上方へ立ち上がる。口縁部は「ハ」の字状に広がる。口縁端部は面をもち凹む。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、波状文	1㎜以下の長石・石英	内：7.5Y6/1灰色 外：2.5Y4/1黄灰色	口縁部15% 外面全体に自然釉がかかる 陶質土器の可能性あり
31	F-13 河道 上層	須恵器	杯蓋	口径：15.0 器高：5.0	やや平らな天井部。立ち上がりは短く境には凸帯。口縁端部は沈線状の段をもつ。	内：回転ナデ、ナデ 外:口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	5㎜以下の長石	内：N6/灰色 外：N5/灰色	ほぼ完形
32	D-10 河道 上層	須恵器	杯蓋	口径：(13.2) 器高：3.6	平らな天井部から、口縁部はやや外方にむく。口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、天井部1/2回転ヘラケズリ	2㎜以下の長石・石英	内：N6/灰色 外：N5/灰色	40%
33	7区 河道 上層	須恵器	杯蓋	口径：14.2 器高：4.2	低い天井部に、立ち上がりは短く、口縁端部は尖り気味。	内：回転ナデ、ナデ 外:口縁部回転ナデ、天井部回転ケズリ	4㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内：5B6/1青灰色 外：N5/灰色	ほぼ完形 外面天井部にヘラ記号あり
34	8区 河道 下層	土師器	甕	器高：(3.3)	頸部は「く」の字状に屈曲する	内：ナデ 外：ナデ後矢羽根状タタキ	0.5㎜以下の白色砂粒・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：10YR6/1褐灰色	頸部片 外面に煤付着
35	7区北 河道 下層	土師器	壷	口径：10.5 器高：(7.7)	丸みをもつ肩部から、外湾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ナデ後ミガキ、体部ケズリ 外：口縁部ハケメ後ナデ、体部ハケメ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5YR6/6橙色 外：5YR6/6橙色	口縁部ほぼ完形 焼成やや軟質
36	8区 河道 下層	土師器	小型壷	口径：(8.8) 器高：(5.1)	丸みを持ちながら外湾する口頸部。口縁端部はやや尖り気味。	内：口縁部ハケメ後ナデ、体部ユビナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	2㎜以下の長石・石英	内：10YR6/2にぶい黄橙色 外：10YR6/3にぶい黄橙色	口縁部10%
37	8区 河道 下層	土師器	小型丸底壷	口径：(8.8) 器高：(7.2)	球形の体部から、わずかに外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内:口縁部ヨコナデ・板ナデ、体部ケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：5YR5/4にぶい赤褐色 外：10YR6/3にぶい黄橙色～5YR5/4赤褐色	口縁～体部20% 内外面に接合痕あり
38	8区 河道 下層	土師器	小型丸底壷	口径：5.9 器高：8.5	球形の体部から、屈曲し短く外方にのびる口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部ナデ後ミガキ、体部板ナデ 外：口縁部ナデ後ミガキ、体部ケズリ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：2.5Y7/2灰黄色	80% 内面に接合痕あり
39	8区 河道 下層	土師器	小型丸底壷	口径：8.1 器高：7.5	楕円形の体部から、屈曲し、直線的に外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ナデ、板ナデ、体部ユビナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR8/2灰白色 外：10YR8/2灰白色～5YR 6/6橙色	ほぼ完形
40	8区 河道 下層	土師器	小型丸底壷	口径：(7.3) 器高：(5.6)	楕円形の体部から、「く」の字に外傾する口縁部。端部は尖り気味。	内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR6/4にぶい橙色～10YR5/2灰黄褐色	口縁～体部10%
41	8区北端 河道 下層 (側溝)	土師器	小型丸底壷	口径：7.9 器高：8.3	球形の体部から屈曲し内湾気味に立ち上がる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色～2.5Y7/1灰白色 外：2.5Y6/2灰黄色	ほぼ完形 外面に黒斑あり
42	8区 河道 下層	土師器	小型丸底壷	口径：(9.3) 器高：(5.8)	球形の体部から、大きく外方にのびる口縁部。端部は尖り気味。	内:口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ 外:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：7.5YR5/6明赤褐色 外：2.5YR5/8明褐色	口縁～体部10% 焼成軟質

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
43	7区北河道下層	土師器	小型丸底壺	口径：9.4 器高：6.7	球形の体部から、屈曲し直線的に外方にのびる口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	ほぼ完形
44	8区河道下層	土師器	小型丸底壺	口径：(10.5) 器高：(4.6)	ナデ肩から、丸みをもちながら外方に大きく広がる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 外：口縁部ナデ後ミガキ、体部ケズリ	1㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁～体部 15% 外面磨滅
45	8区河道下層	土師器	小型丸底壺	胴部最大径：9.7 器高：(6.8)	楕円形の体部。	内：ナデ 外：ナデ、ケズリ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR7/2 にぶい黄橙色～5YR 6/6 橙色	体～底部 70% 外面に黒斑あり
46	8区河道下層	土師器	甕	口径：(12.9) 器高：18.3	球形の体部から、屈曲し丸みをもちながら外方に広がる口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部以下ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケメ（縦方向）	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y5/1 黄灰色 外：2.5Y6/2 灰黄色	60% 外面煤付着 内面底部に炭化物付着 二次被熱による表面剥離あり
47	8区河道下層	弥生土器	甕	口径：(12.5) 器高：(9.3)	ナデ形の形部から、外湾する口縁部。口縁端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	4㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 10% 内外面に接合痕あり
48	8区河道下層	弥生土器	甕	口径：(17.5) 器高：(9.0)	ナデ形の形部から、大きく外湾する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	4㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR6/2 灰黄褐色	口縁～体部 10% 内外面に接合痕あり
49	8区河道下層	土師器	甕	口径：(13.0) 器高：(5.5)	丸みをもつ「く」の字状に外湾する口縁部。端部は内に肥厚し、上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR8/2 ～ 7/4 灰白色 外：10YR8/2 灰白色	口縁～体部 10% 内外面に接合痕あり
50	7区北河道下層	土師器	甕	口径：(14.3) 器高：(7.4)	「く」の字状に外折する口縁部。端部は内に折り曲げて、丸くおさめる。	内：口縁部ハケメ後ナデ、体部ユビ調整 外：ハケメ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：5Y5/6 明赤褐色、10YR7/3 にぶい黄橙色 外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁部 40% 内面口縁部・外面に黒斑あり 内面に接合痕あり
51	7区北河道下層	土師器	甕	口径：(17.6) 器高：(5.3)	「く」の字状に外反する口縁部。端部は内に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部 30%
52	8区河道下層	土師器	甕	口径：(17.4) 器高：(8.5)	丸みをもつ体部から、「く」の字状に外反する口縁部。端部は内にわずか肥厚し、上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR7/2 ～ 7/4 にぶい黄橙色 外：2.5Y7/2 灰黄色～10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部 5% 未満 内外面に煤付着 外面に接合痕あり
53	7区南河道下層	土師器	甕	口径：(12.0) 器高：(4.2)	わずかに外傾する口縁部。端部は内に肥厚し外方に面をもつ。	内・外：ヨコナデ	1㎜以下の長石	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁部片 他地域産（山陰系） 外面に煤付着
54	8区河道下層	土師器	壺	口径：(15.4) 器高：(6.6)	外折する頸部から、屈曲し上方にのびる口縁部。端部は内にわずか肥厚し、上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ？	2㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁～体部 40% 外面口縁部に黒斑あり
55	8区河道下層	土師器	高杯	口径：14.8 器高：(5.6)	半円形の椀形。口縁端部は上方に面をもつ。	内：板ナデ 外：ナデ、ハケメ	2㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内：5YR7/6 ～ 6/8 橙色、2.5YR5/6 明赤褐色 外：5YR7/6 ～ 6/8 橙色	杯部完形 口縁部歪み
56	8区河道下層	土師器	高杯	口径：(15.5) 器高：(5.9)	平底から大きく外傾しながら口縁部につづく。端部はやや丸くおさめる。	内：ヘラミガキ 外：口体部板ナデ後ナデ、底部ヘラケズリ	3㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内：2.5YR6/8 ～ 5YR6/6 橙色 外：5YR6/6 ～ 6/8 橙色	杯部 50% 焼成軟質
57	8区河道下層	土師器	高杯	口径：15.4 器高：(10.8)	中央がやや凸気味の底部から外上方へ伸びる口縁部。端部は丸くおさめる。柱状部は外下方へ伸びる。	内：杯部ナデ、ヘラミガキ、柱状部しぼり目、ナデ 外：杯部ナデ、柱状部ナデ、面取り	1 ～ 2㎜の石英・長石・クサリ礫	内：5YR5/6 明赤褐色 外：10YR5/4 にぶい黄褐色	杯（60%）～柱状部（完形） 透孔なし
58	7区北河道下層	土師器	高杯	底径：(11.3) 器高：(8.1)	「ハ」の字状に広がる裾部。裾端部は外方に面をもつ。杯部は平底をもつ。	内：杯部ハケメ後ミガキ、柱状部ナデ、裾部ハケメ 外：杯部ユビナデ、下～柱状部板ナデ（縦方向）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	脚部 60% 円形の透孔 1 方残 内外面に接合痕あり
59	8区河道下層	土師器	高杯	底径：9.3 器高：(6.7)	「ハ」の字状にひろがる裾部から内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ヘラミガキ（縦方向）、ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色、7.5YR6/4 にぶい橙色	脚部 60% 円形の透孔 3 方向
60	8区河道下層	土師器	高杯	底径：(8.7) 器高：(6.9)	なだらかに「ハ」の字状にひろがる脚台。裾端部は面をもつ。	内：ナデ 外：板ナデ（縦）後ヘラミガキ（横）	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/1 灰白色、10YR7/2 にぶい黄橙色	脚部 45% 透孔なし

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
61	8区河道下層	土師器	高杯	底径：(10.2) 器高：(6.8)	低い「ハ」の字状の裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾部は面をもつ。	内：ナデ、ヨコナデ 外：板ナデ後ナデ一部ミガキ	1mm以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2灰黄色、2.5Y4/2黄灰色	脚部40% 透孔なし
62	8区河道下層	土師器	高杯	底径：(11.6) 器高：(6.4)	「ハ」の字状にひろがる裾部から、屈曲し脚柱部につづく。裾端部は丸くおさめる。	内・外：板ナデ後ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/2黄褐色、6/3にぶい黄橙色 外：10YR6/2黄褐色7.5YR6/2灰褐色	脚部40% 透孔なし
63	8区河道下層	土師器	高杯	底径：10.9 器高：(6.3)	なだらかに「ハ」の字状にひろがる脚台。裾端部は丸くおさめる。	内：ナデ、ユビオサエ 外：板ナデ後ナデ	5mm以下の長石・石英	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：10YR7/3にぶい黄橙色、7.5YR6/4にぶい橙色	脚部ほぼ完形 透孔なし
64	8区河道下層	土師器	高杯	底径：12.9 器高：(7.7)	「ハ」の字状の裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は丸くおさめる。	内：脚柱部ナデ、裾部ハケメ 外：板ナデ後ナデ	2mm以下の長石・石英	内：2.5Y7/2灰黄色、5YR5/4にぶい赤褐色 外：10YR6/2灰黄褐色、7.5YR6/4にぶい橙色	脚部90% 外面に黒斑あり 透孔なし
65	8区河道下層	土師器	高杯	底径：13.4 器高：(8.7)	「ハ」の字状にひろがる裾部から緩やかに屈曲。裾端部は面をもち、内側へわずかにつまむ。	内：ナデ、板ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1～2mmの石英・長石・クサリ礫	内：2.5Y4/2暗灰黄色 外：7.5YR5/6明褐色	脚(80%)～柱状部（完形） 焼成やや軟質 透孔なし
66	8区河道下層	土師器	高杯	器高：(6.5)	内傾しながら立ち上がる脚柱部。平底の杯部。	内：ハケメ、ナデ 外：杯部ナデ、脚部板ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5YR5/4にぶい赤褐色	柱状部30% 杯部内面と脚部外面に黒斑あり
67	7区南河道下層	土師器	鼓形器台	口径：(19.8) 器高：(8.6)	「く」の字状に大きく外反する口縁部。端部は外方に面をもつ。頸部上下に凸帯。	内：口縁部ナデ、体部ケズリ後ナデ 外：ヨコナデ	3mm以下の長石・石英	内・外：7.5YR6/4にぶい橙色	口縁部10% 山陰系
68	8区河道下層	土師器	小型器台	口径：8.5 器高：(5.0)	「ハ」の字状の台部。杯部は浅く、口縁端部はやや尖り気味。	内：受部ナデ、柱状部ユビナデ 外：受部ユビナデ、柱状部ナデ	3mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y6/2灰黄色～10YR7/3にぶい黄橙色	杯～柱状部60%
69	8区河道下層	土師器	脚部	底径：8.1 器高：(3.4)	「ハ」の字状の台部。裾端部は尖り気味。	内：ハケメ 外：板ナデ後ナデ	3mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：5YR5/4にぶい赤褐色～5YR6/6橙色 外：5YR6/6橙色～2.5YR5/6明赤褐色	脚部50% 焼成やや軟質
71	8区河道下層	土師器	手づくね土器	口径：3.1 器高：3.4	底～体部は丸みをもつ。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。	内：ユビオサエ、ヨコナデ 外：ユビオサエ、ユビオサエ後ナデ	2mm以下の石英・長石・雲母・褐色土粒	内・外：2.5Y7/2灰黄色	完形
73	8区河道下層	弥生土器	不明（壺・甕・鉢）	底径：(4.5) 器高：(4.7)	中央部がわずかに凹む平底から、丸みをもちながら立ち上がる体部。	内：ハケメ後ナデ 外：ナデ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：7.5YR6/2灰褐色～2.5Y6/1黄灰色	底部30% 外面に黒斑あり
74	8区河道下層	弥生土器	不明（壷・甕・鉢）	底径：(3.6) 器高：(1.8)	やや凹み気味の平底。	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	2mm以下の長石・石英	内：2.5YR5/2暗灰黄色 外：10YR6/3にぶい黄橙色	底部50%
75	8区河道下層	弥生土器	不明（壷・甕・鉢）	底径：(4.7) 器高：(2.7)	中央部が凹む底部。	内：板ナデ？ 外：ナデ、板ナデ	3mm以下の長石・石英	内・外：2..5Y6/2灰黄色	底部40%
76	7区河道下層	弥生土器	不明（壺・甕・鉢）	底径：4.1 器高：(2.3)	中央部がやや凹む平底。	内・外：ハケメ後ナデ	3mm以下の長石・石英	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色、75YR6/3にぶい褐色、2.5Y7/3浅黄色	底部10%以下
77	7区河道下層	弥生土器	不明（壺・甕・鉢）	底径：4.6 器高：(2.8)	平底。	内・外：ハケメ後ナデ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/2にぶい黄橙色、7.5Y2/1黒色 外：2.5Y7/2灰黄色	底部10%以下 内面に黒斑あり
78	8区河道下層	弥生土器	甕・鉢	底径：(4.0) 器高：(2.7)	平底。	内：ハケメ後ナデ 外：タタキ後ナデ	1mm以下の長石・石英・クサリ礫	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：10YR5/2灰黄褐色	底部40%
79	8区河道下層	弥生土器	甕・鉢	底径：(4.9) 器高：(2.1)	平底。	内：ナデ 外：タタキ	2mm以下の長石・石英	内：10Y2/1黒色 外：10YR7/3にぶい黄橙色～10YR5/1褐灰色	底部20%
80	8区河道下層	弥生土器	甕・鉢	底径：(4.0) 器高：(3.5)	平底から丸みをもちながら立ち上がる体部。	内：ハケメ後ナデ 外：タタキ後ナデ	1mm以下の長石・石英・クサリ礫	内：10YR7/3黄橙色～2.5Y4/1黄灰色 外：2.5YR5/4にぶい赤褐色～7.5YR3/1黒褐色	底部20%

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
81	8区河道下層	弥生土器	壺	器高：(1.8)	細片のため詳細不明	内：ナデ 外：ナデ、円形浮文	3㎜以下の長石・石英	内：10Y2/1 黒色 外：7.5YR7/2 明褐灰色、7.5YR5/6 明褐色	口縁部片（口縁端部は欠損）
82	8区河道下層	弥生土器	壺	器高：(2.3)	細片のため詳細不明	内：ナデ 外：ナデ、円形浮文	2㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部片
83	C-11河道下層	弥生土器	甕	器高：(2.6)	細片のため詳細不明	内：ナデ 外：口縁端部ナデ後刻み目、口縁部ユビナデ、沈線（3条）	2㎜以下の長石・石英	内：2.5Y7/1 灰白色、5/1 黄灰色 外：2.5Y7/2 灰黄色、3/2 黒褐色	口縁部片 口縁部に黒斑あり 弥生前期の所産
84	C-11河道下層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.1 器高：(4.2)	中央に穿孔がみられる底部。	内・外：ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR7/3 にぶい黄橙色、2.5Y2/1 灰黄色 外：2.5Y2/1 灰黄色	底部 10% 以下 外面に黒斑あり
92	SK-01	須恵器	杯身	口径：11.5 器高：5.0	杯部は丸みをもち、受部は水平に短く伸びる。口縁部は立ち上がりがやや内傾し、端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：口縁～体部回転ナデ、底部ヘラケズリ	2㎜以下の長石・石英	内・外：N7/ 灰白色	ほぼ完形
93	I-8水田	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.3) 幅：(6.5) 把手径：2.2～2.7	断面円形、上方に切り込みを有す。	外：ユビオサエ	1㎜前後の長石・雲母	外：5YR6/6 橙色	把手（内面剥離）
94	H-8水田	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(7.2) 幅：(6.1) 把手径：2.8～3.2	断面円形、切り込みを有す、貫通する	内：ナデ 外：ユビオサエ	2㎜以下の長石・石英・鉄斑	内：7.5Y7/2 灰黄色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色	把手
95	I-8水田	韓式系土器	不明	器高：(4.0)	細片のため詳細不明。	内：ユビオサエ、ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：7.5YR6/6 橙色	体部片
97	H,I-9 SH-01 2区	土師器	鉢	口径：(11.6) 底径：(6.5) 器高：10.1	平底から外湾気味に立ち上がる体部、口縁部は短く外湾する。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ、オサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	2㎜以下の長石・石英	内：7.5YR6/6 橙色 外：5YR6/6 橙色	40% 内面に黒斑あり 外面に煤付着
98	H-9 SH-01 3区	韓式系土器	甑？	口径：(22.8) 器高：(10.7)	直線的な体部から、口縁部は短く外折し、端部は外方に面をもつ	内・外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1㎜前後の長石	内：5YR6/6 橙色、7.5YR6/4 にぶい橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色、10YR5/1 褐灰色	口縁部片 口縁部内外面に煤付着
99	H-9 SH-01 4区	韓式系土器	不明	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：ユビオサエ 外：タタキ	微粒の長石・クサリ礫	内：5YR6/3 にぶい橙色 外：5YR6/6 橙色	体部片
100	H-8,9 SH-01 1区	韓式系土器	不明	器高：(5.0)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：2.5Y5/2 暗灰黄色	体部片
101	H,I-9 SH-01 2区	韓式系土器	不明	器高：(5.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・黒色砂粒	内：7.5YR5/4 にぶい橙色 外：5YR6/6 橙色	体部片
102	H,I-9 SH-01 トレンチ	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(4.6)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石 微粒の雲母	内：10YR5/3 にぶい黄褐色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	体部片 把手の痕跡あり 外面に煤付着
103	H-9 SH-01 4区	土師器	ミニチュア土器	器高：(3.4)	体部は丸みをもつ。口縁部は短く外反し、端部は面をもつ。	内・外：ナデ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR6/4 にぶい黄橙色	把手付鍋？ 口縁～体部片 把手欠損
104	H,I-9 SH-01 2区	土師器	甕	口径：(13.6) 器高：(12.7)	球形の体部から、短く外反する口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ、ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/3 にぶい浅黄橙色～10YR8/2 灰白色 外：7.5YR8/3 浅黄橙色～5YR7/4 にぶい橙色	口縁～体部 30% 内外面に煤付着 内外面に接合痕あり
105	H,I-9 SH-01 2区	土師器	甕	口径：(17.9) 器高：(5.1)	ナデ肩の体部から「く」の字状に外湾する口縁部。端部は外方に面をもつ。	内：口縁部ハケメ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：5YR7/6 橙色	口縁部 20%
106	H,I-9 SH-01 2区	土師器	高杯	口径：(23.9) 器高：(8.0)	直線的に大きく外反する体部から口縁部につづく。端部はやや尖り気味。	内：ハケメ後ヘラミガキ（放射線状） 外：ハケメ後ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英、2㎜以下の雲母	内・外：7.5YR6/6 橙色～2.5Y6/6 黒色	杯部 20% 内外面に煤付着 二次被熱痕あり
107	H-9 SH-02 3区	韓式系土器	把手付鍋	口径：(23.7) 底径：9.8 器高：17.4	平底から、なだらかに外傾しながら口縁部につづく。端部はやや丸くおさめる。体部中央部に断面円形の把手。片口。	内：口縁部ハケメ、体～底部ユビオサエ、ユビナデ 外：口縁部ユビオサエ後ハケメ、体～底部ハケメ、把手ユビオサエ	2㎜以下の長石・雲母・クサリ礫	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：10YR7/3～7/4 にぶい黄橙色	口縁～体部 60%、底部完形 口縁内外面と体部内面に煤付着 内面に接合痕あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
108	H-9 SH-02 トレンチ	韓式土器	平底鉢	底径：(8.0) 器高：(4.5)	底部は中央部が窪む。体部は外湾気味に立ち上がる。	内:体部ユビオサエ、底部ナデ 外：ナデ、底部未調整	1㎜以下の長石・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：5YR6/4 にぶい橙色	底部片 底部外面に煤付着
109	H-9 SH-02	乾式系土器	鍋？	器高：(8.6)	直立気味の体部から、わずかに外湾する口縁部、端部は丸くおさめる。片口。	内:ヨコナデ、ハケ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母・黒色粒	内：2.5Y6/3 にぶい黄色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部片 片口か 外面に接合痕あり
110	H-9 SH-02	韓式系土器	不明	器高：(7.1)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ハケ	微粒の長石・クサリ礫・雲母・黒色粒	内：2.5Y7/3 浅黄色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色	体部片 内面に煤付着
111	H-8,9 SH-02 2区	韓式系土器	不明	器高：(5.4)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：7.5YR5/4 にぶい褐色	体部片 内外面に煤付着
112	H-9 SH-02 トレンチ	韓式土器	（把手付）甑	器高：(7.1)	底部に孔を穿つ。	内：ヘラケズリ 外：ハケ	1㎜前後の長石・雲母・クサリ礫	内外：7.5YR6/4 にぶい橙色～10YR6/2 灰黄褐色	底部片
113	H-9 SH-02 1区	土師器	高杯	口径：11.6 器高：(5.5)	小さな平底から外湾しながら口縁部につづく。端部は丸くおさめる。	内：ハケ後ナデ 外：ナデ、一部板ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5YR5/6 明赤褐色	杯部 80% 内外面に黒斑、内面に接合痕あり
114	H-9 SH-02 1区	土師器	高杯	口径：16.4 器高：(6.4)	平底から外傾しながら口縁部につづく。端部はやや尖り気味。	内：ハケ後ナデ 外：ナデ、一部板ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5YR5/6 明赤褐色～10YR5/2 灰黄褐色 外：2.5Y7/2 灰黄色～5YR5/6 明赤褐色	杯部完形 外面に黒斑あり
115	H-8,9 SH-02 1区	土師器	高杯	口径：(15.5) 器高：(6.3)	平底から丸みをもちながら立ち上がる体部。口縁部は短く直立気味。端部は上方にやや面をもつ。	内：磨滅により調整法不明 外：ハケ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母、3㎜以下のクサリ礫	内：5YR4/6 赤褐色 外：7.5YR4/6 褐色～5/4 にぶい褐色	杯部 50% 外面に黒斑あり
116	H-9 SH-02 1区	土師器	高杯	口径：(17.6) 器高：(5.1)	口縁部は丸みを持ちながら立ち上がり上方にやや面をもつ。	内：ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	1㎜前後の長石・雲母を含む	内：5YR5/6 明赤褐色 外：5YR6/6 橙色	杯部 30%
117	G-8,9 SH-03 2区	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(11.4) 器高：(11.8)	やや丸味をもちながら直立する体部、口縁部は「く」の字に外折し、端部は面をもち凹む	内：ヨコナデ、ケズリ 外：ハケメ	1㎜前後の長石・雲母	内：5YR6/4 にぶい橙色 外：5YR7/4 にぶい橙色	口縁部片
118	G-8,9 SH-03 2区	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(21.0) 器高：(7.6)	なだらかに外湾しながら口縁部につづく、端部は丸くおさめる。	内：ナデ、ケズリ 外：ナデ	1㎜以下の長石、クサリ礫	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部 10% 外面に接合痕あり
119	G-8,9 SH-03 トレンチ・検出面	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	口径：(24.0) 器高：(14.5)	直線的に外方に開く体部から口縁部につづく、端部丸くおさめる	内・外：ナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁～体部 15% 把手の痕跡あり 外面に黒斑あり 外面接合痕あり
120	G-8,9 SH-03 2区	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.9) 幅：(5.2) 把手径：2.5	断面円形で、上方へ伸びる。	内：ナデ 外：ユビオサエ後ハケメ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：2.5Y3/1 黒褐色	把手
121	G-9 SH-03 1区	韓式土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.1) 幅：(7.2) 把手径：3.0～3.5	断面円形	内・外：ナデ	5㎜大の長石、3㎜以下の長石・石英・赤色粒・雲母	内：N4/ 灰色 外：7.5YR7/4 にぶい橙色	把手
122	G-9 SH-03 3区	韓式土器？	甕・鍋・甑？	器高：(2.8)	口縁端部は少し内側に拡張し、上方に面をもつ	内・外：ヨコナデ	微粒の雲母・角閃石	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：10YR2/1 黒色	口縁部片
123	G-8,9 SH-03 トレンチ	韓式系土器	不明	器高：(7.9)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	体部片
124	G-8,9 SH-03 検出面	韓式土器	不明	器高：(8.3)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2.5㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR5/2 灰黄褐色 外：2.5Y6/2 灰黄色	体部片
125	G-9 SH-03 3区	韓式系土器	不明	器高：(10.7)	細片のため詳細不明。	内：ハケ後ナデ 外：タタキ後一部板ナデ	微粒の長石・雲母・クサリ礫・黒色粒	内：2.5Y5/2 暗灰黄色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片 内面に煤付着
126	G-9 SH-03 東西アゼ	韓式系土器	不明	器高：(1.4)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	微粒の長石・雲母・クサリ礫	内：10YR5/2 灰黄褐色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	底部片 内面に煤付着
127	G-8,9 SH-03 1区	韓式系土器	不明	器高：(7.6)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	微粒のクサリ礫・雲母・長石	内：2.5Y5/2 暗灰黄色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色	体部片 内外面に煤付着

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
128	G-8,9 SH-03 2区	韓式系土器	把手付甑	器高：(10.9)	底部に楕円形の蒸気孔を穿つ。体部は丸みをもちながら外方へ伸びる。	内：ヘラケズリ 外：タタキ後ヘラケズリ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体～底部片 把手の痕跡あり 内面接合痕あり 蒸気孔は2個残
129	G-9 SH-03 4区	土師器	不明	口径：9.7 器高：12.8	球形の体部、屈曲して直線的に外傾する口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体～底部ハケ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	65% 内外面に黒斑あり
130	G-8,9 SH-03 2区	土師器	甕（小型）	口径：(13.2) 器高：(5.0)	丸みをもちながらたちあがる体部。口縁部は外切し、端部は外方に面をもつ。	内：口縁部ハケ、体部ケズリ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1～2㎜の長石・雲母を含む	内：7.5YR6/3 にぶい褐色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁～体部 20% 焼成やや軟質
131	G-8,9 SH-03 1区	土師器	甕	最大径：(26.5) 器高：(16.3)	丸みをもつ底部。	内：体部上半ケズリ後ナデ、下半ナデ・板ナデ 外：口縁部ナデ後ミガキ、体部ミガキ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：2.5Y3/1 黒褐色	体部 30% 内面に黒斑あり
132	G-8,9 SH-03 2区	土師器	高杯	口径：(23.5) 器高：(9.3)	平底から直線的に外方にのび、口縁部はわずかに外反する。端部は外方に面をもつ。	内：ナデ、見込みにミガキ 外：ナデ、下半ハケ後ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR7/3 にぶい黄橙色～10YR1.7/1 黒色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色～10YR5/2 灰黄褐色	杯部 30%
133	G-9 SH-03 3区・周壁溝 4区	土師器	高杯	口径：(21.6) 器高：(5.3)	やや丸みをもつ平底から、大きく外傾する体部。口縁部はさらに外湾し、端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ（縦）後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：10YR6/4 にぶい黄橙色～7.5YR7/4 にぶい橙色	杯部 55% 焼成やや軟質
134	G-9 SH-03 周壁溝	土師器	高杯	底径：(11.2) 器高：(3.5)	「ハ」の字状の裾部。端部は外方に面をもつ。	内：ナデ、未調整 外：ナデ、ミガキ後ナデ	1～2㎜の長石・雲母を含む	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	脚部 40% 透孔なし
135	G-8,9 SH-03 2区	土師器	高杯	底径：11.2 器高：(2.9)	「ハ」の字状に広がる裾部。裾端部は丸みをもつ。	内：裾部ヨコナデ、ユビオサエ 外：磨滅のため調整法不明	2㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	脚部 60% 透かしなし
136	G-8,9 SH-03 トレンチ	土師器	高杯	底径：9.7 器高：(6.1)	「ハ」の字状の裾部から内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ハケメ後ナデ 外：柱状部ナデ、裾部板ナデ、ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR6/4～10YR7/2 にぶい橙色 外：5YR6/6 橙色	脚部 60% 透孔なし 内面に黒斑あり
137	G-8,9 SH-03 2区	土師器	高杯	底径：9.9 器高：(6.0)	「ハ」の字状の裾部から、丸みをもちながら上方に立ち上がる脚柱部。裾端部は尖り気味。	内：柱状部板ナデ、裾部ナデ・板ナデ 外：柱状部ナデ後ミガキ（縦）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色～5YR5/6 明赤褐色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色～5YR5/6 明赤褐色	脚部 90% 透孔なし
138	G-8,9 SH-03 2区	土師器	高杯	底径：(13.6) 器高：(7.8)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら上方にのびる脚柱部。	内：柱状部板ナデ、裾部ハケメ 外：柱状部ミガキ（縦）、裾部ヨコナデ後ミガキ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR5/3 にぶい黄褐色 外：7.5YR5/4 にぶい褐色～5YR5/6 明赤褐色	脚部 40% 内面に黒斑あり 透孔なし
139	J-5 SH-04 1区 SP	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(28.6) 器高：(8.9)	直線的な体部から、口縁部につづく。口縁端部は外方に面をもつ。	内：ヨコナデ 外：ハケメ	1㎜前後の長石・雲母	内：5YR6/4 にぶい橙色、7.5YR4/2 灰褐色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部片 内面に煤付着 内外面に接合痕あり
140	J-5 SH-04 3区	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.0) 幅：(5.2) 把手径：2.9	断面円形	内：ナデ 外：ユビオサエ	1～2㎜の長石・雲母	内：2.5Y7/2 灰黄色 外：10YR6/2 灰黄褐色	把手
141	J-4 SH-05,06 検出面	韓式系土器	杯	口径：9.6 底径：16.2 器高：5.7	平底から外傾しながら立ち上がる体部、口縁部は直線気味に上方にのびる。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ナデ後ミガキ 外：口縁部ヨコナデ、底部ナデ後ミガキ	2㎜以下の長石・石英	内・外：5YR6/6 橙色	ほぼ完形
142	K-4 SH-05,06 2区	韓式土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.2) 幅：(7.8) 把手径：2.7～3.0	断面円形	内・外：ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/3 浅黄色	把手
143	K-4 SH-05・06 2区	韓式土器	把手付甑	口径：(22.7) 器高：(27.3)	円形の蒸気孔をもつ平底からなだらかに外湾して立ち上がり体部はやや直立する。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。	内・外：粗いハケメ 把手：ユビオサエ	1㎜以下の長石	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：7.5YR7/6 橙色	口縁部・把手・底部が部分的に残る
144	J-4,5 SH-05・06 1区	韓式系土器	不明	器高：(4.6)	細片のため詳細不明。	内：ハケメ後ナデ 外：タタキ後ナデ	微粒の長石・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y7/3 浅黄色	体部片
145	J-4,5 SH-05・06 4区	韓式系土器	不明	器高：(7.1)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ 外：タタキ後ハケメ？	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内：7.5Y8/4 浅黄橙色 外：7.5Y7/6 橙色	体部片

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
146	J-4 SH-05・06 1区 炭堆積	韓式系土器	不明	器高：(3.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	2㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：10YR7/3にぶい橙色	底部片
147	K-4 SH-05・06 2区	土師器	高杯	口径：(14.6) 器高：(5.7)	丸みを持ちながら立ち上がる口縁部。端部は内にわずか肥厚し、丸くおさめる。	内：ヨコナデ、ヨコナデ後ハケメ 外：ヨコナデ、ハケメ	1㎜以下の長石・雲母を含む	内：10YR5/3にぶい黄褐色 外：10YR6/3にぶい黄橙色	杯部40%
152	L-2 SH-07 1区	韓式系土器	不明	器高：(3.0)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ（粗いハケ?）	3㎜以下の長石、1㎜以下のクサリ礫・雲母	内：2.5Y7/3浅黄色 外：2.5Y7/1灰白色	体部片
153	L-2 SH-07 1区	土師器	甕	口径：12.9 器高：(5.7)	ナデ肩の体部から丸みをもち「く」の字状に外湾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色～10YR3/1黒褐色	口縁部20% 外面に煤付着
154	L-2 SH-07 1区	土師器	甕	口径：(13.1) 器高：(7.5)	ナデ肩の体部から「く」の字状の口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ後ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR8/4浅黄橙色 外：10YR8/3浅黄橙色～5YR7/4にぶい橙色	口縁部20%
155	L-2 SH-07 1区	土師器	甕	口径：16.5 器高：(8.6)	丸みをもつ肩部から、「く」の字状に外湾する口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ一部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（横・縦方向）一部後ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y4/1黄灰色 外：10YR8/2灰白色～7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部20% 外面体部に煤付着
156	L-2 SH-07 1区	土師器	高杯	口径：(23.4) 器高：(9.2)	平底から直線的に大きく外反する体部。口縁部はさらに外反し、端部は丸くおさめる。	内：ナデ、ハケ後ヨコナデ、ナデ後ヘラミガキ（放射線状） 外：ヨコナデ、タテハケ後ヨコナデ	0.5㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR6/6橙色～10YR8/2灰白色 外：2.5YR6/6橙色～7.5YR8/3浅黄橙色	杯部50%
157	L-2 SH-07 2区	土師器	高杯	口径：(14.5) 器高：(5.4)	平底から外湾しながら口縁部につづき端部は上方に面をもつ。	内・外：ハケメ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母鉄斑	内・外：7.5YR7/4にぶい橙色～7.5Y7/6橙色	杯部40%
158	L-2 SH-07 1区	土師器	高杯	底径：(9.0) 器高：(3.1)	「ハ」の字状の裾部。裾端部は面をもつ。	内：ハケ、未調整 外：ナデ	1㎜前後の長石・雲母を含む	内・外：5YR6/6～6/8橙色	脚部40% 透孔なし 焼成やや軟質
159	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(21.0) 器高：(7.5)	体部は丸みをもつ。口縁部は緩やかに外湾する。端部は上下に拡張し上方に面をもち凹む。	内：ヨコナデ、ユビオサエ 外：ヨコナデ、タタキ	1㎜前後の長石を微量	内・外：5YR6/6橙色	口縁部片
160	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(22.0) 器高：(6.0)	体部はなだらかに外湾しながら口縁部につづく。端部は面をもち、外方にわずかに拡張する	内：ハケメ 外：ヨコナデ、ハケメ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：2.5Y5/2暗灰黄色	口縁部片
161	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(27.8) 器高：(4.2)	「く」の字に外折する口縁部、端部は面をもち凹む	内：ヨコナデ、ハケ 外：ハケメ	1～2㎜の長石・雲母	内・外：10YR6/2灰黄褐色	口縁部片 内面に接合痕あり
162	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(15.6) 器高：(4.2)	直線的にやや外方にのびる口縁部、端部は上方に面をもつ	内・外：ハケ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：2.5Y6/3にぶい黄色	口縁部片
163	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	把手付甑	口径：(25.6) 器高：(22.0)	丸みをもちながら外傾する体部から口縁部につづく。端部は内にわずか肥厚し、上方に面をもつ。底部に蒸気孔あり	内：口縁部ハケメ、体部以下ユビナデ 外：口縁～体部上半ハケ、体部下半ナデ 把手：ユビオサエ、ナデ	2㎜以下の長石・雲母	内：10YR5/2灰黄褐色～7.5YR6/4にぶい黄橙色 外：10YR6/3にぶい黄橙色	50% 内外面に接合痕あり 蒸気孔3箇所残
164	F-8 SH-08 3区	韓式土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(8.2) 把手径：2.2～2.9	断面楕円形	内：ケズリ 外：ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：7.5YR4/3褐色	把手～体部
165	F-8 SH-08 2区2層	韓式系土器	不明	器高：(8.6)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石・雲母、微粒のクサリ礫	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR5/4にぶい橙色	体部片
166	F-8 SH-08 2区2層	韓式系土器	不明	器高：(8.7)	細片のため詳細不明。	内：ハケ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内：10YR6/3にぶい黄橙色 外：2.5Y6/3にぶい黄色	体部片
167	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	不明	器高：(5.6)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	2㎜以下の長石、1㎜以下のクサリ礫・雲母	内：10YR7/3にぶい黄橙色 外：5YR6/3にぶい橙色	体部片 内面に煤付着
168	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	不明	器高：(4.8)	細片のため詳細不明。	内：ヘラケズリ 外：タタキ後ナデ	2㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR7/4にぶい橙色 外：7.5YR5/3にぶい褐色	体部片
169	F-8 SH-08 2区	韓式系土器	不明	器高：(4.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：10YR7/2～10YR7/3にぶい黄橙色	体部片

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
170	F-8 SH-08 Str	韓式系土器	不明	器高：(3.6)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	3㎜以下の長石、微粒クサリ礫・雲母・黒色粒	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：10YR6/2 灰黄褐色	体部片
171	E-8,9 SH-08 4 区	土師器	甕	口径：(13.2) 器高：(5.3)	「く」の字状に外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ハケメ後ナデ、体部ナデ 外：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR6/2 灰黄褐色～10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部 25%
172	F-8 SH-08 2 区	土師器	甕	口径：(14.2) 器高：(10.0)	丸みをもつ体部から、なだらかに「く」の字状に外湾する口縁部。端部は外方にやや面をもつ。	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、ケズリ 外：口縁部ハケメ（横）、体部ハケメ（縦）後ナデ	1㎜前後の長石・雲母を含む	内：10YR4/1 褐灰色 外：10YR5/2 灰黄褐色	口縁～体部 20% 頸部に工具止痕あり 外面に煤付着
173	F -8 SH-08 2 区 2 層	土師器	高杯	底径：(9.8) 器高：(7.2)	「ハ」の字状の裾部からなだらかに内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ケズリ後板ナデ、裾部ナデ 外：柱状部板ナデ後ナデ、裾部ナデ	3㎜以下の長石、1㎜以下の石英・雲母	内：7.5YR7/3 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色～5YR6/6 橙色	脚部 40% 内外面に黒斑あり 円形の透孔 3 方向
175	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	不明	器高：(9.9)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：10YR6/4 にぶい黄橙色	体部片
176	G-5 SH-09・10　2 区	韓式系土器	不明	器高：(8.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ？	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：7.5YR7/6 橙色	体部片
177	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(8.0)	細片のため詳細不明。	内：ヨコナデ、ケズリ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR6/4 にぶい黄橙色、10YR5/3 黄褐色	頸部～体部 把手の痕跡あり
178	G-5 SH-09・10　2 区	韓式系土器	不明	器高：(7.0)	細片のため詳細不明。	内：板ナデ 外：タタキ？	2㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内・外：10YR7/4 にぶい黄橙色	体部片
179	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	不明	器高：(5.2)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ、ユビオサエ 外：タタキ	1㎜以下の長石	内：7.5YR6/6 橙色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	体部片
180	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	不明	器高：(6.0)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ 外：タタキ	1㎜前後の長石	内・外：7.5YR7/4～6/4 にぶい黄橙色	体部片
181	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	不明	器高：(6.8)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ後ハケナデ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	体部片
182	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	不明	器高：(5.6)、(5.7)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ後ナデ 外：タタキ	1㎜前後の長石	内・外：10YR6/4 にぶい黄橙色	体部片
183	F・G-6 SH-09・10　3 区	韓式系土器	不明	器高：(2.6)	細片のため詳細不明。	内：ハケ 外：タタキ	1㎜以下の長石	内・外：10YR6/3～6/4 にぶい黄橙色	頸部片
184	G-5 SH-09・10　2 区	韓式系土器	不明	器高：(5.4)	細片のため詳細不明。	内：板ナデ 外：タタキ後ハケ	2㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内・外：10YR7/4 にぶい黄橙色	体部片 外面に黒斑あり
185	F・G-5 SH-09・10　Str	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(3.0)	体部はなだらかに外湾し、底部に円形の蒸気孔あり。	内：ハケ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：10YR6/4 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は 2 個残
186	G-5 SH-09・10　2 区	土師器	甕	口径：9.4 器高：13.5	楕円形の体部から、屈曲し直立気味に立ち上がる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ハケ後ナデ、体部ナデ、ケズリ（横） 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：10YR5/3 にぶい黄橙色	65% 内面に接合痕あり 焼成やや軟質
187	F,G-5 SH-09・10　1 区	土師器	甕	口径：(15.0) 器高：(4.5)	直線的に外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：粗いハケ 外:ナデ、細いハケ、粗いハケ（縦）	1㎜前後の長石・雲母を含む	内・外：10YR5/3 にぶい黄褐色、10YR5/ 黒褐色	口縁部 20%
188	G-5 SH-09・10　2 区	土師器	高杯	口径：23.3 器高：(9.8)	大きく外湾する口体部。端部は丸くおさめる。	内：杯部ナデ後ミガキ 外：杯部ナデ後ハケ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：5YR6/6 橙色～2.5YR5/6 明赤褐色	杯部 80% 内外面に黒斑あり 内外面に煤付着 磨滅と二次被熱による剥離あり
189	G-5 SH-09・10　2 区	土師器	高杯	口径：14.0 器高：(5.8)	平底から丸みをもちながら外方に立ち上がる。口縁端部は上方に面をもつ。	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ（縦）後ナデ	3㎜以下の雲母・クサリ礫	内・外：7.5YR6/6 橙色	杯部 55%
190	F -4 SH-09・10　1 区	土師器	高杯	底径：(9.7) 器高：(6.7)	「ハ」の字状の裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は丸くおさめる。	内:柱状部ユビナデ、裾部ヨコナデ 外：柱状部縦方向ミガキ、裾部板ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色～5YR6/4 にぶい橙色	脚部 60% 透孔なし
191	H-2 SH-11 1 区	土師器	甕	口径：(10.6) 器高：(10.1)	ナデ肩の体部から、屈曲し外方に大きく広がる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ハケメ後ナデ、体部ナデ、ケズリ（横方向） 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR5/6 明赤褐色 外：5YR6/6 橙色～7.5YR5/2 灰褐色	口縁～体部 15%

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
192	H-2 SH-11 検出面	土師器	甕	口径：(10.0) 器高：(7.8)	ナデ肩の体部から、直立気味に立ち上がる口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ハケメ、体部ユビオサエ、ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部粗ハケメ後ナデ	1㎜前後の長石・雲母を含む	内：：10YR7/3～6/3 にぶい黄橙色 外：：10YR7/4 にぶい黄橙色	口縁～体部 50%
193	H-2 SH-11 1 区	土師器	甕	口径：(11.3) 推定器高：(13.2)	平底から丸みをもつ体部。わずかに外湾する口縁部。端部は内に肥厚し、外方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、底部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、底部ハケメ、ナデ	1㎜以下の長石・雲母を含む	内・外：10YR4/1 褐色	口縁～体部 40%、底部完存 内面に接合痕あり
194	H-3 SH-11 3 区	土師器	甕	口径：(14.0) 器高：(7.0)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外傾する口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ハケメ、体部ユビオサエ後ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1㎜前後の長石・雲母を含む	内：7.5YR8/4 浅黄橙色 外：10YR4/2 灰黄褐色	口縁～体部 20% 外面に煤付着 内外面に接合痕あり
195	H-3 SH-11 4 区	土師器	高杯	口径：23.7 器高：(8.8)	平底から屈曲し、外湾しながら口縁部につづく。端部は外方に面をもつ。	内・外：ナデ後ミガキ（縦方向）	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y5/6 明赤褐色～7.5YR6/4 にぶい橙色 外：5Y5/6 明赤褐色～10YR3/1 黒褐色	杯部 70% 内外面に黒斑あり 二次被熱を受けている？
196	H-2 SH-11 1 区	土師器	高杯	口径：14.6 器高：(5.1)	中央が凸の平底から、丸みをもちつつ立ち上がる口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：ヨコナデ 外：ハケメ後ヨコナデ（わずかに残る）	1㎜前後の長石・雲母・クサリ礫を含む	内・外：：7.5YR6/4 にぶい橙色～7.5YR6/6 橙色	杯部ほぼ完形 全体的に磨滅
197	H-2 SH-11 最上層	土師器	高杯	口径：11.1 器高：(4.8)	平底から内湾しながら立ち上がり口縁部につづく。端部は内方に面をもつ。	内：ヨコナデ、ナデ後ミガキ 外：ナデ	微粒の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：5YR5/6 明赤褐色	杯部 80% 内外面に黒斑あり 焼成やや軟質 見込みに籾圧痕
198	H-2 SH-11 最上層	土師器	高杯	底径：(9.7) 器高：(7.6)	「ハ」の字状の裾部から内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ナデ、板ナデ、裾部ユビナデ 外：柱状部ミガキ（縦）、裾部ミガキ	1㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：5YR6/6 橙色	脚部 30% 円形透孔 3 方向
199	H-3 SH-11 4 区	土師器	高杯	底径：(9.3) 器高：(6.1)	「ハ」の字状に広がる裾部。わずかに内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ユビナデ 外：ミガキ（縦方向）か磨滅のため不明	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR5/6 明赤褐色～10YR5/3 にぶい黄褐色 外：5YR5/6 赤褐色～2.5YR7/1 灰白あり	脚部 40% 透孔なし 外面に黒斑あり
204	L-3 SH-12	土師器	壷	口径：12.1 器高：10.5	歪な楕円形の体部から、わずかに斜め上方にのびる口縁部。端部は丸みをもつ。	内：口縁部板ナデ後ヨコナデ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	ほぼ完形 外面体部に煤付着 内外面に接合痕あり
205	D-10 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	把手付甑	口径：30.0 底径：12.6 器高：26.8	体部は平底からなだらかに内湾しながら立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は面をもつ。把手は断面円形。底部に円形と楕円形の蒸気孔あり	内：口縁部ヨコナデ、体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ、ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ、把手ユビオサエ、底部ケズリ	1～2㎜の長石・雲母・クサリ礫	内：10YR4/1 褐灰色、10YR3/1 黒褐色 外：7.5YR7/4 にぶい橙色、5YR6/6 橙色	ほぼ完形（把手一箇所欠損） 外面に黒斑あり 内面に炭化物付着 内面に接合痕あり 蒸気孔は 1+6 個
206	D-9・10 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	不明	口径：(18.7) 器高：(8.5)	丸味をもつ体部、口縁部は外湾し、端部は外上方に面をもつ	内・外：タタキ	1～2㎜の長石・雲母	内・外：7.5YR6/3 にぶい褐色	口縁部 40%
207	E・F-9 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(7.2) 幅：(6.4) 把手径：2.6～2.9	断面円形、切り込みを有す。	内：ナデ 外：ハケメ、ユビオサエ	1㎜前後の長石・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄褐色、10YR4/1 褐灰色 外：10YR6/2 灰黄褐色	把手
208	D-9 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(4.7)	直立する体部からそのまま口縁部につづく。端部は上方に面をもつ。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：7.5YR6/3 にぶい褐色	口縁部片
209	D・E-9 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	不明	器高：(3.9)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	3㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：2.5Y7/2 灰黄色	頸～体部片 内外面に煤付着
210	D・E-9 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	不明	器高：(4.1)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：5YR4/1 灰色 外：2.5Y4/1 黄灰色	体部片 内外面に煤付着
211	D・E-9 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	不明	器高：(3.4)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：ハケメ	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：10YR3/1 黒褐色	体部片 内外面に煤付着
212	D,E-9 大河道 斜面 1 層	韓式系土器	不明	器高：(4.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：ハケメ	2㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：2.5Y4/1 黄灰色	体部片 内外面に煤付着

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
213	D・E-9 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(2.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：2.5Y7/2 灰黄色	頸～体部片 内外面に煤付着
214	D-9・E-9 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(3.7)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ 外：タタキ	1mm以下の長石・黒色粒	内・外：7.5YR5/4 にぶい褐色	体部片
215	D・E-9 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(6.1)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：5YR4/1 灰色 外：5YR5/4 にぶい赤褐色	体部片 内面に煤付着
216	D・E-9 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(3.9)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	2mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：2.5Y4/1 黄灰色	体部片 内外面に煤付着
217	7・8区 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(6.0)	細片のため詳細不明。	内：ナデ？ 外：タタキ	2mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR4/1 褐灰色 外：5YR6/6 橙色橙色	体部片
218	D-9 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(4.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・雲母	内・外：10YR6/2～5/2 灰黄褐色	体部片
219	7区 大河道 斜面1層	韓式土器	不明	器高：(4.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y6/3 にぶい黄色、2.5Y4/1 黄灰色	体部片
220	7区 大河道 斜面1層	韓式土器	不明	器高：(4.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	0.5mm以下の長石	内・外：7.5YR5/4 にぶい褐色	体部片
221	7区 大河道 斜面1層	韓式土器	不明	器高：(8.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2mm以下の長石	内：2.5Y4/1 黄灰色 外：2.5Y6/2 灰黄色	体部片
222	7・8区 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(8.9)	細片のため詳細不明。	内：ハケメ 外：タタキ	2mm以下の長石・クサリ礫・黒色粒、微粒の雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色	体部片
223	D・E-9 大河道 斜面1層	韓式系土器	不明	器高：(6.9)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	3mm以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：2.5Y4/1 黄灰色	体部片 内外面に煤付着
224	E・F-9 大河道 斜面1層	韓式土器	（把手付）甑	長：(3.0)	底部に蒸気孔あり。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石	内・外：7.5YR5/6 明褐色	底部片 蒸気孔は1個残
225	D-9・10 大河道 斜面1層	土師器	小型丸底壺	口径：6.5 器高：(4.1)	丸みをもつ肩部、屈曲し市外方にのびる口縁部。端部はやや尖る。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ミガキ	2mm以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR6/2 灰黄褐色～7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部 35%
226	F-13 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：16.3 器高：28.5	卵形の体部、内傾する頸部。口縁部は丸みをもちながら外反し、端部は面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（縦方向）	3mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR5/3 にぶい黄褐色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色、7.5YR7/4 にぶい橙色	ほぼ完形 全体に煤付着
227	D-11 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：(15.5) 器高：(21.4)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外反する口縁部。端部は内に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（2原体あり）	1mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR 6/3 にぶい黄橙色 外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 15% 外面に煤付着
228	8区 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：(16.4) 器高：(17.1)	丸みをもつ体部から、なだらかに外反する口縁部。端部は外方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヨコナデ	2mm以下の長石・石英	内：7.5YR6/6 橙色、10YR4/1 褐灰色 外：5YR6/6 橙色、7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁～体部 15% 外面に煤付着
229	D・E-9 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：(15.9) 器高：(12.2)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外反する口縁部。端部は内に肥厚し、面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y7/1 灰白色 外：10YR8/1～7/1 灰白色	口縁～体部 20%
230	7・8区 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：(14.4) 器高：(8.2)	ナデ肩から、丸みをもつ「く」の字状に外湾し、内にわずか肥厚し、面を持つ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（縦方向）後ナデ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/2 にぶい黄橙色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部 15%
231	D-11 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：(13.3) 器高：(9.3)	ナデ肩から、「く」の字状に外折する口縁部。端部は内に面を持ち、丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：2.5YR7/3 灰黄色	口縁部 15%
232	D-9・10 大河道 斜面1層	土師器	甕	口径：(14.0) 器高：(7.0)	ナデ肩の体部から、屈曲して直立気味に立ち上がる。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁～体部ヨコナデ	3mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：7.5YR7/6 橙色 外：5YR7/6 橙色～10YR4/1 褐灰色	口縁部 25% 黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
233	D-9・10 大河道 斜面１層	土師器	甕	口径：(13.0) 器高：(7.5)	ナデ肩の体部からわずかに外傾する頸部。口縁部はやや直立し、端部はやや尖り気味。	内：体部ケズリ後ナデ 外：体部タタキ後ハケメ、一部ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/3 にぶい褐色	口縁部 25%
234	7・8 区 大河道 斜面１層	弥生土器	不明（壷・甕・鉢）	底径：(2.7) 器高：(2.4)	中央部が凹む底部。	内：ハケメ 外：磨滅のため不明	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：2.5YR7/2 灰黄色～ 2.5Y3/2 黒褐色 外：2.5Y7/2 灰黄色	底部 10% 以下
235	F-13 大河道 斜面１層	土師器	高杯	口径：13.3 底径：9.6 器高：11.8	「ハ」の字状の裾部から屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部はやや尖る。杯部は平底から外傾して口縁部につづく。端部はやや尖る。	内：杯部・脚部ヨコナデ、ユビナデ 外：杯部ヨコナデ、ヘラケズリ、脚部ヘラミガキ、ヨコナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母、5㎜以下の褐色土粒	内・外：10YR7/4 にぶい黄橙色	90% 透孔なし
236	7・8 区 大河道 斜面１層	土師器	高杯	口径：16.7 器高：(10.0)	杯部は平底から大きく外方に広がる口体部。端部は尖り気味。	内：杯部ヨコナデ後ミガキ（横）、柱状部ナデ、ユビオサエ 外：杯部ヨコナデ後ミガキ（横）、柱状部ミガキ（縦）後ミガキ（横）	2㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	杯～柱状部 50% 黒斑あり
237	D-9・10 大河道 斜面１層	土師器	高杯	底径：(12.5) 器高：(8.4)	「ハ」の字状の裾部から、直線的に内傾しながらたちあがる脚柱部。裾端部はやや丸くおさめる。	内：柱状部ケズリ後ヨコナデ、裾部ハケメ（横） 外：柱状部ミガキ（縦）後ヨコナデ、裾部ハケメ（横）	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5YR6/4 にぶい橙色～ 10YR7/3 にぶい黄橙色	脚部 70% 透孔なし 黒斑あり
238	F-13 大河道 斜面１層	土師器	鉢	口径：(18.4) 器高：(13.6)	楕円形の体部から、「く」の字状に外折する頸部。口縁部は直立し、端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部以下板ナデ、ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケメ	1㎜以下の長石、微粒の雲母	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部 33%、頸部以下 60% 内外面に煤付着 内面に炭化物付着
241	F-12 大河道 斜面２層 最下位	土師器	移動式竈	口径：(28.0) 器高：(5.9)	直立気味の口体部、口縁端部は外方に面をもつ。	内：ヨコナデ、ハケ 外：口縁部ヨコナデ、体部風化のため調整法不明	1㎜前後の長石・雲母・角閃石	内・外：10YR5/3 にぶい黄橙色	口縁部片 生駒西麓産
242	E-12 大河道 斜面２層 最下層	韓式系土器	甕？	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ 外：矢羽根タタキ	1㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母・角閃石	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：7.5YR7/3 にぶい橙色	体部片
243	D-11・12 大河道 斜面２層 下層	韓式土器	不明	器高：(4.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：7.5YR7/4 にぶい橙色	体部片
244	F-12 大河道 斜面２層	土師器	壺	口径：10.9 器高：14.7	楕円形の体部から、屈曲し外傾しながら外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR6/6 橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色～ 5YR6/8 橙色	ほぼ完形 外面に黒斑あり
245	D-12 大河道斜面２層	土師器	小型丸底壺	口径：(9.4) 器高：(8.7)	楕円形の体部から、屈曲し直線的に外方に広がる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR6/6 橙色～ 5YR5/6 明赤褐色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色～ 5YR6/6 橙色	口縁～体部 20% 外面に黒斑あり
246	D-12 斜面２層	土師器	壺	口径：12.8 器高：(16.0)	楕円形の体部に、屈曲し直線的に外方にのびる口縁部。端部は尖り気味。	内：口縁部ヘラミガキ、体部ハケメ 外：口縁部ヘラミガキ、体部タタキ後ヘラケズリ後ミガキ	5㎜の石英、微粒な白・褐色砂粒	内：7.5YR7/4 にぶい橙色～ 5YR6/6 橙色 外：10YR7/3 にぶい橙色	口縁～体部完形 外面に黒斑あり
247	D-11 大河道 斜面２層 下層	土師器	小型丸底壺	口径：9.1 器高：7.8	楕円形の体部から、屈曲し外傾しながら外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	80% 外面に接合痕あり
248	D-12 大河道 斜面２層 下層	土師器	小型丸底壺	口径 7.8 器高 9.4	球形の体部から、「く」の字状に外湾する頸部。さらに凸帯の段をもち外湾する口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ナデ後ミガキ（横）、体部ケズリ	2㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内：7.5YR6/4 にぶい橙色～ 5YR6/6 橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色～ 5YR6/6 橙色	90% 焼成やや軟質
249	D-11 大河道 斜面２層 下層	土師器	壺	口径：11.3 器高：11.8	歪な円形の体部から、屈曲し外湾しながら外方にのびる口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部板ナデ後ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：5Y2/1 黒色、2.5Y7/2 灰黄色 外：10YR8/2 灰白色	ほぼ完形 外面口縁部、体部下半以下煤付着
250	D-12 大河道 斜面２層 下層	土師器	甕	口径：16.9 器高：(5.7)	丸みを持ちながら立ち上がる口縁部。端部は上方に面を持ち凹む。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁～体部ヨコナデ	4㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR6/3 にぶい黄橙色～ 2.5YR6/6 橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部完形 黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
251	D-12 大河道 斜面２層	土師器	甕	口径：(18.0) 器高：(10.5)	口縁部は「く」の字状の頸部から外上方へ伸びる、端部は内にわずか肥厚し、内下方に面を持つ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	3㎜以下の石英・長石・雲母・褐色土粒	内：5YR7/6 橙色 外：5YR7/8 橙色	口縁～体部 20% 外面に煤付着
252	D-12 大河道 斜面２層	弥生土器	甕	口径：(15.3) 器高：(4.6)	丸みをもちながら「く」の字状ひ外湾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ	2㎜以下の長石・石英	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色～7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部 20%
253	E-11 大河道 斜面２層	土師器	高杯	口径：18.5 底径：11.4 器高：11.1	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる。裾端部は丸くおさめる。杯部は平底から屈曲し直線的に外方に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。	内：杯部ヨコナデ後ミガキ、脚部ケズリ、板ナデ 外：杯部ヨコナデ、下～柱状部ケズリ、裾部ヨコナデ後ミガキ	3㎜以下の長石・石英	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	ほぼ完形 透孔なし 内外面と脚部内面に黒斑あり 外面に接合痕あり
254	F-12 大河道 斜面２層	土師器	高杯	口径：23.0 器高：(8.8)	平底から外傾しながら口縁部につづく。端部は尖り気味。	内：ハケメ 外：ナデ、下半ハケメ後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色～5YR6/6 橙色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色～7.5YR6/6 橙色	杯部ほぼ完形 外面に黒斑あり 内外面に接合痕あり
255	D-11 大河道 斜面２層下層	土師器	高杯	口径：(18.0) 器高：(5.6)	やや丸みをもつ平底。口縁部は外湾し、端部は外方に面をもつ。	内：ハケメ後ナデ 外：ヨコナデ、ユビオサエ後ナデ	4㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：7.5YR6/6 橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	杯部 30%
256	E-12 大河道 斜面２層下層下位	土師器	高杯	口径：(21.3) 器高：(8.7)	平底から外傾しながら口縁部につづく。端部は外方に面をもつ。	内：ヨコナデ、ミガキ（縦） 外：ハケメ後ナデ、下半ヨコナデ後ミガキ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/1 黄灰色 外：2.5Y7/1 灰白色	杯部 40% 内面に黒斑あり 外面に接合痕あり
257	D-11・12 大河道 斜面２層下層	土師器	高杯	口径：16.0 器高：(5.4)	中央部が凸のやや平底から丸みをもちながら外方に広がる口体部。口縁端部は丸くおさめる。	内：ミガキ（横）後ナデ 外：上半ナデ・ユビオサエ後ミガキ（横）、下半ケズリ後ナデ	2㎜以下の長石・石英、4㎜以下のクサリ礫	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：2.5Y7/2 灰黄色	杯部 80% 黒斑あり
258	E-12 大河道 斜面２層下層下位	土師器	高杯	口径：(22.3) 器高：(7.9)	平底から外傾しながら口縁部につづく。端部は外方に面をもつ。	内：ヨコナデ、ミガキ（縦） 外：ハケ後ナデ、下半ヨコナデ後ミガキ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y7/2 灰黄色 外：2.5Y8/2 灰白色～5YR6/6 橙色	杯部 30% 内面に黒斑あり
259	D-12 大河道 斜面２層下位	土師器	高杯	底径：11.7 器高：(8.8)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は丸くおさめる。杯部は丸みをもちながら伸びる。	内：ナデ、ユビオサエ、布ナデ 外：ヘラケズリ、ヘラケズリ・ユビオサエ後ナデ、ヨコナデ後一部ヘラケズリ	2㎜以下の石英、1㎜以下の白色砂粒	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	杯底部～脚部完形 透孔なし
260	D-12 大河道 斜面２層下層	土師器	小型鉢	口径：(10.7) 器高：(7.9)	丸みをもつ体部、口縁部はやや内湾し、口縁端部はやや外反する	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ユビナデ	7㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：10YR8/2 灰白色 外：7.5YR7/4 にぶい橙色	40%
261	F-12 大河道 斜面２層	須恵器	壷	口径：11.5 器高：16.5	球形の体部から、外湾する口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部オサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	5㎜以下の長石	内・外：N3/ 暗灰色	ほぼ完形 外面肩部、内面口縁・底部に自然釉がかかる 土師器を模した須恵器（布留式土器の影響？）
262	G-11,12 大河道 斜面２層	須恵器	把手付鉢	底径：5.8 器高：(4.1)	平底から直線的に外方にのびる体部。底部脇に把手の痕跡。	内：体部ヨコナデ、底部ユビオサエ 外：体部上半カキメ、下半～底部ナデ	長石・石英	内・外：N3/ 暗灰色	底部 80% 把手の痕跡あり 外面底部に自然釉がかかる
264	D-12 大河道 斜面２層下層	土師器	鳥形土器	長：(22.2) 幅：(13.6) 器高：(11.5)	幅広の鳥の尾、半楕円形の体部。	内：板ナデ、ナデ 外：ハケ、ナデ	1㎜以下の長石・雲母・クサリ礫	内：2.5YR5/4 にぶい赤褐色～10YR4/3 にぶい黄褐色 外：5YR7/6 橙色	胴部 90% 内面炭化物付着 内外面に接合痕あり 外面に被熱痕跡あり
265	E-12 大河道 斜面２層	韓式系土器	把手付甕	口径：21.6 器高：27.0	丸底の底部。体部は球形を呈する。口縁部は短く外反する。端部は面をもち、沈線を２条施す。把手は断面円形。	内：口縁部ヨコナデ、体部同心円状の当て具痕後ユビオサエ・ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ（上半縦方向、下半横・斜め方向）、把手ユビオサエ・ユビナデ	1～2㎜の長石・雲母・クサリ礫	内：10YR7/3 にぶい黄橙色、10YR3/1 黒褐色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色、7.5YR8/3～8/4 浅黄橙色	ほぼ完形 外面に煤付着

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
266	E-12 大河道 斜面２層 最下位	韓式系土器	甕	口径：23.4 器高：(40.5)	体部は最大径が上部にあり、やや胴長である。頸部は緩やかな「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方へ伸びる。口縁端部は内側に肥厚し、面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、頸～体部上半無文当て具痕、下半ハケメ後無文当て具痕 外：口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、体部タタキ後ハケメ（9本/1.2cm）	1㎜前後の長石・雲母	内・外：5YR6/6 橙色、5YR7/4 にぶい橙色	口縁～体部（底部欠損） 底部を故意に打ち欠いた可能性あり、甑として転用か 内外面に煤付着 内面の無文当て具には小石など使用か
267	G-11,12 大河道 斜面２層	韓式系土器	甕	口径：18.6 器高：(26.6)	楕円形の体部から、「く」の字状に外傾する口縁部。端部は尖る。	内：口縁部ヨコナデ、体部上半ケズリ、下半ナデ？ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	1㎜以下の長石・雲母	内：10YR4/1 褐灰色 外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 外面全体的に煤付着
268	E-12 大河道 斜面２層 最下位	土師器	甕	器高：(1.4)	破片のため詳細不明	内：ナデ 外：矢羽根状タタキ	1㎜以下の石英・雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：2.5YR4/1 黄灰色	体部片 外面に黒斑あり
269	E-12 大河道 斜面２層 最下位	弥生土器	甕	口径：(23.0) 器高：(9.5)	大きく外湾する口頸部。端部は外方に面をもつ。	内・外：口縁部ヨコナデ、ナデ	5㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色～7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部 70% 内外面に接合痕あり
270	E-12 大河道 斜面２層 最下位	土師器	壺	口径：10.5 器高：11.5	楕円形の体部から、屈曲し外傾しながら外方にのびる口縁部。端部は沈線をもつ	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ・ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	0.5～1㎜の褐色土粒	内・外：5YR7/6 橙色	完形 外面に煤付着
271	E-12 大河道 斜面２層 最下位	土師器	壺	口径：(15.0) 底径：10.5 器高：(12.2)	球形の体部。	内：杯部ハケメ後ヨコナデ、柱状部ヨコナデ、裾部ハケメ 外：杯部ハケ後ナデ、柱状部ハケメ（縦）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5Y7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい黄橙色～10YR7/3 にぶい橙色	体～底部 30% 内面に接合痕あり
272	F-12 斜面２層 最下位	土師器	小型丸底壺	口径：9.1 器高：7.5	やや歪な楕円形の体部から、屈曲し丸みをもちながら外方にのびる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ後ユビオサエ、体部ユビオサエ後ヨコナデ 外：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	2.0㎜の石英、0.5～1.0㎜の白色砂粒、0.5～2.0㎜の褐色土粒	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	完形 外面に黒斑あり
273	F-12 大河道 斜面２層 最下位	土師器	小型丸底壺	口径：8.5 器高：7.5	楕円形の体部から、屈曲し丸みをもちながら外方にのびる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ、体部以下ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケメ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/2～7/3 にぶい黄灰色 外：10YR7/2～7/3 にぶい黄灰色、2.5Y6/1 黄灰色	55%
274	F-11 大河道 斜面２層 最下位	土師器	小型丸底壺	口径：8.7 器高：7.7	円形の球体に屈曲して外傾する頸部。口縁部はさらに外反し、端部は丸くおさめる。	内：ヘラミガキ 外：ケズリ後ヘラミガキ	0.5～1㎜の白色砂粒、0.5～2㎜の褐色土粒	内・外：5YR6/6 橙色	完形
275	F-11 大河道 斜面２層 最下位	土師器	小型丸底壺	口径：9.5 器高：(4.5)	ナデ形の体部から、屈曲し外方に広がる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：杯部ハケメ後ヨコナデ、柱状部ヨコナデ、裾部ハケメ 外：杯部ハケメ後ナデ、下～柱状部ハケメ（縦方向）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5Y7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい黄橙色～10YR7/3 にぶい橙色	口縁部 30% 内外面に接合痕あり
276	F-11 大河道 斜面２層 最下位	土師器	甕	口径：(15.0) 器高：(24.9)	卵形の体部から、「く」の字状に外傾する口縁部。端部は内にわずか肥厚し、上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部以下板ケズリ、底部ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケメ	2㎜以下の長石	内・外：10YR7/2 にぶい黄橙色	完形 布留式土器 外面に黒斑あり 外面に煤付着 内面に炭化物付着・接合痕あり 体部上半に刺突（3箇所）、中程に穿孔（1箇所）あり
277	D-11 大河道 斜面２層 最下位	土師器	甕	口径：16.4 器高：30.5	丸底の底部、球形の体部から、「く」の字状に外傾する口縁部。端部は外方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部上部ユビナデ、中部ハケ後ユビオサエ、下部以下ヘラケズリ、ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部上部ハケ後板ナデ、下部ユビオサエ後ハケ	密	内：2.5Y7/1 灰白色 外：2.5Y7/2 灰黄色	完形 外面に黒斑あり 外面に付着 焼成軟質 体部に刺突文あり（貫通しない・二個一対を1箇所） 須恵器を模倣か

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
278	F-11 斜面2層 最下位	土師器	甕	口径：(14.8) 器高：(7.7)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はわずかに内湾しながら外上方へ伸びる。端部は内側にやや肥厚し、丸くおさめる。	内：口縁部ナデ、体部ケズリ 外：口縁部ナデ、体部ハケメ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 10% 外面に煤付着
279	F-11 大河道 斜面2層 最下位	土師器	甕	口径：11.4 器高：23.6	卵形の体部、内傾する頸部。口縁部は外反し、端部は面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半ケズリ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ハケメ（縦）	2㎜以下の長石・石英	内：2.5Y5/2 暗灰色～2.5Y3/1 黒褐色 外：5Y6/1 灰色	ほぼ完形 外面体～底部に煤付着 内面底部に炭化物付着
280	F-11 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	口径：16.1 底径：(10.8) 器高：11.7	「ハ」の字状に広がる裾部から、丸みをもちながら内傾する脚柱部。裾端部はわずかに内折し丸みをもつ。杯部は平底から直線的に外方にのびる口縁部。端部は尖り気味。	内：杯部ナデ後ミガキ、柱状部ナデ、裾部ヨコナデ 外：杯部ミガキ、下～柱状部ミガキ（縦）後ミガキ、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：7.5Y7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい黄橙色～10YR7/3 にぶい橙色	80% 透孔なし 外面に接合痕あり
281	E-12 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	口径：(17.2) 底径：10.9 器高：12.6	「ハ」の字状の裾部から、丸みをもちながら内傾する脚柱部。裾端部は内折し外方に面をもつ。杯部は平底から直線的に外方にのび、口縁部はわずかに外湾して端部は丸くおさめる。	内：杯部ナデ後ミガキ、柱状部ナデ、裾部ヨコナデ 外：杯部ミガキ、下～柱状部ミガキ（縦）後ミガキ、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5Y7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい黄橙色～10YR7/3 にぶい橙色	80% 透孔なし 外面に接合痕あり
282	F-11 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	口径：(14.4) 器高：(10.7)	直線的に内傾しながらのびる脚柱部。杯部は平底から直線的に外方にのびる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：杯部ナデ後ミガキ、柱状部ナデ 外：杯部ミガキ、下～柱状部ミガキ（縦）後ミガキ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	杯～柱状部 70% 透孔なし
284	F-12 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	底径：11.2 器高：(8.0)	低い「ハ」の字状の裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾部は丸くおさめる。	内：柱状部ユビオサエ、裾部ハケ後ナデ 外：柱状部ナデ後ケズリ（縦）、裾部ヨコナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5YR6/2 灰黄色	柱状～脚部完形 透孔なし
285	F-12 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	底径：(11.2) 器高：(7.8)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部はやや丸くおさめる。	内：柱状部ナデ、裾部ナデ 外：柱状部ミガキ（縦）後ミガキ、裾部ミガキ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR7/3 にぶい黄橙色～7.5YR4/2 灰褐色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色～5YR4/3 にぶい赤褐色	脚部 40% 透孔なし
286	F-12 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	底径：13.3 器高：(9.7)	低い「ハ」の字状に広がる裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は下方にわずか内折し、外方に面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ナデ 外：柱状部ミガキ（縦）後ミガキ、裾部ミガキ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR7/2 にぶい黄橙色～10YR5/3 にぶい黄褐色 外：5YR6/6 橙色～5YR4/2 灰褐色	脚部完形 透孔なし 内面に黒斑あり
287	F-11 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	底径：(12.3) 器高：(6.2)	低い「ハ」の字状に広がる裾部から、丸みをもちながら内傾する脚柱部。裾端部は内にわずかに内折し外方に面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ヨコナデ 外：柱状部板ナデ（縦）後ミガキ、裾部ヨコナデ後ミガキ	2㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y6/3 にぶい黄色	脚部 15% 黒斑あり 内面に接合痕あり
288	F-11 大河道 斜面2層 最下位	土師器	高杯	底径：(10.5) 器高：(8.2)	「ハ」の字状に広がる裾部から、丸みをもちながら内傾する脚柱部。裾端部はわずかに内折し丸みをもつ。	内：杯部ナデ、柱状部ナデ、裾部ハケメ 外：杯部ミガキ、下～柱状部ミガキ（縦）後ミガキ、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	脚部 40% 透孔なし
289	E-12 大河道 斜面2層 最下位	土師器	鉢	口径：(15.8) 器高：(6.3)	体部は丸みをもつ。頸部は外反し、口縁部は段をもちつつ外上方へ伸びる。端部は丸くおさめる。	内：ナデ、板ナデ 外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 10%
290	E-12 大河道 斜面2層 最下位	土師器	鉢	口径：(20.2) 器高：(7.1)	体部は丸みをもつ。頸部はわずかに屈曲し、口縁部は短く外反する。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 体：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ、ケズリ後ナデ	1㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 20%
291	E-12 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	不明（壺・甕・鉢）	底径：(9.4) 器高：(3.7)	平底から、屈曲して外方にのびる体部。	内：ユビオサエ後ケズリ 外：磨滅により調整法不明	1～2㎜の長石	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	底部 25% 内面に煤付着
292	F-11 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	不明	口径：15.2 器高：(4.5)	なだらかに外湾しながら口縁部につづく。端部は下方に肥厚し、面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、ミガキ（縦） 外：口縁部ヨコナデ後波状文、ナデ後ミガキ（縦）	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR8/1 灰白色 外：2.5Y7/1 灰白色～N5/ 灰色	口縁部 90%

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
293	F-12 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	甕	口径：16.5 器高：(8.9)	直線的に内傾する頸体部から、わずかに外湾する口縁部。端部は外方に面をもつ。	内：口縁部ハケ後ナデ、体部ハケメ、ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ後刺突文、体部ハケメ後ナデ	5㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内：10YR8/2 灰白色～2.5Y6/1 黄灰色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色～10YR5/2 灰黄褐色	口縁～体部 80% 内外面に接合痕あり
294	E-12 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	壺	口径：(19.6) 器高：(7.5)	大きく外湾しながらひろがる口頸部。端部は外方に面をもち凹む。	内：ハケメ 外：磨滅により調整法不明	1～2㎜の長石、1㎜以下の雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部 70%
295	E-12 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	小型壺	底径：4.0 器高：(11.0)	底部は中央が窪む、楕円形の体部から口縁部は直立気味に伸びる	内：頸部ナデ、体～底部ハケメ 外：頸部ハケメ、体部ヘラミガキ	1㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	体～底部完形（口縁部欠損）内外面に接合痕あり
296	E-12 斜面2層 最下位	弥生土器	不明（壺・甕・鉢）	底径：3.6 器高：(4.2)	底部は中央が窪む。	内：ハケメ（15～16本／cm） 外：磨滅のため調整法不明、底部ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	底部 80% 内面に煤付着
297	E-12 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	不明（壺・甕・鉢）	底径：7.2 器高：(4.9)	体部は平底から丸みをもちつつ外上方へ伸びる。	内：ヘラミガキ、ユビナデ 外：磨滅のため調整法不明	1～3㎜の石英・長石	内・外：10YR6/3 にぶい黄褐色	底部完形
298	E-12 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	甕・鉢	底径：3.8 器高：(3.1)	底部は中央が窪む。	内：板ナデ 外：タタキ、底部ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	底部完形 内面に煤付着
299	F-11 大河道 斜面2層 最下位	弥生土器	甕・鉢	底径：10.5 器高：(3.8)	平底。	内：ハケメ 外：タタキ	3㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR6/3 にぶい黄橙色～2.5Y6/2 灰黄色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色	口縁部（20%）・底部（完形）が部分的に残る
300	E-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	把手付甑	器高：(16.8)	体部はやや丸みをもつ底部から外上方へ立ち上がる。把手は断面円形で、切り込みを有す。底面に円形の蒸気孔あり。	内：同心円状の当て具痕後ナデ 外：体～底部タタキ、把手ユビナデ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：2.5Y6/3～6/4 にぶい黄色	把手～底部完形（把手は1箇所欠損）蒸気孔は1+7個
301	F-12 大河道 斜面3層	土師器	鉢	口径：22.9 器高：14.6	半球状の体部から、わずかに外湾する口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、ハケメ、体部ケズリ後ナデ・板ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y5/2 暗灰黄色～10YR3/1 黒褐色 外：5YR5/4 にぶい赤褐色～5Y2/1 黒色	60% 全面に二次被熱による変色・剥離あり（下部ほど著しい）底部に葉脈圧痕
302	E-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(9.3) 把手径：2.7～3.0	断面円形。	内・外：ハケメ	1～2㎜の長石・雲母	内・外：10YR4/1 褐灰色、10YR7/3 にぶい黄橙色	把手
303	D-10 大河道 斜面3層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.4) 幅：(6.4) 把手径：2.4	断面円形、上方に切り込みを有す。	外：ユビオサエ	1㎜前後の長石・雲母	外：7.5YR6/4 にぶい橙色	把手（内面剥離）
304	E-10 大河道 斜面3層	韓式系土器	把手	長：5.2 幅：7.2 把手径：3.8	断面いびつな円形。端部付近下面に切り込み有り。	内：ナデ 外：ユビオサエ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：2.5Y7/2～6/2 灰黄色	把手
305	F-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(7.5)	体部は内傾。口縁部は外湾し、端部は外に少し肥厚、端部は外方に面をもち凹む。	内：ヨコナデ、ユビオサエ 外：ヨコナデ、タタキ？	1㎜前後の長石・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部片
306	F-11 大河道 斜面3層	韓式系土器？	甕・鍋・甑？	器高：(5.2)	直線的に立ち上がる口体部、端部は内に面をもつ。	内：ハケメ 外：ヨコナデ、タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁部片
307	G-11 大河道 斜面3層	土師器	甕・鍋・甑？	器高：(3.5)	口縁部は直線的に外上方へ伸びる。端部は面をもつ。	内・外：ハケメ	1㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR6/6 橙色 外：7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部片 外面に黒斑あり
308	E-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	椀？	器高：(3.3)	丸味をもつ体部、口縁部はそのままつづき、端部は尖り気味に丸くおさめる。	内・外：ナデ	微粒の長石	内：5Y6/1 灰色 外：5Y5/1 灰色	口縁部片
309	F-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	甑？	器高：(4.6)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ、1条の凹線	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内・外：7.5YR5/3 にぶい褐色	体部片 外面に煤付着
310	F-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(8.6)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：2.5Y6/3 にぶい黄色	体部片 内外面に煤付着
311	G-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(3.9)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	体部片
312	G-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(3.6)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：2.5Y4/1 黄灰色	体部片 内外面に煤付着

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
313	G-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(3.2)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ 外：タタキ	1㎜以下の長石・クサリ礫	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：7.5YR6/6橙色	体部片 205～207同一個体の可能性
314	G-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(6.5)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：7.5YR6/6橙色	体部片 205～207同一個体の可能性
315	G-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(5.3)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ 外：タタキ	1㎜以下の長石・クサリ礫	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：7.5YR6/4にぶい橙色	体部片 205～207同一個体の可能性
316	F-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(4.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：2.5Y7/1灰白色 外：10YR7/2にぶい黄橙色	体部片
317	E-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(4.0)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5Y4/1黄灰色 外：10YR6/2にぶい黄橙色	体部片
318	E-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(4.5)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR4/2灰黄褐色 外：10YR5/2灰黄褐色	体部片 内外面に炭化物付着
319	E-10 大河道 斜面3層	韓式系土器	不明	器高：(6.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR7/2にぶい橙色 外：10YR6/5にぶい褐色	体部片
320	G-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(4.8)	底部に蒸気孔あり。	内：ヘラケズリ 外：ハケメ	1㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：7.5YR7/2にぶい黄橙色 外：7.5YR6/3にぶい褐色	体～底部片 蒸気孔は1個残
321	F-11 大河道 斜面3層	韓式系土器	甕	器高：(24.5)	丸底から球形の体部。	内：ユビオサエ後ナデ 外：縄蓆文タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR6/2灰黄色	体～底部 70%（口縁部欠損）
322	D-10 大河道 斜面3層	土師器	壺	口径13.1 器高18.6	球形の体部から、外湾する頸部。口縁部は屈曲し上方に拡張。端部は面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、ハケメ、体部ユビオサエ後ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR7/3～5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR8/2灰白色～5YR7/4にぶい橙色	95% 外面に黒斑あり
323	E-11 大河道 斜面3層	土師器	壺	口径12.1 器高16.1	球形の体部から、屈曲し、「く」の字状に外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ（横向）、ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ハケ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/2灰黄褐色～7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR7/4にぶい橙色～7.5YR5/1褐灰色	70% 外面に煤付着 内面に炭化物付着
324	F-12 大河道 斜面3層	土師器	壺	口径：(12.0) 器高：(13.5)	楕円形の体部から、「く」の字に外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：5YR5/4にぶい赤褐色～N2/黒色 外：5YR5/4にぶい赤褐色～7.5YR2/1黒色	口縁～体部30% 内外面に煤付着 体部外面にヘラ記号あり
325	F-11 大河道 斜面3層	土師器	壺	口径：(21.7) 器高：(7.8)	短く外湾する頸部から、なだらかにのびる口縁部。端部は外方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ・ユビオサエナデ後ヨコナデ 外：口縁部ヨコナデ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：10YR7/2にぶい橙色	口縁部30%
326	G-11 大河道 斜面3層	土師器	小型丸底壺	口径：9.5 器高：7.2	楕円形の体部から、屈曲し外方にのびる口縁部。端部は尖り気味。	内：口縁部ナデ後ミガキ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ後部分的にミガキ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/3にぶい黄色～7.5YR5/4にぶい褐色 外：2.5Y6/3にぶい黄色～5YR5/6明赤褐色	ほぼ完形
327	E-10 大河道 斜面3層	土師器	小型丸底壺	口径：9.15 器高：7.9	球形の体部から、屈曲し大きく外方に広がる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部以下ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケメ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR6/2灰褐色～10YR6/3にぶい黄褐色	80%
328	C-10 大河道 斜面3層	土師器	小型丸底壺	口径：6.7 器高：(8.3)	やや尖り気味の底部、体部は算盤状、口縁部は「く」の字状の頸部から外上方へ伸びる、端部は丸くおさめる	内：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヨコナデ 外：口縁～体部上半ヨコナデ後ミガキ、体部下半ヘラケズリ	2㎜以下の白色砂粒、5㎜以下の褐色土粒・雲母	内：2.5Y7/2灰黄色 外：10YR5/4にぶい黄褐色	口縁～体部90% 外面に黒斑あり
329	F-12 大河道 斜面3層 下位	土師器	甑	口径：6.6 器高：8.9	楕円形の体部から、屈曲し外傾しながら外方にのびる口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部板ナデ後ミガキ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ後上半ミガキ	2㎜以下の長石・石英	内・外：7.5YR4/3褐色～7.5YR4/2灰褐色	完形 須恵器を模した土師器か
330	F-12 大河道 斜面3層	土師器	甕	口径：13.9 器高：(14.3)	球形の体部から丸みを持ちながら外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ハケ後ナデ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部粗ハケ後ナデ	2㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内外：10YR5/2灰黄褐色～10YR3/2黒褐色	口縁～体部35% 外面に黒斑あり
331	E-11 大河道 斜面3層	土師器	甕	口径：(16.3) 器高：(6.1)	「く」の字状に屈曲する口頸部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部25% 黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
332	D-11 大河道 斜面３層	土師器	甕	口径：(15.2) 器高：(15.1)	口縁部は「く」の字状の頸部から外上方へ伸びる、端部は内にわずか肥厚し、内下方に面を持つ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ（縦後横）、タタキ後ハケ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒	内：7.5YR6/2 灰褐色 外：5YR7/4 にぶい橙色	口縁～体部 40%
333	D-10 大河道 斜面３層	土師器	甕	口径：(16.2) 器高：(18.1)	体部は丸みをもつ、口縁部は「く」の字状の頸部から外上方へ伸びる、端部は内にわずか肥厚し、内下方に面を持つ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	3㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁～体部 30% 外面に黒斑あり 外面に煤付着
334	E-11 大河道 斜面３層	土師器	甕	最大径：(21.7) 器高：(9.9)	半球状の体部。	内：体部ケズリ後ナデ 外：体部タタキ後ハケ、一部ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR5/4 にぶい褐色 外：2.5Y5/2 暗灰黄色	体部 30% 外面に煤付着
335	E-11 大河道 斜面３層	土師器	台付甕	口径：15.5 底径：10.5 器高：31.9	球形の体部に、短く外折する口縁部。端部は外方に面をもち凹む。台部は低い「ハ」の字状、端部は下方に面をもつ。	内：口縁～体部ヨコナデ、脚部ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ、脚部ハケ後ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/2 にぶい黄橙色 外：2.5Y7/2 灰黄色	ほぼ完形
336	E-12 大河道 斜面３層	土師器	高杯	口径：22.5 底径：13.6 器高：17.3	「ハ」の字状の裾部から、内傾気味に立ち上がる。裾端部は丸くおさめる。杯部は平底から直線的に外方に広がる。端部は丸くおさめる。	内：杯部ヨコハケ後ナデ一部ミガキ、ミガキ（縦方向）、脚部ハケ、ユビオサエ 外：杯部ヨコナデ、脚部ミガキ（縦方向）、ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：5YR7/6 橙色	85% 円形透孔３方向
337	E-10 大河道 斜面３層	土師器	高杯	底径：11.2 器高：(8.5)	「ハ」の字状の裾部から、直線的に内傾しながら伸びる脚柱部。裾端部は丸くおさめる。	内：柱状部ナデ、裾部板ナデ 外：柱状部板ナデ（縦方向）後ミガキ、裾部磨滅のため不明	4㎜以下の長石	内：10Y7/3 にぶい黄橙色 外：2.5YR6/4 にぶい橙色～2.5Y6/2 にぶい灰黄色	脚部 40% 円形の透孔３方向（1 方残）
338	E-10 大河道 斜面３層	土師器	器台	口径：(10.3) 底径：12.4 器高：8.8	大きく「ハ」の字状に広がる台部。裾部は「く」の字に屈曲し、裾端部は外方に面をもつ。杯部丸みをもつ体底部から、短く外湾する口縁部。端部はやや尖る。	内：杯部ヨコナデ後ミガキ、柱状部ヨナデ、裾部ヨコナデ 外：杯部ヨコナデ後ミガキ、柱状部ミガキ（縦方向）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR6/2 灰褐色～10YR6/3 にぶい黄褐色	40% 外面に接合痕あり
343	H-5 大河道 斜面４層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	口径：(24.2) 器高：(16.5)	上方に向く把手 直線的に広がる体部、口縁部はわずかに外反、端部は面をもつ	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ、把手ユビオサエ、ハケ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：10YR5/2 灰黄褐色	口縁部（40%）・把手が部分的に残る
344	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(23.1) 器高：(16.9)	丸味をもつ体部から、なだらかに外湾する口縁部、口縁端部は凹む。	内：ヨコナデ、ユビオサエ 外：ヨコナデ、タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 20% 外面に黒斑あり
345	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.0) 幅：(6.8) 把手径：2.5～2.8	断面円形、切り込みを有す。	外：ユビオサエ	密	外：10YR6/3 にぶい黄橙色	把手（内面剥離）
346	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(6.9)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	密	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片
347	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(3.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	密	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片
348	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(4.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	密	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片
349	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(6.7)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内：10YR6/4 にぶい橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片
350	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(3.6)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ 外：タタキ	密	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片 外面に煤付着
351	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(4.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜前後の長石	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	体部片
352	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	不明	器高：(3.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	密	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片
353	F-12 大河道 斜面４層	韓式系土器	甑	器高：(4.7)	底部に蒸気孔あり。直線的に外方に広がる体部。	内：ユビオサエ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔１個残 外面に黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
354	F-11 大河道 斜面4層 最下位	弥生土器	広口壺	口径：(19.8) 器高：(8.1)	なだらかに外湾しながら口縁部につづく。端部は面を持ち凹む。	内：口縁部ナデ、ハケ 外：磨滅のため不明	5mm以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色～10YR3/2黒褐色 外：5YR6/6橙色	口縁部25%
355	F-12 大河道 斜面4層	土師器	壺	口径：10.9 器高：14.2	楕円形の体部から、屈曲し外方に直線的にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色～10Y7/1灰白色 外：5Y6/6橙色～10YR6/2灰黄褐色	80% 外面体部下半に煤付着 内面に炭化物付着
356	E-13 大河道 斜面4層 下層	土師器	壺	口径：(11.1) 器高：13.7	球形の体部から、屈曲し直線的に外方にのびる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ	2mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：2.5Y7/2灰黄色～5YR6/4にぶい橙色 外：2.5Y7/2灰黄色～5YR7/4にぶい橙色	55% 外面煤付着 内面体部に炭化物付着
357	D-10 大河道 斜面4層 上面	土師器	甕	口径：(10.2) 器高：(13.7)	球形の体部から、屈曲しわずかに外傾する口縁部。端部は尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ（横）、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ（横）、体部ケズリ後部分的にミガキ	1mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：5YR6/6橙色～10YR 6/3にぶい黄橙色 外：2.5YR5/6明赤褐色～7.5Y2/1黒色	口縁～体部30%
358	E-12 大河道 斜面4層 下層	土師器	壺	器高：(7.2)	丸みをもつ体部	内：ユビナデ、ケズリ 外：ハケ（一部上からユビナデ）	1mm以下の石英・長石・雲母	内：10R6/6赤橙色 外：5YR7/6橙色	体部40%
359	E-11 大河道 斜面4層	土師器	小型壺	底径：(2.4) 器高：(7.3)	小さな平底をもつ球形の体部。	内：体部ユビナデ 外:体部ハケ後ナデ、底部板ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y5/2暗灰黄色 外：2.5Y7/2灰黄色～10YR6/3にぶい黄橙色	庄内式土器 体～底部40% 内外面黒斑あり 内外面に接合痕あり
360	F-11 大河道 斜面4層 下層下位	土師器	小型丸底壺	口径：(8.7) 器高：7.1	球形の体部から、外湾する口縁部。端部はやや尖り気味。	内外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5YR6/2灰黄色 外：2.5Y6/2灰黄色～7.5Y6/4にぶい橙色	50% 外面に黒斑あり 内面に接合痕あり
361	F-11 大河道 斜面4層	土師器	小型丸底壺	口径：8.6 器高：7.8	球形の体部から、わずかに屈曲し外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ後ミガキ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/3にぶい黄橙色～7.5Y6/3にぶい褐色 外：10YR6/3にぶい黄橙色～10YR4/1褐灰色	ほぼ完形
362	E-11 大河道 斜面4層	土師器	小型丸底壺	口径：9.2 器高：8.4	楕円形の体部から、屈曲しやや丸みをもちながら外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ 外：口縁部ナデ後ミガキ、体部ケズリ後ミガキ	1mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：2.5Y7/2灰黄色～10YR6/3にぶい黄橙色	80% 外面に黒斑あり
363	E-11 大河道 斜面4層	土師器	小型丸底壺	口径：9.2 器高：6.6	楕円形の体部から、屈曲し、直線的に外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内:口縁部ヨコナデ、体部板ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	2mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：7.5YR6/4にぶい橙色～2.5YR6/6橙色 外：10YR6/3にぶい黄橙色～2.5Y5/4にぶい赤褐色	ほぼ完形
364	E-12 大河道 斜面4層	土師器	小型丸底壺	口径：9.3 器高：7.2	球形の体部から、屈曲し、外傾する口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部板ナデ後ミガキ、体部板ナデ後ナデ 外：口縁部板ナデ後ミガキ、体部ケズリ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：5YR6/6橙色 外：5Y6/6橙色～7.5YR5/3にぶい褐色	完形
365	G-11 斜面3層	土師器	小型丸底壺	口径：(8.7) 器高：8.8	球形の体部から、外湾する口縁部。端部はやや尖り気味。	内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（縦）、底部ハケメ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR6/3にぶい黄橙色	65% 内面に黒斑あり
366	E-11 大河道 斜面4層	土師器	小型丸底壺	口径：(9.9) 器高：7.6	球形の体部から、なだらかに外湾する口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ	2mm以下の長石・石英・雲母	内・外：5Y6/2灰オリーブ色	85% 外面に黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
367	E-11 大河道 斜面４層 下層	土師器	小型丸底壺	口径：9.1 器高：8.0	球形の体部から、屈曲し外方にのびる口縁部。端部は丸みをもつ。	内：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ケズリ	3㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内：7.5YR4/1 褐灰色～7.5YR5/4 にぶい赤褐色 外：7.5Y6/4 にぶい橙色～2.5YR5/4 にぶい赤褐色	90% 外面に黒斑あり
368	D-10 大河道 斜面４層 下層下位	土師器	小型丸底壺	口径：(9.7) 器高：8.6	やや歪な楕円形の体部から、屈曲し外方にのびる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ後、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色～5YR6/6 橙色 外：10YR7/3 にぶい橙色～5YR6/6 橙色	45%
369	E-11 大河道 斜面４層	土師器	甕	口径：(12.3) 器高：14.3	球形の体部から、屈曲し外傾する口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ハケメ後ヨコナデ、体部以下ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケ（縦）	4㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内：10YR5/2 灰黄褐色～2.5Y5/2 暗灰黄色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色～2.5Y6/1 黄灰色	60% 外面煤付着 二次被熱による表面剥離あり
370	E-12 大河道 斜面４層 下層	土師器	甕	口径：(14.7) 器高：(17.2)	丸みをもつ体部から、屈曲し外傾しながら立ち上がる口縁部。端部はやや尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	3㎜以下の長石・石英、微粒の雲母	内：7.5YR4/1 褐灰色 外：7.5Y8/6 浅黄橙色	口縁～体部 40% 外面体部煤付着
371	G-11 大河道 斜面４層 最下位	土師器	甕	口径：(15.2) 器高：(6.6)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外湾する口縁部。端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ・ヨコハケ	3㎜以下の石英・長石・赤褐色粒・雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：5YR7/6 橙色	口縁部 45%
372	E-12 大河道 斜面４層 下層	土師器	甕	口径：(15.2) 器高：(8.3)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外反する口縁部。端部は折り曲げられ、丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・ユビオサエ・ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・タテヨコハケ	2㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内：2.5Y4/1 黄灰色（一部 10YR7/3 にぶい黄橙色） 外：2.5Y4/1 黄灰色（一部 7.5YR7/4 にぶい橙色）	口縁部 20% 黒斑あり
373	E-10 大河道 斜面４層 上面	土師器	甕	口径：(16.6) 器高：(11.3)	体部は丸みをもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方へ伸び、段をもつ。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後一部ハケメ、ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	1～2㎜の石英・長石・雲母	内：2.5Y7/3 浅黄色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色	口縁～体部 60% 有段口縁
374	D-10 大河道 斜面４層 上面	土師器	甕	口径：(18.2) 器高：(11.7)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外傾する頸部。口縁部は屈曲し上方にのびる。端部は面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後粗いハケメ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/3 にぶい黄色 外：2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y3/1 黒褐色	口縁～体部 20%
375	E-10 大河道 斜面４層 上面	土師器	甕	口径：(18.0) 器高：(6.7)	「く」の字状に外反する口縁部。口縁部外面に凸帯	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	1～2㎜の長石・雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：10YR6/2 灰黄褐色	口縁～体部 30% 外面に黒斑あり
376	G-11 大河道 斜面４層 最下位	土師器	甕	口径：(14.7) 器高：(10.3)	ナデ肩の体部から、「く」の字状に外傾する口縁部。端部は内に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ・ハケ	3㎜以下の石英・長石・赤褐色粒・雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：10YR6/2 灰黄褐色	口縁部 20% 黒斑あり
377	D-11 大河道 斜面３層	土師器	甕	口径：(16.0) 器高：(6.3)	「く」の字状に外湾する口頸部。口縁部内に沈線と面をもつ。	内：口縁部板ナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	2㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：5YR7/6 橙色	口縁部 25% 黒斑あり
378	E-1 大河道 斜面４層	土師器	高杯	口径：14.0 底径：9.1 器高：10.8	「ハ」の字状の裾部から、内湾しながら上方にのびる脚柱部。裾端部は面をもつ。杯部は平底から丸みをもちながら外湾し口縁部につづく。端部は丸くおさめる。	内：杯部ヨコナデ後ミガキ、柱状部ナデ、裾部ハケ 外：杯部ヨコナデ、下半～柱状部ハケ（縦）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR7/2 にぶい黄橙色～2.5Y7/2 灰黄色	ほぼ完形 透孔なし
379	E-11 大河道 斜面４層	土師器	高杯	口径：(15.0) 底径：10.5 器高：(12.2)	「ハ」の字状の裾部から、丸みをもちながら上方に立ち上がる脚柱部。裾端部はやや面をもつ。杯部は平底から丸みをもちながら外方にのび、口縁端部はやや尖る。	内：杯部ハケメ後ヨコナデ、柱状部ヨコナデ、裾部ハケメ 外：杯部ハケメ後ナデ、下～柱状部ハケメ（縦方向）、裾部ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5Y7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい黄橙色～10YR7/3 にぶい橙色	30% 透孔不明
380	E-11 大河道 斜面４層	土師器	高杯	口径：14.2 底径：10.2 器高：11.7	「ハ」の字状の裾部から、内湾しながらのびる脚柱部。端部は丸くおさめる。杯部は平底から丸みをもちながら外湾する。端部は丸くおさめる。	内：杯部ハケ後ヨコナデ、脚部ハケ 外：杯部ハケ後ヨコナデ、脚部ヘラミガキ、ユビオサエ、ヨコナデ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：7.5YR8/4 浅黄橙色	完形 透孔なし

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
381	D-10 大河道 斜面4層 上面	土師器	高杯	底径：(11.0) 器高：(7.1)	「ハ」の字状に広がる裾部。わずかに内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：ヘラケズリ、ヘラケズリ後板ナデ 外：ヘラミガキ、ヨコナデ	3㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：7.5YR7/4にぶい橙色 外：7.5YR6/4にぶい橙色	脚部60% 透かしなし
382	F-12 大河道 斜面4層	土師器	高杯	底径：(14.0) 器高：(6.5)	「ハ」の字状の裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ケズリ、裾部ハケメ 外：柱状部ミガキ（縦方向）、裾部ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR7/3にぶい橙色 外：7.5YR7/4にぶい橙色	脚部50%　透 孔なし 黒斑あり
383	E-12 大河道 斜面4層 下層	土師器	小型器台	器高：(4.6)	「く」の字状をなす脚柱部から杯部。	内：ヨコナデ・ユビオサエ 外：ナデ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：5YR7/6橙色 外：5YR6/6橙色	25% 黒斑あり
384	F-11 大河道 斜面4層 最下位	土師器	小型器台	器高：(4.8)	「ハ」の字状の脚柱部。	内・外：ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：7.5YR5/3にぶい褐色 外：2.5YR5/3にぶい赤褐色	30% 円形の透孔1方残
385	E-12 大河道 斜面4層 下層下位	弥生土器	台付鉢	器高：(11.8)	球形の体部	内：ユビナデ 外：ハケ、ユビナデ	5㎜以下の石英、1㎜以下の長石・褐色土粒・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：7.5YR7/6橙色	体部完形 内面に接合痕あり
386	E-12 大河道 斜面4層 下層下位	弥生土器	台付甕	底径：(5.0) 器高：(4.0)	高台は「ハ」の字状に広がる	内：ハケ後ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：2.5YR6/6橙色、7.5YR4/1褐灰色	底部60%
390	F-7 SK-5	韓式土器	不明	器高：(7.7)	細片のため詳細不明。	内：同心円状タタキのちナデ 外：タタキ	3㎜以下の赤色粒・長石・雲母・礫	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色	体部片
391	I-2 SK-09	韓式系土器	甕	口径：(19.6) 器高：34.0	丸底の底部。体部は丸みをもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方へ伸びる。端部は沈線を施す。	内：口縁部ヨコナデ、体部無文タタキ 外：口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ後ハケメ、体部下半タタキ後板ナデ	1㎜以下の長石・雲母	内：10YR7/4にぶい黄橙色 外：10YR6/3にぶい黄橙色	体部50%欠損 外面に黒斑あり 外面に煤付着 内面に接合痕あり
392	I-2 SK-09	土師器	高杯	口径：22.0 器高：(9.2)	平底から、屈曲し直線的に外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：杯部ヨコナデ、板ナデ 外：杯部ヨコナデ、ハケ（縦）、下半ケズリ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR7/3にぶい橙色～7.5YR6/6橙色	杯部完形 内外面に接合痕あり
393	I-2 SK-09	土師器	高杯	口径：(13.6) 器高：(8.2)	平底から大きく外傾しながら口縁部につづく。端部はやや丸くおさめる。	内・外：ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：5YR6/6橙色 外：5Y6/6～7.5YR6/6橙色	杯部20%
394	M-2 SP-36	土師器	高杯	底径(10.8) 器高：(6.5)	「ハ」の字状の裾部から、なだらかに内湾しながら上方にのびる脚柱部。裾端部は面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ハケ後ナデ 外：磨滅のため調製不明	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/3にぶい黄橙色 外：2.5Y6/3にぶい黄色	脚部20% 円形の透孔2方残
395	5区 包含層 1層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.8) 幅：(5.8) 把手径：2.6～4.2	断面いびつな楕円形	内：ナデ、一部板ナデ 外：ユビオサエ	3㎜以下の長石・石英	内：5Y2/1黒色 外：10YR8/2灰白色	把手
396	7区 包含層 1層	土師器	小皿	口径：(6.2) 器高：1.5	平底から外上方へ伸びる口縁部。	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：5YR6/6橙色	40%
397	7区 包含層 1層	土師器	皿	口径：(10.2) 器高：1.1	底部は中央が凹む。公園部は丸みをもち、短く立ち上がる。端部は尖る。	内・外：口縁部ヨコナデ、底部ユビオサエ、ナデ	微粒の長石・雲母	内・外：7.5YR7/4にぶい橙色	30% 大きく歪む
398	6区 包含層 1層	土師器	高杯	器高：(7.2) 径：6.7	やや筒状の柱状部	内：ナデ 外：板ナデ	2㎜以下の長石・石英	内・外：5YR6/6橙色、10YR7/2にぶい黄橙色	柱状部片 6方向の面取り
399	7区 包含層 1層	国産磁器	染付碗	底径：(4.3) 器高：(1.9)	直立気味の高台。端部は外方に面をもつ。	内：見込み圏線2条、染付 外：圏線1条、染付、高台内圏線1条	密	白色	底部20% 見込みと内面に草花文染付あり 底部外面に落款（解読不明）
400	7区 包含層 1層	国産磁器	染付碗	底径：(4.2) 器高：(3.2)	方形の高台断面。丸みをもつ体底部。	外：圏線3条、染付、高台内施釉	密	灰白色	底部20% 外面に草花文の染付あり
401	7区 包含層 1層	磁器	青磁碗	底径：5.6 器高：(2.9)	中央部が凸む高台内。直立する高台。畳付は面をもつ。	内：見込み釉剥 外：施釉、底部回転ヘラケズリ（露胎）	2㎜以下の長石	胎土：2.5Y7/2灰黄色 釉：5GY5/1オリーブ灰色	底部完形 重ね焼きの痕あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
402	7区 包含層 1層	国産磁器	染付皿	底径：(9.6) 器高：(2.0)	平底。	内：見込み圏線2条、染付 外：圏線3条、高台内施釉	密	灰白色	底部10% 外面に草花文の染付あり
403	7区 包含層 1層	国産磁器	染付蓋	口径：(14.7) 器高：(3.7)	半球形の体部。	内：施釉 外：体部染付（花唐草文）	密	白色	口縁部20% 外面に花唐草文染付あり
404	7区 包含層1 層	土師器	瓦質土器	底径：(9.0) 器高：(4.7)	平底から、屈曲し直線的に外傾する体部。	内：ナデ後ハケ（縦）(10本1単位) 外：ハケ後ユビオサエ、底部ナデ	2㎜以下の長石・石英・灰色砂粒	内：10YR4/2灰黄褐色 外：2.5Y4/1黄灰色～10Y R 7/3にぶい黄橙色	底部30% 焼成軟質
411	5区 包含層 1層	金属器	鉄碗	口径：(8.2) 器高：(3.1)	丸みをもつ平底から、短く直立する口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内・外：錆付着のため詳細不明	-	内・外：2.5YR2/1赤黒色	25% 全体的に錆化著しい
416	7区 包含層 2層	韓式土器	不明	器高：(8.8)	細片のため詳細不明。	内：同心円状タタキ 外：格子タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：N7/灰白色	体部片
417	6区 包含層 2層	韓式土器	不明	器高：(6.6)	細片のため詳細不明。	内：同心円状タタキ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：N7/灰白色	体部片
418	7区 包含層 2層	韓式土器	不明	器高：(3.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石	内・外：N3/暗灰色	体部片
419	1区 包含層 2層	土師器	甕	口径：(10.1) 器高：(11.9)	ナデ肩の体部から、わずかに外傾する口縁部。端部はやや丸くおさめる。	内：口縁部ナデ、体部布ナデ 外：ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：7.5YR8/2灰白色、2.5YR6/4にぶい橙色 外：10YR8/2灰白色	口縁～体部15% 外面に黒斑あり 内外面に接合痕あり
420	7区 包含層 2層	土師器	杯	口径：(12.4) 器高：3.0	中央部が凹む底部から、丸みをもちながら立ち上がる口縁部。端部は尖る。	内：ナデ 外：ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英	内：2.5YR6/6橙色 外：5YR6/6橙色、10YR8/2灰白色	25%
421	1区 包含層 2層	土師器	皿	口径：(15.2) 器高：2.9	平底からなだらかに外傾しながら立ち上がる口縁部。端部は丸くおさめる	内：ナデ 外：板ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：5YR6/6橙色	10%以下 底部内面にヘラ記号あり
422	6区 包含層 2層	黒色土器	椀	底径：(7.9) 器高：(2.8)	「ハ」の字状にひらく高台。畳付は外方に面をもつ。	内：見込みヘラミガキ 外：体部ナデ、高台内ナデ	2㎜以下の長石・石英・雲母	内：10YR3/1黒褐色 外：7.5YR7/4にぶい橙色	底部20% 外面に黒斑あり 焼成軟質 黒色土器A類
423	6区 包含層 2層	黒色土器	椀	底径：(7.7) 器高：(2.2)	「ハ」の字状にひらく高台。畳付は丸くおさめる。	内：見込みヘラミガキ 外：体部ナデ、高台内ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR2/1黒色 外：5YR6/8橙色	底部90% 外面に黒斑あり 焼成軟質 黒色土器A類
424	8区 包含層 2層	灰釉陶器	椀	口径：(16.9) 底径：(8.1) 器高：5.6	「ハ」の字状にひらく高台。畳付に面をもつ。椀部は丸みをもつ底部から外湾し、口縁部につづく。端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：口縁部回転ナデ、体部回転ナデ・回転ヘラケズリ、高台内回転ヘラケズリ	1㎜以下の長石・石英	内・外：5Y8/1灰白色	25% 9世紀前半の所産 内面全体に灰釉をハケヌリする
425	7区 包含層 2層	灰釉陶器	椀	底径：(6.8) 器高：(2.1)	「ハ」の字状にひらく高台。畳付外方に面をもつ。	内：見込み施釉 外：体部施釉、高台内施釉	1㎜以下の長石	内：2.5Y8/3淡黄色（釉）、5Y8/1灰白色（胎土） 外：7.5Y7/2灰白色（釉）、5Y8/1灰白色（胎土）	底部20% 9世紀後半の所産 内外面全体に灰釉をハケヌリする 見込みに重ね焼きの痕跡あり
426	1区 包含層 2層	土師器	羽釜	口径：(26.6) 器高：(17.1)	内傾する体部から、「く」の字状の口縁部。端部は凹凸の面をもつ。鍔は水平。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ 外：ヨコナデ、ユビオサエ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：5YR7/4にぶい橙色、5YR7/6橙色	口縁～体部40% 外面に黒斑あり 外面に接合痕あり
427	8区 包含層 2層	瓦	平瓦	長：(7.8) 幅：(8.4) 厚:1.6～2.0	一端に面取り。	凹：布目圧痕、ケズリ 凸：格子目タタキ痕	1～2㎜の長石	凹・凸：2.5Y8/1灰白色	破片 焼成軟質 白鳳期か
428	4区 包含層 2層	瓦	平瓦	長：(17.0) 幅：(9.3) 厚:1.6～1.8	一端に面取り。	凹：布目圧痕 凸：縄目タタキ痕	1㎜以下の長石	凹・凸：10Y8/1灰白色	破片 焼成軟質
429	1区 包含層 3層下層	韓式土器	甕・鍋・甑？	口径：(20.8) 器高：(9.3)	体部は丸味をもち、口縁部は外湾する。端部は上方に面をもち凹む。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内：10YR3/1黒褐色、10YR6/3にぶい黄橙色 外：10YR6/2～5/2灰黄褐色	口縁～体部30%
430	H-3～5 包含層 3層	韓式系土器	長胴甕	口径：(19.0) 器高：(34.0)	丸底から丸味をもつ長い胴部、口縁部は強く外湾し、端部は外方に面をもつ。	内：ヨコナデ、ナデ、ケズリ 外：タタキ後ハケ、タタキ	2㎜以下の長石・クサリ礫、微粒黒色粒・雲母	内：7.5YRにぶい橙色 外：5YR6/6橙色	25%以下 口縁・体・底部が部分的に残る 外面に黒斑あり 外面に煤、炭化物付着

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
431	K-3 包含層 3 層	土師器	甕・鍋・甑？	口径：(25.2) 器高：(5.8)	体部は直線的に外方へ広がる。口縁部は外湾し、端部は面をもつ	内・外：ヨコナデ、ナデ	1 mm以下の長石・雲母・白黒砂粒・赤色鉱物	7.5YR7/4 にぶい橙色、7.5YR7/6 橙色	口縁部 10% 未満
432	H-3 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	口径：(21.9) 器高：(11.0)	直立気味の体部、口縁部は短く外湾し、端部は外方に面をもつ	内：ハケ 外：タタキ	1 mm前後の長石	内・外：5YR6/6 橙色	口縁部 20%
433	H-10 包含層 3 層	韓式系土器	平底鉢	底径：(6.0) 器高：(2.2)	平底から、屈曲し外方に直線的にのびる体部	内：ナデ 外：底部ナデ、体部ケズリ	2 mm以下の長石、微粒の雲母	内：10YR7/2 にぶい黄橙色 外：10YR3/1 黒褐色	体～底部片 外面に炭化物付着 外面に接合痕あり
434	I-8 包含層 3 層	韓式系土器	平底鉢	底径：(7.8) 器高：(3.4)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：底部ナデ、体部ケズリ	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内：7.5Y6/4 にぶい橙色 外：7.5YR7/3 にぶい橙色	体～底部片
435	1 区 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(3.8) 幅：(6.7) 把手径：2.5～3.0	断面円形、切り込みを有す。	外：ユビオサエ	1 mm前後の長石・雲母	外：10YR6/2 灰黄褐色	把手（内面剥離）
436	J-6 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.3) 幅：(6.2) 把手径：2.6	断面いびつな円形。	内：ケズリ 外：ハケ、ユビオサエ	1 mm前後の長石・雲母	内・外：5Y6/6 橙色	把手
437	F-7 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(2.9) 幅：(4.6) 把手径：2.1～2.4	断面円形	外：ナデ、ユビオサエ	1～3 mmの長石	外：7.5YR7/4 にぶい橙色	把手（内面剥離）
438	H-7 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(3.3) 幅：(3.0) 把手径：2.0～2.5	断面いびつな楕円形	内：ナデ 外：ユビオサエ、ナデ	2 mmの長石	内：7.5YR5/2 灰褐色 外：5YR5/6 明赤褐色	把手
439	I-4 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.0) 幅：(4.9) 把手径：2.8	断面いびつな円形	内：ハケメ 外：ユビオサエ、ハケ	1 mm前後の長石・雲母	内：10YR7/1 黒色 外：10YR6/2 灰黄褐色	把手 内面に煤付着
440	J-5 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(6.1) 幅：(5.0) 把手径：2.9～3.2	断面いびつな円形	内：ナデ 外：ユビオサエ	1 mm前後の長石	内・外：7.5YR5/4 にぶい褐色	把手
441	F-6 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.8) 幅：(6.9) 把手径：3.0～3.7	断面楕円形	内：ハケ 外：ハケ、ナデ、ユビオサエ	1 mm前後の長石・雲母	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	把手
442	J-5 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.3) 幅：(6.0) 把手径：2.6～3.1	断面楕円形	内：ナデ 外：ユビオサエ	1 mm前後の長石・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	把手
443	K-4 包含層 3 層上層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.0) 幅：(5.0) 把手径：2.8～3.7	断面楕円形	外：ユビオサエ	1 mm前後の長石・雲母	外：10YR6/4 にぶい黄橙色	把手（内面剥離）
444	K-2 包含層 3 層	韓式土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(12.7) 把手径：4.2	体部は丸みをもつ。把手は外上方へ伸びる。	内：ケズリ 外：粗いハケ、把手ナデ	1～2 mmの長石・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄色 外：2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y6/ にぶい黄色	把手～体部片
445	I-7 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(6.1) 把手径：2.9～3.5	断面楕円形	内：ナデ 外：ユビオサエ、ハケ	1 mm前後の長石・雲母	内：10YR5/2 灰黄褐色 外：10YR6/2 灰黄褐色	把手
446	K-4 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(8.7) 幅：(7.8) 把手径：3.2	断面円形	内：ナデ 外：ハケ後ナデ、ユビオサエ	1 mm以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	把手
447	I-6 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：6.4 幅：7.4 把手径：3.3～3.5	断面いびつな円形	内：ケズリ 外：ナデ、ハケ、板ナデ	4 mm以下の長石・石英・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色～7.5YR7/4 にぶい橙色	把手
448	1 区 包含層 3 層上層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.1) 幅：(7.1) 把手径：3.0～3.9	断面いびつな円形、上方に切り込みを有す	内：ナデ 外：ユビオサエ	2 mm以下の長石・石英	内：10Y3/1 オリーブ黒色 外：7.5Y6/4 にぶい橙色	把手
449	2 区南 包含層 3 層（側溝）	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.8) 幅：(6.5) 把手径：3.0～3.3	断面いびつな円形	内：ナデ 外：ハケメ後ナデ、ユビオサエ	2 mm以下の長石・石英	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	把手
450	I-4 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：3.4 幅：5.5 把手径：3.0～3.3	断面いびつな円形	外：ナデ、ハケ	3 mm以下の長石・石英・雲母	外：10YR7/2 にぶい黄橙色～5YR6/6 橙色	把手（内面剥離）

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
451	G-6 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：4.7 幅：5.6 把手径：3.1～3.4	断面いびつな円形	内・外：ナデ	3 mm以下の長石・石英・雲母	内・外：5Y5/6 明赤褐色～ 10YR5/3 にぶい黄褐色	把手 焼成やや軟質
452	2 区北 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：4.1 幅：7.0 把手径：3.2～3.4	断面円形	外：ユビオサエ	2 mm以下の長石・石英・雲母	外：10YR7/3 にぶい黄橙色	把手（内面剥離）
453	2 区北 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	長：(8.6) 幅：(6.2) 把手径：4.1	断面円形。	外：ユビオサエ、ハケ	1 mm以下の長石・雲母	外：7.5YR7/3 にぶい橙色	把手（内面剥離）
454	J-5 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(1.7)	なだらかに外湾する口縁部、端部は外方に面をもつ	内・外：回転ナデ	1 mm以下の長石・黒色粒	内：N6/ 灰色 外：5PB5/1 紫灰色	口縁部片
455	I-4 包含層 3 層	土師器	甕・鍋・甑？	器高：(3.2)	外傾する体部から、口縁部はわずかに外反し端部は面をもつ。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	2 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/6 橙色	口縁部片
456	G-6 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(6.8)	外傾する体部から、口縁部はわずかに外反し端部は面をもつ。	内：ヨコナデ、ハケ 外：ヨコナデ、タタキ後ナデ	2 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：5YR6/6 橙色 外：7.5YR6/6 橙色	口縁部片
457	K-3 包含層 3 層上層	土師器	甕・鍋・甑？	器高：(2.9)	なだらかに外反する口縁部、端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ後ナデ	1 mm以下の黒色粒、微粒の長石・クサリ礫・雲母	内・外：7.5YR7/3 にぶい橙色	口縁部片
458	K-3 包含層 3 層上層	土師器	甕・鍋・甑？	器高：(4.0)	細片のため詳細不明。	内：ハケメ後ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	1 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5YR7/3 浅黄色 外：7.5YR6/6 橙色	口縁部片
459	K-4 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(4.4)	直線的に上方にのびる体部、口縁部は外折し、端部はやや丸くおさめる。	内・外：ヨコナデ、ハケ	2 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部片
460	J-4 包含層 3 層上層	韓式系土器？	甕・鍋・甑？	器高：(2.8)	直立する体部から口縁部は外折、端部はやや丸くおさめる。	内：ヨコナデ、ハケ 外：ヨコナデ、タタキ	3 mm以下の長石、1 mm以下のクサリ礫、微量の雲母	内・外：5YR7/6 橙色	口縁部片
461	I-7 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(10.2)	直線的に外方に広がる体部、口縁部は外折し端部は面をもつ。	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	1 mm前後の長石	内・外：7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部片
462	I-7 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(1.6)	外湾する口縁部、端部は外方に面をもつ	内・外：ハケ	1 mm以下の長石・白黒赤色砂粒・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：10YR7/4 にぶい黄橙色	口縁部片
463	1 区 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(5.2)	「く」の字に外湾する口縁部、端部は外方に肥厚紙面をもち、凹む。	内：ヨコナデ、ユビオサエ 外：ヨコナデ、タタキ	1 mm前後の長石・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部片
464	I-4 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(10.0)	内傾する体部、口縁部はわずかに外湾し、端部は内に少し肥厚、上方に面をもつ。	内・外：ヨコナデ、ハケ	1 mm以下の長石・雲母	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部片
465	F-10 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(7.5)	口縁部は直線的に外方へ広がる。端部は内側に肥厚し面をもつ	内：ヨコナデ、ケズリ 外：ヨコナデ	1 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：7.5YR6/6 橙色 外：5YR6/6 橙色	口縁部片
466	H-9 包含層 3 層	土師器	甕・鍋・甑？	器高：(9.4)	直線的に外方にひらく体部から、口縁部につづく、端部は上方に面をもつ。	内：ハケメ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、ハケ	3 mm以下の長石・黒色粒、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5YR7/2 灰黄色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色	口縁部片 外面に黒斑あり 517 は同一個体の可能性
467	1 区 包含層 3 層（側溝）	土師器	甕・鍋・甑？	器高：(4.0)	直線的に外方にのびる口縁部、端部は尖り気味におわる。	内・外：ハケ	2 mm以下の長石、1 mm以下のクサリ礫・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部片
468	I-3 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(3.4)	直立する口縁部、端部はやや外湾し丸くおさめる。	内・外：ハケ	1 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母・黒色粒	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部片
469	J-5 包含層 3 層	韓式系土器	甕？	器高：(4.1)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	2 mm以下の長石、微粒の雲母	内：2.5Y7/2 灰黄色 外：2.5Y4/1 黄灰色	口縁部片
470	G-9 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(3.3)	細片のため詳細不明。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ	2 mm以下の長石、微粒の雲母	内・外：2.5Y7/2 灰白色	口縁片 内面一部煤付着
471	J-4 包含層 3 層上層	韓式系土器？	甕・鍋・甑？	器高：(4.2)	口縁端部はやや丸みをもつ	内：ハケ 外：ヨコナデ、タタキ	2 mm以下の長石・雲母・クサリ礫	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部片 外面に黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
472	I-7 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(4.2)	細片のため詳細不明。	内：磨滅のため調整法不明 外：タタキ	1 mm以下の長石・クサリ礫・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：7.5YR6/6 橙色	口縁部片
473	H-3 包含層 3 層上層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(4.8)	直立すつ口体部、端部はそのまま丸くおさめる	内・外：ハケ	1 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁部片
474	L-2 包含層 3 層	韓式系土器	甕・鍋・甑？	器高：(7.0)	直立気味の体部からそのまま口縁部につづく。端部は内側に面をもつ	内：ハケ 外：タタキ	1 ～ 2 mmの長石・雲母	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部片
475	I-5 包含層 3 層	韓式系土器	把手付甕・鍋・甑？	器高：(2.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：1 条の凹線、タタキ	1 mm以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：7.5YR7/6 橙色	体部片 把手の痕跡あり
476	K-4 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(2.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR5/3 にぶい黄橙色 外：5Y3/1 オリーブ黒色	体部片 外面に炭化物付着
477	I-8 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2 mm以下の長石、1 mm以下のクサリ礫・雲母	内・外：7.5YR7/3 にぶい橙色	体部片
478	K-4 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(2.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：5Y4/1 灰色 外：5Y3/1 オリーブ黒色	体部片 外面に炭化物付着
479	I-6 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1 mm以下の長石・クサリ礫・黒色粒、微粒の雲母	内：2.5Y8/2 灰白色 外：2.5Y7/3 浅黄色	体部片
480	G-6 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(4.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の黒色粒・雲母	内：2.5Y5/2 暗灰黄色 外：2.5YR7/2 灰黄色	体部片 内面に炭化物付着
481	H-7 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(4.1)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR6/2 灰黄褐色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	体部片 内面に接合痕あり
482	3 区 包含層 3 層上層	韓式系土器	不明	器高：(4.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ハケメ	1 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の黒色粒・雲母	内：5YR6/4 にぶい橙色 外：5YR5/4 にぶい赤褐色	体部片 227・228 は 217 と同一個体の可能性
483	F-10 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(5.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5Y4/1 黄灰色 外：2.5Y5/1 黄灰色	体部片
484	2 区南 包含層 3 層（側溝）	韓式系土器	不明	器高：(1.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1 mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR5/2 灰黄褐色 外：10YR4/2 灰黄褐色	体部片 内外面に煤付着
485	G-5 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(3.2)	細片のため詳細不明。	内：ハケ 外：タタキ	1 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：7.5YR8/4 浅黄橙色	体部片
486	L-2 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(3.3)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1 mm以下の長石・角閃石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR8/3 浅黄橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片 外面に煤付着
487	J-3 包含層 3 層上層	韓式系土器	不明	器高：(3.6)	細片のため詳細不明。	内：ハケ 外：タタキ	3 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR7/2 にぶい黄橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体部片
488	H-9 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(4.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2 mm以下の長石、微粒のクサリ礫・角閃石・雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：2.5Y7/2 灰黄色	体部片
489	7 区 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(6.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1 mm以下の長石	内：2.5Y8/2 灰白色 外：2.5Y4/1 黄灰色	体部片
490	I-7 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(5.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2 mm以下の長石・黒色粒、微粒の雲母	内：10YR5/3 にぶい黄褐色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	体部片 内面に煤付着

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
491	G-5 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(4.4)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・クサリ礫、微粒の黒色粒・雲母	内・外：5YR6/6 橙色	体部片 227・228は217と同一個体の可能性
492	L-2 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(4.2)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1mm以下の長石・雲母、微粒のクサリ礫・黒色粒	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：7.5YR6/3 にぶい褐色	体部片
493	L-2 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：同心円状タタキ？ 外：タタキ	1mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色	体部片 外面に煤付着
494	F-10 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(4.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：2.5Y7/2 灰黄色	体部片 内外面に煤付着
494	K-4 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(9.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	3mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：10YR7/3 にぶい褐色	体部片
495	H-3 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(5.9)	細片のため詳細不明。	内：ケズリ 外：ハケ	密	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：2.5Y7/2 灰黄色	体部片
495	I-7 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(9.5)	丸味を帯びた体部	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・白黒赤色砂粒・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色、10YR3/1 黒褐色 外：2.5YR7/4 淡赤橙色、7.5YR7/2 明褐灰色	体部片
496	I-2,3 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(2.7)	細片のため詳細不明。	内：同心円タタキ 外：タタキ	1mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：2.5Y7/3 浅黄色 外：2.5Y6/2 灰黄色	体部片
496	I-6 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(10.2)	細片のため詳細不明。	内：ヘラケズリ 外：タタキ	2mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：2.5Y5/1～4/1 黄灰色	体部片
497	K-5 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(4.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石、微粒の雲母・黒色粒	内：2.5Y8/2 灰白色 外：10YR6/2 灰黄褐色	体部片
498	1区 包含層 3層（側溝）	韓式系土器	不明	器高：(5.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1mm以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：7.5YR7/7 にぶい黄橙色	体部片 外面に黒斑あり
499	J-3 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：ハケ 外：タタキ	1mm以下の長石、微粒の雲母	内：10YR7/2 にぶい黄橙色 外：10YR3/2 黒褐色	体部片 外面に煤付着
500	J-3 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(3.9)	細片のため詳細不明。	内：ハケ 外：タタキ	2mm以下の長石・クサリ礫・雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	体部片
501	L-2 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(7.4)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm前後の長石・雲母	内：10YR7/3 にぶい黄橙色 外：10YR6/2 灰黄色	体部片
502	H-5 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(3.5)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	2mm以下の長石、1mm以下のクサリ礫・雲母	内：5Y6/6 橙色 外：7.5YR3/1 黒褐色	体部片 外面に煤付着
503	H-6 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(5.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：7.5YR7/3 にぶい橙色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	体部片
509	G-10 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(5.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1mm以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：2.5Y5/1 黄灰色 外：2.5Y7/2 灰黄色	体部片 内面に煤付着
510	K-1 包含層 3層上層	韓式系土器	不明	器高：(5.1)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：10YR7/3 にぶい橙色	体部片
511	H-8 包含層 3層	韓式系土器	不明	器高：(3.1)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1mm以下の長石・クサリ礫	内：5YR5/4 にぶい赤褐色 外：5YR6/6 橙色	体部片

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
512	1区包含層3層（側溝）	韓式系土器	不明	器高：(7.2)	細片のため詳細不明。	内：板ナデ？ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内・外：10YR6/3にぶい橙色	体部片
513	3区南包含層3層（側溝）	韓式系土器	不明	器高：(18.4)	丸味をもつ体部。	内：同心円タタキ後ナデ 外：タタキ	1㎜前後の長石・雲母	内・外：10YR5/2灰黄褐色	体部片
514	1区包含層3層	韓式系土器	不明	器高：(5.7)	細片のため詳細不明。	内：ユビオサエ 外：タタキ	1～2㎜の長石・雲母	内・外：2.5Y6/3にぶい黄色	体部片
515	1区包含層3層	韓式系土器	不明	器高：(4.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR6/3にぶい黄橙色	体部片
516	K・J-3包含層3層上層	韓式系土器	平底鉢？	底径：(7.8) 器高：(2.4)	やや凹む底部、丸味を帯びながら外方に広がる体部	内：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ	2㎜以下の長石、雲母、クサリ礫	内：5Y2/1黒色 外：5Y2/1黒色、5YR7/3にぶい橙色	底部60% 外面底部煤付着 木の葉圧痕？
517	H-9包含層3層	土師器	（把手付）甑	底径：(13.0) 器高：(7.5)	底部に蒸気孔あり。丸味をもつ体部からなだらかに外方に開く。	内：ナデ 外：ハケメ後ナデ	3㎜以下の長石・黒色粒、微粒のクサリ礫・雲母	内：2.5Y7/3浅黄色 外：5Y3/1オリーブ黒色	体～底部片 蒸気孔は1個残 466は同一個体の可能性
519	I-8包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(4.3)	底部に円形の蒸気孔あり。	内：ケズリ 外：ハケ	1㎜以下の長石	内・外：7.5YR6/4にぶい橙色	底部片 蒸気孔は2個残
520	H-9包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(3.4)	底部に蒸気孔あり。なだらかに外湾する体部。	内：ユビオサエ 外：ナデ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔2個残 外面に黒斑あり
522	K-2包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.8)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	3㎜以下のクサリ礫、1㎜以下の雲母	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色	底部片　蒸気孔は2個残
523	K-3包含層3層上層	韓式系土器	不明	器高：(3.6)	細片のため詳細不明。	内：ユビオサエ、ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・黒色粒、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR7/6橙色	体部片 外面に煤付着
523	J-3包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(4.2)	底部に円形の蒸気孔あり。	内：ユビオサエ 外：タタキ後ナデ	1㎜前後の長石	内・外：10YR6/2灰黄褐色	底部片 蒸気孔は2個残
523	1区包含層3層（側溝）	韓式系土器	甕・甑・甑？	器高：(4.3)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内：10YR6/4にぶい黄橙色 外：10YR6/3にぶい黄橙色	体部片
524	G-6包含層3層上層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(3.0)	底部に蒸気孔あり。	内：ナデ 外：タタキ	2㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：7.5YR7/4にぶい橙色 外：7.5YR8/4浅黄橙色	底部片 蒸気孔は2個残
525	L-2包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(3.3)	底部に蒸気孔あり。	内：ケズリ 外：ハケメ後ナデ	2㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR7/3にぶい黄橙色 外：2.5Y8/3淡黄色	底部片 蒸気孔は1個残
526	I-7包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.0)	底部に円形と楕円形の蒸気孔あり。	内：ナデ 外：ハケメ	1㎜前後の長石・雲母	内：7.5YR6/6橙色 外：7.5YR6/4にぶい橙色	底部片 蒸気孔は4個残
527	F-6包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(7.6)	底部に円形の孔を穿つ。	内：ケズリ 外：ハケメ	1㎜前後の長石	内・外：7.5YR7/6橙色	底部片 蒸気孔は1＋7個
528	K-2包含層3層上層	韓式土器	（把手付）甑	器高：(3.1)	底部に円形の蒸気孔あり。	内：ナデ 外：タタキ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：7.5YR6/4にぶい橙色	底部片
528	K-3包含層3層上層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(1.5)	底部に円形の蒸気孔あり。	内・外：ナデ	微粒の長石・雲母	内・外：10YR7/2にぶい黄橙色	底部片 外面に煤付着 蒸気孔1個残
529	H-3包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(1.9)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	1㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：5YR6/6橙色	底部片 蒸気孔は3個残
530	K-1包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(1.9)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	微粒の長石・クサリ礫・雲母	内・外：10YR6/3にぶい橙色	底部片 蒸気孔は2個残
531	I-7包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(1.4)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	2㎜以下の長石・白黒赤色砂粒・雲母	内・外：7.5YR6/4にぶい橙色	底部片 蒸気孔は1個残
532	I-4包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.7)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	微粒の長石・雲母	内：2.5Y7/2灰黄色 外：2.5Y8/3浅黄色	底部片 蒸気孔は2個残
533	I-7包含層3層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(1.4)	底部に蒸気孔あり。	内：ナデ 外：タタキ	3㎜以下の長石・雲母	内：7.5YR6/4にぶい橙色 外：7.5YR6/4～7/4にぶい橙色	底部片 蒸気孔は1個残

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
534	J-1 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.3)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	1 ㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：10YR6/2 灰黄褐色	底部片 蒸気孔は４個残
535	K-2 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.7)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	3 ㎜以下のクサリ礫、微粒の雲母	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は１個残
536	G-5 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.3)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	2 ㎜以下の長石・黒色粒	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は２個残
537	J-2 包含層 3 層上層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.5)	底部に蒸気孔あり。	内：ユビナデ 外：ナデ	2 ㎜以下の長石・雲母、微粒のクサリ礫	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	底部片 蒸気孔は２個残
538	J-4 包含層 3 層	韓式系土器	甑	長：(2.9)	底部に蒸気孔あり。	内：ナデ 外：ハケ後ナデ	1 ㎜以下の長石・クサリ礫・雲母	内：7.5YR7/6 橙色 外：7.5YR6/6 橙色	底部片 蒸気孔は１個残
539	K-4 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(1.4)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	2 ㎜以下の長石、微粒の雲母	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は１個残
540	F-10 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(2.4)	底部に円形の蒸気孔あり。	内・外：ナデ	1 ㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内：7.5YR6/6 橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	底部片 蒸気孔は２個残
541	I-3 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	長：(1.5)	底部に蒸気孔あり。	内・外：ナデ	1 ㎜以下の長石、微粒のクサリ礫・雲母	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	底部片 蒸気孔は２個残
542	J-5 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(1.4)	底部に円形と楕円形の蒸気孔あり。	内：ユビオサエ 外：ナデ	1 ㎜以下の長石	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	底部片 蒸気孔は３個残
543	I-7 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(7.0)	底部に円形の蒸気孔あり。 なだならかに外反する体部。	内・外：ハケ	1 ～ 2 ㎜の長石・雲母	内：10YR7/2 にぶい黄橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	底部片 蒸気孔は２個残
543	1 区南 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(4.4)	底部に円形と楕円形の蒸気孔あり。	内・外：ナデ	1 ㎜前後の長石・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：10YR6/4 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は３個残 外面に黒斑あり
544	I-4 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(6.2)	底部に円形と楕円形の蒸気孔あり。	内：ハケ 外：ハケ、ナデ	1 ～ 2 ㎜の長石・雲母	内・外：7.5YR6/3 にぶい褐色	底部片 蒸気孔は４個残
545	K-4 包含層 3 層上層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(1.8)	底部に楕円形の蒸気孔をあり。	内：ケズリ 外：タタキ	1 ㎜前後の長石	内・外：7.5YR7/6 橙色	底部片 焼成やや軟質 蒸気孔は３個残
546	G-5 包含層 3 層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(6.4)	底部に円形と楕円形の蒸気孔あり。	内：ケズリ、ユビオサエ 外：タタキ	1 ～ 2 ㎜の長石	内・外：10YR7/3 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は３個残
547	2 区 包含層 3 層上層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(8.2)	底部に円形と楕円形の蒸気孔あり。	内：ハケ、ユビオサエ 外：ハケ	1 ～ 2 ㎜の長石・雲母	内・外：7.5YR6/3 にぶい褐色、10YR7/2 にぶい黄橙色	底部片 蒸気孔は４個残
548	K-1 包含層 3 層上層	韓式系土器	（把手付）甑	器高：(7.2)	底部に蒸気孔あり。	内：ナデ 外：タタキ後ナデ	1 ㎜以下の長石・クサリ礫、微粒の雲母	内：10YR6/4 にぶい黄橙色 外：10YR6/3 にぶい黄橙色	体～底部片 底部蒸気孔は１個残
549	G-9 包含層 3 層	韓式土器	（把手付）甑	器高：(5.2)	底部に蒸気孔あり。 体部は直線的に外方へ広がる。	内：ヨコナデ 外：タタキ、ケズリ、ナデ	1 ～ 2 ㎜の長石・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：10YR7/3 にぶい橙色	底体部片
550	H-9 包含層 3 層	韓式土器	（把手付）甑	器高：(5.55)	底部に楕円形の蒸気孔あり。	内：ナデ 外：ハケ	2 ㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：5YR6/6 橙色	底部片 蒸気孔は２個残
551	H-9 包含層 3 層	韓式土器	甑	長：(5.8)	底部に円形の蒸気孔あり。	内：ナデ 外：タタキ	2 ㎜以下の長石	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	底部片 外面に煤付着 蒸気孔は２個残
552	J-3 包含層 3 層	須恵器	壺	器高：(27.0)	体部は丸底から立ち上がり、最大径をやや上位にもつ。	内：頸～体部上半ヨコナデ、下半ユビオサエ 外：頸～体部上半タタキ後カキメ、下半タタキ	2 ㎜以下の長石	内・外：N7/ 灰白色	体～底部 50% 韓式系土器
553	J-1 包含層 3 層	韓式系土器	甕	口径：(15.0) 器高：(6.0)	丸味をもつ頸部に、屈曲し口縁部は直線的に外方にのびる。端部は少し拡張し、上方に面をもつ。	内・外：ナデ 外：口頸部境に１条の凸帯	1 ㎜以下の長石	内・外：5PB6/1 青灰色	口縁～体部片 内外面灰かぶり
554	I-2,3 包含層 3 層	韓式系土器	壺、甕	口径：(8.4) 器高：(4.5)	直線的に外方にのびる口頸部、端部はやや丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、２条の凸帯、波状文	1 ㎜以下の長石	内・外：N4/ 灰色	口縁部片

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
555	F-13 包含層 3 層（側溝）	須恵器	平底瓶	底径：8.6 器高：(16.4)	平底から直立気味に立ち上がる体部、なだらかに内傾する肩部。	内・外：ナデ	2 mm以下の石英	内・外：N6/ 灰色	体～底部 70%
556	J-6 包含層 3 層	須恵器	把手付鉢	器高：(6.4) 厚：1.3	断面円形	外：ナデ	0.5 mmの白色砂粒	外：N6/ 灰色	把手
557	K-5 包含層 3 層	韓式系土器	把手付鉢	底径：(8.4) 器高：(1.9)	細片のため詳細不明。	内・外：ナデ	1 mm以下の長石	内・外：5Y5/1 灰色	体～底部片 把手の痕跡あり
558	1 区 包含層 3 層上層（側溝）	韓式系土器	甕？	器高：(3.9)	なだらかに外湾する頸部	内：ヨコナデ 外：2 条の凸帯の上下に波状文	微粒の長石	内：N4/ 灰色 外：N5/ 灰色	体部片
559	I-4 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(4.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石・黒色粒	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
560	J-4 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(3.3)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
561	I-4 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(2.7)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
562	H-3 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(4.3)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石・黒色粒	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
563	J-6 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(4.1)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石・黒色粒	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
564	I-3 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(2.8)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石・黒色粒	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
565	J-4 包含層 3 層上層	韓式系土器	不明	器高：(3.3)	細片のため詳細不明。	内：ナデ 外：格子タタキ	1 mm以下の長石	内：N3/ 灰色 外：5PB7/1 明青灰色	体部片
566	K-4 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(2.5)	細片のため詳細不明。	内：同心円状タタキ 外：タタキ	1 mm以下の長石、微粒の雲母	内・外：10YR7/2 にぶい黄橙色	体部片
567	6 区 包含層 3 層	韓式系土器	不明	器高：(5.8)	細片のため詳細不明。	内：板ナデ？ 外：格子タタキ	2 mm以下の長石	内：5PB6/1 紫灰色 外：N4/ 灰色	体部片
568	G-12 包含層 3 層（側溝）	土師器	壺	口径：9.9 器高：12.9	球形の体部から、屈曲しなだらかに外方にのびる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体部以下ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部以下ハケ	2 mm以下の長石・石英	内：2.5YR5/8 明赤褐色 外：5YR6/8 橙色～2.5Y6/2 にぶい黄橙色	80% 外面煤付着 外面に接合痕あり 二次被熱による表面剥離あり
569	L-2 包含層 3 層	土師器	甕	口径：(16.0)	丸底の底部。体部は球形を呈する。頸部は「く」の字状に緩やかに屈曲し、口縁部は外上方へ伸びる。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ（5～7 本／cm）、底部ケズリ後ナデ	1～3 mmの石英・長石	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁部・底部が部分的に残る 焼成軟質
570	G -4・5 包含層 3 層	土師器	甕	口径：(15.1) 器高：(15.3)	球形の体部から口縁部は丸みをもち「く」の字状に外湾し、端部はやや尖る。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	2 mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5YR6/1 灰黄色 外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁～体部 15% 焼成やや軟質 二次被熱による変色
571	K-5 包含層 3 層	土師器	甕	口径：(10.0) 器高：(5.2)	ナデ肩の体部から、ゆるやかに「く」の字状に外湾する口縁部、端部は上方に面をもつ。	内：口縁部ナデ、体部ユビオサエ、ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	1 mm以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR4/2 灰褐色 外：5YR5/3 にぶい赤褐色	口縁部 25% 内外面に煤付着
572	K-4 包含層 3 層（炭化物層内）	土師器	甕	口径：(19.0) 器高：(6.3)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はわずかに内湾し外上方へ伸びる。端部は内側にやや肥厚し、面をもつ。	内：ナデ 外：口縁部ナデ、頸部ハケ後ナデ	1～3 mmの石英・長石・角閃石	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 40%
573	J-5 包含層 3 層	土師器	甕	口径：(17.8) 器高：(7.3)	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部はわずかに外湾しつつ外上方へ伸びる。端部は外側にやや肥厚し、面をもつ。	内：口縁部ナデ、体部ナデ・ユビオサエ 外：ナデ	1～3 mmの石英・長石	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁～体部 30% 焼成やや軟質
574	G-4 包含層 3 層	土師器	甕	口径：(20.4) 器高：(7.1)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方へ伸び端部はわずかに面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	1～2 mmの石英・長石	内：10YR6/4 にぶい黄褐色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色	口縁～体部 20% 外面に黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
575	K-5 包含層 3層	土師器	甕	口径：(16.6) 器高：(4.9)	「く」の字状に外傾する口縁部。端部はやや内に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、肩部ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、肩部ナナメハケ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：2.5Y5/1 黄灰色 外：10YR8/3 浅黄橙色	口縁部 25% 焼成やや軟質
576	J-4 包含層 3層	土師器	甕	口径：(15.6) 器高：(4.6)	「く」の字状に外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ナナメハケ後ヨコナデ、肩部ユビオサエ・ヘラケズリ 外：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	2㎜以下の石英・赤褐色・黒色砂粒	内：10YR8/1 灰白色 外：10YR8/2 灰白色	口縁部 25%
577	K-5 包含層 3層	土師器	甕	口径：(16.4) 器高：(4.3)	やや直立する頸部から外湾する口縁部。端部は尖り気味。	内：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ 外：口縁部ナナメハケ後ヨコナデ、肩部タテハケ後ナデ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁部 25% 外面に煤付着
578	K-4 包含層 3層	土師器	甕	口径：(17.9) 器高：(4.8)	口縁部は「く」の字状に屈曲する頸部から外上方へ伸びる。端部は内側に肥厚し、面をもつ。	内：ナデ 外：口縁部ナデ、頸部ハケ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/3 にぶい黄褐色	口縁部 10%
579	H-5 包含層 3層上層	土師器	甕	口径：(16.1) 器高：(5.4)	ナデ肩から直立気味に立ち上がる頸部。口縁部は外湾し、端部は丸くおさめる。	内：ヨコハケ後ヨコナデ 外：タテハケ後ヨコナデ	5㎜以下の石英・長石	内：5YR7/4 にぶい橙色 外：5YR8/4 淡橙色	口縁部 40% 焼成やや軟質
580	J-5 包含層 3層	土師器	甕	口径：(18.6) 器高：(6.7)	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外上方へ伸びる。端部は丸くおさめる。	内・外：ナデ	1～3㎜の石英・長石	内・外：7.5YR5/6 明褐色	口縁部 20%
581	2区 包含層 3層上層	土師器	甕	口径：(11.6) 器高：(3.9)	口縁部は外上方へ伸び、端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ 外：ナデ後ハケ	1～2㎜の長石・石英	内：10YR5/4 にぶい黄褐色 外：7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部 20% 外面に黒斑あり
582	G-5 包含層 3層	土師器	高杯	口径：(14.7) 底径：9.5 器高：10.6	「ハ」の字状の裾から直線的に内傾する脚柱部。裾端部はやや丸くおさめる。杯部は平底から大きく外傾する口体部。端部はやや丸くおさめる。	内：杯部ヨコナデ後ミガキ、柱状部ユビナデ、裾部ヨコナデ 外：杯部ミガ（縦）、柱状部ミガキ（縦）後ミガキ（横）、裾部ヨコナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：5YR5/6 明赤褐色～7.5YR6/4 にぶい橙色	70% 透孔なし 焼成軟質
583	I-3 包含層 3層	土師器	高杯	口径：13.7 底径：9.6 器高：11.8	「ハ」の字状の裾部から、なだらかに内傾して立ち上がる脚柱部。裾端部は下方に面をもつ。杯部は平底から丸みをもちながら外方に立ち上がり、口縁部につづく。端部はやや面をもつ。	内：杯部ナデ、柱状部ナデ、裾部ヨコナデ 外：杯部ナデ、柱状部ナデ（縦）、裾部ヨコナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：5YR6/8 橙色～5YR5/8 明赤褐色	70% 透かしなし 内外面とも磨滅 焼成軟質
584	J-5 包含層 3層	土師器	高杯	口径：(14.6) 器高：(9.9)	体部は中央がやや窪む底部から、外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR7/4 にぶい黄褐色	杯（60%）～柱状部（完形） 外面に黒斑あり 焼成やや軟質
585	L-2 包含層 3層	土師器	高杯	口径：(16.3) 器高：(8.9)	中央が凸気味の底部から外上方へ伸びる口縁部。端部は丸くおさめる。	内：ナデ 外：ハケ	1㎜以下の石英・長石	内：5Y6/6 橙色 外：5YR5/4 にぶい褐色	杯（20%）～柱状部（完形） 焼成やや軟質
586	J-4 包含層 3層	土師器	高杯	口径：14.9 器高：(5.2)	中央部が凸のやや平底から丸みをもちながら立ち上がる口体部。口縁端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ、一部ハケ 外：ハケ後ナデ	4㎜以下の長石・石英、1㎜以下の雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR3/1 黒褐色 外：5YR6/6 橙色～7.5YR3/1 黒褐色	杯部 80% 外面に黒斑あり
587	J-5 包含層 3層	土師器	高杯	口径：14.7 器高：(5.7)	杯部は平底から丸みをもちながら立ち上がる、口縁端部はやや外湾する	内：口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、底部ハケ後ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ・ユビオサエ	3㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内・外：10YR7/2 にぶい黄橙色	杯部完形
588	H-8 包含層 3層	土師器	高杯	口径：(15.8) 器高：(6.3)	平底から丸みを持ちながら立ち上がる体部。端部は丸くおさめる。	内：杯部ヨコナデ後ミガキ（縦） 外：杯部ハケ（縦）後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内・外：10YR7/2 にぶい黄橙色	杯部 60% 黒斑あり 焼成やや軟質
589	K-4 包含層 3層	土師器	高杯	口径：13.6 器高：(5.7)	杯部は平底から丸みをもち、口縁端部付近でやや直立に立ち上がる。	内：口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、底部ハケ後ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ	2㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内：7.5Y6/4 にぶい橙色 外：5YR6/4 にぶい橙色	杯部ほぼ完形
590	J-5 包含層 3層	土師器	高杯	口径：(14.3) 器高：(4.9)	平底から、浅く丸みを持ちながら立ち上がり口縁部につづく。端部は丸くおさめる。	内・外：口縁部ヨコナデ、底部ユビオサエ、ナデ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：5YR8/4 淡橙色 外：7.5YR7/4 にぶい橙色	杯部 25%
591	J-5 包含層 3層	土師器	高杯	口径：15.0 器高：(5.3)	浅く外湾しながら口縁部につづく。端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ、ナデ 外：口縁部ヨコナデ、底部タテナデ後ユビオサエ	3㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：10YR4/1 褐灰色 外：7.5YR7/4 にぶい橙色、10YR5/2 灰黄褐色	杯部 60% 黒斑あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
592	J-5 包含層 3 層	土師器	高杯	口径：13.7 器高：(8.4)	杯部は平底から丸みをもちながら立ち上がる、口縁端部はやや内湾する	内：口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、底部ハケ後ヨコナデ、脚部板ナデ 外：杯部ハケ後ヨコナデ・ユビオサエ、脚部ヘラミガキ	2 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：7.5YR7/4 にぶい橙色	杯部ほぼ完形
593	J-5 包含層 3 層	土師器	高杯	口径：(13.5) 器高：(4.5)	体部は中央部が凸の平底から丸みをもち立ち上がる。口縁部は短く直立する。端部は丸くおさめる。	内：ナデ 外：ヨコナデ、ハケ	1 ～ 2 ㎜の石英・長石	内・外：5YR5/6 明赤褐色	杯部 40%
594	K-4 包含層 3 層	土師器	高杯	口径：(22.2) 器高：(6.5)	杯部は外上方へ立ち上がり口縁端部は外反し面をもつ。	内：口縁部ユビオサエ後ヨコナデ、底部ハケ後ヘラミガキ 外：ハケ後ヨコナデ	2 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：5YR6/6 橙色	杯部 10%
595	K-4 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：9.0 器高：(2.5)	「ハ」の字状に広がる裾部。端部は丸くおさめる。	内・外：ナデ	1 ～ 2 ㎜の石英・長石	内・外：5YR6/6 橙色～ 10YR6/3 にぶい黄褐色	脚部完形 円形の透孔 2 方向
596	K-3 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(9.4) 器高：(6.6)	「ハ」の字状に広がる裾部から直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部外方に面あり。	内：ヘラケズリ、ハケ後ユビオサエ 外：ヘラミガキ、ナデ	2 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：5YR6/6 橙色	脚部 25% 焼成やや軟質 円形透孔 3 方向
597	I-4 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(9.4) 器高：(6.6)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：板ナデ後ユビナデ、ユビオサエ、ナデ 外：ヘラミガキ、ナデ	3 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：2.5YR6/8 橙色 外：2.5YR6/6 橙色	脚部 90% 円形透孔 2 方向
598	F-6 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(10.0) 器高：(7.1)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：ヘラケズリ、ナデ、ユビオサエ 外：ヘラミガキ、板ナデ後ナデ	5 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：5YR7/6 橙色	脚部 50% 円形透孔 3 方向
599	I-2,3 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(13.3) 器高：(5.2)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：ヘラケズリ、ユビオサエ、ハケ 外：ハケ、ナデ	1 ㎜以下の長石・赤褐色土粒・雲母	内：2.5YR7/8 橙色 外：5YR7/4 にぶい橙色	脚部 20% 円形透孔 3 方向
600	L-2 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：9.7 器高：(7.1)	「ハ」の字状に広がる裾部から屈曲し直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部はやや丸くおさめる。	内：柱状部ナデ、板ナデ、裾部板ナデ（横） 外：柱状部板ナデ（縦）、裾部ナデ	1 ㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：5YR6/6 橙色～ 10YR8/3 浅黄橙色	脚部 80% 円形透孔 2 方向
601	J-4 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(9.6) 器高：(6.7)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：ヘラナデ、ハケメ後ヨコナデ、ユビオサエ 外：ヘラミガキ、ナデ、ユビオサエ	2 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒	内・外：7.5YR7/4 にぶい橙色	脚部 25% 円形透孔 2 方向
602	K-4 包含層 3 層（炭化物層内）	土師器	高杯	底径：(9.2) 器高：(7.2)	「ハ」の字状にひろがる裾部から、緩やかに屈曲し脚柱部につづく。裾端部は面をもつ。	内：ハケ後ナデ 外：ナデ一部面取り	1 ～ 2 ㎜の石英・長石	内・外：7.5YR6/6 橙色	脚（20%）～柱状部（完形） 円形の透孔 2 方向
603	H-8 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(11.3) 器高：(8.3)	「ハ」の字状に広がる裾部。直線的に内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ユビナデ、ハケメ 外：柱状部ミガキ（縦）、裾部ナデ	1 ㎜以下の長石・石英・雲母	内：5YR6/6 橙色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	脚部 40% 円形透孔 3 方残 焼成やや軟質
604	F-5 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(9.6) 器高：(6.7)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は丸く収める。	内：ヘラナデ、ユビオサエ、ナデ 外：ヘラミガキ、ヨコナデ	2 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：5YR6/6 橙色	脚部 50% 焼成やや軟質 円形透孔 2 方向（1 個残）
605	G-5 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(13.3) 器高：(8.5)	「ハ」の字状の裾部から、なだらかに内湾しながら上方にのびる脚柱部。裾端部は面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部板ナデ後ナデ 外：柱状部板ナデ（縦）、裾部ヨコナデ	1 ㎜以下の長石・石英・雲母	内：7.5YR6/4 にぶい橙色 外：10YR8/2 灰白色、5YR6/6 橙色	脚部 60% 円形透孔 3 方向（2 方向残）
606	K-4 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(14.0) 器高：(3.3)	「ハ」の字状に広がる裾部から緩やかに屈曲し脚柱部につづく。裾端部は面をもつ。	内・外：ナデ	密	内：5Y5/6 明赤褐色 外：5Y4/4 にぶい赤褐色	脚部 40% 円形透孔 1 方残
607	J-2 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：14.8 器高：(9.1)	「ハ」の字状の裾から直線的に内傾する脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：柱状部ケズリ、裾部ハケ 外：柱状部ミガキ（縦）、裾部ナデ	2 ㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	脚部 60% 円形透孔 3 方向 焼成やや軟質
608	I-4 包含層 3 層	土師器	高杯	底径：(10.7) 器高：(5.3)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は丸く収める。	内：ヨコナデ、ユビオサエ 外：ヘラミガキ、ヨコナデ	2 ㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒	内：5YR6/4 にぶい橙色 外：5YR6/6 橙色	脚部 25% 焼成やや軟質

遺物番号	遺構層位	種類	器形	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
609	F-6 包含層 3層	土師器	高杯	底径：(11.0) 器高：(7.6)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は丸く収める。	内：ヘラケズリ後ナデ 外：ハケ後ナデ	5㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色	脚部25%
610	G-4 包含層 3層	土師器	高杯	底径：(15.0) 器高：(8.6)	「ハ」の字状に広がる裾部から、直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は外方に面をもつ。	内：ヘラケズリ、ユビオサエ、ハケ後ナデ 外：ヘラミガキ後ハケ、ナデ	2㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内・外：5YR6/6橙色	脚部25%
611	G-4 包含層 3層	土師器	高杯	底径：9.8 器高：(6.1)	「ハ」の字状に広がる裾部から直立気味に立ち上がる脚柱部。裾端部は丸く収める。	内：ユビオサエ、ヨコナデ 外：ヘラミガキ、ヨコナデ	5㎜以下の石英・長石・赤褐色土粒・雲母	内：2.5YR6/8橙色 外：5YR6/8橙色	脚部90% 焼成やや軟質 透かしなし
612	J-5 包含層 3層	土師器	高杯	底径：(9.4) 器高：(7.6)	「ハ」の字状にひろがる裾部から緩やかに屈曲し脚柱部につづく。端部は面をもつ。	内：ケズリ、ナデ、ハケ、ユビオサエ 外：ハケ、ナデ	密	内・外：7.5YR6/6橙色	脚部60% 透孔なし
613	L-2 包含層 3層	土師器	高杯	底径：(9.8) 器高：(6.9)	「ハ」の字状の裾部から、内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は面をもつ。	内：柱状部ナデ、裾部ナデ 外：柱状部ミガキ（縦後横）、裾部ミガキ（横）	微粒の長石・雲母	内：7.5YR5/3～5YR 6/4にぶい橙色 外：10YR6/3にぶい黄橙色～5YR 6/4にぶい橙色	脚部60% 透孔なし
614	I-2,3 包含層 3層	土師器	高杯	底径：(10.0) 器高：(4.7)	「ハ」の字状に広がる裾部、端部は外方に面あり。脚柱部中実。	内：ユビオサエ、ヨコナデ 外：ハケメ後ナデ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：5YR6/3にぶい橙色	脚部25% 透孔なし
615	2区 包含層 3層上層	土師器	杯	口径：(12.4) 器高：5.4	体部は丸みをもち、口縁部は直立する。端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ、板ナデ 外：ユビオサエ後ナデ、ケズリ	1～2㎜の石英・長石	内：10YR6/3にぶい黄褐色 外：10YR6/4にぶい黄褐色	口縁部20%
616	J-5 包含層 3層	土師器	杯	口径：(15.2) 器高：(3.9)	体部は丸みをもちながら立ち上がる。端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ、板ナデ 外：ナデ、ハケ、ユビオサエ	1㎜の石英・長石	内：10YR6/3にぶい黄褐色 外：7.5YR5/2灰褐色	口縁部30%
617	K-2 包含層 3層上層	土師器	杯	口径：(14.0) 器高：(3.8)	体部はやや丸みをもつ。口縁部はわずかに内傾し、端部は面をもつ。	内：ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ	1㎜以下の長石・クサリ礫	内：7.5YR5/6明橙色 外：10YR5/4にぶい黄褐色	口縁部20%
618	K-4 包含層 3層	土師器	杯	口径：(15.6) 器高：(4.1)	体部は丸みをもち、口縁部は短く直立する。端部は丸くおさめる。	内：ナデ 外：ナデ、ハケ	1～2㎜の石英・長石	内・外：7.5YR5/6明褐色	口縁部40%
619	2区 包含層 3層上面	土師器	杯	口径：12.6 器高：4.3	平底から丸みをもち口縁部へ続く。口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。	内・外：ヨコナデ、板ナデ	1～2㎜の長石・石英	内・外：10YR6/3にぶい黄褐色	40% 焼成軟質底部外面にヘラ記号
620	E-10 包含層 3層	須恵器	壺	口径：(10.0) 器高：15.0	丸味をもつ底部から、肩を張る体部。口頸部は直線的に外方に広がり、端部は尖る。	内：ヨコナデ 外：ナデ、口縁・肩部凸帯間に波状文1条	微粒の長石	内：N3/暗灰色 外：7.5Y2/1黒色	50% 肩部に灰かぶり
621	J,K-2 包含層 3層上層	須恵器	壺	口径：(14.4) 器高：(14.8)	体部は最大径を上部にもつ。頸部は強く屈曲し、口縁部は外上方へ伸びる。端部は面をもつ。	内：回転ナデ 外：口縁部回転ナデ、体部列点文、沈線、波状文、タタキ	1～2㎜の石英・長石	内：5Y6/1灰色 外：5Y5/1灰色	口縁部・体部が部分的に残る 内面に自然釉がかかる
622	J-6 包含層 3層	須恵器	甕	口径：(15.8) 器高：(7.7)	肩の張る体部から、屈曲し外湾しながら外方にのびる口縁部。端部は上方に面をもち凹む。	内：口縁部回転ナデ、体部ユビオサエ 外：口縁部回転ナデ、体部タタキ後回転ナデ	密	内・外：N6/灰色	口縁～体部30% 焼成やや軟質
623	J-4 包含層 3層上層	須恵器	高杯	底径：(11.4) 器高：(1.5)	なだらかに広がる体部、脚端部はつまみあげる。	内・外：回転ナデ	1㎜以下の長石・黒色粒	内：7.5YR5/3にぶい褐色 外：N6/灰色	脚部10%以下
624	H-8 包含層 3層	弥生土器	壺	口径：(11.8) 底径：4.3 器高：15.2	中央部が凹む平底。下膨れ形の体部から、短く立ち上がる頸部、なだらかに外湾する口縁部。端部は外方に面をもつ。	内・外：ハケ後ナデ	4㎜以下の長石・石英	内：10YR8/2灰白色 外：5YR5/6明赤褐色～10YR8/1灰白色	80% 内面に黒斑あり 内外面に接合痕あり
625	J-6 包含層 3層	弥生土器	甕・鉢	底径：3.7 器高：(3.4)	体部は平底から外上方へ伸びる。	内：ユビナデ 外：タタキ、ナデ	1～3㎜の石英・長石	内：10YR5/3にぶい黄褐色 外：5YR4/4にぶい赤褐色	底部完形
626	I-4 包含層 3層	弥生土器	甕・鉢	底径：3.4 器高：(4.9)	体部は平底から外上方へ伸びる。	内：ナデ 外：タタキ、ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/2灰黄色	底部完形 底部外面に籾圧痕あり
627	5区 包含層 3層 （側溝）	土師器	手づくね土器	口径：3.4 器高：1.3	口縁端部はやや直立気味にのび、丸くおさめる。	内：ユビオサエ 外：ユビオサエ、ユビオサエ後ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：10YR7/3にぶい黄橙色	完形

長田遺跡１次調査出土石製品観察表

遺物番号	遺構 層位	種類	石材	法量				備考
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
29	7区 砂層（河道）	敲石	安山岩？	10.4	2.0	3.1	88.0	完形
30	8区 砂層（河道）	石皿	砂岩	28.3	(15.1)	10.4	4800.0	約50% 全面（割れ口を含む）煤付着 敲打痕あり
87	8区 河道下層	ガラス玉	ガラス	0.15	0.35	0.15	1.0以下	完形 孔径0.1cm
88	8区 河道下層	石鏃	サヌカイト	4.1	1.6	0.25～ 0.45	4.0	完形 凸基有茎式
89	8区 河道下層	石鏃未製品	サヌカイト	4.0	3.5	1.0	14.0	完形 一部自然面が残る
90	8区北 河道下層	削器	サヌカイト	4.6	5.1	0.6	14.0	完形 一部自然面が残る
91	8区 河道下層	剥片	サヌカイト	(6.5)	2.5	0.7	8.0	先端欠損
96	H-7 水田	石包丁 （未製品）	緑泥片岩	(8.3)	(15.3)	(1.1)	148.0	裏面全体剥離 紐孔無か 片面に刃部が残る
174	F-8 SH-08 1区周壁溝	砥石	凝灰岩	(3.8)	1.5	1.5	24.0	先端欠損 4面使用 2.5Y7/2灰黄色
201	H-2 SH-11最上層	磨石	砂岩	8.5	4.8	2.9	184.0	完形 一部敲石として利用
203	H-2 SH-11最下層	石棒未製品？	片岩	6.1	3.0	1.0～1.4	27.0	完形
202	H-2 SH-11最下層	石棒未製品？	片岩	6.7	3.8	1.2～2.1	55.0	先端欠損
240	F-12 大河道 斜面1層	鉄族	－	11.9	1.0	0.2～0.5	9.0	完形 基部に紐が巻かれていた痕跡あり
340	D-10 大河道 斜面3層	石包丁	緑泥片岩	4.4	(10.5)	0.5～0.6	49.0	刃部欠損 内彎刃半月形態 片刃 紐孔2箇所 表面使用による擦過痕
341	G-11 大河道 斜面3層	砥石	泥岩	(6.0)	4.8	3.0	144.0	両端欠損 4面使用 一部敲石として使用 被熱を受けている 5YR6/3にぶい橙色（被熱部分） 2.5YR7/2灰黄色
342	E-11 大河道 斜面3層	不明	砂岩	7.6	(5.1)	1.2～2.6	166.0	約30% 敲打痕あり
387	E-11 大河道 斜面4層	石皿	砂岩	24.1	20.9	9.6	7000.0	完形 敲打痕・研磨痕あり
388	F-12 大河道 斜面4層 下層	砥石	砂岩	(3.5)	2.9	1.0	24.0	両端欠損 4面使用 5Y8/1灰白色
389	J-6 SD-02 1区	石錐	サヌカイト	(3.9)	2.4	0.4～0.6	3.0	基部欠損 一部に表皮残存
412	2区 包含層1層	砥石	砂岩	(5.0)	7.8	4.7	300.0	先端欠損 4面使用 一部敲石として使用 5Y8/1灰白色
413	5区 包含層1層	砥石	緑泥片岩	(13.0)	(5.9)	2.8	515.0	両端欠損 3面使用 一部敲石として使用 5BG5/1青灰色
414	4区 包含層1層	石札	滑石	4.3	2.2	0.70	14.0	ほぼ完形 表面磨きによる擦過痕
415	6区 包含層1層	円板	滑石	2.3	2.4	0.3	4.0	完形 穿孔2箇所 表面磨きによる擦過痕
629	L-2 包含層3層 （炭化物層内）	臼玉	滑石	(1.3)	0.45	0.15～0.2	1.0以下	完形 孔径0.15cm
630	L-3 包含層3層	臼玉	滑石	(0.3)	0.45	0.15	1.0以下	破片 孔径0.1cm

遺物番号	遺構層位	種類	石材	法量				備考
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
631	K-4 包含層3層 （炭化物層内）	勾玉	滑石	2.4	1.1	0.6	3.0	完形 表面磨きによる擦過痕
632	G-6 包含層3層 （炭化物層内）	勾玉	滑石	2.0	0.6	0.4	2.0	完形 穿孔2箇所、内1箇所は未貫通
633	G-6 包含層3層 （炭化物層内）	管玉	滑石	2.3	0.35	0.10	1.0以下	完形 孔径0.15cm
634	H-6 包含層3層	管玉	滑石	2.6	0.45	0.15～0.2	1.0	完形 孔径0.15cm
635	K-2 包含層3層上層	円板	滑石	1.9	2.2	0.1～2.25	2.0	ほぼ完形 穿孔2箇所 表面磨きによる擦過痕
636	H-5 包含層3層	円板	滑石	2.1	2.4	0.5	5.0	ほぼ完形 穿孔2箇所 表面磨きによる擦過痕
637	G-5 包含層3層	磨製石斧	粘板岩系	(9.3)	(6.7)	(2.3)	176.0	1面残存 敲打痕あり
638	J・K-2 包含層3層	石包丁 （未製品？）	緑泥片岩	(8.8)	(6.7)	(1.4)	97.0	約40% 片面に刃部が残る
639	K-2 包含層3層	砥石	流紋岩	(9.2)	(6.5)	(2.8)	204.0	2面残存 1面使用 畝傍山産？ 側面を打ち欠く
640	3区 包含層3層上面	砥石	砂岩	(6.0)	5.9	2.9	178.0	先端欠損 4面使用 2.5Y6/2黄灰色
641	L-2 包含層3層	砥石	粘板岩	(12.5)	3.0	2.1	144.0	3面残存 2面使用 石斧を転用か N5/灰色
642	1区南 包含層3 （側溝）	磨石	砂岩	8.8	9.9	3.2	476.0	完形 敲石・砥石としても使用 側面周辺に敲打痕 10YR4/1灰色
643	J-3 包含層3層	石皿	安山岩？	(8.7)	(9.0)	7.9	965.0	両端欠損 両面に敲打痕あり 10Y8/1灰白色 一部N5/灰色、N3/暗灰色が斑状に入る
644	2区 包含層3層 （側溝）	石皿	砂岩	(7.4)	(11.1)	2.5	330.0	約50% 表面一部に凹み 敲打痕あり
645	3区 包含層3層上層	不明	砂岩	8.0	5.5	3.3	176.0	
646	H-3 包含層3層	不明	安山岩？	22.2	11.9	2.1～5.0	1700.0	3面に使用による磨き？

長田遺跡1次調査出土木製品観察表

遺物番号	遺構・層位	種類	法量			器形・技法の特徴	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）		
27	7区 砂層（河道）	杭	(26.2)	5.0	5.0	先端部を面取り	先端部
28	7区 砂層（河道）	下駄	25.3	8.8	1.0～5.5	残存長より男性用 前緒孔の位置より左足用	ほぼ完形
85	C-11 SD-01下層	発火具	13.4	1.2	1.1	両端部に焼け痕	先端欠損
86	7区南 河道下層	不明	(12.6)	2.3～5.4	2.2～4.4	基部を丁寧に加工	先端部 儀杖状製品グリップ部か。
149	J-5 SH-05,06 4区西SP	不明	(18.6)	3.0	1.9	先端部を面取り 先端に焼成痕あり	先端部
150	J-5 SH-05,06 4区西SP	木錘	14.1	6.7	7.6	鼓形 全体に加工痕あり	約50%
151	J-4,5 SH-05,06 4区	発火具	10.8	0.7～1.1	0.6～1.0	両端部に二次焼成痕あり	完形

遺物番号	遺構・層位	種類	法量			器形・技法の特徴	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）		
239	7,8区 大河道斜面1層	竪杵	(45.3)	8.4	7.2	一端に使用痕	50%
263	D-12 大河道斜面2層	竪杵	55.6	9.3	0.7～5.7	全体に加工痕あり 一端に使用痕 焼成痕あり	50%
339	E-10 大河道斜面3層	不明	(12.7)	2.2～3.9	1.3～2.5	棒状 基部を加工	有頭棒先端部
628	I-6 包含層3層	下駄	24.2	10.2	0.1～0.7	残存長より男性用 前緒孔の位置より右足用	ほぼ完形

長田遺跡1次調査出土土製品観察表

遺物番号	遺構・層位	種類	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
68	8区 河道 下層砂層	鞴羽口	径：(4.7) 孔径：1.9 器高：(9.4) 厚：1.8	破片のため不明	内・外：ナデ	3㎜以下の石英・長石・雲母・褐色土粒	内：10YR7/2にぶい黄橙色、2.5YR5/8明赤褐色 外：5YR7/4にぶい橙色、2.5Y5/1黄灰色、N4/灰色	破片 外面に煤付着 焼成軟質 先端がガラス質に変容
70	J-6 河道 2区	土錘	長：2.2 幅：1.3 重：3.0(g)	表面凹凸	外：ナデ	1㎜以下の長石・雲母	内・外：10YR6/2灰黄褐色	完形 接合痕あり
148	J-4 SH-5・6 1区 （炭堆積）	支脚	器高：14.6	裾部欠損のため詳細不明	外:ユビオサエ・ナデ	1～2㎜の長石・雲母	外：10YR6/3にぶい黄橙色	脚部下端一部欠損
196	H-3 SH-11 4区	鞴羽口	径：不明 孔径：不明 器高：(7.9) 厚：1.2	破片のため不明	内・外：ナデ	1～2㎜の長石・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：2.5Y5/1黄灰色	破片 少量煤付着
200	H-3 SH-11 4区	鞴羽口	径：不明 孔径：不明 器高：(7.9) 厚：1.2	破片のため不明	内・外：ナデ	1～2㎜の長石・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：2.5Y5/1黄灰色	破片 少量煤付着
405	3区 包含層1層	円板	長径：4.0 短径：3.4	外形を打ち欠く	内：ヘラケズリ 外：ナデ	1㎜以下の石英・長石・黒色砂粒	内：10YR8/2灰白色 外：2.5Y6/1灰黄色	完形 土師器片の二次利用？ 断面の磨滅が著しい 焼成やや軟質
406	6区 包含層1層	円板	長径：3.7 短径：3.2	外形を打ち欠く	内・外：ナデ	1㎜以下の石英・長石	内：N5/灰色 外：2.5Y6/1黄灰色	完形 瓦質土器または瓦片の二次利用？ 表面・断面の磨滅が特に著しい 使用頻度高い？ 焼成軟質
407	8区 包含層1層	円板	長径：4.4 短径：4.2	外形を打ち欠く	内・外：ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：5Y7/1灰白色 外：2.5Y6/2灰黄色	完形 土師器の二次利用？ 表面に擦痕あり 表面・断面の磨滅著しい 円形近くまで打ち欠いた後、使用によりローリングを受けたと思われる
408	3区 包含層1層	円板	長径：3.3 短径：3.1	外形を打ち欠く	ナデ	1㎜以下の石英・長石	内：N4/灰色 外：N3/暗灰色	完形 瓦質土器の二次利用？ 断面の磨滅が著しい 焼成軟質
409	1区 包含層1層	円板	長径：3.6 短径：3.3	外形を打ち欠く	回転ナデ	1㎜以下の長石	内：10YR4/1褐灰色 外：10YR3/1黒褐色	完形 須恵器片の二次利用？

長田遺跡3次調査出土遺物観察表

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
647	1区 SD-01 砂層	土師器	鍋	底径：6.4 器高：(7.8)	体部は平底から丸みをおびて立ち上がる。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ヨコハケ（5～7本/cm）	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR5/1褐灰～10YR5/2灰黄褐	底部70% 内外面に煤付着 韓式土器か
648	1区 SD-01 砂層	土師器	鍋	底径：7.0 器高：(6.0)	体部は平底から丸みをおびて立ち上がる。	内：ハケ後ナデ 外：タテハケ（6本/cm）、(3～4本/cm）	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR5/1褐灰～10YR5/2灰黄褐	底部70% 韓式土器か
649	1区 SD-01 砂層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(9.3) 幅：(8.2) 把手径：3.9～4.6	断面楕円形。切込みを有す。	内：ナデ 外：ハケ、ユビオサエ	2㎜以下の石英・長石	内・外：10YR7/2にぶい黄橙～7.5YR7/3にぶい橙	把手
650	1区 SD-01 砂層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(5.7) 幅：(7.0) 把手径：3.4	断面ほぼ円形。	内：板ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：2.5Y5/1黄灰 外：7.5YR5/3にぶい褐	把手

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
651	1区 SD-01 砂層	土師器	高杯	口径：(18.1) 器高：(5.5)	底～口縁部は大きく広がって立ち上がって緩やかに屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。	内：ナデ、ハケ 外：ハケ後ナデ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内：10YR8/2 灰白色～10YR7/2 にぶい黄橙色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色～5YR6/6 橙色	杯部 70%
652	1区 SD-01 砂層	土師器	高杯	底径：11. 器高：(7.5)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は丸くおさめる。	内：板ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ヘラミガキ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：7.5YR6/6 橙色～7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部完形 透孔なし
653	1tr SD-01 砂層	土師器	高杯	底径：18.5 器高：(5.3)	「ハ」の字状の裾部から、内上方へ直線的に伸びる。裾端部はやや尖り気味におさめる。	内：ナデ、ハケメ 外：板ナデ後ナデ、ヨコナデ	1㎜以下の石英・長石	内・外：5YR5/6 明赤褐色	脚部完形 焼成軟質 透孔3方残
654	1区 SD-01 砂層	須恵器	杯蓋	口径：14.8 器高：4.7	全体に丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	1㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：N7/ 灰色	70%
655	1区 SD-01 砂層	須恵器	杯蓋	口径：(13.6) 器高：4.4	全体に丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：N4/ 灰色	70%
656	1区 SD-01 砂層	須恵器	杯蓋	口径：(11.8) 器高：4.2	全体に丸みをもち、口縁部はやや内向する。端部は丸くおさめる。外面上部に工具圧痕あり。	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	1㎜の石英・長石	内・外：N3/ 暗灰色～N4/ 灰色	70%
657	1区 SD-01 砂層	須恵器	杯身	口径：12.2 器高：3.9	全体に丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	1～2㎜の石英・長石	内・外：N3/ 暗灰色～N4/ 灰色	ほぼ完形
658	1区 SD-01 砂層	須恵器	瓶	器高：(9.5)	体部は上位に最大径あり。最大径部分に円形の透孔があり、帯状に列点文が施される。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、列点文、回転ヘラケズリ	3㎜以下の石英・長石	内・外：N6/～5Y6/1 灰色	60% 頸部に沈線2条あり
659	1区 SD-01 砂層	須恵器	鉢	底径：8.7	底部に円盤状の底がつく。体部は直線的にのぼる。	内：回転ナデ 外：回転カキメ、回転ナデ	1～2㎜の石英・長石	内：N4/ 灰色 外：N3/ 暗灰色～N4/ 灰色	底部 70%
660	1tr SD-01 砂層上面	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(3.0)	平底から体部は直線的にのびる	内：棒状工具のナデ 外：板ナデ後ナデ、底部ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：2.5Y7/2 灰黄色～10YR6/6 明黄褐色 外：10YR8/3 浅黄橙色	底部 60% 外面に黒斑あり
661	1区 SD-01 砂層	石製品	敲石	長：8.4 幅：12.1 厚：9.5 重：1200.0(g)	大部分が欠けており、楕円形もしくは方形であったものが3分の1程度残ったものと思われる。4面の平坦面を持ち、それ以外の部分で敲打痕が認められる。	-	-	-	40% 安山岩 一部煤付着
662	1区 SD-01 砂層	石製品	敲石	長：15.1 幅：8.3 厚：5.8 重：1200.0(g)	方形の柱状を呈する。広い平坦面には上下2箇所ずつ敲打痕が認められる。	-	-	-	完形 砂岩
663	2区 SD-01 斜面 シルト層	韓式系土器	甕？	器高：(4.5)	破片のため詳細不明	内：ナデ、ケズリ 外：矢羽タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	体部片
664	2区 SD-01 斜面 シルト層	土師器	小型丸底壺	口径：(9.8) 器高：(4.9)	体部は丸みをもち、口縁部は頸部から屈曲して外上方へ立ち上がる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ・布ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR7/3 にぶい黄褐色、10YR4/1 褐灰色 外：10YR7/2 にぶい黄橙色、7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁～体部 20% 外面に黒斑あり
665	1区 SD-01 上層	土師器	ミニチュア土器 鍋か甑	器高：(3.4)	小型の把手部分。円錐状でほぼ水平にのびる。把手上面には約5㎜の切り込みあり。	内・外：ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：5YR6/8 橙色	把手 焼成やや軟質
666	1区 SD-01 上層	弥生土器	甕	器高：(2.8)	口縁は外反し、端部は外方に面を持ち刻目が施される。	内：ナデ 外：ナデ、刻目	2㎜以下の石英・長石	内・外：10YR6/3 にぶい黄橙色	口縁部片
667	1区 SD-01 上層	弥生土器	広口壺	器高：(2.4)	口縁端部は垂下して竹管文が4点みられる	内：ナデ 外：ナデ、竹管文	3㎜以下の石英・長石・角閃石	内：10YR5/4 にぶい黄褐色 外：10YR5/4 にぶい黄褐色、2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁部片
668	1区 SD-01 上層	弥生土器	広口壺	器高：(2.6)	口縁端部は垂下する。	内・外：ナデ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：10YR6/6 明赤褐色	口縁部片

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
669	1区 SD-01 上層	土師器	高杯	口径：(21.4) 器高：(5.6)	口縁部下部には段がつき、屈曲して体部と接する。口縁端部は外反して外方に面をもつ。	内・外：ナデ後ミガキ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内：5YR6/6 橙色 外：5YR5/6 明赤褐色	口縁部 15% 外面に煤付着 焼成やや軟質
670	1区 SD-01 上層	石製品	石鏃	長：2.8 幅：1.8 厚：0.4 重：2.0（g）	石鏃未成品か。側辺は二等辺三角形を呈する。基部は未調整。	-	-	-	完形 サヌカイト
671	1区 SD-01 上層	石製品	石鏃	長：2.3 幅：2.0 厚：0.3 重：2.0（g）	石鏃未成品か。側辺は二等辺三角形を呈する。基部は未調整。	-	-	-	完形 サヌカイト
672	1区 SD-01 下層	土師器	甑	底径：(10.5) 器高：(4.6)	底部に孔を穿つ。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ、ハケ（7本／cm）	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR5/3 にぶい黄橙色	底部 40%
673	1区 SD-01 下層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(7.3) 幅：(7.5) 把手径：2.9～5.1	断面いびつな楕円形。	内：ヨコナデ 外：ハケ、ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/2～7/2 灰黄色	把手
674	1区 SD-01 下層	土師器	小型丸底壺	口径：(10.1) 器高：6.9	半球状の体部に直線的に開く口縁がつく。	内：ナデ、板ナデ 外：ナデ後ミガキ	密	内：10Y3/1 オリーブ黒 外：2.5Y6/2 灰黄	80%
675	1区 SD-01 下層	土師器	甕	口径：(15.2) 器高：(4.5)	口縁部は肩部より内傾して立ち上がり、屈曲して外反して広がる。端部は外方に面を持つ。	内：ナデ 外：ナデ、ハケ後ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁部 30%
676	1区 SD-01 下層	土師器	甕	口径：(13.6) 器高：(9.5)	体部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に屈曲し、外上方へ伸びる。端部は面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ・ハケメ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 40% 内面に接合痕あり
677	1区 SD-01 下層	土師器	甕	口径：(15.2) 器高：(6.3)	口縁部は「く」の字状に屈曲し、外上方へ伸びる。端部は直立し内下方に面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 30%
678	1区 SD-01 下層	土師器	甕	口径：(13.2) 器高：(6.2)	体部は丸みをもつ。口縁部は緩やかに屈曲し、外上方へ伸びる。端部は丸く納める。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 30%
679	1区 SD-01 下層	土師器	甕	器高：(4.7)	丸みを持って広がる。頸部は屈曲する。	内：ナデ、ケズリ 外：タテハケメ後ヨコハケ（4～6本／cm）	1～2㎜の石英・長石	内・外：7.5Y5/4 にぶい褐色	頸～体部片
680	1区 SD-01 下層	土師器	甕	底径：4.6 器高：(2.5)	底部は中央がやや窪む。	内：ナデ、板ナデ 外：ナデ、ユビオサエ、底部ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	底部 60%
681	1区 SD-01 斜面	土師器	高杯	口径：(13.1) 器高：(5.5)	杯部は椀形で、端部は丸くおさめる。	内：ヘラミガキ 外：ナデ、ケズリ	1㎜の石英・長石	内・外：5Y6/6 橙色	杯部 40% 焼成やや軟質
682	1区 SD-01 下層	土師器	高杯	口径：16.1 器高：(5.9)	杯底部から斜め上方へのび、杯下部でゆるやかに折れてやや内湾してのびる。口縁端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ 外：ハケ後ヨコナデ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y4/1 黄灰色	杯部 90%
683	1区 SD-01 下層	土師器	高杯	底径：(11.0) 器高：(7.6)	「ハ」の字状の裾部から内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部はやや尖り気味に終わる。	内：ナデ、ケズリ 外：ナデ、ケズリ、面取り	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	脚部 30% 透かしなし
684	1区 SD-01 下層	土師器	高杯	底径：(13.0) 器高：(8.4)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部はやや尖り気味に終わる。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ	1㎜の石英・長石	内・外：7.5YR5/6 明褐色～5YR5/6 明赤褐色	脚部 40%
685	1区 SD-01 下層	土師器	高杯	底径：10.1 器高：(6.4)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は内傾する面をもつ。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ、面取り	1㎜の石英・長石	内・外：10YR5/3 にぶい黄褐色	脚部 40% 透かしなし
686	1区 SD-01 下層	土師器	高杯	底径：(11.2) 器高：(8.1)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は内傾する面をもつ。	内：ユビナデ 外：板ナデ、面取り、ナデ	1㎜の石英・長石	内・外：7.5YR6/6 橙色	脚部 40% 透かしなし 焼成やや軟質

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
687	1区 SD-01 下層	土師器	器台	底径：(12.8) 器高：(4.9)	「ハ」の字状の裾部から、内上方へ直線的に伸びる。端部は丸くおさめる。	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/4 にぶい黄褐色	脚部 20% 透かしあり
688	1区 SD-01 下層	土師器	鉢	底径：(10.4) 器高：(5.2)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は面をもつ。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内：10YR5/3 にぶい黄褐色 外：7.5YR4/2 灰褐色	脚部 30% 透かしなし
689	1区 SD-01 下層	土師器	器台	底径：9.0 器高：(4.4)	「ハ」の字状の裾部から、屈曲し内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部は丸くおさめる。	内：ナデ 外：ミガキ、ユビオサエ、面取り	1㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：10YR6/3 にぶい褐色	脚部 40% 透かしなし
690	1区 SD-01 下層	土師器	杯	口径：(10.1) 器高：6.12	底部は球状で口縁はやや内湾して上方にのびる。	内：ナデ、板ナデ 外：ナデ	密	内：10Y3/1 オリーブ黒 外：2.5Y6/5 灰黄	80% 内面に黒斑
691	1区 SD-01 下層	土師器	台付鉢	器高：(5.8)	体部は内湾し、丸みをもつ。脚部は「ハ」の字状に広がる。	内：ケズリ、一部沈線 外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	体～柱状部 40%
692	1区 SD-01 下層	土師器	ミニチュア土器甕	口径：(3.3) 器高：4.0	底部は平底で、体部は緩やかに広がり、最大径は上位にある。口縁部は肩部から屈曲して直立する。	内・外：ナデ、ユビオサエ	1㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/3 にぶい褐色	60% 外面に黒斑あり 内外面に接合痕あり
693	1区 SD-01 下層	須恵器	高杯	底径：(10.5) 器高：(4.4)	「ハ」の字状の裾部から内傾しながら立ち上がる脚柱部。裾端部はやや尖り気味に終わる。	内・外：回転ナデ	1㎜の長石	内・外：5Y6/1 灰色	脚部 20%
694	1区 SD-01 下層	弥生土器	長頸壺	口径：(14.0) 器高：(11.3)	口縁部は直線的に広がり、端部は内面側に屈曲し、丸く収まる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ後板ナデ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5YR6/3 にぶい黄色	口縁部 20%
695	1区 SD-01 下層	弥生土器	長頸壺	口径：(11.0) 器高：(9.1)	口縁部はゆるやかに外反して広がる。端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ 外：ハケ（縦）	1～2㎜の石英・長石	内：2.5Y6/2 灰黄色 外：2.5Y6/1 黄灰色	口縁部 20% 外面に煤付着 内面に接合痕あり
696	1区 SD-01 下層	弥生土器	甕	底径：(7.6) 器高：(3.3)	底部は平底で直立した後屈曲して広がる。	内・外：ナデ	2～3㎜の石英・長石	内：2.5YR4/1 黄灰色 外：5YR4/3 褐色	底部 20% 底部外面に籾圧痕あり
697	2区 SD-02 上層	土師器	甕？	器高：(3.5)	破片のため詳細不明	内：ナデ、ケズリ 外：矢羽根タタキ	1㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	体部片
698	2区 SD-02 上層	土師器	甕？	器高：(2.0)	破片のため詳細不明	内：ナデ、ケズリ 外：矢羽根タタキ	1㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色～7.5YR5/3 にぶい褐色	体部片
699	2区 SD-02 上層	土師器	小型丸底壺	口径：8.7 器高：8.5	底～体部は球体を呈す。口縁部は「く」の字状に屈曲し外上方へ直線的に立ち上がる。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ 外：口縁～体部上半ハケ、下半ケズリ後ナデ	1㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5YR5/6 明赤褐色、5YR6/6 褐色 外：2.5YR5/6 明赤褐色、7.5YR4/2 灰褐色	90% 焼成やや軟質
700	2区 SD-02 上層	土師器	小型丸底壺	口径：8.8 器高：7.9	半球状の体部に直線的に開く口縁がつく。	内：ナデ、板ナデ 外：ナデ、ヘラケズリ	2㎜以下の長石・石英	内：7.5YR6/6 橙 外：7.5YR7/4 にぶい橙	95%
701	2区 SD-02 上層	土師器	小型壺	底径：2.7 器高：(8.1)	卵型の体部で平底をもつ。	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の長石・石英	内・外：10YR6/2 灰黄褐	80%
702	2区 SD-02 上層	土師器	甕	口径：(13.4) 器高：(7.3)	体部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に屈曲し、外上方へ伸びる。端部は上方につまみあげる。	内・外：ナデ	1～3㎜の石英・長石	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁～体部 20% 内面に接合痕あり
703	2区 SD-02 上層	土師器	甕	口径：(14.8) 器高：(6.4)	口縁部は「く」の字状に屈曲し、外上方へ伸びる。端部は丸みをもち、内側にやや肥厚する。	内：口縁部ハケのちナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本／cm）	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/4 にぶい黄褐色	口縁～体部 20%
704	2区 SD-02 上層	土師器	高杯	底径：10.8 器高：(6.6)	脚端部は外方に面を持つ。斜め上方にのびた後、屈曲して脚柱部へつづく。	内：ナデ 外：板ナデ後ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：5YR6/6 橙色～7.5YR6/4 にぶい橙色 外：5YR6/4 にぶい橙色	脚部 70%
705	2区 SD-02 上層	石製品	石鏃	長：1.8 幅：1.5 厚：0.2 重：2.0（g）	石鏃未成品か。側辺は直線的で、基部はU字型の抉りが入る。	-	-	-	完形 サヌカイト

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
706	4区 SD-03 シルト (2層)	土師器	壺	口径：12.1 器高：(7.9)	口縁部は直立して立ち上がり、外反して外方に面を持つ。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR7/2にぶい黄褐色 外：10YR6/2灰黄褐色、10YR5/1褐灰色	口縁部60%
707	4区 SD-03 砂層 (4層)	土師器	長頸壺	口径：(15.8) 器高：(8.1)	口縁部は直立した後外反し、外面に端面をもつ。	内：ナデ、ヘラミガキ 外：ヘラミガキ、ナデ	密	内：5YR5/3にぶい赤褐色 外：7.5YR7/3にぶい褐色	口縁部20%
708	4区 SD-03 シルト層 (3層)	土師器	甕	器高：(3.5)	外面に列点文が施される。	内：ヨコナデ、ハケメ 外：ヨコナデ、ヨコナデ後列点文、タタキ後ハケメ・板ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/2～6/3にぶい黄褐色 外：10YR6/2灰黄褐色、10YR5/1褐灰色	頸～体部片 内面に接合痕あり
709	3・4区 SD-03 側溝	土師器	不明	底径：3.9 器高：(2.2)	平底。	内：ナデ 外：ナデ・板ナデ	1mm以下の石英・長石	内：5YR5/4にぶい赤褐色 外：7.5YR7/4にぶい橙色	底部60%
710	4区 SK-03 シルト (2層)	弥生土器	甕	口径：12.6 底径：2.8 器高：23.5	底部は平底で、安定が悪く立たない。体部は球体を呈し、体部最大径は中位にある。口縁部はやや外反して立ち上がり、端部は外側に肥厚する。	内：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部平行タタキ後ハケメ、底部ナデ	1mm前後の長石・雲母	内：10YR7/3にぶい黄褐色 外：7.5YR6/4にぶい橙色	完形 外面に煤付着 内面に炭化物付着 内外面に接合痕あり 弥生後期～庄内式期
711	4区 SD-03 シルト (2層)	土師器	甕	口径：(17.8) 器高：(6.2)	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は外方に面を持つ。	内：ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ・板ナデ	2mm以下の長石・石英、1mm以下の雲母	内：10YR6/3にぶい黄橙色 外：10YR5/3にぶい黄褐色、7.5YR5/3にぶい褐色	口縁部25%
712	2区 SD-03 シルト層 (2層)	土師器	不明	底径：5.3 器高：(2.4)	中央がやや窪む平底。	内：ナデ 外：ヨコナデ、底部板ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	内：10YR6/3にぶい黄褐色、2.5Y5/2暗灰黄色 外：10YR6/2灰黄褐色、10YR5/3にぶい黄褐色	底部70%
713	2区 SD-04	土師器	壺	底径：(4.7) 器高：(3.5)	平底。	内：ハケ 外：ハケ後ナデ、底部ナデ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/3にぶい黄色 外：2.5Y6/2灰黄色	底部30% 内面に黒斑あり
714	2区 SD-04 1層	土師器	甕	口径：(16.1) 器高：(4.3)	口縁は頸部から屈曲して立ち上がり、外反する。端部は丸くおさめる。	内：口縁部ヨコナデ、ハケ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ	3mm以下の長石・石英	内：2.5YR5/6明赤褐色 外：5YR6/6橙色、10YR5/3にぶい黄褐色	口縁部20% 外面に煤付着 内面に接合痕あり
715	2区 SD-04 2層	土師器	不明	底径：(5.1) 器高：(3.4)	中央がやや窪む平底。	内：板ナデ、ナデ 外：タタキ後ナデ、底部ナデ	2mm以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色 外：5YR5/3にぶい赤褐色、2.5Y6/2灰黄色	底部25% 外面に煤付着
716	2区 SD-04 2層	土師器	不明	底径：(4.0) 器高：(4.4)	平底。底面に穿孔。	内：ナデ 外：板ナデ、底部ナデ	1mm以下の長石・石英	内：7.5YR6/3にぶい褐色 外：5YR6/3にぶい橙色	底部40% 内面に煤付着 底面中央に径5mmの焼成前穿孔あり
717	2区 SD-04 1層	石製品	細片	長：2.8 幅：1.8 厚：0.4 重：2.3(g)	長方形の細片。断面は三角形を呈する。	-	-	-	剥片 サヌカイト
718	3区 SP-01	土師器	直口壺	口径：(14.2) 器高：(7.2)	口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。端部は丸く納める。	内：ハケ 外：ヨコナデ	1mm前後の長石・クサリ礫	内・外：5YR6/6橙色	口縁部30% 焼成やや軟質 布留式土器
719	3区 SP-01	土師器	甕	口径：(14.4) 器高：(11.0)	体部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に屈曲し外上方へ伸びる。端部は内傾する面をもち、内側に肥厚する。	内：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	1mm前後の長石・雲母	内・外：10YR7/4～6/3にぶい黄褐色	口縁～体部50% 外面に煤付着 布留式土器
720	3区 SP-01	土師器	甕	口径：(14.6) 器高：(14.3)	体部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に屈曲し外上方へ伸びる。端部は内傾する面をもち、内側に肥厚する。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ後ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ	1mm前後の長石	内：10YR4/2灰黄褐色、2.5Y7/2灰黄色 外：10YR4/2灰黄褐色	口縁～体部70% 外面に煤付着 布留式土器
721	3区 SP-01	土師器	甕	口径：16.0 器高：(16.1)	体部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に屈曲し外上方へ伸びる。端部は丸みをもち内側に肥厚する。	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ後ケズリ 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ナデ	1mm前後の長石・雲母	内・外：10YR4/2灰黄褐色、10YR6/3にぶい黄褐色	口縁～体部完形 外面に煤付着 布留式土器

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
722	3区包含層1層	石製品	敲石	長：14.5 幅：11.2 厚：6.1 重：800.0（g）	大部分が欠けており、円柱状もしくは球状に近かったものが4分の1程度残ったと思われる。平坦面を持ち、中央部分で敲打痕が認められる。	-	-	-	25% 花崗岩 石皿を敲石に転用か
723	2区包含層2層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(7.6) 幅：(7.4) 把手径：2.2～5.4	断面いびつな楕円形。	内：ハケメ、板ナデ後ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の石英・長石	内：7.5YR7/3にぶい橙色 外：7.5YR8/3浅黄色	把手 焼成やや軟質
724	2区包含層2層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(8.1) 幅：(6.3) 把手径：1.9～2.9	断面いびつな楕円形。	内：ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：10YR7/2にぶい黄褐色～10YR7/1灰白色 外：7.5YR7/6橙色～7.5YR8/2灰白色	把手
725	3区包含層2層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(4.8) 幅：(7.2) 把手径：3.0～3.2	断面円形。	内・外：ナデ	4㎜以下の石英・長石	内・外：2.5Y8/2灰白色	把手 外面に黒斑あり
726	4区包含層2層	須恵器	甕？	器高：(5.1)	破片のため詳細不明	内：同心円状タタキ 外：タタキ後カキメ	1㎜の石英・長石	内・外：5Y5/1灰色	体部片
727	2区包含層2層	土師器	甕	口径：(19.3) 器高：(8.1)	体部は直線的にのび、頸部は緩やかに折れ曲がる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	内・外：ナデ、ハケメ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：10YR8/2灰白色 外：7.5YR8/4浅黄色～7.5YR6/6橙色	口縁～体部20%
728	2区包含層2層	土師器	甕	口径：(11.8) 器高：(11.2)	体部は丸みをもつ。頸部は緩やかに折れ曲り、口縁はやや外反し端部は丸くおさめる。	内：口縁部ユビナデ、体部ナデ 外：ナデ	1㎜以下の石英・長石	内：10YR8/1灰白色～2.5YR6/4明黄褐色 外：7.5YR8/1灰白色～10YR6/6にぶい橙色	口縁～体部40%
729	2区包含層2層	土師器	高杯	口径：(14.7) 器高：12.4	杯部は椀形で、端部は上方に面を持つ。脚部はラッパ状にひらく。	内：杯部ヨコハケ、ヨコナデ、脚部ナデ、ハケ、ユビオサエ 外：杯部ヨコナデ、脚部ナデ、ハケ	1～2㎜の石英・長石	内・外：5YR5/6明赤褐色	50%
730	4区包含層2層	土師器	高杯	器高：(15.1)	断面9角形	内：ナデ 外：ケズリ、一部ケズリ後ユビオサエ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内：5YR6/6橙色 外：2.5YR6/8橙色	柱状部完形 9面の面取り
731	2区包含層2層	土師器	杯	口径：12.2 器高：4.9	底部は丸底で、口縁部は直立し端部は丸く収まる。	内：ナデ 外：口縁部ナデ・ユビオサエ、底部ケズリ	1㎜以下の石英・長石	内・外：7.5YR7/6橙色	60% 焼成軟質
732	3区包含層2層	土師器	羽釜	口径：19.6 器高：(20.0)	体部は張りが弱く立ち上がる。口縁部は「く」の字状に屈曲する。端部は面をもち、内側に肥厚する。	内：口縁部ハケ、体部ユビオサエ 外：口縁～鍔部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ、ハケ	1㎜前後の長石・クサリ礫	内・外：5YR6/6橙色、7.5YR5/4にぶい褐色	口縁～体部50% 鍔部は意図的に打ち欠いたと思われる。
733	3区包含層2層	土師器	羽釜	口径：(28.5) 器高：(16.8)	体部はあまり張らない。鍔部は下方に伸びる。口縁部は屈曲し外反する。端部はつまみ上げる。	内：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ後ナデ、ユビナデ 外：口縁～鍔部ヨコナデ、体部ハケ、板ナデ	3㎜以下の石英・長石	内・外：10YR6/3にぶい黄橙色～10YR4/2灰黄褐色	口縁～体部20% 外面に煤付着 内外面に接合痕あり
734	2区包含層2層	須恵器	杯蓋	口径：(13.9) 器高：4.1	全体に丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	2㎜以下の石英・長石	内：5PB5/1青灰色 外：5PB6/1青灰色	25%
735	4区包含層2層	須恵器	短頸壺	口径：(5.5) 器高：(3.2)	体部は直線的に外方へのびる。肩部で屈曲して水平にのび、口縁部は短く直立。	内・外：回転ナデ	3㎜以下の石英・長石	内：N6/灰色 外：5Y6/1灰色～N7/灰白色	口縁部20%
736	2区包含層2層	須恵器	瓏	体部最大径：9.2 器高：(7.0)	半球状の体部で中位に円形の孔をもつ。	内：ナデ 外：回転ナデ、カキメ、ヘラケズリ	1㎜以下の長石・石英	内：5B5/1青灰～N3/暗灰 外：5B5/1青灰～N6/灰	50%
737	1区包含層2層	須恵器	器台	口径：(32.6) 器高：(6.3)	口縁部は内湾する。端部は外反して丸くおさめる。中位に段。	内・外：回転ナデ	3㎜以下の石英・長石	内・外：10YR5/1褐灰色	口縁部10%
738	4区包含層3層	土師器	壺	口径：(16.4) 器高：(6.7)	口縁部は垂下する端面を持ち、頸部は「く」の字状に屈曲し直線的にのびる。	内：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	2㎜以下の石英・長石・角閃石	内：10YR6/3にぶい黄褐色 外：7.5YR7/4にぶい橙色	口縁～体部20% 外面に煤付着
739	4区包含層3層	土師器	壺	底径：4.1 器高：(3.7)	底面は中央がくぼむ。	内：板ナデ後ナデ 外：板ナデ後ミガキ、底部ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内：10YR7/2にぶい黄橙色、10YR5/1褐灰色 外：7.5YR7/3にぶい黄褐色～10YR5/3黄褐色	底部10%

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
740	4区包含層4層	弥生土器	広口壺	口径：(15.4) 器高：(4.3)	口縁部は頸部から屈曲して外反し、端部は外面側に面を持つ。	内：ヨコナデ、板ナデ 外：ヨコナデ、板ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部10% 内外面に接合痕あり
741	2区シルト層	土師器	甑	口径：(14.6) 器高：(9.9)	体部は直線的に広がる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ、ヨコハケ（3～4本／cm） 外：タテハケ（3～4本／cm）	1～3㎜の石英・長石・クサリ礫	内：10YR5/2灰黄褐色 外：10YR5/3にぶい黄褐色	口縁～体部15%
742	2区シルト層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(10.8) 幅：(8.2) 把手径：3.3	断面ほぼ円形。	内：粗いハケ後ナデ 外:ナデ、粗いハケ、ユビオサエ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：10YR7/4にぶい黄橙色、5YR5/6明赤褐色	把手 外面に黒斑あり
743	3区シルト層上面	土師器	小型丸底壺	口径：(20.7) 器高：6.8	体部は丸みを持ち、中位に最大径がある。口縁部は直線的で端部は丸くおさめる。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ヘラミガキ	1㎜以下の石英・長石	内：10YR5/3にぶい黄褐色 外：10YR6/4にぶい黄橙色	70% 外面に黒斑あり
744	2区シルト層	土師器	甕	口径：(16.4) 器高：(7.2)	肩～体部は丸みをもち、口縁部はやや直立して立ち上がる。端部は内面に肥厚する。	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ 外:口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	1～3㎜の石英・長石・雲母	内・外：2.5Y5/2暗灰黄色～7.5YR7/4にぶい橙色	口縁～体部15%
745	2区シルト層	土師器	甕	口径：(14.4) 器高：(6.6)	口縁部は「く」の字に屈曲し外上方へ立ち上がる。端部は内傾する面をもち、内側に肥厚する。	内：口縁部ヨコナデ後ハケ、体部ナデ、ケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	2㎜以下の石英・長石・雲母	内：5YR6/6橙色 外：7.5YR7/4にぶい橙色～5YR6/6橙色	口縁～体部20% 外面に煤付着
746	2区シルト層	土師器	器台	底径：(17.6) 器高：(3.6)	「ハ」の字状の裾部から、上方へ直線的に伸び裾端部はやや尖り気味におさめる。	内：ナデ、ユビオサエ 外：ナデ	3㎜以下の石英・長石	内：7.5YR6/6橙色 外：7.5YR6/6橙色～10YR5/6黄褐色	脚部60% 透孔3方残
747	1trシルト層	石製品	石皿	長：9.6 幅：8.9 厚：6.5 重： 600.0(g)	大部分が欠けており、楕円形であったものが4分の1程度残ったものと思われる。平面中央と側面に敲打痕が多く残る。	-	-	-	25% 花崗岩
748	2区シルト層	石製品	石皿	長：24.8 幅：19.4 厚：9.2 重： 6100.0(g)	楕円形を呈し、裏表に平面を持つ。	-	-	-	完形 花崗岩

長田遺跡２次調査出土遺物観察表

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
749	1・2区畦畔1	土師器	皿	口径：(17.3) 器高：(3.0)	丸みをもちながら外方に広がる体部、口縁部は外反し、端部はやや上方につまみ上げる。	内・外：ナデ	2㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内・外：7.5YR8/3浅黄橙色	口縁～底部15%
750	1・2区畦畔1	土師器	高杯	器高：(8.5) 径：4.9	やや筒状の脚柱部。	内:ヘラ状工具圧痕・ユビナデ 外：ヘラケズリ	2㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内：2.5YR6/6橙色 外：7.5YR7/4にぶい橙色	脚柱部片 8方向の面取
751	1・2区畦畔1	土師器	杯	底径：(7.6) 器高：(1.2)	直立気味の高台、端部は面をもつ。	内：ナデ 外：回転ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：7.5YR7/4にぶい橙色	底部10%以下
752	1・2区畦畔1	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(6.9) 幅：(6.7) 把手径：3.5	短い把手。端部は上方に向き、丸みをもつ。	外：ハケメ、ユビオサエ、ナデ	3㎜以下の石英・長石・雲母	外：7.5YR7/4にぶい橙色	把手（内面剥離）
753	1・2区畦畔1	土師器	羽釜	口径：(22.0) 最大径：(28.3) 器高：(5.6)	口縁部は「く」の字に外反し端部は面をもつ。鍔は上方にのび端部は丸みをもつ。	内・外：ヨコナデ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：10YR8/2灰白色	口縁～鍔部20% 外面に煤付着
754	1・2区畦畔1	土師器	羽釜	口径：(22.0) 最大径：(28.1) 器高：(11.5)	直線的に内傾する体部、屈曲する口縁部、端部は丸くおさめる。鍔は下方にのび、端部は面をもつ。	内：ヨコナデ、工具圧痕後ユビナデ 外：ヨコナデ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：7.5YR8/2灰白色	口縁～体部20% 外面に煤付着
755	1・2区畦畔1	土師器	羽釜	最大径：(32.2) 器高：(6.0)	なだらかに外反する頸部。鍔は水平にのび、端部は尖る。	内：ヨコナデ、ヨコハケ、円形の圧痕後ユビナデ 外：ヨコナデ	7㎜以下の石英・長石・雲母	内・外：7.5YR8/4浅黄橙色	口縁～鍔部10%以下
756	1・2区畦畔1	土師器	羽釜	口径：(25.8) 最大径：(30.4) 器高：(9.7)	内傾する体部、なだらかに外反する口縁部、端部は丸みをもつ。鍔は下方にのび、端部は尖る	内：ナデ 外：ヨコナデ	3㎜以下の石英・長石・雲母	内：2.5Y6/2灰黄色～2.5Y3/1黒褐色 外：2.5YR7/4淡赤橙色～10YR5/2灰黄褐色	口縁～鍔部30% 外面に接合痕あり

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
757	1・2区畦畔1	須恵器	杯蓋	口径：(18.3) 器高：(1.2)	平らな天井部から、屈曲した口縁部、端部は下方に屈折し、面をもつ。	内：回転ナデ・不定方向ユビナデ 外：ヘラケズリ後回転ナデ	1㎜以下の石英・長石・黒色砂粒・雲母	内・外：7.5Y6/1灰色	口縁10%
758	1・2区畦畔1	須恵器	杯身	底径：(11.2) 器高：(2.4)	「ハ」の字状に広がる高台、端部は外方に面をもつ。平らな底部からなだらかに外方へ広がる体部。	内：回転ナデ・不定方向ユビナデ 外：ヘラケズリ後回転ナデ	2㎜以下の石英・長石・黒色砂粒・雲母	内・外：2.5Y7/1灰白色	底部10% 焼成不良
759	1・2区畦畔1	須恵器	高杯	器高：(2.5)	杯・脚部境は丸みをもち外湾する。	内・外：回転ナデ	2㎜以下の石英・長石・黒色砂粒・雲母	杯部内：10YR4/1褐灰色 その他：2.5Y8/1灰白色	杯～柱状部 杯部内面底使用痕あり（煤付着） 焼成軟質
760	1・2区畦畔1	須恵器	小型長頸壺	底径：(3.8) 器高：(3.7)	平底から外湾しながら上方に伸びる体部。	内・外：ヘラケズリ後回転ナデ 底部外：回転ナデ後ユビオサエ	2㎜以下の石英・長石	内・外：N5/灰色	体～底部20% 底部外面に回転糸切痕あり
761	1・2区畦畔1	緑釉陶器	椀又は皿	底径：6.4 器高：(0.9)	凹み気味の底部。	内：ナデ 外：回転ヘラケズリ、ナデ	精良	内・外：7.5YR4/1褐灰色に2.5Y7/3浅黄色が斑状に見られる。	底部50%
762	1・2区畦畔1	瓦	素文縁複弁蓮華文軒丸瓦	瓦当径：(18.6) 中房径：(8.0) 弁区径：(16.0) 外区幅：1.6 周縁高：1.2	中房はやや突出し、1+8+8の蓮子が巡る。弁間には間弁がある。花弁の先端は丸く、内部に子葉をもつ。周縁は高縁。	ヘラケズリ	3㎜以下の石英・長石・雲母	2.5Y6/1黄灰色	瓦当30% 型式：6201Aa 焼成軟質
763	1・2区畦畔1	瓦	平瓦	長：(18.7) 幅：(14.7) 厚:2.2～2.5	一端に面取り。	凹：布目圧痕 凸：平行タタキ痕	5㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	凹：5Y7/1灰白色 凸：5Y5/1灰色	破片 焼成やや軟質
764	1・2区畦畔1	土製品	土馬	器高：(4.0) 幅：(8.7) 厚:1.9～3.0	水平な鞍部。	外：ユビナデ	3㎜以下の石英・褐色土粒・黒色砂粒・雲母	外：10YR8/2灰白色	胴部片
765	1・2区畦畔1	土製品	土馬	器高：(4.1) 幅：(2.0) 厚：1.7	棒状の脚部。	外：ナデ	2㎜以下の石英・長石・黒色砂粒・雲母	外：2.5Y8/2灰白色	脚部片
766	1・2区畦畔1	土製品	土馬	器高：(5.1) 幅：(2.1) 厚:1.6～1.8	棒状の脚部、端部はやや面をもつ。	外：板状工具ナデ後ユビナデ	1㎜以下の石英・長石・褐色土粒・黒色砂粒・雲母	外：2.5Y8/1灰白色	脚部片
767	1・2区畦畔1	土製品	土馬	器高：(2.9) 幅：(1.6) 厚：1.5	棒状の脚部。	外：板状工具ナデ後ユビナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母・黒色砂粒	外：10YR8/2灰白色	脚部片
768	1・2区畦畔1	石製品	砥石	長：(8.9) 幅：6.8 厚：6.6 重：610.0(g)	－	－	－	－	両端欠損 砂岩 残存部2面に使用痕あり
769	1・2区畦畔1	石製品	磨石	長：13.0 幅：6.0 厚:3.7～4.7 重：525.0(g)	－	－	－	－	完形 砂岩 先端・1面に使用痕あり
770	4区第3層	土師器	小皿	口径：8.8 器高：1.4	水平な底部からなだらかに外反する口縁部。端部はやや丸みをもつ。	内：ユビナデ 外：板ナデ、ユビナデ	4㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	内・外：5YR7/6橙色	完形 外面に接合痕あり
771	3区第3層	土師器	小皿	口径：(9.6) 器高：2.0	すり鉢状の底体部、口縁端部は面をもつ。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ユビオサエ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：7.5YR6/4にぶい橙色	50%
772	2区第3層	土師器	小皿	口径：(9.4) 器高：2.2	ほぼ平らな底部から、外方にのびる口体部、端部は丸くおさめる。	内・外：ヨコナデ 底部外：ナデ・ユビオサエ	1㎜以下の長石・石英	内・外：5YR5/6明赤褐色	30%
773	4区第3層	土師器	小皿	口径：(9.8) 器高：2.0	平らな底部から、屈曲する口縁部、口縁端部は尖り気味におわる。	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：5YR5/6明赤褐色	口縁部10%以下
774	2区第3層	土師器	小皿	口径：(7.6) 器高：1.5	底部中央は凹み、口縁部は湾曲しながら外方にのびる、端部は丸くおさめる。	内・外：ヨコナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：5YR5/6明赤褐色	30%
775	4区第3層	土師器	小皿	口径：(9.2) 器高：1.7	中央部が凹む底部から、丸みを帯びながら口縁部につづく。口縁端部は丸くおさめる。	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色	口縁～底部40% 口縁部内面に一部黒斑あり（灯明皿）

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
776	2区第3層	瓦器	椀	底径：(5.9) 器高：(2.7)	高台断面は逆三角形をなす	内：ヘラミガキ 外：ナデ・ヘラミガキ	密	内：N5/灰色 外：N4/灰色	底部完形 焼成軟質
777	4区第3層	瓦器	椀	口径：(9.6) 器高：(3.3)	丸みをおびながら外上方へのびる口体部、端部はやや尖り気味。	内：ナデ・ヘラミガキ 外：ナデ・ユビオサエ	密	内・外：7.5YR7/1灰白色～7.5YR6/1灰色	口縁部20%
778	1区第4層	土師器	把手付甕・鍋・甑？	長：(6.9) 幅：(6.7) 把手径：3.5	扁平な断面をもち、端部は外方を向く。	外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	外：7.5YR5/4にぶい褐色	把手（内面剥離）
779	1区第4層	須恵器	杯身	口径：(19.9) 底径：(12.2) 器高：5.8	垂直で断面方形の高台。なだらかに外方に広がり口縁につづく。端部は丸くおさめる。	内・外：回転ナデ	2㎜以下の長石	内・外：N6/灰色	口縁～底部10%
780	1区第4層	須恵器	蓋	口径：(8.3) 器高：(1.1)	水平な天井部から、屈曲し口縁部につづく。端部は尖り気味。	内・外：回転ナデ	2㎜以下の長石・黒色砂粒	内・外：N7/灰白色	口縁部片 短頸壺？
781	1区第4層	須恵器	小型長頸壺	底径：(4.0) 器高：(1.8)	「ハ」の字状に広がる高台、端部は面をもつ。	内・外：回転ナデ	2㎜以下の長石・黒色砂粒	内・外：N5/灰色	底部10%
782	1区第4層	瓦	平瓦	長：(9.9) 幅：(9.8) 厚：2.4	一端に面取り。	凹：布目圧痕 凸：ナデ	1～2㎜の石英・長石	凹：5Y7/1灰白色 凸：5Y8/1灰色	破片
783	1区第4層	瓦	平瓦	長：(16.2) 幅：(13.2) 厚:2.1～2.3	一端に面取り。	凹：布目圧痕 凸：縄目タタキ痕	1～2㎜の長石・石英	凹・凸：N7/灰色	破片
784	1区第4層	土製品	土馬	器高：(4.0) 幅：(1.9) 厚:0.8～1.4	棒状の脚部。端部はやや丸くおさめる。	外：ナデ	密	外：7.5YR7/6橙色	脚部片
785	1区第4層	土製品	土馬	器高：(4.2) 幅：(2.8) 厚:1.4～1.7	直線的に広がる脚部。端部は面をもつ。	外：ナデ	密	外：7.5YR7/6橙色	脚部片
786	2区第7層	須恵器	杯身	口径：(12.0) 器高：(2.9)	水平な受部、短く立ち上がる口縁部。端部はやや丸みをもつ。	外体・底部：回転ヘラケズリ 内・外口縁部：回転ナデ	1～3㎜の石英・長石	内・外：N4/灰色	20%
787	2区第7層	須恵器	瓶？	器高：(3.6)	直線的に外方にのびる頸部、口縁部は屈曲し、端部は面をもつ。	内：回転ナデ 外：回転ナデ、波状文	1㎜の石英・長石	内・外：N4/灰色～N3/暗灰色	口縁部片
788	2区第7層	須恵器	堤瓶	器高：(7.0)	丸みをもつ体部に、鈎形の短い把手部。	内：ナデ・ユビオサエ 外：カキ目 把手：ユビナデ	1㎜以下の砂礫	内・外：N4/灰色	体部片、把手
789	2区第7層	石製品	砥石	長：(5.6) 幅：3.8 厚:3.7～4.1 重：134.0(g)	－	－	－	－	両端欠損 砂岩 4面に使用痕あり（内1面に凹み）
790	2区第7層	土製品	土錘	径：1.6 長：(4.7)	一端がややすぼむ	外：ナデ	1㎜の長石	内・外：10YR7/4にぶい黄橙色	片側先端欠損 土師質
791	2区第7層	土製品	土馬	器高：(3.5) 幅：(3.5) 厚：1.0	頭端部は内側にむく	外：ナデ	7㎜以下の褐色土粒、2㎜以下の石英・長石・雲母	外：2.5Y7/2灰黄色	頭部片
792	2区第7層	土製品	土馬	器高：(3.3) 幅：(3.1) 厚：1.3	胴部はU字形の断面	外：ナデ	2㎜以下の石英・長石・黒色土粒・雲母	外：2.5Y8/2灰白色	胴部片
793	2区第7層	土製品	土馬	器高：(5.2) 幅：(6.6) 厚:0.9～2.9	鞍部からなだらかに反り上がる頸部。胴部はU字形の断面	外：ユビナデ	3㎜以下の石英・長石・雲母	外：10YR8/3浅黄橙色	胴部片
794	2区第7層	土製品	土馬	器高：(6.0) 幅：(8.5) 厚:1.0～3.0	鞍部からなだらかに湾曲しながら頸部につづく。胴部はJ字形の断面。	外：ナデ	2㎜以下の石英・長石・褐色土粒・黒色砂粒	外：10YR8/3浅黄橙色	胴部片
795	2区第7層	土製品	土馬	器高：(5.1) 幅：(2.3) 厚:1.3～1.8	すぼまり気味の脚部、端部は丸みをもつ	外：板状工具ナデ後ユビナデ	3㎜以下の石英・長石・褐色土粒・雲母	外：2.5Y7/2灰黄色	脚部片 791と同一個体？
796	2区第7層	土製品	土馬	器高：(2.0) 幅：(2.1) 厚:1.6～2.1	棒状の脚部。	外：ナデ	1㎜以下の石英・長石・雲母	外：2.5Y8/2灰白色	脚部片

丑寅遺跡１次調査出土遺物観察表

遺物番号	遺構層位	種類	器形・石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
797	E-3 SD-01 2 区下層	土師器	壺	口径：(12.7) 器高：(7.6)	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は上方へわずかにつまみあげる。	内:口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 40% 内面に接合痕あり
798	E-3 SD-01 2 区下層	弥生土器	長頸壺	口径：(11.8) 器高：(7.8)	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反する。端部は外側へやや肥厚する。	内：口縁部板ナデ後ナデ、体部ユビオサエ・ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部板ナデ・波状文・沈線	1㎜以下の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 20% 外面にモミ圧痕
799	E-3 SD-01 2 区中層	弥生土器	甕	口径：15.6 器高：(3.7)	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は内上方へわずかに肥厚する。	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y7/2 灰黄色	口縁部ほぼ完形 外面に煤付着
800	E-3 SD-01 1 区上層	弥生土器	甕	口径：(17.5) 器高：(4.2)	口縁部は「く」の字状に外反する、端部は上方に軽くつまみあげる	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ・板ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/3 にぶい黄褐色	口縁部 30% 5 と同一個体
801	E-3 SD-01 1 区上層	弥生土器	甕	底径：(3.6) 器高：(6.7)	底部は中央が浅く窪む。体部は底部から直線気味に外方に広がる	内：ナデ・板ナデ 外：タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/3 にぶい黄褐色	底部 30% 4 と同一個体
802	B-3 SD-01 2 区上層	弥生土器	甕	底径：4.1 器高：(4.1)	平底から直線気味に外方に広がる体部	内：板ナデ 外：タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/4 にぶい黄褐色	底部完形 内面に煤付着 底部に穿孔 底部外面にモミ圧痕
803	E-3 SD-01 1 区上層	弥生土器	台付甕・鉢	底径：6.6 器高：(4.7)	脚部は「ハ」の字状に短く広がる。端部は面をもつ。杯部は丸みをもちながら立ち上がる。	内:摩耗、高台ナデ・ユビオサエ 外：ナデ	1～3㎜の石英・長石	内・外：10YR6/4 にぶい黄褐色	高台完形
804	B-3 SD-01 2 区上層	弥生土器	台付甕・鉢	底径：6.0 器高：(4.0)	底部は中央が浅く窪む	内：ナデ、工具ナデ 外：ナデ	1～3㎜の石英・長石	内：10YR6/4 にぶい黄褐色 外：2.5YR4/6 赤褐色	底部 50% 底部外面に穀物（アワ・ヒエ）圧痕
805	B-3 SD-01 1 区下層	弥生土器	台付甕	底径：3.8 器高：(4.4)	底部は中央が浅く窪む、体部は底部から直線気味に外方へ広がる	内：ハケメ 外:ナデ、タタキ（板状工具圧痕）	1㎜以下の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 暗灰黄色	底部 80% 内外面に煤付着
806	B-3 SD-01 2 区上層	弥生土器	甕	口径：(11.9) 底径：4.3 器高：6.9	平底から直線気味に外方に広がる体部、口縁部はやや直線状に伸びる	内：板ナデ 外：ナデ、ユビオサエ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁（20%）～底部完形
807	C,D-3 SD-02	弥生土器	甕	口径：(19.6) 器高：(7.5)	口縁部は「く」の字状に外反する	内：口縁部ナデ、体部ヨコハケ 外：口縁部ナデ、体部タタキ、一部ハケメ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/2 灰黄色	口縁～体部 20% 外面に煤付着
808	E-2 SD-06 1 区底部	弥生土器	鉢・壺	底径：(10.2) 器高：(4.8)	体部は底部から直線的に伸びる	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y5/2 灰黄色	底部 40% 外面黒斑・接合痕あり 底部外面に穀物圧痕
809	E-3 SD-06	木製品	不明	長：(32.4) 幅：4.9 厚：3.1	板状 縦木取り	全体に加工痕有り	－	－	両端欠損
810	E-3 SD-06	木製品	竪杵	長：53.5 幅:2.8～8.4 厚:3.0～6.6	両面中央部を凹む 一端部に面をもち加工痕がみられる	全体に加工痕有り	－	－	完形
811	E・G-2 SD-09 2 区上層	弥生土器	甕	口径：(40.2) 器高：(7.0)	体部は直線気味に伸び、口縁部は外反する	内：ナデ 外：ナデ、口縁端部刻み目、体部沈線	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/3 灰黄色	口縁部 20%
812	B-3 SK-02	弥生土器	甕	口径：(16.2) 器高：(8.8)	肩部は丸味をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する、端部は上方につまみ上げる	内:口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、ユビオサエ 外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：2.5Y6/1 黄灰色、2.5Y5/2 暗灰黄色	口縁～体部 10% 外面に煤付着 内面に接合痕あり
813	B-3 SK-02	弥生土器	甕	口径：(13.2) 底径：(4.0) 器高：(7.8)、(9.3)	平底から丸味をもつ体部。口縁部は「く」の字状に外反する、端部は上方につまみ上げる	内:口縁～体部ナデ、底部板ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体～底部タタキ	1～2㎜の石英・長石、クサリ礫	内・外：10YR4/4 褐色	口縁～体部、体～底部残存。 外面に接合痕あり
814	B-3 SK-06	弥生土器	甕	口径：(15.8) 器高：(3.8)	口縁部はやや直線状に短く伸びる	内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内：7.5YR6/6 橙色 外：10YR6/4 にぶい黄褐色	口縁部 20%

遺物番号	遺構層位	種類	器形・石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
815	B-4 SK-15 カメ③	弥生土器	甕	口径：17.1 底径：4.0 器高：23.2	平底から直線的に外方に広がる体部、肩部は丸味をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する、端部は上方につまみ上げる	内：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ・ユビナデ・ナデ・ユビオサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ、底部ナデ	1㎜前後の長石・雲母	内：10YR8/2 灰白色 外：10YR8/3 浅黄橙色、5Y6/1 灰白色	完形 外面に煤付着 内面に炭化物付着 内外面に接合痕あり 底部不安定
816	C-4 SK-16 カメ 5	弥生土器	甕	口径：10.6 底径：4.2 器高：10.7	平底から丸味をもつ体部。口縁部はなだらかに外反し端部は丸くおさめる	内：口縁部ヨコナデ、体～底部ハケ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ	0.1～1㎜の長石、0.1㎜の雲母	内・外：10YR6/2 灰黄褐色	完形 内外面に黒斑 外面に煤付着 内外面に接合痕あり 底部外面に葉脈圧痕
817	C-3 SK-16 アゼ 2	弥生土器	甕	口径：16.1 器高：19.2	底部欠損。そろばん珠のような体部、短く立ち上がる頸部、外湾する口縁部。端部は面をもつ	内：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ、板ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ、タタキ・ナデ後板ナデ	3㎜以下の長石・石英・雲母	内：2.5Y5/3 黄褐色、2.5Y3/1 黒褐色 外：2.5Y6/3 にぶい黄色、2.5Y2/1 黒色	口縁～体部 40% 内外面に煤付着 内外面に接合痕あり 焼成やや軟質
818	B-3 SK-16 カメ②	弥生土器	甕	口径：16.1 器高：(15.0)	肩部は丸味をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する、端部は上方につまみ上げる	内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/3 にぶい黄褐色	口縁～体部 90% 外面に煤付着
819	B-3,4 SK-16	土師器	杯	口径：17.4 器高：(4.1)	口縁部はやや直線状に伸びる	内・外：ナデ	1～2㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部 40% 全体的に摩耗
820	B-4 SK-16	弥生土器	手焙形土器	器高：(4.5)	体部と覆部の境目で「S」字状に屈曲し、覆部は内上方へ立ち上がる	内：ナデ 外：ナデ、ハケ、ハケ後櫛描文	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/4 にぶい黄褐色	体～覆部片
821	C-3 SP-10 カメ④	弥生土器	甕	口径：16.1 底径：4.7 器高：18.0	平底から丸味をもつ体部。口縁部は「く」の字状に外反し端部は面をもつ。	内：口縁部ヨコナデ、体～底部ハケ（7本/1.2㎝） 外：口縁部ヨコナデ、体部タタキ、底部ナデ	1～2㎜の長石、1㎜以下の雲母	内：10YR5/2 灰黄褐色 外：10YR6/1 褐灰色、7.5YR7/3 にぶい橙色	完形 外面に煤付着 内外面に接合痕あり 底部不安定
822	B-3 包含層 1層	弥生土器	ミニュチュア土器 甕	口径：(8.7) 器高：6.6	底部は中央が浅く窪む、口縁部は緩やかに外反する、口縁端部はやや尖る	内・外：ナデ	1㎜以下の石英・長石・クサリ礫	内・外：10YR7/3 にぶい黄褐色	90%
823	包含層 1層	弥生土器	甕	底径：4.6 器高：(6.8)	平底から丸味をもつ体部。	内：ハケ後ナデ 外：タタキ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10Y6/2 灰黄色	底部完存 外面黒斑あり
824	E-2 包含層 1層	石製品	石鏃	長：2.7 幅：2.0 厚：0.5 重：2.0(g)	凹基無茎式。	－	－	－	完形 サヌカイト
825	C-3～4 Str （包含層 2層）	弥生土器	甕	底径：4.3 器高：(7.8)	底部は中央が浅く窪む、体部は底部からやや直線的に広がる	内：ナデ、板ナデ 外：体部タタキ、底部ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10Y6/2 灰黄色	底部 70% 内面に煤付着
826	C-3 包含層 2層	弥生土器	甕	底径：4.7 器高：12.5	平底から丸味をもつ体部。	内：ナデ、板ナデ 外：体部タタキ、底部ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10Y6/2 灰黄色	底部完形 内外面に煤付着 内外面に接合痕あり 底部外面にアン科植物圧痕
827	G-2 包含層 2層	土師器	杯	口径：(12.9) 器高：4.5	口縁部は直線気味に伸びる、口縁端部は丸みを帯びる	内：板ナデ後ナデ 外：ナデ、ケズリ	2㎜以下の石英・長石	内・外：7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部 30% 内外面に接合痕あり
828	G-1 包含層 2層 （側溝）	石製品	石包丁	長：(7.2) 幅：(5.4) 厚：0.5 重：38.0(g)	直線刃半月形態。片刃。紐穴1箇所残。	－	－	－	40% 緑泥片岩
829	1区 洪水砂層	土師器	杯	口径：37.0 底径：11.8 器高：3.7	ほぼ平らな底部から、丸味をもちながら外方に広がる体部。外反する口縁部、端部は内側に屈曲	内：口縁～体部放射状暗文、底部不定方向のミガキ 外：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ、底部ケズリ後ミガキ	0.1㎜以下の長石・雲母	内・外：7.5YR7/6 橙色	ほぼ完形
830	1区 洪水砂層	土師器	甕	口径：(20.6) 器高：(7.8)	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反する	内・外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR8/3 浅黄色	口縁部 20% 内外面に接合痕あり
831	1区 洪水砂層	瓦	丸瓦	長：(36.5) 幅：(12.9) 厚：1.5	一端に面取り。	凹：布目圧痕 凸：ナデ	1～2㎜の石英・長石	凹・凸：5Y7/5 灰白色、5Y6/1 灰色	破片

東遺跡１次調査出土遺物観察表

遺物番号	遺構・層位	種類	器形・石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	備考
832	SD-01 5区1層	弥生土器	長頸壺	口径：10.9 底径：3.5 器高：15.4	底部は中央が浅く窪む、体部は底部から丸味をもって広がる、口縁部は外上方へ伸び端部は尖り気味	内：口縁～体部はナデ、体～底部はハケメ・板ナデ 外：口縁・体下半～底部はナデ、体部はハケメ後ナデ	1～2㎜の石英・長石	内・外：10YR6/6明黄褐色	完形 外面黒斑あり 内面に煤付着 体部下半に焼成後穿孔（対称に2箇所）
833	SD-01 5区1層	弥生土器	壺	底径：3.6 器高：(2.9)	平底の底部	内:ナデ?(板ナデ) 外：ナデ、ユビオサエ	1～3㎜の石英・長石・クサリ礫	内・外：2.5Y7/2灰白色	底部完存
834	D-4 SD-01 5区1層	弥生土器	甕	底径：4.0 器高：(2.7)	底部は中央が窪む	内・外：摩耗のため調整法不明	1～3㎜の石英・長石	内：2.5Y7/2灰白色 外：2.5YR5/6明赤褐色	底部完存 外面に黒斑 焼成軟質
835	SD-01 5区1層	弥生土器	壺	底径：(4.8) 器高：(6.5)	底部は平底、体部は底部からやや丸みをもって伸びる	内：ハケメ 外：板ナデ、ユビオサエ	1～2㎜の石英・長石・雲母	内・外：2.5Y7/2灰白色	体～底部50%
836	E-2 SD-01 1層	石製品	石包丁	長：4.0 幅：13.2 厚:0.6～0.7 重： 63.0(g)	直線刃半月形態。片刃。紐穴2箇所。	-	-	-	完形 緑泥片岩

東遺跡２次調査出土遺物観察表

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	備考
837	B-1 SD-01 2区	弥生土器	壷	口縁：(14.0)	有段口縁の疑口縁～端部まで残存。擬口縁から水平にのび、上へ屈曲して端部は丸く収まる。外面には刺突文あり。	外面：ヨコナデ、刺突文 内面：ナデ	2㎜以下の長石・石英	内外：7.5YR4/5にぶい褐色	5%残存
838	B-4 SD-05 アゼ	弥生土器	甕	底径：5.9	底部のみ残存。	外面：ナデ 内面：ナデ、ユビオサエ	1～3㎜以下の長石・石英	内：2.5Y3/1黒褐色 外：2.5Y4/1褐灰色	10%残存 内面に黒斑あり
839	B-5 SD-07 上層土器	弥生土器	甕	底径：4.2	底部のみ残存。	外面：ナデ 内面：ハケ	1～3㎜以下の長石・石英	内：2.5Y2/1黒色 外：10YR5/3にぶい黄褐色	10%残存
840	B-5 SD-08 2区	弥生土器	甕	口径：15.0	口縁部は外反して立ち上がり端部は外方に面を持つ。	口縁：ヨコナデ 外面：タタキ 内面：ナデ	1～3㎜以下の長石・石英	内：7.5YR7/1褐灰色 外：7.5YR8/1灰褐色	10%残存
841	B-7・8 SD-10 下層	弥生土器	甕	底径：4.0	底部のみ残存。	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ、板ナデ	1～2㎜以下の長石・石英	内：10YR7/4にぶい黄褐色 外：10YR5/2にぶい黄褐色	10%残存 内面に黒斑あり
842	B-2 SK-01	弥生土器	甕	口径：(14.2)	口縁部は外反し、端部は外面に面をもつ。	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ	2㎜以下の長石・石英	内外：10YR8/1灰白色～10YR5/6赤褐色	20%残存
843	B-6 SK-06 1区	弥生土器	甕	口径：(13.5)	口縁部は外反し端部は丸くおさまる。体部はゆるやかに広がる。	口縁：ヨコナデ 外面：タタキ 内面：ヨコナデ	1～2㎜以下の長石・石英	内：2.5YR5/3黄褐色 外：10YR6/2灰黄褐色	20%残存
844	B-4 SK-06 1区	弥生土器	甕	口径：(15.2)	口縁部は外反し端部は丸くおさまる。体部は丸みを帯び、体部最大径は中位にある。	口縁：ヨコナデ 外面：タタキ 内面：ナデ、ユビオサエ	2㎜以下の長石・石英	内：5YR5/2灰黄褐色 外：5YR5/4にぶい黄褐色	10%残存
845	B-6 SK-06 2区	弥生土器	壷	底径：4.4	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ、板ナデ	1～2㎜以下の長石・石英	内・外：10YR6/3にぶい黄橙色	10%残存
846	B-6 SK-06 アゼ	弥生土器	甕	底径：2.5	底部のみ残存。体部立ち上がりは斜め上方へ直線的にのびる。	外・内面：ナデ、板ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR8/1灰白色 外：2.5Y7/2灰黄色	10%残存
847	A-3 SP-08	須恵器	杯蓋	口径：12.4 器高：4.2	外面天井部に円形のツマミがつく。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・ケズリ	1～5㎜以下の長石・石英	内外：N7/灰白色	ほぼ完形
848	A-6 素掘溝	瓦	丸瓦	-	丸瓦の側面端部片。	凹面：布目圧痕 凸面：ナデ、ケズリ	1～2㎜以下の長石・石英	内外：5Y6/1灰色	5%残存
849	B-2 素掘溝	弥生土器	甕	底径：3.9	底部のみ残存。底面は中央がくぼむ。体部立ち上がりは直線的。	内面：ナデ 外面：タタキ、ユビオサエ	5㎜以下の長石・石英	内：7.5YR5/3にぶい褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色	10%残存

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	備考
850	B-5 中世包含層	弥生土器	甕	底径：4.4	底部のみ残存。	外面：ナデ、板ナデ 内面：ナデ	1～4㎜以下の長石・石英	内：2.5Y7/2 灰黄色 外：10YR7/1 灰白色	10%残存
851	北区 中世包含層	弥生土器	甕	底径：4.7	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：ナデ、板ナデ 外面：ナデ、タタキ後ナ	2㎜以下の長石・石英	内：7.5Y2/1 黒色 外：10YR3/1 黒褐色	10%残存 黒斑あり。
852	北区 中世包含層	弥生土器	甕	底径：4.8	底部のみ残存。底面は中央がくぼむ。	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ユビオサエ、タタキ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR8/1 褐灰色 外：10YR3/1 黒褐色	10%残存
853	B-5 中世包含層	弥生土器	有孔鉢	底径：2.8	底部のみ残存。底面中央に焼成前穿孔。	内面：ヨコナデ、板ナデ 外面：ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR6/3 にぶい黄褐色 外：10YR8/3 浅黄橙色	10%残存
854	南区 中世包含層	土師器	皿	口径：(12.6) 器高：2.2	口縁部は斜め上方に直線的にのびる。端部は丸くおさまる。	内面：ミガキ、ナデ 外面：ミガキ、ユビオサエ	緻密	内・外：10YR8/1 灰白色～10YR8/2 灰褐色	20%残存
855	中世包含層	須恵器	杯身	口径：(11.3)	口縁部～体部残存。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	密	内外：N5/ 灰色～N7/ 灰白色	10%残存
856	南区 中世包含層	須恵器	杯蓋	口径：(16.9)	端部は面を持ち、下方に摘み上げられ整形される。	内・外面：回転回転ナデ	1㎜以下の長石・石英	内外：N5/ 灰色	20%残存
857	B-5 中世包含層	土製品	土錘	長：6.2 径：3.2	円柱形の土錘。上下方向で中央に孔があり、管状を呈する。	ナデ、板ナデ	2㎜以下の長石・石英	10YR6/4 黄橙色～10YR2/1 黒褐色	ほぼ完形
858	北区 中世包含層	石製品	石皿 花崗岩	長：24.4 幅：12.2 厚：10.0 重：5.3kg	長方形を呈する。長辺の片方より欠損する。裏表２面の平坦面をもち、一部敲打痕が認められる。	－	－	－	一部焼成を受ける。
859	B-7 灰色粘質土層	弥生土器	広口壺	－	口縁部はやや外反して広がり、端面は垂下して外面に面を持つ。端面には櫛描波状文が施される。	外・内面：ナデ 口縁端部：ナデ、波状文	1～2㎜以下の長石・石英	内：10YR7/2 にぶい黄橙 色外：7.5YR7/4 にぶい橙色～5YR6/6 橙色	5%残存
860	B-7 灰色粘質土層	弥生土器	広口壺	口径：(18.2)	口縁部のみ残存。口縁は外反し、端部は垂下して面を持つ。端面は竹管を押圧した円形浮文、頸部上部では竹管文と刻み目が入る突帯をもつ。	内面：ナデ 外面:ナデ、ミガキ、竹管文、円形浮文	1～3㎜以下の長石・石英	内：10YR8/1 灰白色 外：5YR4/6 橙色	10%残存
861	A-7 灰色粘質土層	弥生土器	高杯	口径：(20.2)	有稜高杯。口縁部は外反してのび、端部は外方に面をもつ。稜より下部はやや内湾する。	内面：ナデ、ミガキ 外面：ナデ後ミガキ、ヨコナデ	1㎜以下の長石・石英	内外：10YR8/1 灰白色	15%残存
862	B-7 灰色粘質土層	須恵器	杯身	口径：(11.9)	口縁部～体部残存。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・ケズリ	1㎜以下の長石・石英	内外：N5/ 灰色～N6/ 灰白色	10%残存
863	南区 包含層 1 層	弥生器	壷	口径：(12.5)	口縁部のみ。二重口縁。二段目口縁下方に米粒大の輪状の文様。	内面：ナデ 外面：ナデ、列点文	1㎜以下の長石・石英	内：10YR8/3 浅黄橙色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	10%残存
864	北区 包含層 1 層	弥生土器	広口壺	－	口縁部片。端面は垂下して外面に面を持つ。端面には竹管を押圧した円形浮文が施される。	内・外面：ナデ 口縁端部：ナデ、円形浮文	1～3㎜以下の長石・石英	内外：2.5YR5/8 明赤褐色	5%残存
865	B-6 包含層 1 層	弥生土器	広口壺	－	口縁部はやや外反し、垂下して面を持つ。端面は竹管文が施される。	外・内面：ナデ 口縁端部：ナデ、竹管文	1～2㎜以下の長石・石英	内：10YR6/1 褐灰色 外：7.5YR7/4 黄褐色	5%残存
866	B-4 包含層 1 層	弥生土器	壷	－	体部細片か。外面に２条の沈線文あり。	内面：ナデ 外面：ハケ後ナデ、沈線	1㎜以下の長石・石英	内：10YR4/2 にぶい赤褐色 外：2.5YR4/4 灰黄褐色	5%残存
867	A-3 包含層 1 層	弥生土器	壷	－	壷体部。外面に沈線と刺突列点。	内面：ナデ、板ナデ 外面：ミガキ、一部ミガキ後沈線・刺突列点	3㎜以下の長石・石英	内：7.5Y3/1 オリーブ黒意図 外：7.5YR6/4 にぶい橙意図	5%残存 外面に赤色顔料付着。
868	A-5 包含層 1 層	弥生土器	壷	底径：4.1	底部のみ残存。底面は中央がくぼむ。	内・外面：ナデ、ユビオサエ	3㎜以下の長石・石英	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：2.5YR6/4 明赤褐色	10%残存

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	備考
869	B-2 包含層 1層	弥生土器	壷	底径：3.0	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：ナデ、板ナデ 外面：ナデ、タタキ	1～2㎜以下の長石・石英	内・外：5YR6/8 橙色	10%残存
870	B-6 包含層 1層	弥生土器	壷	底径：4.4	底部のみ残存。底面はドーナツ状。体部立ち上がりは丸みを帯びる。	内面：板ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の長石・石英	内外：2.5Y6/2 灰黄色	10%残存
871	B-1 包含層 1層	弥生土器	壷	底径：4.8	底部のみ残存。底面は中央がくぼむ。	内面：ナデ 外面：ナデ・ユビオサエ	3㎜以下の長石・石英・クサリ礫	内外：5YR6/6 褐色	10%残存
872	A-4 包含層 1層	弥生土器	壷	底径：5.2	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：ナデ、板ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	1㎜以下の長石・石英	内：2.5Y8/3 灰白色、5YR5/6 明赤褐色 外：10YR3/1 黒褐色	10%残存
873	B-4 包含層 1層	弥生土器	壷	底径：5.5	底部～体部が残存。体部は内湾して広がる。	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	1～3㎜以下の長石・石英	内：2.5Y6/1 黄灰色 外：10YR7/4 にぶい黄橙色	10%残存
874	A-3 包含層 1層	弥生土器	甕	口径：(15.2)	口縁部はやや外反し、端部は外面に面を持つ。	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：タタキ、ナデ	2㎜以下の長石・石英	内：10YR8/1 灰白色 外：10YR5/3 にぶい黄褐色	20%残存
875	北区 包含層 1層	弥生土器	甕	口径：(18.2)	口縁部はやや外反し、端部は外方に面を持つ。	内・外面：ナデ、ユビオサエ	粗	内：5YR7/6 橙色 外：7.5YR7/6 橙色	10%残存
876	A-5 包含層 1層	弥生土器	甕	口径：(18.8)	口縁部はやや外反し、端部は外方に面をもつ。体部は丸みを持ち中位に体部最大径。	口縁：ヨコナデ 内面：ナデ、板ナデ 外面：タタキ	2㎜以下の長石・石英	内：10YR8/1 灰白色 外：10YR7/6 明赤褐色～10YR3/1 黒褐色	20%残存
877	A-3 包含層 1層	弥生土器	甕	口径：(20.0)	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は緩やかに広がる。	口縁：ヨコナデ 内面：ナデ 外面：ヨコナデ、ハケ	1～3㎜以下の長石・石英	内外：7.5Y8/2 灰白色～7.5YR8/3 浅黄橙色	15%残存
878	B-2 包含層 1層	弥生土器	甕	体部最大径：(21.6)	体部は丸みを持ち、上位に最大径がある。頸部はやや広く口縁部は直立してのびる。	内面：ナデ、一部板ナデ 外面：タタキ、口縁ナデ	3㎜以下の長石・石英	内：2.5Y7/2 灰黄色 外：10YR7/3 にぶい黄橙色	20%残存
879	B-4 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：3.0	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：板ナデ、ナデ 外面：タタキ	1～2㎜以下の長石・石英	内外：5YR7/8 橙色	10%残存
880	A-2 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：4.2	底部のみ残存。底面に籾圧痕あり。	内面：ナデ 外面：ナデ、タタキ	1～2㎜以下の長石・石英	内：10YR5/3 にぶい黄褐色 外：10R5/8 赤色	10%残存
881	A-1 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：3.8	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：板ナデ 外面：タタキ	3㎜以下の長石・石英	内外：7.5YR5/4 にぶい褐色	10%残存
882	B-4 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：4.5	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ナデ、タタキ	1～5㎜以下の長石・石英	内：5YR6/6 橙色 外：2.5YR5/6 明赤褐色	10%残存 内面に黒斑あり
883	A-7 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：4.5	底部のみ残存。底面は中央がややくぼむ。	内面：ナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	2㎜以下の長石・石英	内：10YR8/3 浅黄橙色 外：10YR8/2 明赤褐色	10%残存
884	A-5 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：4.5	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：ナデ 外面：タタキ	1～5㎜以下の長石・石英	内：N5/ 灰色 外：10YR6/6 明黄褐色	10%残存
885	A-4 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：3.8	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内・外面：ナデ、板ナデ	1～3㎜以下の長石・石英	内：10Y6/2 灰黄褐色 外：10YR5/1 褐灰色	10%残存
886	北区 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：5.3	底部は台状。	内外面：ナデ、一部ナデ後板ナデ	5㎜以下の長石・石英	内：7.5YR7/4 にぶい橙色 外：5YR5/6 明赤褐色	10%残存 内面に黒斑あり
887	A-5 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：3.8	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内・外面：ナデ、板ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：10YR8/3 浅黄橙色 外：10YR8/1 灰白色	10%残存
888	A-2 包含層 1層	弥生土器	甕	底径：4.0	底部のみ残存。	内面：ナデ 外面：タタキ、ユビオサエ	2㎜以下の長石・石英	内：2.5Y7/1 灰白色 外：10YR8/2 灰白色	10%残存
889	A-5 包含層 1層	弥生土器	台付甕	底径：6.9 台部高：3.5	甕底部～台部が残存。台部は直線的に広がる。	内面：ナデ・板ナデ 外面：タタキ 台部：ナデ、ユビオサエ	2㎜以下の長石・石英	内：5YR3/1 黒褐色～2.5Y6/8 黄褐色 外：7.5YR4/2 灰褐色	10%残存

遺物番号	遺構層位	種類	器形石材	計測値（cm）	形態	技法	胎土	色調	備考
890	包含層1層	土師器	台付甕	－	台部と甕底部のみ残存。	内面：板ナデ、ナデ 外面：タタキ、ナデ	4㎜以下の長石・石英	内：2.5YR3/1 黒褐色 外：10YR8/3 浅黄橙色	5%残存
891	B-5包含層1層	弥生土器	高杯	口径：(13.6)	有稜高杯。口縁～脚柱部残存。杯部はやや直線的に広がって屈曲し、口縁部は外反する。端部は丸くおさまる。脚部は直線的に広がる。	内面：ナデ、脚部シボリ 外面：ナデ、ミガキ	1～3㎜以下の長石・石英	内・外：7.5YR6/6 橙色	15%残存
892	B-6包含層1層	弥生土器	高杯	－	柱状部のみ残存。	内面：シボリ、ナデ 外面：ナデ	1～3㎜以下の長石・石英	内外：10YR7/3 にぶい黄褐色	15%残存
893	B-4包含層1層	弥生土器	高杯	－	柱状部のみ残存。中位に透孔あり、4方向か。	外・内面：シボリ、ナデ、ユビオサエ	1～3㎜以下の長石・石英	内外：10YR7/3 にぶい黄褐	15%残存
894	B-6包含層1層	弥生土器	高杯	－	柱状部のみ残存。上位に1点透孔あり。	内面：シボリ、ナデ 外面：ナデ	1～3㎜以下の長石・石英	内・外：7.5YR5/4 にぶい褐色	10%残存
895	包含層1層	弥生土器	高杯	－	柱状部のみ残存。下方で3方向に透孔あり。	内面:シボリ、ナデ、杯ミガキ 外面：ミガキ	2㎜以下の長石・石英	内・外：10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐灰色	10%残存
896	A-5包含層1層	弥生土器	高杯	底径：4.4	底部のみ残存。底面はドーナツ状。	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ナデ、ハケ	2㎜以下の長石・石英	内：10YR7/4 にぶい黄橙色 外：7.5YR7/3 にぶい橙色	10%残存
897	B-2包含層1層	弥生土器	器台？	裾径：9.3	器台裾部か。口縁部は下面に端面をもち、内面に肥厚する。	内面：ナデ 外面：ナデ、板ナデ	1㎜以下の長石・石英	内外：10YR8/3 浅黄橙色	10%残存 黒斑あり。
898	北区包含層1層	弥生土器	鉢	－	鉢口縁か。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部は垂下して端面をもつ。端面には細かいヨコハケ状の工具によるヨコナデが施される。	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ 口縁部端面：板ナデ	1～3㎜以下の長石・石英	内外：2.5Y3/2 黒褐色	10%残存
899	A-5包含層1層	弥生土器	鉢？	底径：4.8	底部のみ残存。底面は中央がくぼむ。	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	4㎜以下の長石・石英	内：10YR6/3 にぶい黄橙色 外：10YR8/1 灰白色	10%残存
900	A-6包含層1層	弥生土器	鉢	底径：3.4	底部のみ残存。底面は中央がくぼむ。	内・外面：ナデ、ユビオサエ	粗	内：5YR4/1 褐灰色 外：2.5YR5/8 橙色	10%残存
901	B-5包含層1層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.2	底部のみ残存。底面はドーナツ状で、中央に焼成前穿孔1点。	内面：ナデ 外面：タタキ	3㎜以下の長石・石英	内：7.5YR7/2 明褐灰色 外：7.5YR4/1 褐灰色	10%残存
902	B-1包含層1層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.9	底部のみ残存。底面は中央がくぼみ、焼成前穿孔1点あり。	内面：ナデ、板ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	1～5㎜以下の長石・石英	内：10YR6/2 灰黄褐色 外：2.5Y7/3 浅黄色	10%残存
903	B-4包含層1層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.5	底部中央に焼成前穿孔1点あり。体部は斜め上方へ直線的に立ち上がる。	内面：ナデ 外面：ナデ、板ナデ	1㎜以下の長石・石英	内：2.5Y6/3 にぶい黄色 外：10YR6/4 にぶい黄橙色	15%残存
904	A-1包含層1層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.6	底部のみ残存。底面はドーナツ状で中央に焼成前穿孔1点あり。	外・内面：ナデ、ユビオサエ	1～5㎜以下の長石・石英	内・外：5YR5/6 明赤褐色	10%残存
905	A-5包含層1層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.6	底部のみ残存。底面中央には焼成前穿孔。	外面：ナデ、ユビオサエ　内面：ナデ	2㎜以下の長石・石英	内：7.5YR5/3 にぶい褐色 外：7.5YR6/4 にぶい橙色	10%残存
906	B-6包含層1層	弥生土器	有孔鉢	底径：3.8	底部のみ残存。底面中央には焼成前穿孔。	内・外面：ナデ	1～3㎜以下の長石・石英	内外：7.5YR6/3 にぶい褐色	10%残存
907	B-5包含層1層	石製品	石鏃 サヌカイト	長：2.5 幅：1.4 厚：0.3 重：1g	凹基無茎式。一端を欠く。	－	－	－	未成品
908	A-3包含層1層	石製品	石棒？ 泥岩	長：8.4 幅：3.4 厚：1.9 重：49g	薄い半月形であったものが約半分から3分の1程度に欠損したものと思われる。	－	－	－	40%残存

付編

化学分析結果

土庫長田遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．自然科学分析の概要

土庫長田遺跡の１次調査区では、古墳時代中期（５世紀）の集落跡が検出され、その上位層では６世紀とされる小区画水田跡が検出された。また、２次調査区では９世紀～11世紀前半頃とされる水田跡が検出された。そこで、これらの水田跡における稲作の確認および当時の周囲の植生や環境を把握する目的で、植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析を行った。

Ⅱ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984)。

２．試料

分析試料は、１次調査区の小区画水田から採取された試料１～試料８、２次調査区の水田耕作土から採取された試料１～試料３の計11点である。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000)。

4．分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

5．考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。なお、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g として検討を行った。

１）１次調査区の小区画水田

小区画水田の各区画から採取された試料１～試料８について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料１では密度が 5,500 個 /g と高い値であり、試料２、試料３、試料５～試料７でも 3,400 ～ 4,800 個 /g と比較的高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、水田区画によってイネの密度に比較的大きな差異が認められることから、区画によって稲作期間が異なっていることや、洪水などによって耕作土が流出したことなどが想定される。

２）２次調査区の水田耕作土

遺構検出面から採取された試料１～試料３について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は 7,000 ～ 7,700 個 /g といずれも高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

（3）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、メダケ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。また、部分的にススキ属型、ウシクサ族A、クスノキ科なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999)。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬、1986)。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢となっている。

以上の結果から、各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類やススキ属などが生育しており、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が生育していたと考えられる。

6．まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、6世紀とされる1次調査区の小区画水田および9世紀～11世紀前半頃とされる2次調査区の水田耕作土では、いずれもイネが多量に検出され、各遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類やススキ属などが生育しており、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が分布していたと考えられる。

文献

近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-63.
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表１　大和高田市 土庫長田遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群	学名	地点・試料	1次：小区画水田								2次：水田耕作土		
			1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3
イネ科	Gramineae												
イネ	Oryza sativa		55	48	48	25	34	42	35	26	70	71	77
ヨシ属	Phragmites		21	7	7	6	13	7	7	20	6	13	14
ススキ属型	Miscanthus type				7	6	7	7		7	6		14
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type							7			13	13	14
タケ亜科	Bambusoideae												
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		7	7	14	6	7	28	7	7	13	19	14
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		41	42	83	68	54	35	42	53	58	52	63
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		7	21	14	6	13	14	7	13	6	13	7
未分類等	Others		21	28	48	6	20	28	21	13	13	32	21
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin		7	7	7	19	7	14	7	7	19	26	7
棒状珪酸体	Rodshaped		21	55	48	43	61	28	50	53	32	45	28
未分類等	Others		151	111	194	179	148	161	142	138	186	168	175
樹木起源	Arboreal												
ブナ科（シイ属）	Castanopsis								7				
クスノキ科	Lauraceae		7						7	7			
その他	Others		7	14	7	6	13	7	14	20	13	6	14
植物珪酸体総数	Total		343	339	478	370	378	377	347	362	435	458	449

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡・cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	1.61	1.42	1.43	0.73	0.99	1.23	1.04	0.77	2.07	2.08	2.27
ヨシ属	Phragmites	1.30	0.44	0.44	0.39	0.85	0.44	0.45	1.24	0.40	0.81	0.89
ススキ属型	Miscanthus type			0.09	0.08	0.08	0.09		0.08	0.08		0.17
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.08	0.08	0.16	0.07	0.08	0.32	0.08	0.08	0.15	0.22	0.16
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.20	0.20	0.40	0.33	0.26	0.17	0.20	0.25	0.28	0.25	0.30
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.06	0.04	0.02	0.04	0.04	0.02	0.04	0.02	0.04	0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	27	23	27	17	21	61	27	21	33	44	33
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	66	58	66	78	69	31	66	69	62	48	62
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	7	18	7	4	11	8	7	11	4	8	4

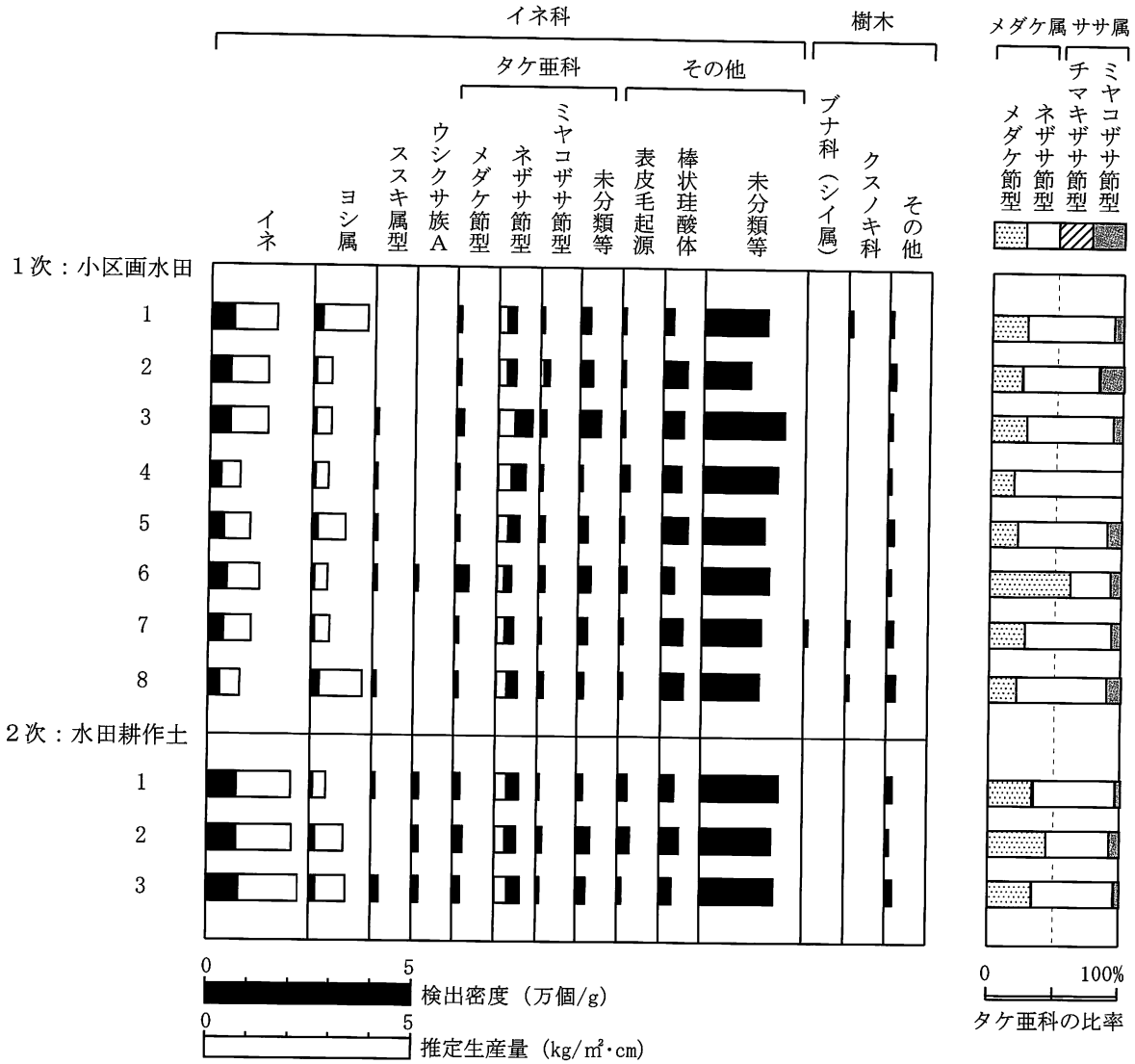
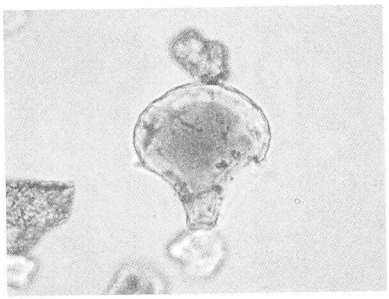
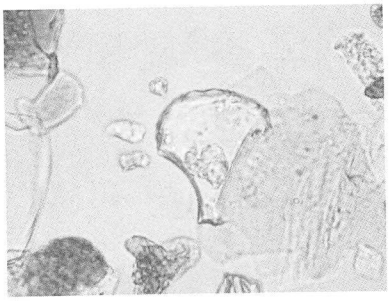
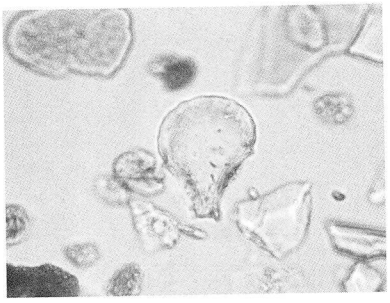


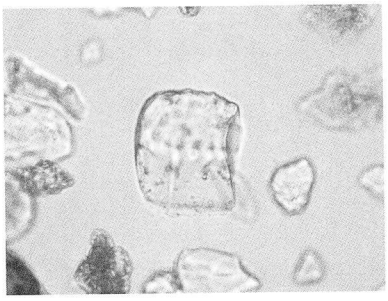
図１　大和高田市 土庫長田遺跡における植物珪酸体分析結果

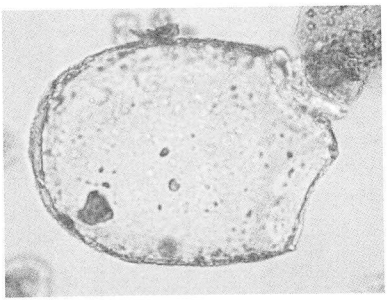
土庫長田遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

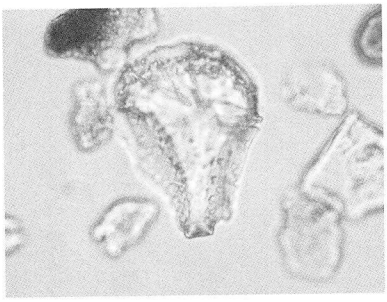

イネ

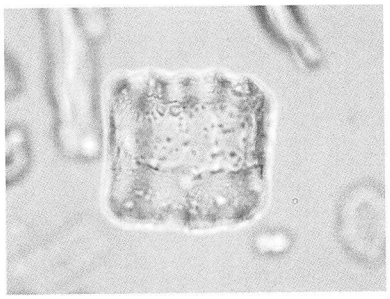

イネ

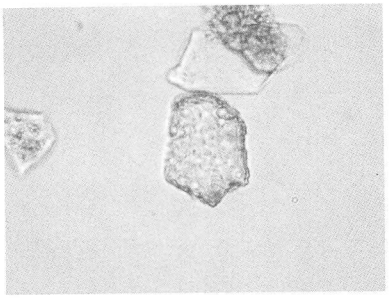

イネ

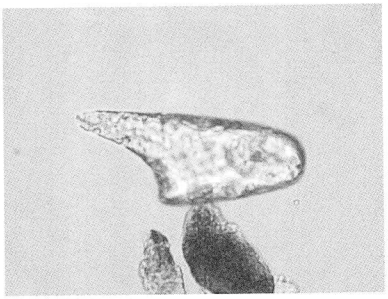

イネ（側面）

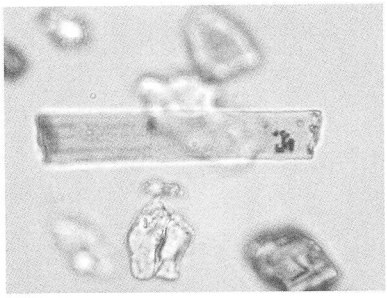

ヨシ属

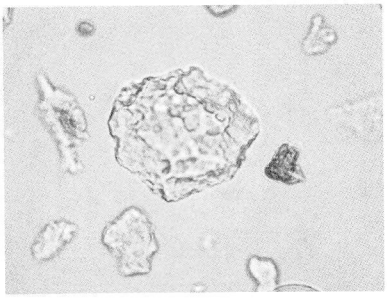

メダケ節型

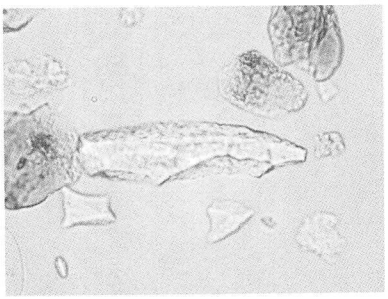

ネザサ節型


ミヤコザサ節型


表皮毛起源


棒状珪酸体


ブナ科（シイ属）


クスノキ科

50 μm

Ⅲ．花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、１次調査区の小区画水田から採取された試料１～試料８、大河道の床面から採取された試料 2/4 と試料 4/4、２次調査区の水田耕作土から採取された試料１～試料３の計 13 点である。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて 15 分間湯煎
２）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 29、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉 24、シダ植物胞子３形態の計 60 である。また、寄生虫卵１分類群が検出された。分析結果を表１に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、キハダ属、トチノキ、ブドウ属、ツタ、シナノキ属、トネリコ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕
ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子
〔寄生虫卵〕
回虫卵

（2）花粉群集の特徴
1）１次調査区の小区画水田
各試料とも花粉密度が低い。このうち、花粉数が100個以上計数された試料３と試料８では、草本花粉の占める割合が樹木花粉と同様かやや高い。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、オモダカ属などが伴われる。樹木花粉では、シイ属を主として、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、モミ属、ツガ属などが検出された。その他の試料でも、おおむね同様の花粉組成を示している。

2）１次調査区の大河道
各試料とも草本花粉の占める割合が樹木花粉より高い。草本花粉ではカヤツリグサ科が優占し、イネ科、セリ亜科、ヨモギ属などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ、マツ属複維管束亜属（マツ属単維管束亜属を含む）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ツガ属、モミ属、トウヒ属などの多様な分類群が検出された。

3）２次調査区の水田耕作土
各試料とも草本花粉の占める割合が樹木花粉より高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、ソバ属、ミズアオイ属、オモダカ属などが伴われる。また、各試料からシダ植物胞子のミズワラビが検出された。樹木花粉では、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属などが検出された。試料２では、回虫卵がわずかに検出された。

5．花粉分析から推定される植生と環境
（1）１次調査区の小区画水田
６世紀とされる小区画水田では、おもに水田稲作が行われていたと考えられ、周囲にはカヤツリグサ科、オモダカ属などが生育し、周辺の比較的乾燥したところにはヨモギ属、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科などが分布していたと推定される。アブラナ科には、アブラナ(ナタネ)、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれており、周辺でこれらが栽培されていた可能性も示唆される。
森林植生としては、遺跡周辺にシイ属、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）などの照葉樹をはじめ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）などの落葉広葉樹、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹が分布していたと考えられる。

なお、全体的に花粉密度が低いことから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことが考えられ、水田であれば比較的水はけの良い乾田の環境が示唆される。

（2） 1次調査区の大河道

5世紀とされる層準の堆積当時は、カヤツリグサ科を主に、イネ科、セリ亜科などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはヨモギ属などが分布していたと推定される。森林植生としては、周辺地域にナラ類、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、ハンノキ属などの落葉広葉樹、およびマツ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ツガ属などの針葉樹が分布していたと考えられる。

（3） 2次調査区の水田耕作土

9世紀～11世紀前半頃とされる水田遺構では、おもに水田稲作が行われており、周囲にはミズアオイ属、オモダカ属、ミズワラビなどの水田雑草が生育していたと考えられる。また、周辺ではソバ属、アブラナ科などの畑作も示唆され、周辺の比較的乾燥したところにはヨモギ属などが分布していたと推定される。森林植生としては、周辺地域にイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、スギ、マツ属複維管束亜属などの針葉樹をはじめ、シイ属、カシ類などの照葉樹、ナラ類などの落葉広葉樹が分布していたと考えられる。

試料2では、寄生虫卵の回虫卵が検出されたが、低密度であることから、集落周辺における通常の生活汚に由来すると考えられる。回虫は中間宿主を必要とせず、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法,角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純（1973）花粉分析. 古今書院, p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表１-1　大和高田市 土庫長田遺跡における花粉分析結果

分類群		１次：小区画水田								２次：水田面			大河道床面	
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	2/4	4/4
Arboreal pollen	樹木花粉													
Podocarpus	マキ属										1			
Abies	モミ属			3			1		5	4	2	4	7	5
Picea	トウヒ属												1	2
Tsuga	ツガ属								4	4	4	3	13	7
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属		1	3			3		7	37	19	20	23	13
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属												2	16
Cryptomeria japonica	スギ	2		10					13	28	19	31	1	5
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1					3	1	1	3	1	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	2		10		3	1		16	44	42	49	13	17
Salix	ヤナギ属			1						1	1	1	1	3
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			1										
Alnus	ハンノキ属								1		2		7	5
Betula	カバノキ属			1						3			16	14
Corylus	ハシバミ属									3			1	3
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ			2						1	1		8	14
Castanea crenata	クリ					2		1	2	2	1			
Castanopsis	シイ属	7	3	23	1	9	4	6	47	8	14	9	5	
Fagus	ブナ属												2	5
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	2	13		2	2		10	4	10	23	20	31
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	4	2	13		4			8	21	11	17	2	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ								3	1		1	6	7
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ								1		1			3
Phellodendron	キハダ属								1					
Aesculus turbinata	トチノキ									2				
Vitis	ブドウ属												1	
Parthenocissus tricuspidata	ツタ											1		
Tilia	シナノキ属											1	1	1
Fraxinus	トネリコ属													2
Lonicera	スイカズラ属										1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉													
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	2	4	2		1			2	3	6	3		4
Rosaceae	バラ科								1					
Leguminosae	マメ科								2		2			
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属											1		1
Nonarboreal pollen	草本花粉													
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属													1
Sagittaria	オモダカ属			2						1	1		1	
Gramineae	イネ科	10	8	65	2	5	9	3	50	191	149	186	66	74
Oryza type	イネ属型			6				2	9	4	6	11	1	

表１-2　大和高田市 土庫長田遺跡における花粉分析結果

分類群		１次：小区画水田								２次：水田面			大河道床面	
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	2/4	4/4
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	3	13		2	1		17	67	35	58	160	171
Monochoria	ミズアオイ属									2	2	1		
Polygonum	タデ属					1					1			
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節									1	2	4	1	2
Rumex	ギシギシ属									2				
Fagopyrum	ソバ属									2	1	2		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科		1	3	2	2	4		6	1	2	1		
Caryophyllaceae	ナデシコ科			3		1			1	2	1	1		
Ranunculus	キンポウゲ属									2	2			
Thalictrum	カラマツソウ属													2
Cruciferae	アブラナ科	5		4		3	1	1	13	8	6	8	1	
Sanguisorba	ワレモコウ属												4	4
Impatiens	ツリフネソウ属		1								1			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	2	1							1	3		
Apioideae	セリ亜科	1		1					1	3	1	2	24	51
Plantago	オオバコ属									1				
Lactucoideae	タンポポ亜科		1	1					2	3				
Asteroideae	キク亜科			1		1			1	1	2	1	2	
Xanthium	オナモミ属										1	2		
Artemisia	ヨモギ属	1	3	10	4	3	4	1	14	41	39	32	7	11
Fern spore	シダ植物胞子													
Monolate type spore	単条溝胞子	2	4	7	3	2	5	5	9	2	6	4	21	29
Celatopteris	ミズワラビ									1	1	1		
Trilate type spore	三条溝胞子	1	2	7		2	1		2	11	9	9	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	16	8	81	1	20	11	7	121	164	130	163	131	154
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	4	2	0	1	0	0	5	3	8	4	0	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	20	19	110	8	18	19	7	114	332	253	312	267	316
Total pollen	花粉総数	38	31	193	9	39	30	14	240	499	391	479	398	475
Pollen frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の花粉密度	2.4 $\times 10^{2}$	2.0 $\times 10^{2}$	1.4 $\times 10^{3}$	6.0 $\times 10$	2.6 $\times 10^{2}$	2.5 $\times 10^{2}$	8.4 $\times 10$	1.1 $\times 10^{3}$	2.0 $\times 10^{4}$	1.7 $\times 10^{4}$	3.2 $\times 10^{4}$	3.5 $\times 10^{4}$	3.4 $\times 10^{4}$
Unknown pollen	未同定花粉	2	3	12	1	5	5	0	10	9	11	10	5	5
Fern spore	シダ植物胞子	3	6	14	3	4	6	5	11	14	16	14	22	30
Helminth eggs	寄生虫卵													
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵										3			
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8 $\times 10$	0.0	0.0	0.0
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

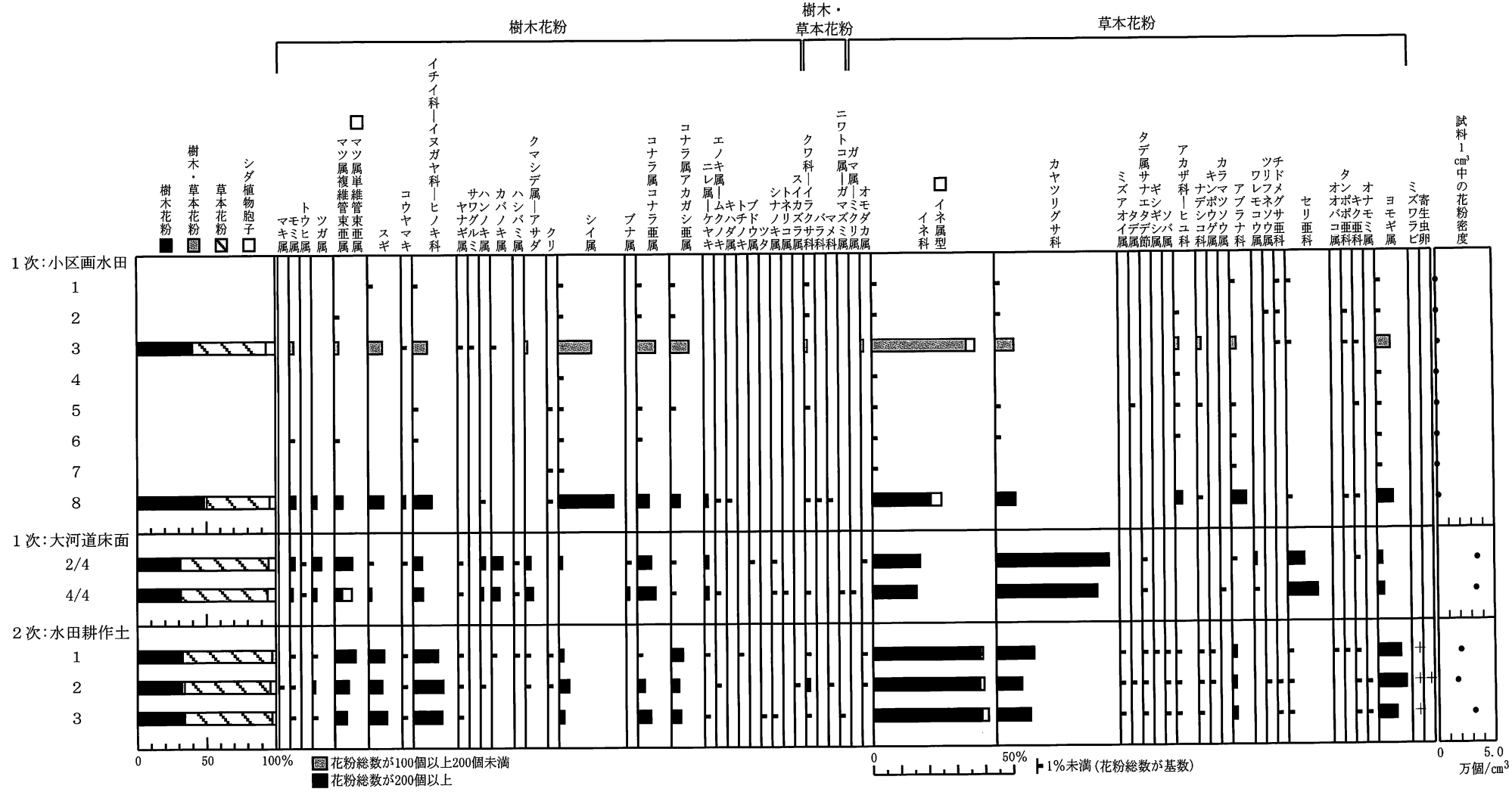
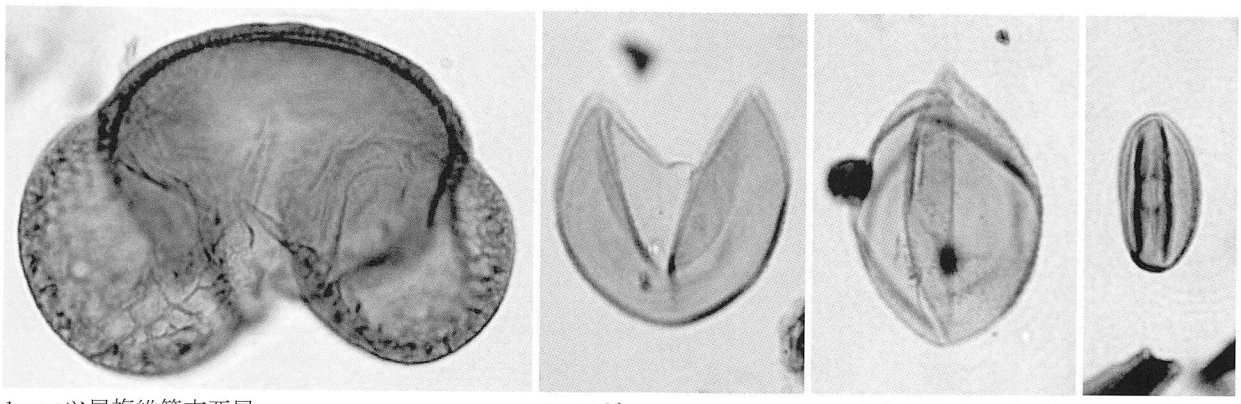
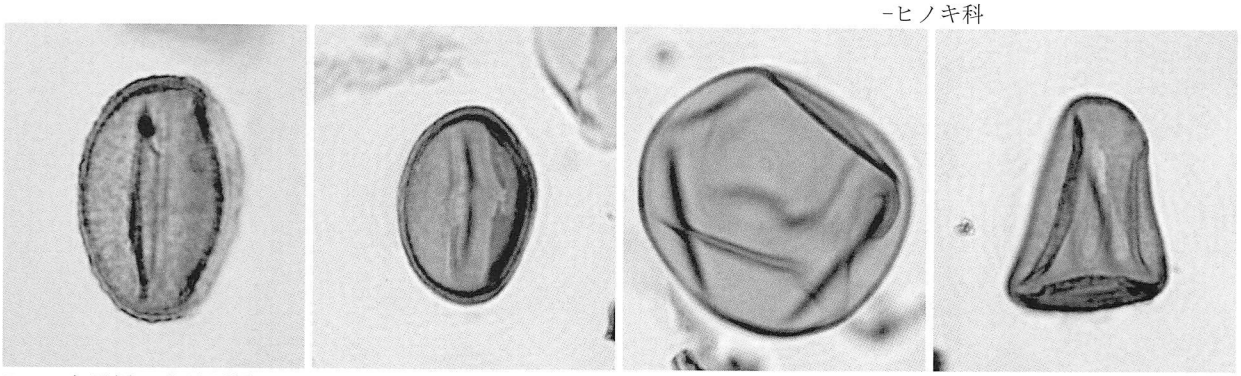


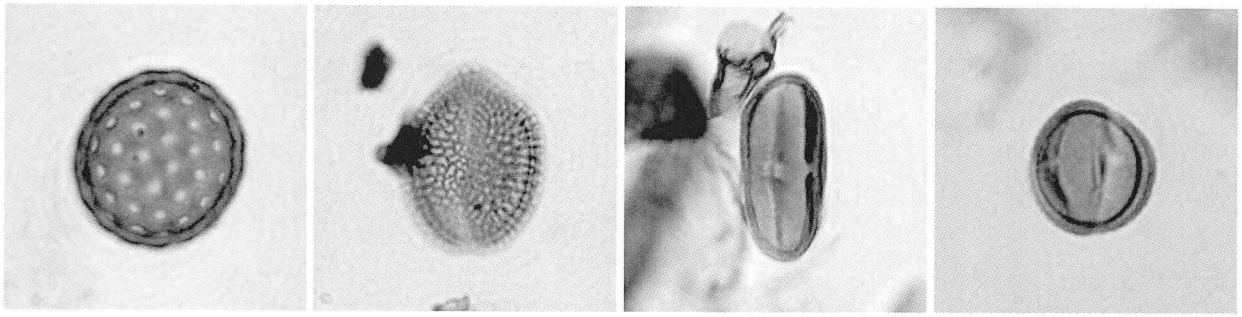
図1　土庫長田遺跡における花粉ダイアグラム



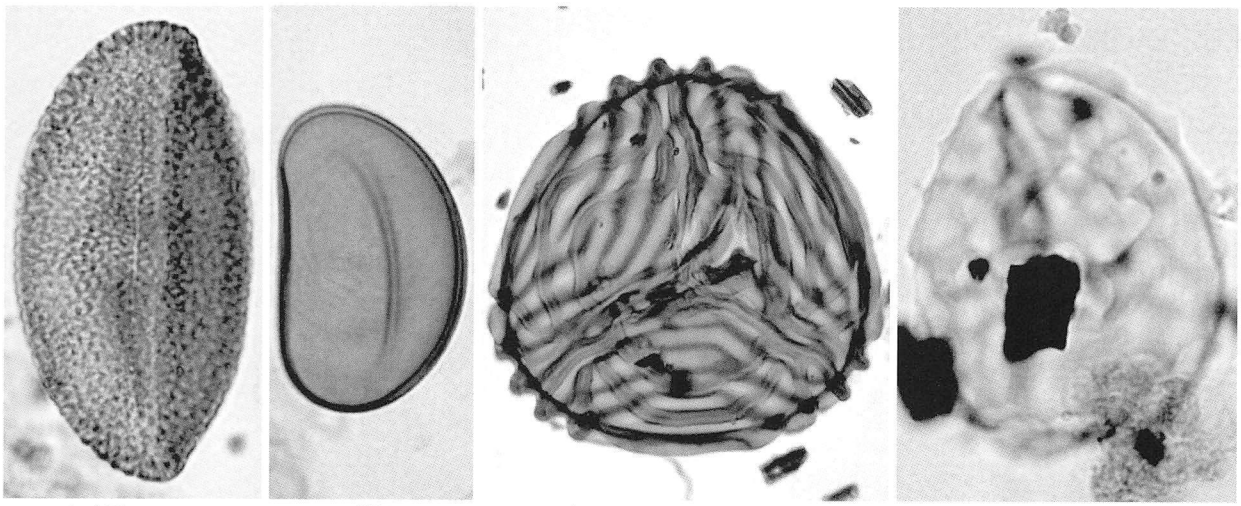
1　マツ属複維管束亜属　2　スギ　3　イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科　4　シイ属



5　コナラ属コナラ亜属　6　コナラ属アカガシ亜属　7　イネ属型　8　カヤツリグサ科



9　アカザ科-ヒユ科　10　アブラナ科　11　セリ亜科　12　ヨモギ属



13　ソバ属　14　シダ植物単条溝胞子　15　ミズワラビ　16　回虫卵

1-14, 16 ━━ 10μm
15 ━ 10μm

Ⅳ．珪藻分析

１．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

２．試料

分析試料は、１次調査区の小区画水田から採取された試料８、大河道床面から採取された試料4/4、２次調査区の水田耕作土から採取された試料３の計３点である。

３．方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から１cm^3を秤量
２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置
３）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）
４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
６）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４．結果

（１）分類群

出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）56分類群である。分析結果を表１に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図１に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性についてはLowe（1974）や渡辺（2005）、陸生珪藻については小杉（1986）、環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）の記載を参照した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔貧塩性種〕

Amphora copulata、Aulacoseira italica、Aulacoseira spp.、Cymbella silesiaca、Eunotia exigua、Fragilaria construens、Gomphonema parvulum、Gyrosigma spp.、Hantzschia amphioxys、Navicula americana、Navicula confervacea、Navicula elginensis、Navicula laevissima、Navicula mutica、Navicula tokyoensis、Neidium ampliatum、Pinnularia major、Pinnularia schroederii、Pinnularia spp.、Pinnularia viridis、Rhopalodia gibba、Stauroneis phoenicenteron、Surirella ovata

（２）珪藻群集の特徴

１）１次調査区の小区画水田

試料８では、珪藻が検出されなかった。

2） 1次調査区の大河道

試料4/4では、珪藻がほとんど検出されなかった。

3） 2次調査区：水田耕作土

試料3では、珪藻が比較的多く検出された。珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）であり、流水不定性種の占める割合が高い。流水不定性種では水田などに多いAmphora copulataが優占し、Navicula laevissima、Cymbella silesiacaなどが伴われる。陸生珪藻では、Pinnularia schroederiiを主に、Navicula confervacea、Hantzschia amphioxysなどが検出された。真・好止水性種では、Aulacoseira spp.、Aulacoseira italica、Neidium ampliatum、沼沢湿地付着生環境指標種群のStauroneis phoenicenteronなどが低率に検出された。真・好流水性種では、Gomphonema parvulum、Surirella ovata、沼沢湿地付着生環境指標種群のNavicula elginensisなどが低率に検出された。

5．珪藻分析から推定される堆積環境

9世紀～11世紀前半頃とされる2次調査区の水田耕作土の堆積当時は、流水の影響のある不安定な滞水域や止水域、および湿潤な陸域などの多様な環境が示唆され、水田域もしくはその周辺の環境が反映されていると考えられる。

その他の試料では、珪藻がほとんど検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったことや、水流や粒径による淘汰・選別を受けたこと、土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

文献

Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh－water diatoms. National Environmental Reserch. Center, 333p.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌, 6, p.23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究, 27, p. 1-20.

藤田剛 (1973) 南関東の第四紀化石5 (沖積平野の珪藻化石2)．日本化石集第27集, p.38-43.

渡辺仁治 (2005) 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能．淡水珪藻生態図鑑．内田老鶴圃, 666p.

表１　大和高田市 土庫長田遺跡における珪藻分析結果

分類群	１次：小区画水田	１次：大河道床面	２次：水田耕作土
	8	4/4	3
貧塩性種（淡水生種）			
Amphora copulata			105
Aulacoseira italica			6
Aulacoseira spp.			14
Caloneis aerophila-sublinearis			2
Caloneis hyalina			1
Caloneis lauta			2
Caloneis silicula			2
Caloneis spp.			1
Cymbella cuspidata			1
Cymbella naviculiformis			2
Cymbella silesiaca			8
Cymbella turgidula			1
Diploneis spp.			2
Eunotia exigua			3
Eunotia minor			2
Eunotia praerupta			1
Fragilaria capucina			2
Fragilaria construens			8
Gomphonema bohemicum			2
Gomphonema gracile			1
Gomphonema parvulum			6
Gomphonema spp.			1
Gomphonema truncatum			2
Gyrosigma spp.			3
Hantzschia amphioxys			8
Navicula americana			3
Navicula bacillum			1
Navicula confervacea			9
Navicula contenta			1
Navicula cuspidata			2
Navicula elginensis			6
Navicula laevissima			17
Navicula mutica			4
Navicula tokyoensis			5
Navicula viridula v. rostellata			2
Neidium ampliatum			7
Nitzschia palea			2
Pinnularia acrosphaeria			2
Pinnularia borealis			1
Pinnularia brevicostata			2
Pinnularia divergens			1
Pinnularia episcopalis			1
Pinnularia gibba			1
Pinnularia interrupta			1
Pinnularia major			4
Pinnularia microstauron			1
Pinnularia schroederii		1	49
Pinnularia spp.			3
Pinnularia viridis			3
Rhopalodia gibba			6
Stauroneis acuta			2
Stauroneis anceps			1
Stauroneis lauenburgiana			1
Stauroneis phoenicenteron			5
Surirella ovata			3
Synedra ulna			2
合　計	0	1	334
未同定	0	1	16
破片	0	0	225
試料１cm３中の殻数密度	0.0	4.0 × 10 2	2.3 × 10 5
完形殻保存率（%）	-	-	60.9

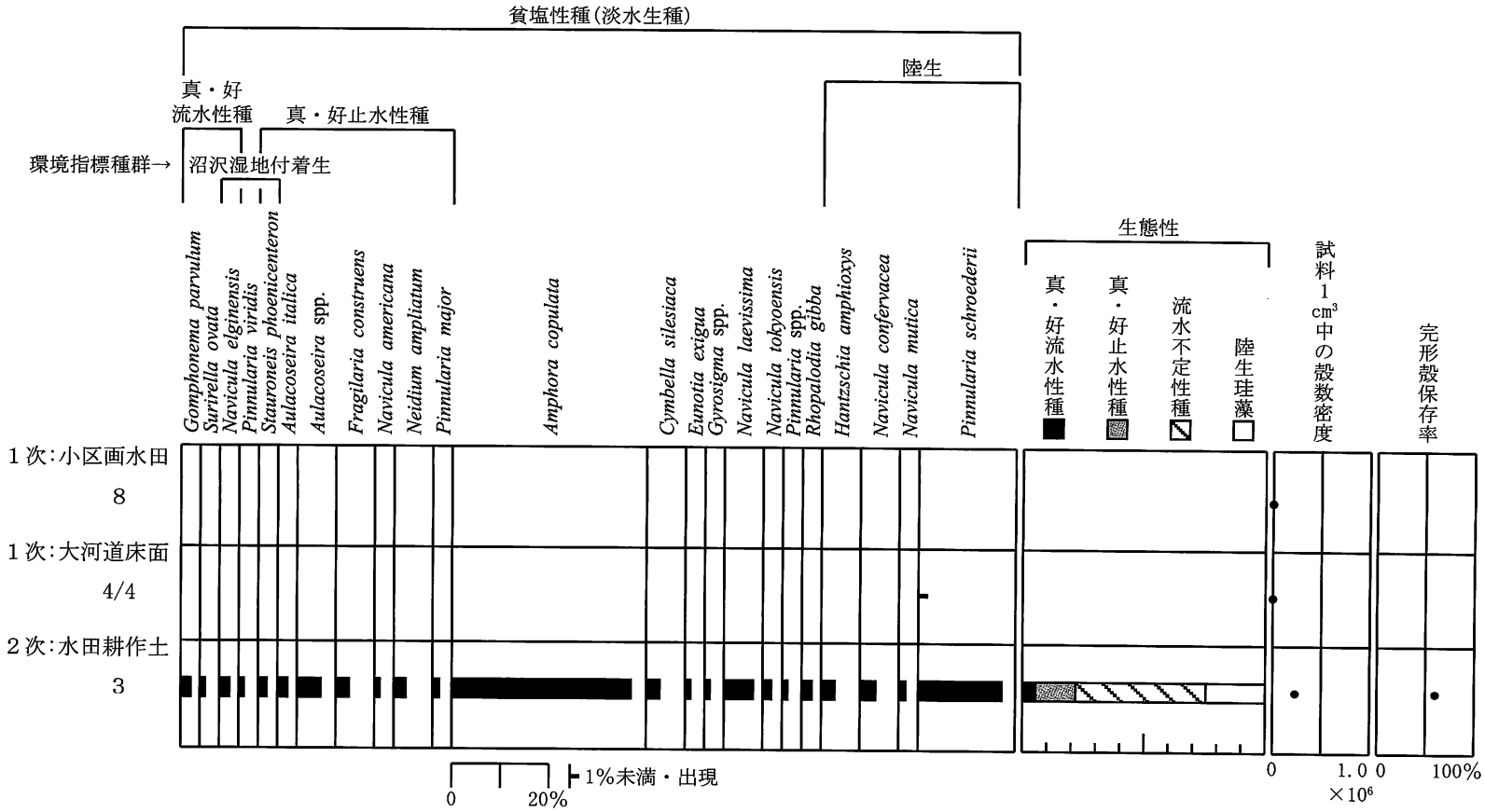
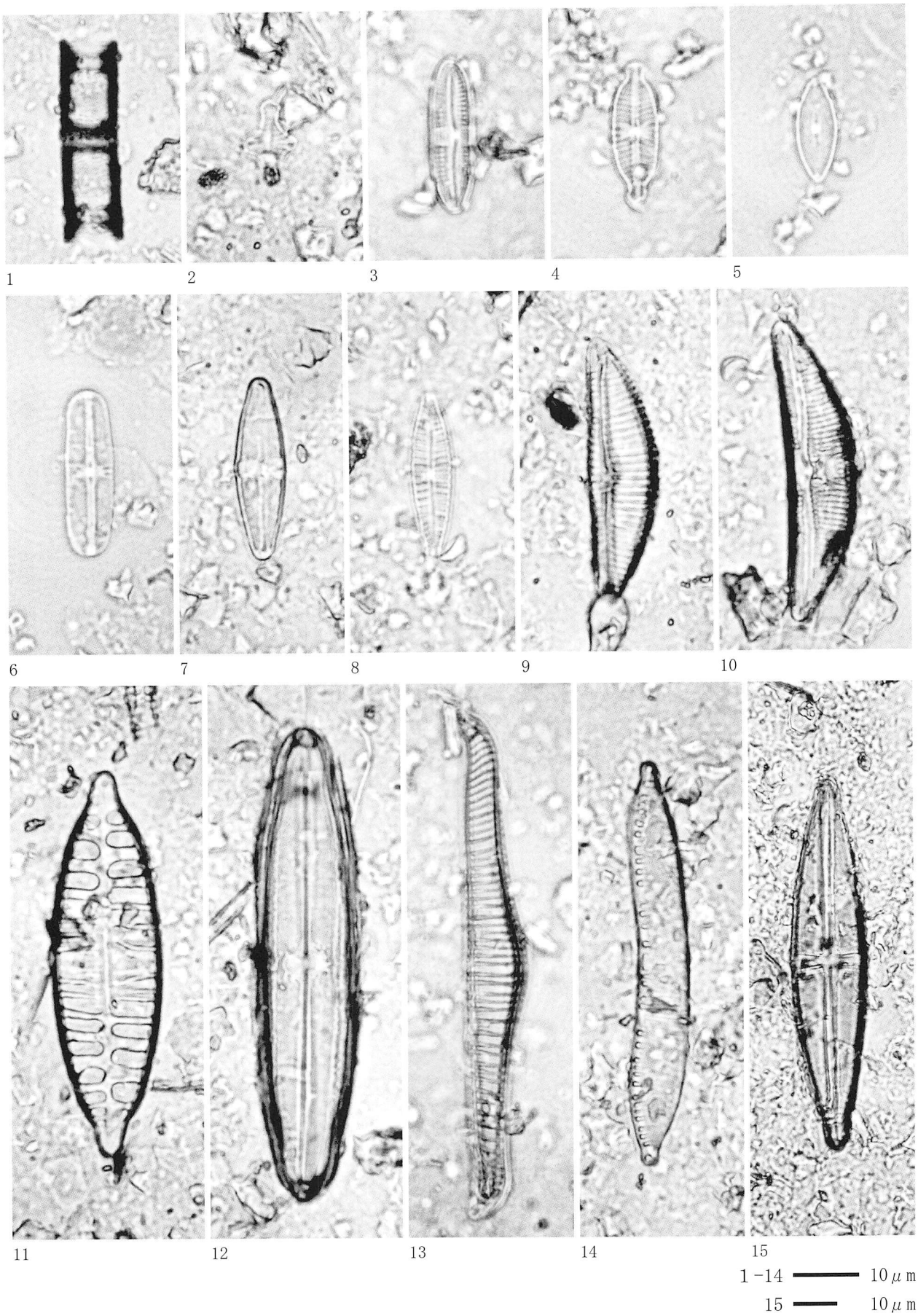


図1　土庫長田遺跡における主要珪藻ダイアグラム



1. *Aulacoseira italica* 2. *Fragilaria construens* 3. *Pinnularia schoederii* 4. *Navicula elginensis* 5. *Navicula confervacea* 6. *Navicula laevissima* 7. *Navicula mutica* 8. *Gomphonema parvulum* 9. *Cymbella silesiaca* 10. *Amphora copulata* 11. *Navicula cuspidata* 12. *Neidium ampliatum* 13. *Rhopalodia gibba* 14. *Hantzschia amphioxys* 15. *Stauroneis phoenicenteron*

大和高田市土庫長田遺跡１次調査・土庫東遺跡２次調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約６万年前までの年代測定が可能である。

２．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

試料名	対象物	試料	前処理・調整	測定法
No.1	鳥形土器内付着物(264)	炭化物	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
No.2	甕内付着物(266)	炭化物	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．測定結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表２　測定結果

試料名	測定No. (PED-)	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (年BP±1σ)	^{14}C年代 (年BP±1σ)	暦年代（西暦） 1σ（68.2%確率）	 2σ（95.4%確率）
No.1	14824	-26.51 ± 0.14	1723 ± 22	1725 ± 20	AD250-300（36.8%） AD310-350（25.3%） AD360-380（6.1%）	AD250-390（95.4%）
No.2	14825	-26.18 ± 0.23	1677 ± 24	1675 ± 25	AD340-410（68.2%）	AD260-290（7.7%） AD320-430（87.7%）

BP：Before Physics (Present)，AD：紀元後

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（年BP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が

68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal3.1（較正曲線データ：IntCal04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4．所見

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、土庫長田遺跡1次調査で出土した鳥形土器(264)内付着炭化物は、1725±20年BP（2σの暦年代でAD250～390年）、甕(266)内付着炭化物では1675±25年BP（同AD260～290年、AD320～430年）の年代値が得られた。

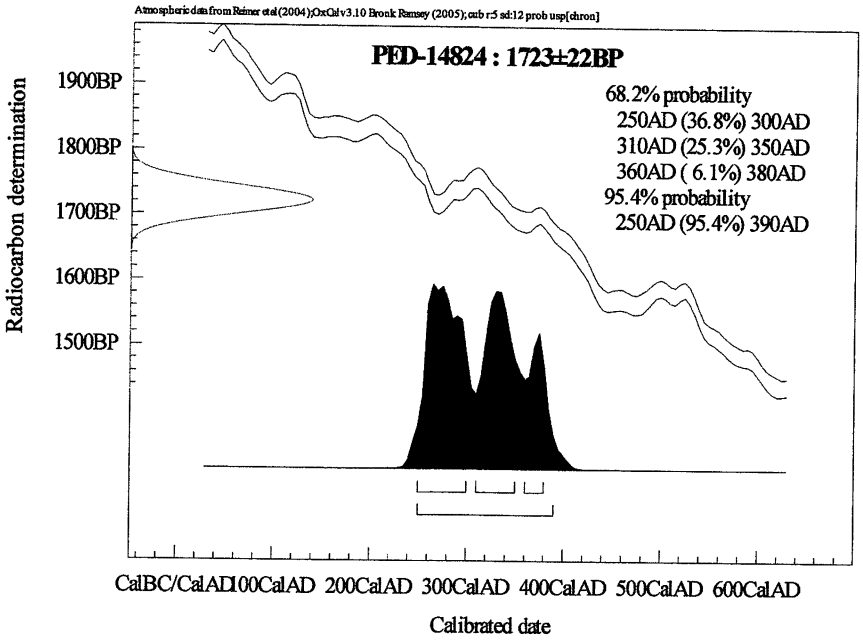
文献

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代，p.3-20.


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-14824 : 1723±22BP
68.2% probability
250AD (36.8%) 300AD
310AD (25.3%) 350AD
360AD (6.1%) 380AD
95.4% probability
250AD (95.4%) 390AD
Radiocarbon determination
1900BP
1800BP
1700BP
1600BP
1500BP
CalBC/CalAD
100CalAD
200CalAD
300CalAD
400CalAD
500CalAD
600CalAD
Calibrated date

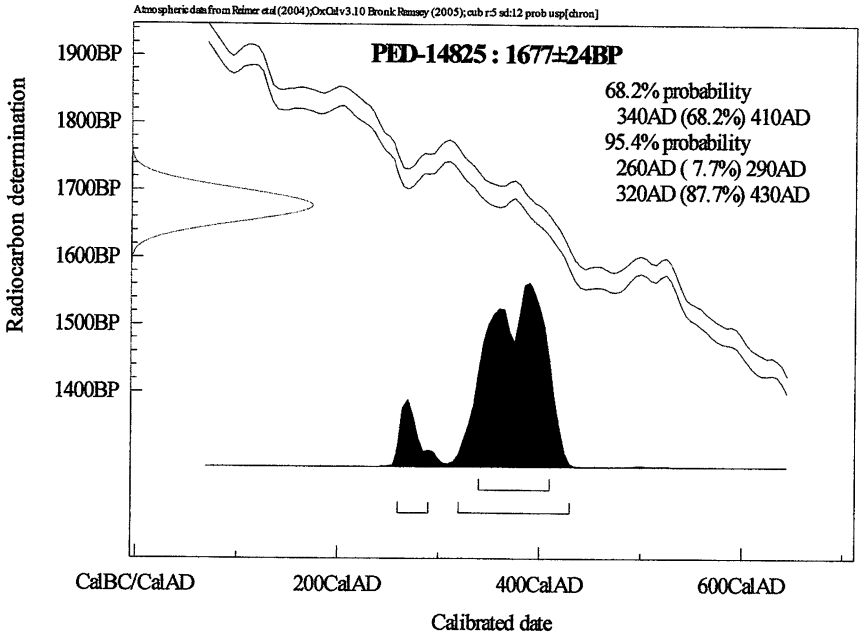

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-14825 : 1677±24BP
68.2% probability
340AD (68.2%) 410AD
95.4% probability
260AD (7.7%) 290AD
320AD (87.7%) 430AD
Radiocarbon determination
1900BP
1800BP
1700BP
1600BP
1500BP
1400BP
CalBC/CalAD
200CalAD
400CalAD
600CalAD
Calibrated date

図１　暦年較正結果

Ⅱ．花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は、西壁において下位より57層（試料6･7)、53層（試料4･5)、42層（試料3)、41層（試料2)、23層（試料8)、22層（試料９）より採取された９試料である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、53層上面は遺構検出面である。

3．方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）試料から１cm^3を採量
2）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
3）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
5）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
6）再び氷酢酸を加えて水洗処理
7）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
8）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4．結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉９、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉10、シダ植物胞子２形態の計22である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ハンノキ属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、モチノキ属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。（図1）

41層（試料2）を除き、いずれの試料も花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されなかった。

41層（試料2）では統計処理の可能な密度の花粉が計数された。ここでは、草本花粉の占める割合が高く、約60％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われ、オモダカ属、アブラナ科などが出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属を主にシイ属、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが出現する。

5．花粉分析から推定される植生と環境

花粉が検出されないか極めて少ない試料が多いことから、下位より57層（試料6・7）、53層（試料4・5）、42層（試料3）、41層（試料2）、23層（試料8）、22層（試料9）はいずれも有機質の分解が行われる乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。花粉密度がやや多く検出された41層（試料2）では、イネ科（イネ属型を含む）が多く、水田雑草のオモダカ属などを伴うことから、周辺に水田が分布していたとみなされる。他のカヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属などの草本は、耕地雑草の性格をもつ草本であり、周囲に生育していたと考えられる。周辺の森林植生は、コナラ属コナラ亜属を主にシイ属が多く、いずれも乾燥を好む二次林要素であると考えられ、落葉樹と照葉樹の二次林の分布が推定される。

6．まとめ

土庫東遺跡2次調査において花粉分析を行なった。分析の結果、いずれの層準も花粉が検出できないか極めて少なく、本地点周辺は乾燥か乾湿を繰り返す相対的に乾燥した堆積環境が推定された。花粉密度のやや多い41層（試料2）では、イネ科（イネ属型を含む）優占し周囲に水田が分布していたとみなされた。周辺の森林は、コナラ属コナラ亜属を中心にシイ属の二次林の分布が推定された。

参考文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法,角川書店,p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表１　土庫東遺跡２次調査における花粉分析結果

分類群		西壁								
		40 層	41 層	42 層	53 層		57 層		23 層	22 層
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Arboreal pollen	樹木花粉									
Cryptomeria japonica	スギ		1							
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		2	2						
Alnus	ハンノキ属	1								
Castanopsis	シイ属		10	5						
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	20	1						
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		3			1				
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		1							
Ilex	モチノキ属		1							
Aesculus turbinata	トチノキ		1	1						
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科		1							
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Sagittaria	オモダカ属		2							
Gramineae	イネ科	1	41	11						
Oryza type	イネ属型		2							
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	13							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科		2	3		1				
Cruciferae	アブラナ科		3	1						
Apioideae	セリ亜科			2						
Lactucoideae	タンポポ亜科		2	1		1				
Asteroideae	キク亜科		1	2						
Artemisia	ヨモギ属		9	7		2				
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子	3	13	1					1	
Trilate type spore	三条溝胞子		3	2						
Arboreal pollen	樹木花粉	2	39	9	0	1	0	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	3	75	27	0	4	0	0	0	0
Total pollen	花粉総数	5	115	36	0	5	0	0	0	0
Pollen frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の花粉密度	3.6 × 10	3.8 × 10^2	2.3 × 10^2	0.0	4.2 × 10	0.0	0.0	0.0	0.0
Unknown pollen	未同定花粉	2	15	2	0	2	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	3	16	3	0	0	0	0	1	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物				(+)	(+)	(+)			

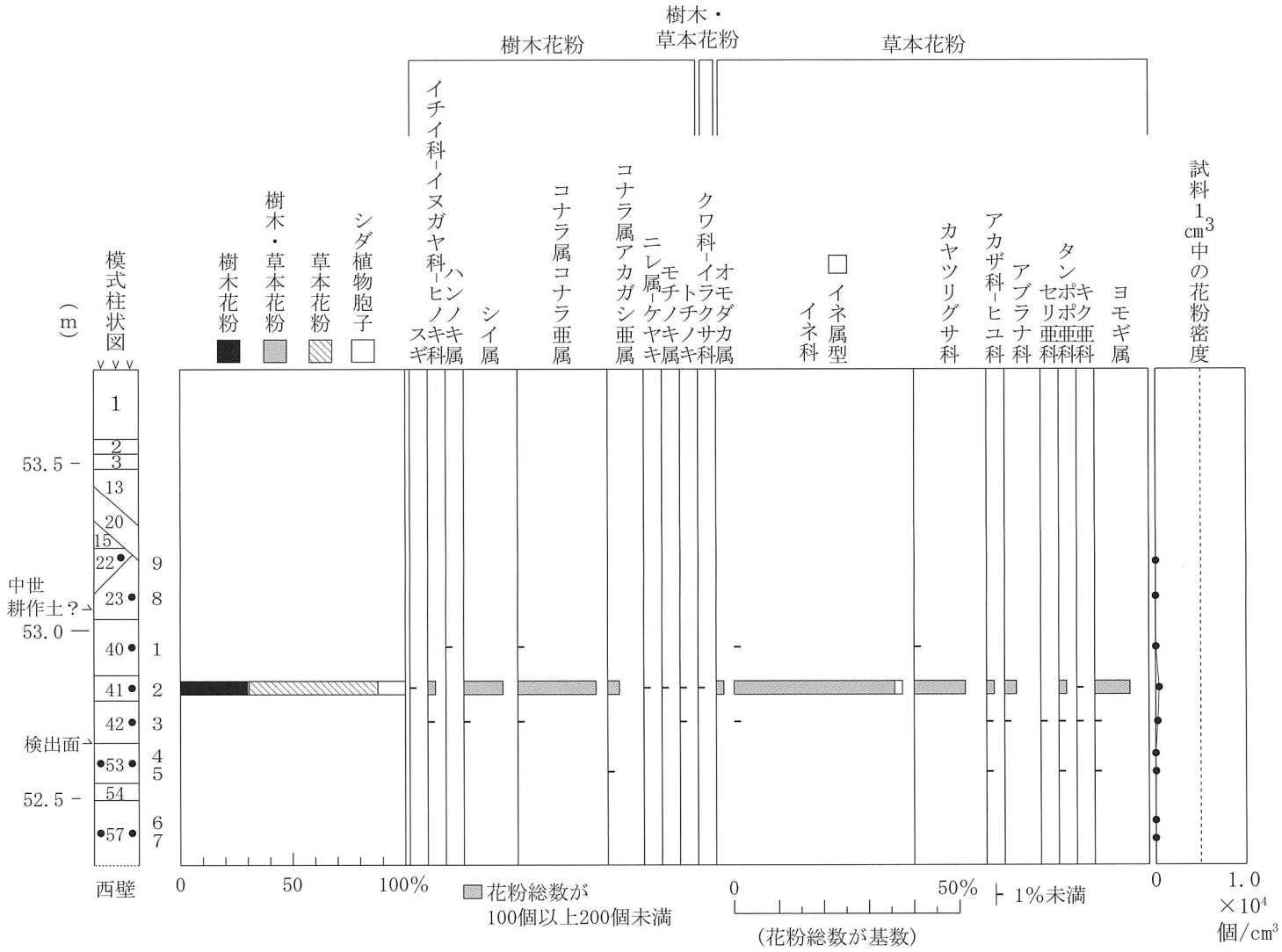
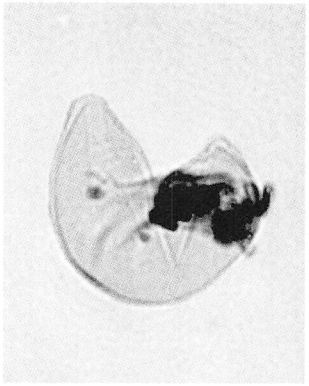
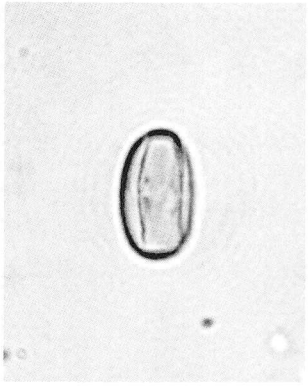


図１　土庫東遺跡２次調査西壁における花粉ダイアグラム

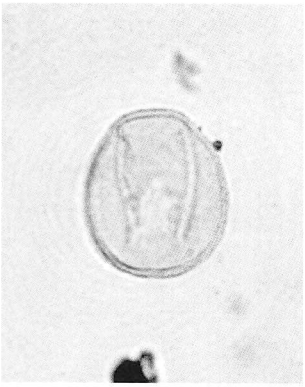
土庫東遺跡２次調査の花粉・胞子



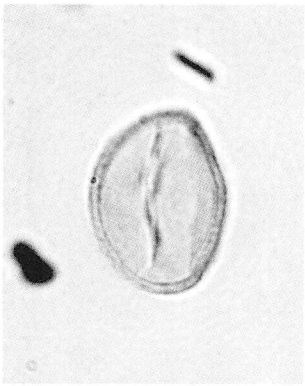
1　スギ



2　シイ属

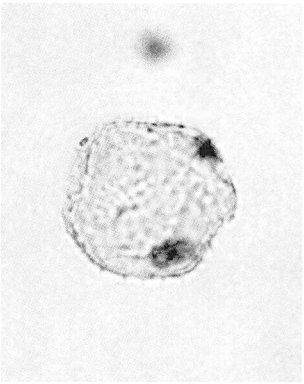


3　コナラ属コナラ亜属

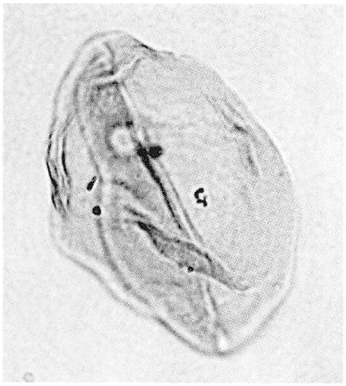


4　コナラ属アカガシ亜属

5　トチノキ

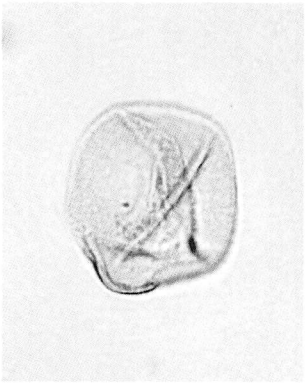


6　オモダカ属

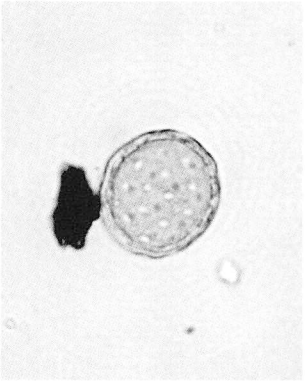


7　イネ科

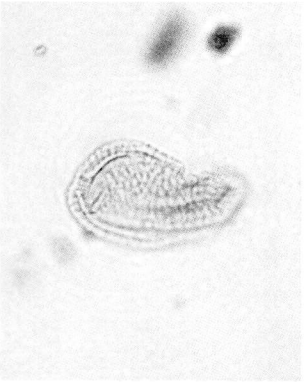
8　イネ科



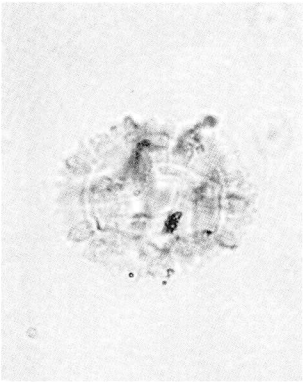
9　カヤツリグサ科



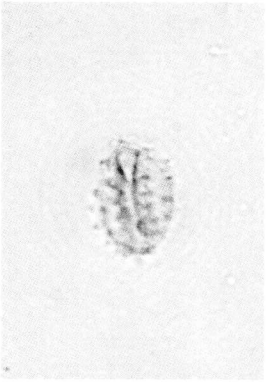
10　アカザ属-ヒユ属



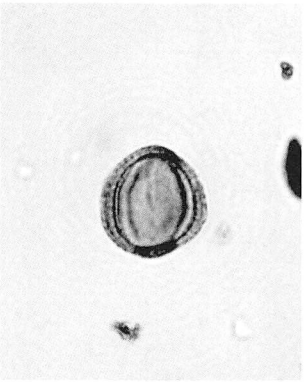
11　アブラナ科



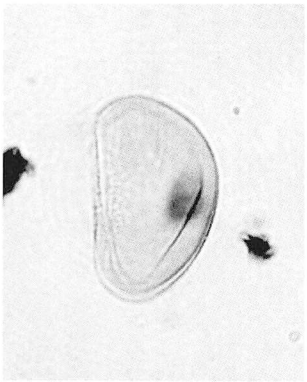
12　タンポポ亜科



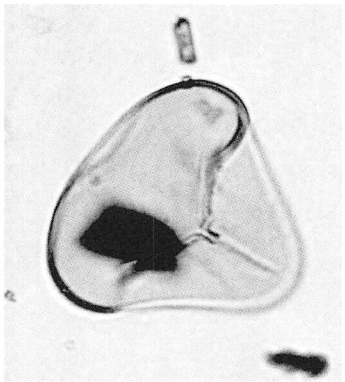
13　キク亜科



14　ヨモギ属



15　シダ植物単条溝胞子



16　シダ植物三条溝胞子

10μm